

岩手県埋蔵文化財センター文化財調査報告書第62集

君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連遺跡発掘調査

(財)岩手県埋蔵文化財センター
日本道路公団

君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

昭和58年3月

(財)岩手県埋蔵文化財センター

序

四国四県に匹敵する広大な面積をもつ本県にとって、地域開発の基幹となる道路など交通網整備事業は県政の重点施策となっております。

一方、本県は遺跡の宝庫といわれるほど数多くの埋蔵文化財包蔵地を有しております。

貴重な文化財の保護、保存と現代生活を豊かにするという開発指向との均衡を保つことは大きな課題でもあります。

当センターは、昭和52年発足以来、埋蔵文化財保護の立場に立って県教育委員会の指導と調整のもとに、止むを得ず開発によって破壊され消滅する遺跡について記録保存のための発掘調査を行ないその記録を残す措置をとってまいりました。

本報告書は東北縦貫自動車道八戸線建設に関連し、昭和55年度に発掘調査した軽米町君成田Ⅳ遺跡の成果についてまとめたものであります。

当遺跡は縄文時代中期末から晩期および奈良時代に発達した集落跡であり、県北部北上山地における歴史解明上貴重な資料を提示できるものと思っております。

この報告書が、研究者のみならず広く一般のかたがたにも活用され、埋蔵文化財に対する理解が一段と深められるよう願ってやみません。

最後に、これまでの発掘調査や報告書作成にご援助、ご協力を賜りました県教育委員会、日本道路公団仙台建設局をはじめ地元関係各位に感謝するとともに、今後のご指導、ご協力をお願い申し上げます。

昭和58年3月

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター

理事長 新 里 盈

例 言

1. 本書は、東北縦貫自動車道建設に関連して実施された、岩手県九戸郡軽米町大字軽米第22地割字君成田所在の君成田Ⅳ遺跡（遺跡略号はK NⅣ80）の発掘調査報告書である。
2. 野外調査は、昭和55年6月24日より11月20日まで行なった。
3. 調査対象面積は13,000㎡で、全面を調査した。
4. 野外調査は、村上達夫、遠藤勝博、高橋義介の3名が担当した。
5. 野外調査に際しては、軽米町教育委員会、二戸市教育委員会の御協力をいただいた。
発掘作業には、二戸市の米沢地区と石切所地区、軽米町の軽米地区の方々が従事された。
6. 室内整理は、昭和55年度に当センターで行った。
7. 石質鑑定は、佐藤二郎氏（県立大船渡農業高校教諭）による。
8. 本書の執筆分担は次のとおりである。
I 嶋 千秋、Ⅳの一部 村上達夫、ⅣとⅤの一部 高橋義介、その他 遠藤勝博。
9. 今回の調査の諸記録と遺物は、すべて当センターに保管されている。

財団法人 岩手県埋蔵文化財センター組織

役 員	職 員
理事長 新里 盈 (県教育長)	所 長 熊谷 正男 専門調査員 栢沢 満郎
副理事長 柴内 眞 (県教育次長)	副所長 小野寺 登 〃 平井 進
常務理事 熊谷 正男 (県立埋蔵文化財センター所長)	[総務課] 〃 種市 進
理 事 吉田 良和 (県農政部長)	総務課長 小笠原喜一 〃 田村 壮一
〃 田代 太志 (県林業水産部次長)	庶務係長 阿部 詔夫 〃 三浦 謙一
〃 後藤 光雄 (県土木部次長)	主 事 佐藤久四郎 〃 岩淵 久
〃 板橋 源 (県立博物館長)	〃 戸草内幸男 〃 光井 文行
〃 草間 俊一 (県立盛岡短期大学長)	〃 立花多加志 〃 石川 長喜
〃 小形 信夫 (元常務理事)	技 能 員 佐藤 春男 〃 工藤 利幸
監 事 白石 丈雄 (県教委総務課長)	[調査課] 〃 中川 重紀
〃 小原 吉雄 (県教委財務課長)	調査課長 嶋 千秋 〃 高橋右衛門
	主任専門調査員 近藤宗光 〃 佐々木清文
	〃 遠藤 勝博 〃 酒井 宗孝
	〃 村上 達夫 [資料課]
	専門調査員 畠山 靖彦 資料課長 吉田 努
	〃 朝野 孝二 主任専門調査員 国生 尚
	〃 菊池 利和 専門調査員 小平 忠孝
	〃 鈴木 恵治 〃 鈴木 隆英
	〃 大原 一則 〃 高橋 文夫
	〃 渡辺 洋一 〃 高橋 義介
	〃 田鎖 寿夫
	〃 佐々木嘉直

本文目次

序

例言

I 調査に至る経過	1	(2) 炉址	98
II 調査の方法と経過	1	(3) 埋設土器・配石遺構	99
III 遺跡の環境	2	(4) 土坑	103
IV 調査の結果	12	2. 古代の遺構と遺物	131
1. 縄文時代の遺構と遺物	12	V 分析と考察	177
(1) 住居址	12	VI まとめ	210

図版目次

第1図 軽米町の位置	4	第16図 E41・F42住居址	27
第2図 君成田IV遺跡の位置	5	第17図 E41・F42・G43住居址 出土遺物	29
第3図 周辺の東北縦貫道関連遺跡の位置	6	第18図 G43・E45住居址	31
第4図 君成田IV遺跡周辺の地形	7・8	第19図 G45・D47・D48住居址	33
第5図 君成田IV遺跡遺構配置図	9・10	第20図 E45・G45・D47住居址 出土遺物	34
第6図 君成田IV遺跡内土層断面	11	第21図 F47・I47住居址	36
第7図 H13・F15住居址	13	第22図 F47住居址出土遺物1)	37
第8図 H13・F15・J27住居址 出土遺物	14	第23図 F47住居址出土遺物2)	38
第9図 J27・F33住居址	16	第24図 F47住居址出土遺物3)	39
第10図 E34・E35住居址	18	第25図 I47・D48住居址出土遺物	41
第11図 F33・E34・E35住居址 出土遺物	19	第26図 I48・F49住居址	43
第12図 G35・H35・H36住居址	21	第27図 F49住居址出土遺物1)	44
第13図 G35・H35住居址出土遺物	22	第28図 F49住居址出土遺物2)	45
第14図 F39・G40住居址	24	第29図 F49住居址出土遺物3)	46
第15図 H36・F39・G40住居址 出土遺物	26	第30図 F49住居址出土遺物4)	47
		第31図 F49・E50住居址出土遺物	49

第32図	E 50・I 50住居址……………50	第62図	D 58・D 59・C 60住居址 出土遺物……………94
第33図	D 51—1・2・F 51住居址……………52	第63図	C 60・C 61住居址……………95
第34図	I 50・D 51—1・F 51住居址 出土遺物……………54	第64図	D 60住居址出土遺物……………96
第35図	D 52住居址……………56	第65図	D 60・C 61住居址出土遺物……………97
第36図	D 52住居址出土遺物1)……………57	第66図	炉址・土器埋設炉……………99
第37図	D 52住居址出土遺物2)……………58	第67図	H 57炉址・E 58土器埋設炉の 周辺出土遺物……………100
第38図	I 52—1・2・D 53住居址……………60	第68図	埋設土器・配石遺構……………101
第39図	I 52—1・2・D 53・H 53住居址 出土遺物……………61	第69図	E 54・J 58埋設土器・その他……………102
第40図	H 53・D 54・H 54住居址……………63	第70図	土坑1)……………104
第41図	D 54住居址出土遺物……………65	第71図	H 30・F 32・G 32土坑 出土遺物……………106
第42図	D 54・H 54住居址出土遺物……………66	第72図	土坑2)……………108
第43図	G 55・I 55—1住居址……………68	第73図	C 33・G 33・C 34・G 34・G 35 —1・C 36・G 37・H 37土坑出 土遺物……………110
第44図	G 55住居址出土遺物……………69	第74図	土坑3)……………112
第45図	I 55—1住居址出土遺物……………70	第75図	土坑4)……………114
第46図	I 55—2・3・J 55住居址……………72	第76図	土坑5)……………117
第47図	I 55—1・2住居址出土遺物……………73	第77図	土坑6)……………120
第48図	J 55住居址出土遺物1)……………74	第78図	H 43・G 45・D 48—2・D 49・ F 49—2・E 52・G 52・D 53— 2・H 54—2土坑出土遺物……………122
第49図	J 55住居址出土遺物2)……………75	第79図	土坑7)……………124
第50図	C 56・E 56—1・2住居址……………77	第80図	I 54—1土坑出土遺物……………125
第51図	C 56住居址出土遺物……………79	第81図	土坑8)……………127
第52図	E 56—1・2住居址出土遺物……………80	第82図	I 54—1・F 55—1・F 55—2 ・D 56・E 58・C 59・C 60土坑 出土遺物……………128
第53図	F 56・G 56・G 57住居址……………82	第83図	D 50・I 56陥し穴状遺構……………130
第54図	F 56・G 56住居址出土遺物……………83	第84図	J 51住居址……………132
第55図	G 56住居址出土遺物……………84		
第56図	H 56—1・2・D 58住居址……………86		
第57図	H 56—1・2住居址出土遺物1)……………88		
第58図	H 56—1・2住居址出土遺物2)……………89		
第59図	H 56—1・2住居址出土遺物3)……………90		
第60図	G 57住居址出土遺物……………91		
第61図	D 59・D 60住居址……………93		

第 85 図	E 34建物址	133	第109図	土器拓影(6)	157
第 86 図	I 57住居址	134	第110図	土器拓影(7)	158
第 87 図	J 51・I 57住居址出土遺物	135	第111図	土器拓影(8)	159
第 88 図	I 57住居址埋土出土遺物(1)	136	第112図	土器拓影(9)	160
第 89 図	I 57住居址埋土出土遺物(2)	137	第113図	土器拓影(10)	161
第 90 図	遺構外出土遺物(1)	138	第114図	土器拓影(11)	162
第 91 図	遺構外出土遺物(2)	139	第115図	土器拓影(12)	163
第 92 図	遺構外出土遺物(3)	140	第116図	土器拓影(13)および実測図	164
第 93 図	遺構外出土遺物(4)	141	第117図	土器拓影(14)	165
第 94 図	遺構外出土遺物(5)	142	第118図	土器拓影(15)および実測図	166
第 95 図	遺構外出土遺物(6)	143	第119図	土器拓影(16)	167
第 96 図	遺構外出土遺物(7)	144	第120図	土器拓影(17)	168
第 97 図	遺構外出土遺物(8)	145	第121図	土器拓影(18)	169
第 98 図	遺構外出土遺物(9)	146	第122図	土器拓影(19)	170
第 99 図	遺構外出土遺物(10)	147	第123図	土器拓影(20)	171
第100図	遺構外出土遺物(11)	148	第124図	土器拓影(21)	172
第101図	遺構外出土遺物(12)	149	第125図	土器拓影(22)	173
第102図	遺構外出土遺物(13)	150	第126図	土器拓影(23)	174
第103図	円形土器片	151	第127図	土器拓影(24)	175
第104図	土器拓影(1)	152	第128図	土器拓影(25)	176
第105図	土器拓影(2)	153	第129図	時期別住居址立地状況(1)	181・182
第106図	土器拓影(3)および実測図	154	第130図	時期別住居址立地状況(2)	183・184
第107図	土器拓影(4)	155	第131図	方形文と渦文の系統	208
第108図	土器拓影(5)	156			

写真図版目次

図版 1	空中写真	211	図版 6	H 36・F 39住居址	216
図版 2	調査区土層断面	212	図版 7	G 40・E 41住居址	217
図版 3	H 13・F 15住居址	213	図版 8	F 42・G 43住居址	218
図版 4	J 27・F 33住居址	214	図版 9	E 45・G 45住居址	219
図版 5	E 35・G 35・H 35住居址	215	図版10	D 47・F 47・I 47住居址	220

図版11	D 48・I 48・F 49住居址	221	図版39	住居址出土土器(4)	249
図版12	E 50・I 50・D 51—1・2 住居址	222	図版40	住居址出土土器(5)	250
図版13	F 51・D 52住居址	223	図版41	住居址出土土器(6)	251
図版14	I 52—1・D 53住居址	224	図版42	住居址出土土器(7)	252
図版15	H 53・D 54住居址	225	図版43	住居址出土土器(8)・ 土坑出土土器(1)	253
図版16	G 55・I 55—1住居址	226	図版44	土坑出土土器(2)・埋設土器	254
図版17	I 55—2・3・J 55・C 56 住居址	227	図版45	E 58埋設炉出土土器・ 遺構外出土土器(1)	255
図版18	E 56—1・2・F 56住居址	228	図版46	遺構外出土土器(2)	256
図版19	G 56・G 57住居址	229	図版47	遺構外出土土器(3)・石斧	257
図版20	H 56—1・2・D 58・D 59 住居址	230	図版48	凹石(1)・磨石(1)	258
図版21	D 60・C 60・C 61住居址	231	図版49	凹石(2)・砥石・台石	259
図版22	J 51・I 57住居址	232	図版50	磨石(2)・敲き石(1)	260
図版23	土坑(1)	233	図版51	石刀・敲き石(2)・石製円盤・ その他	261
図版24	土坑(2)	234	図版52	石皿(1)	262
図版25	土坑(3)	235	図版53	石皿(2)・砥石・石棒	263
図版26	土坑(4)	236	図版54	石器(1)	264
図版27	土坑(5)	237	図版55	石器(2)	265
図版28	土坑(6)	238	図版56	F 49住居址貯蔵剥片石器(1)	266
図版29	土坑(7)	239	図版57	F 49住居址貯蔵剥片石器(2)	267
図版30	土坑(8)	240	図版58	ミニチュア土器・土製品	268
図版31	土坑(9)	241	図版59	土偶	269
図版32	土坑(10)・陥し穴状遺構	242	図版60	土器拓影(1)	270
図版33	埋設土器など	243	図版61	土器拓影(2)	271
図版34	建物跡・配石・炉址など	244	図版62	土器拓影(3)	272
図版35	遺跡遠景・作業風景	245	図版63	土器拓影(4)	273
図版36	住居址出土土器(1)	246	図版64	土器拓影(5)	274
図版37	住居址出土土器(2)	247	図版65	土器拓影(6)・その他	275
図版38	住居址出土土器(3)	248	図版66	土器拓影(7)・炭化堅果類	276

I 調査に至る経過

東北縦貫自動車道八戸線は、東北縦貫自動車道青森線と二戸郡安代町で分岐し、一戸町を経由し青森県八戸市に至る約 68 km の高速道路である。このうち本県にかかわる第 7 次施行命令区間は延長距離 27.6 km であり、二戸郡一戸町で国道 4 号線と接続する一戸インターチェンジを起点とし折爪岳の山裾をトンネルで貫き、九戸村、軽米町を通過し、青森県南郷村へと続いている。

昭和 48 年 10 月に第 7 次施行命令が出され、それ以後、埋蔵文化財の取り扱いについて、県教育委員会事務局文化課と日本道路公団仙台建設局との協議が重ねられた。

文化課においては、昭和 50 年から 51 年度にわたり道路公団の協力を得て実施計画路線沿い 400 m 巾を対象に埋蔵文化財包蔵地の分布調査を行なった。その結果にもとづき遺跡保存とルート設定についても協議が行なわれた。

昭和 52 年 9 月に路線発表となり、中心杭、巾杭設置作業が開始され、昭和 54 年 9 月から用地買収へと進展していった。その間、発表された路線巾内における遺跡確認調査も併行して文化課により実施された。しかし山林地帯における分布調査は思うにまかせず、改めて山林伐採後に行うことにした。この時点における全計画路線内の確認済遺跡数は 14 遺跡約 81,700 m² となっている。

昭和 55 年度から当埋文センターが第 7 次施行命令区間の発掘調査を文化課の調整と指導のもとに九戸村田代 B 遺跡、軽米町の吠屋敷 Ia 遺跡、君成田 IV 遺跡の 3 遺跡について実施した。

同年 9 月には、工事用道路予定地の分布調査も行なわれ、一戸町沼山遺跡、滝野来田遺跡が追加となったが、滝野来田遺跡は文化課により立会調査とした。

II 調査の方法と経過

調査区域は、尾根筋に沿って細長く伸びており、僅かに東側に張り出すように緩く曲っている。長さは 300 m 弱、巾は 35～80 m になる。調査区域は次のように区画した。

基点 道路中心杭 S T A No. 211+00 (交点名 I 15)

基軸線 S T A No. 211+00 と S T A No. 212+00 を結ぶ線

2 点の位置 (平面直角座標第 X 系)

S T A No. 211+00 X = 35435.6871 Y = 52383.8225

S T A No. 212+00 X = 35526.9441 Y = 52424.6304

調査区域全域に5m四方の網をかけ、西から東にA～Jのアルファベット、北から南へ01から60の算用数字によって線の名称とした。網目(各区)の名称は、北西隅の交点名を用いた。遺構名は、北ないし西の部分が入る網目の名称を用いることを原則とした。

粗掘は、人力と重機(バックホー)を用いた。はじめ、尾根筋の北端から37辺まで巾2mの短冊状にトレンチ掘りをした後、I 07、I 19、I 31、I 43の4ヵ所に、尾根から谷へかけて、巾2mの土層観察用トレンチを掘り、併せて遺構と遺物の密度を調べた。その後、尾根筋とI 43以南の斜面は手掘りをし、東斜面は重機によって、後述するⅢ層中部のやや明色の面まで剥ぎ取った後検出作業を行った。この段階では、遺構は、尾根中央の平坦部(E・F 28～38辺)以南に集中するととらえ、南斜面の調査に着手した。南斜面は、表土を除去してすぐ、遺構と遺物の密集する様子が分った。南斜面の調査が一段落してから、尾根中央平坦部の再検出作業を行ない東斜面上部の遺構群を調査した。

Ⅲ 遺跡の環境

君成田Ⅳ遺跡は、岩手県東半に南北に広がる北上山地の北端にある。北上山地は、老年期の起伏に乏しい様相を呈しているが、本遺跡のある軽米町周辺では特に顕著で、なだらかな丘陵が広がっている。近辺の高地といえば、本遺跡の南西約9kmの折爪岳(852m)、北東15kmの種市(階上)岳(740m)、東北東15kmの久慈平岳(706m)位のもので、あとはせいぜい高くても400m位しかない。なお、折爪岳は、軽米町の西に屏風のように南北に連なる山稜の一部であり、北に名久井岳(613m)、南に小倉岳(652m)、傾城峠(736m)、就志森(770m)が控えている。これらの南北に延びる山地の東麓を瀬月内川が北流する。瀬月内川は、丘陵の間を蛇行しつつ流れ下り、本遺跡の北方約5kmの地点で、雪谷川を合わせて新井田川となり、25km余流れて八戸市で太平洋に流れ入る。本遺跡から雪谷川へは、背後の丘を越えて2km弱で行ける。瀬月内川へは、前(南)の谷を下って3km余である。

本遺跡は、軽米町役場の南西1.4kmにあり、南東600mに君成田部落がある。遺跡の周辺は起伏量100m未滿の極めてなだらかな丘陵地で、遺跡のすぐ北に標高220～230mの低い尾根が北東—南西方向に延びており、これから分れて大体南南西に下る枝尾根の先端に遺跡が載っている。この枝尾根は、長さ450m、巾は付根で150m、先端で100m。標高は付根で230m余、先端で200m弱。付根からはやや急に、次第にゆるやかに下ってゆき、尾根中央より少し先端寄りで一旦水平になってさらに若干高まり、その先は再びゆるやかに下ってゆく。遺跡の南には瀬月内川の支流の郷坂川が北西方向に流れ、巾50m余の狭い谷底平野が形成されている。遺跡の先端は崖となっており、谷底との比高は5m位である。調査の結果、先端部の崖上にや

や大形の縄文後期の住居址の一部が残っていた。当時は今より南の方まで延びていた尾根が、その後の浸食作用によって後退した証である。谷向うの斜面は、こちらよりも急な傾斜で比高50m程高まっている。遺跡の東は、これまたなだらかな枝尾根が平行している。西も似たような尾根である。遺跡の東の谷には小さな沢が流れ、西の谷の下方に湧水がある。このように遺跡は日当たりが良く、水の便に恵まれ、南に川を望む尾根上に立地している。この周辺の丘陵地は、多くが畑地として利用されており、遺跡の載る枝尾根も、西斜面、南斜面、東斜面の北寄り下部は畑地として利用されている。東斜面の上部の方は、極く最近植林された小松原であった。西斜面の先端部寄りは、圃場整備のために削平されており、遺跡の $\frac{1}{2}$ ないし $\frac{1}{3}$ が消滅しているものと思われる。この近辺の南面する丘陵地及び谷向うの一部においては、遺物の表面採集が可能である。後ろの丘陵を越えた雪谷川への斜面上のなだらかな丘陵地にも、多くの遺跡が立地する。中でも、縦貫道関連で調査対象となった馬場野Ⅰ・Ⅱ、吠屋敷Ⅰ～Ⅲ遺跡は、立地と時期の点で本遺跡に類似する点が多い。

本遺跡の土層は、当地方に特徴的な十和田火山起源の碎屑物によって構成されている。傾斜地であるため地点によって様相が異なるものの、二戸・九戸地方に見られる標準的土層が、東斜面中位より下位にかけて観察できた。本遺跡の基本土層は次のようになる。

第Ⅰ層 表土ないし耕作土。稜線で明色、谷に向かって暗色となる。

第Ⅱ層 粒径3～4mmの白色の硬い浮石混りの黒色砂質土。斜面中位～下位にかけてのみ明確な層を成す。また遺構埋土上部にも堆積する場合が多い。

なお、この層の直上に、白色砂質火山灰（十和田a 降下火山灰）が堆積する場合も少数例の遺構埋土で見られた。

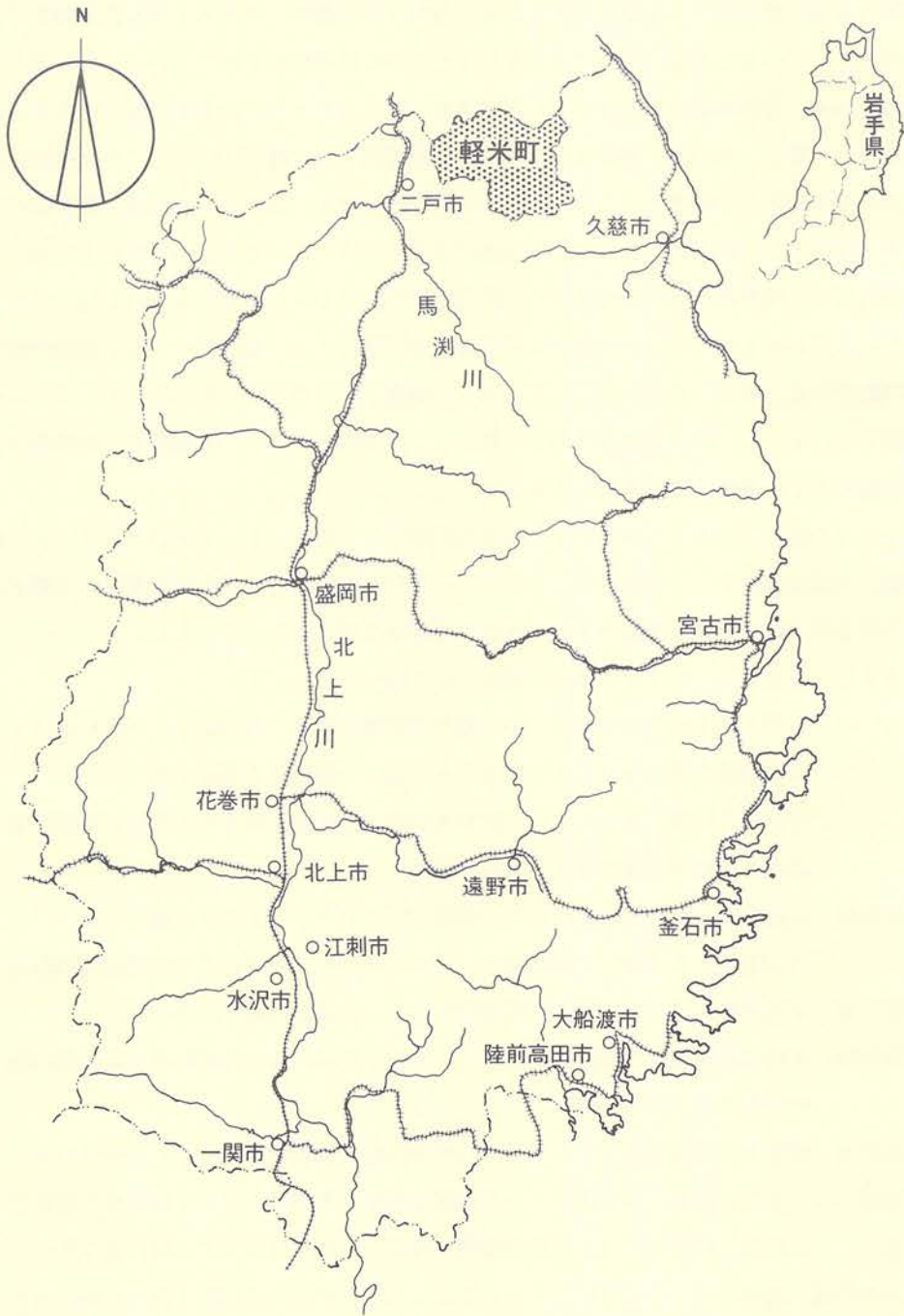
第Ⅲ層 暗褐色から明褐色の細粒浮石。中振浮石層である。上部は有機質の混入によって暗色であるが、下部は明色。「アワズナ」と呼ばれる。急傾斜部で厚い。

第Ⅳ層 浮石混りの黒ないし黒褐色粘土質シルト。急傾斜部直下が特に厚い。

第Ⅴ層 黄褐色浮石層。南部浮石層。「ゴロタ」と呼ばれる。急傾斜部では上部に細粒浮石が厚く堆積する。

第Ⅵ層 褐色から明褐色粘土質シルト。八戸浮石流火山灰層。「カベ」と呼ばれる。

稜線部では、流亡、混合、再堆積のために層相は複雑であるが、概して第Ⅵ層が露出する場合が多い。これに対し斜面部では、混合再堆積が著しく、特に南斜面では暗色土であったため、掘り込みの浅い遺構では、炉を検出の手がかりにしたり、炉のみの検出で終わった場合もある。



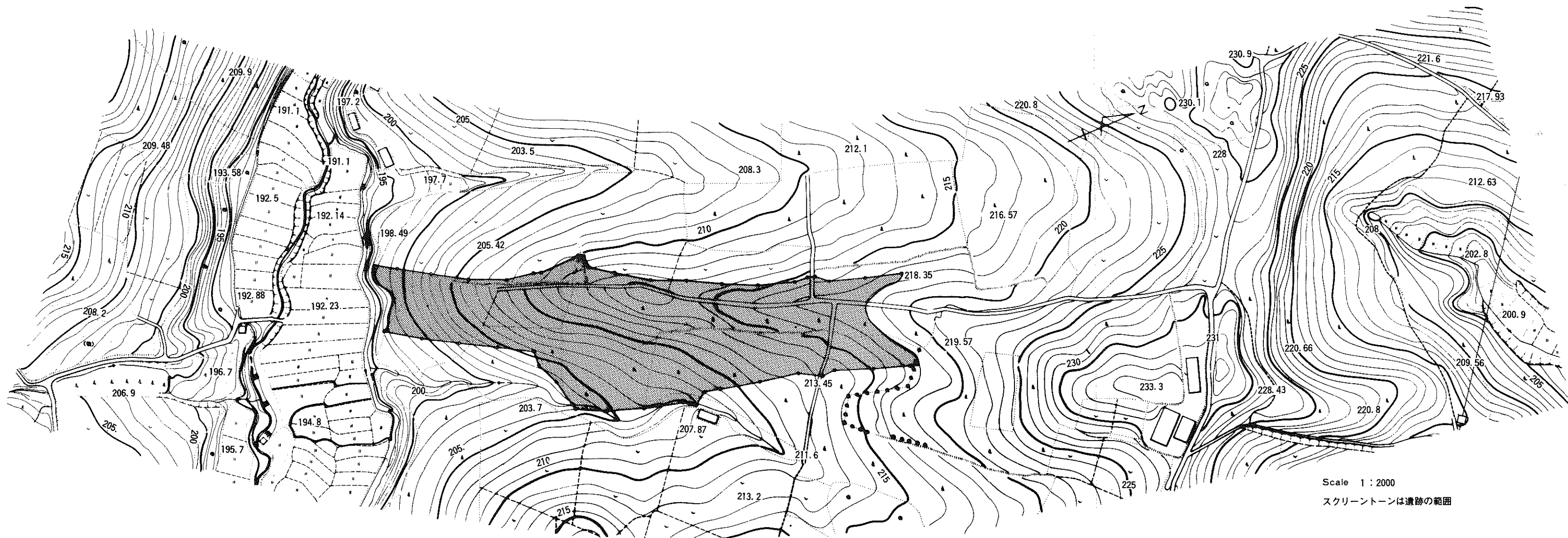
第1図 軽米町の位置



第2図 君成田Ⅳ遺跡の位置

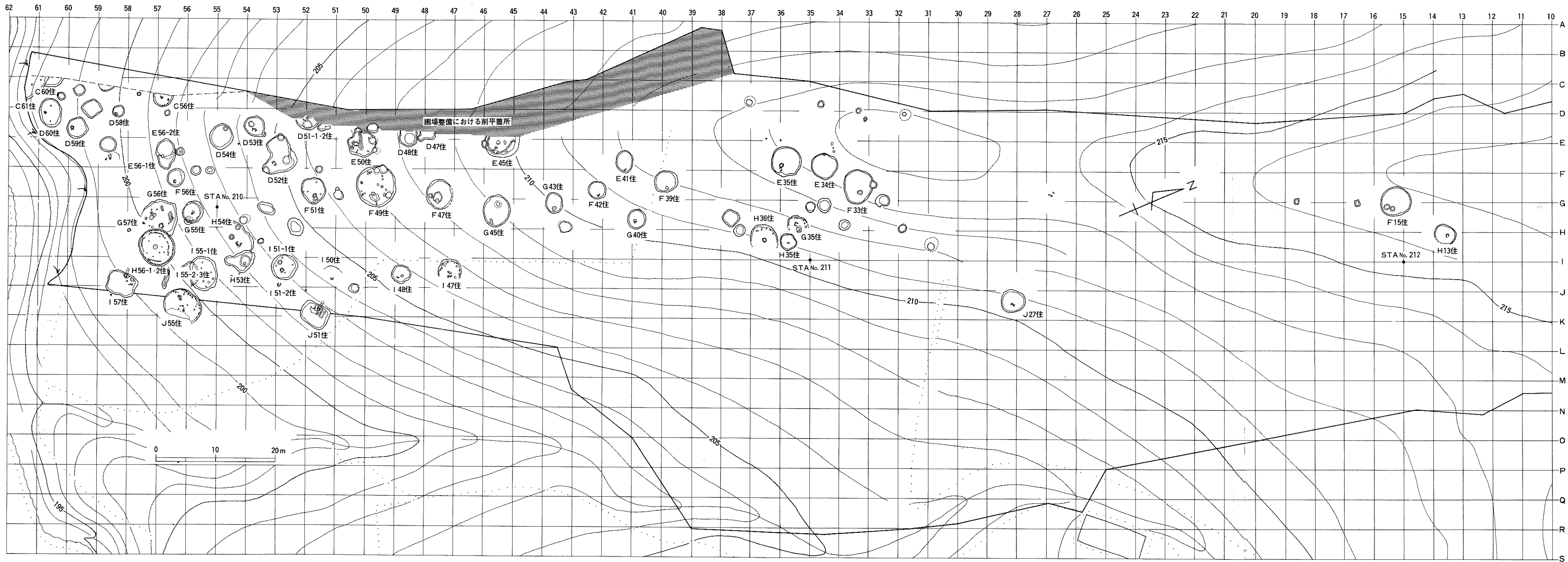


第3図 周辺の東北縦貫道関連遺跡の位置

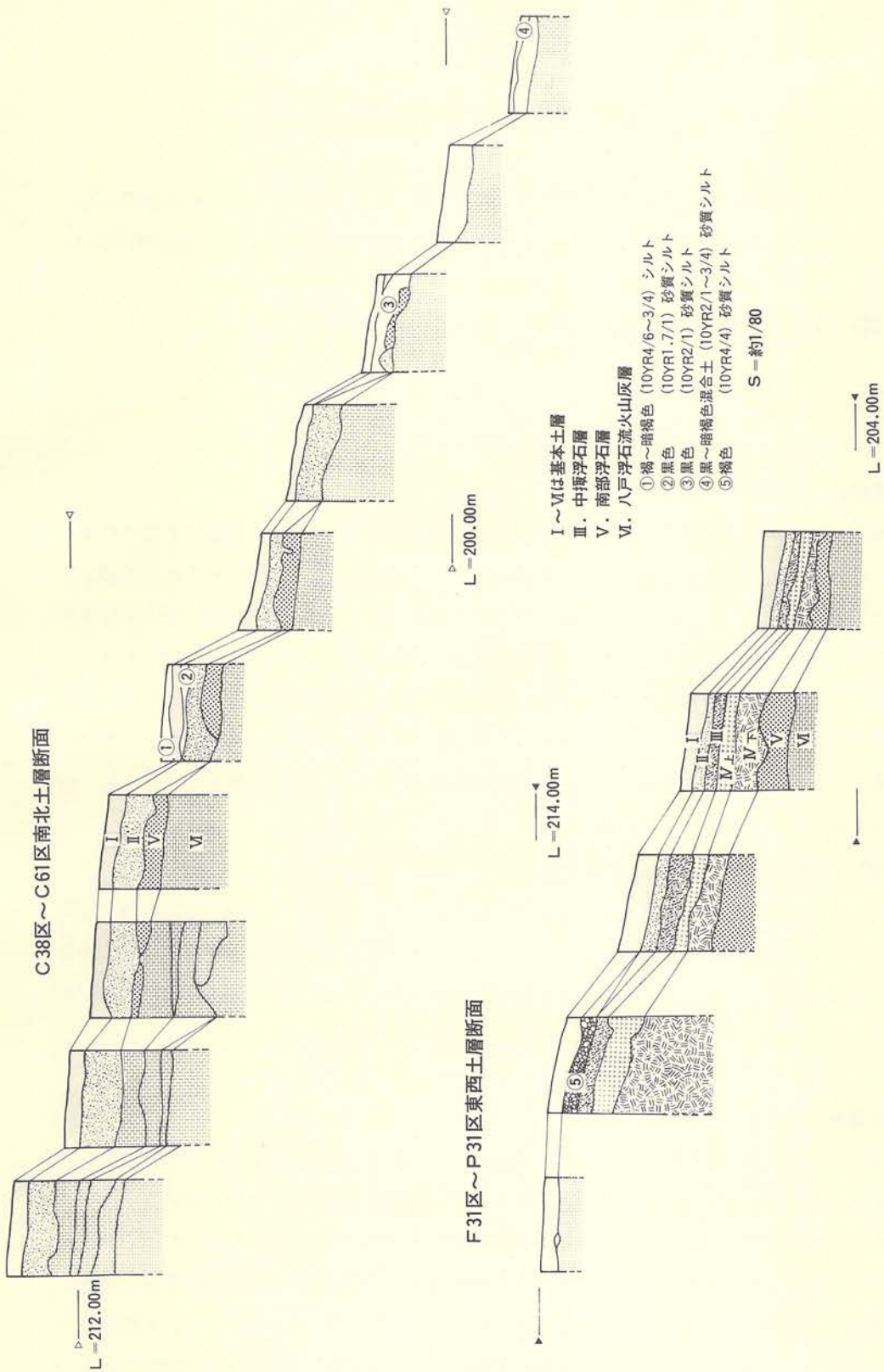


Scale 1 : 2000
 スクリーントーンは遺跡の範囲

第4図 君成田IV遺跡周辺の地形



第5図 君成田IV遺跡遺構配置図



第6図 君成田IV遺跡内土層断面

IV 調査の結果

検出された遺構は、縄文時代の住居址56棟、炉址3基、埋設土器3ヵ所余、配石遺構1基、土坑63基、陥し穴状遺構2基、古代の住居址2棟、近世以降の建物跡1ヵ所、土坑2基である。

1. 縄文時代の遺構と遺物

(1) 住居址

H13住居址（第7図、図版3）

（検出・埋土）調査区域北部の尾根東斜面のⅣ層中で検出した。埋土の各層に南部浮石を含むが、第3層には特に多い。（平面形）東側は削られて不明であるが、長径3.7m短径約3.2mの北東—南西に長い楕円形である。炉の中分線は北西—南東を指す。（床面）大部分は南部浮石の混じる黒褐色砂質土であるが、西側の一部ではⅤ層が露出する。不規則な凹凸が多い。

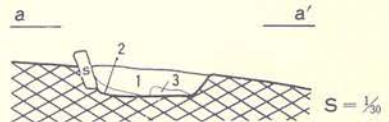
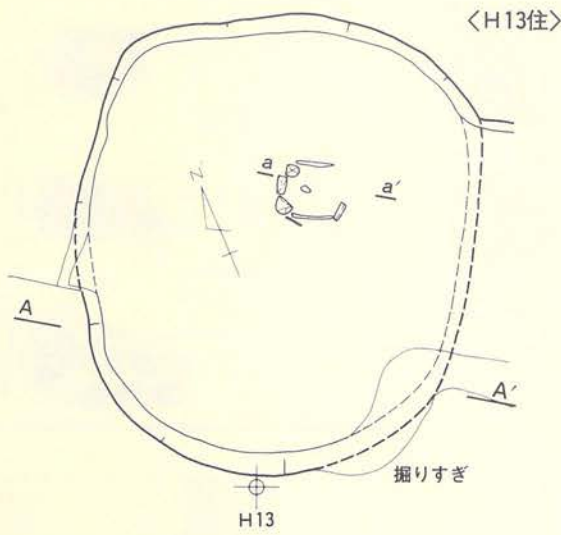
（柱穴・周溝等）検出されていない。（壁）検出面までの高さは36～28cm、立ちあがりは緩やかである。（炉）石囲炉が1基、床中央から少し東寄りに設けられている。縦55cm、横45cmの方形で一部の石が欠けている。チャートと粘板岩を用いており、火熱で脆くなっている。焼土は層を成すほど形成されていない。

（遺物）（第8図の1～6、図版36・38）

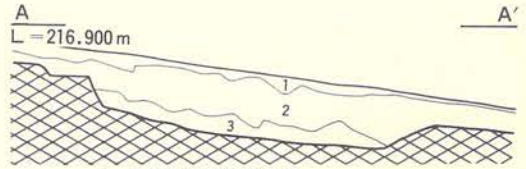
床面と床面に極く近い埋土中から3ヶの土器が出土した。1は炉のすぐ西、3は炉のすぐ東の埋土中、2は北西壁際の床面から出土している。1は口縁の一部のみ波状を呈し、3はゆるやかな波状口縁となるようである。埋土中出土土器片には、外反口縁片と磨消縄文土器片がある。

F15住居址（第7図、図版3）

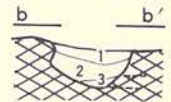
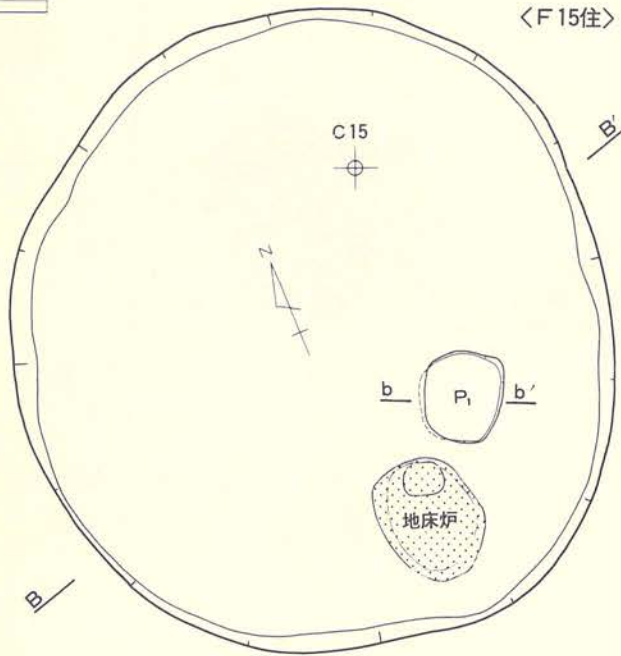
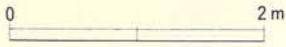
（検出・埋土）H13住居址の南西6mの稜線部のⅤ・Ⅵ層混合土中の若干暗色の部分として検出した。埋土は2層に分かれるが、層厚は一定せず起伏がある。（平面形）長径5.1m短径4.8mの北東—南西に長い楕円形である。主軸は南北を指す。（床面）堅くしまっており東に緩やかに傾斜し、不規則な凹凸があり、床中央付近から北壁にわたって焼土が帯状に散在する。（柱穴・周溝等）炉の北東側に小土坑が1基検出された。開口部62cm×72cm、底部38cm×70cm、深さ30cmの方形気味の穴で底面は凹凸が激しく小穴等が多い。木根跡の可能性はある。



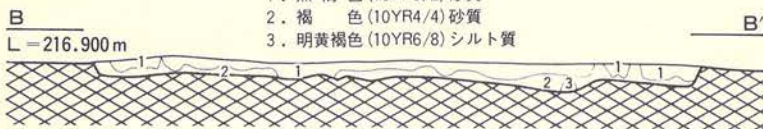
1. 黒褐色 (10Y R 3/2) 砂質土
2. にぶい黄褐色 (10Y R 4/3) 砂質



1. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質
2. 黒褐色～暗褐色 (10YR3/2～3/3) 砂質
3. 黒褐色～暗褐色 (10YR3/2～3/4) 砂質

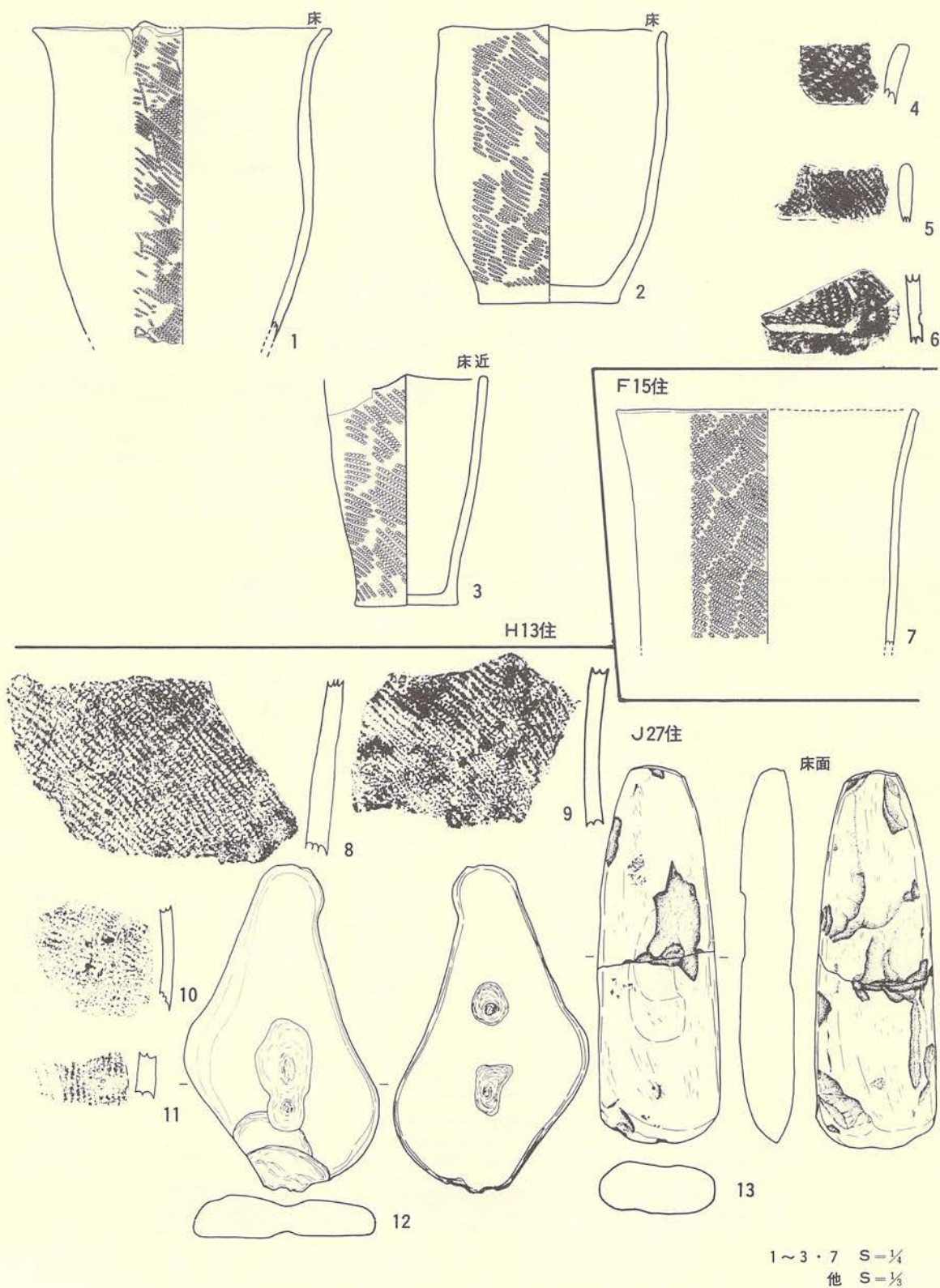


1. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質
2. 橙色 (7.5YR5/6) 砂質
3. 明褐色 (10 YR6/6) 砂質



1. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質
2. 褐色 (10YR4/4) 砂質
3. 明黄褐色 (10YR6/8) シルト質

第7図 H13・F15住居址



第8図 H13・F15・J27住居址出土遺物

(壁) 検出面までの高さは16~23cm、勾配はゆるやかである。(炉) 地床炉が1基、南壁際に設けられている。形状は0.7m×1mの南北に長い楕円形で深さ5~8cm、皿状を呈し、焼土は厚さ7cm位、少量の木炭片も残っている。

(遺物) (第8図の7、図版36)

粗製土器片が1ケ、南壁際の床面より少し上から出土した。頸部が弱くくびれ口縁部が外反する。縦回転の単節斜縄文LRが施されている。

J27住居址 (第9図、図版4)

(検出・埋土) 尾根平坦部から東斜面に下ったIII層下面で検出した。埋土は単層に近い。

(平面形) 長軸4.1m 短軸3.85mの北東-南西に長い卵形である。主軸は北東-南西を指す。

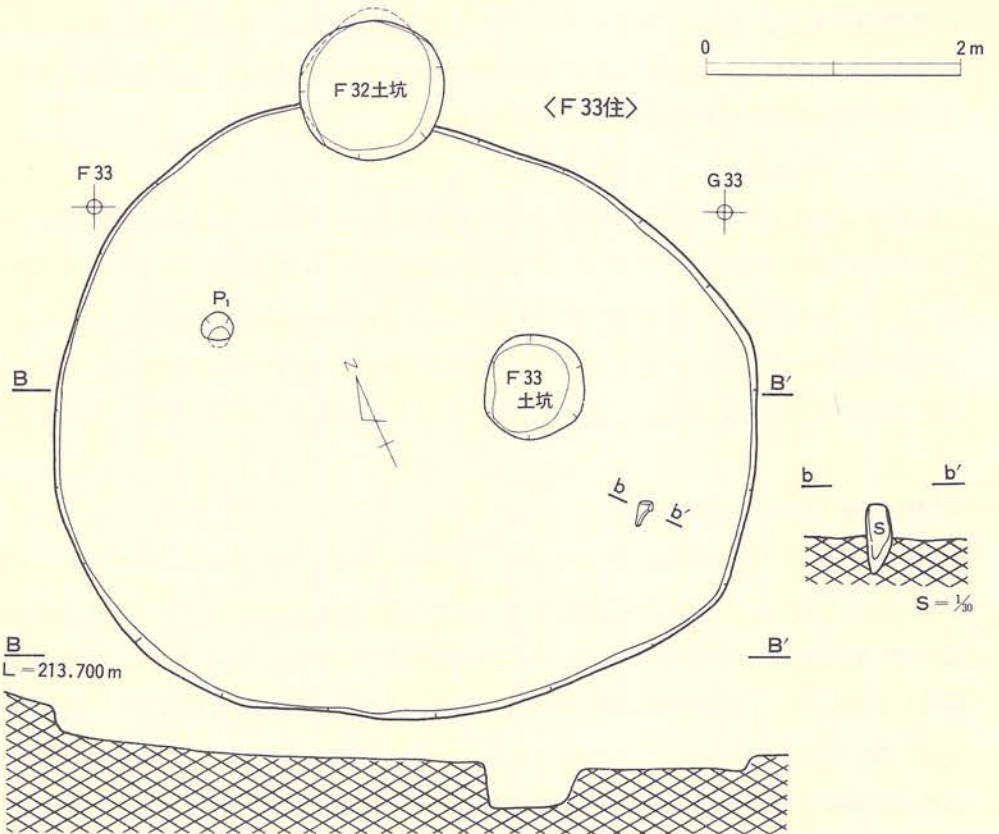
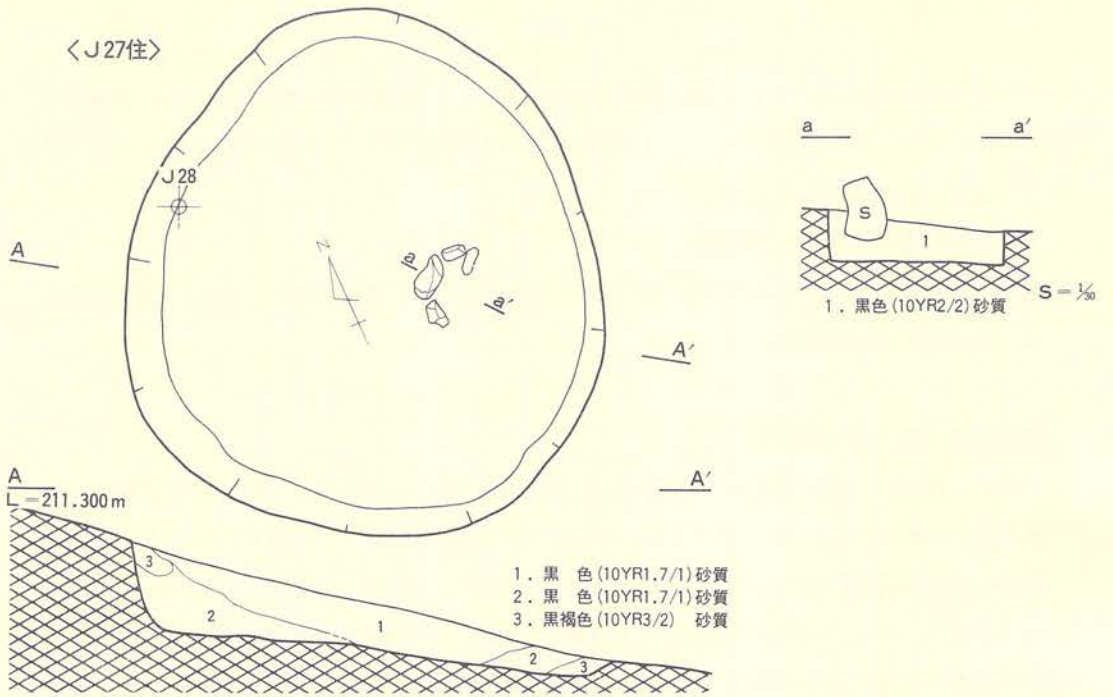
(床面) 南部浮石の散在する黒色土で、東に緩く傾斜している。南東壁から約70cmまでは特に堅くしまっている。(柱穴・周溝) 検出されていない。(壁) IV層まで掘りこまれており、壁高は斜面上位の北西壁で75cm、下位の南東壁は6cmである。勾配は北西壁が70°~80°、東壁は45°前後である。(炉) 石囲炉が1基、床中央より南東側に寄った位置に設けられている。炉縁石は4ケのチャートで巾35cm長さ70cmの範囲に半円状に配置され、火熱を受けて赤変している。炉には少量の炭化物が含まれるが焼土はない。

(遺物) (第8図の8~13、図版47・48)

床面から石斧1ケ、埋土中から凹石1ケと粗製土器片が出土した。13は南西区床面から25cm浮いて出土した。板状に剥げやすいため剥離痕が目立つ。刃部を正面から見るとS字状に研がれている。12は表裏2ケずつの凹みがあるほか、上下両端に打撃による欠損が見られる。8~11は北壁寄りの埋土中に一塊になってあった。8・9は同一個体のものであり、原形は胴部が張り頸部がくびれ口縁が外反するものであろう。11は縦の撚糸文を地文とする磨消文をもつ。

F33住居址 (第9図、図版4)

(検出・埋土) 尾根の南斜面を上りきって若干平坦になっている地点に立地する。VI層上部において若干軟らかく暗色の部分を認めた。F32土坑に切られている。F33土坑との新旧関係は不明。埋土は少し軟らかい粘土質シルトの単層である(明褐~褐色、7.5YR5/6~4/6)。(平面形) 長径5.55m、短径4.70m+αの卵形を呈し、長軸は北西-南東を指す。(床面) VI層中にあり特に踏みしめられた部分は認められない。東寄りの3分の1近くはVI層中心の再堆積層のため不明確である。(柱穴・周溝) 北西寄りに1ケの穴がある(23cm×26cm、深さ77cm、歪円形)。数と位置は柱穴とするには不適當である。(壁) 検出面からの高さは10cm弱。立ち上り部分の形状は不明確。(炉) 検出せず。或いは、南東端から65cm内側に検出された埋設され



第9図 J27・F33住居址

た石（長さ17cm、巾6.5cm、床面下16cmまで埋められている）の手前が、炉の可能性が高いが、焼土は確認できなかった。

（遺物）（第11図の1～10、図版36）

床面から土器口縁部2ヶ、埋土から若干の土器片が出土した。1は北西壁際、2は西壁際の床面から共に出土した単純な器形の粗製深鉢である。埋土中出土土器片には、大柄な磨消文をもつもののほか、刺突文（5）、沈線文（6）をもつもの、外反口縁の粗製（10）が含まれる。

E 34住居址（第10図）

（検出・埋土）F 33住居址の南西2m、やはり尾根の平坦になった地点にある。VI層上部で周囲より軟らかく若干暗色の円形を認めた。埋土は、少し堅めの粘土質シルトの単層である（明褐色、7.5YR5/8）。（平面形）特に東半分の輪郭が少々不明確であるが、長径4.3m、短径4m前後の歪んだ円形を呈し、長軸は北北東—南南西を指す。（床面）すべてVI層中にあると推定される。灰色の硬い粘土塊のような土層が広がる面で一応とらえたが、踏みしめ面ではない。

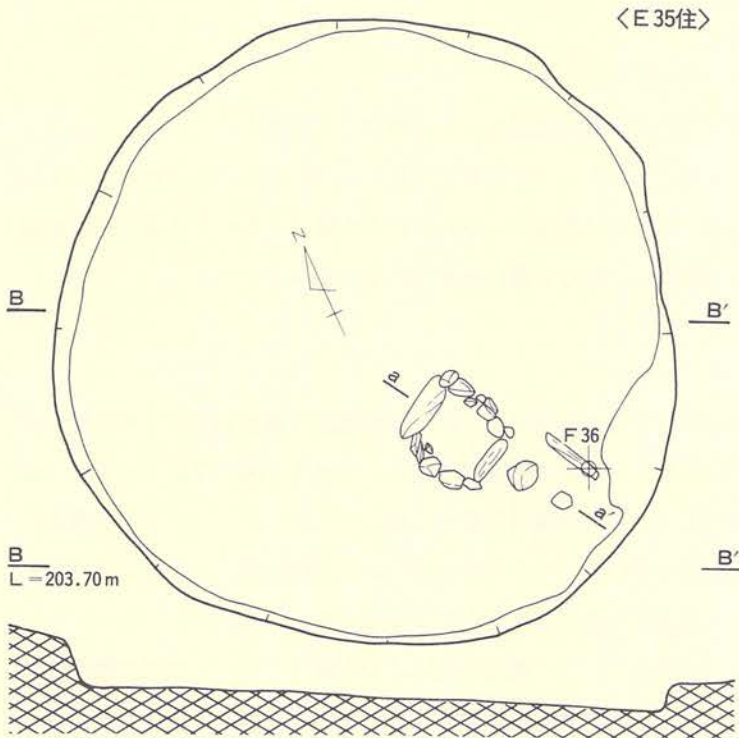
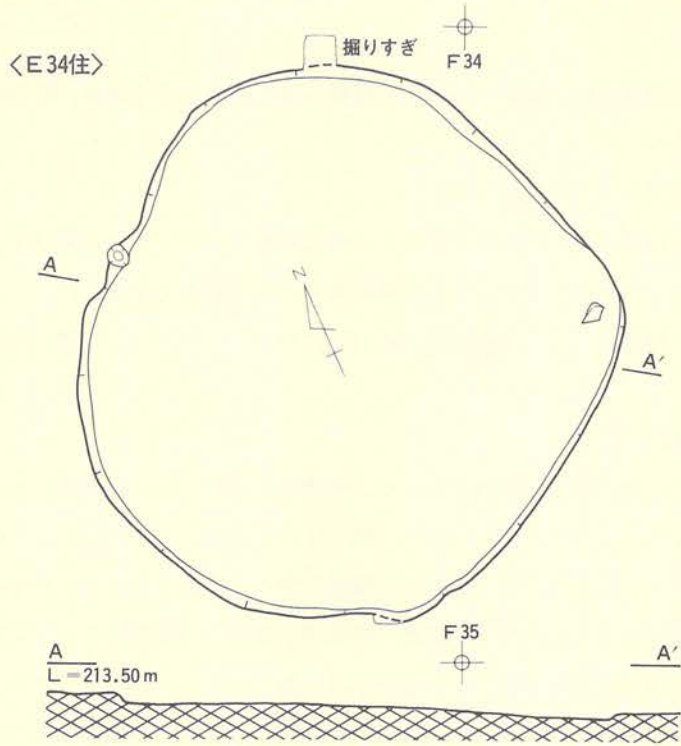
（柱穴・周溝）共に検出していない。北西壁に19cm×15cm、深さ20cm程の浅い穴が1ヶあるものの柱穴かどうかは不明である。（壁）全体に曖昧であり、高さは10cm弱～25cmである。（炉）焼土は全く確認できなかった。

（遺物）（第11図の11～16、図版36・47）

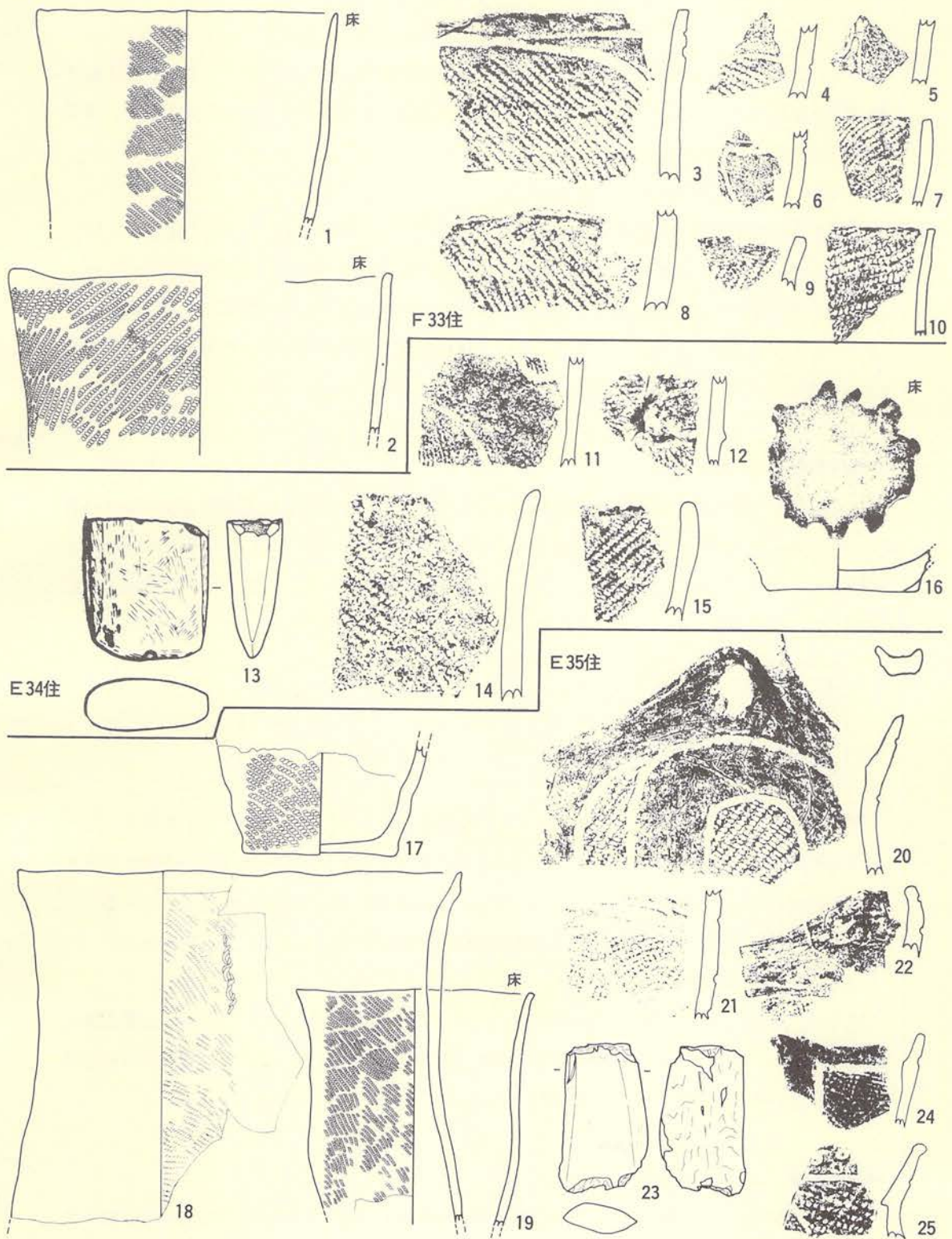
周縁に刻みがあって歯車状になった土器の底部片が、北西壁際の床面から出土したほかは、若干の遺物が埋土に含まれていた。土器片には、大柄な磨消文（11・12）が施されるものがある。12にはヒレ状突起が加わる。粗製では頸部がくびれ口縁が外反するものがある。13は折損後敲打具に転用されており、折損部の一端と刃部に細かい打痕が集中している。

E 35住居址（第10図、図版5）

（検出・埋土）尾根平坦部のVI層上面で検出した。埋土は明褐色～褐色粘土質土の単層で少量の木炭片を含む。（平面形）直径5.1mのほぼ円形であり、主軸は北西—南東を指す。（床面）南壁に接する部分に凹凸があり、炉の周辺はわずかに低くなっている。（柱穴・周溝等）検出されていない。（壁）検出面までの高さは7～27cmで勾配は比較的緩やかである。（炉）石囲炉が1基、南側に片寄った位置にある。形状は方形で80cm×80cmの範囲に石（チャート）が配置される。石は火熱により赤変している。南辺と北辺は特別細長い石が1ヶずつ据えられており、断面で見るといずれも逆八字状に外傾している。炉の埋土の上部には少量の炭化物があり、下部には厚さ10～15cmの焼土が見られた。炉の南側にも3ヶの石があり、2ヶは炉の中軸線上に置かれており、南側の長さ55cm、幅25cm、厚さ8cmのチャートの板状石は、板状面を



第10図 E 34・E 35住居址



第11图 F 33 · E 34 · E 35住居址出土遺物

1 · 2 · 17~19 S=1/4
 他 S=1/3

垂直にして20cmほど埋められている。これら3つの石の周辺には焼土はない。この炉の状況は複式炉を連想させるものの、炉の南側の部分は、若干低くなっているようにも見えるが、特別踏みしめられた形跡もない。

(遺物) (第11図の17~25、図版36・55)

床面から粗製土器1ヶ、埋土から土器片若干が出土した。19は北東壁の手前の床面から出土した。断面がゆるいS字状を呈し縦回転のLRが施される。18もゆるいS字状断面であるが、口縁上端は断面が三角形に薄くなり外面に巾1cm余の無文帯がある。撚糸文の上に縦の綾絡文が加えられる部分もある。埋土出土土器片には磨消縄文が顕著であり、刺突が加えられるもの(25)もある。23は石斧の断片を再研磨したと思われるものである。

G 35住居址 (第12図、図版5)

(検出・埋土) 尾根中央平坦部東斜面のⅢ層で石囲炉を検出した。埋土の第2層に多量の焼土を含んでおりこの下面が本来の床面である可能性が大きい。(平面形) 残存する西壁や柱穴の配置からみて、円形又は楕円形で規模は径3~4mと推定される。(床面) 炉の周辺の状況から、Ⅲ~Ⅴ層混合土層中であつたと思われる。(柱穴・周溝等) 壁際に7ヶ検出された。

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	20×20	20×20	15×18	16×18	16×17	20×20	26×40
深さcm	30	20	15	21	36	20	40

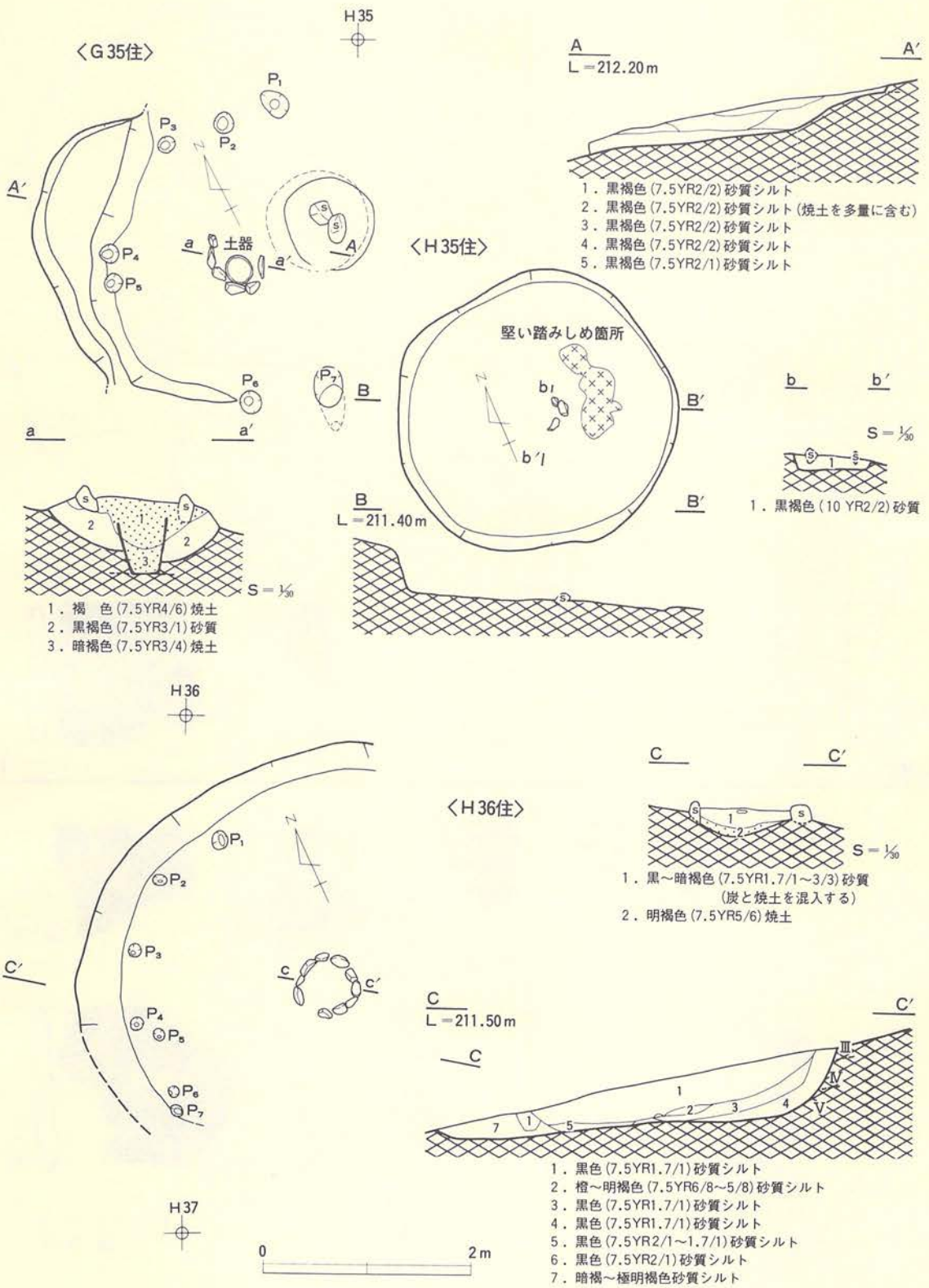
(壁) 西側の一部分をⅤ層の掘りこみによって検出した。(炉) 土器埋設炉が1基ある。柱穴との位置関係からみて、床中央付近と考えられる。北東側に開いた半円状(40cm×55cm)に6ヶの石が並ぶ。中央に口径25cm、高さ40cmの底部と口縁部を欠く鉢形土器が埋められている。70cm×80cmの範囲に焼土が広がり、埋設土器内部にも固くしまった焼土が充満していた。

(遺物) (第13図の1~7、図版36)

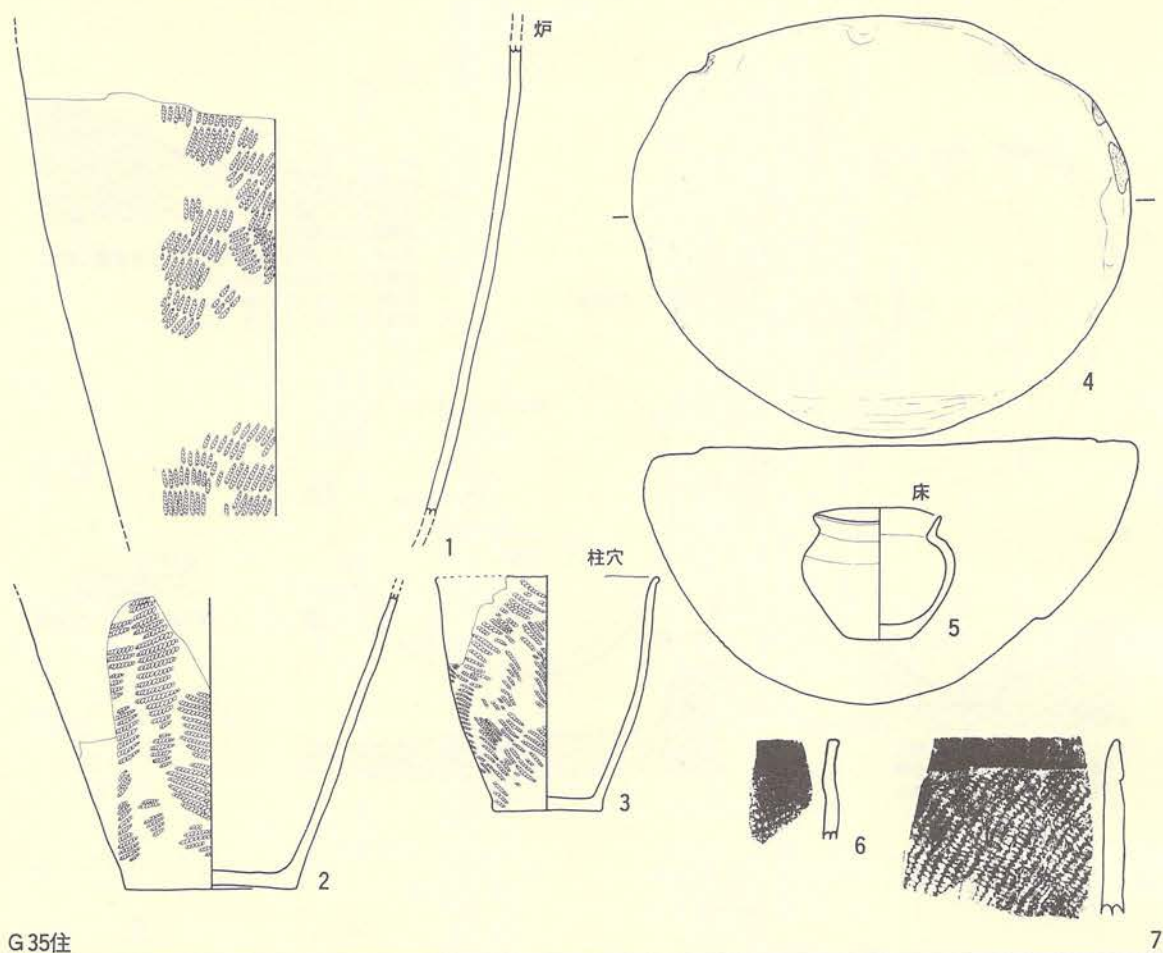
炉埋設の深鉢体部片(1)、南南西壁際の柱穴(?)中の小形鉢(3)のほかは、埋土出土品のみである。炉の北北東と南南西の2ヶ所から直径20cm位に固まって、200粒近くの炭化栗が出土した。中には皮をつけたままのものもある。

H 35住居址 (第12図、図版5)

(検出・埋土) 尾根の平坦部より少し東へ下った地点で、Ⅲ~Ⅴ層土混合暗色土中において若干周囲より暗色の輪郭によって確認した。埋土は、西側の3分の1位にⅢ層土の小ブロックを含む、Ⅲ~Ⅴ層土の混合した砂質シルトの単層(黒色、7.5YR2/1)。(平面形) 直径約2.7

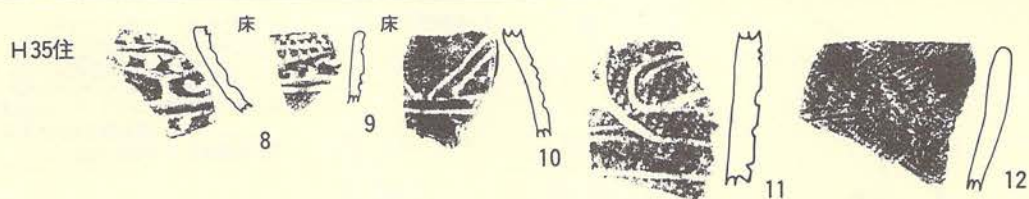


第12図 G35・H35・H36住居址



G35住

7

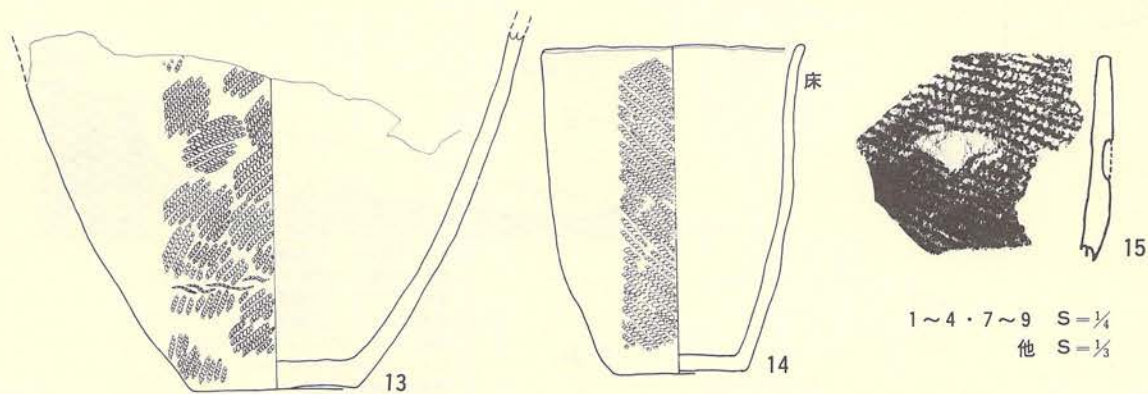


H35住

床

床

床



1~4・7~9 S=1/4
他 S=1/2

第13图 G35・H35住居址出土遺物

mの少し歪んだ円形を呈しており、炉を2分する軸線は大体北西—南東を指す。(床面) 踏みしめられて堅くしまっている部分は、炉の東から北東にかけて巾30cm、長さ90cm位残っている。全体としては不明確であるが、遺物のレベル等から推定すると僅かではあるが、斜面下方に傾斜しているようである。(柱穴・周溝等) 全く認められなかった。(壁) 埋土との境が不明瞭であるが、斜面上方の最下部は細粒の南部浮石層によって把握できた。この部分の高さは約60cmである。(炉) 中央に、3ケの石を置く1種の円形石囲炉がある。直径は30cm余。石は小さめのものが斜面下方側にのみ置かれている。焼土は無いに等しい。

(遺物) (第13図の8～15、図版37)

北西壁際の床面から粗製深鉢(14)が横転状態で、またその近くから浮彫文のある土器片(8・9)が出土した。埋土出土土器片には、無地に沈線文(10)、縄文地に粗い磨消文を施したもの(11)、擬似羽状縄文の粗製(12)がある。

H36住居址(第12図、図版6)

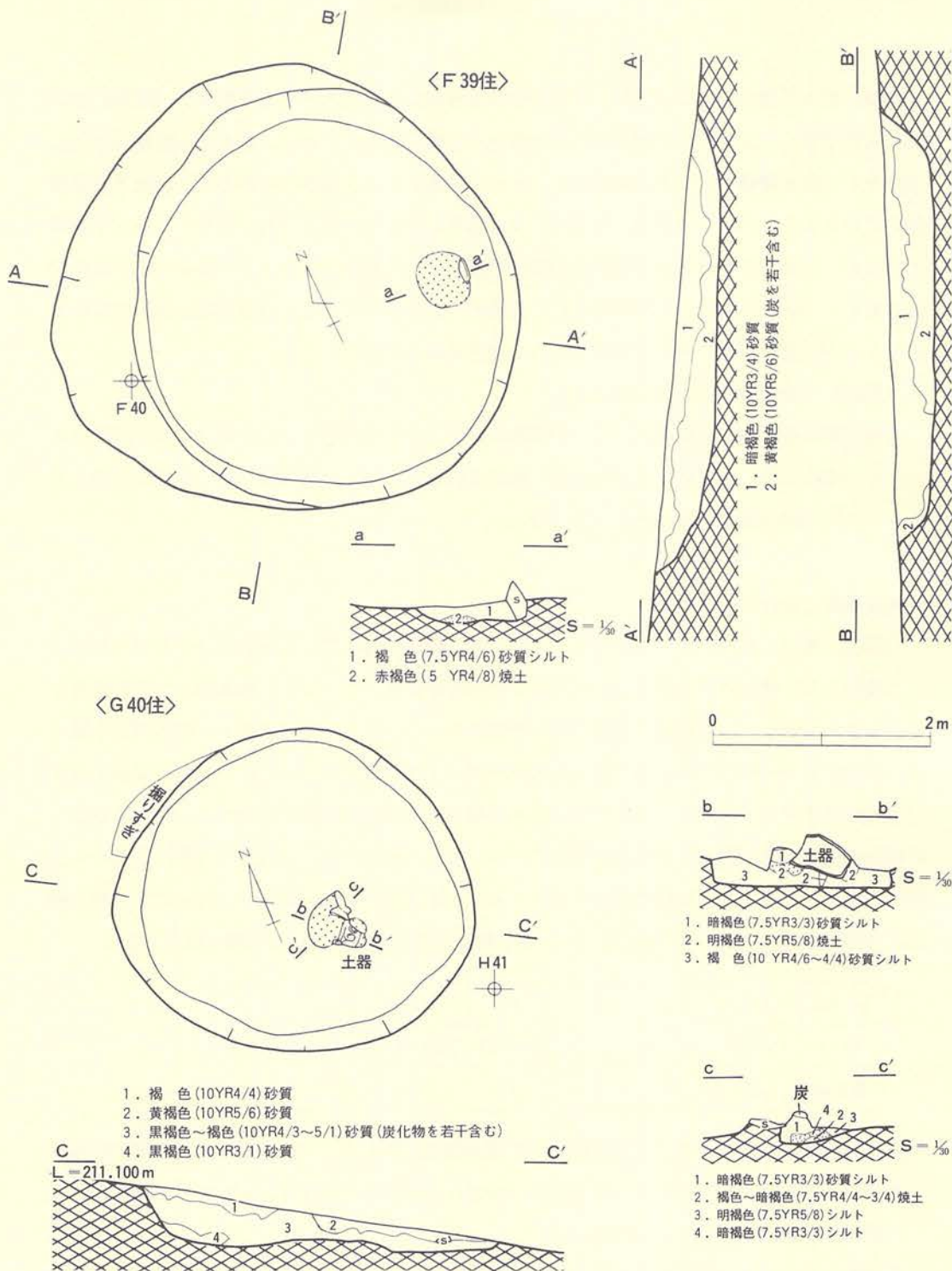
(検出・埋土) 尾根の平坦部から東へ少し下りた斜面上部のⅢ～Ⅴ層混合層中の黒色輪郭により確認した。埋土は、下部の一部に明色土の薄層が挟まっているが、基本的には黒色砂質シルトの単層である。(平面形) 斜面下方が把握できなかったが、推定直径4m位の円形を呈する。炉の中心から壁までの距離が最大の部分を仮に主軸と見なすと、それは北西—南東を指す。(床面) ほぼ平坦であるが、西半分に細粒のⅤ層が、東半分にⅣ層が露出する。炉の西側は、炉縁石の近くが少し凹みその外側は極めて堅い。巾は50cm位ある。(柱穴・周溝) 北西から西壁にかけて、7ケの小穴が検出されただけである。直径10～15cm、深さ6～20cmのいわゆる壁柱穴の類である。P₅とP₇を除けば、70±5cm間隔で壁より僅か(10cm未満)離れて並ぶ。

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	15×18	10×14	12×13	14×14	10×11	10×10	11×14
深さ cm	12	12	20	14	12	7	6

(壁) 西壁は75cmの高さで、下部に細粒のⅤ層が15cm露出する。(炉) 直径60cmの円形石囲炉1基が中央にある。石は10ヶ並び南西側が一部切れる。焼土の厚さは5cm程で、中央がくぼむ。

(遺物) (第15図の1～19、図版47)

床面出土品はない。埋土から土器片と石棒片が出土している。土器片には、浮彫文(1～4・7)、沈線文(8・10)、磨消縄文(11)、いわゆるハリコブのある磨消文(12)等が施される。粗製土器では小波状口縁をもつもの(5・6)がある。石棒(18)の一端には3本の刻線が認められる。



第14図 F 39・G 40住居址

F 39住居址（第14図、図版6）

（検出・埋土）南斜面最上部のⅢ～Ⅵ層混合土中の暗色部として検出した。埋土は上下に分けられ、下層には少量の炭化材を含む。（平面形）径3.8m×3.6mの北東—南西に長い円形で、主軸は西北西—東南東を指す。（床面）Ⅵ層の粘土質土からなり、ほぼ平坦である。床面には木炭の細片が散在する。（柱穴・周溝等）検出されていない。（壁）上半はⅥ層の風化した砂質土、下半はⅥ層の純層で、検出面までの高さは6～19cmである。勾配は極めてゆるく、なだらかに床に接する。（炉）炉が1基、東壁近くに設けられている。石が1ヶ東側に据えられている。直径50cmの円形の範囲に赤褐色の堅くしまった焼土があり、厚さは8cm、特に焼けている部分の厚さは4cm位である。

（遺物）（第15図の20、図版48）

埋土中から表裏2面に1ヶずつの凹みがある凹石1ヶと土器片僅少が出土した。

G 40住居址（第14図、図版7）

（検出・埋土）尾根南斜面最上部の東側斜面で、Ⅵ層上部から検出した。埋土は明色の上層と暗色の下層に大きく分けられ、下層に木炭片が散在している。（平面形）長径3.3m、短径3mの栗の実形で、主軸は北西—南東を指す。（床面）ほぼ平坦である。西壁付近の床から炭化材が2本（長さ15cmと30cm）が検出された。（柱穴・周溝等）検出されていない。（壁）検出面までの高さは斜面上位の北西壁は43cm、下位の南東壁は16cmである。壁は丸みをもって床に接する。（炉）炉が1基、床中央から僅かに南東寄りの位置に設けられている。1ヶの石が北東側に置かれている。焼土は50cm×60cmの不整形を呈し、厚さは5cm位である。炉の南半に1ヶの深鉢が、横転状態で検出されている。

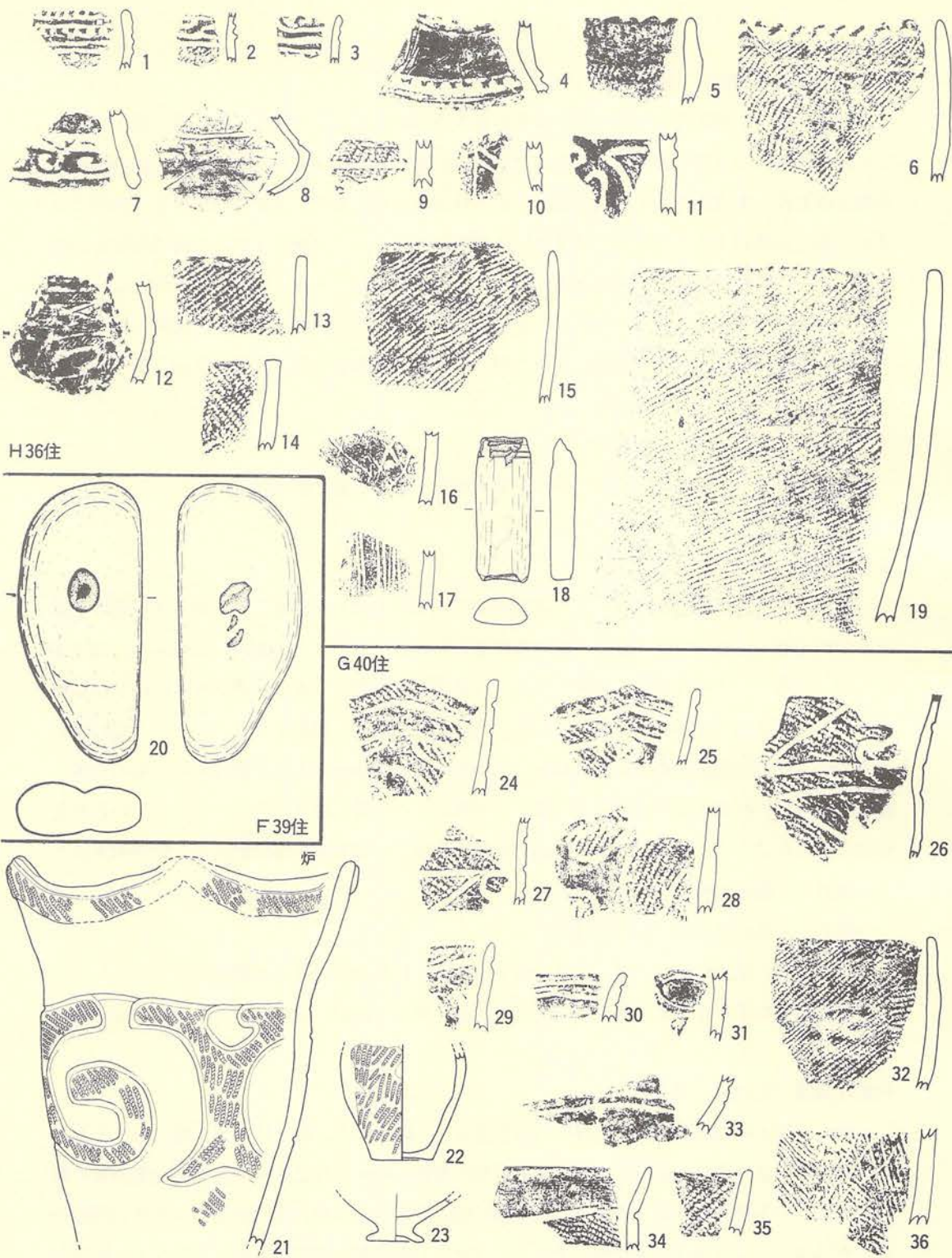
（遺物）（第15図の21～36、図版37）

炉の焼土上に粘土帯貼付口縁の、磨消渦巻文の施された土器（21）が横転状態で出土している。埋土出土の土器片には、粗い磨消文（24～27・29）、沈線文（30・31・33）等が施される。

E 41住居址（第16図、図版7）

（検出・埋土）南斜面上部のⅥ層中の暗色部として確認した。埋土は上下2層に分けられ、第2層の下部は少量の木炭片を含む。（平面形）長径3.65m、短径2.7mの西北西—東南東に長い楕円形で、主軸は長径に一致する。（床面）堅くしまっており、西壁付近に木根跡状凹凸や小穴があるが、他の部分はほぼ平坦である。（柱穴・周溝等）南側の床から立石が1ヶ検出された。35cm×10cm×10cmの石が20cm程埋められている。（柱穴・周溝等）検出されていない。

（壁）検出面までの高さは25～40cmで、勾配は緩やかである。（炉）炉が1基、南東壁の近く



H36住

G40住

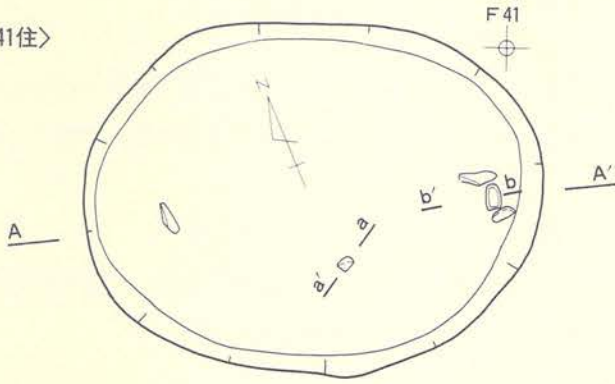
F39住

炉

21~23 S=1/4
 他 S=1/8

第15図 H36・F39・G40住居址出土遺物

<E41住>



F 41

a a'

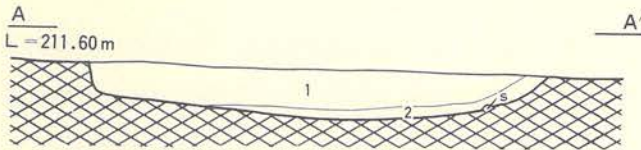


- 1. 褐色 (10YR4/6) 砂質シルト
- 2. 明黄褐色 (10YR2/6) 砂質シルト
- 2'. 黄褐色 (10YR5/8) 粘土質シルト

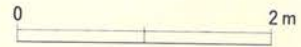
b b'



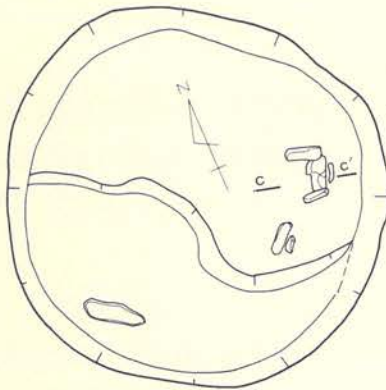
- 1. 褐色 (10YR4/6) 砂質シルト
- 2. 明赤褐色～赤褐色 (5 YR5/8～4/3) 焼土
- 3. 黄褐色 (10YR5/8) 粘土質シルト



- 1. 黒褐色～極暗褐色 (7.5YR2/2～2/3) 砂質シルト
- 2. 明黄褐色～黄褐色 (7.5YR6/6～5/6) 砂質シルト (木炭粒を少量含む)



<F42住>



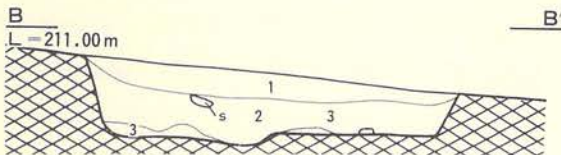
G 42

c c'



- 1. 褐色 (10YR4/6) 砂質シルト
- 2. 明赤褐色～赤褐色 (5 YR5/8～4/8) (焼土)

b/



- 1. 暗褐色～極暗赤褐色 (7.5YR3/2～2/3) 砂質シルト
- 2. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト
- 3. 橙色～明褐色 (7.5YR6/6～5/6) シルト

第16図 E41・F42住居址

に設けられている。南東側に3ケの石が置いてあるが南側の1ケは原位置から動かされたものと思われる。本来は西側に開いたコ字状であったと推定される。焼土は厚さ約5cmで堅くしまっている。

(遺物) (第17図の1～9、図版47・48)

床面出土品はない。磨消十字文(2～5)や沈線文(6・7)のある土器片、片面にのみ2ケの凹みのある石(9)、石斧片転用敲石(8)等が埋土から出土している。

F42住居址(第16図、図版8)

(検出・埋土) 南斜面上部のⅥ層上部で黒色土の混入部分を認めた。(平面形) 直径約3mの円形で、主軸は西北西―東南東を指す。埋土は3層に分けられる。下層ほど明色で第3層の下部には木炭片が散在する。(床面) 北東側が堅く南西側は軟らかで、北東側が約20cm高くなっている。床面には炭化材の細片が見られた。(柱穴・周溝等) 検出されていない。(壁) 検出面までの高さは26～65cmであり、勾配は70°～80°である。(炉) 石囲炉が1基、南東壁近くに設けられている。3ケのチャート礫が、北西側に開いたコ字状(40cm×50cm)に配置されているが、炉の南西側約20～30cmの位置に石が2ケあり、これらも炉に用いられていた可能性がある。炉には少量の木炭片があるが焼土はない。

(遺物) (第17図の10～23、図版37・47・58)

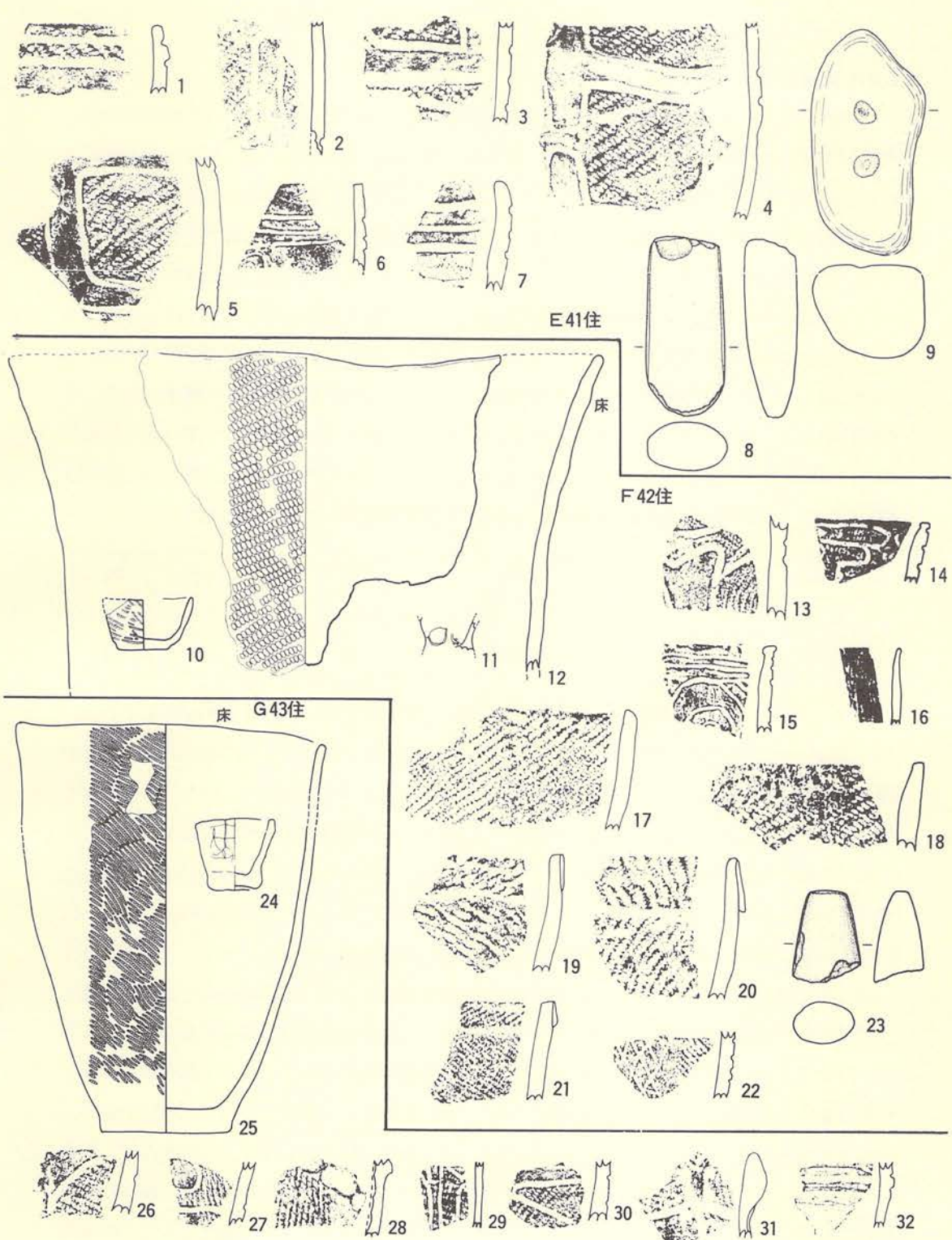
南壁際床上から大形土器の破片(12)が出土した。口縁が外反する器形である。埋土中から磨消文(13・14)や沈線文(15)のあるもののほか、粘土帯を貼りつけその上に縄文を施した複合口縁をもつ土器片が出土している。石斧頭部片(23)も埋土出土品である。

G43住居址(第18図、図版8)

(検出・埋土) 南斜面上部のⅥ層上面の暗色部として確認した。埋土は上下に分けられる。下層には木炭片を少量含む。(平面形) 長径3.6m 短径2.9mの東西に長い楕円形で、主軸は西北西―東南東を指す。(床面) 比較的軟らかく、ほぼ平坦である。(柱穴・周溝等) 検出されていない。(壁) 検出面までの高さは3～34cmで、なめらかに床に接する。(炉) 地床炉が1基、東壁の近くにある。焼土は50cm×70cmの不整形な範囲にあつて、一部分は床面より約10cmの高さに盛り上がる。

(遺物) (第17図の24～32、図版37・58)

焼土の南の床上に粗製土器が1ケ横転していた(25)。そのすぐ脇から複雑な沈線文のある超小形土器(24)が出土した。埋土出土土器片には、磨消文や沈線文が施される(26～32)。



第17图 E41・F42・G43住居址出土遺物

10~12・25 S=1/4
 24 S=1/2
 他 S=1/3

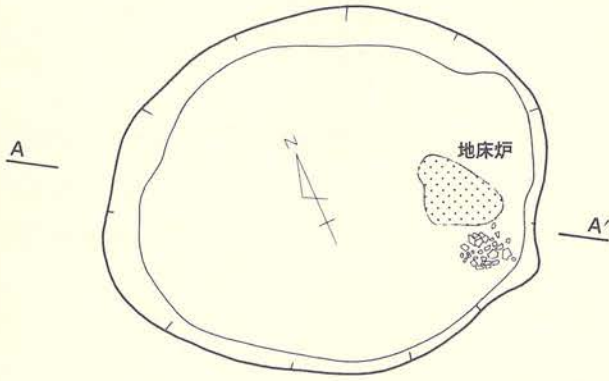
E 45住居址（第18図、図版9）

（検出・埋土）尾根南斜面の最上部のⅥ層上部中のかすかな暗色輪郭によって確認したが、西側削平部分の断面によって予め推定もしていた。埋土は、下部の方がより明色となる砂質土がほとんどであり、色調によって大きく三分される。（平面形）北西側の半分弱が畑地造成によって削られてはいるが、長軸が北西—南東を指す楕円形と推定される。壁の上部が大きく崩れているため原形の計測が不可能であるが、推定値は長径5.9m、短径5.3m程である。壁沿いに、床面より10～25cm高い棚状の施設がある。巾は北西壁で60cm、南へゆくに従って狭くなり、南壁では30cmであるが、途切れることなく一周している。この施設の上面は平らであるが内側に向って、60cmにつき20cm位の割合の傾斜がある。（床面）Ⅵ層の未風化層中にあり、全体的に堅いが、特に北半の棚状施設沿いは、いわゆる肌分れするほどの極めて堅い面が認められた。全体としては北の方が南よりも20cm余り低くなる。大きな凹凸はない。（柱穴・周溝等）壁に沿って、前記棚状施設の中に、柱穴と思われる比較的深い穴が9ヶ検出された。

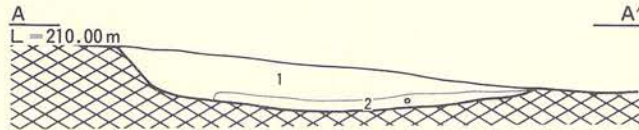
P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	35×40	21×38	23×24	18×22	25×30	20×33	15×22	19×30	20×28
深さcm	29	27	56	32	24	48	37	47	44

P₁とP₂、P₃とP₄、P₅とP₆とP₇は、それぞれ相接しており、その間隔は1.9m前後である。P₈とP₉のうちこの間隔に対応する位置にあるのはP₈である。各箇所における柱穴相互の新旧関係は把握できないものの、最低2期の建物が存在したことが推定される。恐らく8本の柱が円形に並んでいたものと思われる。柱穴以外に10cm位の浅い凹みが3ヶ所にあるが、形態も一定せず性格は不明である。（壁）西側の土層断面では、北端で1.05m、南端で0.80mの高さを測ることができた。しかし、壁の上部は大きく崩れている上に埋土と地山の区別がつきにくく、勾配は不明である。特徴的なことは、前述した棚状施設が壁面下部にあったことである。（炉）一部に石を置いた炉が1基床面中心より少し南壁寄りにあり、その南西40cmのところにも焼土が形成されている。前者は70cm×60cmの歪円形を呈し、焼土は南東側に偏っており最大でも5cmの厚さである。炉そのものは少し凹んでいる。石は南東側にのみ4ヶ、10cm程埋めてある。粘板岩ないし泥岩様の割れ易い石を用いている。他の1基は、地床炉の1種で、形は不定形、30cm×25cmの範囲に高さ4cm程盛り上っている。石置炉の方には木炭片が認められたが、地床炉には認められない。（その他）炉の南東の壁の手前に、長さ41cm、巾35cm、厚さ11～12cmの板状の自然石が、15cm埋められて立っている。また、北壁際の棚状施設を掘りこんで、口縁部を15cm出して大形深鉢が埋めこまれている。これは、柱穴P₁を利用しており、少なくともP₁が廃棄された柱穴であることは確実である。土器中には何もなかった。

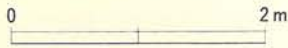
<G43住>



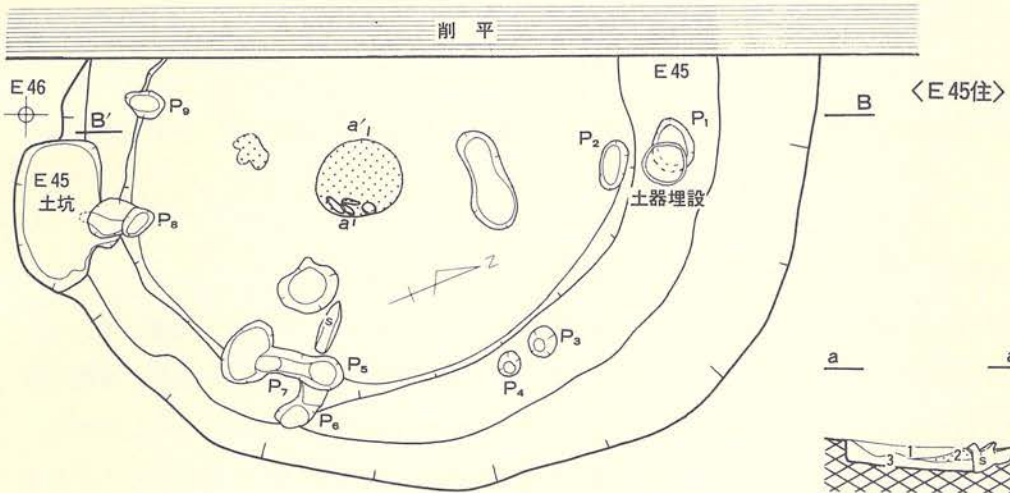
G44



1. 黒～黒褐色 (7.5YR2/1～2/2) 砂質シルト
2. 褐色 (7.5YR4/6～4/4) 砂質シルト (木炭粒を若干含む)



削平



<E45住>

a a'



1. 褐色 (10YR4/6) 砂質シルト
2. 明赤褐色～赤褐色 (5YR5/8～4/8) 焼土
3. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土質シルト

B

L = 207.70m



1. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質
2. 黒色 (7.5YR1.7/1) 砂質シルト
3. 暗褐～極暗褐色 (7.5YR3/3～2/3) 砂質シルト
4. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト

第18図 G43・E45住居址

(遺物) (第20図の1～7、図版37・47)

北壁際の棚状部埋設大形深鉢(2)は、巾2cm弱の複合口縁をもち、上下回転の斜縄文RLが施されるが、縄文の一部は太細2本の合わせ撚りを用いている。2の近くから床上にかけて、刺突を伴う磨消縄文の施された小形鉢(1)が散らばっていた。埋土出土の3は複合口縁である。

G45住居址(第19図、図版9)

(検出・埋土) 南斜面中位のVI層中の暗色部として確認した。埋土は2層に分けられ、下層が若干明色である。(平面形) 長径5.35m 短径4.4mの北西—南東に長い楕円形で、主軸は長径に一致する。(床面) 本来の床面は北東部のテラス状部分の面と思われる。(柱穴・周溝等) 検出されていない。(壁) 検出面までの高さは3～28cmで勾配はゆるい。(炉) 東端に地床炉が1基ある。40cm×95cmの長楕円形の範囲に木炭片を若干含むやや焼きの悪い焼土が広がる。厚さは最大10cm程である。(その他) 床面北西部に、より新しいと思われる土坑が1基ある。

(遺物) (第20図の8～19、図版37・47・48・52・58・59)

炉の北側の床面に、火熱で表面が荒れた土器片がある(8)。また床面中央より北西寄りの床面に石皿の半分(18)があった。これは縁をつくり出している。埋土から、磨消文のある土器片(10～12)、複合口縁土器片(13～15)、完形の石斧(16)、凹石(17)、石皿転用凹石(19)、土偶破片(9)が出土している。

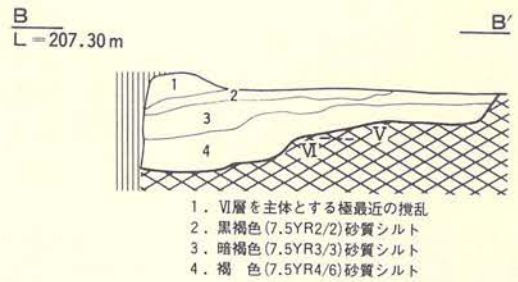
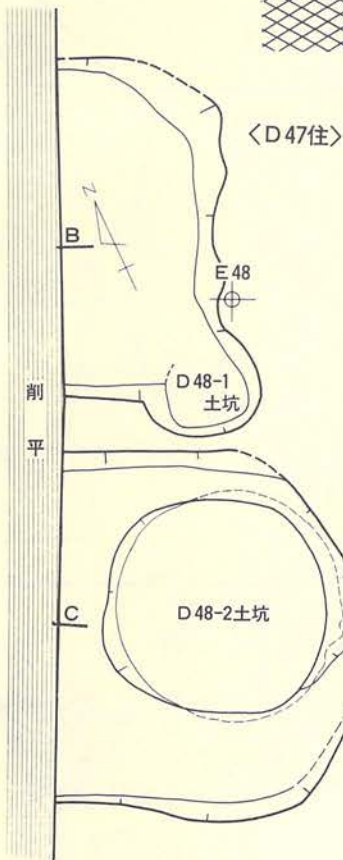
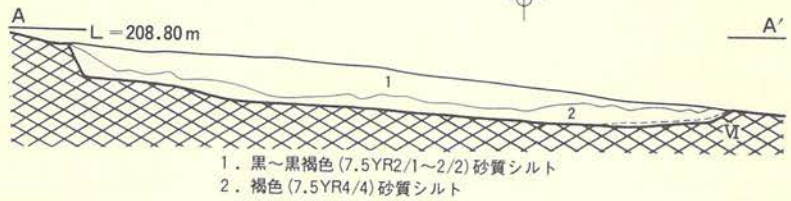
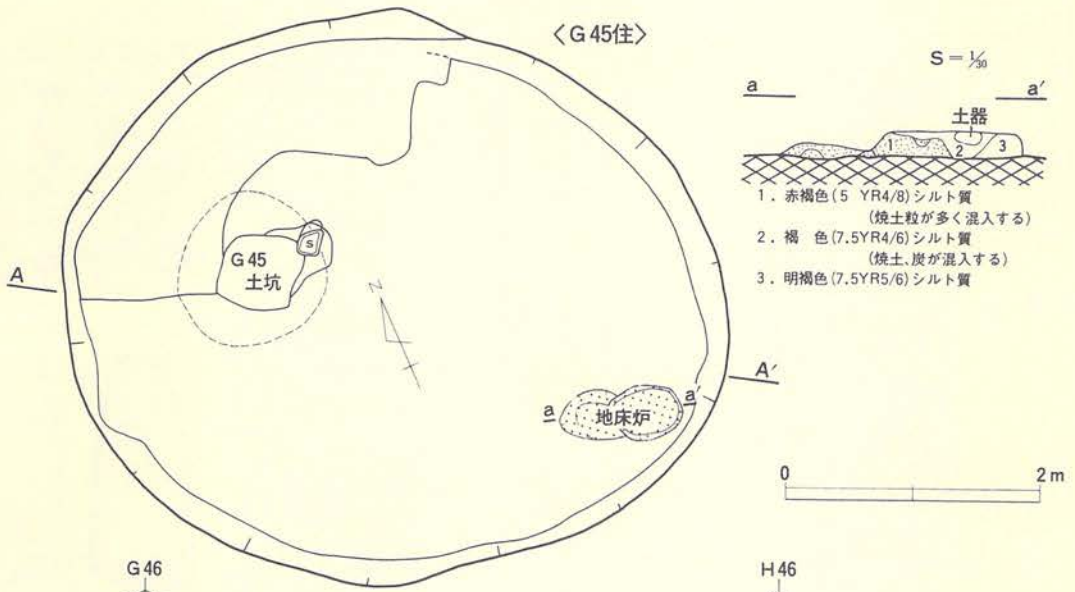
D47住居址(第19図、図版10)

(検出・埋土) 西側土層断面によって確認された、南隅に新旧不明の土坑が重複している。埋土は、下部の方がより明色となる砂質シルトで、色調では三分できる。(平面形) 北西半分は既に畑地造成によって破壊されている。2.65m×1.25m+αの方形を呈している。軸線は、北東—南西又は北西—南東を指す。(床面) VI層中にあり、部分的に極めて硬いところがあるものの、人為的なものかどうかは不明。大体平坦である。(柱穴・周溝等) 認められない。

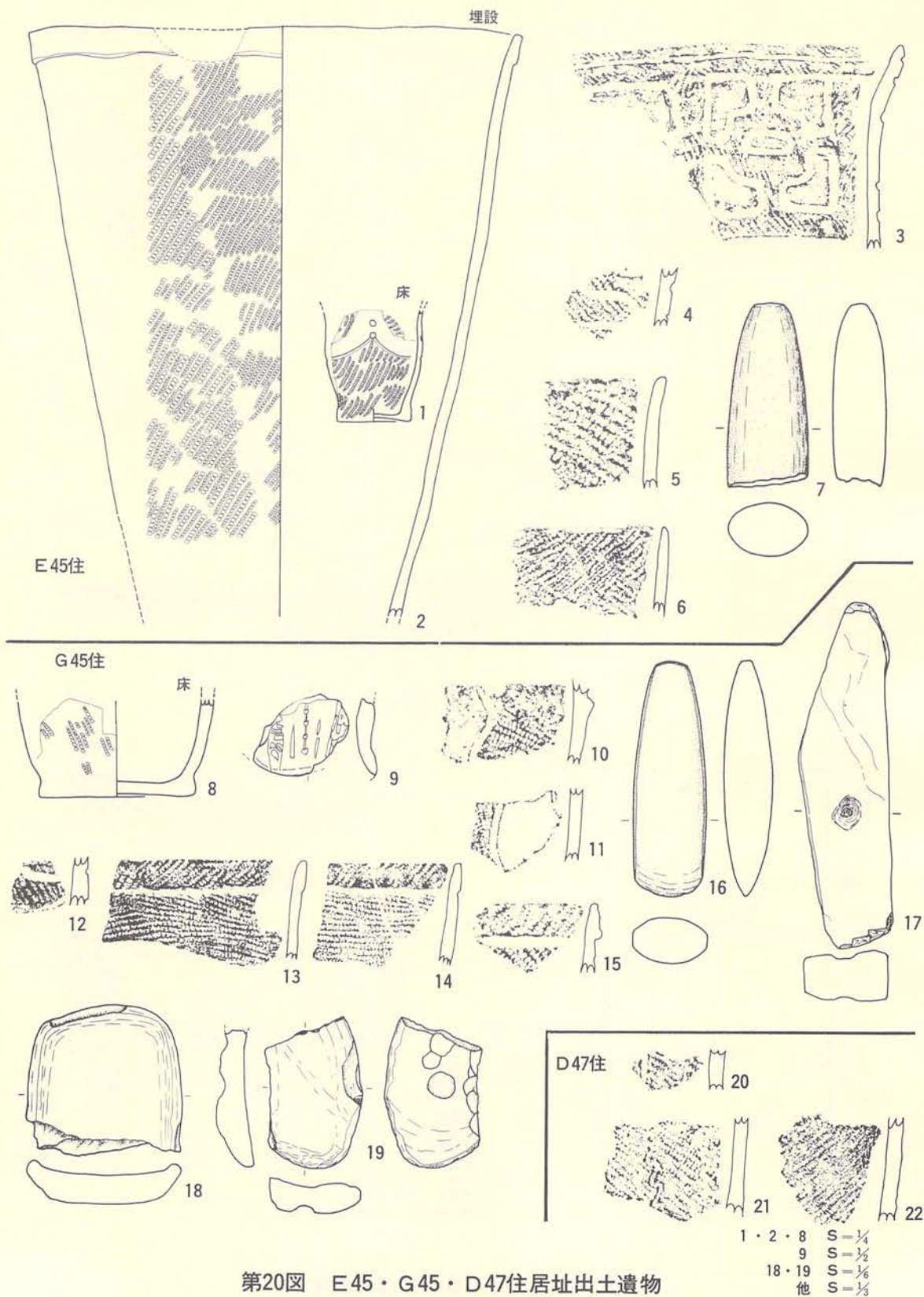
(壁) 西側の土層断面では、北壁がV層より上から掘りこまれていることが明らかに認められた。上開きであり、高さは50cm以上である。壁の上半分は周囲の土と酷似しているため識別困難である。(炉) 残存部分では検出されなかった。

(遺物) (第20図の20～22)

埋土から僅少の土器片が得られただけである。磨消縄文(20)と共に、縦の綾絡文の加えられた斜縄文(21)がある。



第19図 G45・D47・G48住居址



第20図 E45・G45・D47住居址出土遺物

F 47住居址（第21図、図版10）

（検出・埋土）南斜面中位のⅥ層上部で検出した。埋土は上下に分けられ、下層には炭化物を少量含む。（平面形）長径4.9m 短径4.1mの東西に長い楕円形で、主軸は南北である。

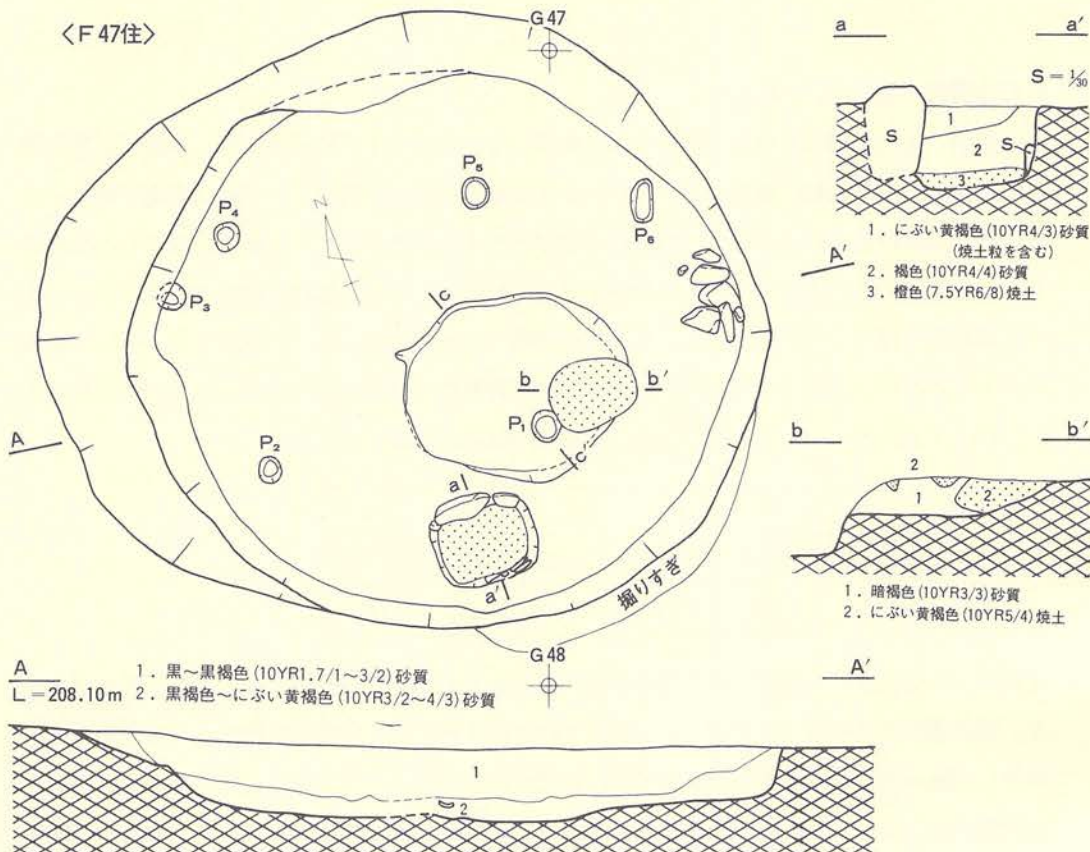
（床面）Ⅵ層の粘土質土の上に、明褐色～暗褐色の土色の異なるシルト質土を混合した土を10～20cmの厚さに貼っている。床面の状態は平坦で堅くしまり、炭化材の細片が散在する。（柱穴・周溝等）柱穴が6ケと土坑が1基、配石遺構が1ケ所検出された。柱穴はP₁～P₆であるが、主柱穴はP₁・P₂・P₄・P₅の4ケが方形に配列されていたと考えられる。P₁とP₂は2.2m、P₄とP₅は2m、P₁とP₅は1.95m、P₂とP₄は1.9m 離れている。

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	20×25	17×20	20×25	15×20	20×20	18×34
深さcm	20	15	15	7	7	19

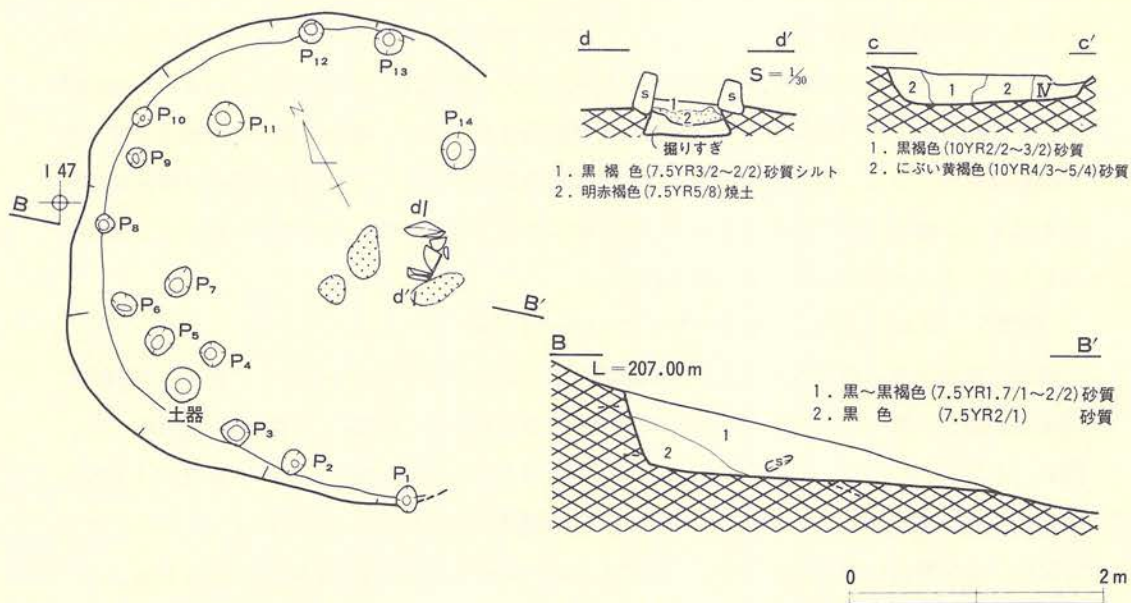
土坑は、床中央部から東寄りの位置にある。1.3m×1.8mの楕円形で深さは20～25cmであるが、壁の境界が不明確で、床面の状態も不規則な凹みがある。貼床の暗色部を人為的な土坑と誤認して掘った可能性もある。配石遺構は東壁に接しており、5ケの石（径20～30cm、粘板岩）を壁際に並べている。この配石は壁際にあること、埋土に焼土などが無いこと、配列の状態等から出入口に関連する遺構と考えられる。（壁）検出面までの高さは38～62cmで、勾配は東～南側は垂直に近く、西～北側は比較的緩やかである。（炉）石囲炉、地床炉が各1基検出されている。石囲炉は東南壁の近くにあって、二字状に向い合って石が置かれ、75cm×85cmの大きさがある。北側の石は50cm×35cm×18cmの板状の石で、板状面を垂直にして床面から30cmの深さまで埋められ、炉の内部全体も同じ深さに掘り込まれていて、埋土の底部には焼土が厚さ約5cm形成されている。地床炉は石囲炉の北東約70cmの位置にあって、形状は75cm×85cmの楕円形を呈する。焼土の厚さは15cmもあり、最下層には若干の炭化物と共に多量の焼けた土器片が含まれている。土器埋設炉の可能性がある。

（遺物）（第22～24図、図版37・38・47・48・51・54）

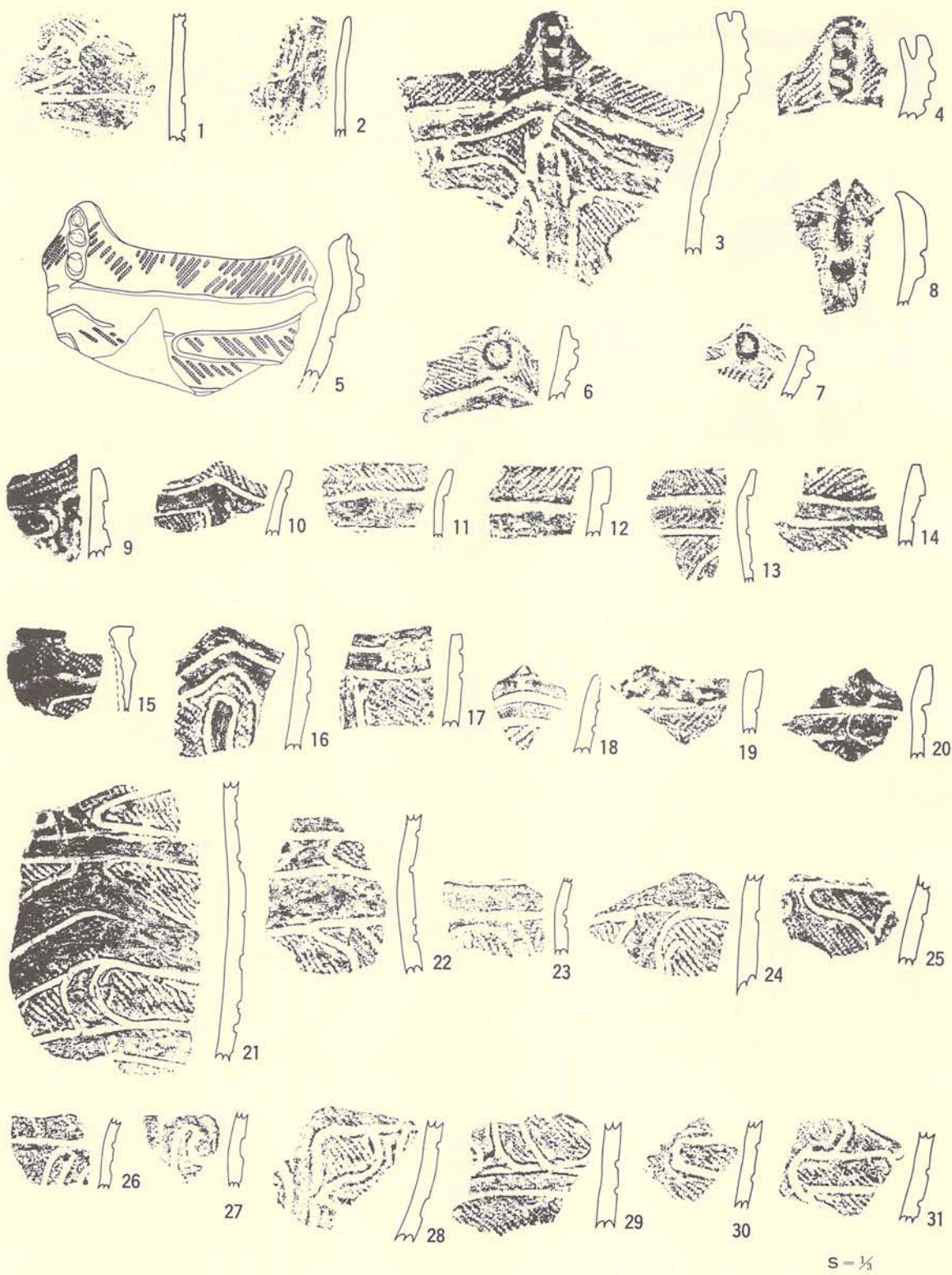
床面北東部分から磨消縄文の土器（第22図の1）と無節縄文地に沈線文の土器（第22図の3）、床面南西部分に固まって石球（第22図の14～16、15と16は同一個体）、石製円盤（同18・19）、凹石（第22図の13）、小形土器（第22図の9）が出土している。埋土からは、多量の土器片と共に、石鏃（第22図の11）、削器（同12）、石斧頭部（第22図の17）等が出土している。土器片には、主に磨消文が施されるが、沈線文もある。粗製土器には複合口縁のものもある。



〈I 47住〉



第21図 F 47・I 47住居址



第23图 F47住居址出土遺物(2)



S = 1/3

第24图 F 47住居址出土遺物(3)

I 47住居址（第21図、図版10）

（検出）尾根南斜面の中位の東側のⅢ～Ⅴ層混合土層中で、石囲炉によって確認した。（平面形）南東壁を欠くが、長径3.7m短径3.1m+ α の歪んだ円形を呈する。主軸は北西—南東を指す。（床面）平坦であり、特に踏みしめられて堅いという部分はない。北西側2分の1はⅥ層が露出する。南東にゆくに従いⅤ層、Ⅲ～Ⅴ層混合土と変る。（柱穴・周溝等）主に壁沿いに、大小深浅さまざまな穴が19ヶ検出された。壁沿いの穴は南西側により多いものの、全体

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉
径 cm	17×21	18×22	18×20	18×20	21×21	16×21	20×26	15×15	16×18
深さcm	33	29	34	43	29	15	33	17	9
P. No.	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄				
径 cm	15×18	29×30	18×20	20×23	25×28				
深さcm	12	35	16	23	30				

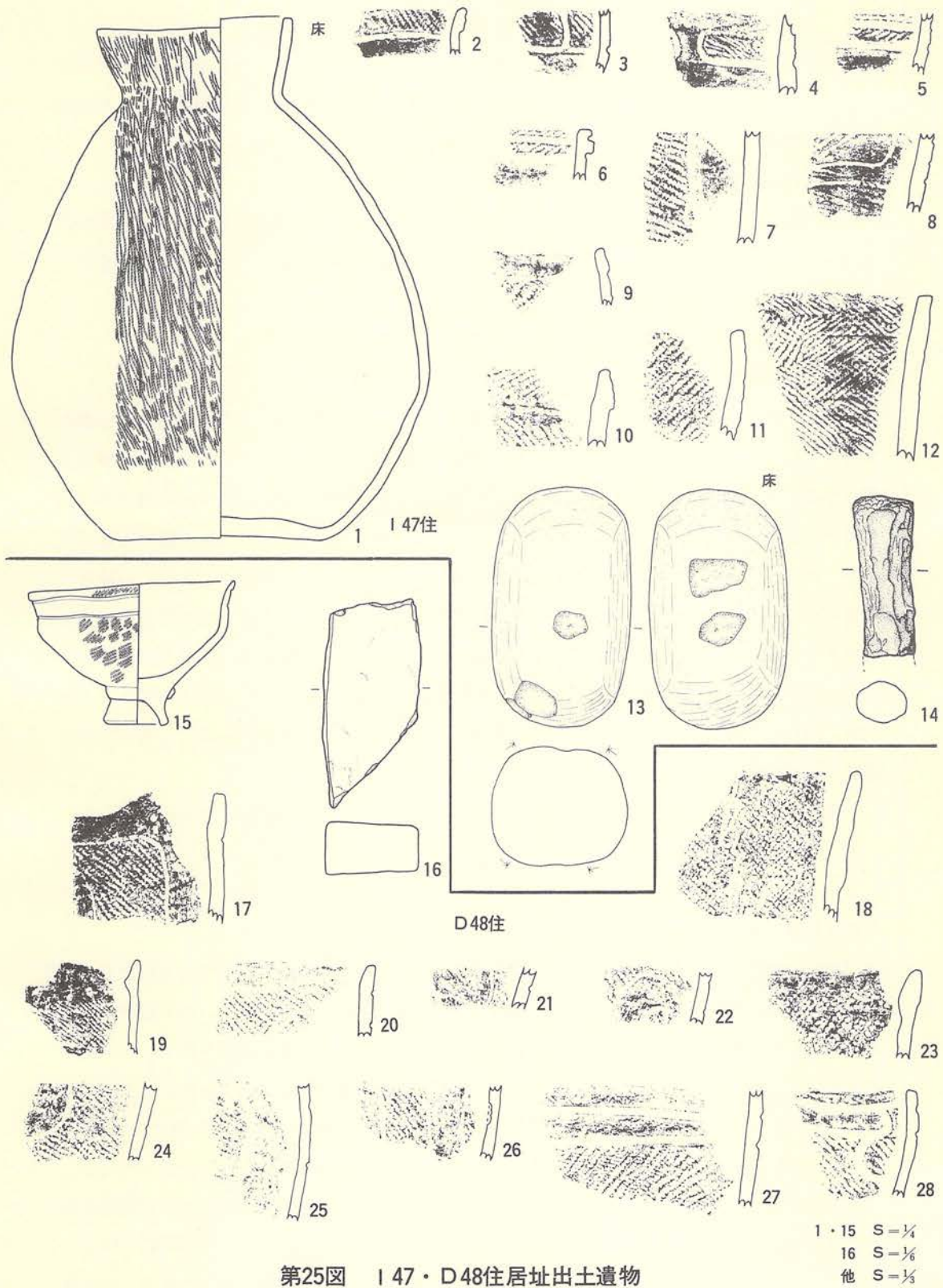
としては不等間隔である。直径20cm未満、深さは30cmを超えるものもある。中心寄りのP₇、P₁₁、P₁₄は主柱穴の可能性が強い。P₁₄とP₁₁は1.8m、P₇とP₁₁は1.4m離れている。この3ヶは主軸（炉の中心を通る線）に対し、ほぼ対照的位置にある。ただしP₁₄に対応すべき柱穴は検出できなかった。（壁）北西壁は65cmの高さで、上開きである。（炉）中心より南東寄り、つまり斜面下方寄りに、コ字形に石を配した炉が1基ある。石囲いは縦35cm、横45cmの規模で住居の中心側が開いている。焼土は凹んでおり、厚さは5cm位である。（その他）炭化材と焼土が少量検出されており、焼失家屋である。

（遺物）（第25図の1～14、図版38・48・51）

西壁際床上に正立していた大形壺（1）は、下膨れの安定感あふれる形をしている。最大胴径のすぐ上に4.5cm×8.5cmの楕円形の破損部がある。内部から打ち欠いたような壊れ方をしている。地文は絡糸体回転による撚糸文であるが、巻きつける巾を広狭交互に繰り返している。北西壁際の柱穴P₁₀の手前から凹石兼用磨石（13）が出土している。埋土から、磨消縄文のある土器片と共に棒状の敲石（14）が出土した。14は石棒の転用品の可能性もある。

D 48住居址（第19図、図版11）

（検出・埋土）D 47住居址の南東に接し、西側土層断面を手がかりに確認した。東半にD 48—2土坑が掘りこまれている。埋土は、西側の土層断面では黒色土の単層である。床から埋土にかけて少量の木炭を含んでいる。（平面形）北西側は畑地造成により破壊されている。長径2.8m、短径2.5m+ α の長円形になると思われる。長軸は、西北西寄りの北西—南東を指す。



第25図 I 47・D48住居址出土遺物

(床面) 斜面上方はVI層中に約30cm掘りこまれている。斜面下方ではVI層最上部にあり浮石が多い。(柱穴・周溝等) 検出されなかった。(壁) 傾きは垂直に近く、北東壁の高さは70cm弱である。南東壁は輪郭不明確である。(炉) 残存部分では確認していない。

(遺物) (第25図の15～28、図版38・49)

北東壁際より上面にのみ粗い擦痕のある石片(16)が出土した。埋土出土品中には、後世のD48-2土坑の埋土に含まれていたものも混じっている。15はD48-2土坑の上部に当たるところから出土したものである。

I 48住居址 (第26図、図版11)

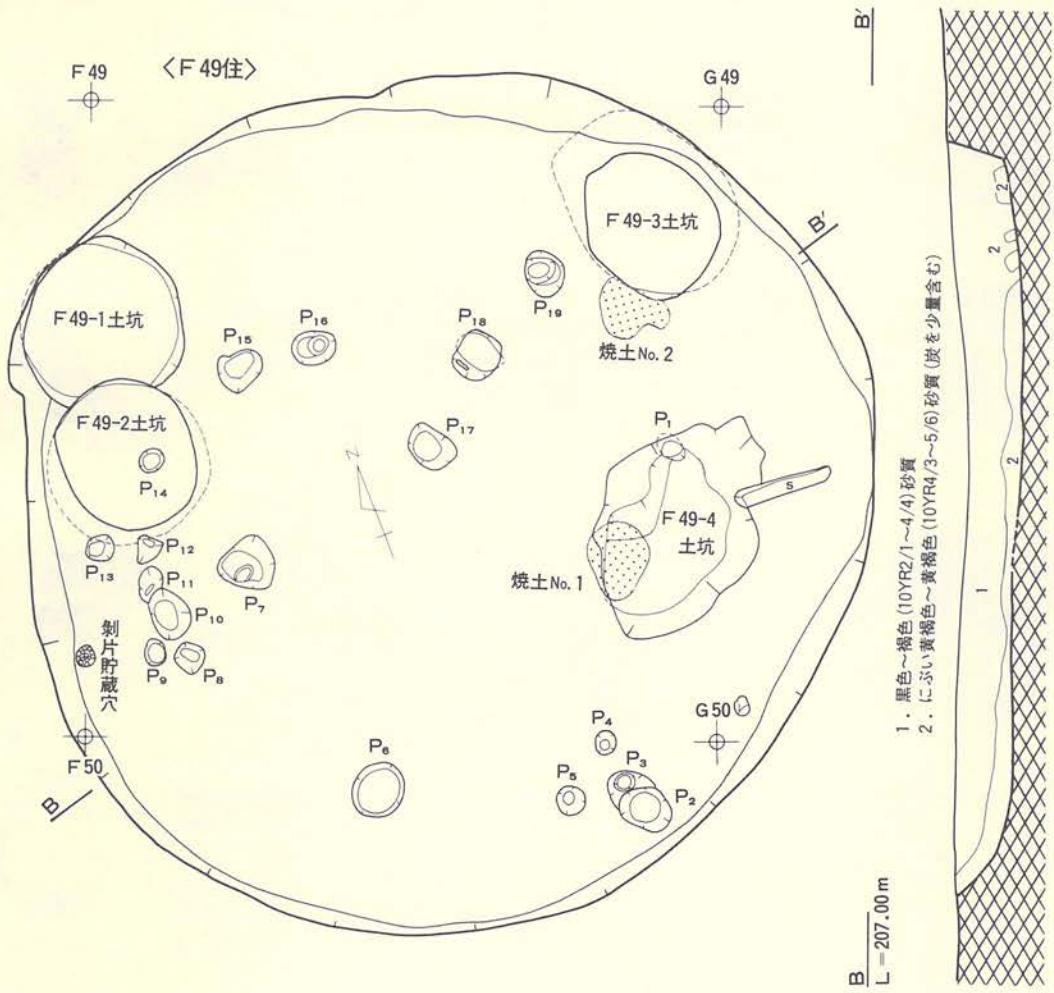
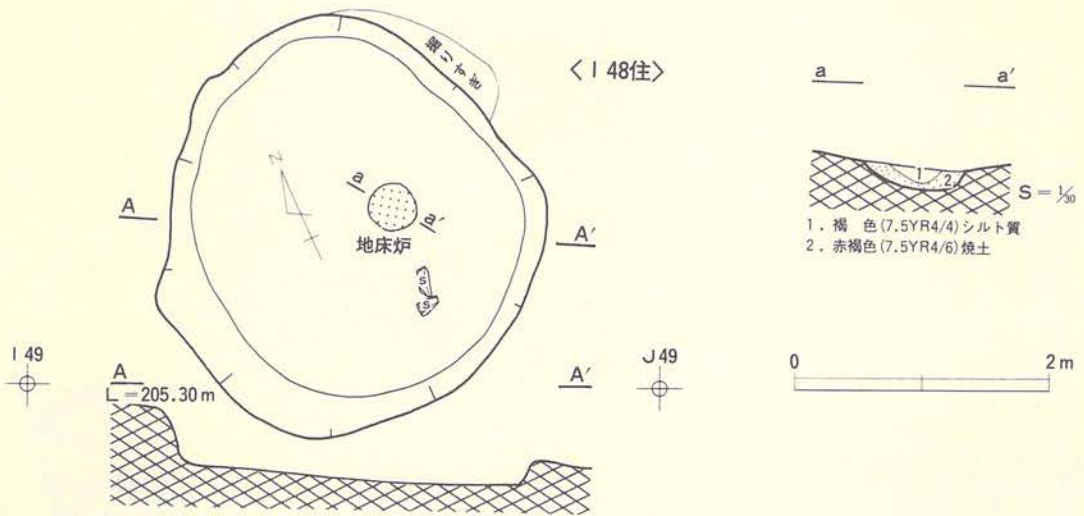
(検出・埋土) 尾根南斜面中位の東側のV層面で確認した。埋土は、中央にVI層土の小塊が多量見られるが、大部分はII～VないしIII～VI層土が混り合った砂質シルトである。三層に大別できる。(平面形) 斜面の上方側を除き輪郭は概して不明瞭である。長径3m短径3mの北東側が少しつぶれた楕円形を呈し、長軸は北北東-南南西を指すようである。(床面) ほぼ平坦で、特に堅いところはない。東側の一部はV層であるが、大部分はVI層中にある。(柱穴・周溝等) 認められない。(壁) 北西壁の下半はVI層を掘りこんでいたので把握できたが、他は不明瞭である。北西壁の勾配は70度、高さは85cm以上になる。(炉) 中央より若干斜面下方寄りに、直径40cmの円形地床炉がある。炉の周りは他よりも少々硬めである。焼土の厚さは7cm前後、凹レンズ状に形成されている。炉の南側40cm離れて、床上8～10cmのところでは2ケの細長い石が検出されたが、火熱の痕跡がない自然石であった。

(遺物)

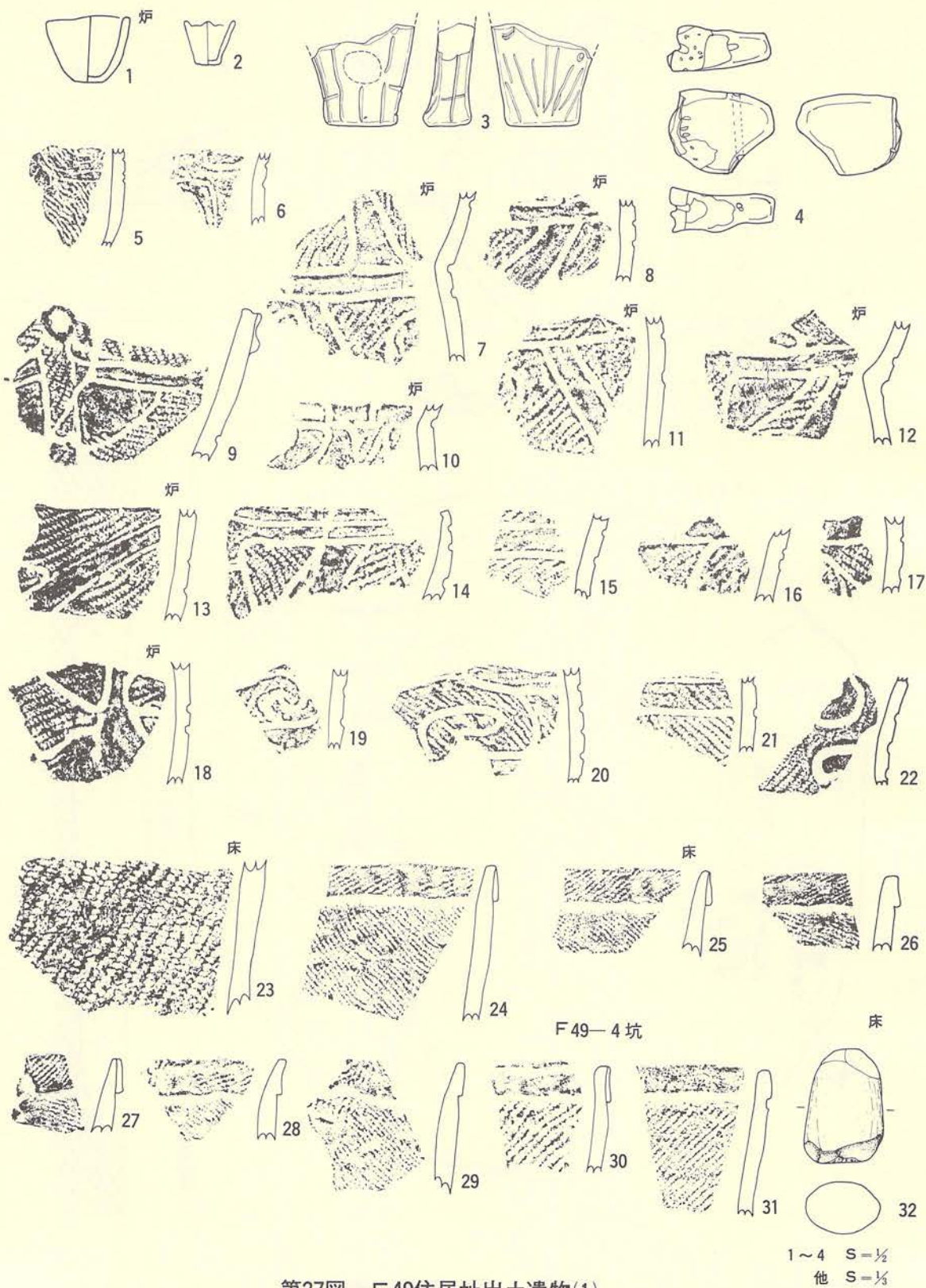
埋土中から縄文土器片が出土している。

F 49住居址 (第26図、図版11)

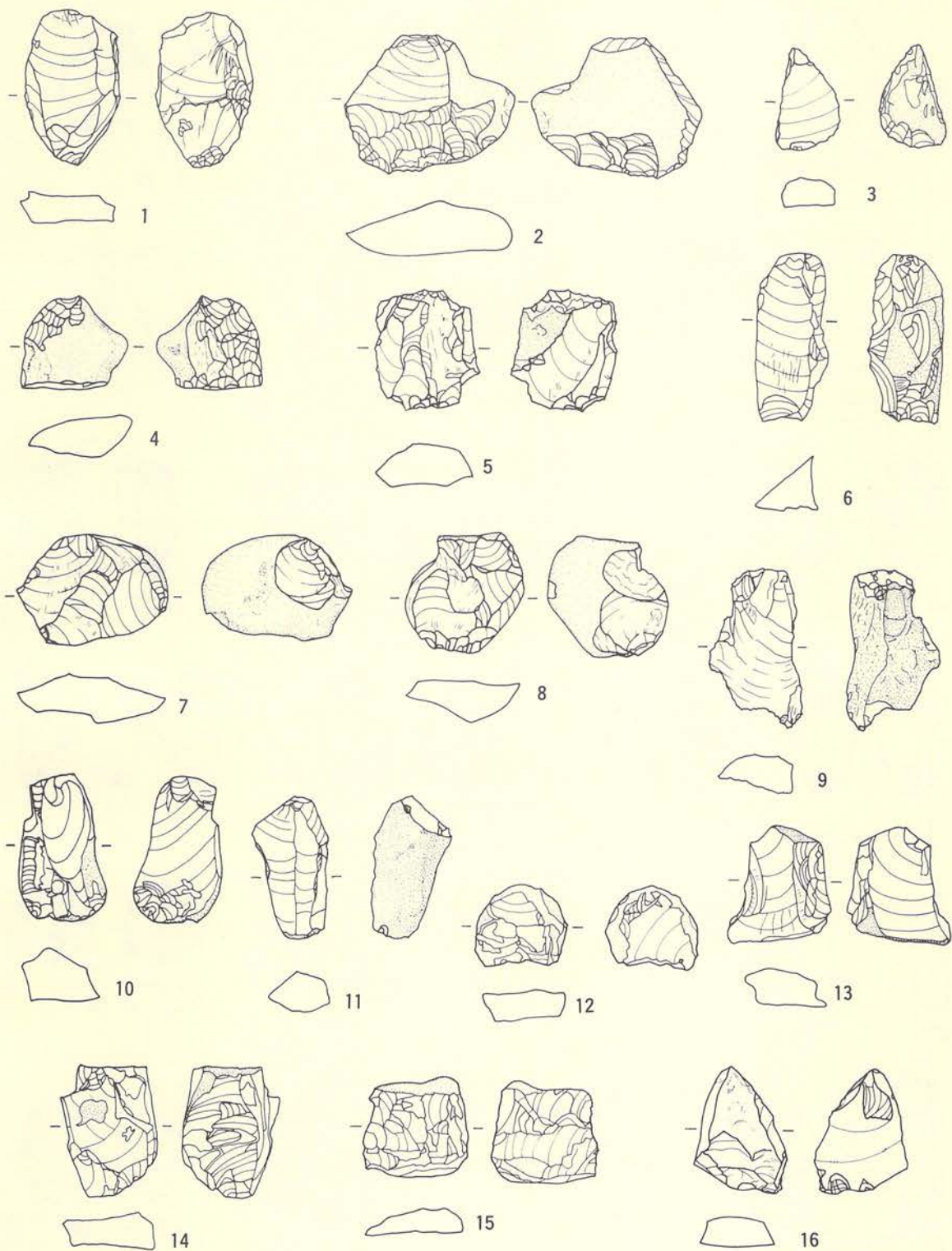
(検出・埋土) 南斜面中位においてVI層上部中の暗色部として確認した。埋土上面に火山灰小塊とII層土の薄層があり、埋土の上層は暗色土、下層は明色土が堆積する。(平面形) 6.7m×6.9mの北東-南西に長い円形で、主軸は北西-南東ないし北東-南西を指す。(床面) VI層中にあるが、北半分は白色土、南半分は黄色土である。大体平らであるが特に堅い面は認められない。(柱穴・周溝等) 大小19ケの穴が検出されたが、規模と位置の点で柱穴にふさわしいものはP₇、P₁₀、P₁₅、P₁₆、P₁₉の5ケ位である。P₁₅とP₁₉を基点に考えて、P₇ないしP₁₀を加えると、五角形ないし六角形の柱穴配置が想定されるが、それにふさわしい柱穴はない。駄目押しでも他の柱穴は検出できなかった。(壁) 斜面上方側の壁は少し不明瞭であった。高さは、北東壁で0.9m、南西壁で0.35mである。(炉) 焼土が2ヶ所にある。その1は東壁



第26図 I 48・F 49住居址



第27图 F49住居址出土遗物(1)



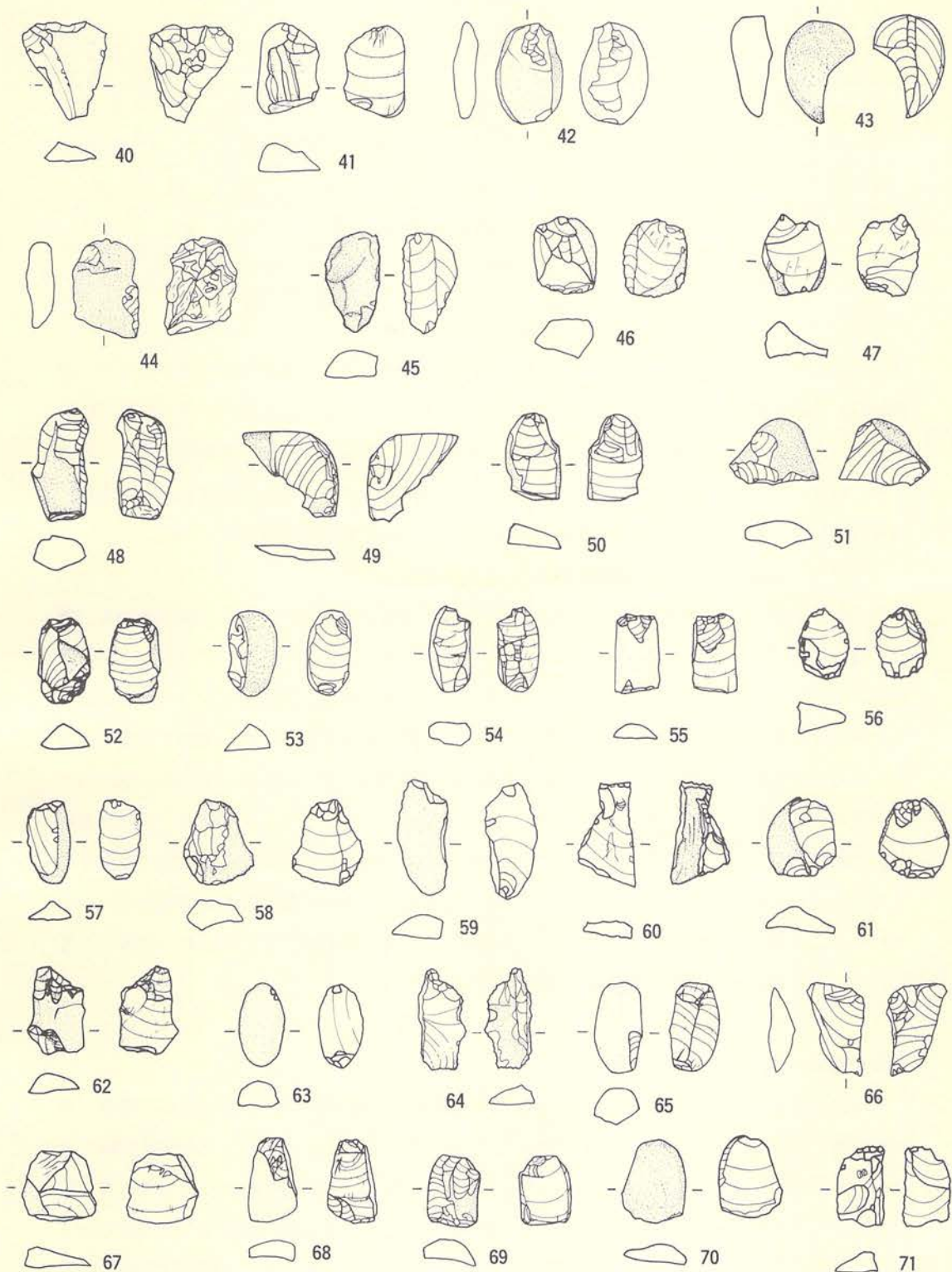
S = 1/2

第28图 F49住居址出土遺物(2)



S = 1/2

第29图 F 49住居址出土遺物(3)



S = 1/2

第30图 F49住居址出土遺物(4)

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀
径 cm	15×21	33×42	14×19	16×19	22×25	40×46	40×45	22×24	18×23	30×43
深さcm	30	58	28	11	15	26	50	32	19	52
P. No.	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃	P ₁₄	P ₁₅	P ₁₆	P ₁₇	P ₁₈	P ₁₉	
径 cm	19×29	20×23	20×22	18×22	26×37	26×36	30×37	27×34	32×38	
深さcm	20	27	21	28	51	37	19	50	56	

寄りの古い土坑(?)の上に少し載っている。50cm×60cmの北東—南西に長い西洋梨形で、厚さ10cm、木灰が多量に含まれ、また多量の土器片が埋もれており、土器埋設炉の可能性がある。その2は北東隅にありF49—3土坑に一部壊されている。45cm×57cmの分銅類似の形で、厚さ15cm、底面がくぼむ。他の遺構と比べた場合、南側の焼土の方が主炉と見なせる。(その他)西壁際に15cm×18cm、深さ4cmの円形の小穴があり、小形の剥片が多数詰っていた。

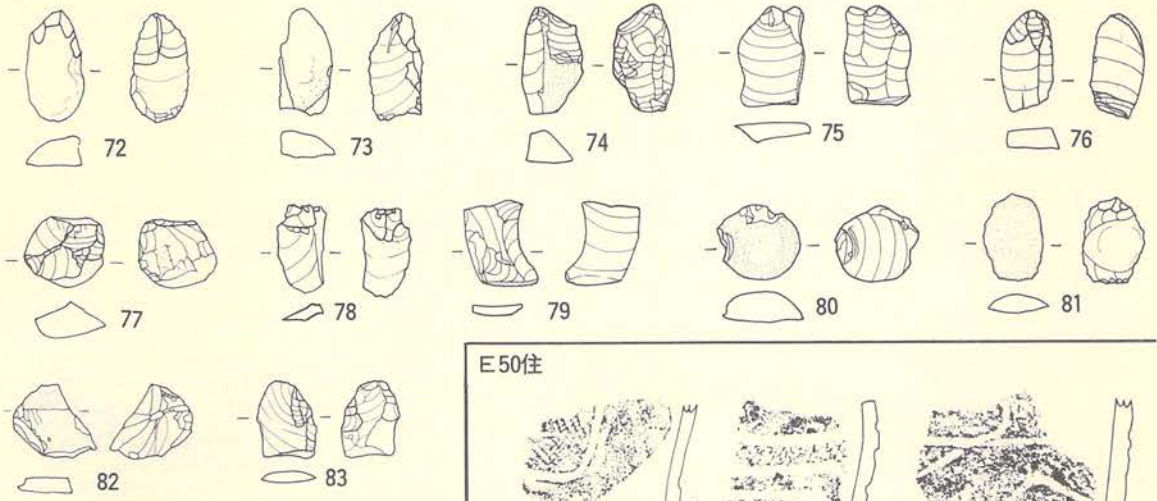
(遺物) (第27図～31図、図版56～59)

焼土No.1中出土土器(第27図の7～13・18)には磨消縄文が施されている。床中央から、複合口縁土器片(25)、縦の綾絡文が加えられる斜縄文土器片(23)が出土している。なお、第27図の1は焼土No.1から、3・4の土偶片は北西区の床近くから、第27図の32の石斧転用敲石は南東区床面から出土した。埋土出土土器片には、磨消縄文と共に縄文地に沈線文を加えたものもある。床面の小穴出土の剥片(第28～30図、第31図の72～83、図版56・57)は、総計73点中完全に調整されているものは僅かに1点(第48図の3)で、エンドスクレーパーと認められる。これ以外には、楔形石器として分類できそうなものが10数点、形態上楔形石器に類似するものが10点程、稜の潰れの認められるものが8点含まれている(石器一覧表備考欄参照)。いずれにせよ、長さ4cm前後の小片が大部分を占め、かつ石の原面を残しているものが少なくないので、このままか、若干の調整後に使用するものであろう。

E50住居址(第32図、図版12)

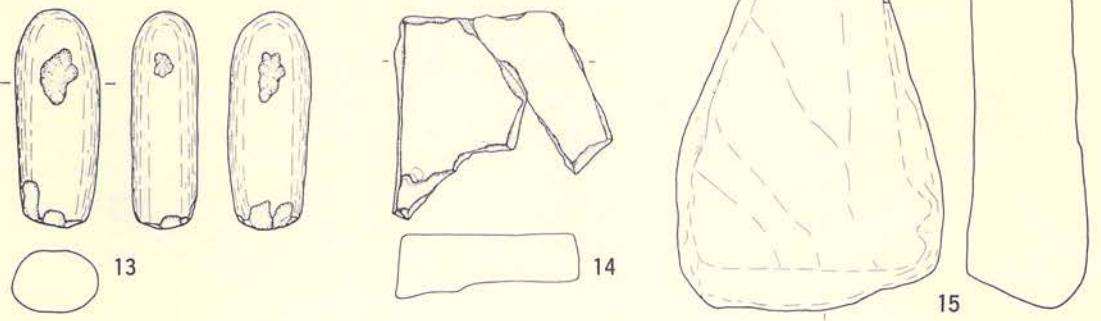
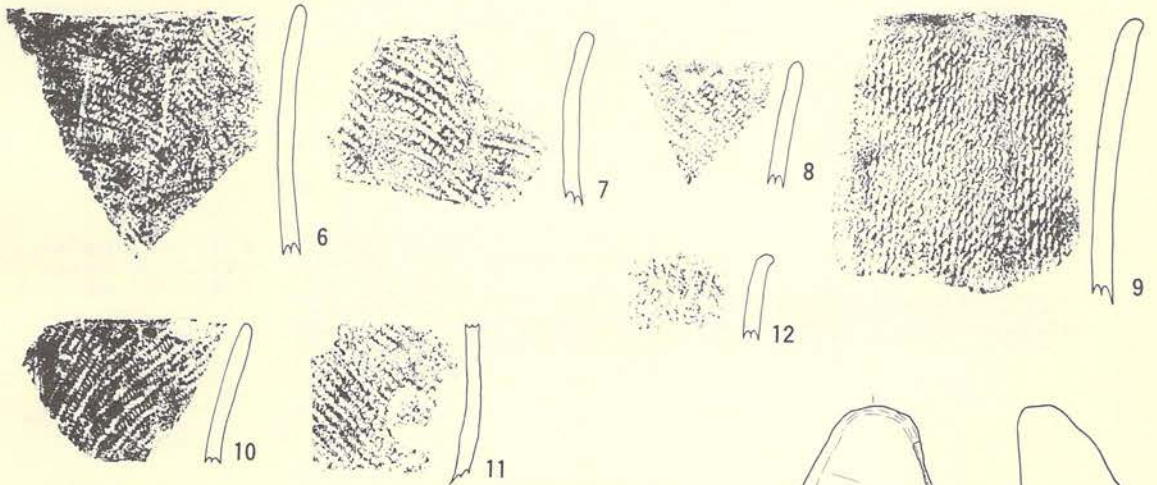
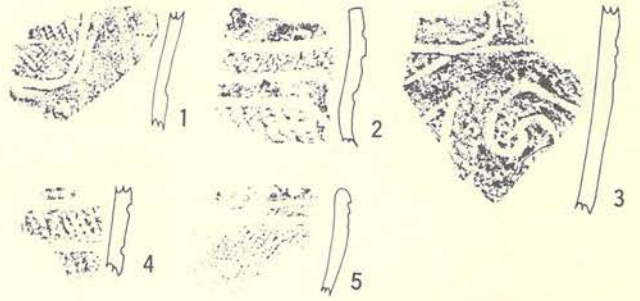
(検出・埋土)尾根筋の南斜面中位において、南の $\frac{1}{4}$ ～ $\frac{1}{2}$ はII層土の存在によって確認したものの他の部分は周囲の土との区別が困難で、壁面を追いかけることによって全体を把握できた。より新しい3基の土坑が北東壁と北西壁に重なる。埋土は、暗色の砂質シルトであり、色調では三分できる。斜面上方からの流れこみが顕著である。(平面形)南西壁が不明確であるが、4.1m×4.2mの方形気味の円形を呈し、主軸は北東—南西を指す。(床面)IV層中に30cmほど掘り下げられており、北東寄りには特に堅くしまっている。全体としては平坦である。

(柱穴・周溝等)柱穴と考えられる穴が6ヶ検出された。柱穴配置は方形である。P₂とP₃、



F 49住

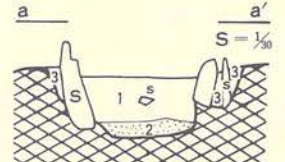
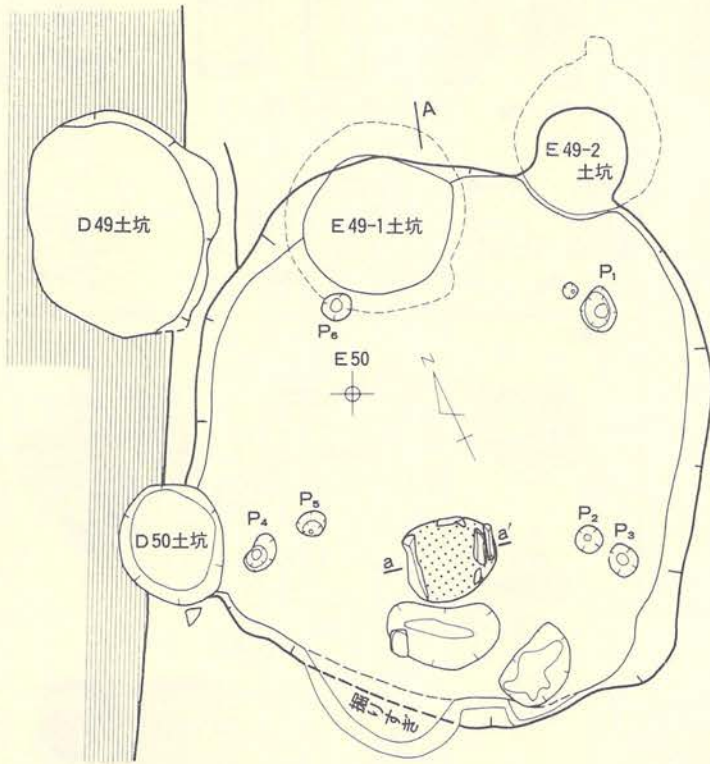
E 50住



72~83 S = 1/2
 14・15 S = 1/6
 他 S = 1/3

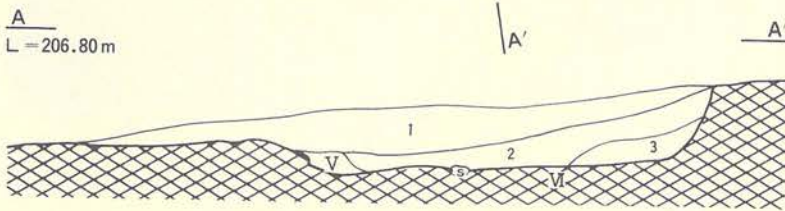
第31图 F 49・E 50住居址出土遺物

< E 50住 >



1. 褐色 (7.5YR4/3~4/4) 砂質シルト (炭を少量含む)
2. 赤褐色 (5 YR4/6) 焼土
3. 褐色 (7.5YR4/6) シルト質

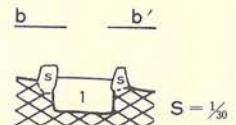
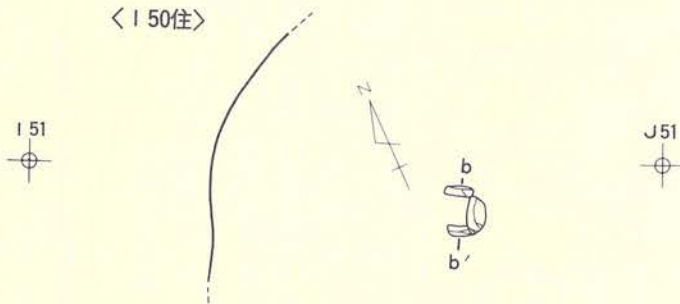
A
L = 206.80m



1. 黒色 (7.5YR1.7/1) 砂質シルト
2. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質シルト
3. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト

0 2m

< I 50住 >



1. 黒色 (2.5YR2/1) 砂質シルト

第32図 E 50・I 50住居址

P₄とP₅は、新旧ないし主副の関係にあるものと思われる。P₁とP₂は1.8m、P₆とP₅も1.8m、P₁とP₃は2m、P₆とP₄は2.05m、P₁とP₆は2.1m、P₂とP₅は2.2m、P₃とP₄は2.9m、P₂とP₃は0.3m、P₄とP₅は0.5mの、中心間距離がある。P₁、P₂、P₅、P₆の4ケが主

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	28×35	22×23	23×26	20×30	19×24	22×24
深さcm	36	21	18	31	36	21

柱穴の可能性が最も大きい。(壁)最も良く残っている北東壁は、ほぼ垂直で66cmの高さがある。(炉)方形の石囲炉が床面中心より1m位南西寄り、つまり斜面下方寄りにある。縦65cm、横70cmの大きさで、南西側には石がない。南西辺に接する床には、巾50cm、長さ90cm、深さ5cmの横長の凹みがあり、その表面は極めて堅い。この凹みの北西端において石を1ヶ認めたが、特に埋めこまれたものではない。焼土は床面より20cm下った面以下に7cm位の厚さに形成されている。

(遺物) (第31図の1～15、図版51・52)

床面出土品はない。磨消縄文と縄文地への沈線文を施した土器片と、口縁が外反し縦の綾絡文を加えた斜縄文ないし撚糸文の粗製土器片が、埋土から出土している。石皿ないし砥石(14・15)、棒状敲石(13)も埋土出土品である。

I 50住居址 (第32図、図版12)

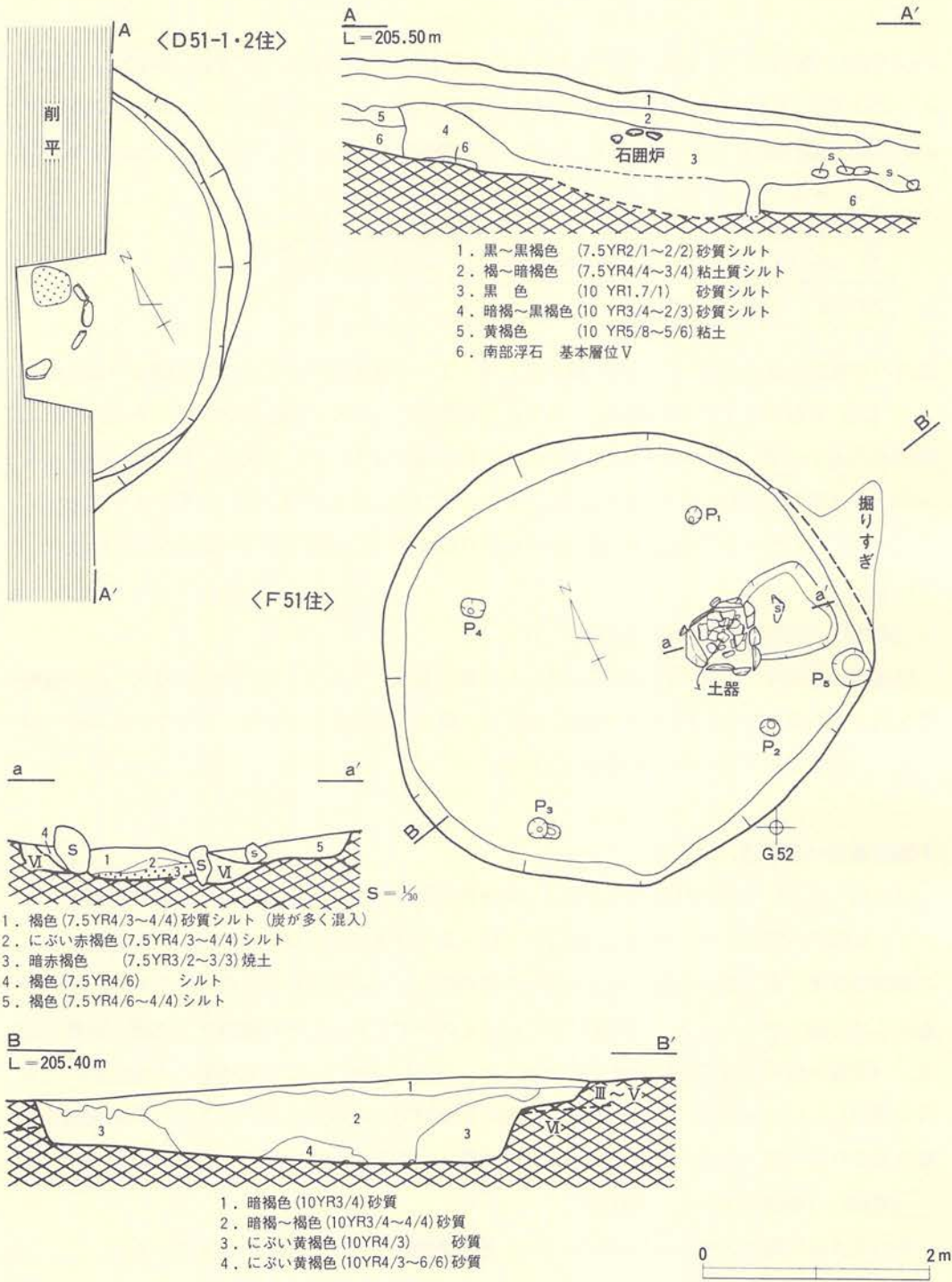
(検出・埋土)尾根南斜面の中頃より、東の沢に半分程下った地点のIII～VI混合土層中において、石囲炉を確認した。埋土は、周辺の土層と全く区別できない。(平面形)輪郭はほとんど把握できず、北西壁の下部と考えられるV層の段が、2m程認められただけである。炉の中心からこの段までは2mある。直径は3m近いものと思われる。炉の軸線は、北西—南東を指す。(床面・柱穴・周溝等)確認できなかった。(壁)前述のとおり北西壁の下端と思われる段を検出したにとどまる。(炉)30cm×40cmの方形炉で、北西辺には石がない。石は火熱の影響をあまり受けておらず、焼土は層を成さず微粉として散在しているだけである。

(遺物) (第34図1～3、図版38)

炉の北1mの床面と考えられる高さから、方形磨消縄文の土器片が出土している。

D51-1住居址 (第33図、図版12)

(検出・埋土)西側土層断面中に石囲炉が露出していた。本遺構の輪郭はD51-2住居址と共通ないしその埋土内に掘りこんだものと思われるが、本遺構の埋土として区別でき



第33図 D51-1・2・F51住居址

る土層は不明である。(平面形)本遺構独自のものは確認できない。(床面)D51-2住居址の埋土上部(Ⅲ~Ⅴ層混合土層)中にあることは事実であるが、床面と確認できるものはない。従って柱穴その他一切不明である。(炉)円形石囲炉の一部のみ残っているものの、石そのものが既に動いており、原位置を保っているとは断定しがたい。一応、検出状況を前提として記すと、直径80cm前後の比較的大形の円形炉である。炉縁石は4ヶ残っている。焼土の厚さは8cm程で、上面は平らである。

(遺物) (第34図4~8)

炉の近くから、磨消縄文やハリコブつき磨消縄文の施された土器片、複合口縁をもつ土器片等が出土している。

D51-2住居址 (第33図、図版12)

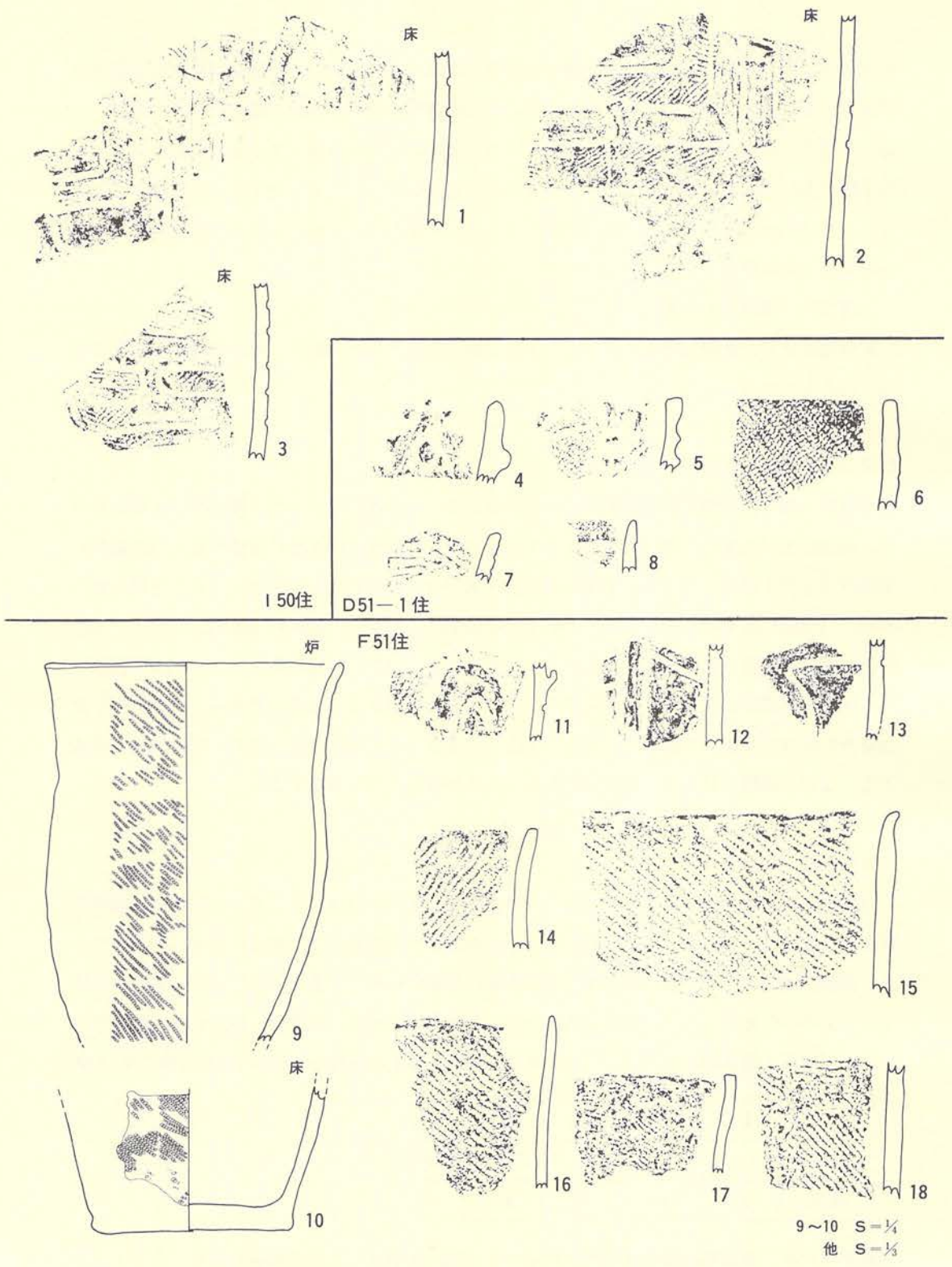
(検出・埋土)西側土層断面中の落ちこみ方によって存在がわかった。埋土は、Ⅴ層土を多く含む黒色土が上部に、Ⅲ~Ⅵ層混合土ブロックを含む暗色土が下部に堆積する。(平面形)全体の3分の1が残っているにすぎないが、復元すると直径約3mの円形となる。主軸方向は不明。(床面)Ⅳ層中にあり、ほぼ平坦で比較的堅い。(柱穴・周溝等)検出していない。(壁)西側土層断面では、ほぼ垂直で高さは45cm以上である。(炉)床面中央に35cm×40cmの卵形に近い焼土が形成されている。上面は平らで硬くしまり、厚さは3cm前後である。(その他)東壁寄りにD51-2住より新しく、D51-1住より古いフラスコ状土坑(D51-4土坑)が重複する。なお、遺物はD51-1住居址と混合したため特定できず省略する。

F51住居址 (第33図、図版13)

(検出・埋土)丘陵南斜面中位のⅢ~Ⅵ混合層中において検出した。埋土は暗褐色~褐色砂質土の4層に分けられる。(平面形)やや歪みのある楕円形を呈し、長径4.3m短径3.9mである。長軸方向は東北東-西南西を指す。(床面)Ⅵ層中にあり、多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で全体にしまっている。炉の北西20cm離れた径60~70cm位の範囲は、極めて堅い状態であった。(柱穴・周溝等)小穴は5ヶ検出され、配置・埋土状況等からP₁~P₄が遺構に伴う柱穴

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
口径cm	15×15	14×17	16×18	15×20	33×35
深さcm	27	40	19	40	32

と考えられる。周溝等の施設は検出されない。(壁)南壁40cm、北壁90cmを測り、床上よりやや急な傾斜で立ち上がる。(炉)東壁寄りに縦70cm、横60cmの台形状の石囲炉があり、底には



第34図 I 50・D51-1・F 51住居址出土遺物

粗製の土器が全面平らに敷きつめてある。埋土は多量の炭を含み、下端部に厚さ5cm前後の焼土が形成されている。炉の東側には縦80cm、横70cm、深さ5～7cmの少し歪みのある台形状の落ちこみがあり、中に縦25cm、横14cm、厚さ8cmの三角形の石がある。横断面は揃り鉢状で底は極めて堅くしまっている。落ちこみ部と炉の深さはほぼ同じであり、形態等から複式炉が退化もしくは簡略化されたものかと考えられる。

(遺物) (第34図の9～18、図版38)

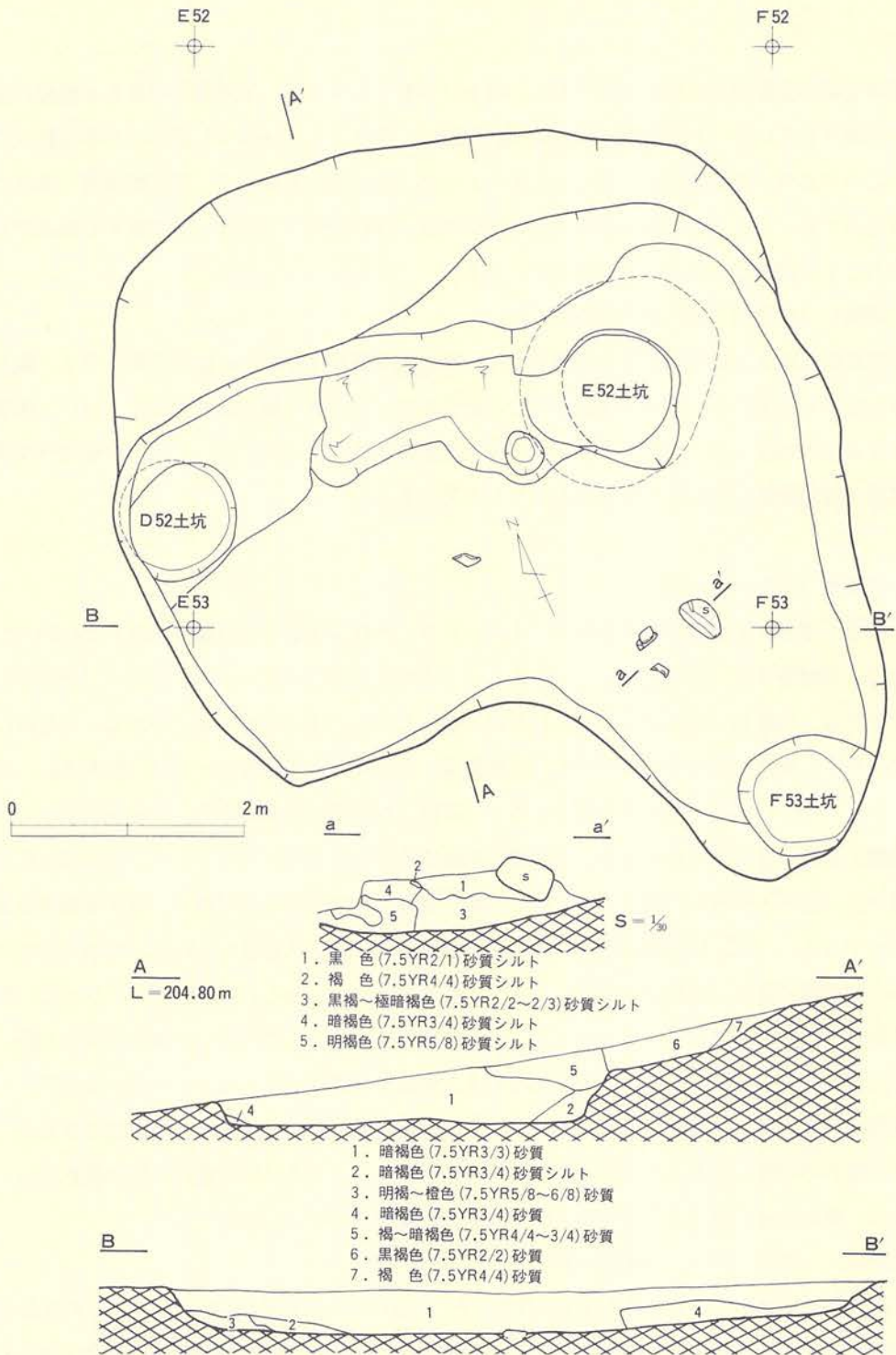
炉址底面に敷きつめられていた粗製土器は、胴が張り頸部がくびれ口縁部が外反する。縄文は縦回転のLRである。南側の床面からヒレ状突起の加えられた磨消縄文土器片(11)、南壁際から土器の底部(10)が出土した。埋土出土土器片には、沈線文をもつもの、口縁の外反する粗製、縦の綾絡文の加わる斜縄文をもつもの等がある。

D52住居址 (第35図、図版13)

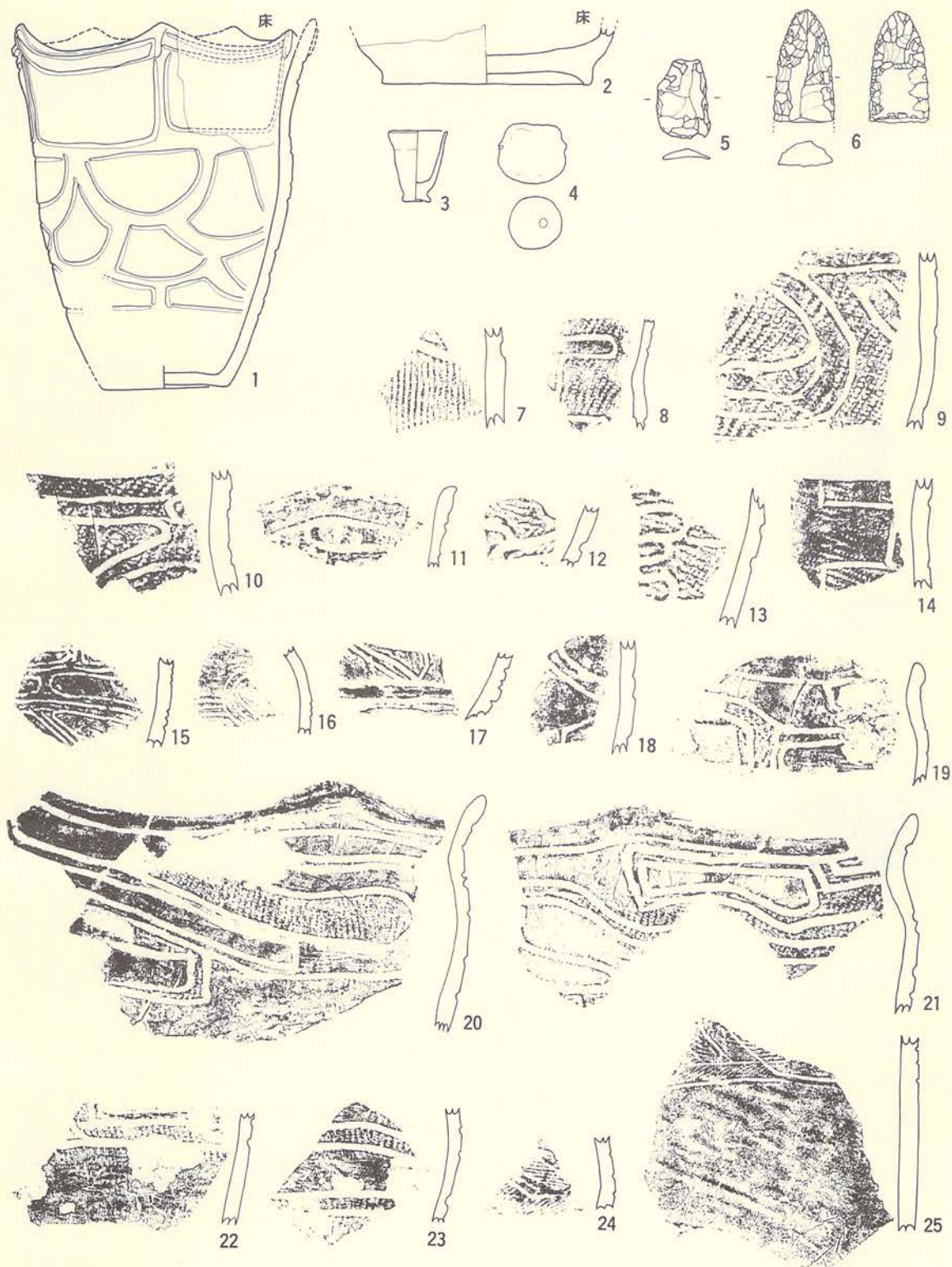
(検出・埋土) 尾根南斜面下部のや、上方にあり、VI層風化層中にII層土が落ちこんでいた。埋土は、北壁寄りに一部明色土が見られるものの大部分は黒色砂質シルトである。(平面形) 最終的には、南東側に張り出しのある長方形となったが、2棟の重複と考えられる。新遺構は南東張り出し部の炉のみが把握できた。旧遺構は、北壁部分が不明瞭であるが、東西3m、南北(推定)1.2～1.3mの細長い方形である。(床面) 新遺構の床面は不明。炉から推定すると、旧遺構より15cm近く高い面となる。旧遺構の床面はVI層中にあり、平らである。特に堅い部分はない。(柱穴・周溝等) 認められない。(壁) 北壁は比較的ゆるい傾斜で、高さは検出面まで60cmである。(炉) 新遺構の炉は、4ケの石で囲った長形状を呈している。45cm×75cmの大きさで東西に長い。東側の石は殊に大きく、長さ45cm、巾25cmもある。他の3ケの石は、隅に置かれているだけで、石囲炉とはいえず、完全に囲っているものではない。焼土の形成は悪く、ほとんど認めることができない。旧遺構内では、明確な炉は確認できなかったが、東壁際に、東西19cm、南北18cmの範囲に、3ケの石がL字形に床に埋もれていた。焼土は確認できなかったが石囲炉の可能性はある。(その他) 床面のほぼ中央に、床下に10cm埋められた長さ25cm、巾20cm、厚さ9cmの自然石があった。巾方向は大体東西を指している。

(遺物) (第36・37図、図版38・47・51・52・54・58)

床面中央から沈線文のある鉢形土器(第36図の1)、高台付土器底部(2)が、少し東寄りの床面から石皿または砥石の破片(第37図の22)が、北西壁際の床面近くから石斧転用敲石(同25)が出土した。磨消縄文の縄文部に沈線を加える特徴的文様のある土器片(第37図の1～6)は、前記鉢形土器(1)の脇の床上10cmのところにあった。埋土出土土器片は、磨消縄文をもつものが顕著であり、複合口縁片も含まれる。他に、土玉(第36図の4)、調整痕ある剝片(同5)、切削

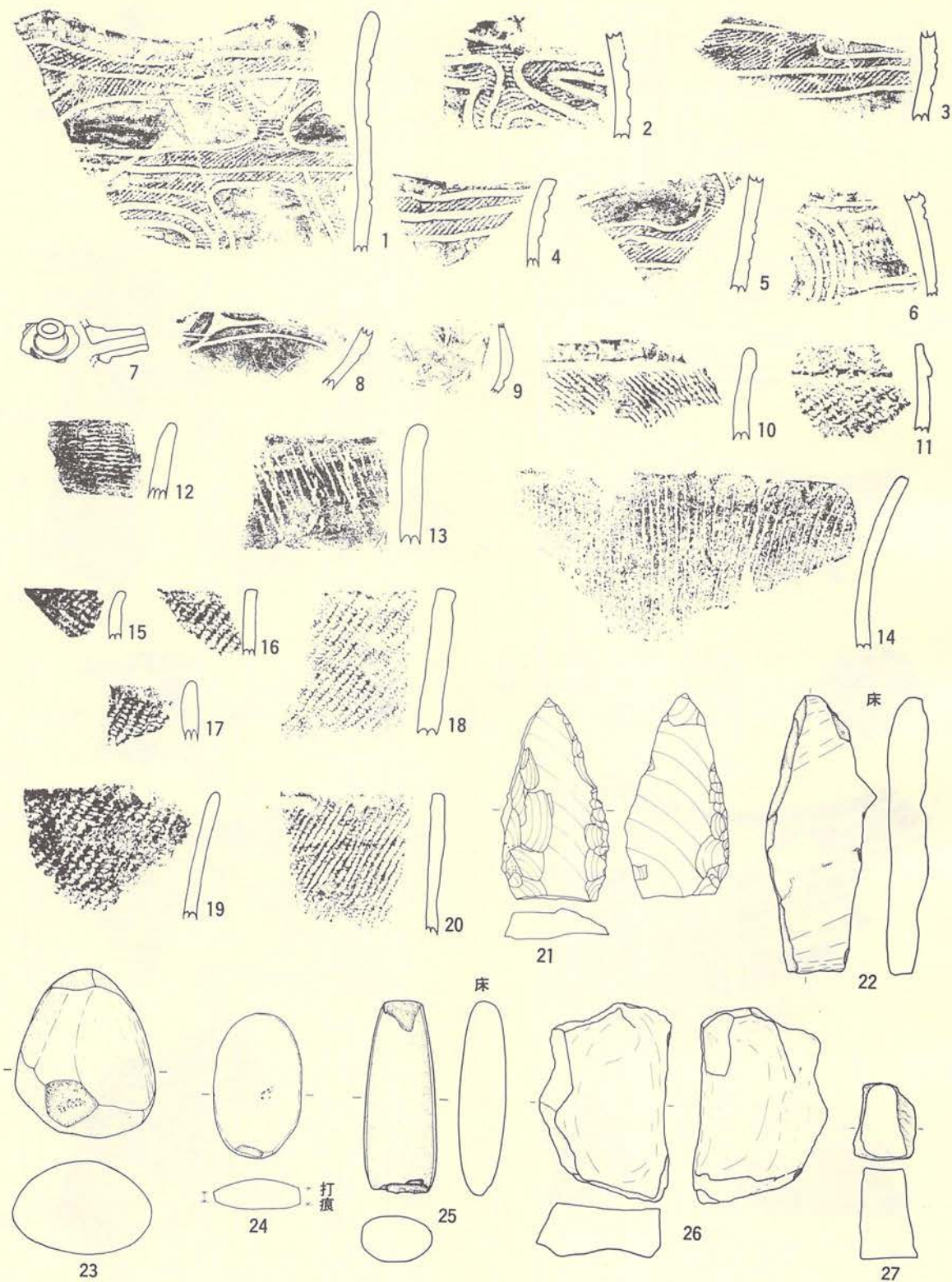


第35図 D52住居址



第36图 D52住居址出土遺物(1)

1~3 S=1/4
 4~6 S=1/2
 他 S=1/4



第37图 D52住居址出土遺物(2)

22·26·27 S = 1/6
 他 S = 1/3

器様石器片(同6、第37図の21)、敲石(第37図の23・24)、研磨痕ある石片(27)等が埋土から出土している。なお、新遺構(石囲炉)に伴う遺物としては、無文地に沈線文の施された注口土器片(第37図の7～9)がある。

I 52-1 住居址(第38図、図版14)

(検出・埋土) 南斜面下位の少し東寄りの地点で、IV～V層混合土中の暗色部として確認した。埋土は単層に等しい。(平面形) 4m×4mの胴張り方形で主軸は北西—南東を指す。(床面) 北西側では堅くしまった粘土質土、中央付近は浮石の混じる暗褐色砂質土、南西壁付近はV層が露出している。床面の状態は炉の周辺から中央付近がやや低く、南西壁に接する部分は段差があって高くなっている。(柱穴・周溝等) 柱穴が4ケと土坑が1基検出された。柱穴の配列は方形である。P₁とP₄は1.8m、P₂とP₃は1.75m、P₁とP₂は1.8m、P₃とP₄は2.1m 離れている。P₁(20cm×20cm、深さ34cm)、P₂(25cm×30cm、深さ25cm)、P₃(16cm×18cm、深さ45cm)、P₄(18cm×88cm、深さ47cm)。(炉) 石囲炉が1基、南東側に片寄った位置に設けられている。50cm×60cmの方形に石を配している。炉縁石は板状の粘板岩とチャートが用いられており、火熱により脆くなっている。炉の上部には炭化物が残り、焼土は8cm位の厚さがある。

(遺物) (第39図の1～16、図版49・52)

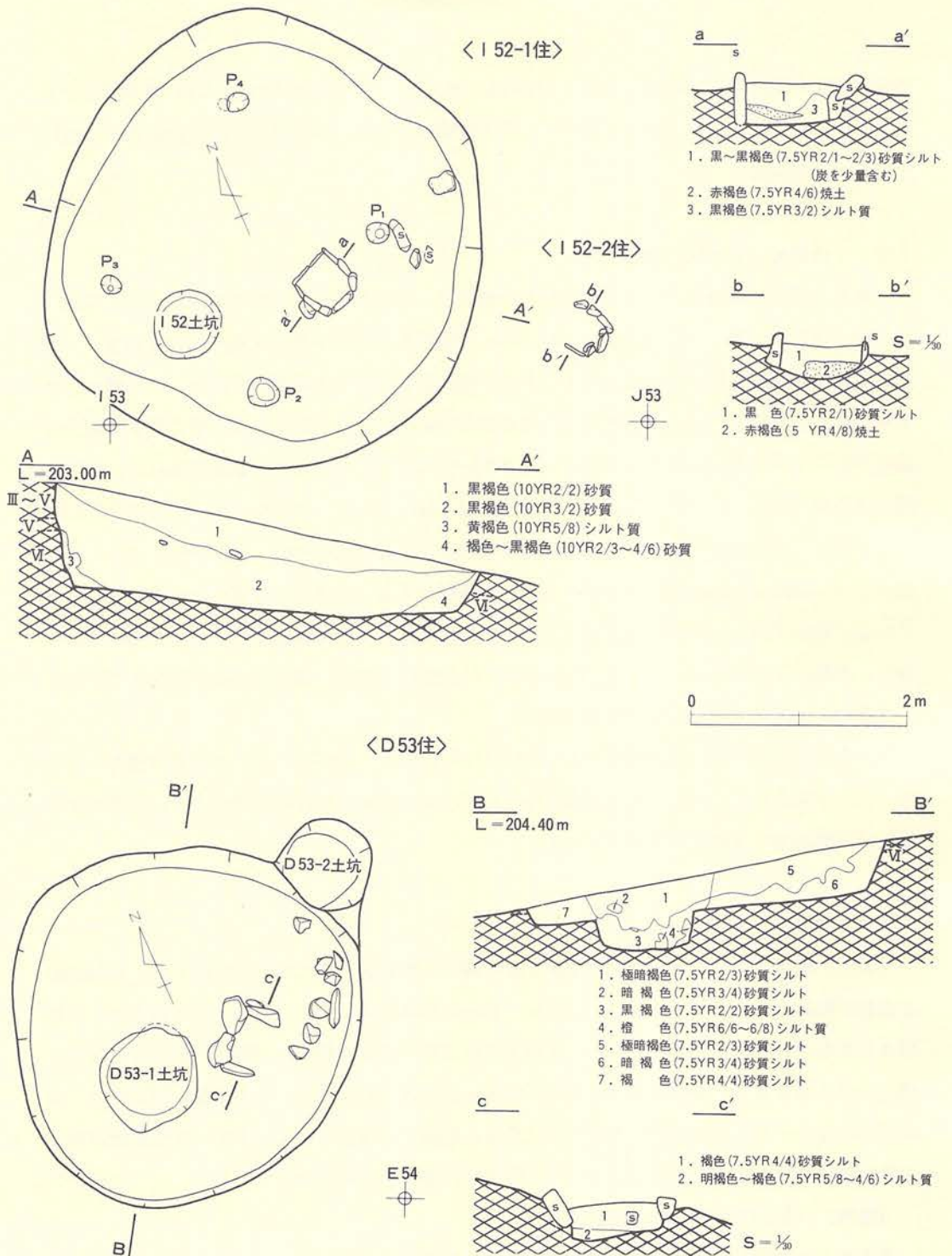
炉の南東辺の上から土器の底部(1)、柱穴P₁の東に接して台石(16)、その東の壁際から石皿(15)が出土した。台石の表裏両面の中央付近には、細かい敲打痕が集中する。埋土出土土器片には磨消文と沈線文が施されている。

I 52-2 住居址(第38図)

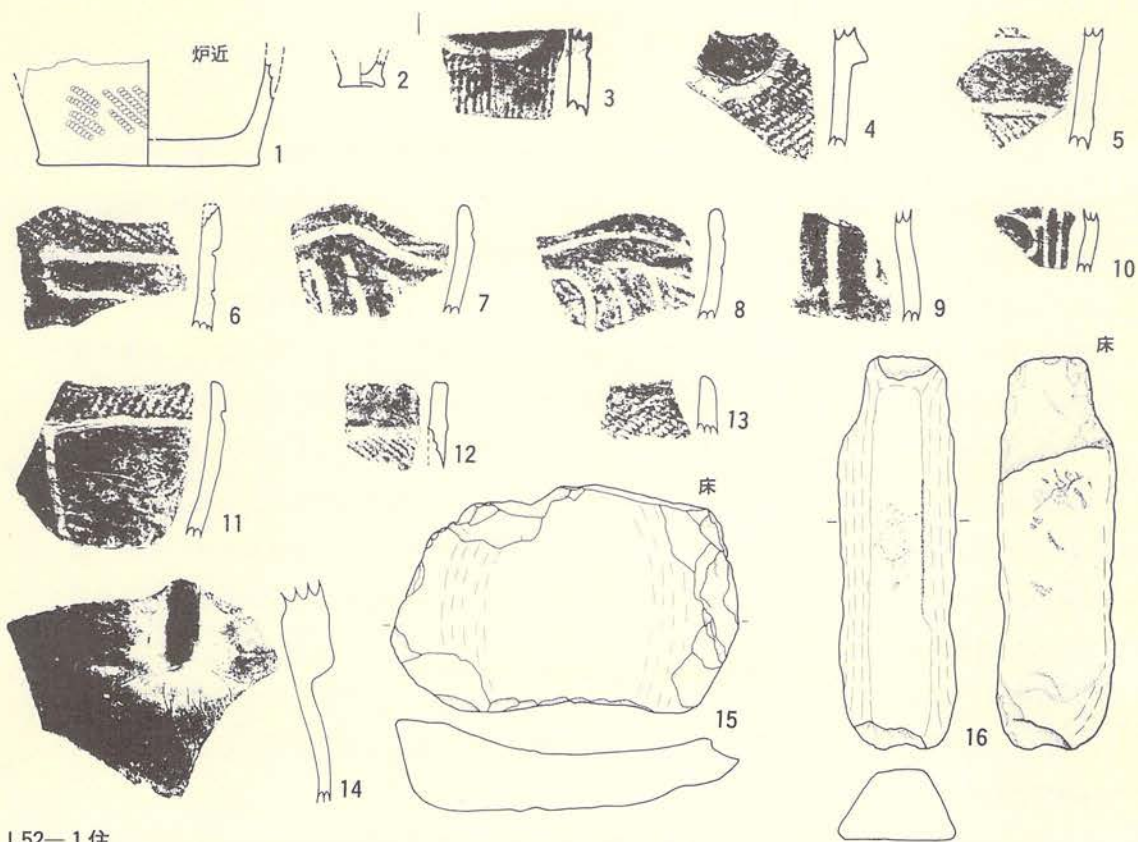
(検出・埋土) I 52-1住居址の南東1mのIII～V層混合土中において確認した。(平面形) 北西側が開放されており、6ケの石が46cm×46cmの馬蹄形状に並ぶ。うち1ケは砥石として使用されたものか研磨痕が認められる。主軸方向は北西—南東を指す。(埋土) 焼土は、床面と推定される高さより7cm位下がった面以下に10cm弱形成されている。(床・壁) 炉以外は一切確認できなかった。(その他) I 52-1住居址と重複する位置にある。I 52-1住居址の埋土に変化が見られなかった点から、I 52-1住居址の方がより新しい。

(遺物) (第39図の17～22、図版53・54)

確実なものは砥石として使用された炉縁石(22)がある。やや不確実ながら埋土出土として考えられるものとしては、沈線文および磨消縄文のある土器片(17～20)と石鏃(21、未成品?)がある。

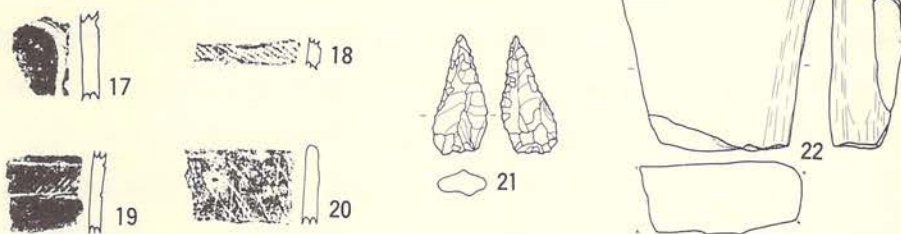


第38図 I 52-1・2・D53住居址



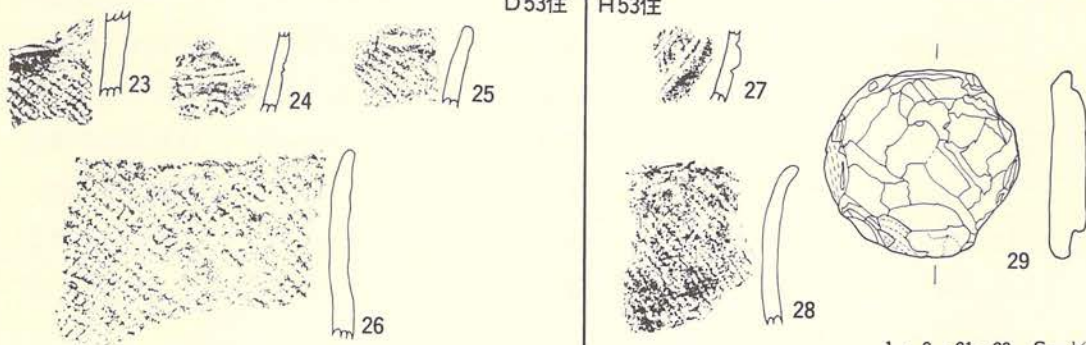
I 52-1 住

I 52-2 住



D53住

H53住



1 · 2 · 21 · 29 S = 1/2
 15 · 16 · 22 S = 1/6
 他 S = 1/3

第39图 I 52-1 · 2 · D53 · H53住居址出土遺物

D53住居址（第38図、図版14）

（検出・埋土）南斜面下位のⅢ～Ⅵ混合層からⅥ層上面で検出した。埋土は全体に炭が混入する極暗褐色～褐色砂質シルトの3層に分けられる。（平面形）少し歪みのある円形を呈し、長径3.45m、短径3.35mである。長軸は北東—南西を指す。（重複）D53—1・2土坑と重複し、土坑が当遺構を切っていることから新旧関係は（新）土坑、（旧）D53住居址となる。（床面）Ⅵ層中にあり、南側がやや窪みを呈すほかは、ほぼ平坦である。また床上には、多量の炭化材・炭・焼土粒が散在することから焼失家屋と考えられる。東壁際には長さ20～35cm、巾10～15cm大の石が8ヶ床上にある。（柱穴・周溝等）柱穴と周溝は検出されない。（壁）高さは東壁33cm、西壁22cm、南壁15cm、北壁36cmで、床上より緩やかな傾斜で立ち上がる。（炉）遺構中央より東南東寄りに縦70cm、横45cmのコ字状を呈す石囲炉がある。石は長さ30～35cm、幅10～20cm大のものを4ヶ使用し、石質はチャートである。下端部は焼土粒が僅かに認められるだけで、層状に焼土は形成されない。

（遺物）（第39図の23～26）

埋土から磨消縄文のある土器片と、外反する粗製口縁片が出土しただけである。

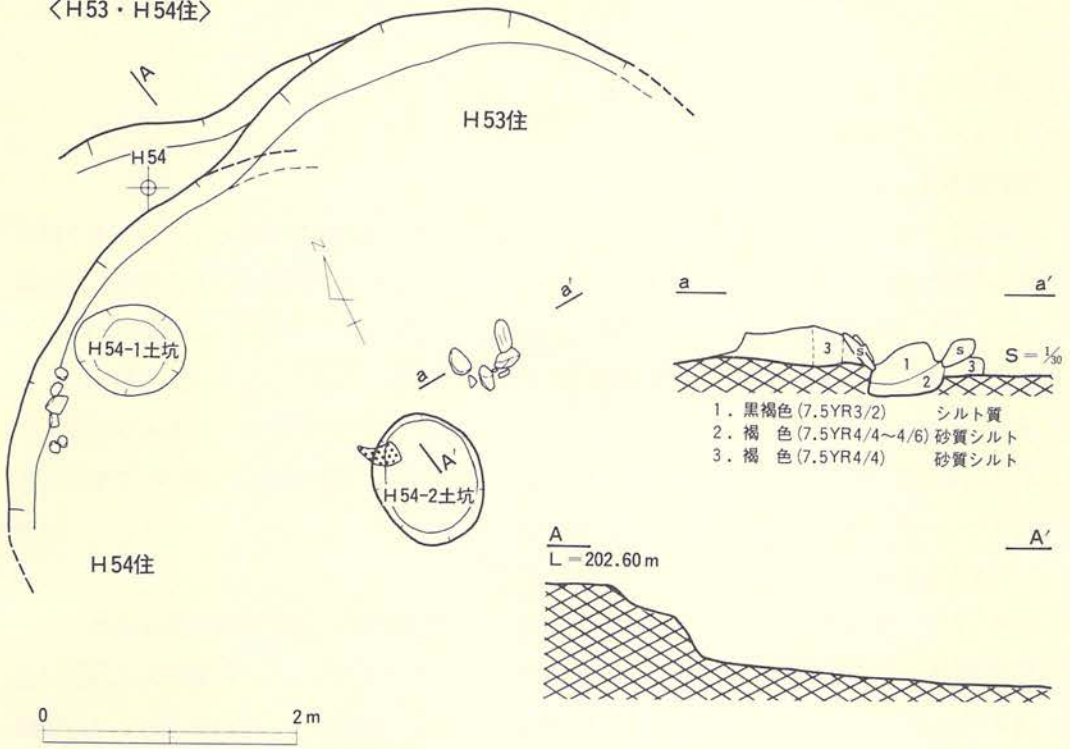
H53住居址（第40図、図版15）

（検出・埋土）尾根南斜面下部の東側において、Ⅲ～Ⅵ層混合土中において、まず石囲炉を確認し、周囲を掘り抜けて北壁と思われるⅤ層の落ちこみを検出した。埋土は、少し軟らかい黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルトの単層。周囲の土とほとんど同じである。ただし、炉の周辺は少し明色の暗褐色～極暗褐色(7.5YR3/3～2/3)である。（平面形）炉は、北が開いたコ字形の石囲炉で、東西55cm、南北45cmあり、焼土は不明確である。炉縁石は外傾するように据えられている。炉と北壁の下部と思われるⅤ層の落ちこみとは、2.2m離れており、北壁から推定される輪郭は直径4m位の円形状を呈し、炉は中心より少し南に寄るようである。主軸は南北を指す。（床面）確認できなかった。（柱穴・周溝等）いずれも検出されなかった。（壁）前述のとおり北壁のみ確認した。下部はⅤ層まで掘りこんでいる。（その他）炉の東側10cmの位置に3ヶの自然石が南北に相接して並んでいる。最大のは長さ40cm、巾33cmである。これらの石の下面はⅤ層より10cm上方であるが、ほぼ同一面に並ぶところからみると、本住居址の床面に並べられたものと考えられる。中央の1ヶは2つに割れている。3ヶとも火熱痕、使用痕、加工痕のいずれも認められなかった。（その他）H54住居址と重複するが、新旧関係は不明である。北壁の下端がほぼ同じ高さにあり、仮に床面も同一の高さであるとすると、石囲炉が残っている点から、H53住居址の方が新しいことになる。

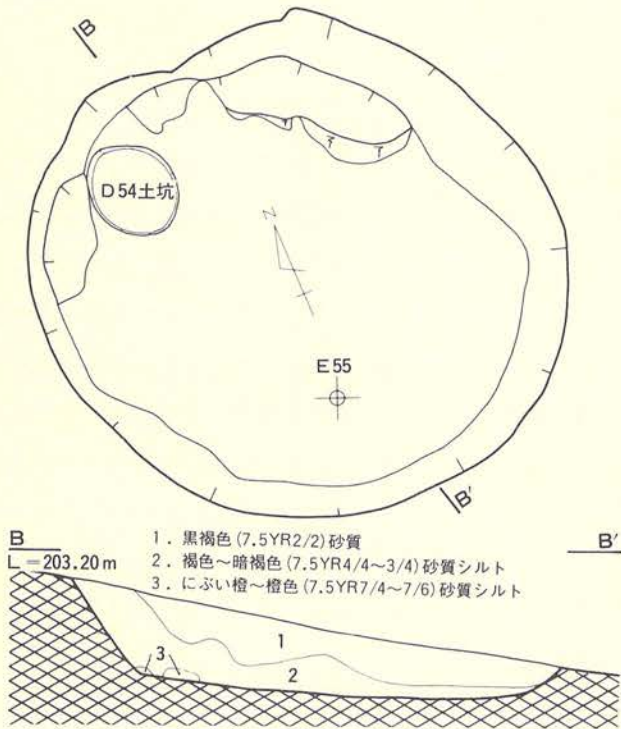
（遺物）（第39図の27～29、図版51）

埋土から、縄文帯が少し高まる磨消縄文土器片（27）と口縁が外反する粗製土器片（28）、

<H53・H54住>



<D54住>



第40図 H53・D54・H54住居址

石製円盤（29）等が出土しただけである。

D54住居址（第40図、図版15）

（検出・埋土）丘陵南斜面下位のⅥ層上面で検出された。埋土はⅢ～Ⅴ層土が混合する黒褐色～暗褐色砂質シルトの3層に大別される。（平面形）歪みのある円形を呈し、長径4.2m、短径3.9mである。長軸は北西—南東を指す。（床面）Ⅵ層中にあり、北壁側が若干高まるほかは、ほぼ平坦で堅くしまる。（柱穴・周溝等）柱穴と周溝は検出されない。（土坑）長径80cm、短径65cm、深さ17cmの楕円形を呈し、北壁際にある。埋土から葦状の炭化物と土器を少量出土するが、性格は不明である。（壁）高さは東壁78cm、西壁27cm、南壁19cm、北壁66cmで床上より緩やかな傾斜で立ち上がる。（炉）炉は検出されない。

（遺物）（第41図、第42図の1～19、図版39・54・59）

あいまいな磨消縄文の浅鉢完形品（第41図の2）が東壁際から、磨消縄文のある深鉢（1）と小鉢（5）と大形深鉢の口縁部片（6）の3点が西壁際から固まって、研磨痕のある石（第42図の19）が床中央より少し東寄り出土した。埋土出土土器片には、磨消縄文とともに沈線文も少なからず含まれている。土偶片（第41図の7）、横形石匙（8）、両面加工の小形石器（9）等は埋土出土品である。

H54住居址（第40図、図版15）

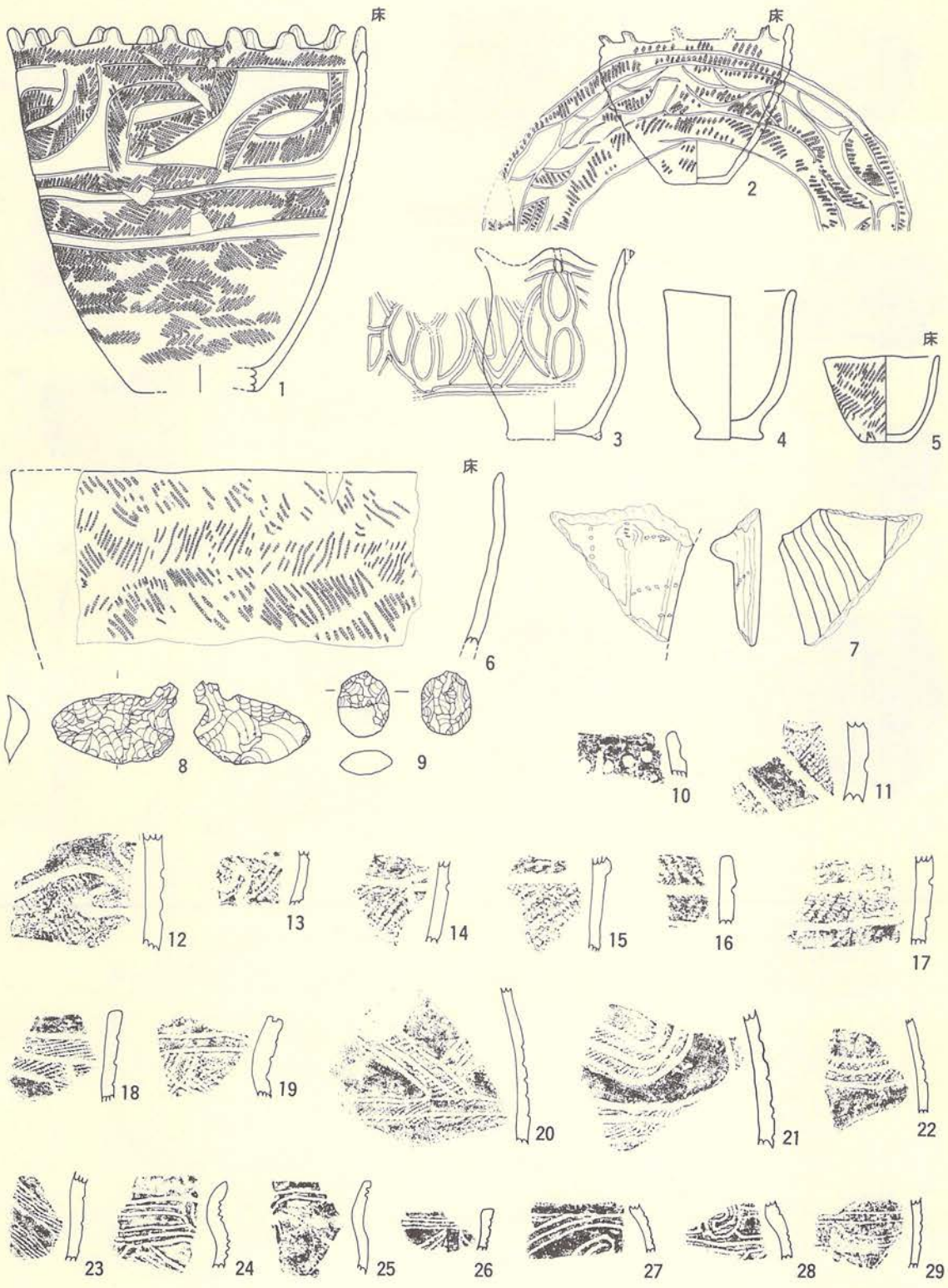
（検出・埋土）H53住居址と重複し、その西にある。H53住居址の北壁を追っていく過程で弧状の連なりを見出し、壁際に並ぶ小石と磨石の存在によって住居址と推定したものである。埋土は、H53住居址と同じ、Ⅲ～Ⅵ層土が混合した黒色砂質シルトの単層である。（平面形）北壁から推定すると直径4m前後の円形になるようである。この円形の南東部分に、長さ40cm、巾20cmの不定形の焼土がある。厚さは2cmと薄い。H53住居址の推定床面より10cm近く下であり、H54住居址の炉の可能性が考えられる。その場合、主軸は北西—南東を指す。（床面・柱穴・周溝等）認めない。（壁）北壁の下部と思われるⅤ層の落ちこみを確認した。（炉）前述のとおり、地床炉とも考えられる焼土が存在している。

（遺物）（第42図の20～26、図版48・50）

北西壁際から凹石兼敲石1ヶ（24）、磨石2ヶ（25・26）が固まって出土した。埋土出土土器片には、不完全な磨消縄文が施されている。

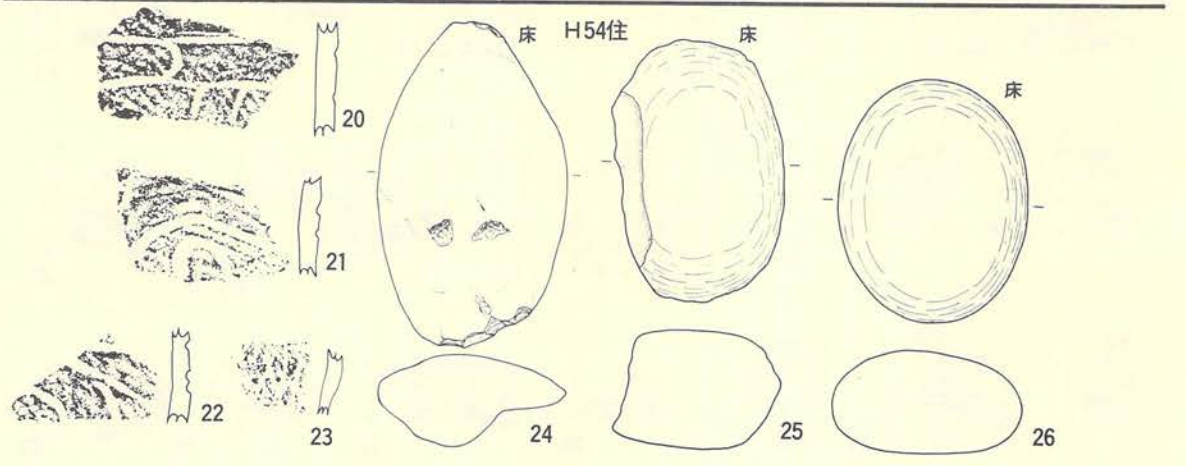
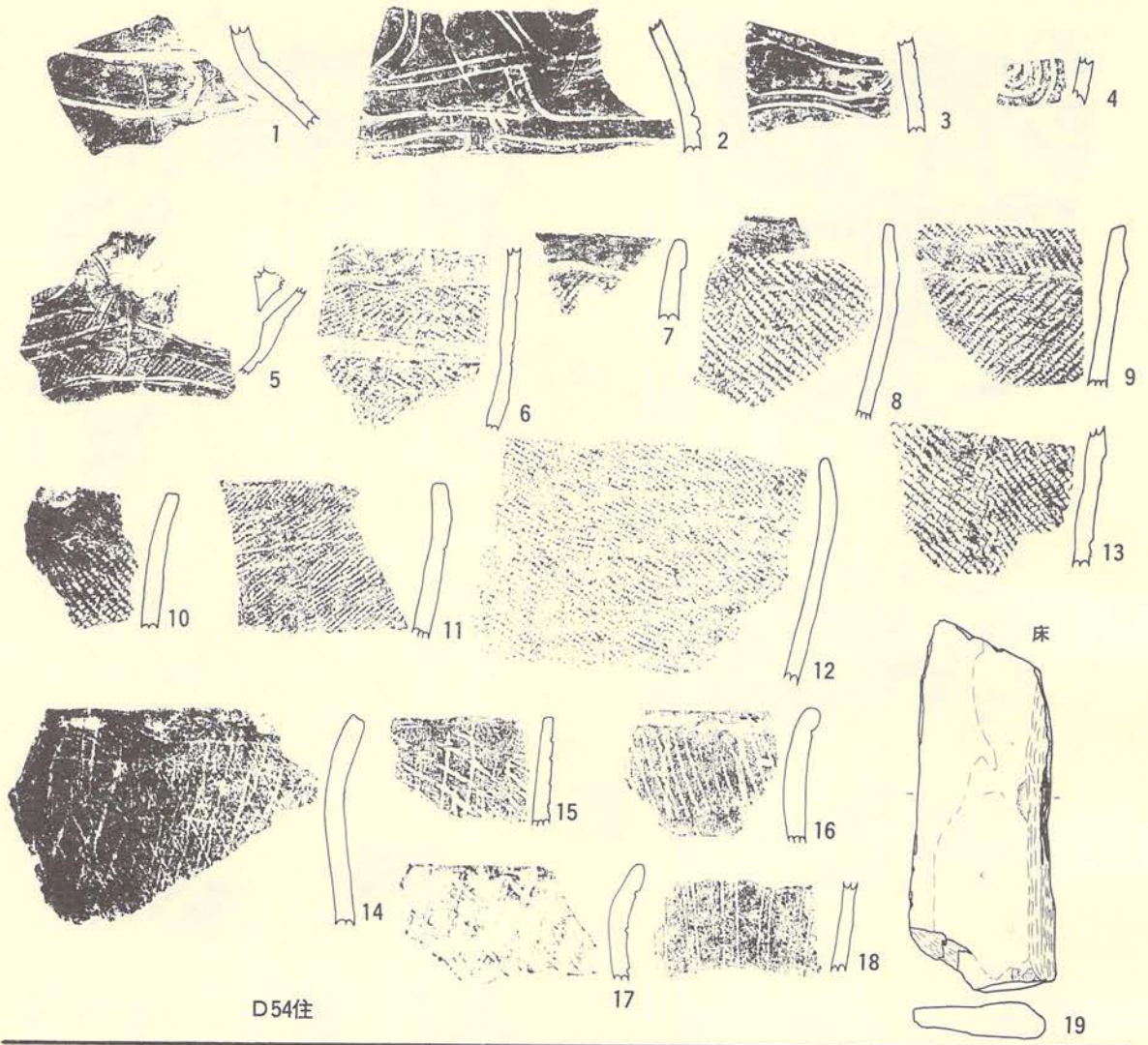
G55住居址（第43図、図版16）

（検出・埋土）南斜面下位において検出した。検出面は南部浮石混じりの褐色砂質土（Ⅳ～



第41图 D54住居址出土遺物

1~6 S=1/4
 7~9 S=1/2
 他 S=1/3



第42图 D54・H54住居址出土遺物

19 S = 1/6
 他 S = 1/3

V混合層)である。埋土は黒褐色砂質土主体の2層に分けられる。(平面形)卵形ないし楕円形状を呈し、長径3.4m、短径3.1mである。長軸方向は北北西—南南東を指す。(床面)VI層上面ないしV層下面中にあり、ほぼ平坦で炭と焼土粒の散在が認められる。(柱穴・周溝等)検出されない。(壁)高さは東壁68cm、西壁34cm、南壁15cm、北壁56cmで、床上からやや急な傾斜で立ち上がる。(炉)遺構中央部より僅かに東寄りに、西側がコ字形に開く石囲炉がある。規模は縦40cm、横26cmで4ケの石を使用している。焼土は厚さ3cm前後で形成されている。炉の北側には径30cm×32cm、厚さ0.5cmの円形を呈す焼土の広がりがある。(立石)炉の東側50cmの所には、縦27cm、横12cm、巾6~8cm大の粘板岩が床を20cm程掘りこみ、少し斜めに据えられている。石の上端部面は僅かに欠損しているものの、使用痕跡等は確認されない。性格は不明である。

(遺物) (第44図、図版39)

床面出土品はない。土器片は、磨消縄文と共に沈線文、隆帯を伴う沈線文、口縁内部が膨隆するもの等多様である。有茎石鏃が1ケのみ出土している。

I 55-1 住居址 (第43図、図版16)

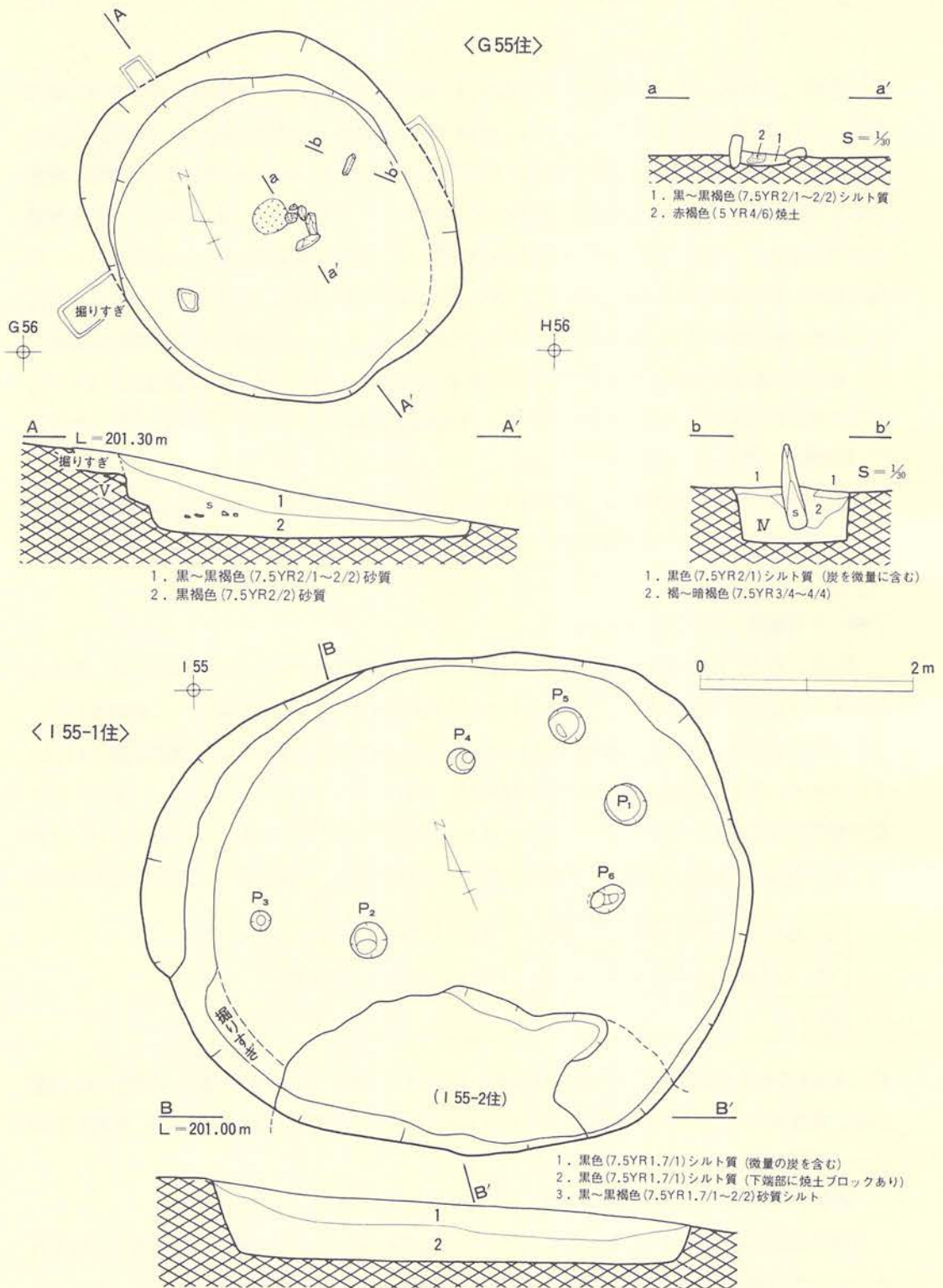
(検出・埋土)尾根南半部下位の東側緩斜面のIII~V混合層中位において検出した。埋土は黒色シルト質土の2層である。(平面形)長径5.6m、短径4.6mの楕円形ないし卵形を呈し、長軸方向は東—西を指す。(重複)南側にあるI 55-2住居址と重複し、当遺構が切られていることから、新旧関係は(新)I 55-2住居址、(旧)I 55-1住居址である。(床面)南半部の $\frac{1}{4}$ 位は南部浮石の堅い面で、北半分はIII~V混合層黒色砂質土の軟らかい面である。全体に平坦である。(柱穴・周溝等)大小6ケの小穴が検出され、遺構に伴う主柱穴は配置等から

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆
径 cm	38×40	34×34	18×20	24×26	32×36	22×35
深さcm	48	27	18	40	17	35

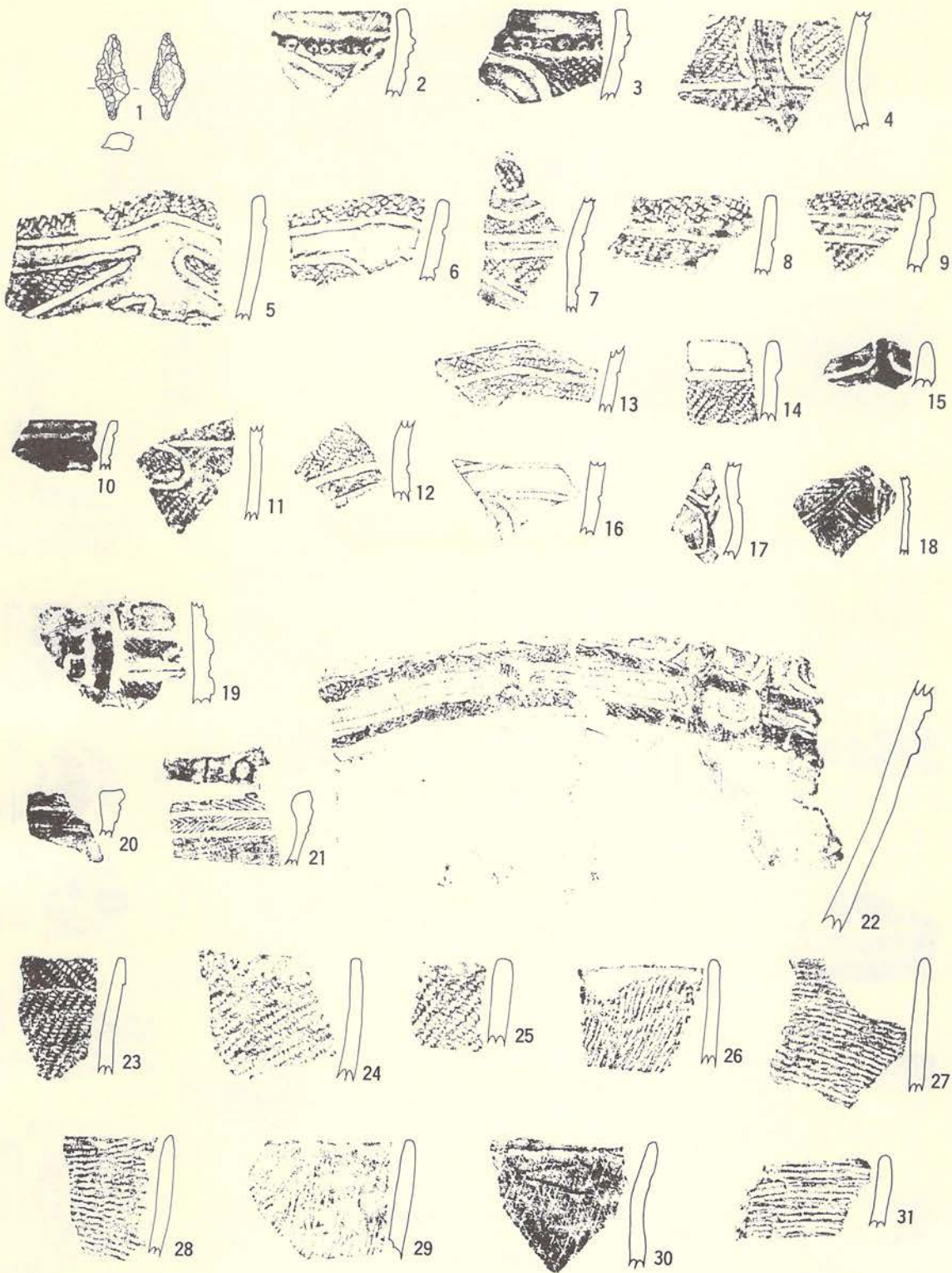
P₁とP₂が考えられる。周溝等の施設は検出されない。(壁)高さは東壁23cm、西壁75cm、南壁25cm、北壁87cmで、やや急な傾斜で床上から立ち上がる。(炉)検出されないが、重複し削除された箇所が存在した可能性もある。

(遺物) (第45・47図、図版39・51・59)

北壁の50cm手前、柱穴P₄の北西の床面に、口を南東に向けた横転状態で、磨消縄文の施された注口土器(第45図の1)があった。北西側と南西側に長さ20cmの石が置いてある。また、東壁際の床面に、上部のない球胴の土器(2)、小形壺(3)、極く薄い板状の石皿(第47図の12)が、互いに50cm位離れて出土した。注口土器は注口を欠き、欠落部に黒色の樹脂状物質が付着

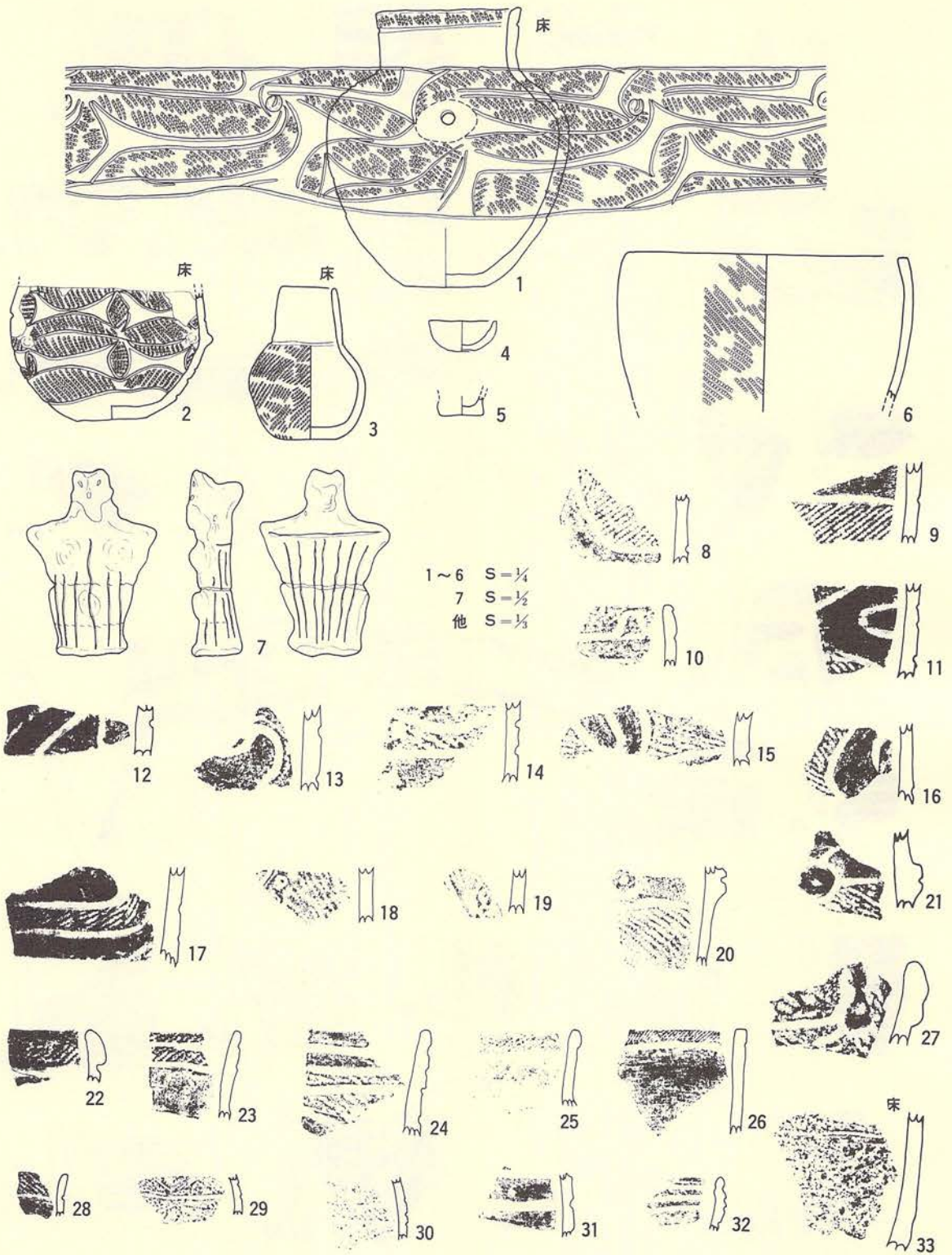


第43図 G55・I55-1住居址



第44图 G55住居址出土遺物

1 S = 1/2
 他 S = 1/4



第45图 I 55-1 住居址出土遺物

している。1と2はともに文様中にハリゴブをもち、1の場合は刻み加えられる。7の土偶は南西区の床下から出土しているので、I55-2住居址に属する可能性がある。埋土出土土器片は、磨消縄文の施されるものが多い。粗製では、擬似羽状縄文が施され口縁内面が肥厚するものが入っている。石刀(13)は埋土から出土している。

I55-2住居址(第46図、図版17)

(検出・埋土) I55-1住居址の南壁側床面精査中に、黒褐色の半円形の輪郭が露出したことにより、はじめて遺構の確認がなされた。埋土は黒～黒褐色砂質シルトの2層である。(平面形) 遺構の北側はI55-1住居址と重複し、南側はすでに削平されていることから、壁の確認はできず、規模・形態とも不明である。検出された規模等から、径3.5～4.0m前後の円形ないし楕円形を呈すと推定される。(重複) I55-1住居址と重複し、当遺構が切っていることから新旧関係は(新)I55-2住居址、(旧)I55-1住居址となる。(床面) 南部浮石(V層) 下端部にあり、ほぼ平坦で堅くしまっている。一部に若干ではあるが炭の散在が認められる。(柱穴・周溝等) 北壁際に小穴が1ヶ検出されたが、埋土状況等から遺構に伴う柱穴とはいえない。周溝等の施設は検出されない。(壁) 西壁のみが僅かに11～14cm程度残存しているだけで、傾斜は緩やかである。(炉) 検出されないが、火熱を受け赤色変化を生じた縦37cm、横14cm、厚さ10cm大の石が床上に散在することから、削平箇所には炉が存在した可能性もある。(立石) 西壁寄りの床に縦34cm、横10cm、厚さ10cmの石が24cm程掘りこんで、垂直に据えられていた。性格は不明である。

(遺物) (第47図の14～25、図版39)

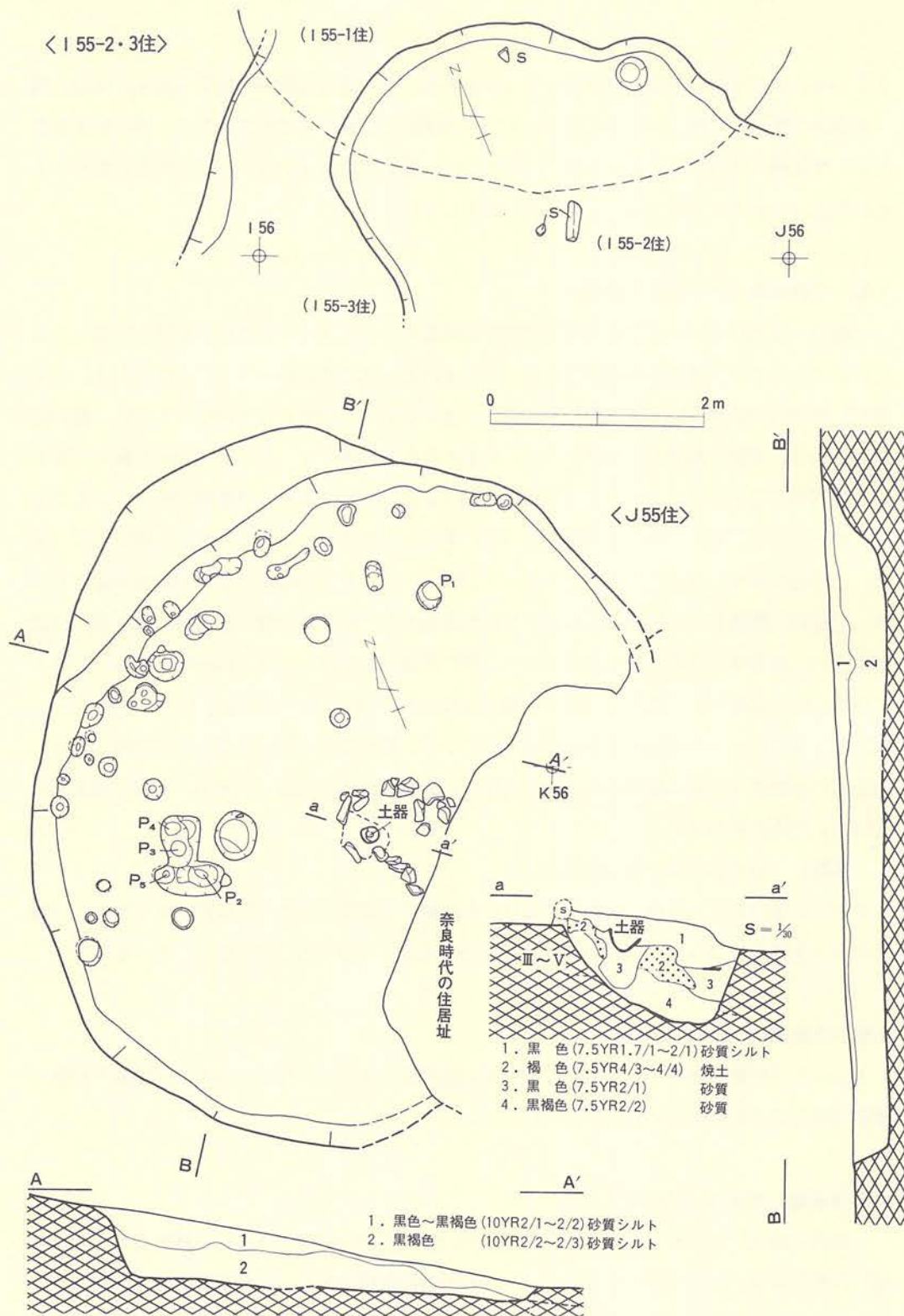
南東区の床面から、無地に沈線文が施された、胴張り頸部くびれ外反口縁の鉢(14)、沈線文のつく土器片(15～18)、擬似羽状縄文のつく土器片(23・25)等が出土している。

I55-3住居址(第46図、図版17)

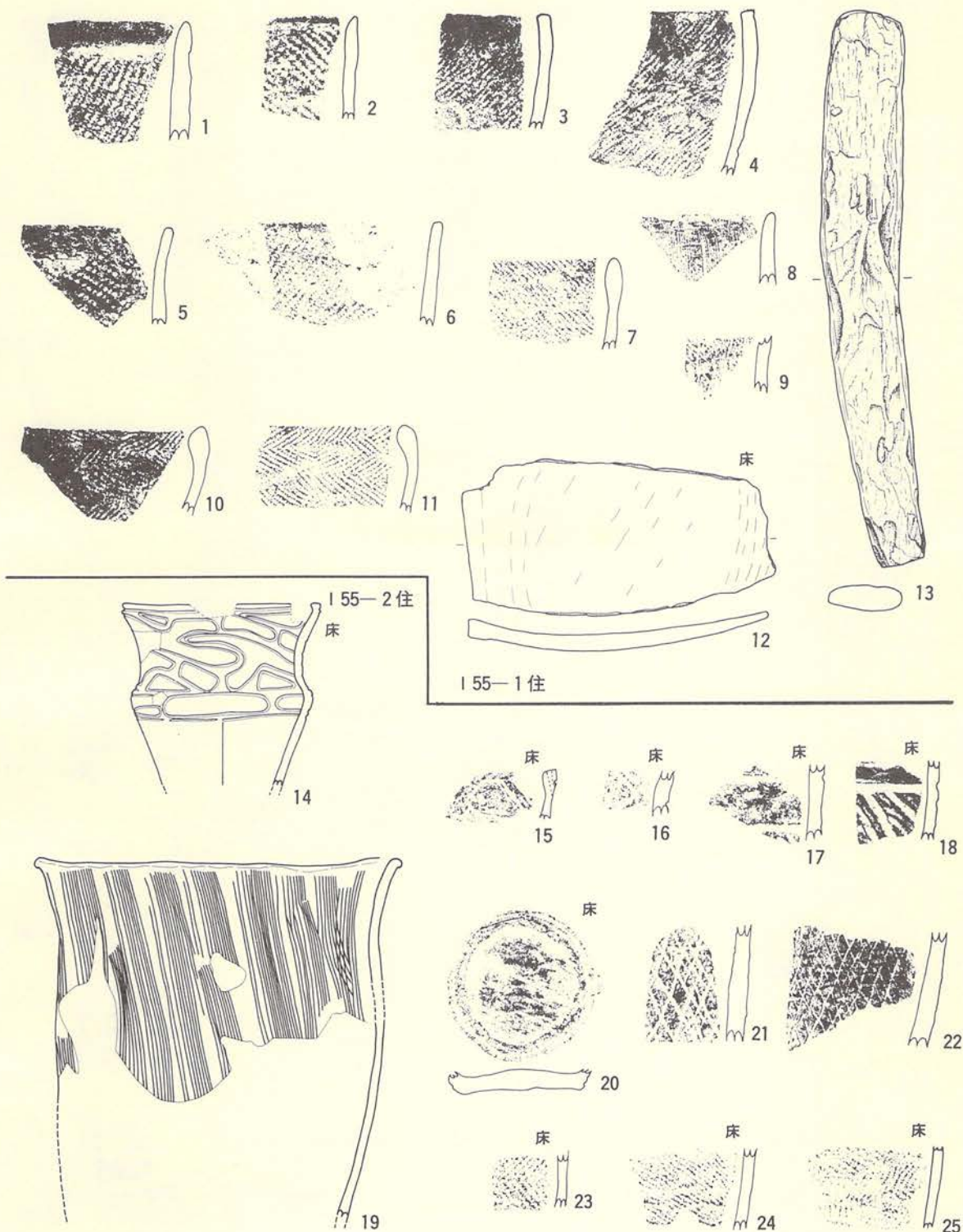
I55-2住居址の西側に、不明瞭な半円状の輪郭部が僅かに残存するのみで、規模・形態・重複関係等は不明である。遺物は出土しない。

J55住居址(第46図、図版17)

(検出・埋土) 南斜面下位の東寄りの地点で、IV～V混合層中位において検出した。埋土は黒～黒褐色砂質シルト主体の2層である。(平面形) 遺構東側の一部は調査区域外に存在し、さらに奈良時代の住居址と重複しているために、詳細な規模・形態は不明である。検出された規模等から長径6.5m、短径5.0m前後の楕円形を呈すと推定される。長軸方向は東北東～西南

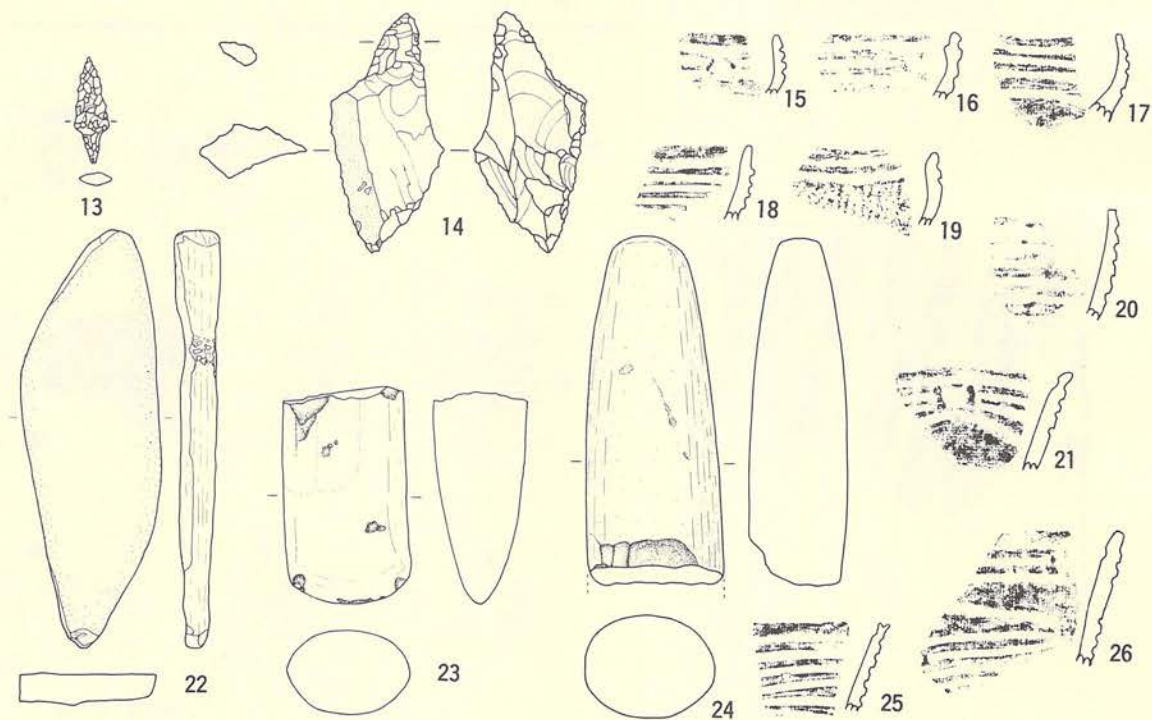
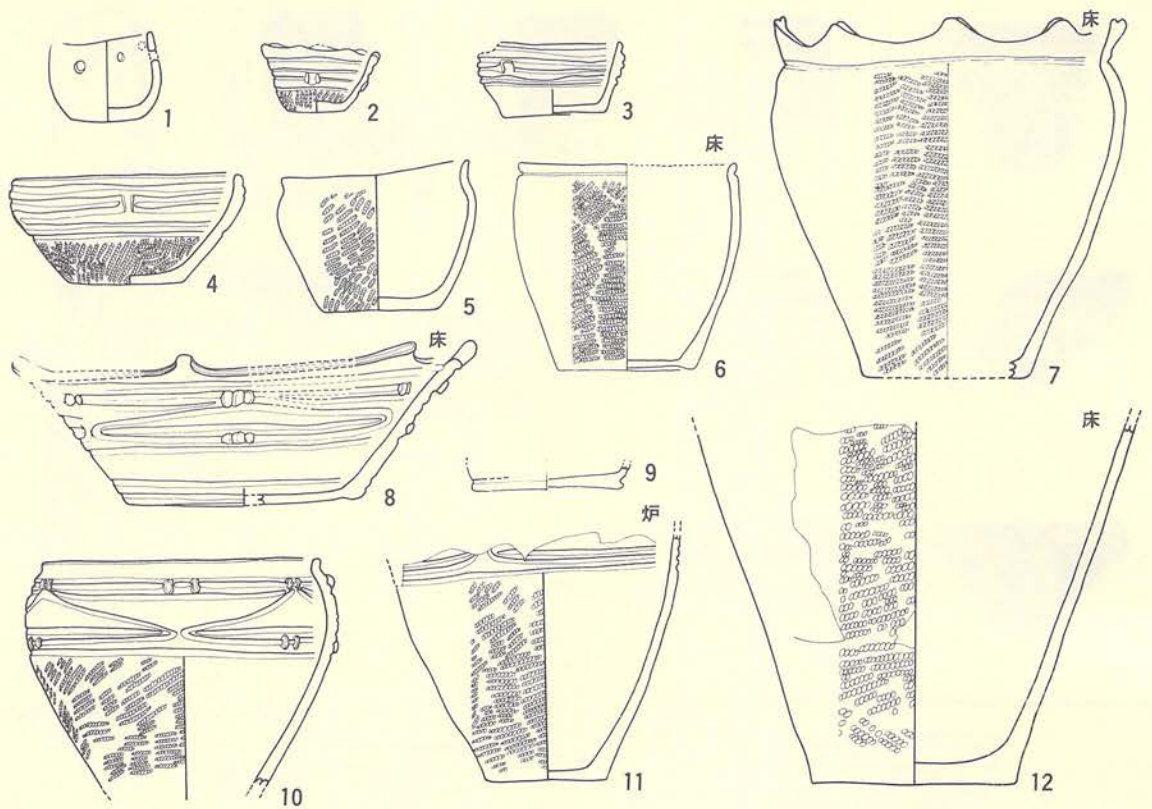


第46図 I 55-2・3・J55住居址



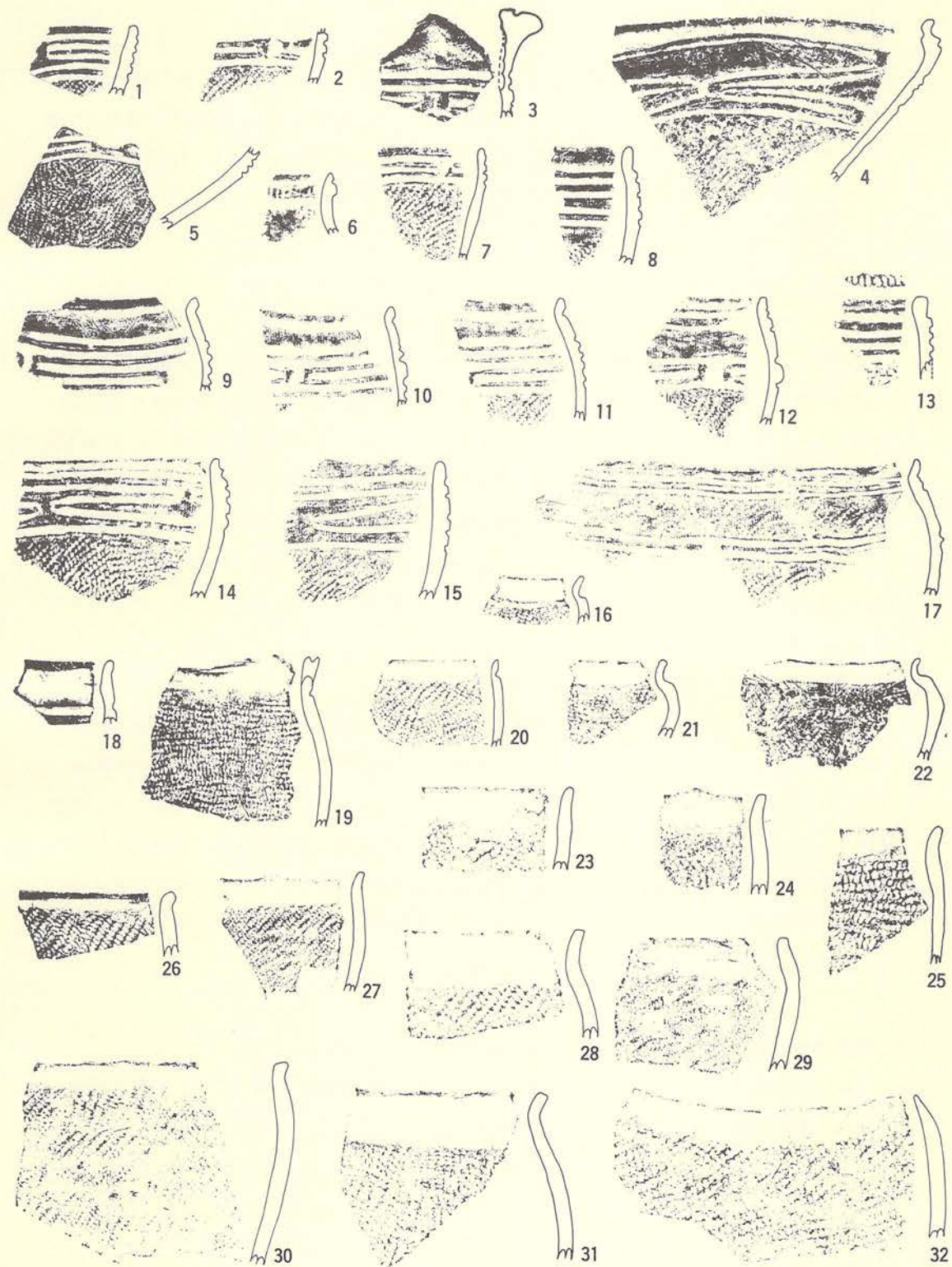
14·19 S = 1/4
 12 S = 1/6
 他 S = 1/2

第47图 I 55-1·2住居址出土遺物



第48图 J55住居址出土遺物(1)

1~12 S=¼
 13·14 S=½
 他 S=⅓



第49图 J55住居址出土遺物(2)

S=1/4

西を指す。(重複) 当遺構が奈良時代の住居址に切られている。(床面) 軟らかく平坦である。

(柱穴) 小穴は北壁側に大小合わせて、40ヶ余り検出された。規模は径10～35cmの円形ないし楕円形を呈し、深さは6～30cmである。壁沿いに2列に回ることから建て替え、拡張が考えられ

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅
径 cm	23×24	20×26	22×48	15×48	16×20
深さcm	77.5	55	56	53.5	46

る。壁際に巡る方が規模も小さく、深さも6～10cmと浅い。主柱穴は埋土状況と配置等からP₁ P₂である。P₂～P₅の4本は切り合っており、埋土状況からP₃が一番旧く、他の3本は壁沿いに巡る小穴に伴う建て替え、拡張時に使用された主柱穴かと考えられる。少なくとも3回以上の建て替えが行なわれている。周溝等の施設は検出されない。(壁) 高さは16～70cmで、床上よりやや急な傾斜で立ち上がる。(炉) 遺構中央部より南東壁寄りに石囲炉があり、東側は奈良時代の住居址によって攪乱削平されている。一部の石は欠落し、散在しているが本来は、縦80cm、横70cm前後の円形であろうと推定される。炉の西寄りには土器が埋設され、焼土が厚さ5～15cmで形成されている。

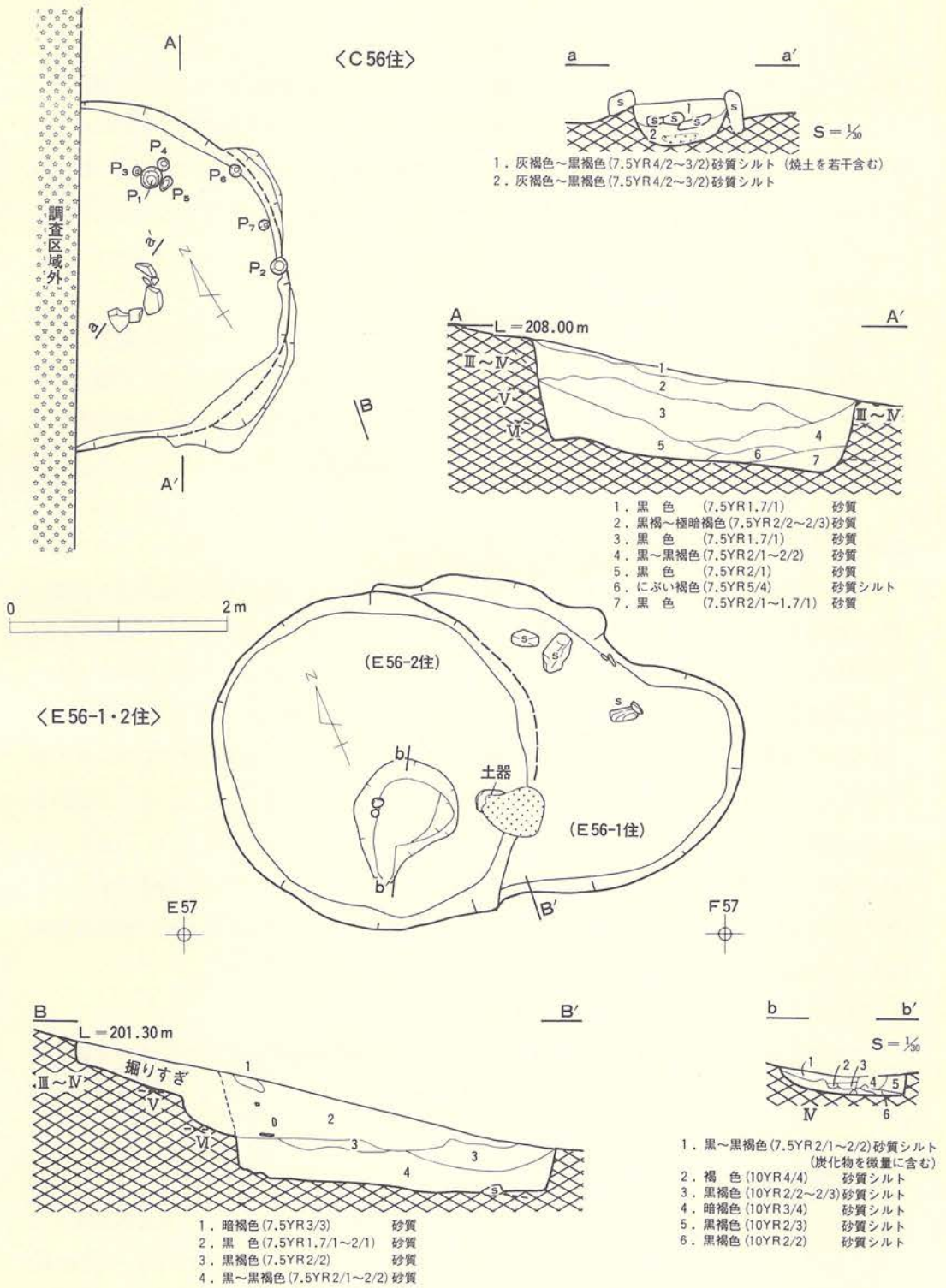
(遺物) (第48・49図、図版39・40・47・48・54)

床面と埋土双方から、多量の土器および土器片が出土した。口縁部を欠く深鉢(11)は炉に埋設されたものである。炉のすぐ南西から大形深鉢(12)が、炉の西方の埋土下部から小鉢(6)、波状口縁の鉢(7)、いわゆる変形工字文の施された浅鉢(8)が、固まって出土した。北東壁面から、変形工字文のある小鉢(3)、縄文のみの小鉢(5)が出土した。埋土出土品は、変形工字文の施される精製土器と、口縁部を磨き体部は斜縄文の半精製土器に分けられる。石器はすべて埋土から出土した。石鏃、石斧のほか、尖頭器(第48図の14)、片面に研磨面があり側面の突出部に打痕のある板状石片(第48図の22)が出土した。

C56住居址(第50図、図版17)

(検出・埋土) 南斜面下位のV層上面で検出した。埋土はII～V層が混合した黒色砂質土主体の7層に大別される。(平面形) 遺構西側の一部は調査区域外に存在するために、詳細な規模・形態は不明である。検出規模の長径3.1m、短径1.9m+αより、径3.2m前後の円形状を呈すと推定される。(床面) 南部浮石混じりのVI層土上面で、ほぼ平坦で堅くしまる。(柱穴・周

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇
径 cm	19×20	15×16	8×10	11×12	7×14	10×13	9×10
深さcm	38	40	17	24	8	4	3



第50図 C56・E56-1・2住居址

溝等) 小穴は大小7ヶ余り検出され、当遺構に伴う柱穴はP₁とP₂が考えられる。また調査区域外に存在の可能性もある。周溝等の施設は検出されない。(壁) 高さは東壁と北壁が40cm、南壁10cmで、床上より急な傾斜で立ち上がる。(炉) 遺構中央よりやや南寄りに縦40cm、横65cmのコ字状を呈す石囲炉がある。炉の周りは炭が散在し、堅く踏みしめられている。焼土は厚さ4cmの形成が認められる。

(遺物) (第51図、図版40・48・54)

炉の南から東にかけての床面から、やや下膨れ気味の無文の壺(1)、沈線文と縄文の施された片口鉢(2)、粗雑な磨消縄文の施された土器片(5)、粗製の中形鉢(3)が揃って出土した。また、炉の北西辺の炉縁石として、凹石として転用された石皿片(14)が使用されている。埋土からは、若干の土器片と横形石匙(4)、四面使用の凹石(13)が出土した。

E56-1 住居址 (第50図、図版18)

(検出・埋土) E56-2 住居址掘り下げの際に、土器埋設炉が上部より出土したことに伴い遺構の広がりが認められた。検出面はⅢ～Ⅴ混合層中である。埋土は黒色砂質土の単層である。

(平面形) 遺構の西側半分はE56-2 住居址と重複しているために、詳細な規模・形態は不明である。検出された規模等から長径3.5～4.0m、短径3.8m 前後の不整楕円形状を呈すと思われる。

(重複) 当遺構がE56-2 住居址の上面に構築されていることから、新旧関係はE56-2 住居址が古い。(床面) 北壁側はⅤ層を5cm前後掘りこみ、ほぼ平坦で堅くしめる。床上には若干ではあるが炭の散在が認められる。(柱穴・周溝等) 柱穴と周溝は検出されない。(壁) 高さは14～30cmで、床上よりやや急な傾斜で立ち上がる。(炉) 南壁寄りに土器埋設炉がある。埋設された土器は粗製の鉢破片を横転し据えている。長径56cm、短径48cmの不整楕円形状を呈す焼土は、厚さ7cmの形成が認められる。

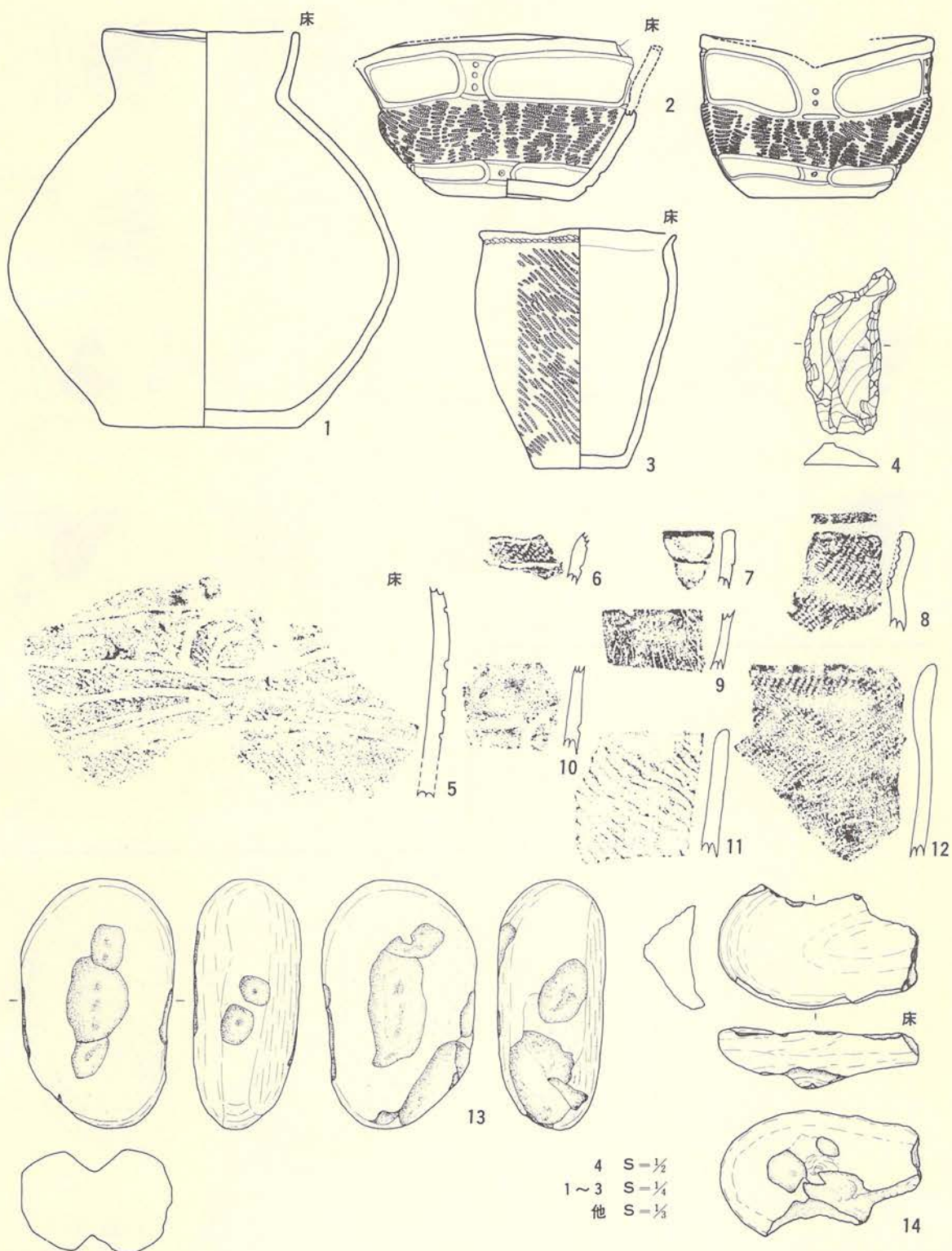
(遺物) (第52図の20・21、図版40・48)

炉の埋設土器(20)は、胴が張り頸部がしまり口縁は外反気味である。口縁上端は極めてゆるい波状を呈する。縦回転の単節斜縄文LRが施されている。21の凹石は埋土から出土した。

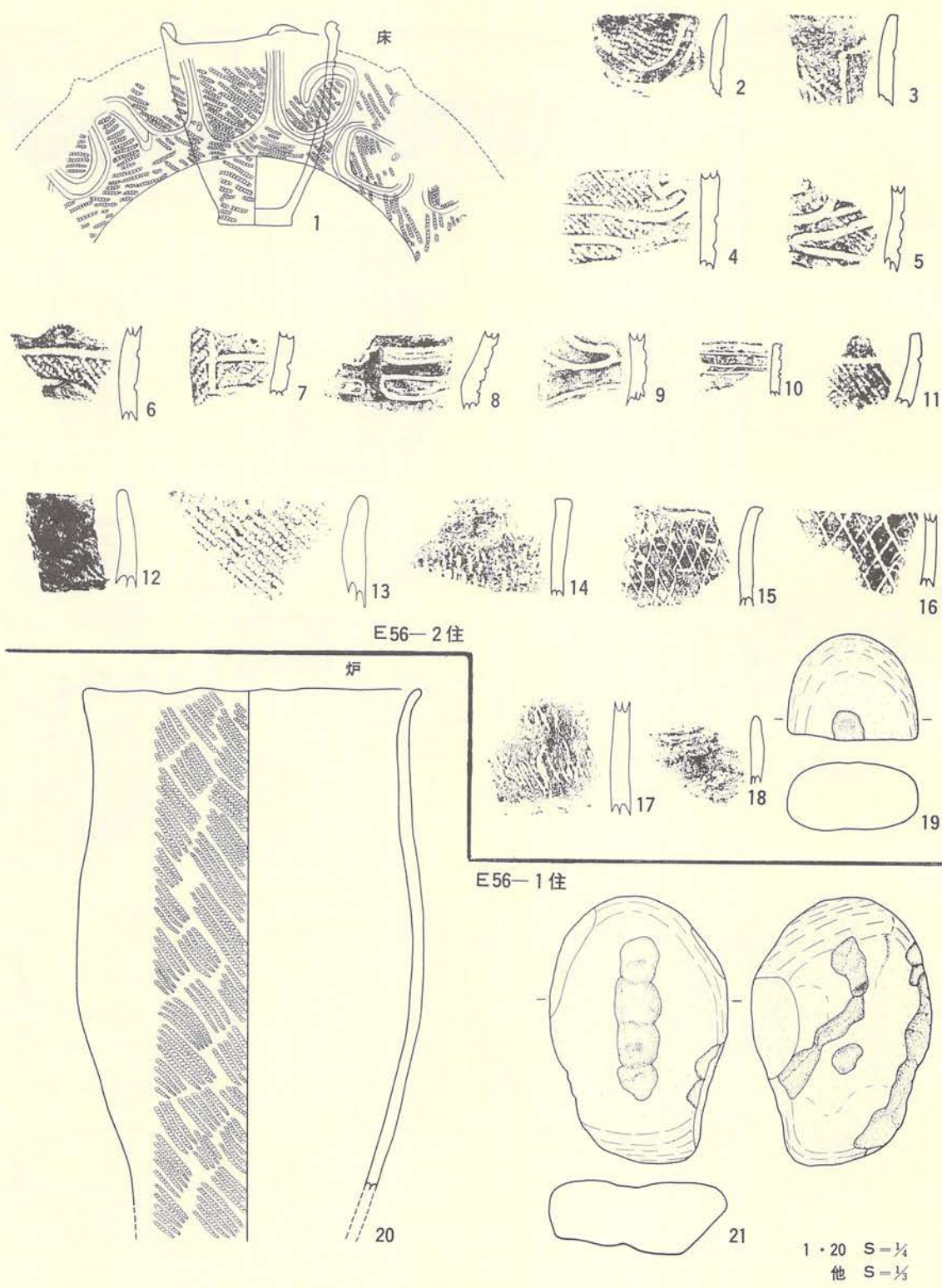
E56-2 住居址 (第50図、図版18)

(検出・埋土) 南斜面下位のⅢ～Ⅴ混合層中において検出した。埋土は黒～黒褐色砂質土の2層に分けられる。(平面形) 長径3.1m、短径3.0mの円形を呈し、長軸方向は南一北を指す。

(重複) E56-1 住居址と重複し、当遺構が廃棄されたのちにE56-1 住居址が構築されていることから、新旧関係は(新) E56-1 住居址、(旧) E56-2 住居址となる。(床面) Ⅵ層中にあり、多少の凹凸はあるもののほぼ平坦で、堅くしまっている。(柱穴・周溝等) 柱穴と



第51図 C56住居址出土遺物



第52图 E56-1・2住居址出土遺物

周溝は検出されない。(壁) 高さは東壁18cm、西壁23cm、南壁23cm、北壁41cmを測り、床上よりやや急な傾斜で立ち上がる。(炉) 遺構中央より南壁際に長径120cm、短径10cmの不整楕円形状の落ちこみがあり、埋土に赤褐色焼土粒が僅かに認められることから地床炉かと考えられる。

(遺物) (第52図の1～19、図版40・48)

北壁近くの床面から粗雑な磨消で渦巻文を施した小形鉢が横転状態で出土した。口縁には4つの突起があり内面はヒレ状に膨らむ。磨消部の末端と途中には小さな粘土粒の貼りつけがある。埋土出土の土器片には、磨消縄文や沈線文が施されている。19は、埋土出土の磨石兼凹石である。

F 56住居址 (第53図、図版18)

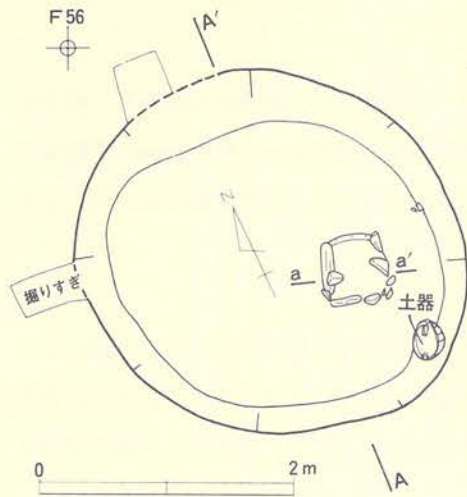
(検出・埋土) 南斜面下位のⅢ～Ⅴ混合層中において検出した。埋土は極暗褐色～黒褐色砂質土の3層に大別される。(平面形) 少し歪みのある円形を呈し、長径3.1m、短径2.9mである。長軸は北北西—南南東を指す。(床面) Ⅵ層上面にあり、南半部の一部は南部浮石が露出している。ほぼ平坦で堅くしまっている。(柱穴・周溝等) 柱穴と周溝は検出されない。(壁) 高さは22～72cmで、床上よりやや急な傾斜で立ち上がる。(炉) 遺構中央部よりやや東壁寄りに縦55cm、横50cmのコ字状を呈す石囲炉がある。石は火熱による影響のためにぼろぼろと崩れやすくなっている。焼土は厚さ4cmの形成が認められる。

(遺物) (第54図の1～8、図版40・47)

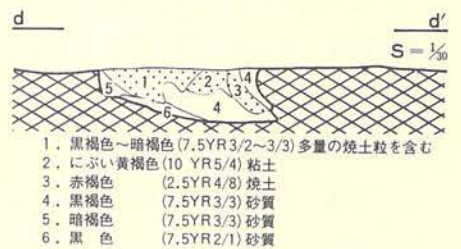
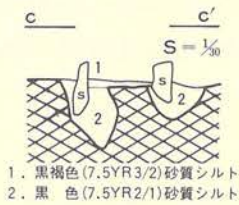
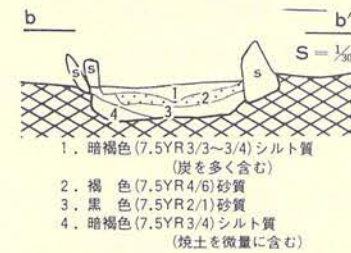
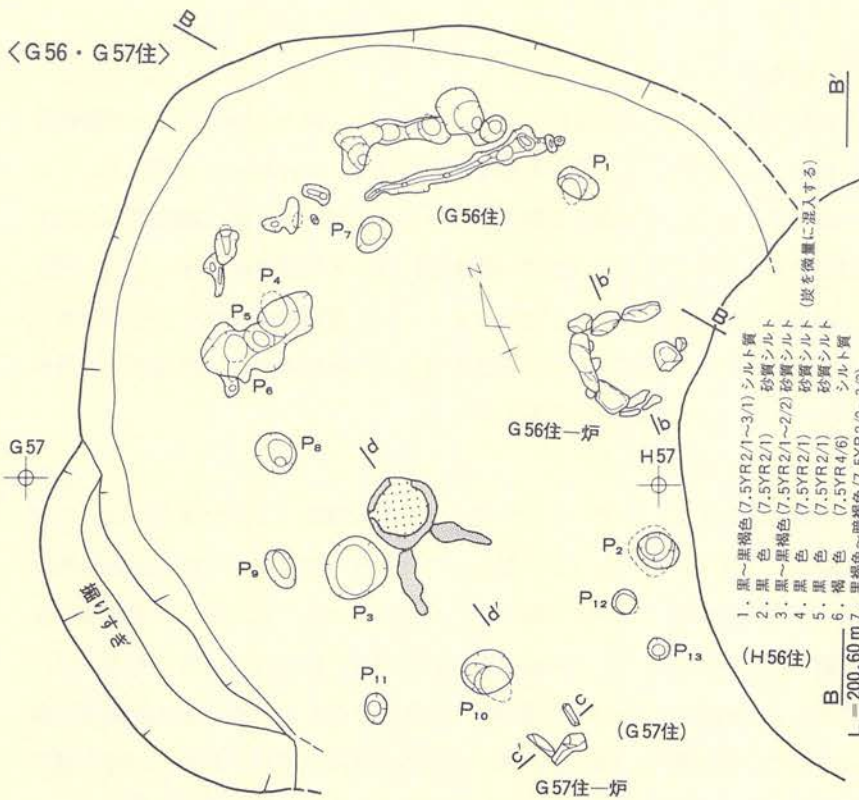
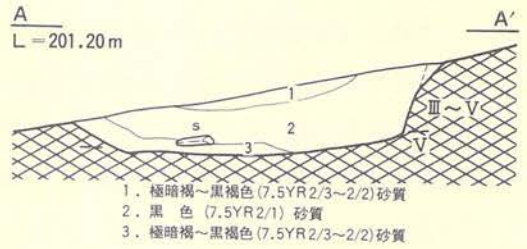
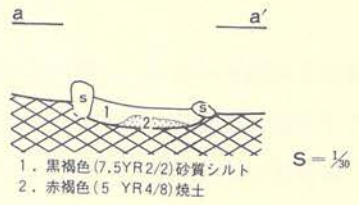
床面出土品はない。南東壁の上部に密着して2つの注口のある浅鉢(2)が出土した。口縁部はフ字状に内側に折れて巾2cmの帯となって一周し、この帯から垂直に2ケの注口が対称的位置につく。注口はこの帯状の部分から垂直に伸びており、若干ラッパ状に開く。実測図の左方の注口には、両側面に竹管刺突状円文が、外面と内面には縄文が施されている。右方の注口の全周には縄文が施される。縄文は口縁の帯状部分に1cm程はみ出し、その外側を沈線で区画する。この区画線は左方の注口の場合と同じである。体部の縄文は大部分がLR、口縁上端にはRLが施される。朱彩の痕跡が認められる。底部には網代痕がある。埋土出土土器片には、磨消縄文、隆帯貼付の沈線文等がある。3は石斧頭部片転用敲石で、上面に敲打痕がある。

G 56住居址 (第53図、図版19)

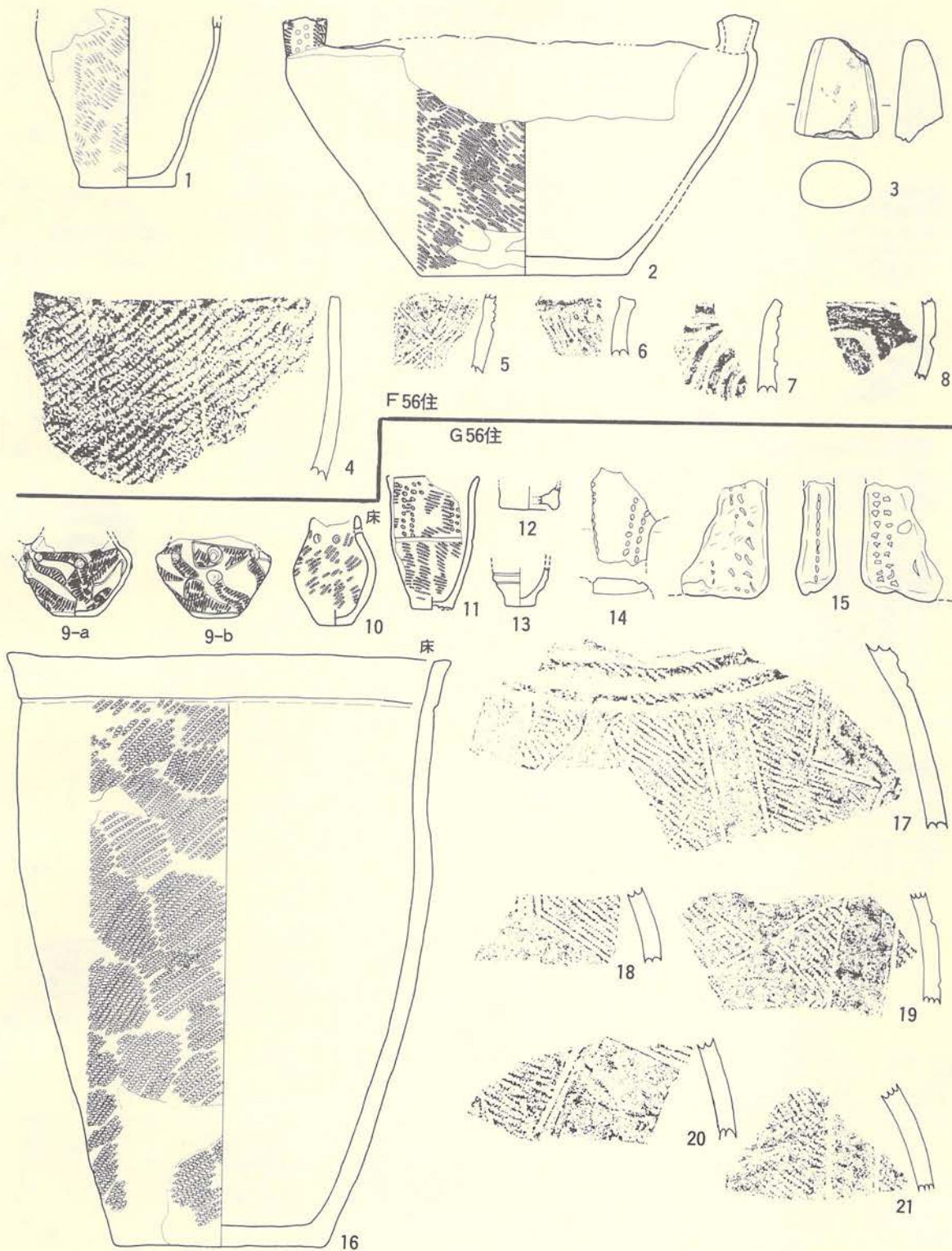
(検出・埋土) 丘陵南端部の東側斜面のⅢ～Ⅴ混合層(黒色砂質土)中において検出した。埋土は黒～黒褐色砂質土の7層に分けられる。(平面形) 南壁側はG 57住居址、東壁側はH 56—2住居址と重複しているために、詳細な規模・形態は不明である。検出された規模等から、



<F56住>

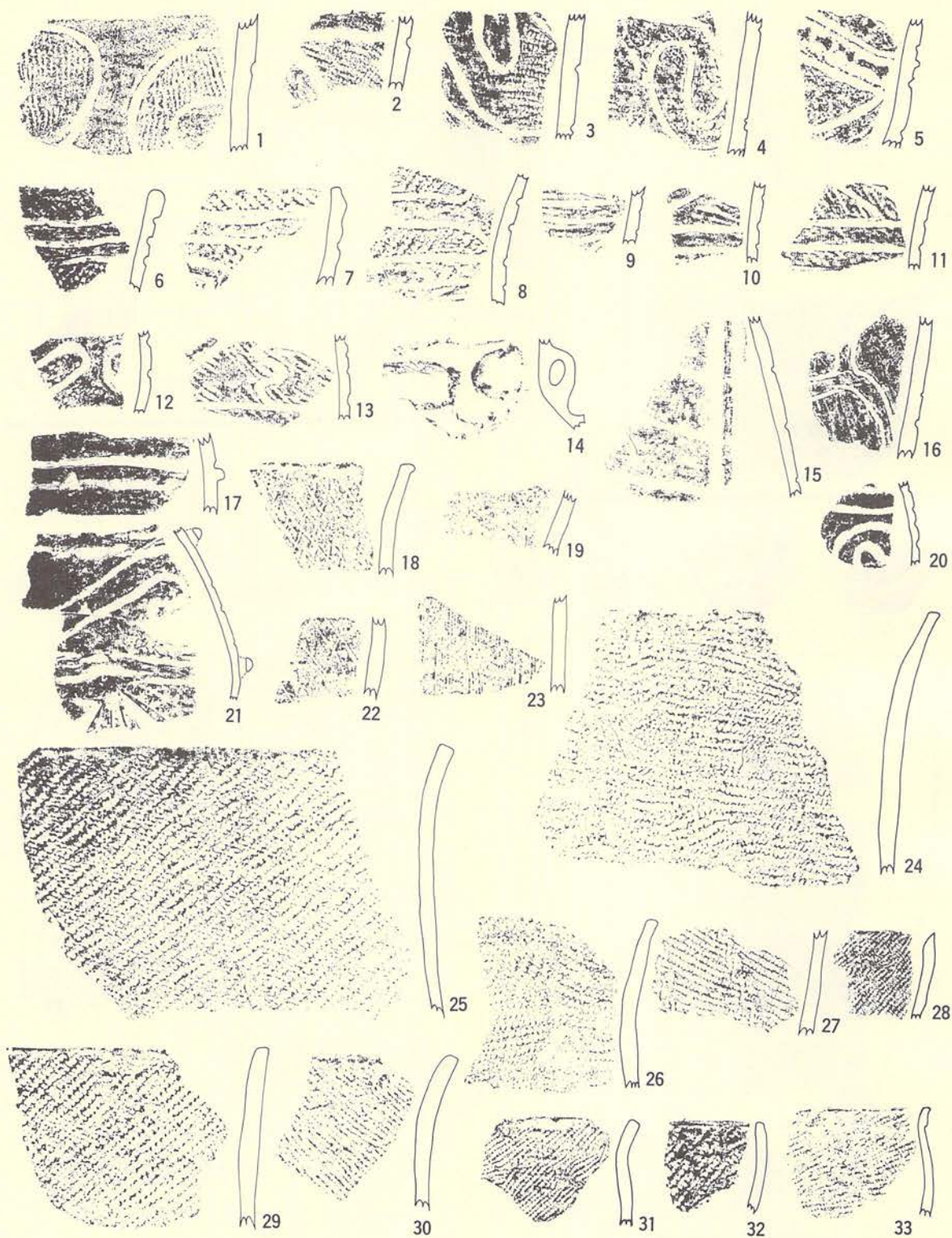


第53図 F56・G56・G57住居址



第54图 F56・G56住居址出土遺物

1・2・9a~13・16 S=1/2
 14・15 S=1/2
 他 S=1/3



第55图 G56住居址出土遺物

S=1/2

径5.8～6.0m 前後の円形ないし卵形を呈すと推定される。(重複) G57住居址とH56—2住居址の2棟と重複している。当遺構とG57住居址は、H56—2住居址に切られていることから、新旧関係は(新)H56—2住居址、(旧)G56・57住居址となる。また、G57住居址との新旧関係は、平面的には不明瞭であるが、出土した土器等から(新)G56住居址、(旧)G57住居址と考えられる。(床面) V～VI層中にあり、ほぼ平坦で堅くしまっている。遺構の南半分は南部浮石(V層)が露出することから、上を八戸火山灰土と黒褐色砂質の混合土で、貼り床を施している。厚さは4～5cm位である。(柱穴・周溝等) 小穴は大小合わせて13ヶ検出した。当遺構に伴う支柱穴はP₁・P₂・P₃・P₄の4ヶであり、その配置は四角形を示す。北壁寄りには巾10cm、

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈	P ₉	P ₁₀	P ₁₁	P ₁₂	P ₁₃
径 cm	17×23	27×33	45×48	28×28	18×24	18×23	23×30	28×33	20×22	21×25	20×22	18×20	18×18
深さcm	43	64	15	25	54	21	23	18	18	23	16	26	27

深さ5～10cmの周溝が二列に巡ることから、2期の拡張・建て替えが考えられる。(壁) 高さは西壁80cm、北壁130cmで、ほぼ垂直に床上から立ち上がる。(炉) 石囲炉と地床炉がある。石囲炉は遺構中央より東寄りに位置し、縦・横80cmの東側が開くコ字状を呈す。南側の一部の石は、欠落しているものの、大部分は床を10～15cm程掘りこみ据えている。石は火熱による変成痕が認められ、石質はチャートが主である。焼土はレンズ状に3cm程形成されている。地床炉は遺構中央より南西寄りにある。長径45cm、短径40cmの円形を呈し、外側は巾8～10cmの褐色～乳白色粘土が半円形に巡っている。焼土の形成は僅かに認められるだけである。

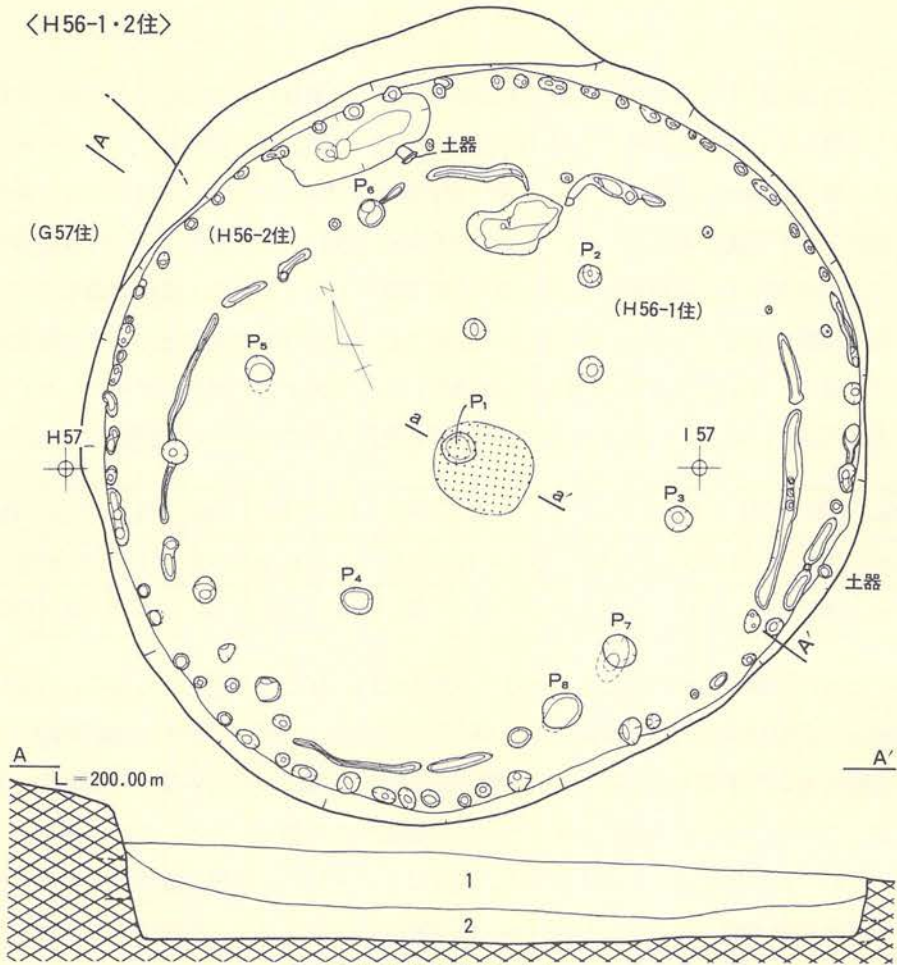
(遺物) (第54・55図、図版40・41・59)

北東壁手前周溝の内側床面から、口縁に9ヶの孔がある胴が張り頸部がくびれるミニチュア土器(第54図の10)が、南壁手前の床面から複合口縁をもつ大形深鉢(第54図の16)が出土した。ハリコブつき小形注口土器(第54図の9)は埋土からの出土品である。埋土出土土器片には、磨消縄文、縄文地に施される沈線文、無文地に施される沈線文、外反口縁の粗製深鉢等多様なものが含まれる。この中で、三角形状磨消文(第54図の17～21)は個性的といえる。

H56—1・2住居址(第56図、図版20)

(検出・埋土) 丘陵南端部東側の緩斜面上において検出した。検出面は南部浮石混じりの黒色砂質土(III～IV混合層)上面である。(拡張・建て替え) 当遺構は2期にわたって、拡張・建て替えが行なわれている。新旧関係はH56—1住居址の方が旧く、H56—2住居址は拡張・建て替え後の新しい住居址である。(重複) G57住居址と重複し、当遺構を切っていることから、新旧関係は(新)H56—1・2住居址、(旧)G57住居址となる。

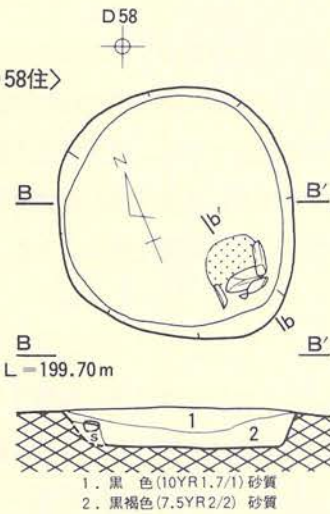
<H56-1・2住>



1. 黒色 (7.5YR1.7/1) 砂質シルト
2. 黒色 (7.5YR1.7/1) シルト質

0 2 m

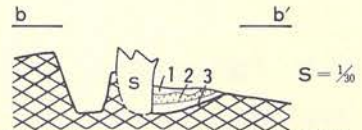
<D58住>



1. 黒色 (10YR1.7/1) 砂質
2. 黒褐色 (7.5YR2/2) 砂質



1. 黒色 (7.5YR2/1) シルト質 (炭と焼土を微量に含む)
2. 褐色 (7.5YR4/4~4/6) シルト質
3. 褐色~明褐色 (7.5YR4/6~5/6) シルト質



1. 黒褐色 (7.5YR2/4) シルト質 (炭を微量に含む)
2. 明赤褐色 (7.5YR5/8) 焼土
3. 黒褐色 (7.5YR2/2~3/2) シルト質

第56図 H56-1・2・D58住居址

H56-1 住居址

(平面形) 検出された周溝等から長径5.2m、短径4.3mの楕円形を呈し、長軸方向は東北東-西南西を指すと推定される。(床面) 大部分はⅥ層中にあり、南側の一部はⅤ層が露出する。ほぼ平坦で堅くしまっている。(柱穴・周溝等) 小穴は大小合わせて10数ヶ検出された。当遺構に伴う柱穴は、配置・埋土状況等からP₂・P₃・P₄・P₅の4ヶが考えられる。P₁は地床炉の下

P. No.	P ₁	P ₂	P ₃	P ₄	P ₅	P ₆	P ₇	P ₈
径 cm	22×28	17×18	18×20	20×25	20×23	20×22	25×28	25×35
深さcm	30	57	64	50	42	22	39	21

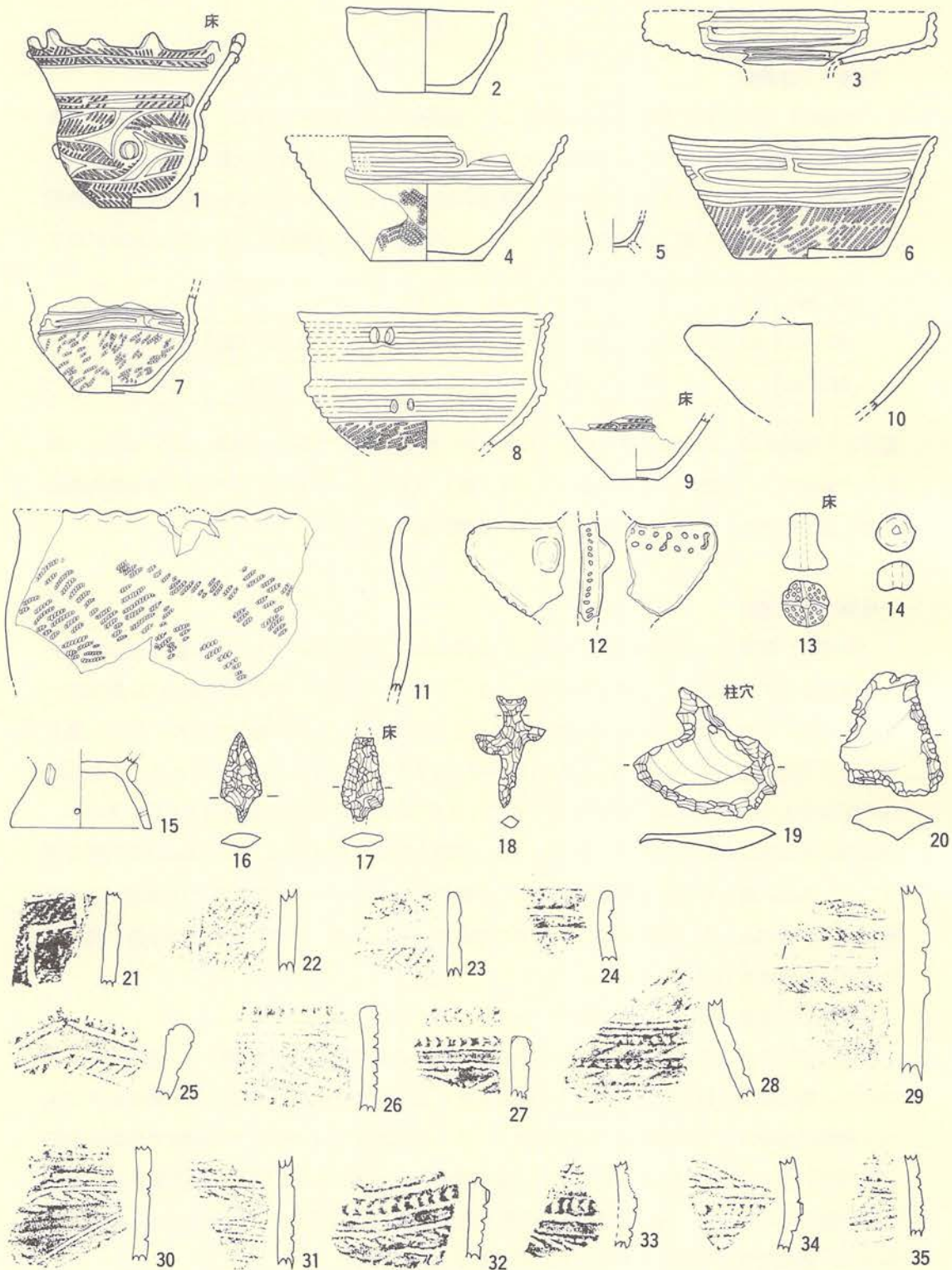
端部より検出され、旧遺構に伴うものではあるが、性格は不明である。周溝は巾5～10cm、深さ2～4cmで、一部途切れながら巡っている。(炉) 遺構のほぼ中央に、径68cm×78cmの楕円形を呈す地床炉がある。焼土はレンズ状に3cm前後形成されている。

H56-2 住居址

(平面形) 卵形ないし楕円形気味を呈し、長径6.3m、短径5.7mである。長軸方向は東北東-西南西を指す。(床面) ほぼ平坦で堅くしまっている。(柱穴・周溝等) 壁沿いに長径10～20cm、短径5～10cm大の円形ないし楕円形状を呈す小穴が、60ヶ余り検出された。拡張・建て替え後の支柱穴は、P₂・P₃・P₄・P₅にP₆・P₈の2本を加えた6本が考えられる。六角形の柱穴配置である。P₇は斜めに掘られていることから、P₃柱穴の添え柱的性格のものであろう。周溝等の施設等は検出されない。北壁際には、長径120cm、短径50cm、深さ14cmの楕円形の落ちこみがある。埋土からは遺物の出土もなく、性格は不明である。(壁) 高さは東壁80cm、西壁82cm、南壁43cm、北壁120cmで、床上より垂直に立ち上がる。(炉) 地床炉は拡張・建て替え前の旧住居址と共用である。

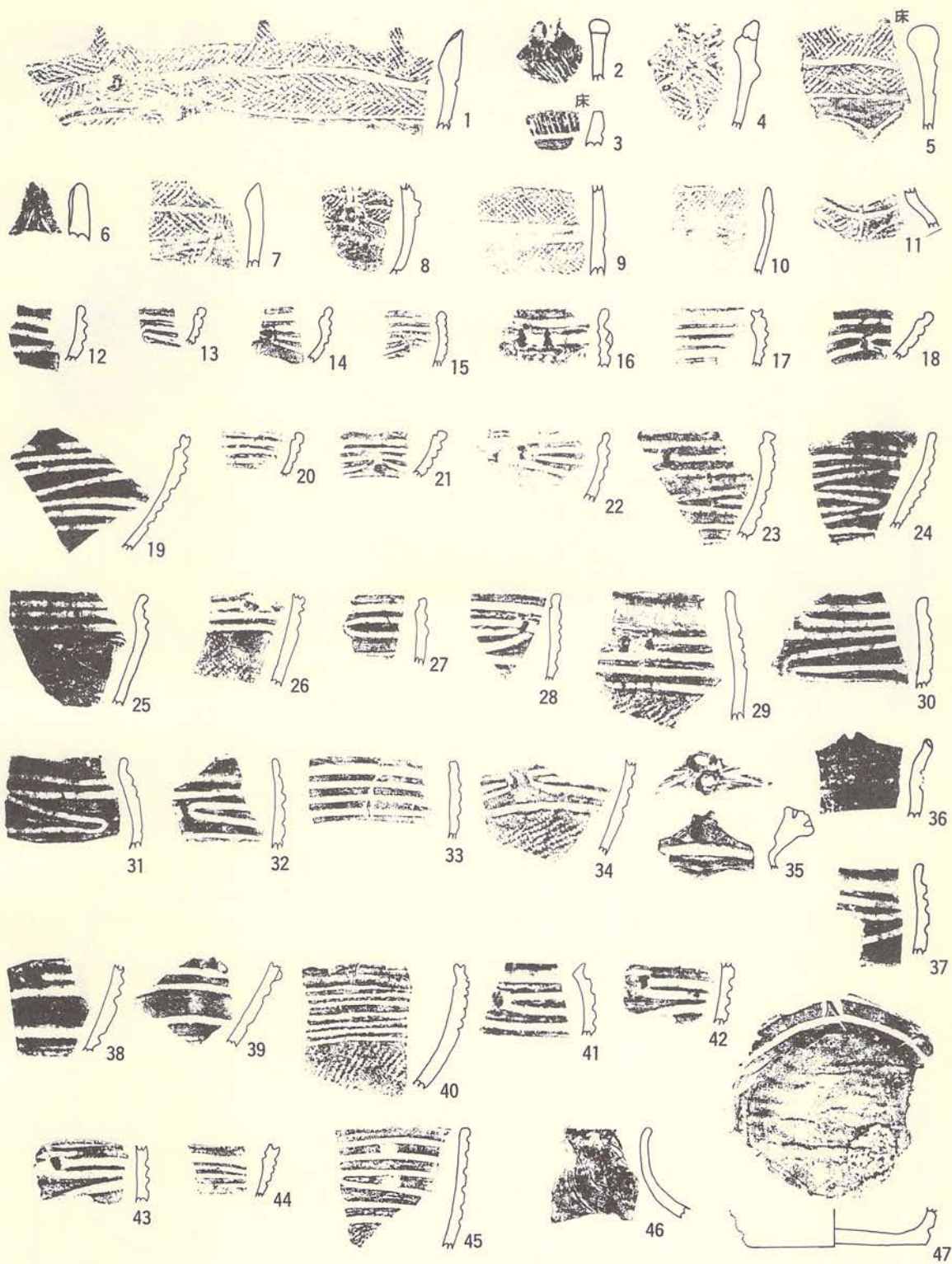
(遺物) (第57～59図、図版41・47・48・54・58・59・65)

拡張住居址であるからすべてH56-2住居址に関わるものである。北壁際の床面からハリコブのつく磨消縄文の施された小形鉢(第58図の1)が、南東壁に少し食いこむ状態でアスファルト様黒色物の入った鉢の底部(第57図の9)が、炉の北東1mの床面から刺突文のある耳栓(第57図の13)が、柱穴P₆から横形石匙(第57図の19)が出土した。埋土出土土器には、磨消文、突帯のある沈線文、刻みや刺突を伴う特殊な沈線文(第57図の25～28・30～35)等があるものの、変形工字文を施したものが極めて多量出土している。

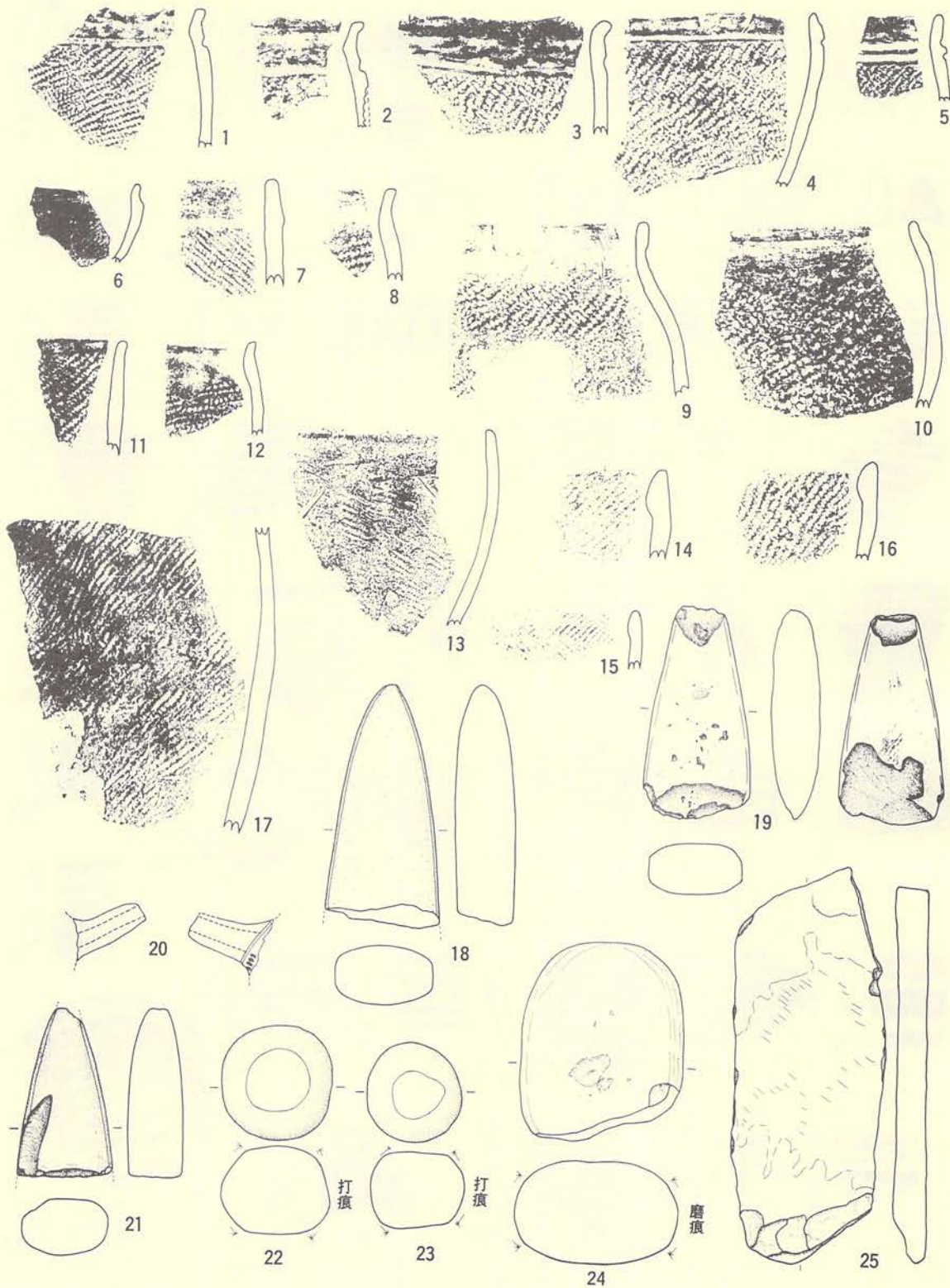


第57图 H56—1·2住居址出土遺物(1)

1~11·15 S=1/4
 12~14·16~20 S=1/2
 他 S=1/4

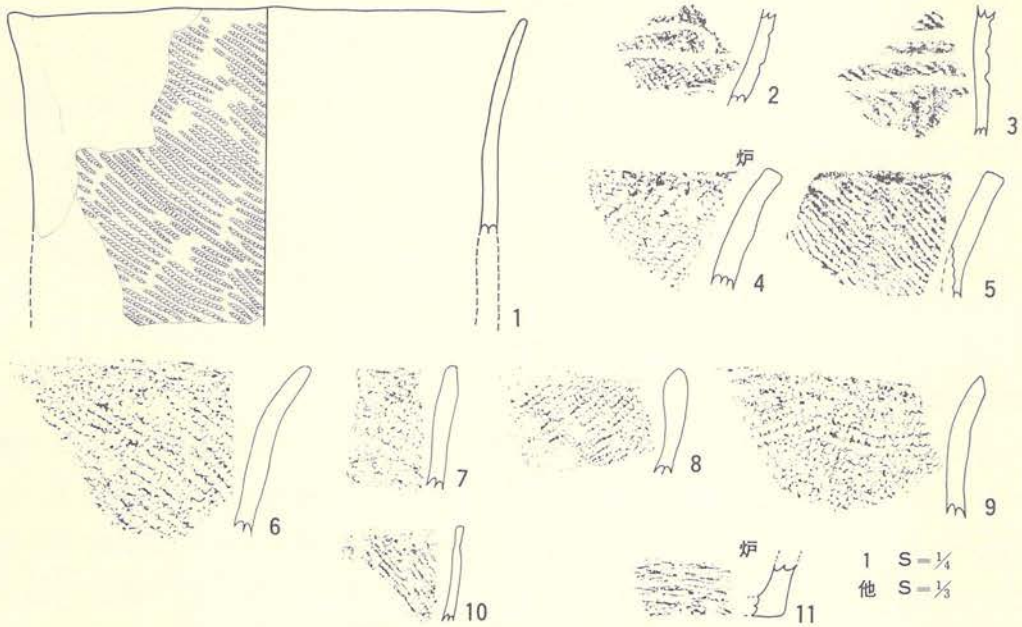


第58图 H56—1·2住居址出土遺物(2)



第59图 H56—1·2住居址出土遺物(3)

25 S=1/6
他 S=1/3



第60図 G57住居址出土遺物

G57住居址 (第53図、図版19)

(検出・埋土) G56住居址精査中において、遺構南側で炉を検出したのに伴い、重複した遺構の広がりとして確認された。埋土はG56住居址と同様に、黒～黒褐色砂質土である。(平面形) 当遺構はG56住居址とH56-2住居址と重複し、南側は削平されているために、規模・形態は不明である。(重複) 重複する3棟の新旧関係は、H56-2住居址が当遺構を切っていることから、新しい順に①H56-2住居址、②G56住居址、③G57住居址となる。(床面) G56住居址と高低差はなく、ほぼ平坦で全体的にしまっている。(柱穴・周溝等) 検出されない。

(壁) 壁は不明瞭なⅢ～Ⅴ混合層(黒色砂質土)中に存在するために、検出できなかった。

(炉) 北側が開く縦36cm、横35cmのコ字状を呈す石囲炉がある。石は3ヶ使用しており、床を5～10cm程掘りこみ、やや八字状に据えられている。焼土の形成は確認されない。

(遺物) (第60図、図版41)

炉址焼土下面から、外反口縁片(4)と条痕土器片(11)が出土したほかは、すべて埋土出土品である。埋土中でも、特に炉址の南辺上から南へ次第に高く、斜面上に堆積するような状態で、土器片が集中していた。それらは外反口縁の粗製土器片が多い。

D58住居址 (第56図、図版20)

(検出・埋土) 丘陵南斜面のⅢ～Ⅴ混合層中において検出した。埋土はⅢ～Ⅴ混合土を含む黒～黒褐色砂質土の2層に分けられる。(平面形) 円形に近い楕円形状を呈し、長径2.1m、短径1.9mである。長軸は北北西-南南東を指す。(床面) Ⅲ層中にあり、軟らかく不明瞭である。

(柱穴・周溝等) 柱穴と周溝は検出されない。(壁) 高さは15～35cmで、床上より緩やかな傾斜で立ち上がる。(炉) 南壁際に三方を石で囲った石囲炉がある。縦35cm、横40cmで西側の石

は一部欠落しているものの、やや開き気味のコ字状を呈す。焼土は径30cmの円形を呈し、厚さ4cmでレンズ状に堆積する。

(遺物) (第62図の1～8、図版41)

ほぼ床面と見なせる高さから、粗製土器と共に縄文地に沈線文を施したもの(7)が出土した。これに磨消縄文土器片(3・4)が伴う。

D59住居址 (第61図、図版20)

(検出・埋土) 尾根最南端のII～VI層混合土中において、角礫の散布する部分をくくって掘り下げ確認した。埋土は、黒色土の単層で石片が混入する。(平面形)不明瞭である。北～北東壁のみ辛うじてとらえられたが、他は不明。北半の形状では隅の丸い方形となるが、確かなことは分らない。3.5m×3.5m以上の規模があるもよう。(床面) V層が所々に露出しほぼ平坦であり、若干の踏みしめもある。(柱穴・周溝等)認められない。(壁)北半もあいまいで、他の部分は全く確認できない。北壁の高さは25cm程である。(炉)南壁寄り(?)に直径約60cmの円形石囲炉がある。南西側の極く一部に石がない。角張った石を7枚使用している。焼土上面は床面より心持ち低い。焼土の形成は良くない。

(遺物) (第62図の9・10、図版41)

炉の東、床上10cm位のところから土器片が集中的に出土した。(9)は太細合わせ撚りのLRである。

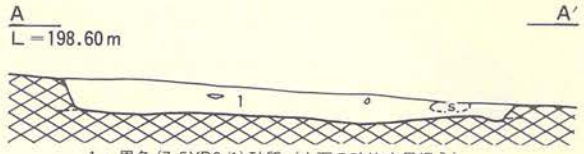
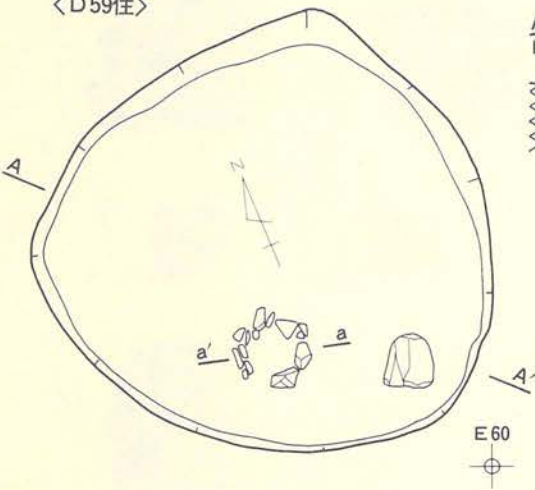
C60住居址 (第63図、図版21)

(検出・埋土) 調査区南端部西側のトレンチ掘りの際に、V層上面で検出した。埋土は黒色シルト質土の3層に分けられる。(平面形)遺構の西側 $\frac{2}{3}$ 以上は調査区域外に存在し、南側はC61住居址と重複しているために、詳細な規模・形態は不明である。(重複)当遺構がC61住居址によって切られていることから、新旧関係は(新)C61住居址、(旧)C60住居址となる。(床面)南部浮石が一部混入するVI層上面にあり、平坦で堅くしまっている。(柱穴・周溝等)柱穴・周溝とも調査区域内においては確認されなかったが、調査区域外に存在する可能性もある。(壁)高さは北壁45cm、東壁70cmで、床上よりやや緩やかな傾斜で立ち上がる。(炉)検出されない。

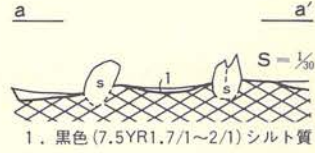
(遺物) (第62図の11～29、図版42・54)

床面出土品はない。土器はハリコブ付磨消縄文が顕著である。高台つき浅鉢(11)の場合、磨消部分は斜めに削り取っており、浮彫的表現となっている。

<D59住>

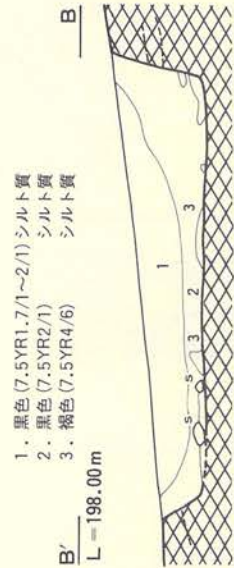
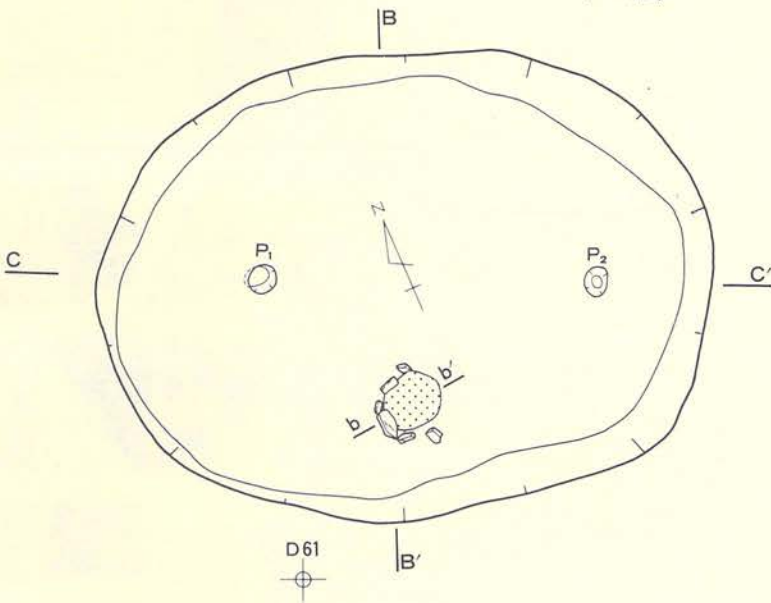


1. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質 (小石の破片少量混入)



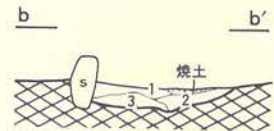
1. 黒色 (7.5YR1.7/1~2/1) シルト質

<D60住>



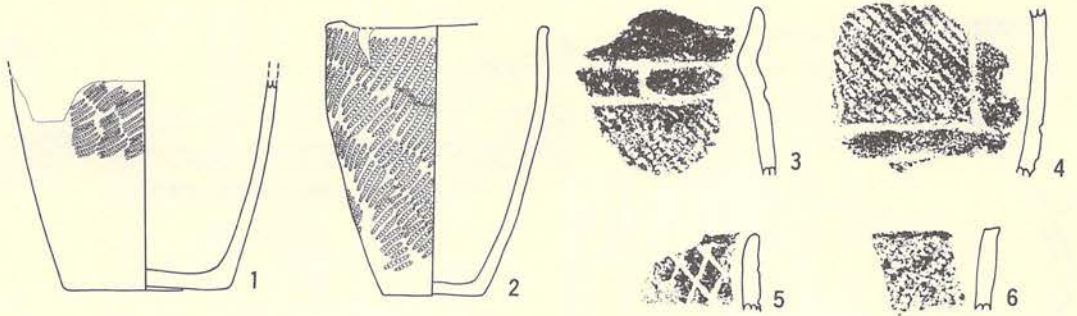
1. 黒色 (7.5YR1.7/1~2/1) シルト質
2. 暗褐色 (7.5YR2/1) シルト質
3. 褐色 (7.5YR4/6) シルト質

1. 褐色 (7.5YR4/4~4/6) シルト質
2. 暗褐色 (7.5YR3/3~3/4) シルト質
3. 褐色 (7.5YR4/6) シルト質

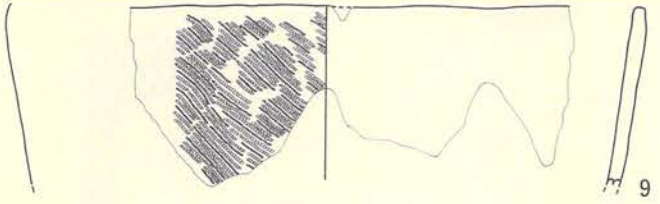


S = 1/30

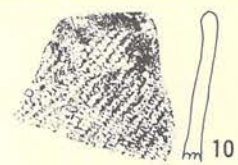
第61図 D59・D60住居址



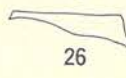
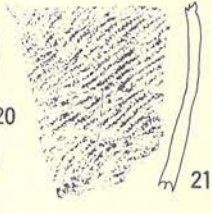
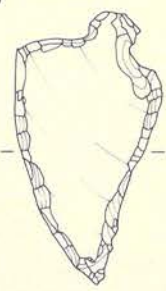
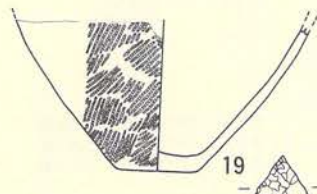
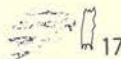
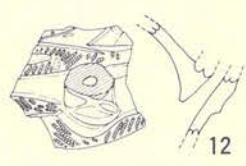
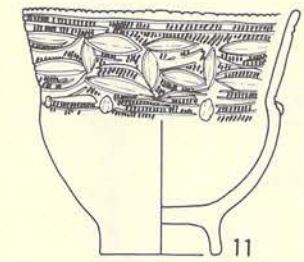
D58住



D59住

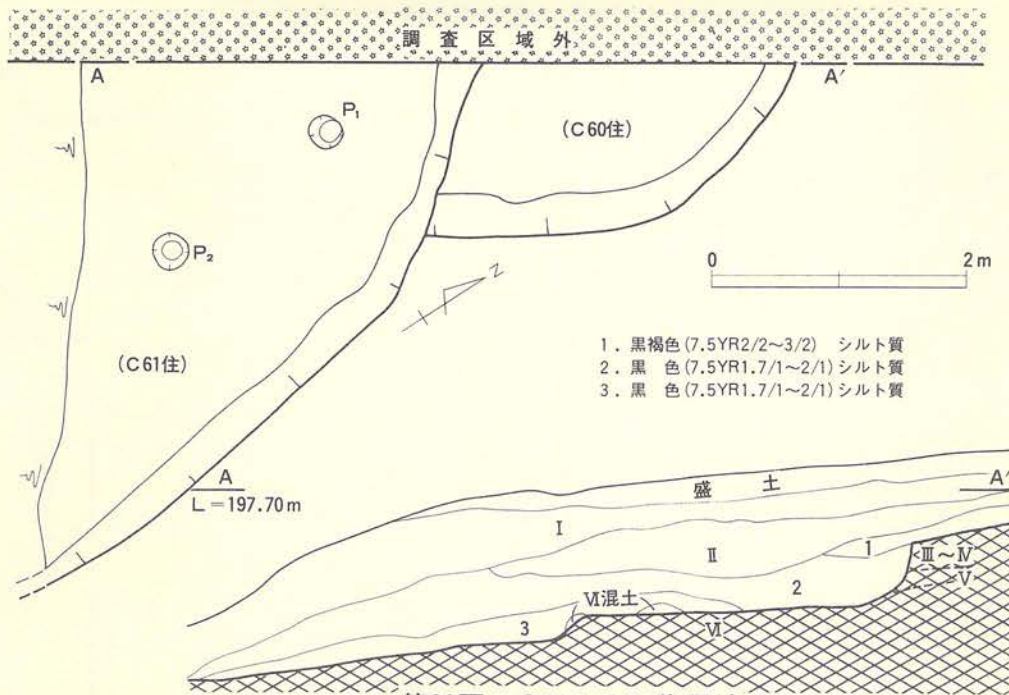


C60住



1・2・9・11・19 S = 1/4
 24~26 S = 1/2
 他 S = 1/4

第62図 D58・D59・C60住居址出土遺物



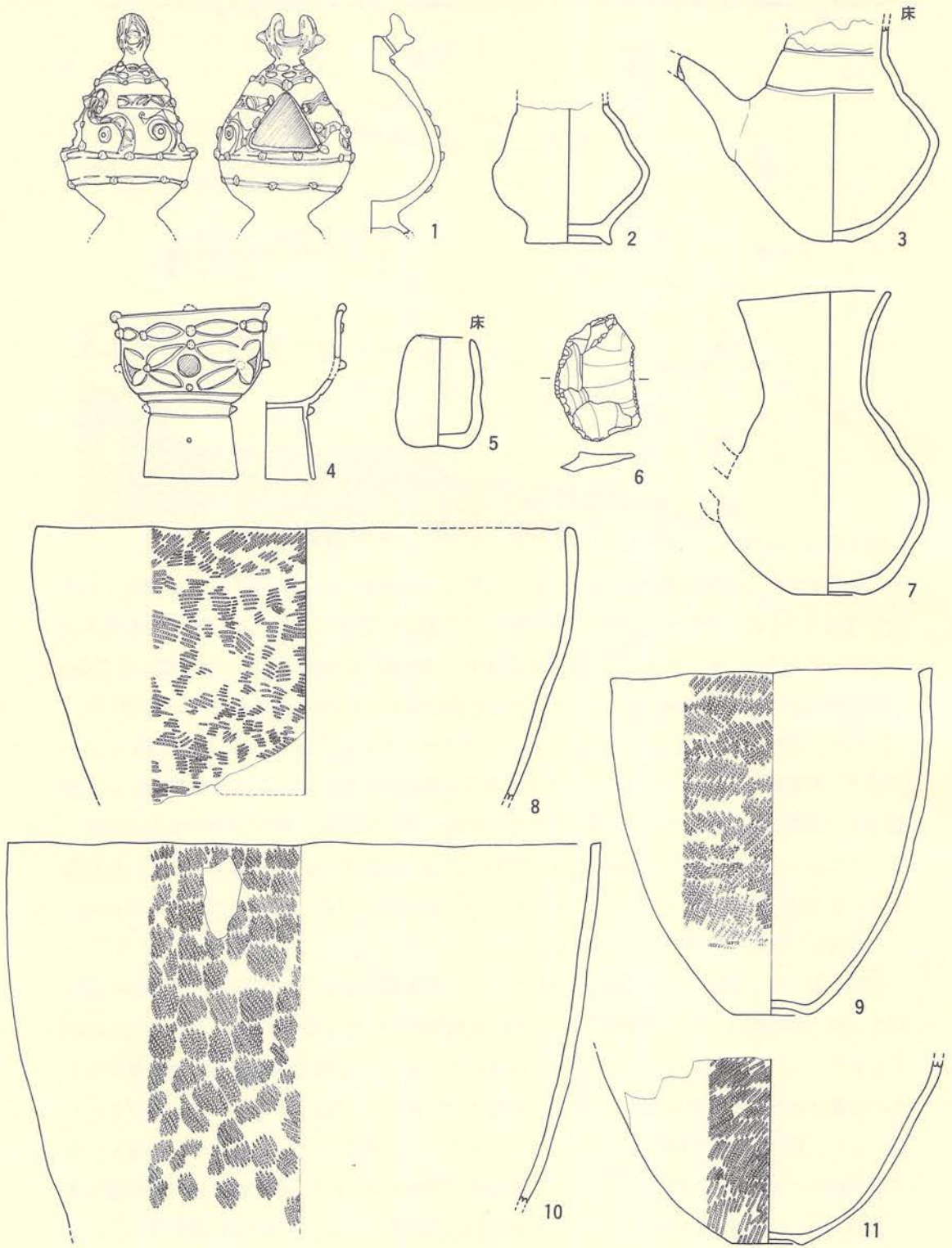
D60住居址 (第61図、図版21)

(検出・埋土) 遺跡南端部の斜面上にあり、III～V混合層中において検出した。埋土は粒径0.5～1cm大の浮石を含む黒色シルト質土である。(平面形) 長径4.7m、短径3.6mの少し歪みのある楕円形を呈し、長軸は西北西—東南東を指す。(床面) VI層中にあり、平坦で堅くしまる。南壁際の床上10cmに縦30cm、横6cm、厚さ6cmの長方形に広がる白色粘土塊が認められた。

(柱穴・周溝等) 柱穴はP₁(径20cm×22cm、深さ40cm)、P₂(径18cm×22cm、深さ50cm)の2ヶであり、長軸線上に位置している。周溝等の施設は検出されない。(壁) 高さは東壁45cm、西壁55cm、南壁30cm、北壁78cmで、床上より急な傾斜で立ち上がる。(炉) 遺構中央部より南壁寄りに縦50cm、横35cmのコ字状を呈す石囲炉がある。一部の石は欠落し乱れている。石質はチャートと粘板岩である。炉内には径40cmの円形を呈す焼土が厚さ2cmで、形成されている。

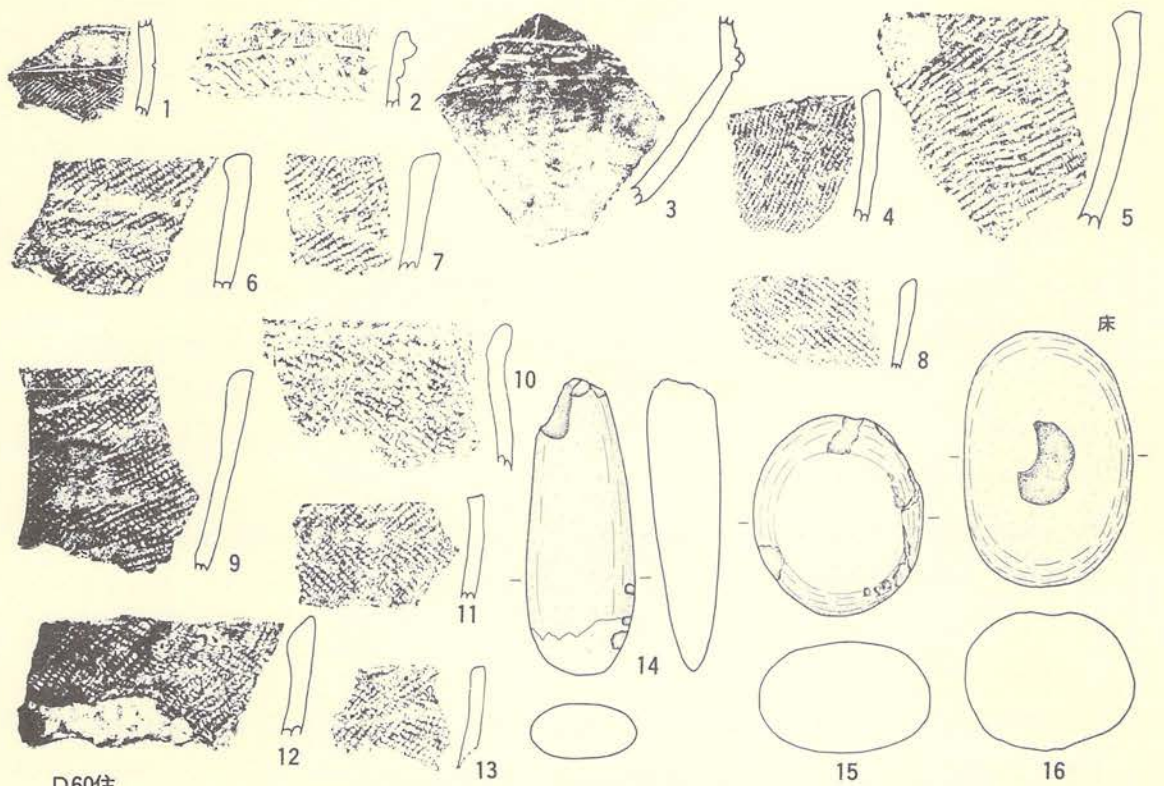
(遺物) (第64・65図の1～16、図版42・48)

壁際と床上から多数の完形土器が出土している。北壁際の凹石(第65図の16)、北西の柱穴脇の小鉢(第64図の5)、西壁際の注口土器(第64図の3)以外は、床上から10cm以内に集中しており、しかも壁際から流れこむような状況が見られた。住居址廃棄後それほどたないうちに投棄されたものと思われる。一組のものと考えられる。第64図でいえば、香炉形(1)、壺(2)、壺にほとんど同じ形の注口土器(3・7)、三角形(2ヶ1対)と円形の透しのある台付鉢形(4)、ぐいのみ形(5)、底部があげ底風でゆるやかに内湾する器形の粗製深鉢の大形(8・10・11)と中形(9)が、同時使用の土器群となる。装飾に富む香炉形には、上部の飾りに斜めの孔が穿たれ、やはり装飾豊かな4の台には、1ヶと2ヶ1対の小孔がみられる。石斧(第65図の14)は、刃部のみ研磨されており、他の部分は微細な打痕を残している。

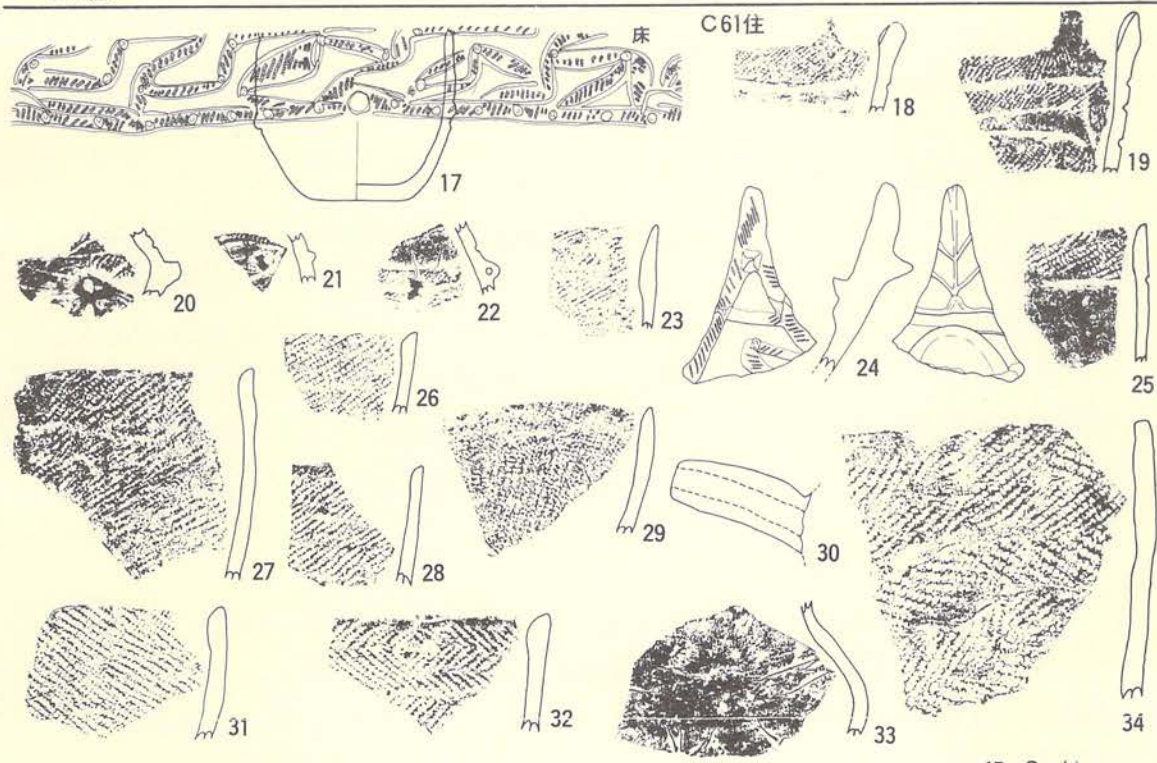


第64图 D60住居址出土遺物

6 S=1/2
 他 S=1/4



D60住



C61住

第65图 D60・C61住居址出土遺物

17 S=1/4
他 S=1/2

これはさらに敲石としても使用されており、頭部が欠損している。

C 61住居址（第63図、図版21）

（検出・埋土）南端部西側のトレンチ掘りの際に、V層上面から一部はVI層上面において検出した。埋土は黒色シルト質の2層である。（平面形）遺構の西側半分は調査区域外に存在し、南側は削除され崖に続いているために、規模・形態は不明である。検出された平面形は円弧状を呈している。（重複）C 60住居址と重複しており、当遺構が切っていることからみて、C 60住居址が古い。（床面）C 60住居址の床面より17～20cm低く、多少凹凸があるもののほぼ平坦で堅くしまる。（柱穴・周溝等）小穴はP₁（径24cm×26cm、深さ43cm）、P₂（径27cm×29cm、深さ26cm）の2ヶがあり、埋土状況等から柱穴と考えられる。（壁）高さは60～70cmと深く、床上からやや急な傾斜で立ち上がる。（炉）調査区域内では検出されないが、調査区域外に存在の可能性もある。

（遺物）（第65図の17～34、図版42）

東壁際床面より半分埋設した状態で、上端の欠けた注口土器（17）が出土した。ハリコブつき磨消文が施されており、注口は竹管等を用いる挿入式である。

（2） 炉址

C 57炉址（第66図、写真図版34）

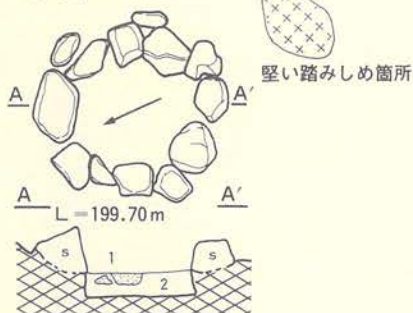
（検出）南斜面下部西側のトレンチ断面のⅢ～Ⅴ混合土層中に石を確認した。炉以外は確認できなかった。（平面形）直径80cmの円形を呈し、この遺跡では比較的大形の石13ヶで全周を囲む。（焼土）石の上端から焼土上面まで20cm下がる。焼土は北半に偏在し、厚さは4～5cmと良く焼けている。（その他）炉の南側23cmのところ踏みしめられて堅くなった部分があった。東西34cm、南北23cmの卵形である。これ以外の床面は確認できず、壁も柱穴も検出できなかった。

（遺物）炉周辺からは全く何も出土しなかった。

H 57炉址（第66図、図版34）

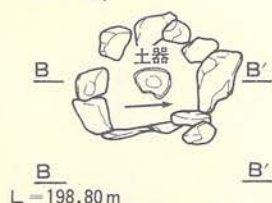
（検出・埋土）H 56住居址の南西側において、Ⅲ～Ⅵ層混合土下部において確認した。炉の周辺の土は、近辺の地山と全く区別できず、住居址の輪郭を把握できなかった。（平面形等）炉以外一切不明。炉は10ヶの石をD字形（方形の変形と思われる）に並べている。南北65cm、東西50cm弱の大きさで、中央に土器の底部を埋めこんでいる。焼土は一部に塊も見られるが、全般に余り良く形成されていない。

(C57炉址)



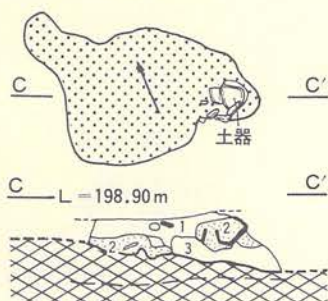
1. 明赤褐色 (5 YR 5/8) 焼土
2. 黒色 (7.5 YR 1.7/1) 砂質シルト

(H57炉址)

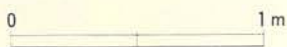


1. 黒色 (7.5 YR 2/1) 砂質シルト
(少量焼土を含む)

(E58土器埋設炉)



1. 暗赤褐色 (5 YR 4/2) シルト質
2. 赤褐色 (5 YR 4/8) 焼土
3. 黒色 (7.5 YR 2/1) シルト質



第66図 炉址・土器埋設炉

(遺物) (第67図の1)

火熱ですっかり焼けて脆くなった土器の底部である。胎土中に小石を僅少含んでいる。施されている縄文は、器面の荒れのため原体は不明である。

E58土器埋設炉 (第66図)

(検出) 尾根南端部の南側斜面Ⅲ～Ⅳ混合層下端において検出した。(形状) 検出した時点で、土器の周りには不整形の梨形状を呈す焼土が縦80cm、横50cm位で広がっていた。土器も火熱を受け赤変している。焼土は厚さ10～15cmあり、僅かに炭を含有する。(その他) 炉の北東側約1.5mの所に、壁の下端部らしき立ち上がりを確認したものの、住居址の輪郭・形態等は把握できなかった。

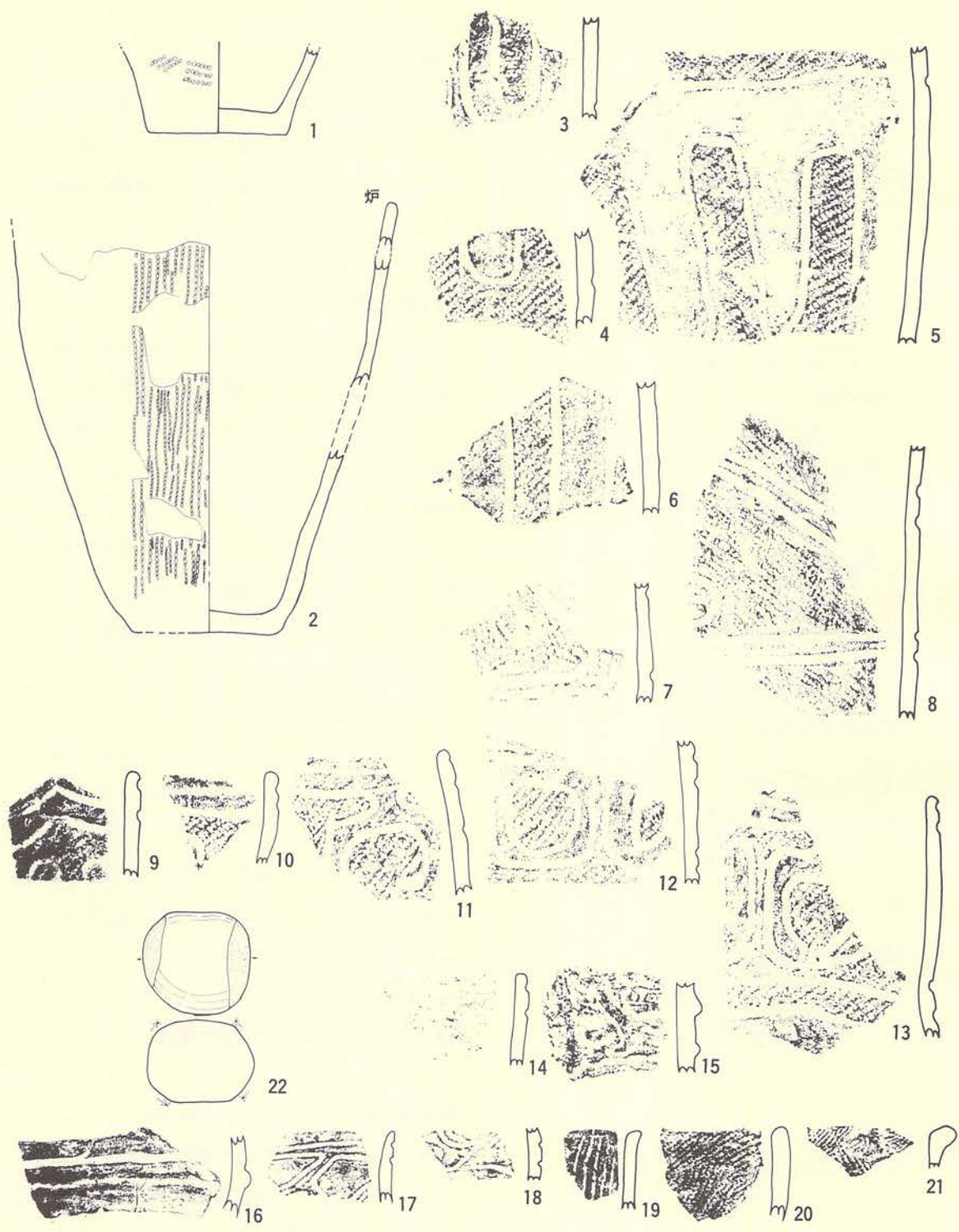
(遺物) (第67図の2～21、図版45)

炉に埋設されていたのは、縦の撚糸文Rが施された深鉢(2)である。周辺からは、方形と円形の組み合わせ文(11～13)、逆山字文(5)など特異な磨消縄文の施されたものや、無文地に沈線文が施されたものが出土している。なお、19は炉埋設土器の口縁部片である。

(3) 埋設土器・配石遺構

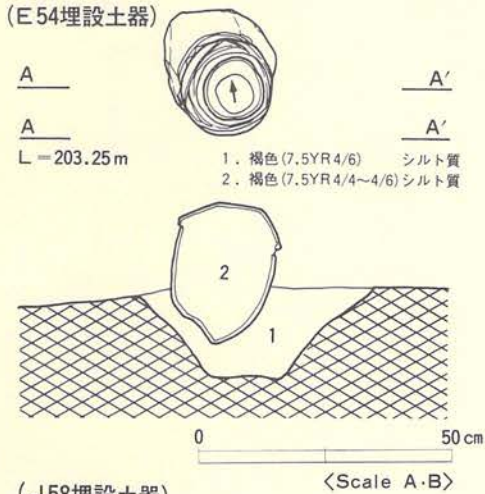
J51埋設土器 (第69図の3、図版33)

(検出) J51住居址の北東壁より約60～80cmの地点のⅢ層上面で、口を北東に向けた横転状態の壺と、壺の口縁部の南側に、やはり横転状態で底を南に向けた高坏の台部を検出した。(周辺状況) 掘りこみは認められず、これ以外の遺

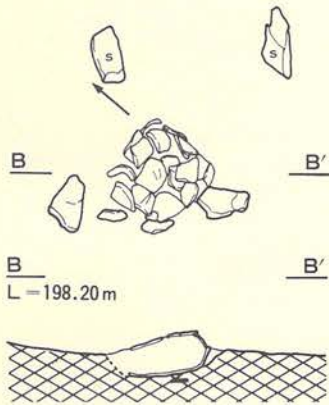


第67図 H57炉址・E58土器埋設炉・周辺出土遺物

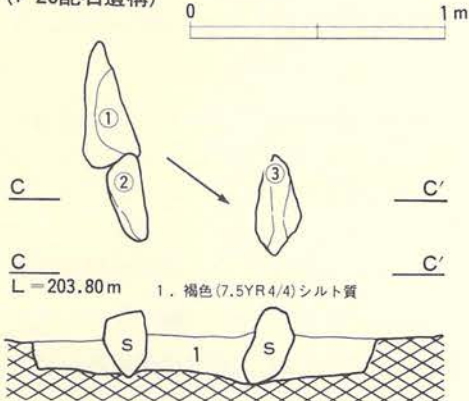
1・2 S=¼
他 S=½



(J 58埋設土器)



(F 26配石遺構)



第68図 埋設土器・配石遺構

物は出土していない。焼土等も検出されない。

(遺物) (第69図の3、図版44)

壺は肩が張る形のもので、全面がよく研磨されている。口縁上端外面に変形工字文、内面に1本の沈線が施され、頸部にも沈線状の段がある。火の影響か体部の器面は薄く剥げたり荒れている。口縁部は光沢を残している。底部周縁は摩滅している。台は、壺の赤褐色と対照的に黒褐色の色調で、内外面とも光沢がある。単純な円筒形だが下端部が僅かに開く。下端に2本、上端に1本の沈線がめぐる。上面、即ち鉢の底部中心に直径2cmの円文を沈線で表わしている。(その他) 壺の中からの出土品はなかった。

E 54埋設土器 (第68・69図、図版33)

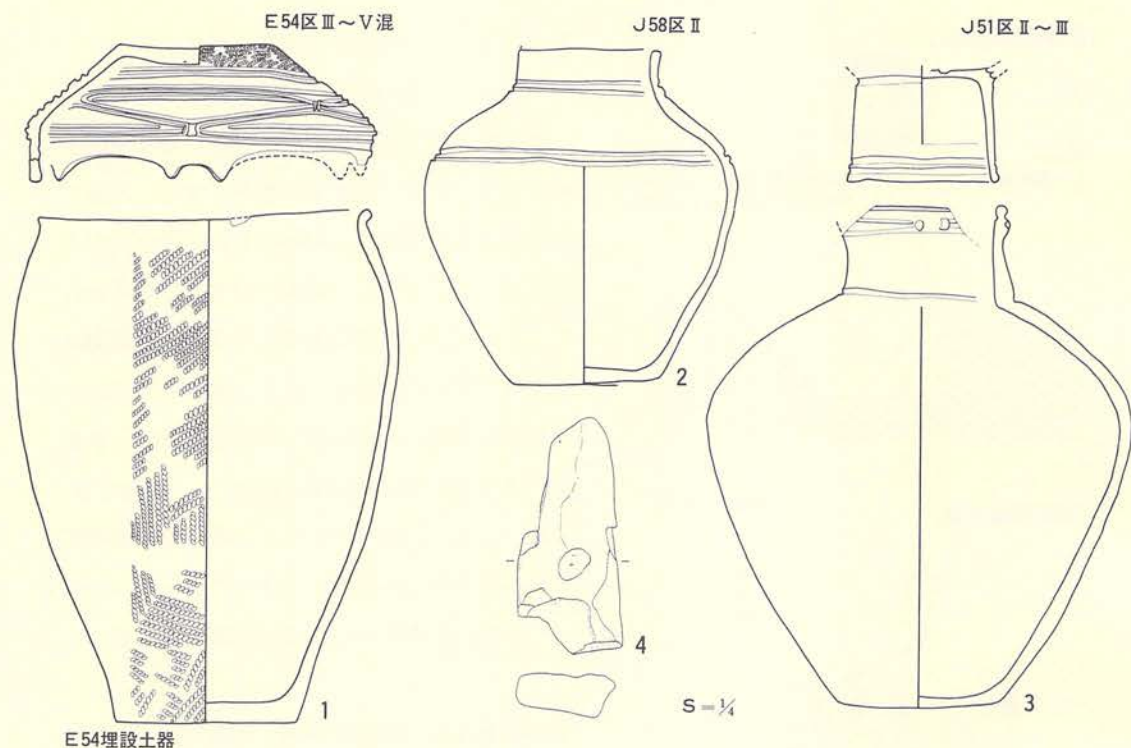
(検出) D 54住居址の北東壁の70cm外側のIII～V層混合土層中で、ほぼ正立する深鉢と、それに蓋をするように逆さに載る浅鉢を検出した。(周辺状況) 土器は、検出面から35cm程掘り下げられた穴(上半の断面は確認できず)の底から8cm程浮いた状態に埋められている。

(遺物) (第69図の1、図版44)

深鉢は、口縁部が内湾し巾5mm程の上端部は若干外反する。縄文LRは、多様に回転施文されている。浅鉢は5ケの双丘形突起のうち2ケが欠けている。外面は上4分の3位に変形工字文と沈線文が、下方には縄文RLが施される。色調は、鉢が明褐色、台はにぶい褐色である。(その他) 土器の内部からは何も検出されなかった。

J 58埋設土器 (第68図、図版33)

(検出) I 57住居址の南東壁外50cmのII層中



第69図 E 54・J 58埋設土器・その他

で、口を北東に向けた横転状態で、砕けた壺のみが検出された。(周辺状況)掘りこみは確認できなかったが、周辺から6ケの石片が、あたかも壺を囲むかのように配されたとも見られる状態で検出された。ただし、南西中央の1ケを除き、土器の最下部より8～13cm低い高さにある。(遺物)(第69図の2・4、図版44)

壺は肩が張り、外面はよく研磨され、肩と頸部に2本ずつの沈線がめぐる。底の周縁は少し摩滅している。色調は明褐色～灰褐色である。

F 26配石遺構 (第68図、図版34)

(検出)尾根中央平坦部北端の鞍部状の地点において、VI層中で確認した。埋設のための掘りこみは確認できなかった。焼土、木炭、火熱痕のいずれも認められない。(配置)や、大きめの3ケの石が、左側が短い八字状に並ぶ。②と③の間隔は45cmである。石は検出面から10cm頭を出し、地下に15～20cm埋まる。②と③の中分線は北東—南西を指す。①は13cm×35cm×27cm、②は15cm×32cm×23cm、③は18cm×47cm×18cmの大きさである。

(4) 土坑

G16土坑 (第70図、図版23)

(検出・埋土) 調査区北端部のⅥ層上部で検出した。埋土は黒色シルト質の単層で、腐葉や果実種子を多く含む。(形状) 開口部、底部共に隅丸方形を呈する。開口部は長軸1.05m、短軸0.9m、底部は長軸1m、短軸0.7m、深さ15cmである。(底面) ほぼ平坦である。(壁) 床と接する部分は丸みをおびる。壁の勾配は垂直に近い。(まとめ) 埋土から出土している植物遺体が極めて新しいことから、ごく最近のものと思われる。(遺物) 前記のもの以外にない。

G18土坑 (第70図、写真図版23)

(検出・埋土) 調査区北端部のⅥ層上部で検出した。埋土は黒色シルト質土の単層で、腐葉や果実種子を多く含む。(形状) 開口部、底部共に隅丸方形を呈する。規模は開口部が長軸0.9m、短軸0.7m、底部が長軸0.55m、短軸0.78m、深さ13cmである。(底面) ほぼ平坦である。(壁) 高さは15cm。床と接する部分は丸みをおびるが勾配は垂直に近い。(まとめ) 埋土から出土している植物遺体が極めて新しいことから、最近の穴と推定される。(遺物) 出土していない。

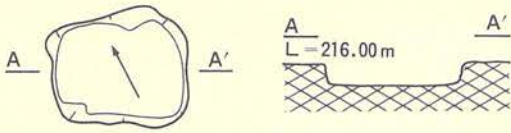
H30土坑 (第70・71図、図版23・43)

(検出・埋土) 尾根中央平坦部の東斜面上部において、土層観察用トレンチによって確認した。埋土の上半は周囲の土と酷似し、Ⅳ層以下の部分のみ識別できた。(形状) 開口部は本来円形であったと思われるが、前記のようなわけで、推定直径1.20mである。底部は直径2.3m弱の円形を呈す。検出面からの深さは中央で1.33m、断面形は台形である。(底面) 平坦で副穴等はない。(遺物) 開口部から少し下の埋土中から、2ヶの環状耳のついた胴張りの小形鉢(第71図の1)が出土した。斜縄文RLの上に縦の綾絡文がつけ加えられる部分もある。また埋土下部から刺突文のある耳飾り(第71図の2)が出土した。埋土出土土器片には、ヒレ状突起を伴う磨消縄文、口縁が外反する粗製がある(第71図3～12)。

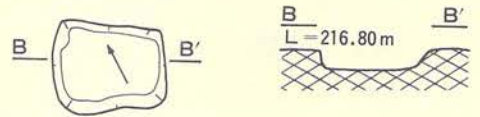
D31土坑 (第70図、図版23)

(検出・埋土) 尾根中央平坦部の少し西寄りのⅥ層の中で、周囲より浮石の含み方が少ない状況によって確認した。埋土は凸状堆積が特徴的で、色調で三層に大別される。(形状) 開口部は0.68m×0.77mの歪円形、底面は1.89m×2.05mの歪円形。深さは1.1mで断面は台形である。(底面) 平らであり、副穴等はない。(遺物) 出土していない。

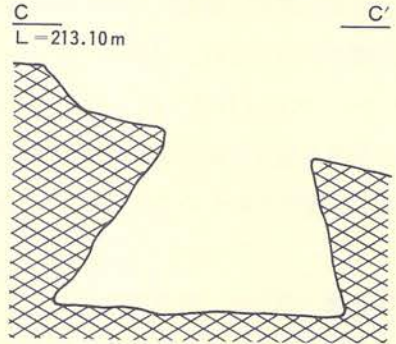
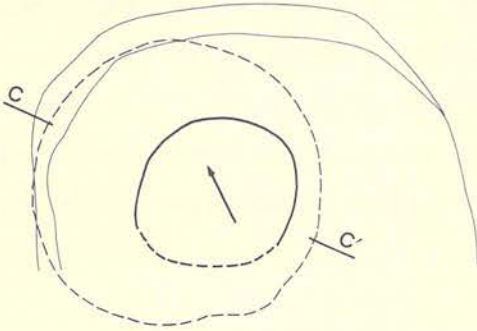
〈G16土坑〉



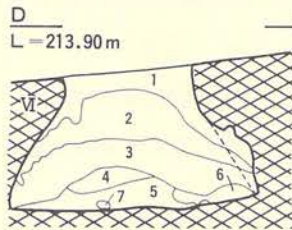
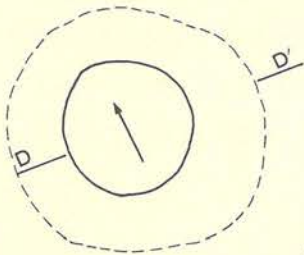
〈G18土坑〉



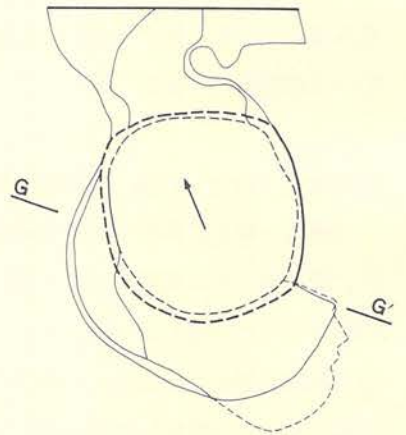
〈H30土坑〉



〈D31土坑〉

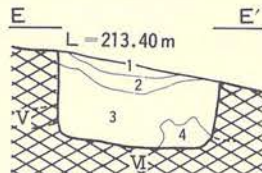
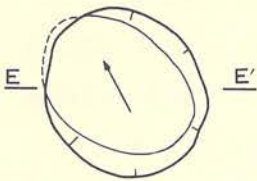


〈G32土坑〉

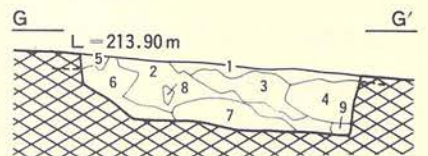


1. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト
2. 明黄褐～黄褐色 (10YR6/8～5/8) 砂質シルト
3. 黄褐色 (10YR5/6～5/8) 砂質シルト
4. 黄褐～褐色 (10YR5/6～4/6) 砂質シルト
5. 黑褐色 (10YR2/2～2/3) 砂質
6. 明黄褐～黄褐色 (10YR6/8～6/5) 粘土質シルト
7. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質シルト

〈G31土坑〉

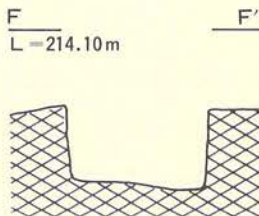
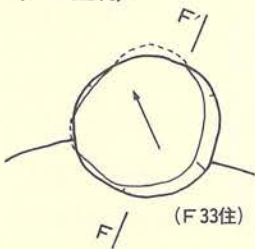


1. 暗褐～黑褐色 (10YR3/4～3/2) 砂質
2. 黑褐色 (10YR2/3) 砂質
3. 黑褐色 (10YR2/2) 砂質
4. 黑褐色 (10YR2/2) 砂質



1. 黑褐色 (10YR3/2) 砂質
2. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質
3. 褐色 (10YR4/6) 砂質
4. 黄褐色 (10YR5/6) 粘土灰
5. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質
6. 褐色 (10YR4/6) 砂質
7. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質
8. にぶい黄褐色 (10YR5/4) 砂質
9. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質

〈F32土坑〉



第70図 土坑(1)

G31土坑（第70図、図版24）

（検出）尾根中央平坦部の東斜面上部において、Ⅲ～Ⅵ層混合土層中のⅥ層起源の明色土によって確認した。大部分黒色土で単層に近いが、上面に比較的明色の薄層がのる。（形状）開口部径1.36m × 1.23m、底部径0.95m × 1.3mの南北に長い楕円形を呈し、深さは0.65mで断面は方形である。（底面）ほぼ平坦であり、副穴等はない。（遺物）出土していない。

F32土坑（第70図、図版4）

（検出・埋土）F33住居址の北東壁を切りこんでおり、周囲より僅かに暗色である。埋土はや、暗色の上層と明色の下層に分けられる。（形状）開口部は1.10m × 1.15m、底部は0.95m × 1mの円形で、深さは0.65m前後、断面形は方形である。（底面）ほぼ平坦で副穴等はない。（遺物）埋土中から沈線文土器と口縁外反粗製土器の破片が出土した（第71図の13～19）。

G32土坑（第70図、図版24）

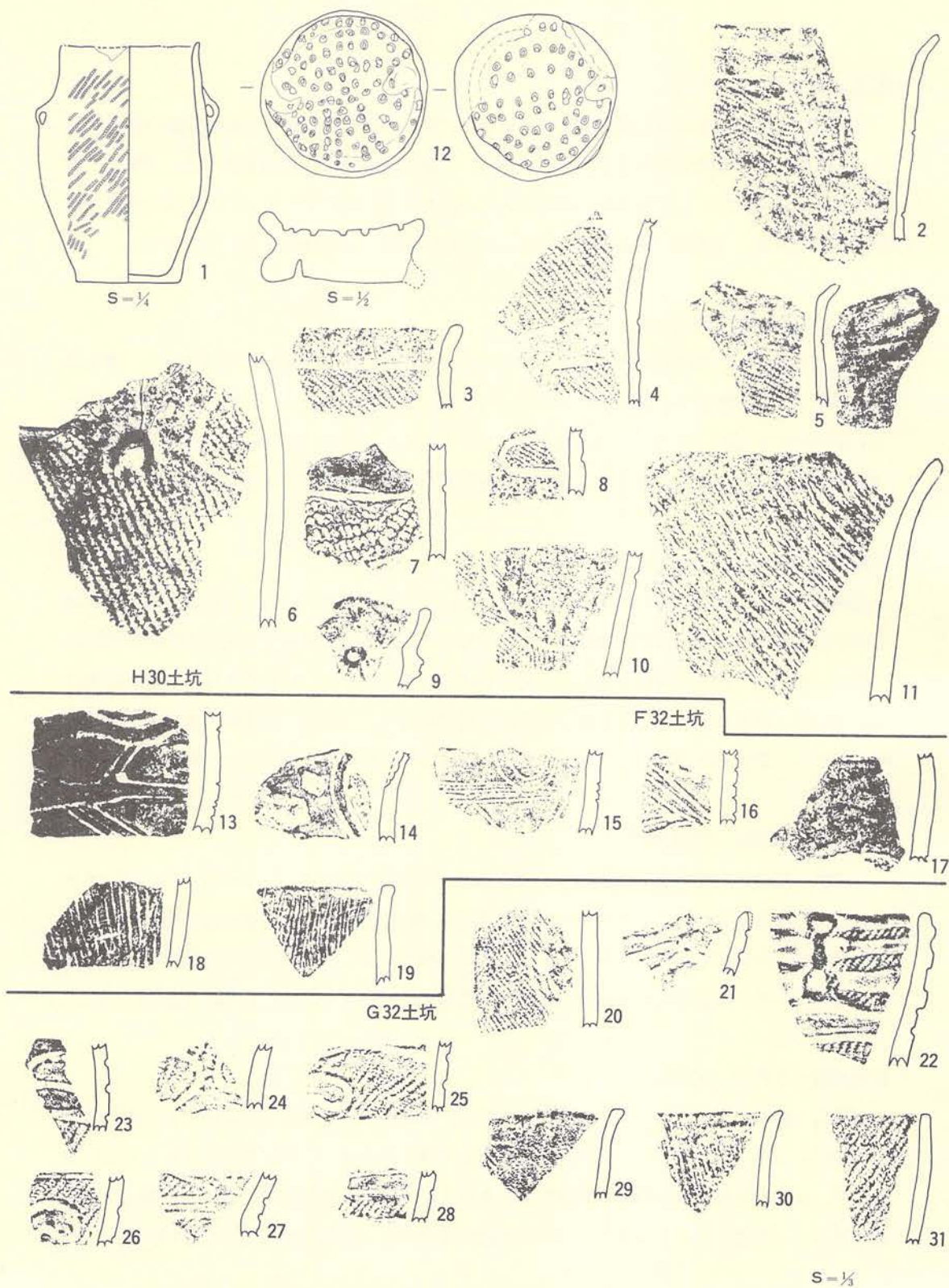
（検出・埋土）尾根中央平坦部の東側において、Ⅵ層土中の暗色土により確認した。埋土は上の方ほど暗色のⅥ層起源の砂質シルトの単層であるが、周囲のⅥ層との境界が不明瞭である。（形状）掘りこみ状況不明確であるが、開口部はおよそ直径1.6m、底部も大体これに近いものと思われる。深さは0.4m位で、断面は方形の土坑であろう。（底面）不明確である。（遺物）埋土中から、磨消縄文、隆帯を伴う磨消縄文、口縁外反の粗製の土器片出土（第71図20～31）。

C33土坑（第72図、図版24）

（検出・埋土）尾根中央平坦部の少し西寄り、Ⅵ層中の暗色部として確認した。埋土は単層といってよく、埋め戻しの可能性がある。（形状）開口部は0.7m × 0.75mの歪円形、底部は1m × 1.15mの卵形であり、深さは0.5m、断面は台形である。（底面）ほぼ平坦である。（遺物）埋土中から、擬似羽状縄文と磨消縄文の施された土器小片が出土した（第73図の1・2）。

D33土坑（第72図、図版25）

（検出・埋土）C33土坑の東1m余のところ、Ⅵ層中の暗色部として確認した。埋土は上部が暗色、下部は明色である。（形状）全体として過小な遺構で、開口部は0.5m × 0.5mの不定形、底部は0.25m × 0.38mの不定形、深さ0.5m、断面が楕錐形の、掘りかけのような遺構である。（底面）斜めになっているのが特徴的である。（遺物）出土していない。



第71图 H30 · F32 · G32土坑出土遺物

E 33土坑 (第72図、図版25)

(検出・埋土) E 34住居址の直ぐ北に接して、VI層土中の暗色部として確認した。埋土は木炭粒を僅かに含む暗色土の単層で、ソフトロームの塊が混入しており、明らかに埋め戻されている。(形状) 開口部は0.95m × 1.05m、底部は0.85m × 0.85mの少し歪んだ円形、深さは0.45mで、断面では少し上が開く。(底面) 平らである。(遺物) 出土していない。

F 33土坑 (第72図、図版25)

(検出・埋土) F 33住居址床面の東寄りの部分の暗色部として確認した。埋土は少し軟らかい砂質シルトで、褐色(7.5YR4/4)である。F 33住居址との前後関係は不明である。(形状) 開口部は直径0.8mの円形、底部は0.55m × 0.72mの歪円形、深さ20cm前後、断面は少し上開きである。(底面) 大体平らである。(遺物) 出土していない。

G 33土坑 (第72図、図版25)

(検出・埋土) 尾根中央平坦部の東側斜面上部において、V層中の暗色部として確認した。埋土は3層に大別され、中層は木炭粒を含み、下層はV層土が塊状に入る。(形状) 開口部は2.15m × 2.2mの円形、底部は1.3m × 1.4mの歪円形、深さは中央で0.55m、斜面上位側で0.75mで浅い土坑である。特徴的なのは、壁面が2～3段の棚状になっていることで、右回りの渦巻状に底の方へ下りてゆくような感じである。(底面) 平らであり副穴等はない。(その他) 掘りかけの可能性がある特異な形状の土坑である。(遺物) 埋土中から、磨消縄文、無文地上沈線文、複合口縁の粗製、外反口縁の粗製の土器片が出土した(第73図の3～9)。

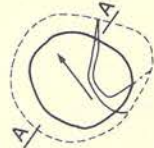
C 34土坑 (第72図、図版25)

(検出・埋土) 尾根中央平坦部の僅かに西寄りのVI層中の暗色部として確認した。埋土は、上部から暗一明一暗と三分され、全体に木炭粒が混入する。(形状) 開口部は1m × 1.1mの歪円形、底部は1.15m × 1.35mの北北東一南南西に長い卵形、深さは0.5mで断面形は台形である。(底面) 僅かに中央が低い。(遺物) 埋土中から、磨消縄文と、複合口縁の土器片が出土した(第73図の10～12)。

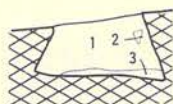
G 34土坑 (第72図、図版50)

(検出・埋土) 尾根中央平坦部東斜面上部のIII～V層混合土層中において、浮石の少ない明色部として確認した。埋土は斜面上方からの流入堆積状況を示すが、斜面下方側にVI層の投入のためと思われる乱層がある。(形状) 開口部は2.25m × 2.5mの東西に長い歪円形、底部は

<C33土坑>

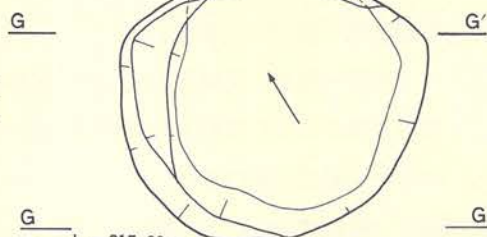


A A'
L = 203.90m

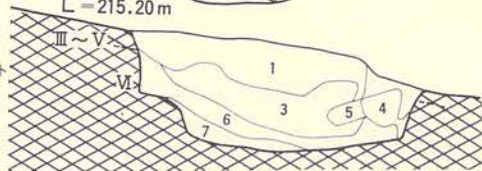


1. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト
2. 明褐色 (7.5YR5/6~5/8) 砂質シルト
3. 明黄褐色 (10 YR6/6~6/8) 砂質シルト

<G34土坑>



G G'
L = 215.20m

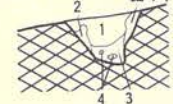


1. 褐色 (7.5YR4/3) 砂質シルト
2. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト
3. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質シルト
4. 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質シルト
5. 褐色 (7.5YR5/6) 砂質シルト
6. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト
7. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト

<D33土坑>

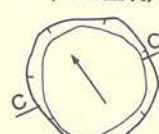


B B'
L = 213.90m 掘りすぎ

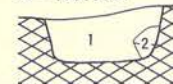


1. 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質シルト
2. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質シルト
3. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質シルト
4. 褐色~暗褐色 (7.5YR4/3~2/3) 砂質シルト

<E33土坑>



C C'
L = 199.10m



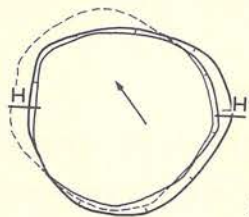
1. 暗褐色~極暗褐色 (7.5YR3/3~2/3) シルト
2. 明褐色~褐色 (7.5YR5/6~4/6) 粘土質シルト

<F33土坑>

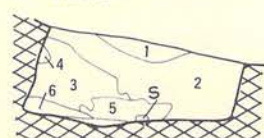


L = 213.50m

<G35-1土坑>

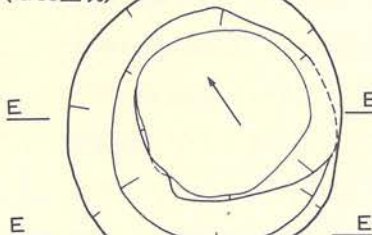


H H'
L = 212.90m



1. 褐色 (7.5YR4/6~4/4) 砂質シルト
2. 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質シルト
3. 極暗褐色 (7.5YR2/3) 砂質シルト
4. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト
5. 明褐色 (7.5YR5/6) シルト質粘土
6. 褐色 (7.5YR4/4) シルト質粘土

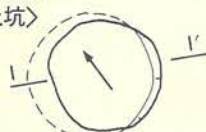
<G33土坑>



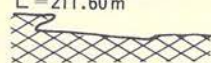
E E'
L = 212.80m

1. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質シルト
2. 暗褐色 (7.5YR3/3~3/4) 砂質シルト
3. 黒褐色 (7.5YR2/2) 砂質シルト
4. 橙~明褐色 (7.5YR6/8~5/8) 砂質シルト
5. 暗褐色 (7.5YR3/3) 砂質シルト

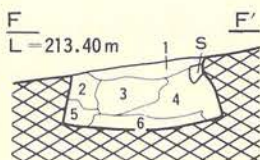
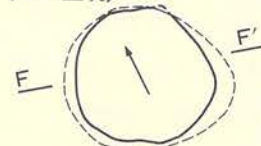
<G35-2土坑>



I I'
L = 211.60m



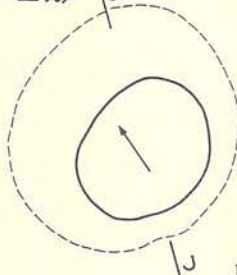
<C34土坑>



L = 213.40m

1. 褐色 (7.5YR4/4) 砂質シルト (木炭粒を含む)
2. 明褐色 (7.5YR5/6) 砂質シルト (木炭粒を含む)
3. 明褐色~褐色 (7.5YR5/6~4/6) 砂質シルト (木炭粒を微量に含む)
4. 明褐色 (7.5YR5/8~5/6) 砂質シルト (木炭粒を含む)
5. 明褐色 (7.5YR5/8) 砂質シルト
6. 褐色 (7.5YR4/6~4/6) 砂質シルト

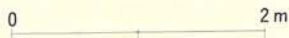
<C36土坑>



J J'
L = 213.30m



1. 褐色 (10YR4/4) 砂質シルト
2. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質シルト
3. 黒褐色 (10YR2/2~2/3) 砂質シルト
4. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質シルト
5. 暗褐色~黄褐色 (10YR3/3~5/8) 砂質シルト
6. 明褐色~黄褐色 (10YR6/8~5/6) 粘土質シルト
7. にぶい黄褐色 (10YR5/3~4/3) 砂質シルト



第72図 土坑(2)

1.85m × 2.1 m の南北に長い菱形に近い歪円形、深さは中央で0.9 m、断面形は少し上開きとなる。斜面上方側は崩れている。(底面)中央が少し凹む。(遺物)埋土中から、磨消縄文、外反口縁の土器片および敲石兼用磨石が出土した(第73図の13~18)。

G35-1 土坑 (第72図、図版43)

(検出・埋土)尾根中央平坦部東斜面上部のVI層面の暗色部として確認した。埋土は斜面上方からの流入堆積状況を示す。(形状)開口部は1.5m × 1.6m の歪円形、底部は1.45m × 1.55 m の方形に近い円形、深さは中央で0.6m、断面では斜面上方側が逆傾斜している。(底面)平らで副穴等はない。(遺物)埋土中から、浅鉢完形品と削器、および磨消縄文、複合口縁の土器片が出土した(第73図の19~23)。

G35-2 土坑 (第72図、図版36)

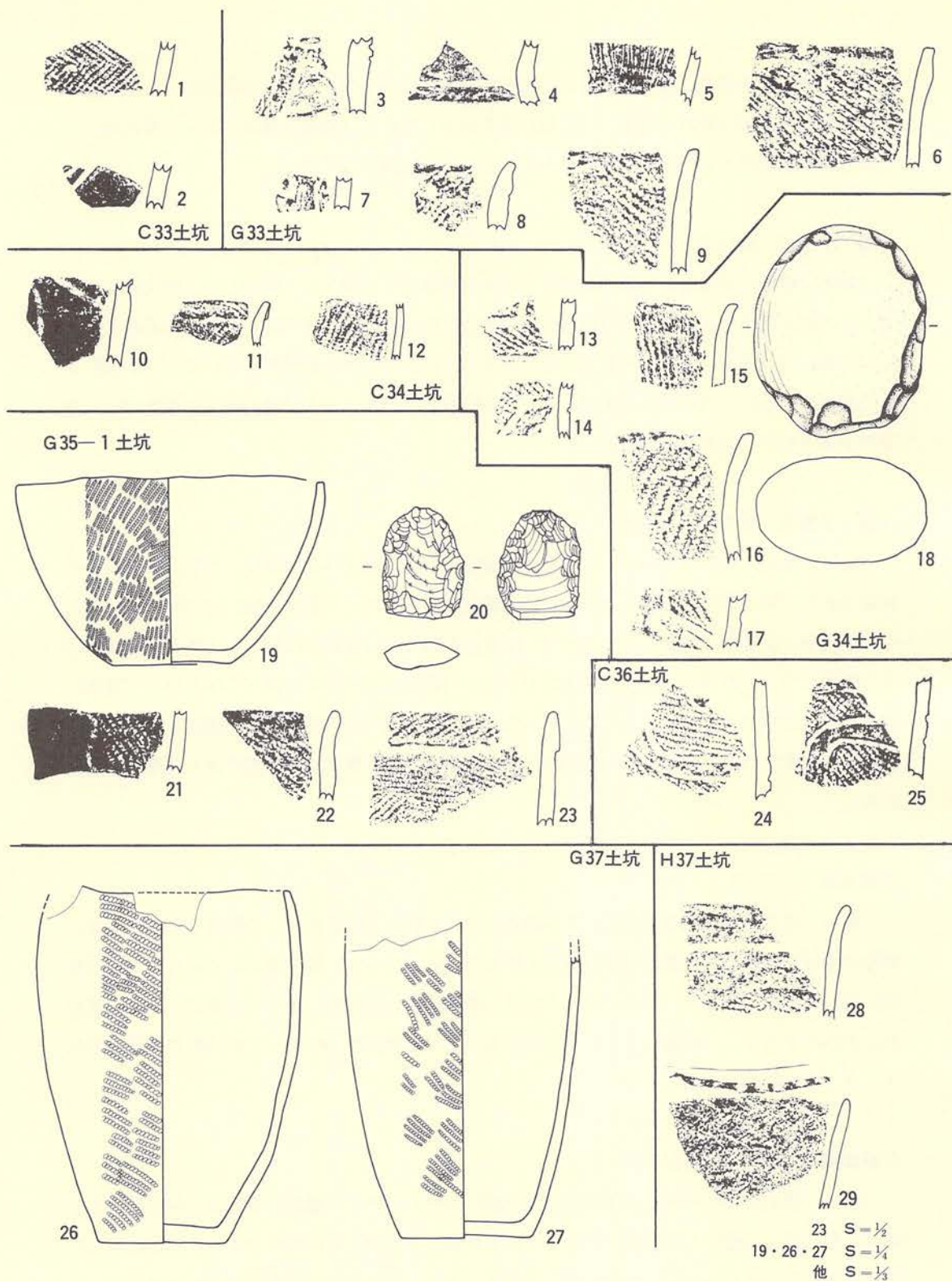
(検出・埋土)G35住居地の炉の直ぐ東に接している。埋土は、黒色(7.5YR2/1)砂質土の単層である。埋土の状況ではG35住居址との新旧関係は不明。(形状)開口部は0.85m × 0.9 m の歪円形、底部は0.95m × 1 m の円形、深さは0.5m 位で、断面形は斜面上方寄りか逆傾斜の平行四辺形で、いわゆるフラスコ状土坑である。(底面)平らであり副穴等はない。(遺物)埋土下半に比較的大きな川原石が2ヶあった。うち1ヶは半球状で平面部に石皿ないし砥石としての滑面がある(第13図の4)。底部西壁際から倒立状態の無文の小形壺が出土した(第13図の5)。

C36土坑 (第72図)

(検出・埋土)尾根中央平坦部の僅か西寄り、VI層面の暗色部として確認した。埋土は、壁際の中位に壁面ないし開口部の崩落土を挟んでいる。(形状)開口部は0.95m × 1.15m の東西に長い楕円形、底部は1.75m × 2 m の北東-南西に長い楕円形、深さは中央で1.35m、断面形は台形状である。(底面)平らで副穴等はない。(遺物)埋土中から、磨消縄文土器片が出土した(第73図の24・25)。

G37土坑 (第74図、図版26)

(検出・埋土)尾根中央平坦部の東斜面上部において、III~V層混合土層中の暗色部として確認した。埋土は壁際と中央部の2層に分けられる。(形状)開口部は2.6m × 2.65m の方形に近い形、底面は2.3m × 2.4m のやはり方形状である。ただし壁面は不明確な部分が多い。深さは0.3m、床面は斜面下方に向かって低くなる。(底面)不明確であり、V層上面をもって底



第73图 C33·G33·C34·G34·G35-1·C36·G37·H37土坑出土遺物

面と見なした。(その他)底面の傾斜は自然面の可能性が強い。全体的に不明確である。(遺物)埋土中から、口縁が内湾する粗製土器2ヶが出土した(第73図の26・27)。

H37土坑(第74図、図版26)

(検出・埋土)G37土坑の東に接して、III～V層混合土層中の軟らかい暗色部として確認した。埋土は単層に近い。(形状)開口部は1.8m×1.9mの歪円形、底部は1.2m×1.65mの北西—南東に長い楕円形、深さは中央で0.6m余、斜面上方で0.75m、断面形は少し上開きである。(底面)V層中にあり、若干の起伏がある。(遺物)埋土中から、磨消縄文や口唇に刺突のある土器片が出土した(第73図の28・29)。

H43土坑(第74図、図版26)

(検出・埋土)南斜面上部、H43住居址の東方1.6mの地点で、III～VI混合層中の暗部として確認。埋土は上下2分され、下層の方が暗色である。(形状)開口部は1.7m×1.95m、底部は1.95m×2.2mのいずれも北北東—南南西に長い楕円形、深さは0.5m、断面は上方の方が垂直に近くなる台形状を呈す。(底面)VI層上面に留まる。小さな凹凸が見られる。(遺物)磨消縄文、縦の綾絡文の伴う粗製、外反口縁の粗製土器片、敲石兼用磨石が埋土中から出土した(第78図の1～4)。

E45土坑(第74図)

(検出・埋土)E45住居址の南壁検出中に確認した。E45住居址より古い。埋土はIII～VI層混合砂質シルトの単層で、小粒の浮石を多量含んでいる。(形状)開口部は0.65m×1.2m、底部は0.6m×1.05mの西北西—東南東に長い長方形、深さは0.5m、断面は少し上開きである。(底面)ほぼ平らである。(遺物)出土していない。

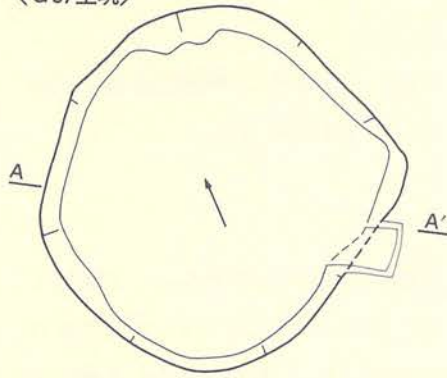
G45土坑(第74図)

(検出・埋土)G45住居址内の北西寄り床面において確認した。埋土は、中位と壁際に壁面の崩落土を挟む。上層は軟らかく下層は堅い。(形状)開口部は少し崩れているが直径0.6m前後の円形、底部は1.15m×1.20mの円形、深さ0.77m、断面形は下半が少し膨らむ台形状である。(底面)平らで副穴等はない。(遺物)底から粗い磨消文の土器片が出土した(第78図の5)。

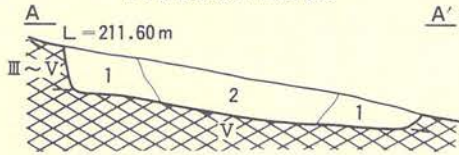
D46土坑(第74図)

(検出・埋土)E45住居址の南西1mの地点で、土層断面の観察によって確認した。埋土は

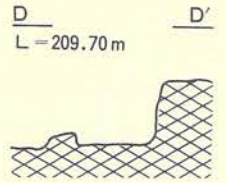
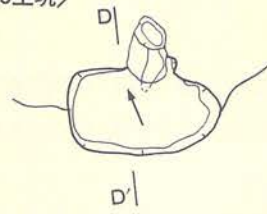
<G37土坑>



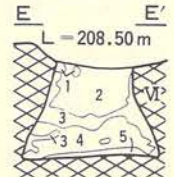
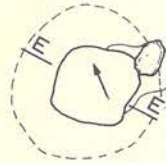
1. 黒色(7.5YR2/1)砂質
2. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質



<E45土坑>

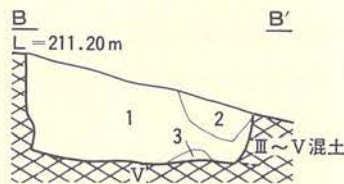
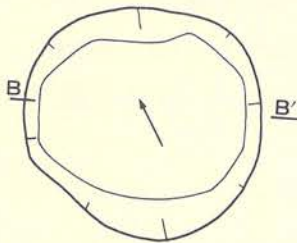


<G45土坑>



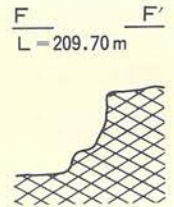
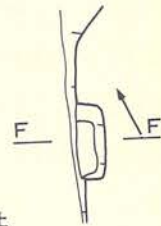
1. 黄褐色(10 YR5/8)砂質シルト
2. 黒色(10 YR2/1)砂質シルト
3. 黄褐色(10 YR5/6)砂質シルト
4. 極暗褐色(7.5YR2/3)砂質シルト
5. 明黄褐~黄褐色(10YR6/6~5/6)砂質シルト

<H37土坑>

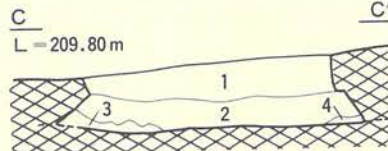
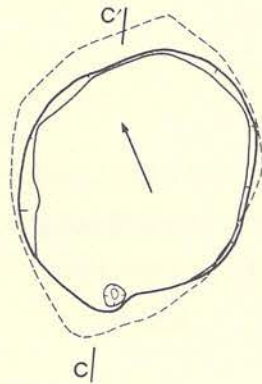


1. 黒色(7.5YR2/1)砂質
2. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質
3. 黒褐色(7.5YR3/2)砂質

<D46土坑>

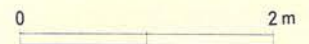
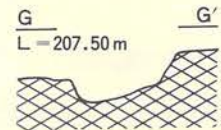
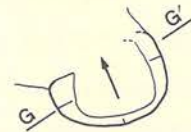


<H43土坑>



1. 褐~暗褐色(7.5YR4/4~3/4)砂質シルト
2. 黒~黒褐色(7.5YR2/1~2/2)砂質シルト
3. 黒褐色(7.5YR2/2)砂質シルト
4. 暗褐色(7.5YR3/4)砂質シルト

<D48-1土坑>



第74図 土坑(3)

V～VI層混合土の単層で上半は周囲の土と区別できない。(形状)北西半は既に削り取られている。開口部は縦0.6m横0.23m+ α 、底部は縦0.45m横0.15mの、北北東—南南西に長い長方形、検出面からの深さ0.55m、壁は垂直のようである。(底面)VI層上部まで掘りこまれ、ゆるくくぼむ。(遺物)出土していない。

D48-1 土坑 (第74図)

(検出・埋土) D47住居地の南東隅に重複している。住居地との新旧関係は不明。埋土は小粒の南部浮石を少なからず含むIII～VI層混合砂質シルトの単層である。(形状)開口部は直径0.8～0.9mの歪円形、底部は0.65m×0.45m+ α の隅丸方形、深さは0.4m、断面は上開きである。(底面)鍋底状でなだらかにD47住居地の床に続く。(遺物)出土していない。

D48-2 土坑 (第75図)

(検出・埋土) D48住居地にすっぽり入りきる形で重複している。埋土の状況から土坑の方が新しい。(形状)埋土断面から推定される開口部は直径1.2m程の円形、底部は1.75m×1.8mの円形、深さは0.8m余、断面形は台形である。(底面)VI層中にあり大体平らである。(遺物)埋土から台付鉢(第25図の15)、沈線文土器片(第78図の7)が出土した。

D49 土坑 (第75図、図版27)

(検出・埋土)西側土層断面の観察によって確認した。埋土は黒色(7.5YR2/1)砂質土の単層である。(形状)北西側の大部分が削り取られているものの底面はかなり残っている。開口部は推定2m余の円形、底部は1.7m×1.3m+ α の円形、深さは推定0.7m、断面は少し上開きになるらしい。(底面)中央が少しくぼみ、副穴等はない。(遺物)埋土から、石皿の破片が出土した(第78図の8)。

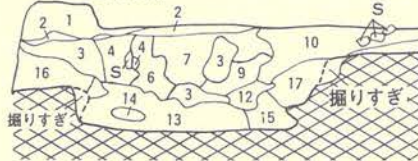
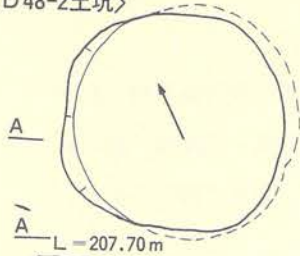
E49-1 土坑 (第75図、図版27)

(検出・埋土) E50住居地の北東壁に重複する。床面の色調の変化により確認した。住居地より新しい。埋土は凹状の堆積で、斜面上方からの流入が明らかである。(形状)開口部は推定直径1m位の円形、底部は1.4m×1.5mの円形、深さは1.28m、断面形は上方が垂直に近く立ち上がる台形である。(底面)平らで副穴等はない。(遺物)出土していない。

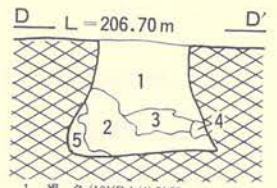
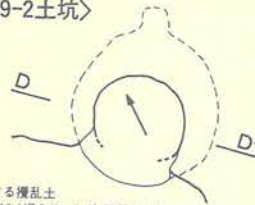
E49-2 土坑 (第75図、図版27)

(検出・埋土) E50住居地の北東壁と重複し、E49-1土坑の50cm東側にある。住居地の床

<D48-2土坑>

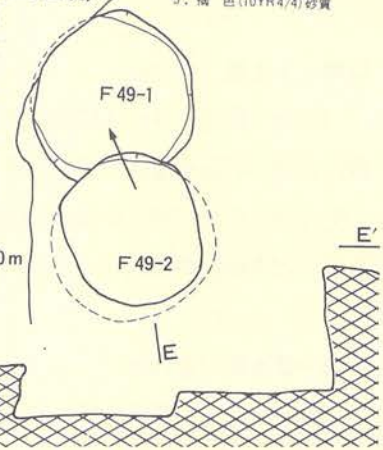


<E49-2土坑>



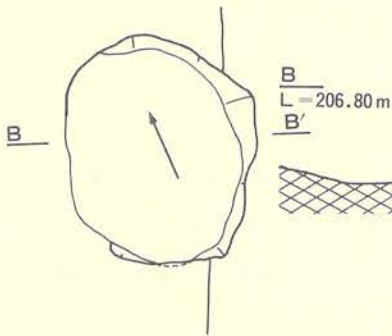
1. 刃層を主体とする攪乱土
2. 黒褐色 (10 YR3/2~2/2) 砂質シルト
3. 暗褐~黒褐色 (10 YR3/3~2/3) 砂質シルト
4. 黒褐色 (10 YR2/3) 砂質シルト
5. 黄褐~褐色 (10 YR5/6~4/6) 砂質シルト
6. 暗褐色 (10 YR3/4) 砂質シルト
7. 黒褐色 (10 YR2/3) 砂質シルト
8. 暗褐~黒褐色 (10 YR3/3~2/3) 砂質シルト
9. 黒褐色 (10 YR2/3) 砂質シルト
10. 褐~暗褐色 (10 YR4/4~3/4) 砂質シルト
11. 暗褐色 (10 YR3/3) 砂質シルト
12. 黒褐色 (10 YR2/2) 砂質シルト
13. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト
14. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト
15. 黒褐色 (10 YR2/2~2/3) 砂質シルト
16. 褐色 (7.5YR4/6) 砂質シルト
17. 褐色 (10 YR4/4) 砂質シルト

<F49-1・2土坑>



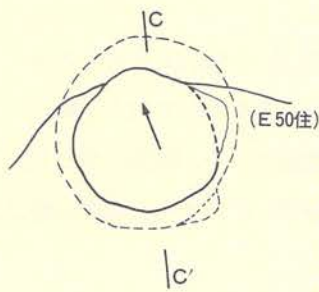
1. 褐色 (10YR4/4) 砂質
2. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質
3. 褐色~黄褐色 (10YR4/4~5/6) 砂質
4. 褐色 (10YR4/4) 砂質
5. 褐色 (10YR4/4) 砂質

<D49土坑>

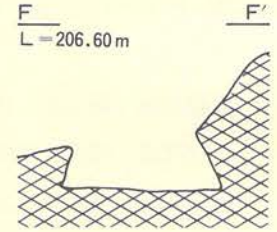
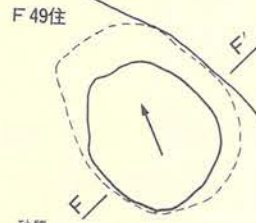


L=206.60m

<E49-1土坑>

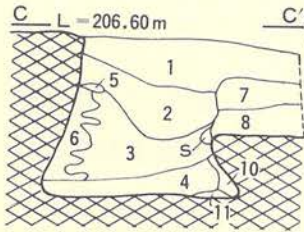
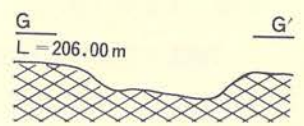


<F49-3土坑>



1. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質
2. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質
3. 黒褐色 (10YR2/2~2/3) 砂質
4. 黒褐色 (10YR2/2~2/3) 砂質
5. 黒褐色 (10YR2/2~2/3) 砂質
6. 褐色 (10YR4/6) 砂質
7. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質
8. 黒褐色 (10YR2/3~3/3) 砂質
9. 暗褐色 (10YR3/3) シルト質
10. 暗褐色 (10YR3/4) 砂質
11. にぶい黄褐色 (10YR7/4) シルト質

<F49-4土坑>



第75図 土坑(4)

面の色調の変化によって確認した。埋土が住居址内にはみ出しているから、住居址より新しい。埋土は上半は明色、下半は暗色である。(形状) 開口部は直径0.7mの円形、底部は1.15m×1.25mの歪円形、深さは0.9m、断面形は上方が垂直に近い台形である。(底面) 平坦である。北東壁下部に巾20cm、奥行20cmのポケット状部分がある。(遺物) 出土していない。

F49-1 土坑 (第75図)

(検出・埋土) F49住居址の北西壁に切りこんでいる。F49住居址およびF49-2土坑より新しい。埋土は壁面の崩落土以外は区分しにくい暗色土(暗褐色～黒褐色、10YR3/4～2/2、砂質)で、単層に近い。(形状) 開口部は1.25m×1.3m、底部は1.2m×1.2mの歪円形、深さは1m、断面形では北西壁が逆傾斜している。(底面) 中央が僅かに凹む。(遺物) ない。

F49-2 土坑 (第75図)

(検出・埋土) F49住居址の北西壁内側にあり、F49-1土坑に切られている。F49住居址埋土中において確認している。埋土は下半のみ図化したのが、最下層の中央は凸状堆積である。

(形状) 開口部は1.05m×1.23mの南北に長い楕円形、底部は1.25m×1.30mの円形、深さは中央で0.45m、断面形は台形である。(底面) ほぼ平らである。(遺物) 埋土から、沈線文土器片が出土した(第78図の9)。

F49-3 土坑 (第75図)

(検出・埋土) F49住居址の北東壁に切りこんでおり、F49住居址の焼土を切っている。埋土は大部分が黄褐色ないしにぶい黄褐色(10YR7/6～4/3)の砂質シルトである。埋め戻しの可能性がある。(形状) 開口部は1.05m×1.15m、底部は1.2m×1.55mのいずれも北西-南東に長い楕円形、深さは1.1m、断面形は台形である。いわゆるフラスコ状土坑であるが、形状が中途半端である。(底面) 平らであり副穴等はない。(遺物) 出土していない。

F49-4 土坑 (第75図)

(検出・埋土) F49住居址の東寄り床面の暗色部として確認した。F49住居址の焼土が載る。埋土は、下層に明色土が凹状に堆積しその上に黒褐色砂質シルトが載る。(形状) 開口部は1.2m×1.7mの不整形、底部は0.6m×1.3mの不整形、深さは0.3m、断面形は鍋底状である。

(底面) 木根様小凹凸が目立つ。(遺物) 埋土から複合口縁土器片が出土した(第27図の30)。

D50土坑 (第76図)

(検出・埋土) E50住居址の西壁に切りこんでおり、住居址より新しい。西側土層断面で予想していた土坑である。埋土は周囲と底に明色土、中心部に暗色土が堆積し、共に多量の南部浮石が入る。(形状) 開口部は0.85m×1m、底部は0.7m×0.8mの南北に長い楕円形、深さは0.5m、断面形は鍋底状である。(底面) 副穴等はない。(遺物) 出土していない。

F50-1土坑 (第76図)

(検出・埋土) 南斜面中位のⅢ～Ⅴ層混合土中に一辺三角形の石の載る明暗混合部として確認した。埋土中にⅣ層土の塊が散在する点特徴的である。(形状) 開口部は1.5m×1.6m、底部は1.45m×1.55mの若干東西に長い円形、深さは中央で約0.5m、断面形はほぼ方形である。

(底面) 平らである。西側に巾35cm奥行30cmの張り出しがある。(遺物) 出土していない。

F50-2土坑 (第76図)

(検出・埋土) F50-1土坑の西に接して、それに切られている。埋土は暗色砂質シルトの単層である。(形状) 開口部は直径0.6mの円形、底部は0.6m×0.65mの台形気味、深さは0.8m、断面では西と南側が逆傾斜である。(底面) 平らである。(遺物) 出土していない。

J50土坑 (第76図、図版27)

(検出・埋土) 南斜面中位から少し下ったところの東斜面のⅢ～Ⅴ層混合土中の暗色部として確認した。埋土は黒褐色砂質シルトの単層である。(形状) 開口部は1.45m×1.55mの短卵形、底部は1.3m×1.3mの歪円形、深さは0.3m、少し上開きである。(遺物) 埋土中から石製の小玉が出土した(第78図の6)。

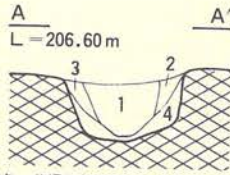
D51-1土坑 (第76図、図版27)

(検出・埋土) 西側土層断面により確認した。3基の重なりあう土坑(D51-1・2・3土坑)の最も北にある。この3基の新旧関係は不明である。埋土は南部浮石を多量含む黒褐色(10YR2/3)砂質シルトの単層である。(形状) 大半が破壊されており、巾1.1m位、奥行0.3mの底部が残るだけである。推定底径1.5mの円形土坑で、深さは0.7mである。(底面) 中央が少しくぼむ。(遺物) 出土していない。

D51-2土坑 (第76図)

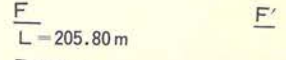
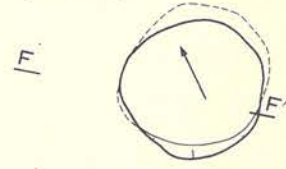
(検出・埋土) D51-1土坑と同じ。(形状) 底面は直径0.9mの歪円形となろう。深さは0.5m、東壁は逆傾斜である。(底面) 中央が少しくぼむ。(遺物) 出土していない。

<D50土坑>



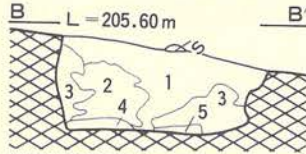
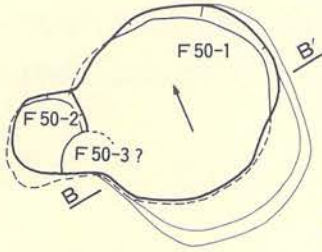
1. 暗褐色～黄褐色 (10YR 3/4～5/6) 砂質
2. 橙色～暗褐色 (7.5YR 6/8～10YR 3/4) 砂質
3. にぶい黄褐色 (10YR 5/4) 砂質
4. 黄褐色 (10YR 5/6) シルト質

<F51土坑>



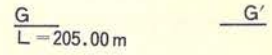
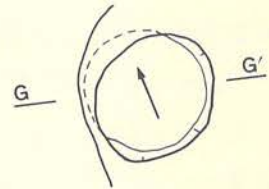
1. 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質
2. 暗褐色 (10YR 3/3) 砂質

<F50-1・2・3?土坑>

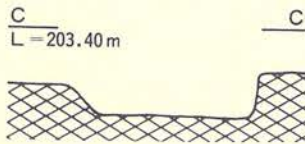
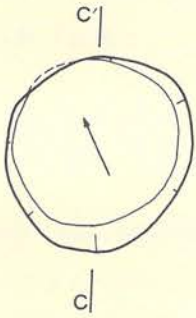


1. 暗褐色 (10YR 3/4) + 黄褐色 (10YR 5/6) 砂質シルト
2. 黒褐色 (10YR 2/3) 砂質シルト
3. 暗褐色 (10YR 3/4) 砂質シルト
4. 黄褐色～褐色 (10YR 5/6～4/6) 砂質シルト
5. 褐色 (10YR 4/4) 砂質シルト

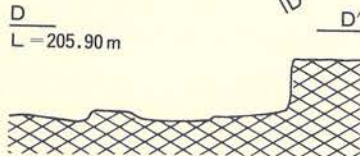
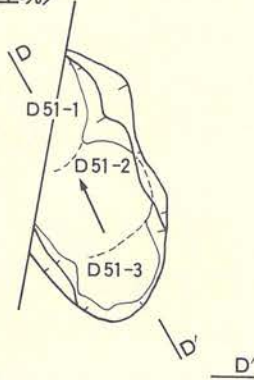
<D52土坑>



<J50土坑>

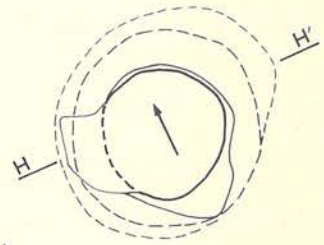


<D51-1・2・3土坑>

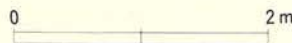
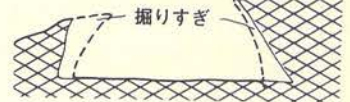
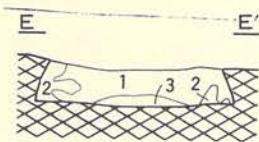
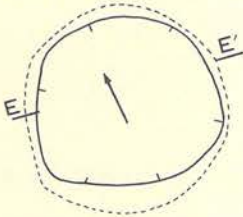


1. 黒褐色 (7.5YR 2/2～1/2) 砂質シルト
2. 褐色 (7.5YR 4/4～4/6) シルト
3. 黒褐色 (7.5YR 2/2～3/2) シルト質

<E52土坑>



<D51-4土坑>



第76図 土坑(5)

D51-3 土坑 (第76図)

(検出・埋土) D51-1 土坑と同じ。(形状) 底面は直径0.6~0.7mの歪円形、深さは0.4mである。(底面) 北に向かって少し低くなる。(遺物) 出土していない。

D51-4 土坑 (第76図)

(検出・埋土) D51-2 住居址の床面の暗色部として確認した。D51-2 住居址より新しくD51-1 住居址より古い。埋土は中央底部に微量の炭を含む土が凸状に堆積している。(形状) 開口部は直径1.37m、底部は直径1.57mの円形、深さは0.34m、断面形は台形である。(底面) 僅かに中央がくぼむがほぼ平坦である。(遺物) 出土していない。

F51 土坑 (第76図、図版28)

(検出・埋土) F51住居址の北西1m弱のところのⅢ~Ⅴ層混合土層中の暗色部として確認した。埋土は単層に近いが、中心部は浮石の含有率が低い。(形状) 開口部は1m×1.1m、底部は1.5m×1.5mの歪円形、深さは0.5m、北東半の壁は逆傾斜である。(底面) 平らであり副穴等はない。(遺物) 出土していない。

D52 土坑 (第76図)

(検出・埋土) E52-2 住居址の北西隅にある。埋土は褐色(7.5YR4/4)砂質のⅢ~Ⅵ層混合土の単層であるが、Ⅴ層土の混入が少ない。土層断面ではE52-2 住居址と同時かより古い。(形状) 開口部は0.8m×0.95mの歪円形、底部は直径1mの円形、深さは0.34m、北西壁は逆傾斜である。(底面) 平らであり副穴等はない。(遺物) 出土していない。

E52 土坑 (第76図)

(検出・埋土) E52住居址の北東隅近くの床面の暗色部として確認した。埋土は褐色(7.5YR4/3)砂質土にⅢ~Ⅵ層混合の黒褐色(7.5YR1/3)砂質土がしみこむ。単層である。住居址埋土断面に掘りこみがないから住居址より古い。(形状) 開口部は1.05m×1m+ α 、底部は不明確なため推定値で直径1.5mの円形、深さ0.7m、断面形は台形である。(底面) Ⅵ層中に深く掘りこまれており、埋土と地山の区別が付きにくい。ほぼ平坦と思われる。(遺物) 埋土から磨消縄文土器片が出土した(第78図の10)。

G52 土坑 (第77図、図版28)

(検出・埋土) 南斜面中位下端のⅥ層上部で、十和田a降下火山灰が埋土の周縁に露出して

いたことから検出した。埋土は4層に分けられ、第2層には十和田a 降下火山灰が厚さ約20cm 堆積する。(形状) 長径3.2m、短径2.5mの東西に長い楕円形で底部は長径2m、短径1.2m、深さは0.75mである。(床面) 楕鉢形に近い。(壁) 勾配は南側が急で北側は緩やかである。

(遺物) 埋土から、口縁欠損粗製土器、口縁上端研磨土器片、口縁内面肥厚土器片が出土している(第78図の11~14)。

I 52土坑 (第38図)

(検出・埋土) I 52-1 住居址内にあり、床面検出後柱穴の中間に確認したものである。住居址に伴うものと思われる。埋土は黒褐色砂質シルトの単層で、周囲より僅かに暗色である。

(形状) 開口部は直径0.6m前後、底部は直径0.5m前後の円形、深さは0.25m、断面形は逆台形である。(底面) 南西側が少し高い。(遺物) 出土していない。

D53-1 土坑 (第77図)

(検出・埋土) D53住居址の中央近くに掘りこまれている。住居址より後のものである。埋土は、南部浮石を含む暗色の上層とそれの少ないより暗色の下層に二分される。(形状) 開口部は直径1.2m、中場は0.93m×1m、底部は0.75m×0.85mの歪円形、深さは中心で0.6m、断面は逆台形である。住居址床面からは0.3m下がる。(底面) 僅かに中心がくぼむ。(遺物) 出土していない。

D53-2 土坑 (第77・78図)

(検出・埋土) D53住居址の北東壁に少し重複する。住居址との新旧関係は不明。埋土は褐色(7.5YR4/4)砂質シルトの単層である。(形状) 開口部は直径0.85m、底部は直径0.7mの歪円形、深さは0.3m余、断面形は逆台形である。(底面) ほぼ平らである。(遺物) 粗製土器片が出土した(第78図の15・16)。

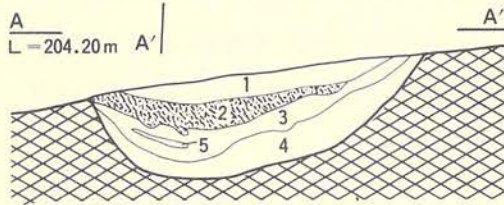
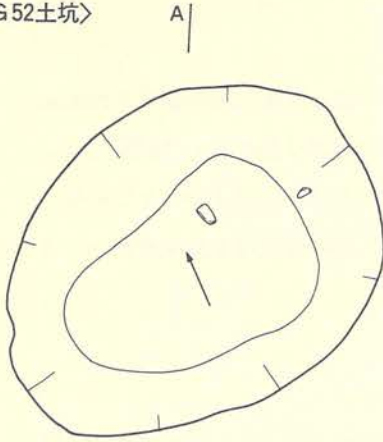
F 53土坑 (第77図)

(検出・埋土) E52住居址の南東張り出し部の先端に掘りこまれている。張り出し部より古い。(形状) 開口部は1m×1m、底部は0.8m×0.8mの方形気味の歪円形、深さは0.3m、断面形は逆台形である。(底面) や、不明確であるが大体平坦である。(遺物) 出土していない。

G 53土坑 (第77図、図版28)

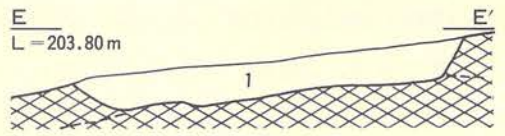
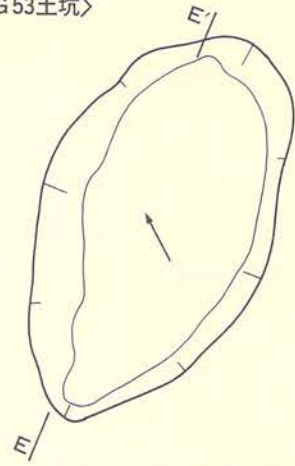
(検出・埋土) 南斜面下位の上端にあり、III~V層混合土中の明色部として確認した。埋土

<G52土坑>



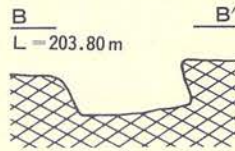
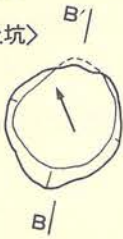
- 1. 黒色 (10YR2/1) シルト質
- 2. 浅黄色 (2.5YR7/3~7/4) シルト質 (十和田a降下火山灰)
- 3. 黒~黒褐色 (10YR2/1~3/2) シルト質
- 4. 黒色~暗褐色 (10YR2/1~3/3) シルト質 (木炭粒を含む)
- 5. 暗褐色 (10YR3/3) 砂質シルト

<G53土坑>

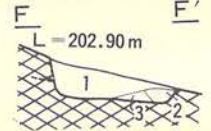


- 1. 褐色 (10YR4/4) 砂質

<D53-1土坑>

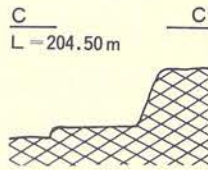
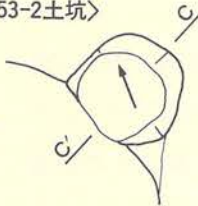


<H53土坑>

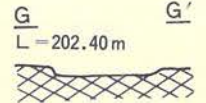


- 1. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質
- 2. 明褐色 (10YR3/4) 砂質
- 3. 橙色 (7.5YR6/8) 砂質

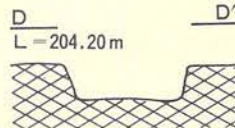
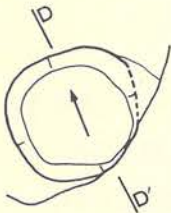
<D53-2土坑>



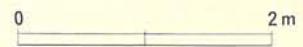
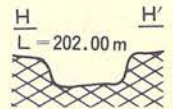
<D54土坑>



<F53土坑>



<I52土坑>



第77図 土坑(6)

は単層である。(形状) 開口部は1.9m×3.3m、底部は1.4m×2.9mの北東—南西に長い楕円形、深さは0.3m、断面形は逆台形である。(底面) 斜面下方側に低くなる。(遺物) 出土していない。

H53土坑 (第77図、図版28)

(検出・埋土) 南斜面下位において、Ⅲ～Ⅴ層中の暗色部として確認した。埋土は斜面下方側の下層に南部浮石を多く含む。(形状) 開口部は0.85m×1.05m、底部は0.7m×0.9mの楕円形、深さは中心で0.2m、断面形は逆台形である。(底面) Ⅴ層中にありほぼ平坦である。(遺物) 出土していない。

D54土坑 (第77図)

(検出・埋土) D54住居址内にあり北西壁に接している。埋土は黒～黒褐色(7.5YR2/1～2/2)シルト質土の単層で、粒径1cmの南部浮石を多量、炭化物を若干含む。埋土の粗さから考えると、住居址以後ではあっても以前ではないと考えられる。(形状) 開口部は0.65m×0.82m、底部は0.62m×0.75mの南北に長い楕円形、深さは0.17m、断面形は逆台形である。(底面) ほぼ平坦。(遺物) 出土していない。

G54土坑 (第79図、図版29)

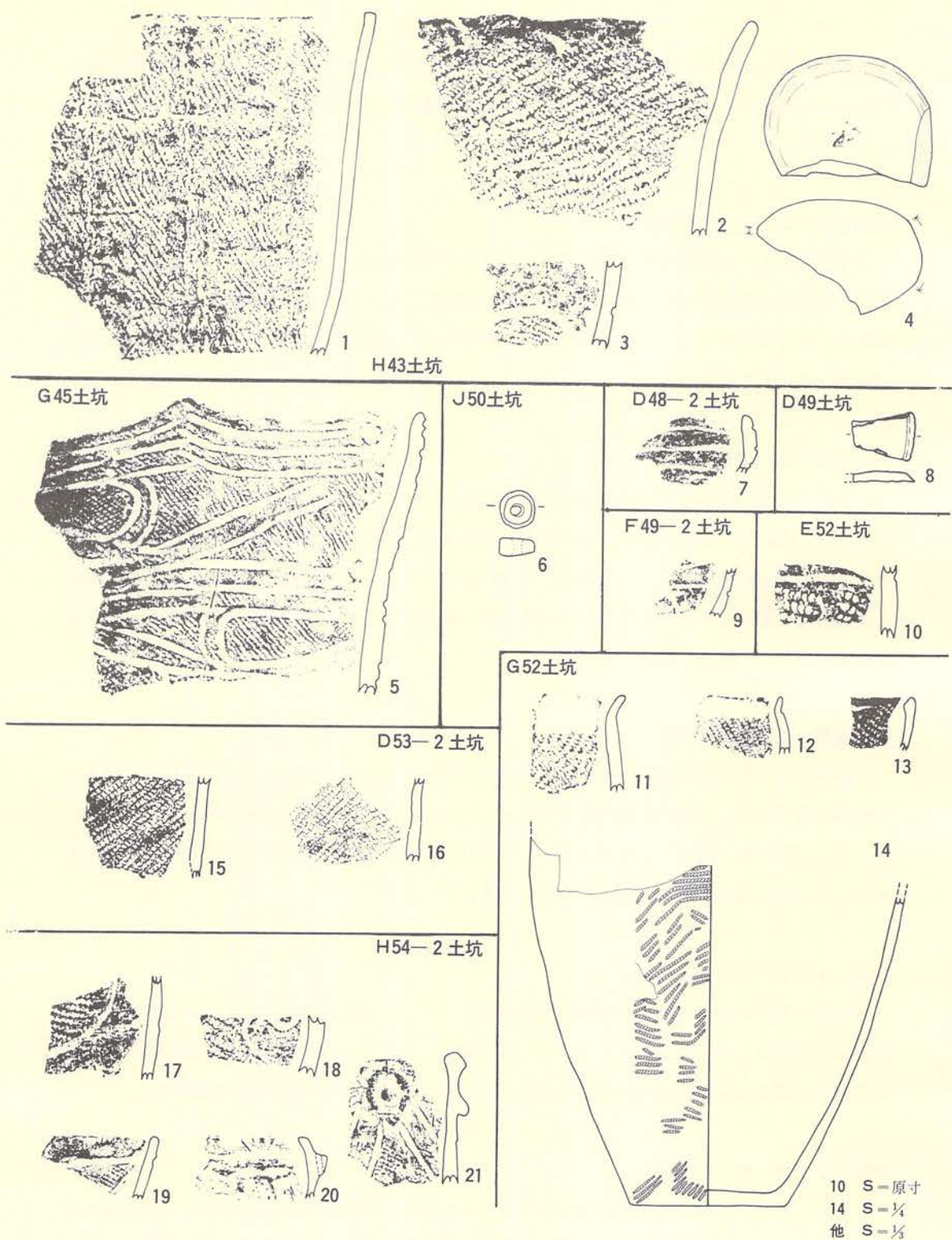
(検出・埋土) 南斜面下位上端においてⅢ～Ⅴ層混合土中の暗色部として確認した。埋土は大部分同質である。(形状) 開口部は1.3m×1.35mの円形、底部は1.45m×1.9mの南北に長い歪んだ楕円形、深さは中心で0.7m、断面は逆台形である。斜面上方側への抉りこみが大きい。(底面) ほぼ平坦である。(遺物) 出土していない。

H54-1土坑 (第79図)

(検出・埋土) H54住居址の北西壁内側に接している。埋土は単層である。H54住居址と同時かより以後のものと思われる。(形状) 開口部は0.75m×0.9mの卵形、底部は0.49m×0.53mの方形、深さは0.6m、断面形は逆台形である。(底面) 平坦である。(遺物) ない。

H54-2土坑 (第79図)

(検出・埋土) H54住居址の中央に掘りこまれており、住居址に伴うと思われる焼土塊の下から検出された。埋土は小粒の南部浮石を少量含む単層である。(形状) 開口部は0.8m×0.87m、底部は0.55m×0.6mの円形、深さは中心で0.73m、断面形は上方が僅かに開く鍋底形で



第78图 H43·G45·D48—2·D49·F49—2·E52·G52·D53—2·H54—2土坑出土遺物

ある。(底面)丸味があり中央が凹む。(遺物)埋土から、磨消縄文、無文地沈線文の土器片が出土した(第78図の17~21)。

I 54-1 土坑(第79図、図版29)

(検出・埋土)南斜面下位のIII~V層混合土中に、II層の載る暗色部を確認した。II層土は10cm前後の厚さである。以下は黒ないし黒褐色の砂質シルトで、多量の土器片のほか、焼土塊、木炭片等が含まれていた。土坑の中心辺り、検出面下約30cmのところ堅い床面らしきものがあった。しかし、最終的には輪郭がつかめなかった。図はII層土の広がり記録したものである。(形状)南北2.5m、東西1.5m、深さ0.3m位、全体にゆるくくぼむ。(底面)確認できなかった。(遺物)変形工字文を施した鉢形、口縁上端に沈線をめぐらしたり研磨した鉢形土器が多量出土した(第80図、第82図の1~19)。

I 54-2 土坑(第79図、図版29)

(検出・埋土)I 54-1土坑の駄目押しの結果確認した。埋土は黒色砂質シルトの単層である。埋土中位に巾20~30cm、長さ40cm、厚さ3cmの、投入された焼土塊がある。(形状)開口部は1.75m×1.86m、底部は1.5m×1.7mの歪円形、深さは北側で0.6m、断面形は上開きである。(底面)V層中にあり平坦である。(遺物)炭化クルミが出土している(図版66)。

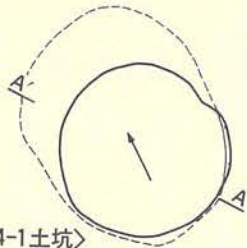
F 55-1 土坑(第79図、図版29)

(検出・埋土)南斜面下位のIII~V層混合土中の暗色部として確認した。埋土は壁面の崩れ以外は単層である。(形状)開口部は1.28m×1.43m、底部は0.9m×1mの北北東-南南西に長い楕円形、深さは中心で0.6m、断面形は逆台形である。(底面)VI層中にあり平坦である。(遺物)埋土から、磨消縄文、撚糸文、縦の綾絡文のある土器片が出土(第82図の20~22)。

F 55-2 土坑(第79図、図版30)

(検出・埋土)F 55-1土坑の斜面下方1m足らずのところあり、III~V層混合土中の暗色部として確認した。埋土は単層と見なせる。(形状)開口部は1.6m×1.7m、底部は1.25m×1.25mの円形、深さは中心で0.9m、断面形は北側の一部が逆傾斜となるものの全体的には逆台形である。本来は台形であったと思われる。(底面)VI層まで下がり平坦である。(遺物)沈線文、磨消縄文の施された土器片が、埋土から出土した(第82図の23~25)。

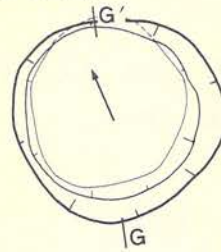
<G54土坑>



A
L=202.80m



<F55-2土坑>

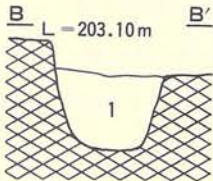


G
L=201.80m

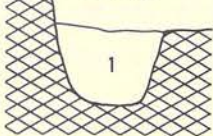


1. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質
2. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質
3. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質
4. 黄褐色 (10YR5/8) シルト質

<H54-1土坑>

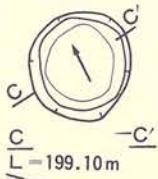


B
L=203.10m

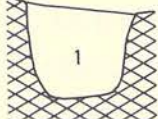


1. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト

<H54-2土坑>

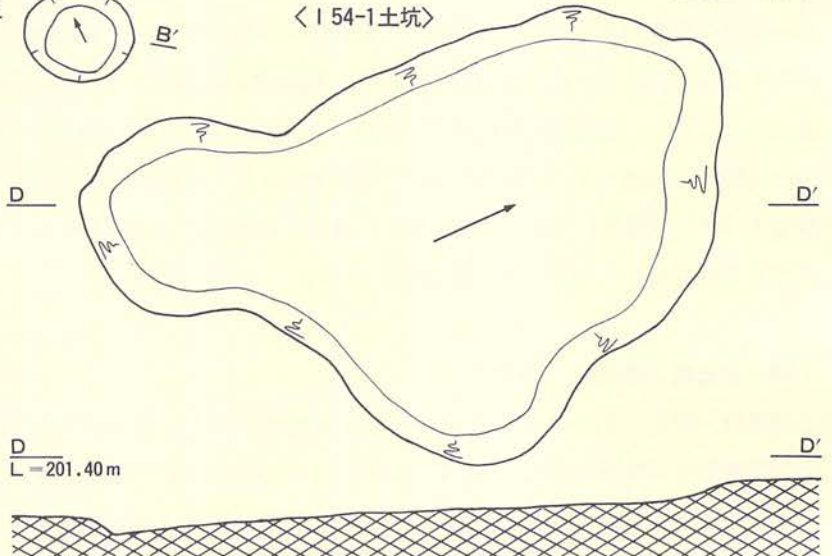


C
L=199.10m



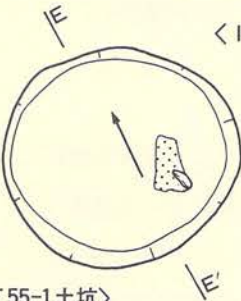
1. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質シルト

<I54-1土坑>



D
L=201.40m

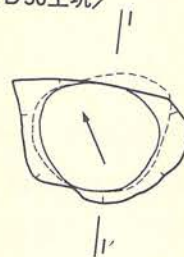
<I54-2土坑>



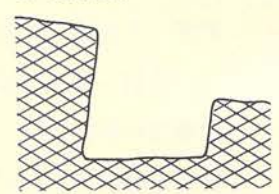
E
L=201.60m



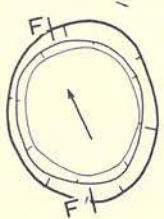
<D56土坑>



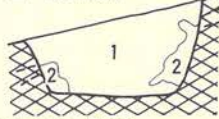
I
L=201.00m



<F55-1土坑>

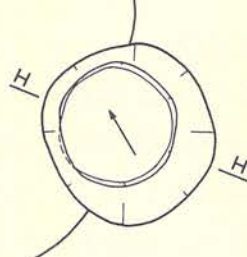


F
L=202.40m

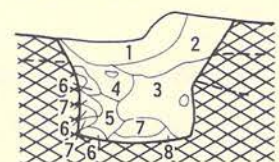


1. 黒褐色 (10YR2/3) 砂質
2. 暗褐色~黄褐色 (10YR3/4~5/6) シルト質

<G55土坑>



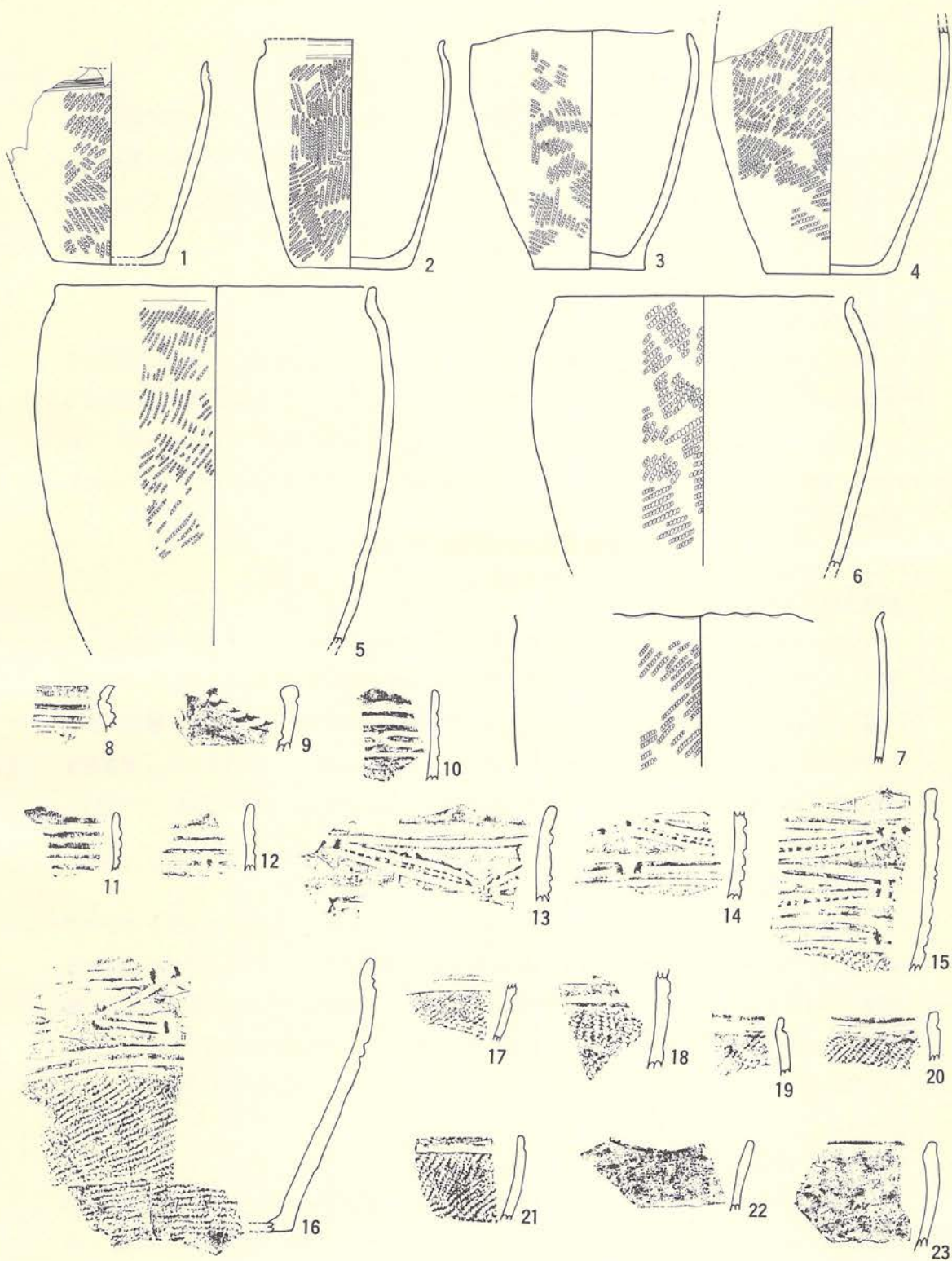
H
L=200.80m



1. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質
2. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質
3. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質
4. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質
5. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質
6. 黒褐色 (10YR3/2) 砂質
7. 黄褐色 (10YR5/8) 砂質
8. 黒褐色 (10YR2/2) 砂質

0 2m

第79図 土坑(7)



第80图 154-1 土坑出土遺物

1~7 S=1/4
8~23 S=1/3

G 55土坑（第79図、図版30）

（検出・埋土）G 55住居址の南東壁と重複し、住居址に切られている。埋土はほぼ単層といえる。（形状）開口部は直径1.4～1.5m、底部は直径0.9mの円形、深さ約1m、断面形は本来台形であったと思われる。（底面）VI層中に深く下がっており中心が僅かにくぼむ。（遺物）出土していない。

D 56土坑（第79図、図版30）

（検出・埋土）C 56住居址の直ぐ東にあり、V層面暗色部として確認した。埋土は壁際を除き上層より下層の方がより暗色である。（形状）開口部は0.9m×0.95mの歪円形、底部は0.9m×1.15mの東西に長い卵形、深さは中心で1m、断面形は縦長の台形である。（底面）VI層中にあり平坦である。（遺物）磨消縄文、無文複合口縁、外反口縁の土器片が出土している（第82図の26～29）。

E 56土坑（第81図、図版31）

（検出・埋土）E 56住居址掘り下げ中に住居址の北壁外側で確認した。埋土は下半が水平堆積、上半が凹状堆積の様相を呈す。（形状）開口部はかなり崩れていて1.3m×1.4mの卵形、中場は0.9m×1mの円形、底部は1m×1.13mの卵形、深さは中心で1.55m余、断面形は縦長の台形が本来の形と思われる。（底面）VI層中にかなり深く掘り下げられており、調査中は湧水が続いた。中心に30cm×35cm、深さ20cmの播鉢状の小穴がある。（遺物）出土していない。

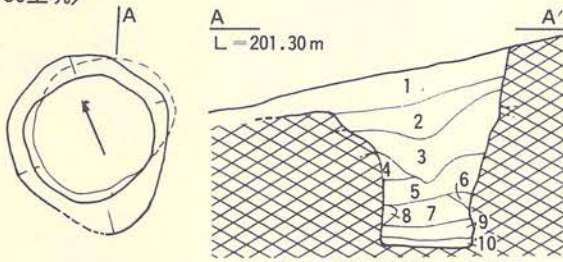
C 58土坑（第81図、図版31）

（検出・埋土）南斜面のV層上面において検出した。埋土は黒～黒褐色シルト質土の2層である。（形状）西側の半分以上は調査区域外に存在し、南側は削平されているために、詳細な規模・形態は不明である。検出された規模等から直径2.6m前後の円形ないし卵形を呈すと推定される。深さは東壁側で26cmを測る。（底面）V層上面にあり、ほぼ平坦で堅くしまっている。（遺物）出土しなかった。

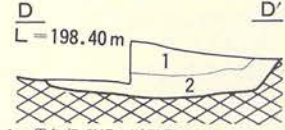
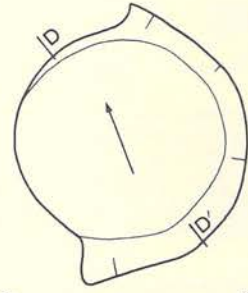
E 58土坑（第81図、図版31）

（検出・埋土）南斜面上において検出した。検出はIII～V混合層中位である。埋土は黒褐色砂質土の2層に分けられる。（形状）小判形ないし楕円形を呈し、開口部径2.5m×2.9m、底部径2.2m×2.5m、深さ22～33cmである。（底面）V層中にあり、ほぼ平坦である。（遺物）埋土から、石皿と石斧片転用敲石が出土した（第82図の34・35）。

〈E56土坑〉

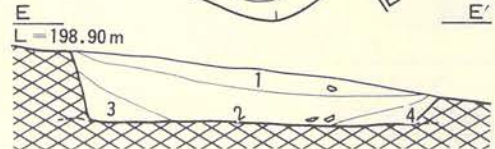
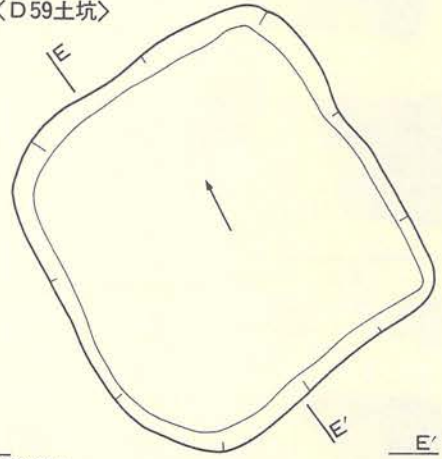


1. 黒色 (7.5YR1.7/1) III~V層混土
2. 黒色 (7.5YR1.7/1) III~V層混土
3. 黒褐色 (7.5YR2/2) 砂質シルト
4. 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質シルト
5. 極暗褐色 (7.5YR2/3) 砂質シルト
6. 暗褐色 (7.5YR3/4) 砂質シルト
7. 暗褐色 (7.5YR3/3) 粘土質
8. 暗褐色 (7.5YR5/6) 粘土質シルト
9. 橙褐色 (7.5YR6/6) 粘土質シルト
10. 褐色 (7.5YR4/3) 粘土質シルト



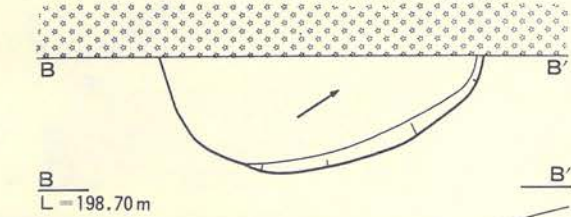
1. 黒色 (7.5YR1/2) 砂質シルト
2. 黒色 (7.5YR2/1) シルト質 (炭を含む)

〈D59土坑〉



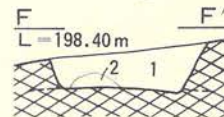
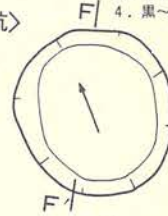
1. 黒色 (7.5YR1.7/1) 砂質
2. 黒色 (7.5YR1.7/1~2/1) 砂質
3. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質
4. 黒~黒褐色 (7.5YR2/1~2/2) 砂質

〈C58土坑〉



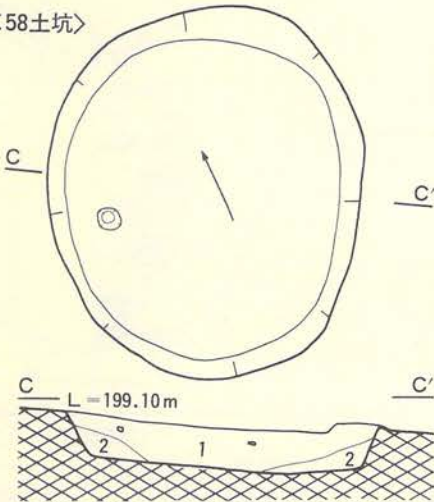
1. 黒褐色 (7.5YR2/2~3/2) シルト質
2. 黒色 (7.5YR1.7/1~2/1) シルト質 (炭を微量に含む)

〈C60土坑〉

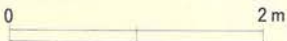


1. 黒~黒褐色 (7.5YR2/1~2/2) シルト質
2. 黒~黒褐色 (7.5YR2/1~1.7/1) シルト質

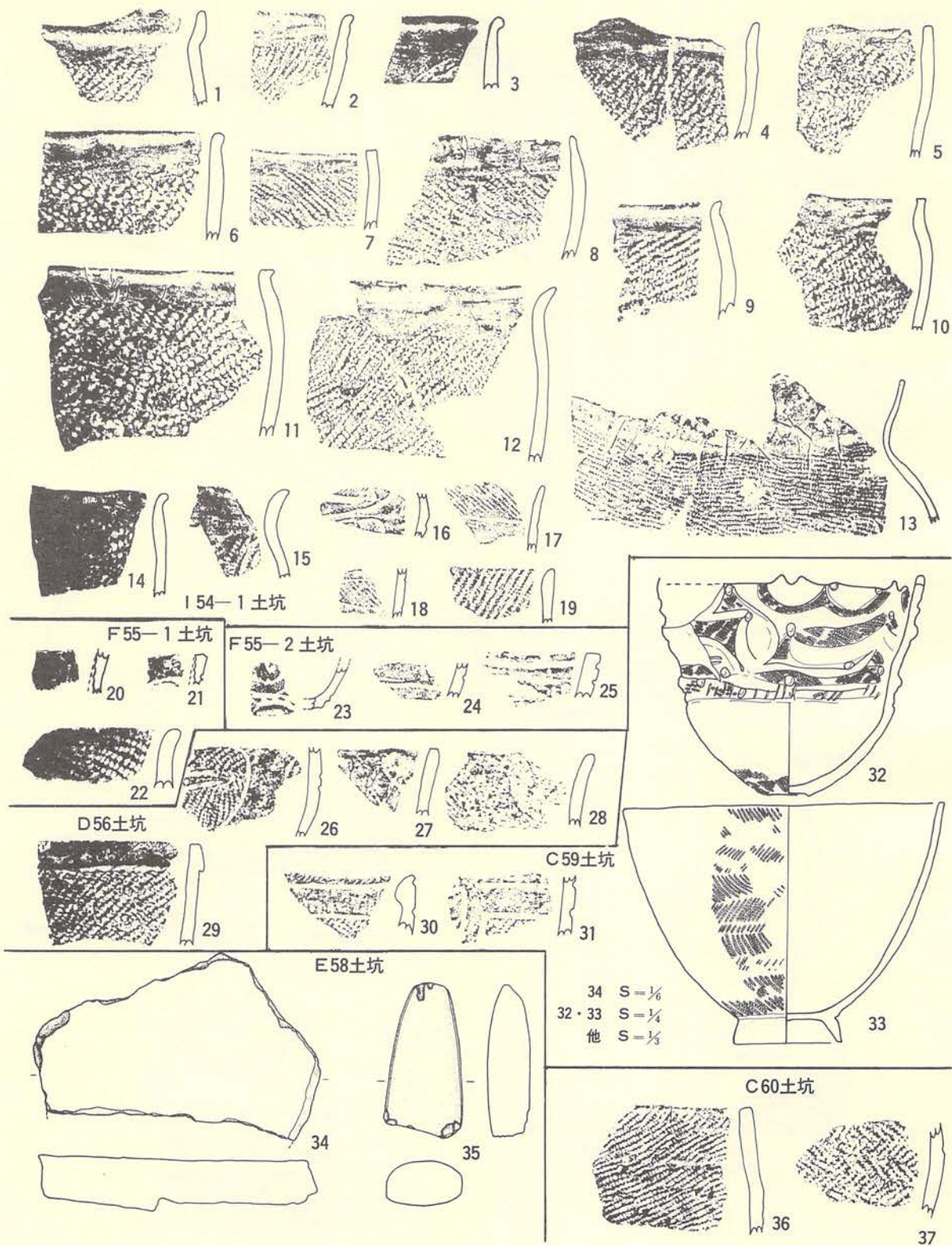
〈E58土坑〉



1. 黒褐色 (7.5YR3/1~3/2) 砂質
2. 黒褐色 (7.5YR3/1~3/2) 砂質



第81図 土坑(8)



第82图 I 54-1 · F 55-1 · F 55-2 · D 56 · E 58 · C 59 · C 60 土坑出土遺物

C 59 土坑 (第81図、図版31)

(検出・埋土) 南斜面上において検出した。検出面はⅢ～Ⅴ混合層中位である。埋土は黒色砂質シルト主体の2層に分けられる。(形状) 西側の一部は削平されているが、開口部径1.8m×2.0m、底部径1.55m×1.65mの円形を呈す。深さは残存部の良好な北壁で40cmである。

(底面) Ⅴ層上面まで掘りこまれ、若干の凹凸があり堅くしまる。(遺物) ハリコブのある、浮彫的磨消縄文の施された鉢と、擬似羽状縄文の施された高台つき鉢の破片等が埋土から出土した(第82図の30～33)。

D 59 土坑 (第81図、図版32)

(検出・埋土) 南斜面最下端のⅢ層二次堆積土中のⅡ層土の広がりとして確認した。埋土は上半がⅡ層土混り、下半はⅢ～Ⅴ層起源のいずれも砂質土である。(形状) 開口部は2.7m×2.9m、底部は2.5m×2.6mの南北に長い方形であり、深さは中心で0.4m、壁は少し外傾する。(底面) Ⅴ層上面にあり平坦である。(遺物) 出土していない。

C 60 土坑 (第81図、図版32)

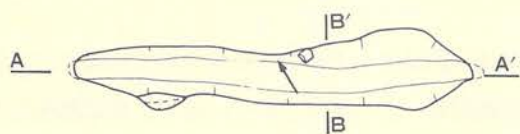
(検出・埋土) 南斜面のⅢ～Ⅴ混合層において検出した。埋土は黒～黒褐色砂質シルトである。(形状) 円形を呈し、開口部径1.22m×1.34m、底部径0.92m×1.10mである。深さは24～40cmを測る。(底面) 東側半分が若干低く凹凸があり、堅くしまっている。(遺物) 粗製土器片が出土している(第82図の36・37)。

D 50 陥し穴状遺構 (第83図、図版32)

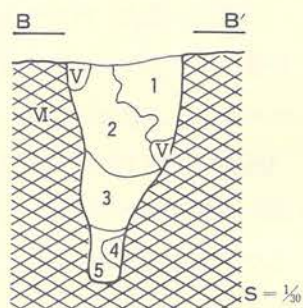
(検出・埋土) E50住居址の中に完全に入っており、住居址より古い。埋土は比較的明色で凹状に堆積する。(形状) 開口部は巾0.4m長さ3.15m、底部は巾0.14～0.23m長さ3.25m、横断面は楔形、縦断面は底部両端が外方に張り出しているため台形状である。長軸は西北西～東南東を指す。(遺物) 出土していない。

I 56 陥し穴状遺構 (第83図、図版32)

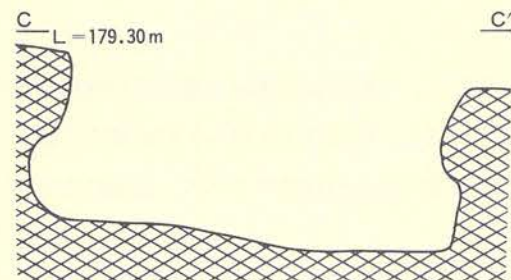
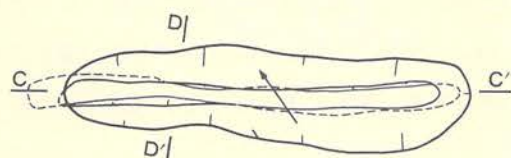
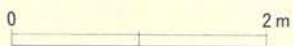
(検出・埋土) 南端部東側緩斜面のⅢ～Ⅴ混合層上面において検出した。埋土はレンズ状に堆積し、黒～褐色シルト質土の7層に大別される。(形状) 開口部径0.7m×3.2m、底部径0.2m×3.4mの細長い溝状を呈す。深さは1.25mを測り、横断面は底から開口部に向かって緩やかに開くV字形である。東西の端部は底から若干オーバーハング気味に開口部に立ち上がる。(底面) 僅かに高低差があるものの、ほぼ平坦である。(遺物) 年代決定資料は出土していない。



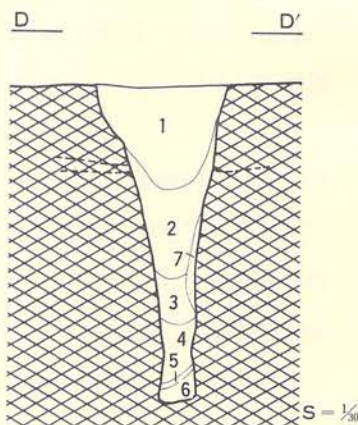
< D50陥し穴状遺構 >



1. 褐～暗褐色 (7.5YR 3/4~4/4) 砂質シルト
2. 褐色 (7.5YR 4/6) シルト質
3. 褐～明褐色 (7.5YR 4/6~5/6) 砂質シルト
4. 褐色 (7.5YR 4/3~4/4) 砂質シルト
5. 褐色 (7.5YR 4/6) 砂質シルト



< I56陥し穴状遺構 >



1. 黒色 (7.5YR 1.7/1~2/1) 砂質質シルト
2. 黒色 (7.5YR 2/1) シルト質
3. 褐色 (7.5YR 4/4~4/6) シルト質
4. 褐色 (7.5YR 4/4) シルト質
5. 黒色 (7.5YR 2/1) シルト質
6. 褐色 (7.5YR 4/3~4/4) シルト質
7. 褐色 (10 YR 4/6) シルト質

第83図 D50・I56陥し穴状遺構

I 54剥片貯蔵穴 (第97・98図)

(検出) I 54区の駄目押し掘り下げ中に、V層面で剥片の詰った小穴を確認した。(形状) 直径20cm、深さ3cmの丸底の穴で、計28ヶの剥片が出土した。(遺物) かなり大形の剥片が多く、石器の材料になりうる。調整痕あるものは、石鏃未成品様の2点のみである。

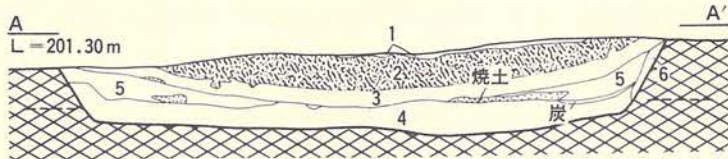
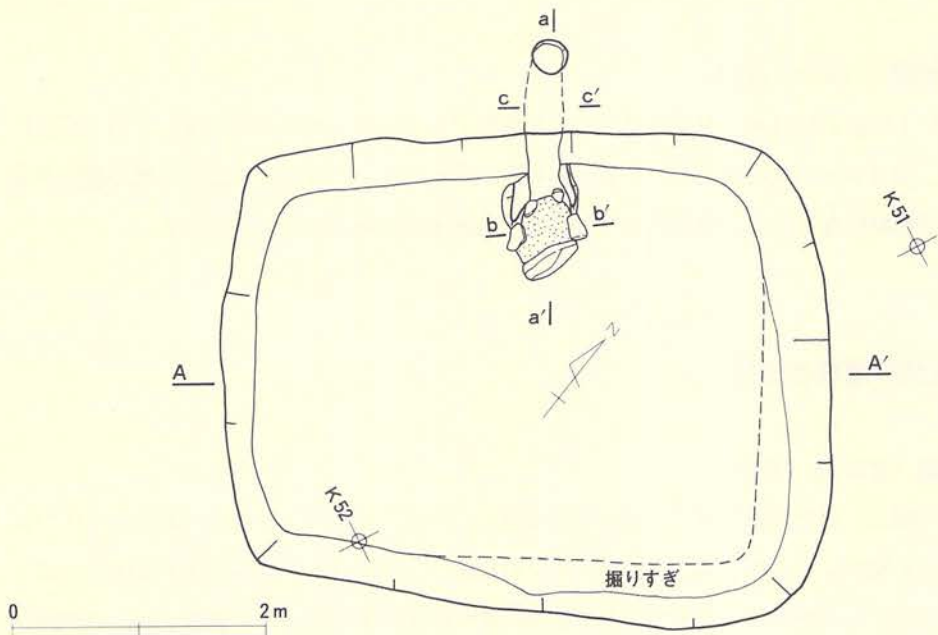
2. 古代の遺構と遺物

J51住居址 (第84図、図版22)

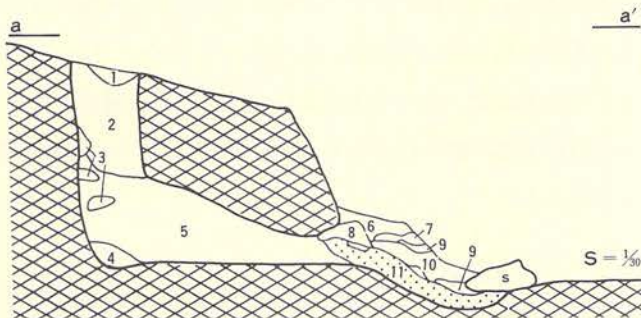
(検出・埋土) 南半部東側斜面下位のIII層上面において、十和田a降下火山灰の方形の広がりによって検出した。埋土は黒色砂質シルトの6層に分けられ、十和田a降下火山灰は厚さ28cmでレンズ状に堆積する。(平面形) 少し歪みのある隅丸長方形を呈し、長軸4.8m、短軸3.6mである。長軸方向は南西―北東を指す。(床面) 中振浮石の混入する黒～黒褐色砂質土中にあり、軟らかくはっきりとした面の確認は難しい。南壁側の床上5～10cmには、炭と焼土が厚さ3～5cmで広く散在することから、当遺構は焼失家屋と考えられる。(柱穴・周溝等) 柱穴と周溝は検出されない。(壁) 高さは30～60cmで、床上より緩やかな傾斜で立ち上がる。(カマド) 北西壁のほぼ中央に設置され、大部分は崩壊しており僅かに袖部と燃焼部が残存するのみである。残存する袖部は粘板岩(縦30cm、横20cm、厚さ5～8cm)を左右に据え、その上をシルトで被覆しているが、シルトの大部分は床上に流出している。据えられた石は崩壊のために八字状を呈し、天井部に用いられたと考えられる石(縦50cm、横20cm、厚さ18cm)は、焚口部前方の床上に横転している。煙道はくりぬき式で、長さ1.1mあり、ほぼ水平に煙出し部へと続く。煙出し部は径25cm、深さ78cmの円形土壇が掘られている。燃焼部は径38cm×42cmの不整楕円形を呈す焼土が厚さ8cmで形成されている。

(遺物) (第87図の1～5、図版43)

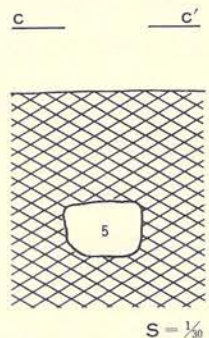
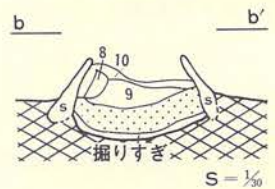
床上よりロクロ不使用の甕(1～4)が大中小のセットで出土した。1はカマド内出土の底部破片である。2は頸部に明瞭な段を有し、口縁は直立する。口縁部外面はヨコナデ調整、体部外面は緻密なヘラミガキ調整を施している。3の口縁部は外反し、体部外面はケズリの上をヘラナデ調整と一部ヘラミガキ調整をしている。4は体部外面ハケメ調整した上をヘラミガキ調整が口縁部まで施されている。口縁は頸部より外傾気味に立ち上がる。体部内側には輪積み痕が1.5～2cm幅で明瞭に認められる。底部は木葉痕で、体部外面と同様にヘラミガキされている。5は刀子状の破片で、現存長4.5cm×0.7cm、厚さ0.3cmである。



- | | |
|----------------------------|----------------|
| 1. 黒色 (7.5YR1.7/1) | シルト質 |
| 2. 褐色～にぶい黄褐色 (10YR4/3～4/4) | 十和田a降下火山灰 |
| 3. 黒色 (7.5YR1.7/1) | シルト質 |
| 4. 黒色 (7.5YR2/1) | 砂質シルト (炭を少量含む) |
| 5. 黒色 (7.5YR1.7/1～2/1) | 砂質シルト |
| 6. 褐色 (7.5YR2/2) | 砂質 |



- | | |
|------------------------------|---------------|
| 1. 明褐色 (7.5YR5/6) | シルト質 |
| 2. 黒色 (7.5YR2/1) | 砂質 (焼土粒を少量含む) |
| 3. 明褐色 (7.5YR6/6) | シルト質 |
| 4. にぶい黄褐色 (7.5YR4/3) | 砂質 |
| 5. 黒～黒褐色 (10 YR2/1～3/2) | 砂質 |
| 6. 黒色 (7.5YR2/1) | 砂質 |
| 7. 褐色～赤褐色 (7.5YR4/4～5 YR4/8) | シルト質 |
| 8. にぶい黄褐色 (10 YR4/3) | シルト質 |
| 9. 褐色 (5 YR4/8) | シルト質 |
| 10. にぶい黄褐色 (10 YR4/3) | シルト質 |
| 11. 明赤褐色 (5 YR5/6) | 焼土 |



第84図 J51住居址

I 57住居址 (第85図、図版22)

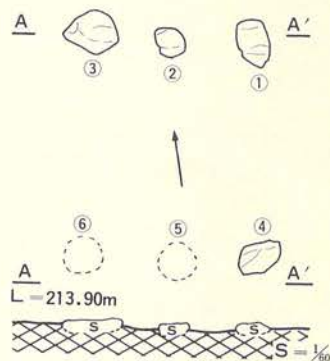
(検出・埋土) 南斜面下位の東寄りの緩やかな斜面のⅢ～Ⅴ混合土層で、遺構周縁部に露出していた十和田 a 降下火山灰の明色部分を認め検出した。第2層の十和田 a 降下火山灰が埋土中位に約35cmの厚さで堆積する点が特異である。第4層には褐色の焼土粒が混じる。(平面形) 長軸4.6m 短軸3.7mの隅丸方形を呈し主軸は北西—南東を指す。(床面) 床上は南部浮石の混じるやわらかい黒色砂質土である。北西側には炭化材や焼土が散在している。(柱穴・周溝等) いずれも検出されていない。(壁) 検出面までの高さが45～68cmで、勾配は70°～80°である。(カマド) 北西壁の中央に設けられている。規模は全長1.9m(焚口～燃焼部70cm、煙道90cm、煙出部30cm)で、袖の巾は1mである。袖部分には石を6ケ(粘板岩とチャート)、天井部分には石を3ケ(粘板岩)用いている。袖はシルト質土で造られている。焚口から燃焼部までは皿状に浅く凹む。燃焼部から支脚に使われたと推定される小石が2ケ検出されている。煙道は煙出部に向かって緩やかな傾斜で上る。煙出部は底部がわずかに凹み、垂直に立ち上がって住居址北西側に開口する。

(遺物) (第87図の6～16、第88・89図、図版43)

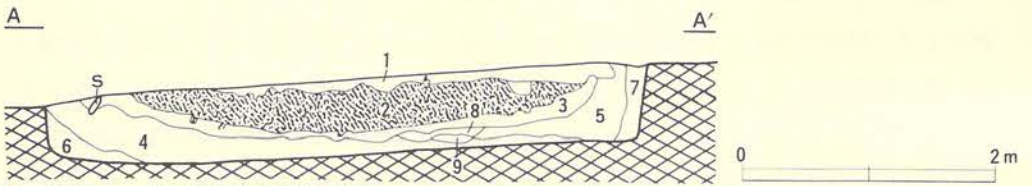
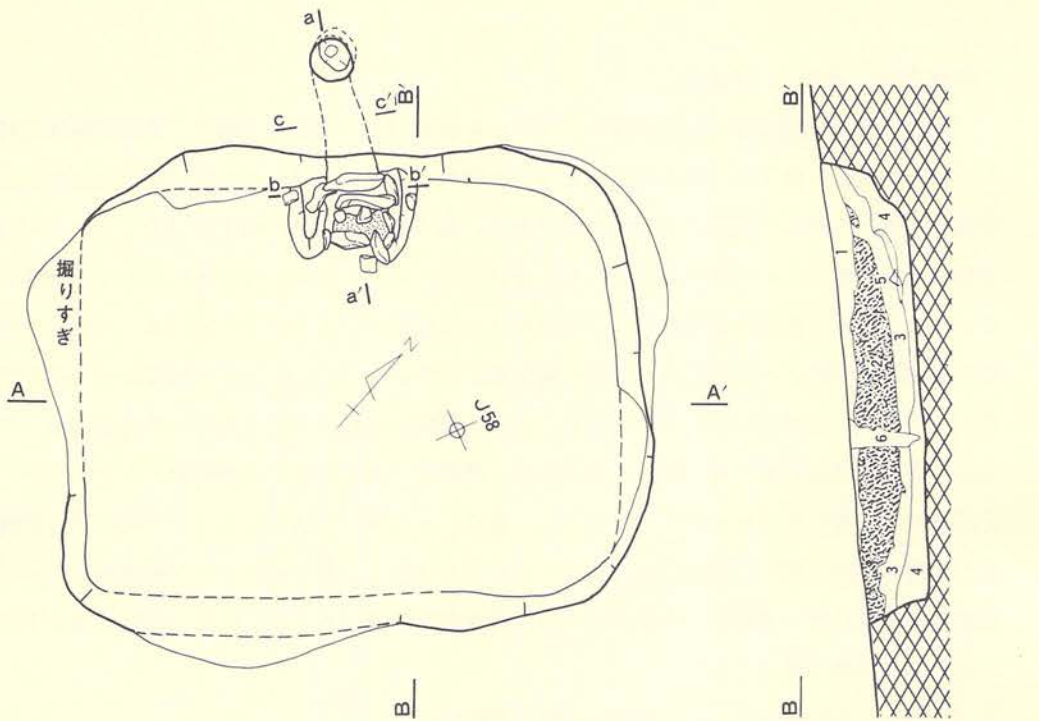
埋土より土師器の破片と多量の縄文晩期破片(第88・89図)が出土した。土師器の器種は、坏・甕・甔等がある。坏(第87図の6～8)はカマド寄りの床上から出土し、いずれもロクロ不使用である。6と7は丸底で、体部外面はヘラナデ調整と一部ヘラミガキ調整が施されている。8の内面は黒色処理されており、緻密なヘラミガキ調整が施されている。9～11は甕で、体部外面はヘラミガキ調整、内面はヘラナデ調整である。9・11の底部は荒いヘラミガキ調整が施されている。12は埋土より出土した無底の甔破片で、下端の内面が少し削がれている。13・14は土玉で、13は径2mm位の孔があいている。15・16は勾玉の破片である。

E 34建物跡 (第85図、図版34)

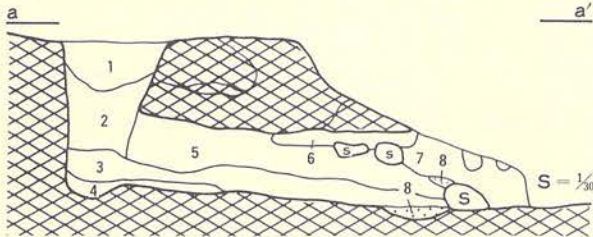
(検出) 尾根中央平坦部において4ケの石を確認した。粗掘の際注意不足のため2ケを除いてしまった。(配置) ほぼ東西に3ケずつ2列並ぶ。原位置を保っている石相互の間隔は、①-②70cm、②-③60cm、①-④175cmであり、仮に30cm 1尺と考えれば、ほぼ適当な位置にあるといえる。①は25cm×40cm、②は20cm×25cm、③は35cm×45cm、④は25cm×35cmの大きさである。



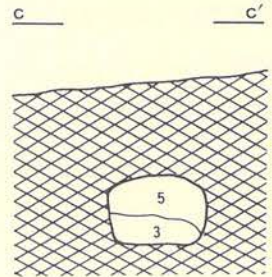
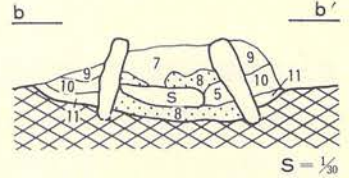
第85図 E 34建物跡



- | | |
|---------------------------------------|---------------------------------------|
| 1. 黒色～黒褐色 (10 YR1.7/1～3/1) シルト質 | 6. 黒褐色 (10YR2/2～3/2) 砂質 |
| 2. にぶい黄～明黄褐色 (2.5YR6/3～6/6) 十和田a降下火山灰 | 7. 黒褐色 (10YR2/2～3/2) 砂質 |
| 3. 黒～黒褐色 (10 YR1.7/1～2/2) シルト質 | 8. 褐色 (10YR4/4～4/6) 砂質 |
| 4. 黒褐色～褐色 (10 YR2/2～4/4) 砂質 | 9. 黒～黒褐色 (10YR2/1～4/1) 砂質 (炭と焼土を若干含む) |
| 5. 黒褐色 (10 YR2/2) 砂質 | 10. にぶい黄色 (2.5YR6/3) シルト質 |



- | |
|----------------------------------|
| 1. 褐色 (7.5YR4/3) 砂質 (少量焼土の混入があり) |
| 2. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質 |
| 3. 明褐色 (5 YR5/6) 砂質 |
| 4. 黒色 (7.5YR2/1) 砂質 |
| 5. 黒褐色 (7.5YR3/2) 砂質 |
| 6. 赤褐色 (5 YR4/6) 砂質 |
| 7. 黒色 (7.5YR1.7/1) 砂質 |
| 8. 赤褐色 (5 YR4/6) 焼土 |



第86図 | 57住居址

S = 1/30

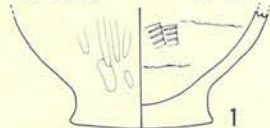
口径・底径・器高 cm

() は現存長

[] は推定値

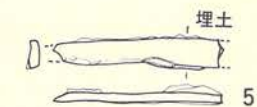
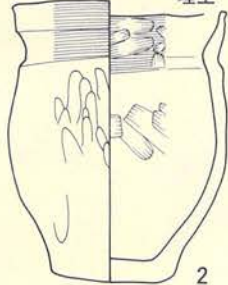
—・15・(12.8)

カマド



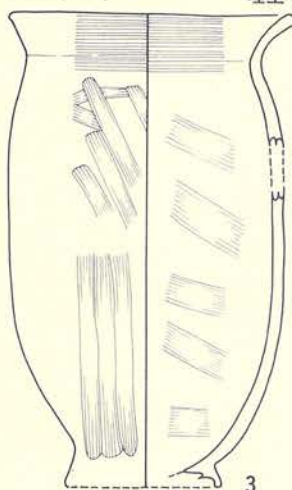
22.2・13.2・30

埋土



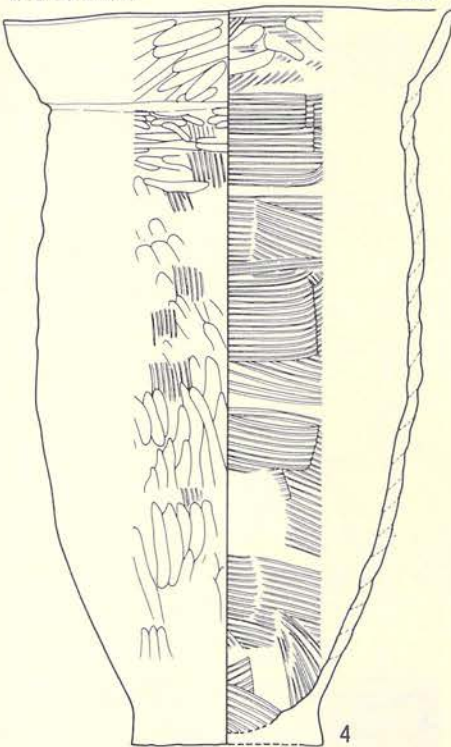
30.2・[16.5]・50

埋土



47.2・20.2・77.4

埋土



J51住

21.8・—・8.7

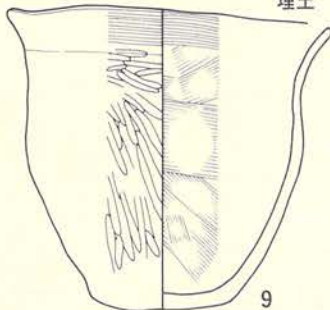
床



I 57住

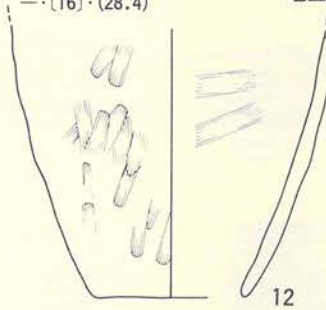
34.3・15・31.8

埋土



—・[16]・(28.4)

埋土



20.3・—・9.4

床



25.4・—・8.8

床



—・—・(14.8)

埋土

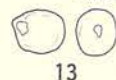


—・10.2・(13.8)

埋土

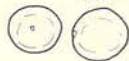


埋土



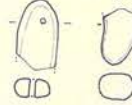
13

埋土



14

床

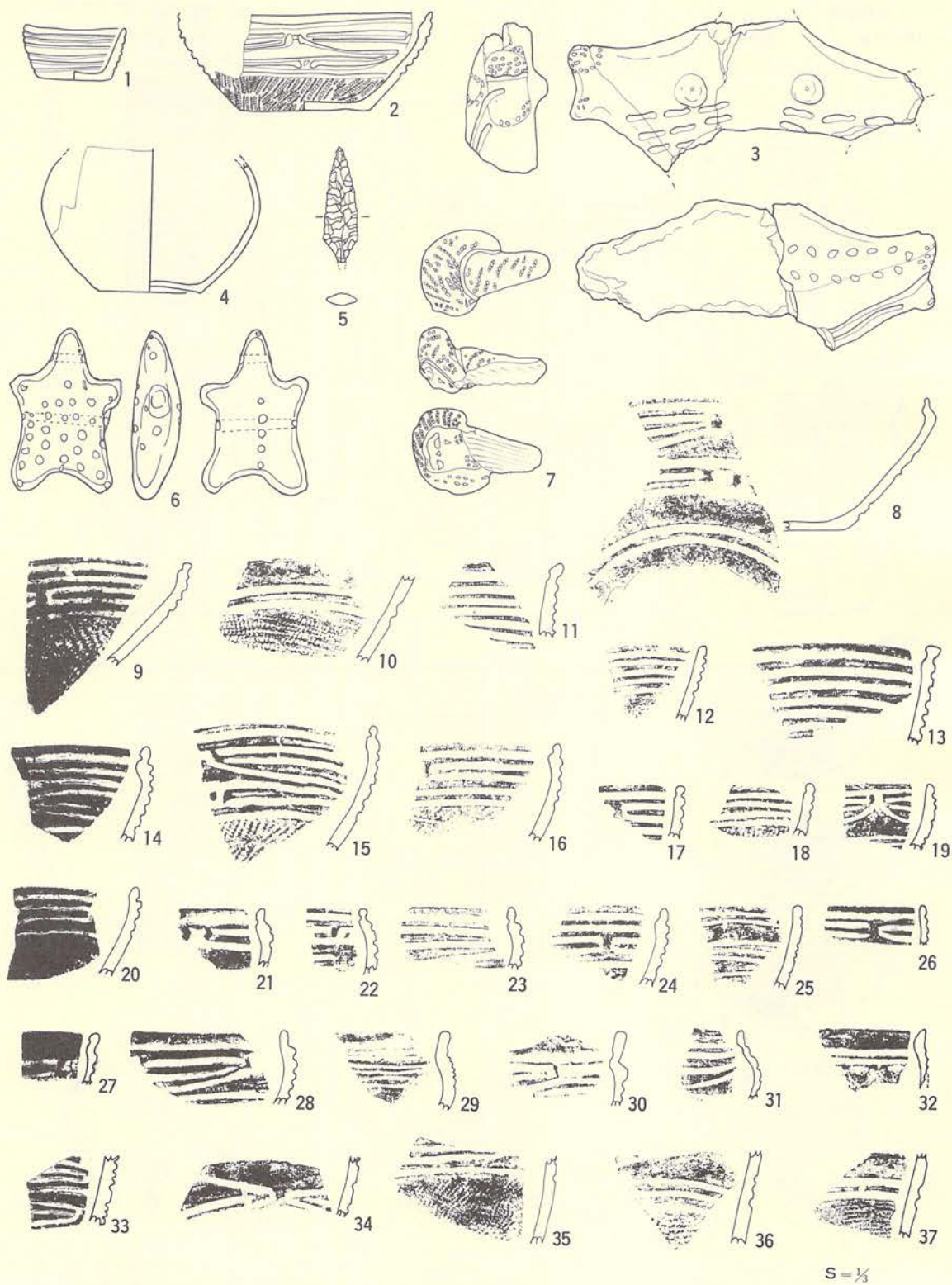


15

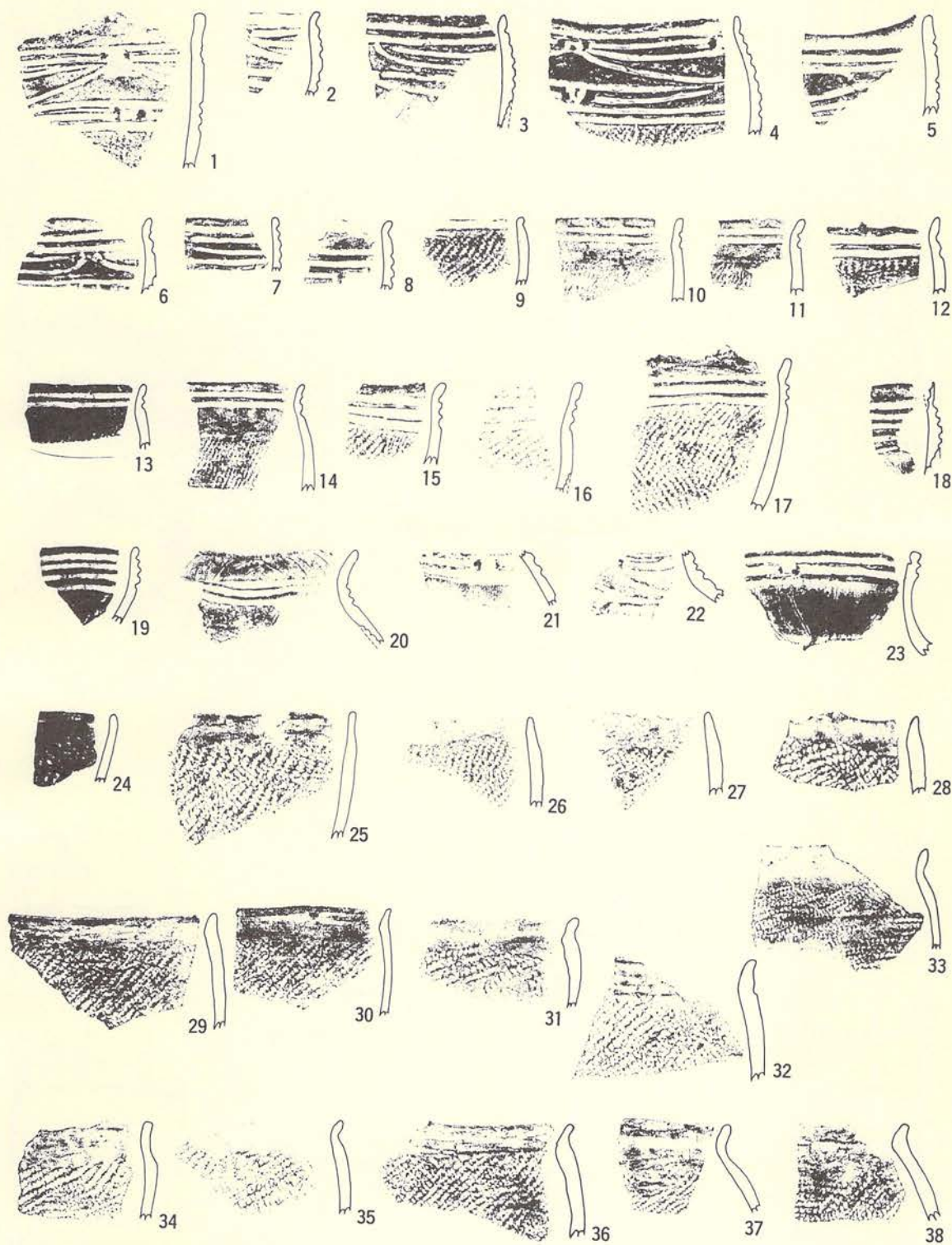
16

5・13~16 S=1/2
1~4・6~12 S=約1/4

第87図 J51・I 57住居址出土遺物

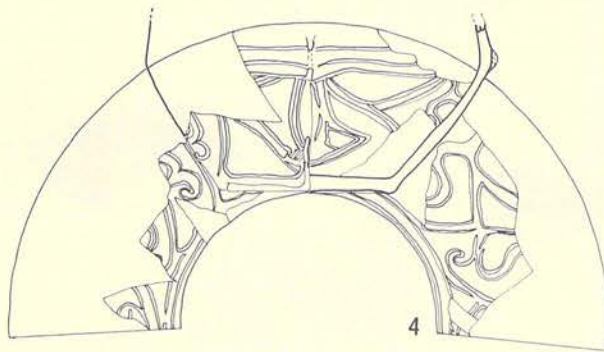
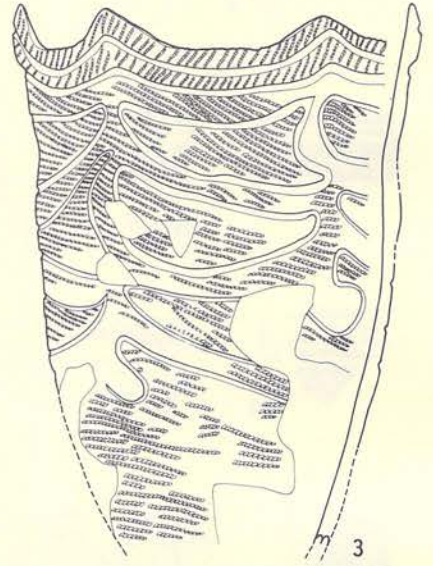
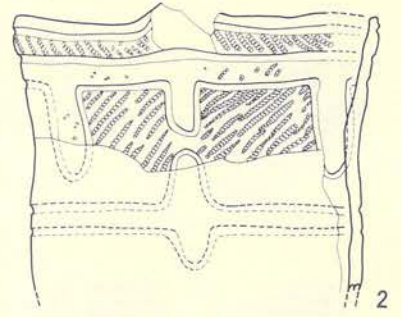
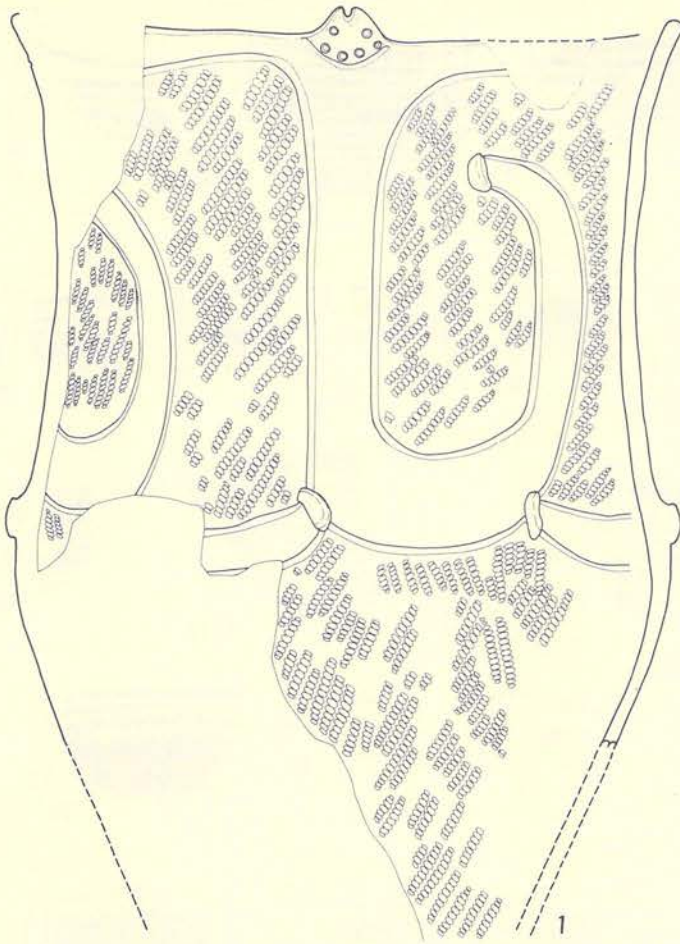


第88图 | 57住居址埋土出土遺物(1)

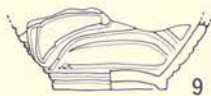
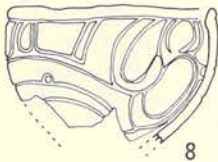
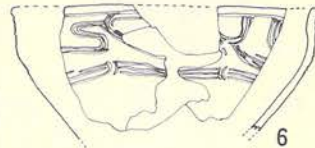


S=1/3

第89图 I 57住居址埋土出土遺物(2)

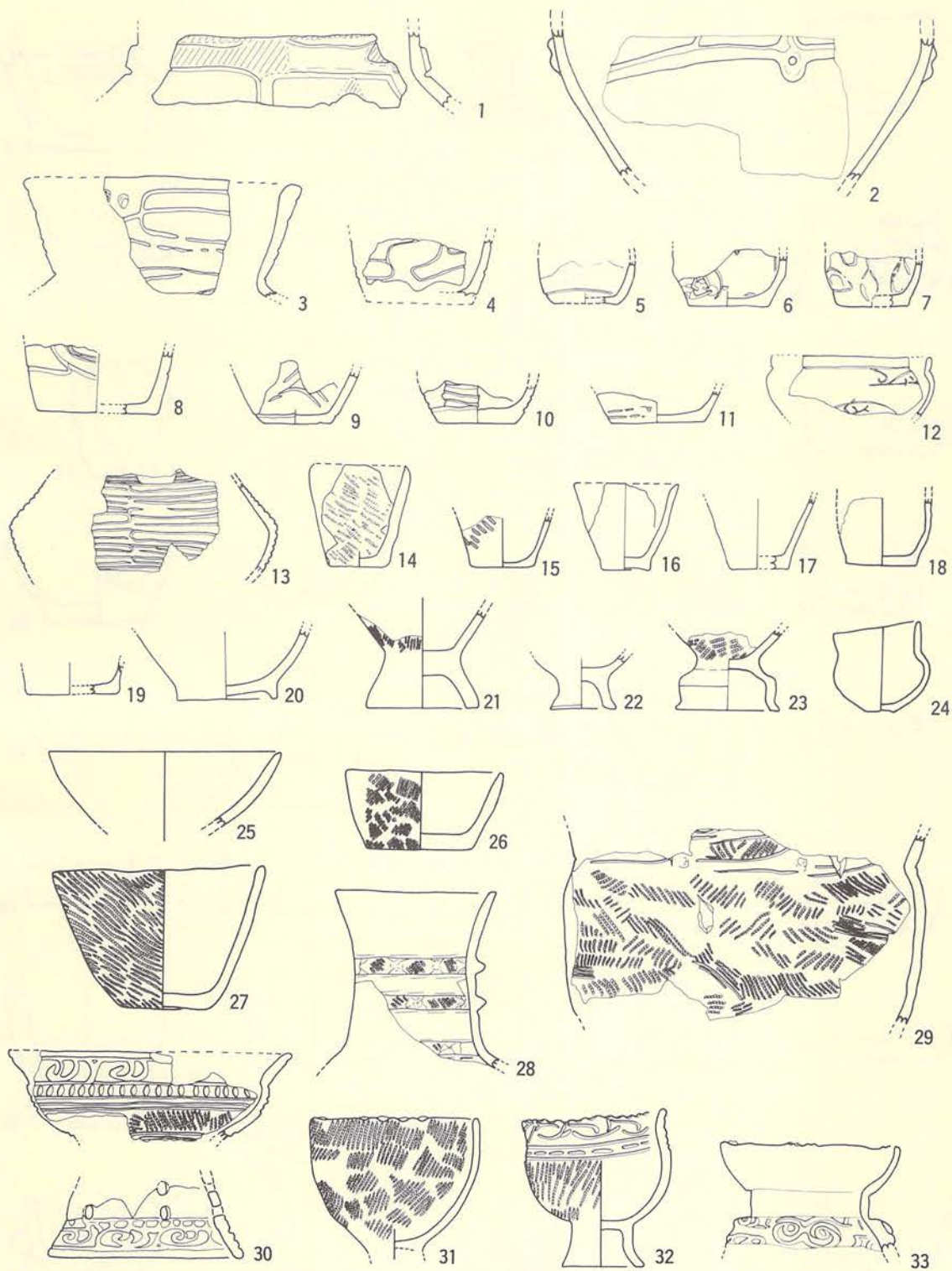


焼成前切離壺



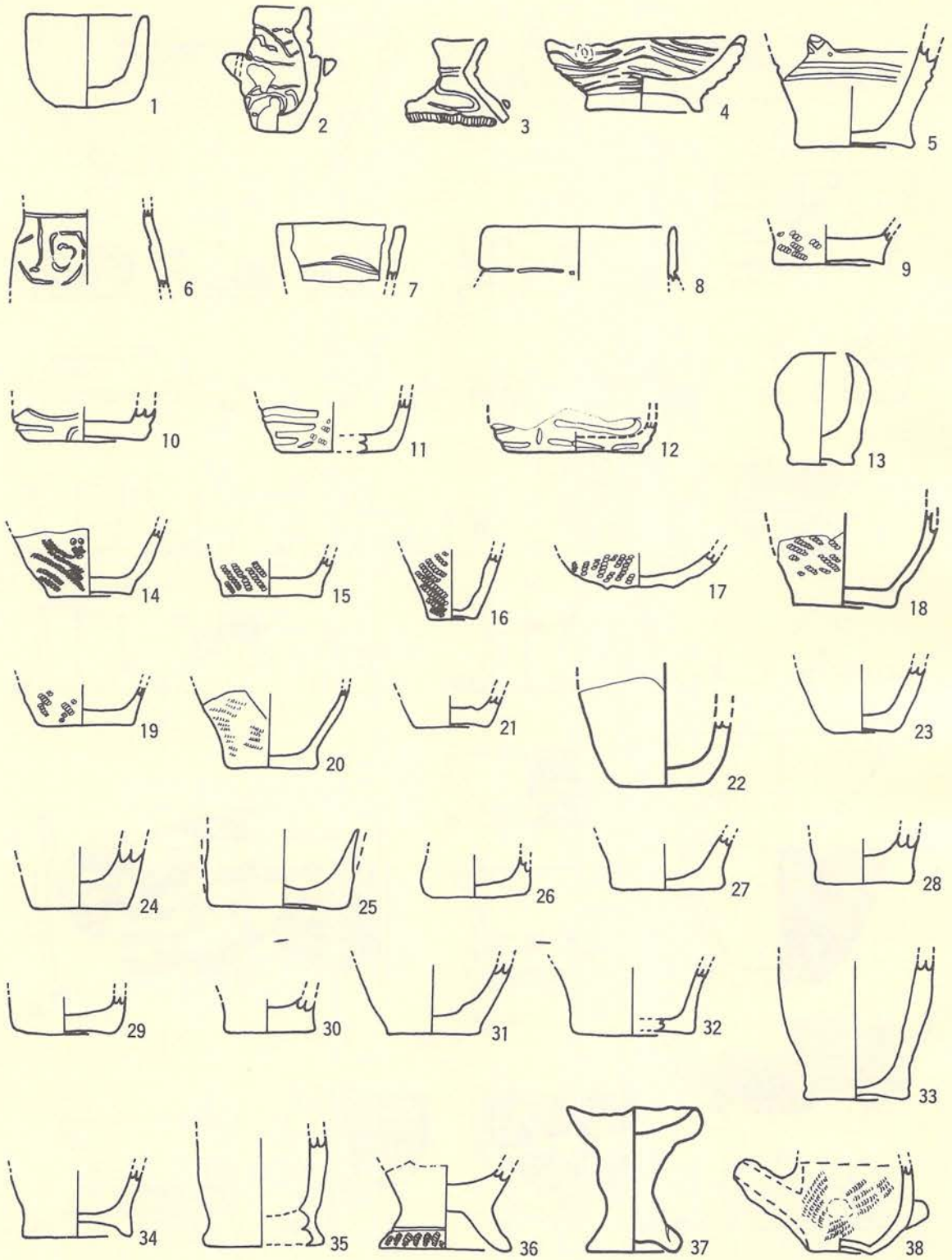
第90図 遺構外出土遺物(1)

S=1/4



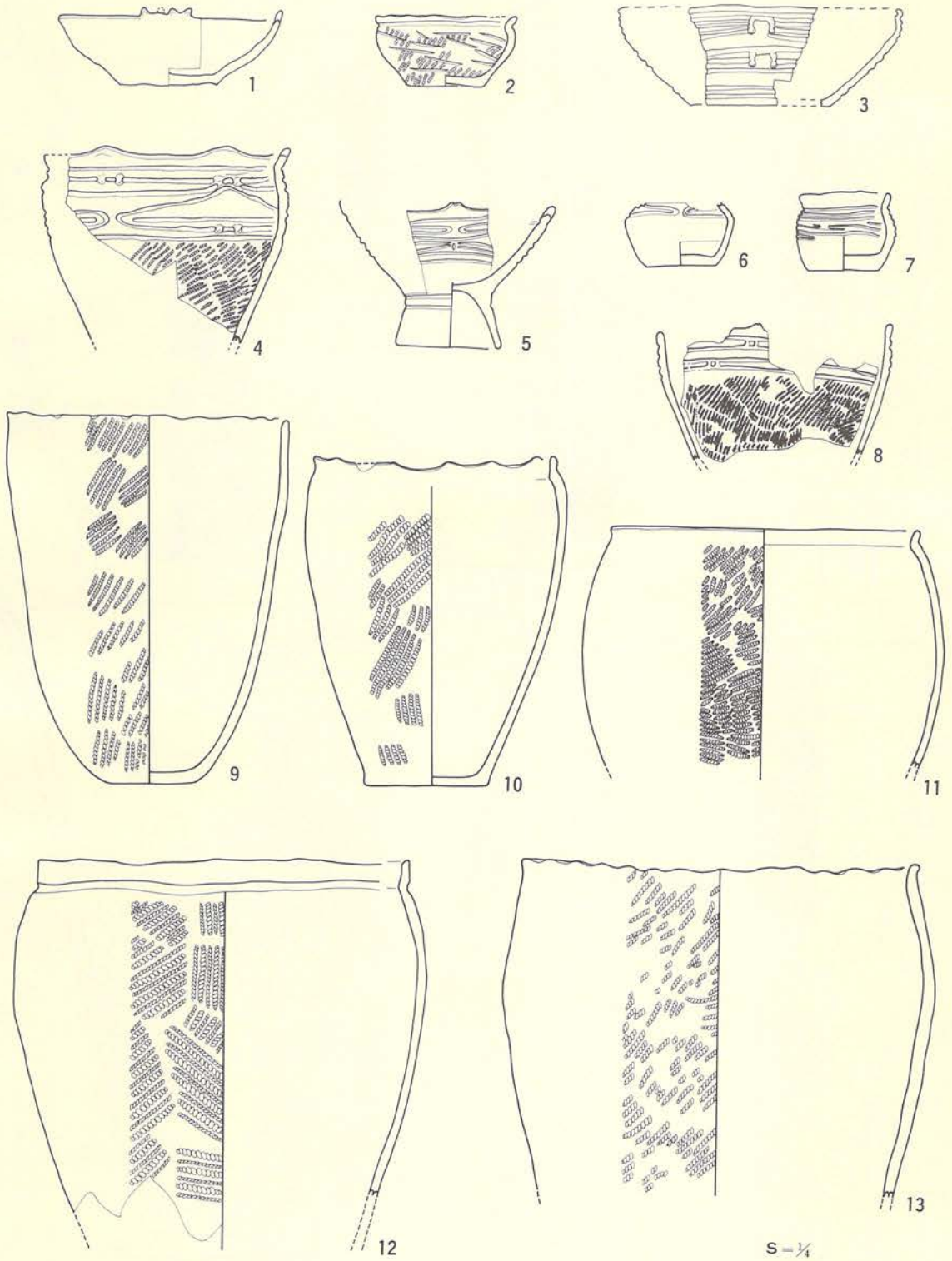
第91図 遺構外出土遺物(2)

S=1/4

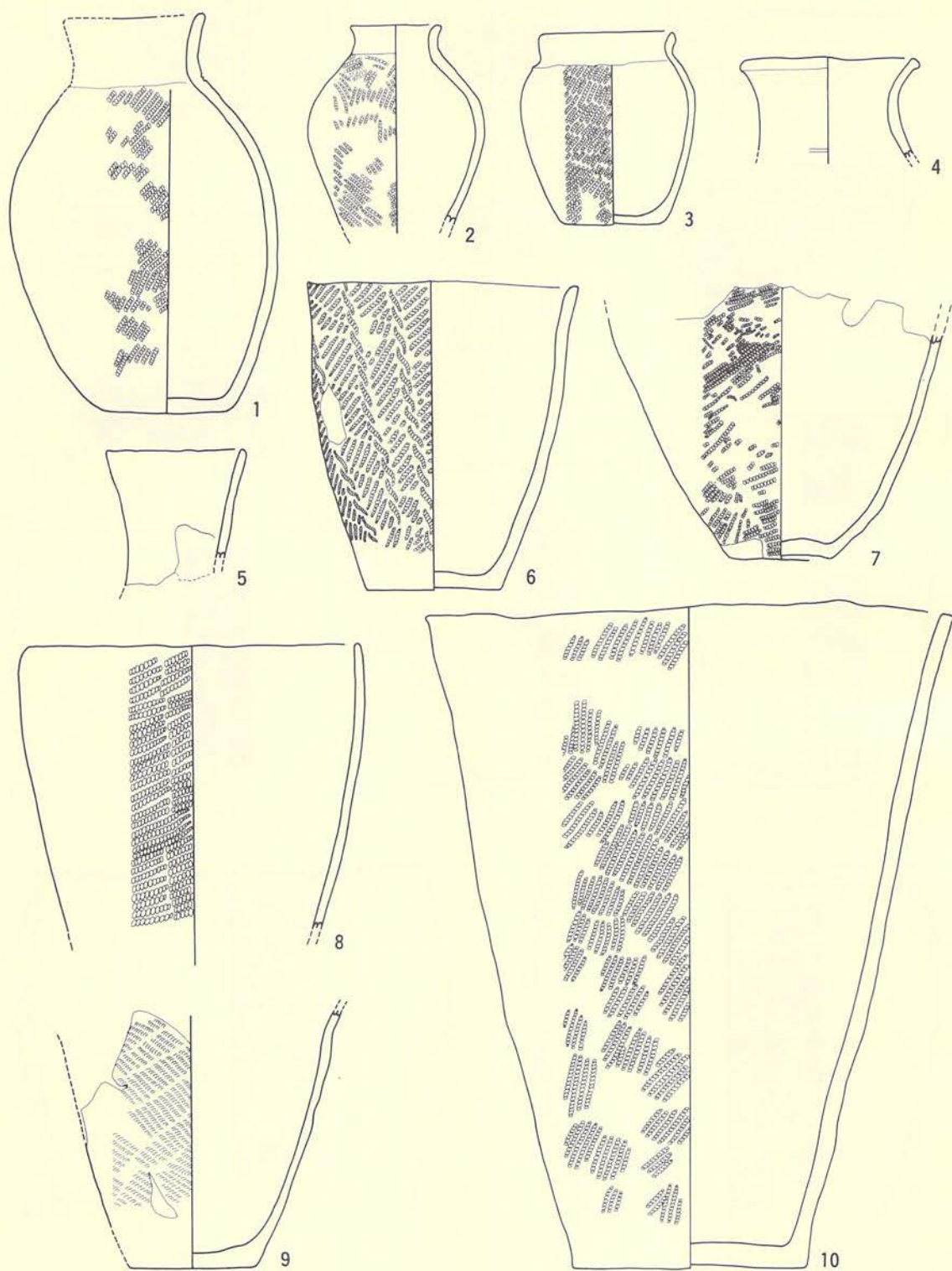


第92図 遺構外出土遺物(3)

S = 1/2

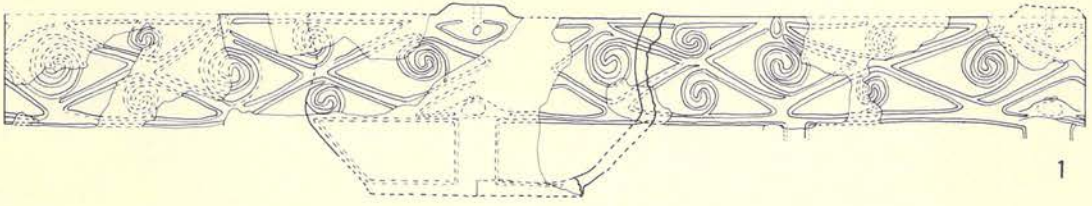


第93図 遺構外出土遺物(4)

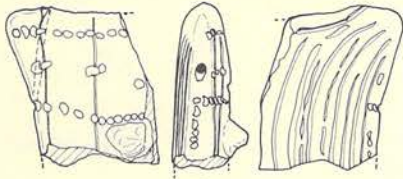


第94図 遺構外出土遺物(5)

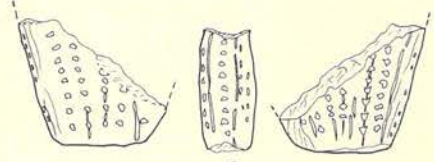
S=1/4



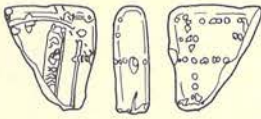
1



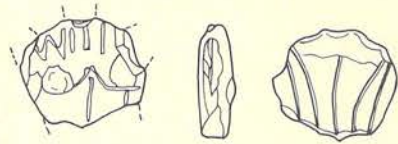
2



3



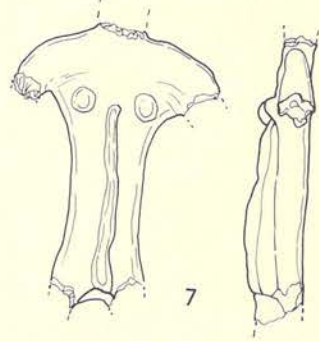
4



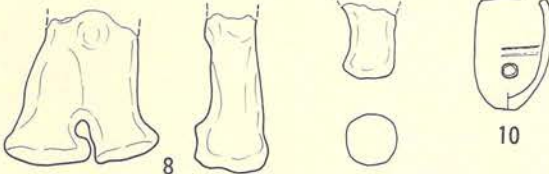
5



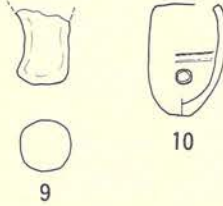
6



7



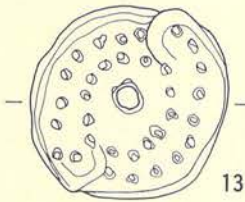
8



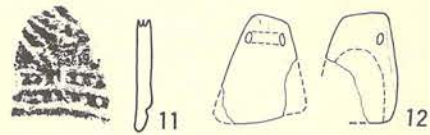
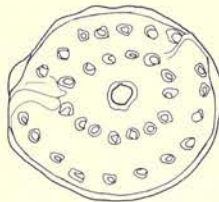
9



10

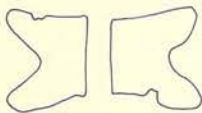


13



11

12



14



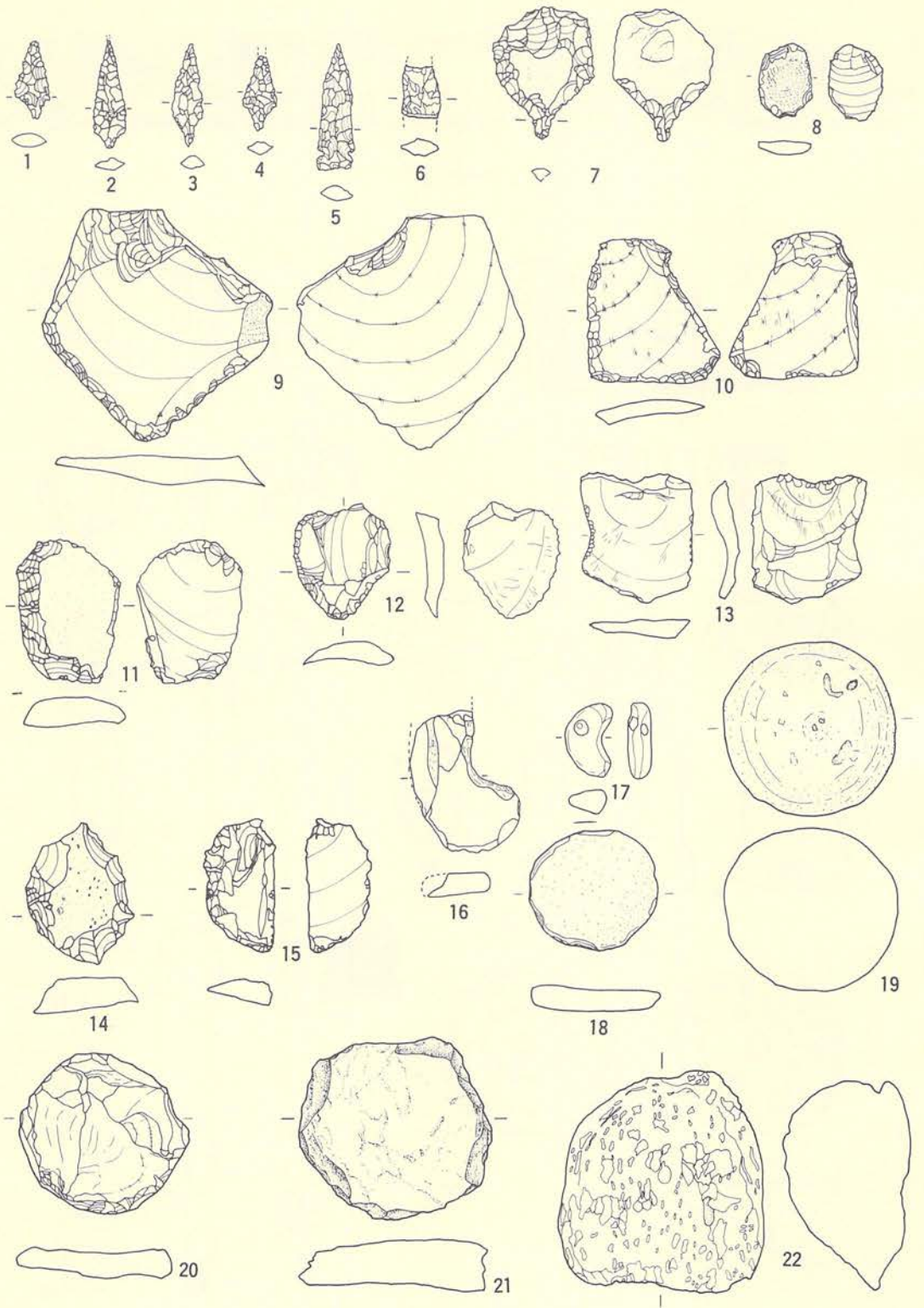
15



16

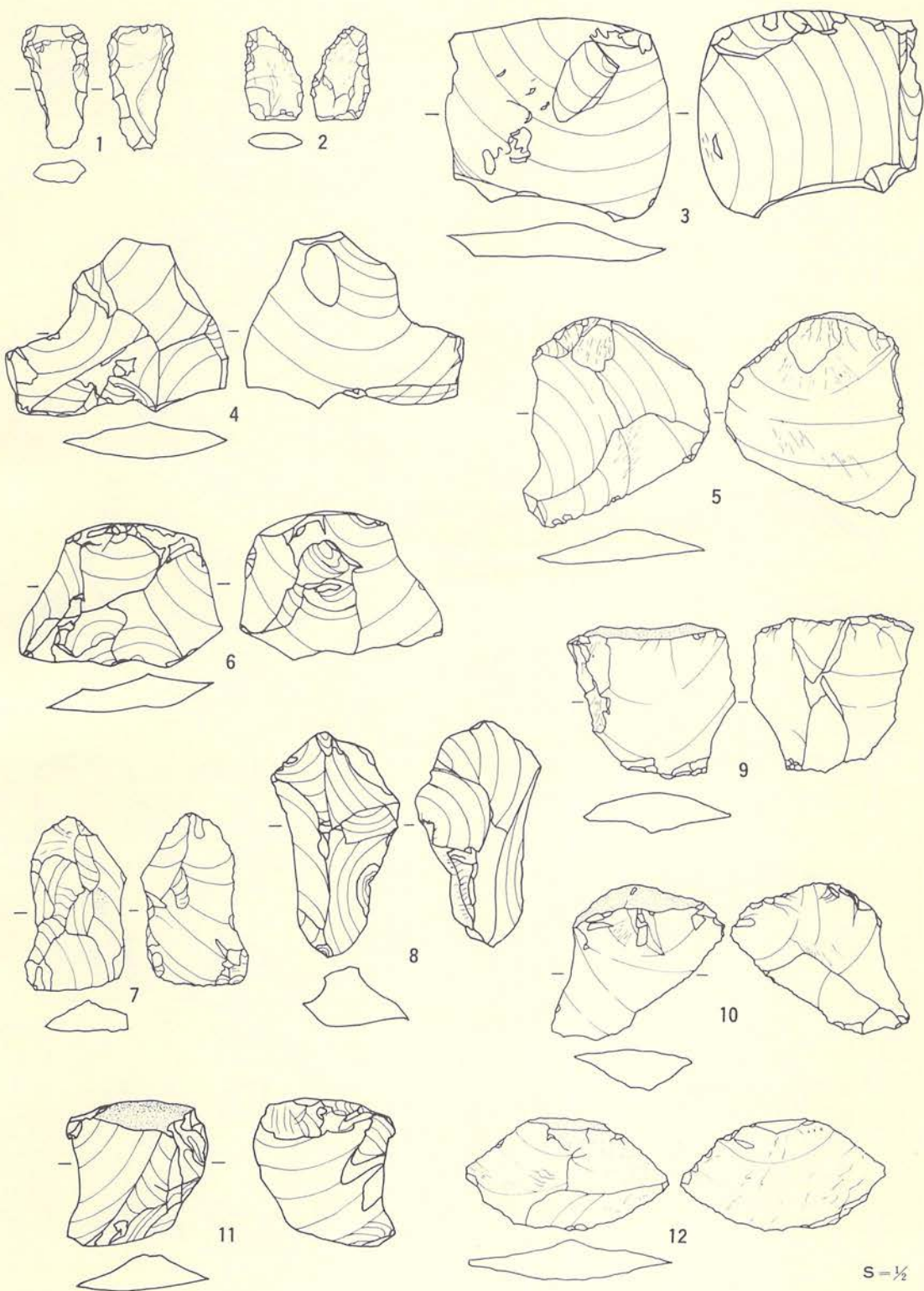
S = 1/2

第95図 遺構外出土遺物(6)

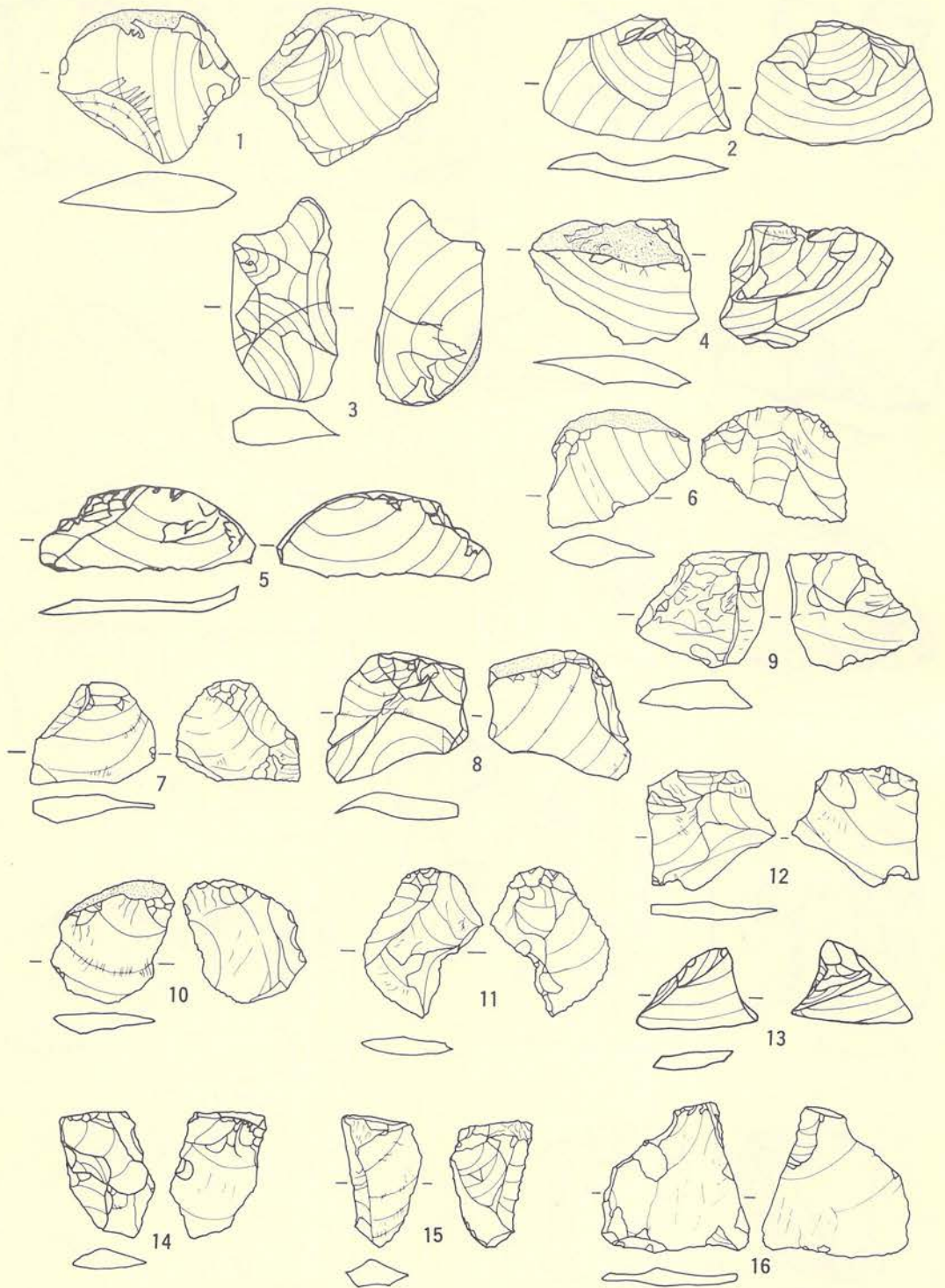


第96図 遺構外出土遺物(7)

S = 1/2

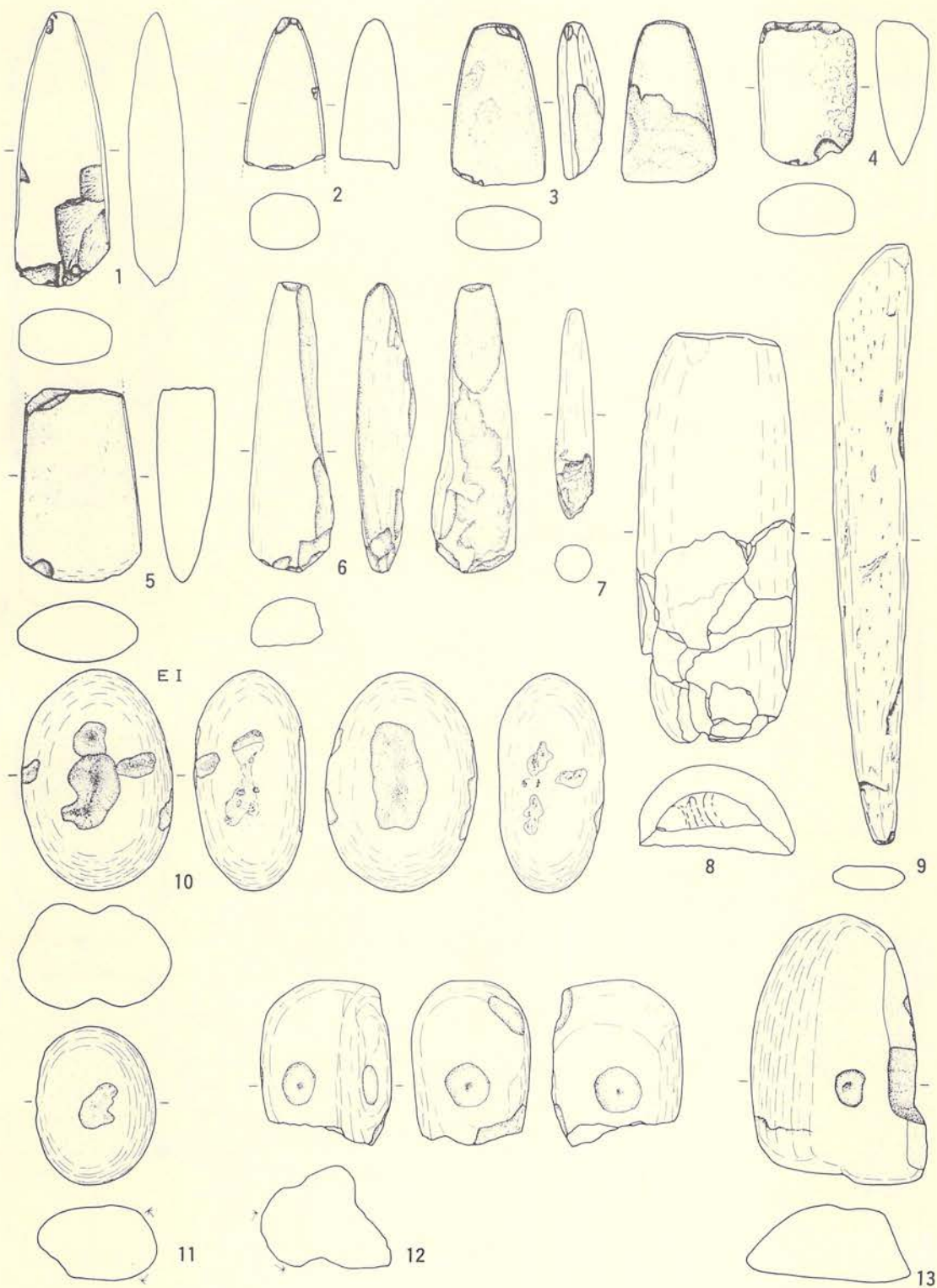


第97図 遺構外出土遺物(8)



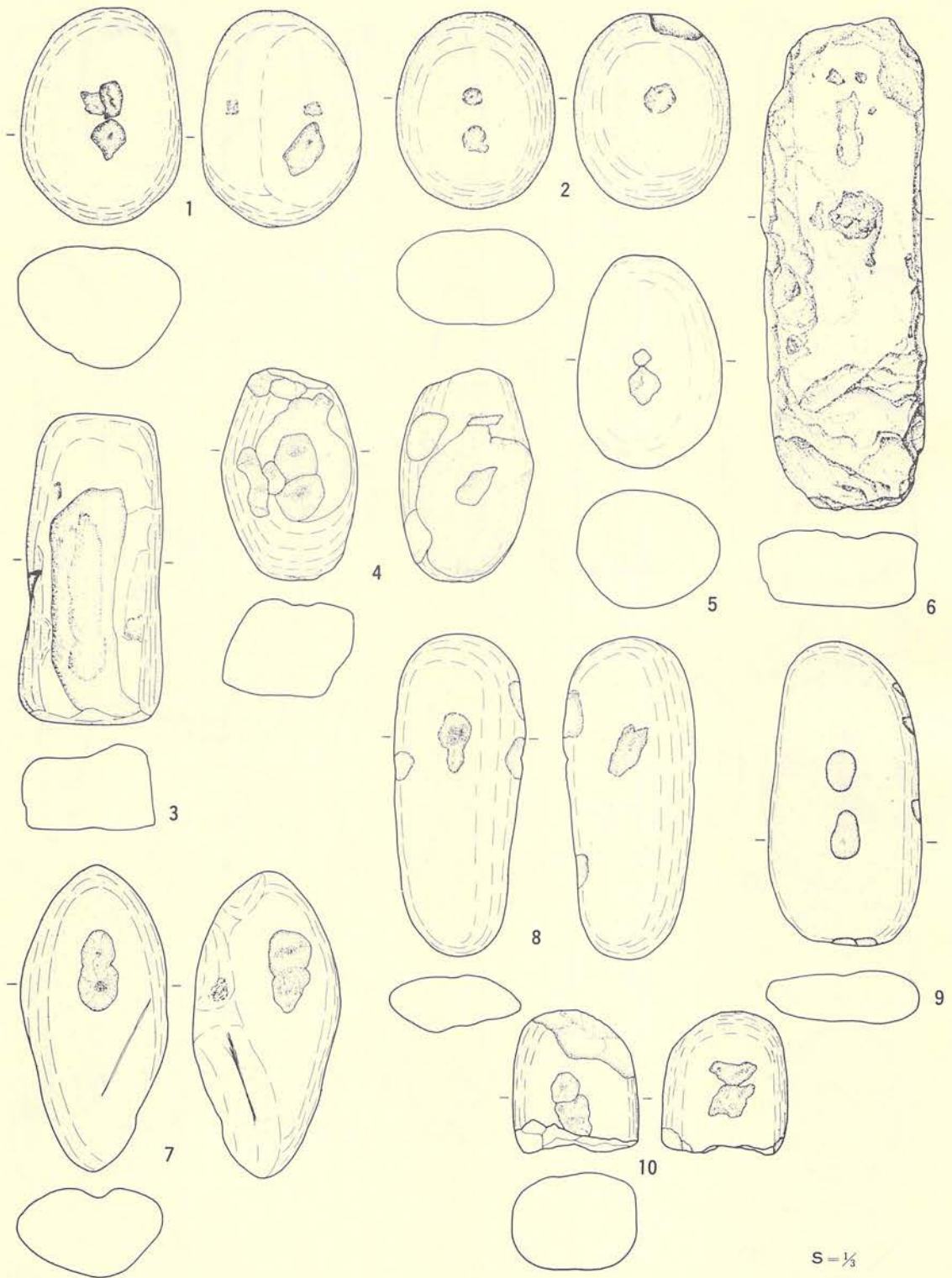
S = 1/2

第98図 遺構外出土遺物(9)

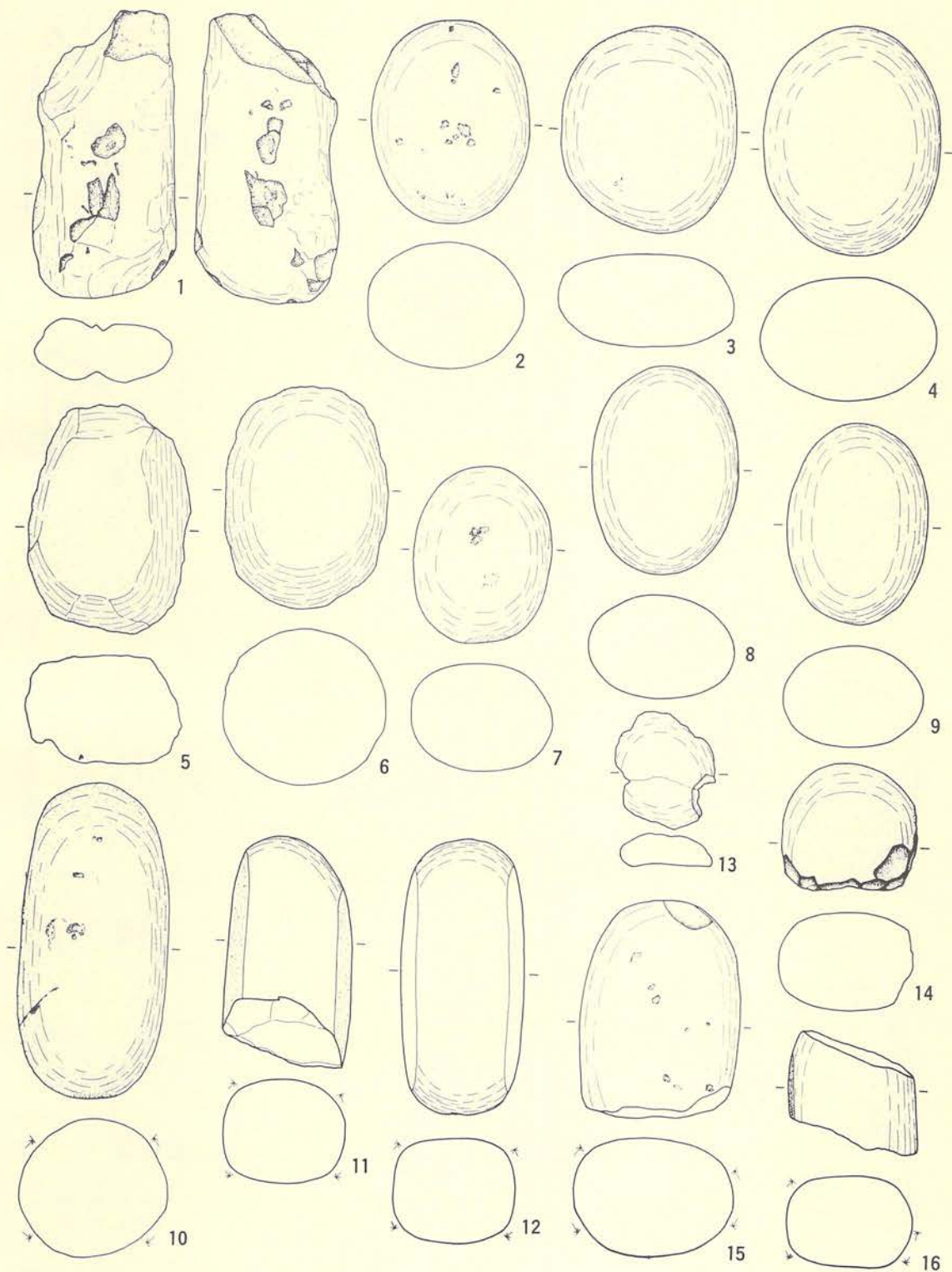


第99図 遺構外出土遺物(10)

8 S=1/6
 他 S=1/3

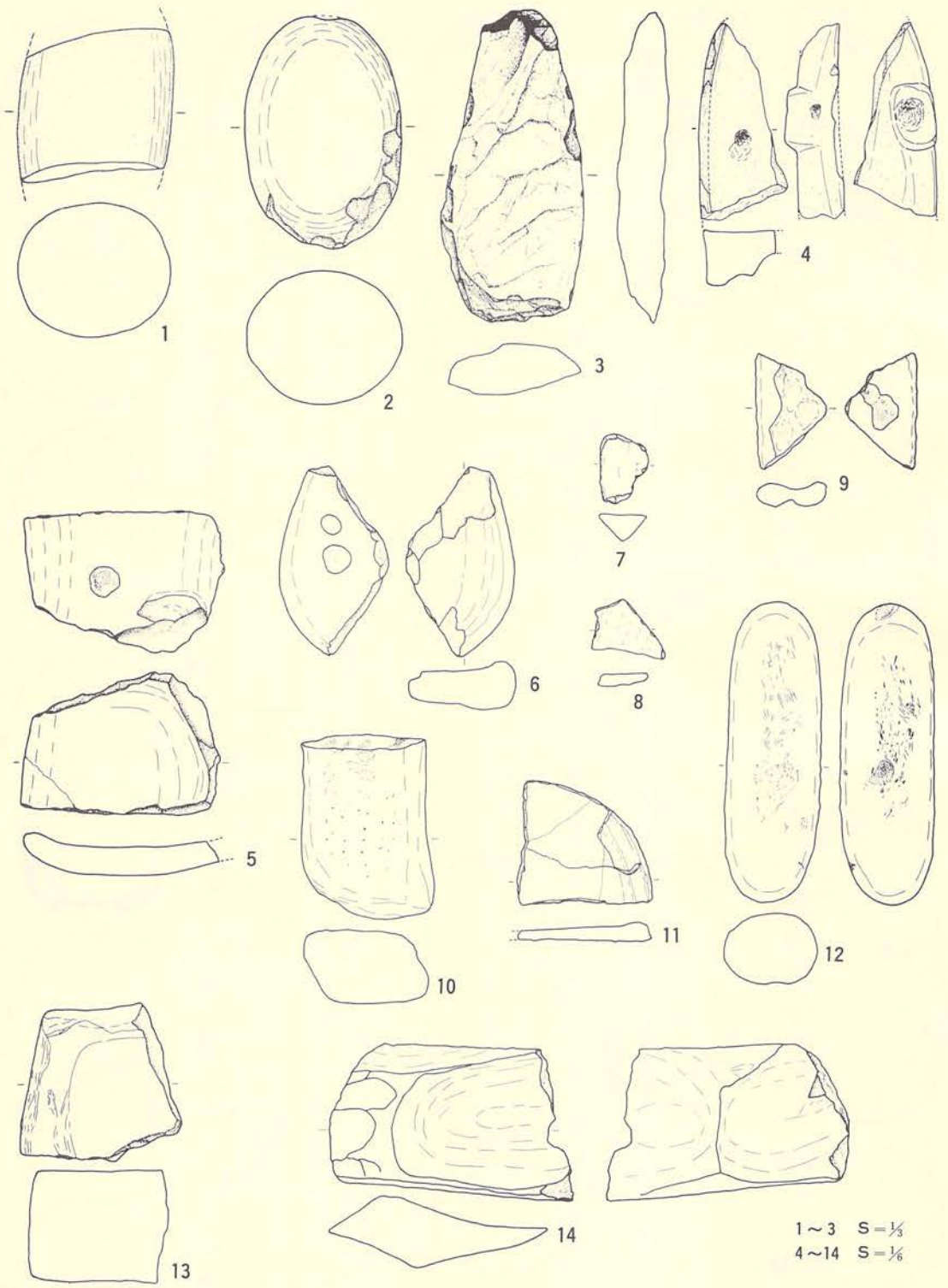


第100図 遺構外出土遺物(11)

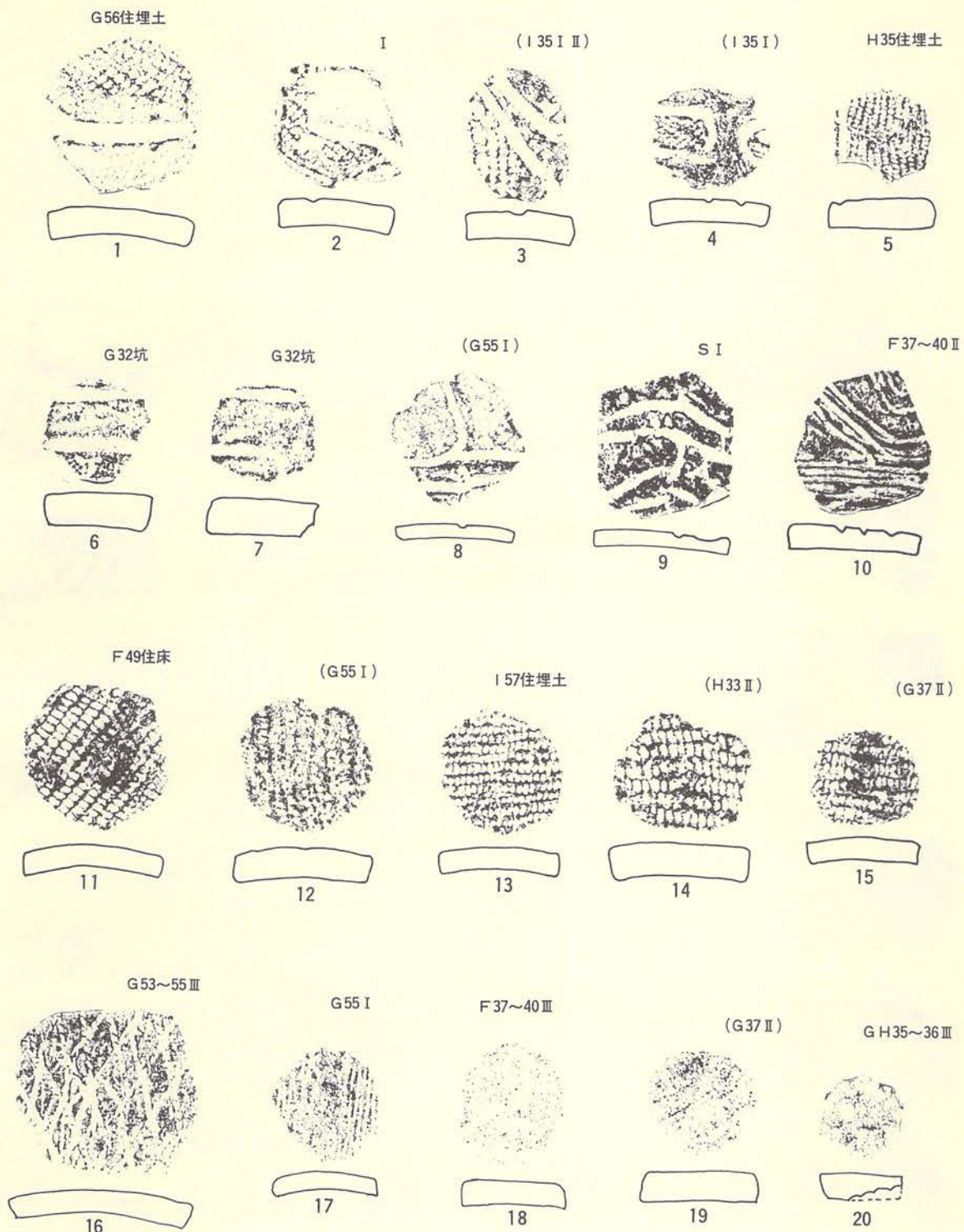


第101図 遺構外出土遺物(12)

S-1/3

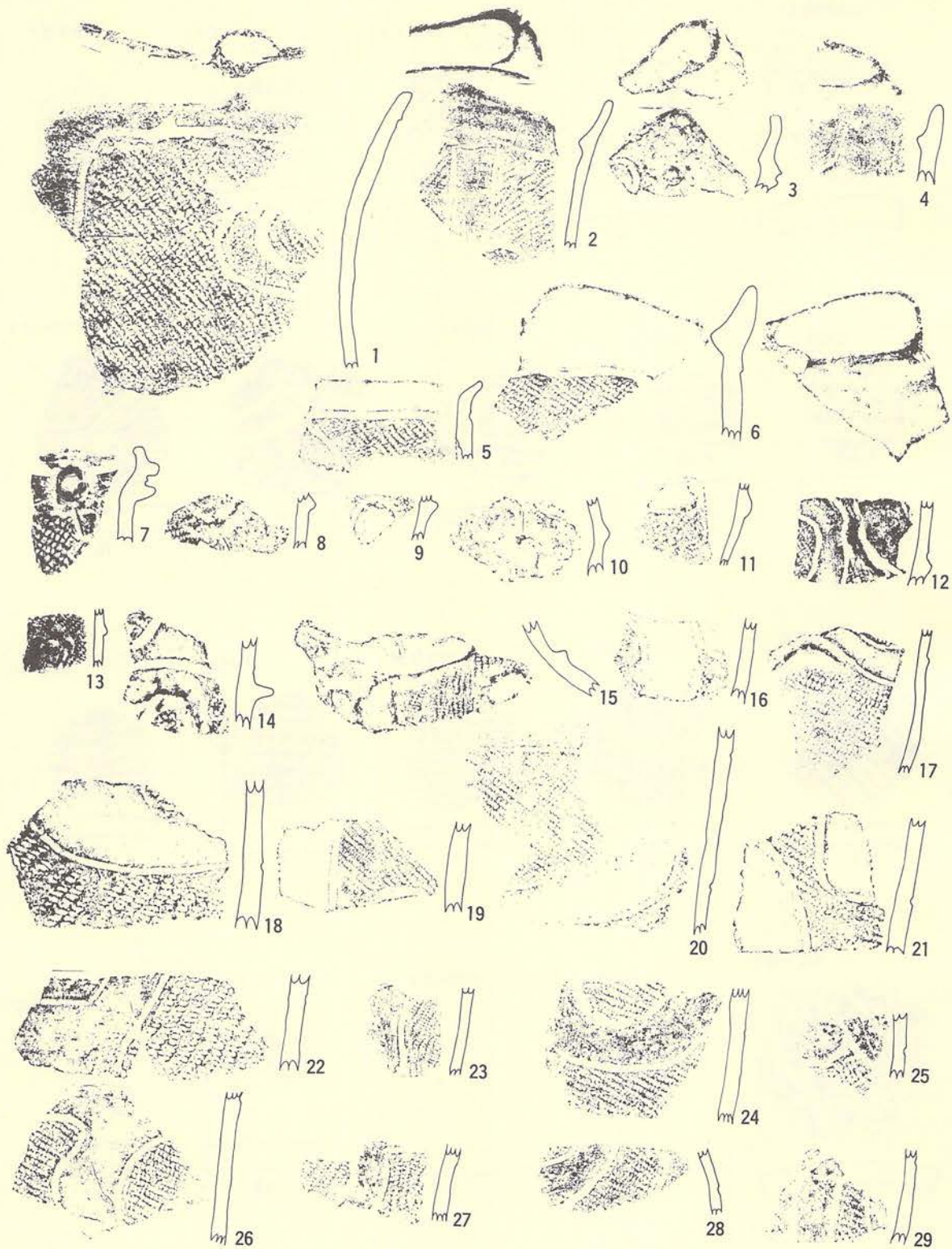


第102図 遺構外出土遺物(13)



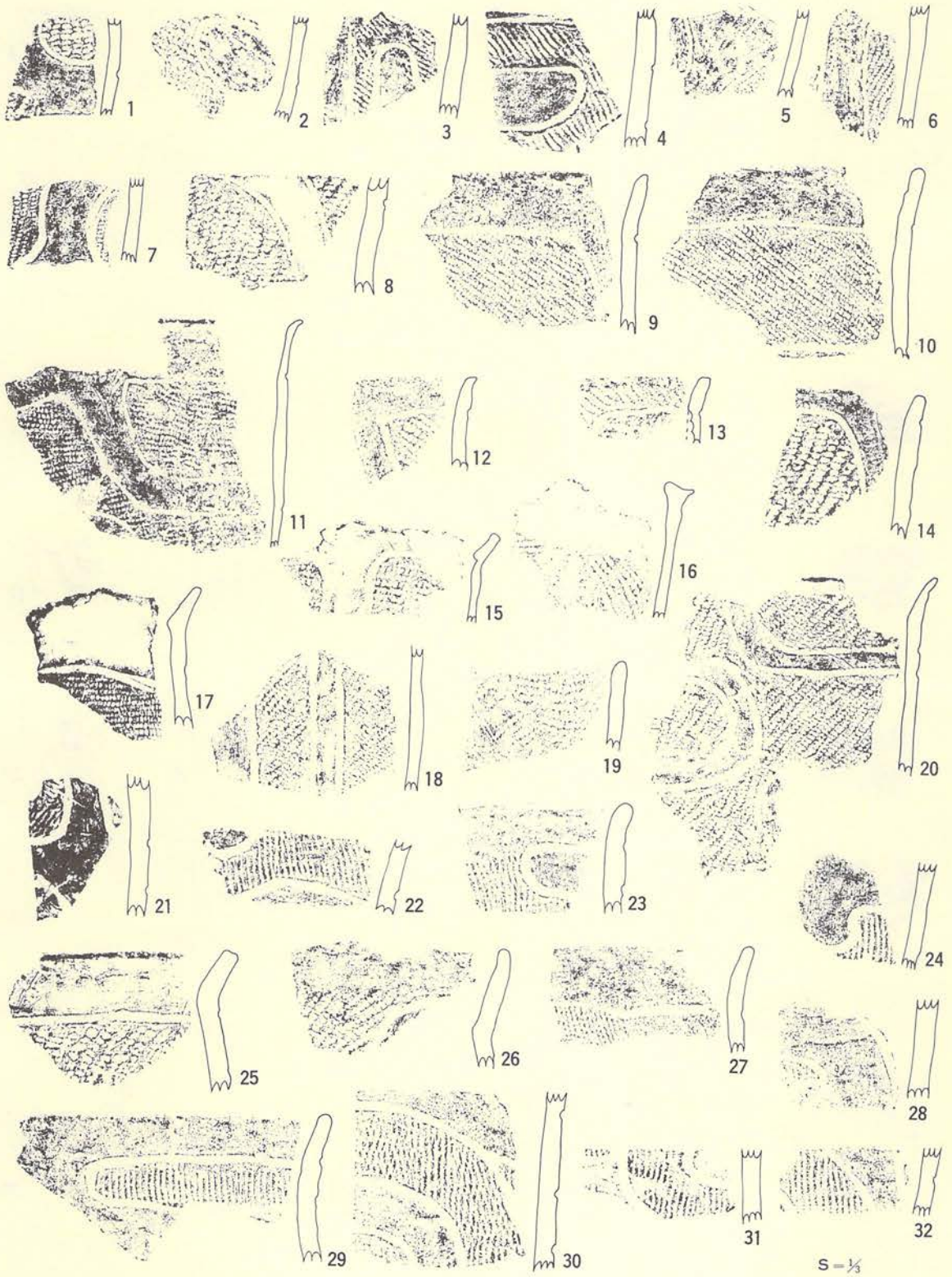
S = 1/2

第103図 円形土器片

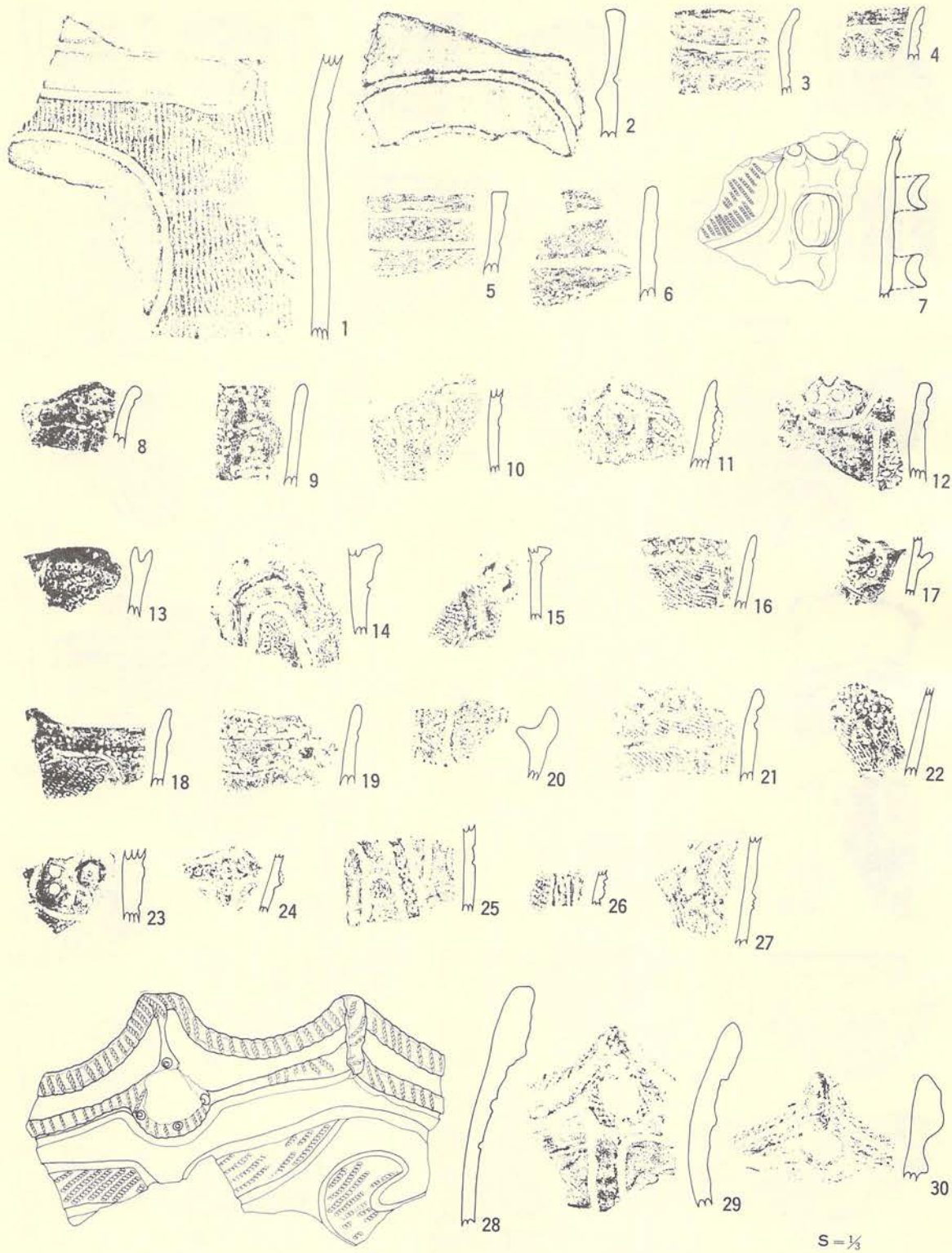


S = 1/2

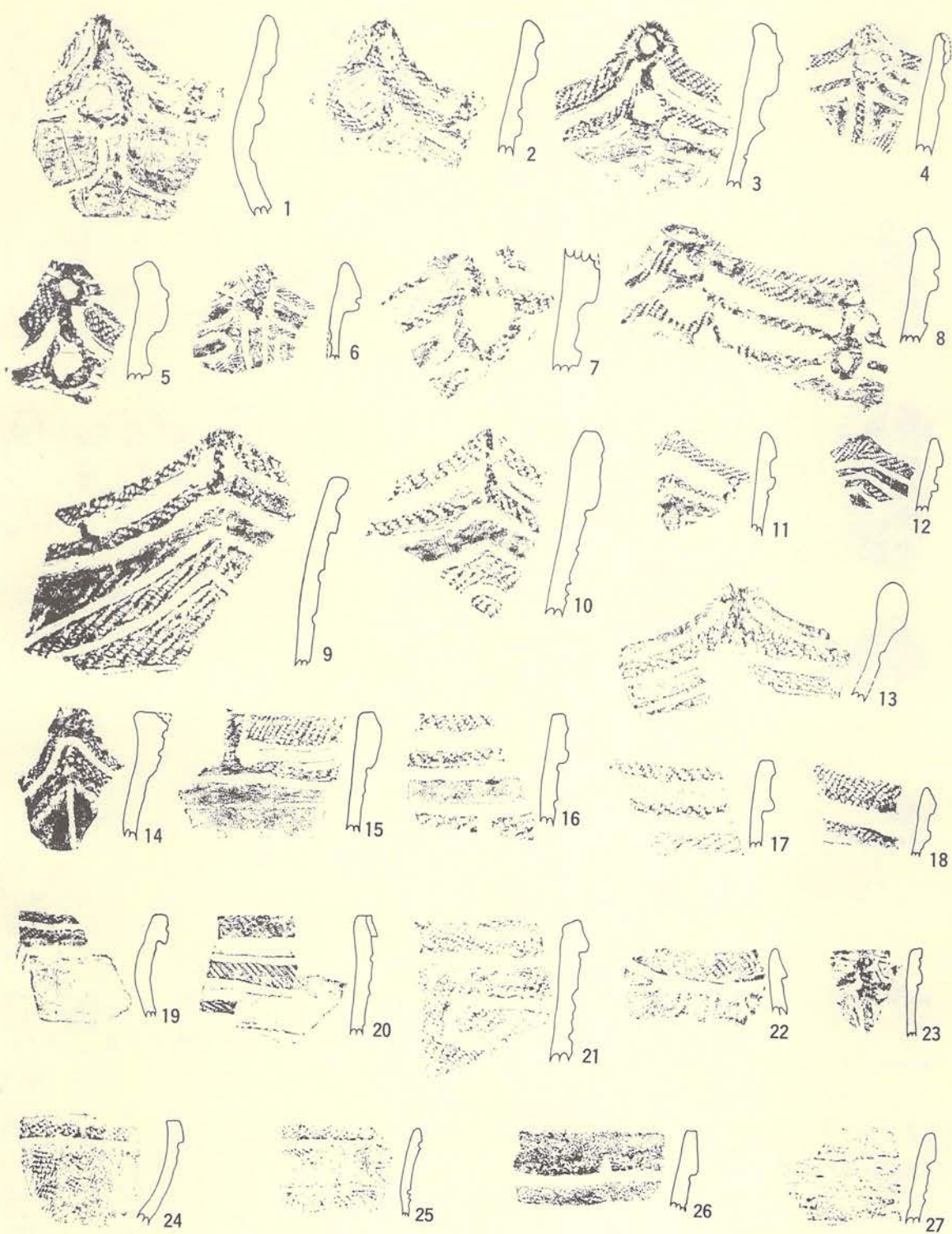
第104图 土器拓影(1)



第105图 土器拓影(2)

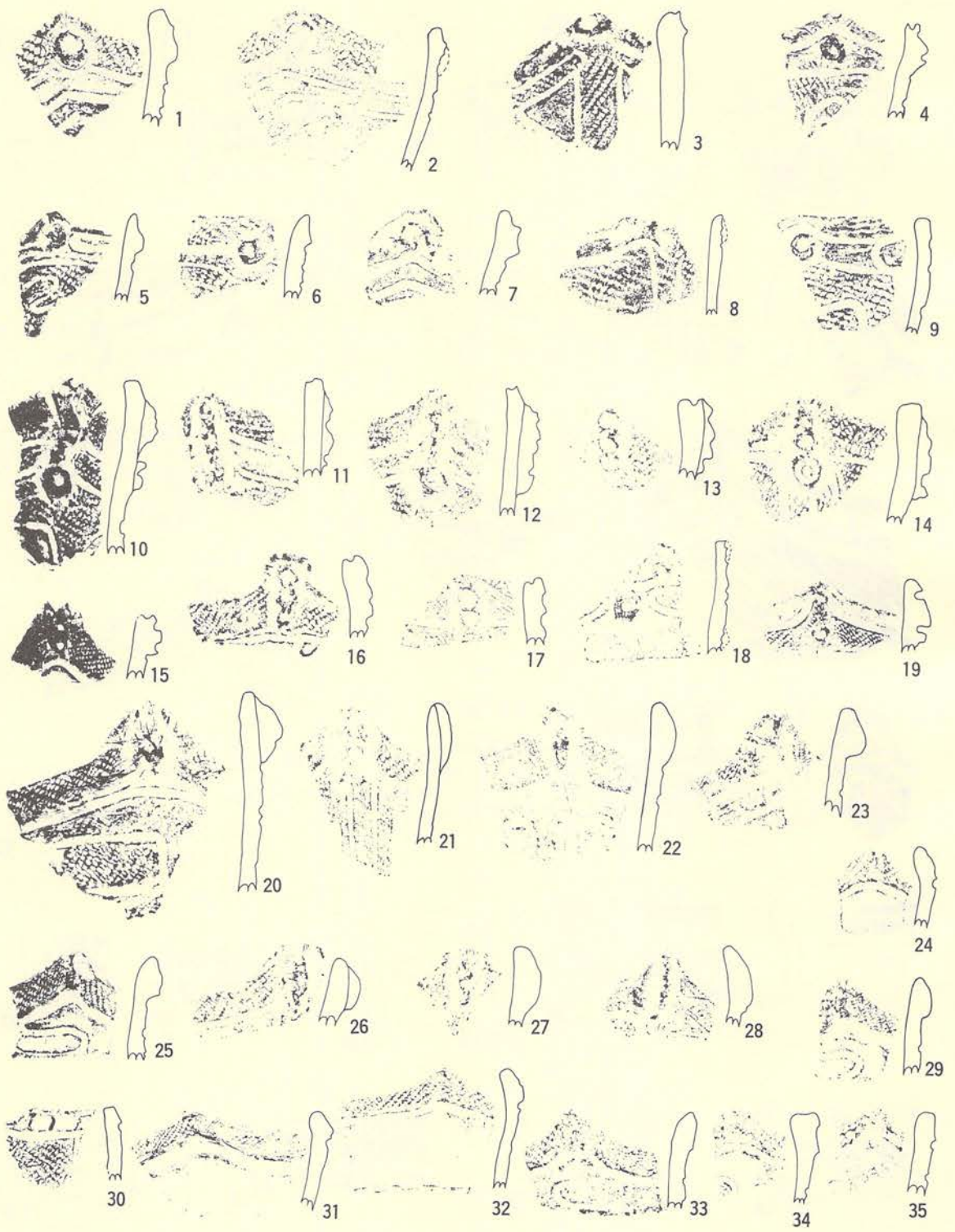


第106図 土器拓影(3)および実測図



S = 1/3

第107图 土器拓影(4)



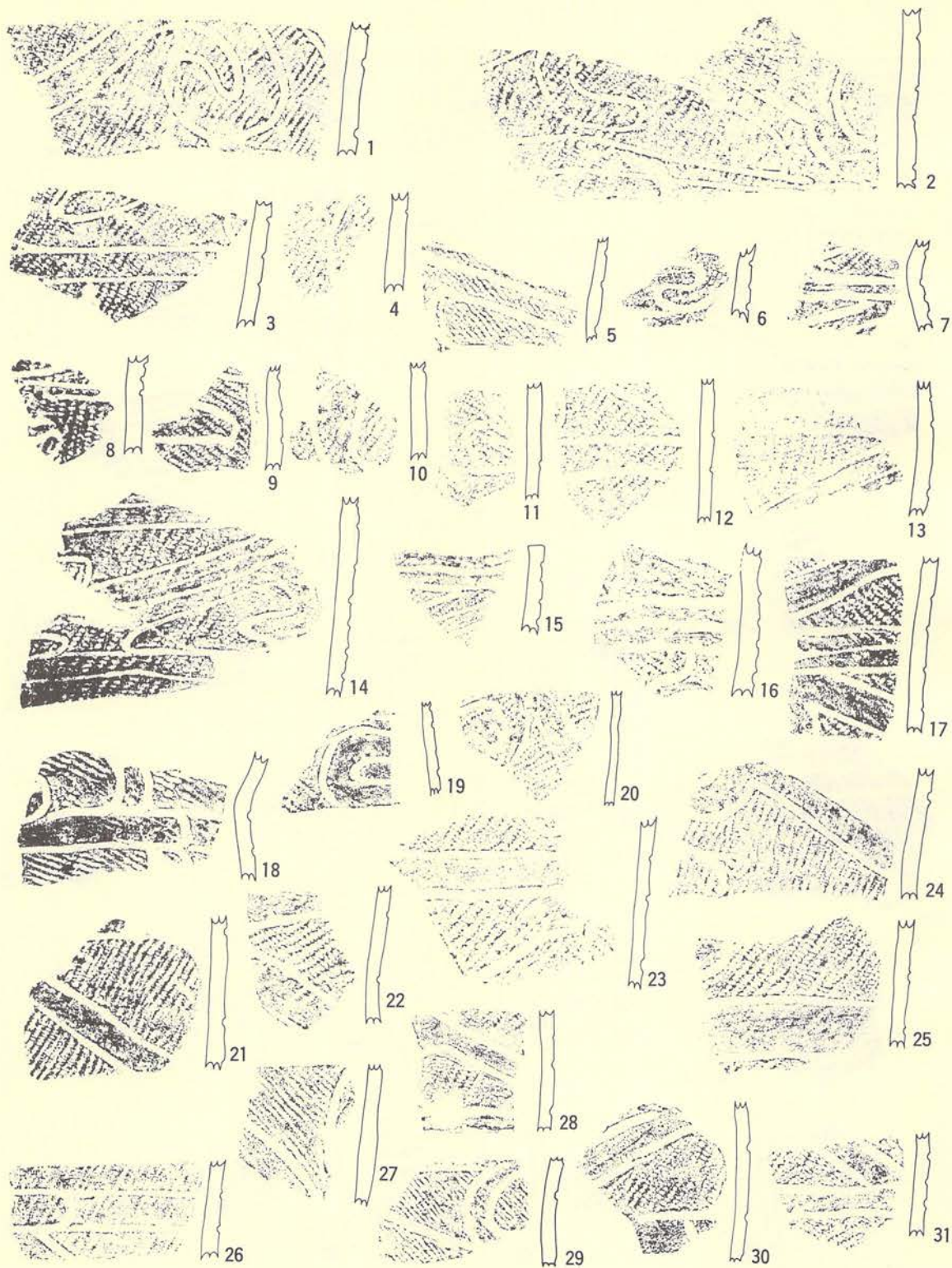
S = 1/4

第108图 土器拓影(5)



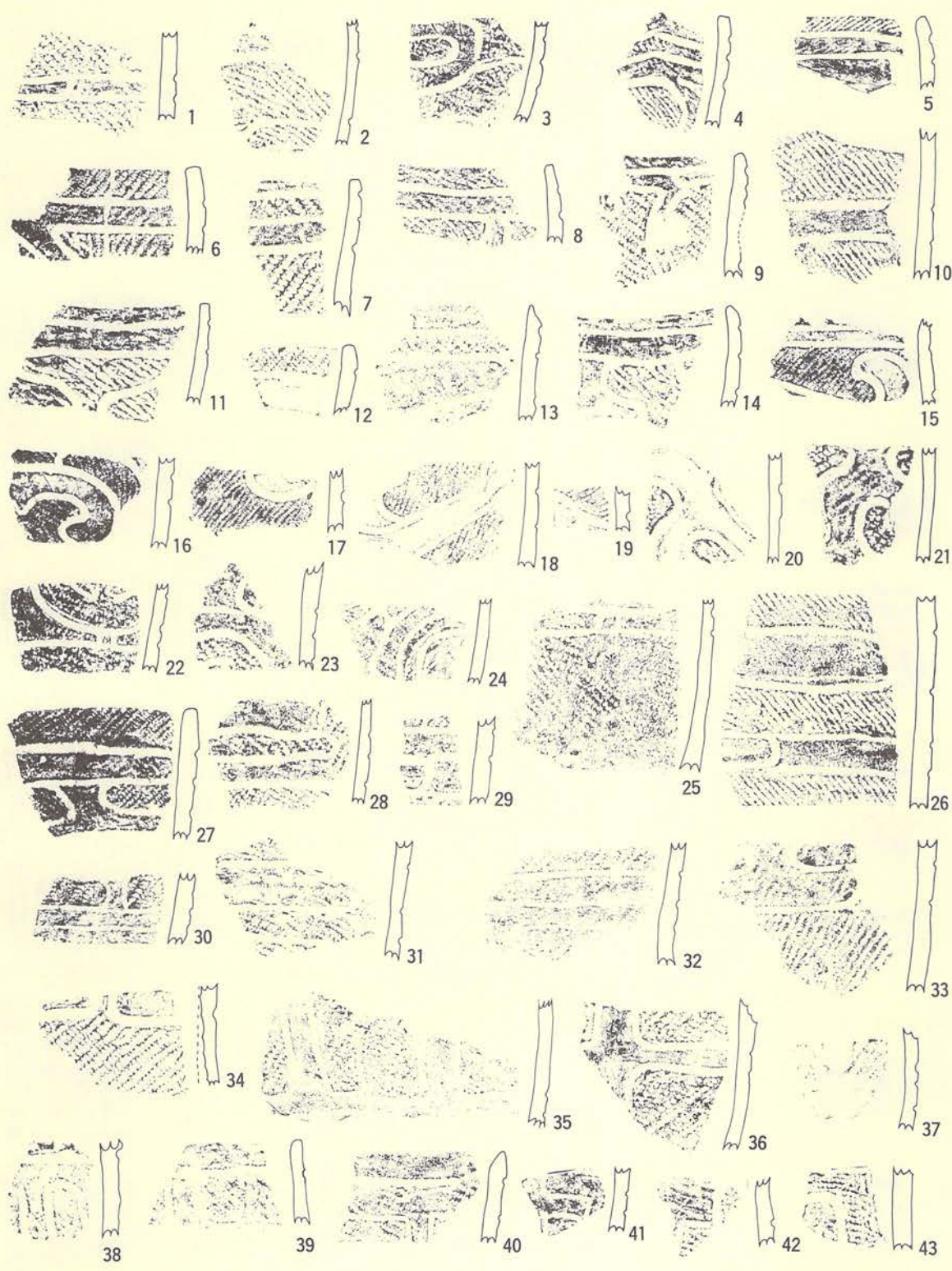
S=1/2

第109图 土器拓影(6)



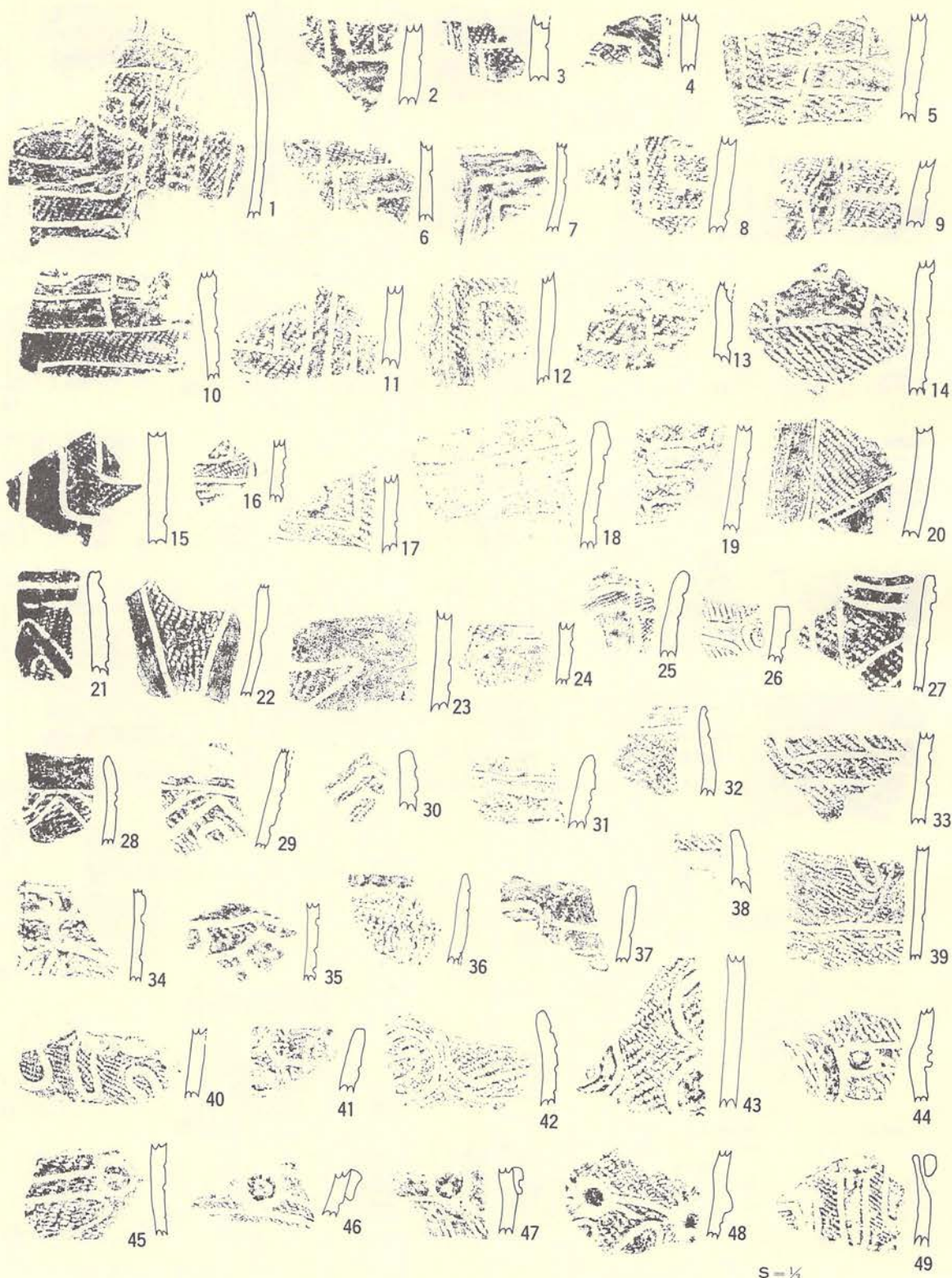
S = 1/4

第110图 土器拓影(7)

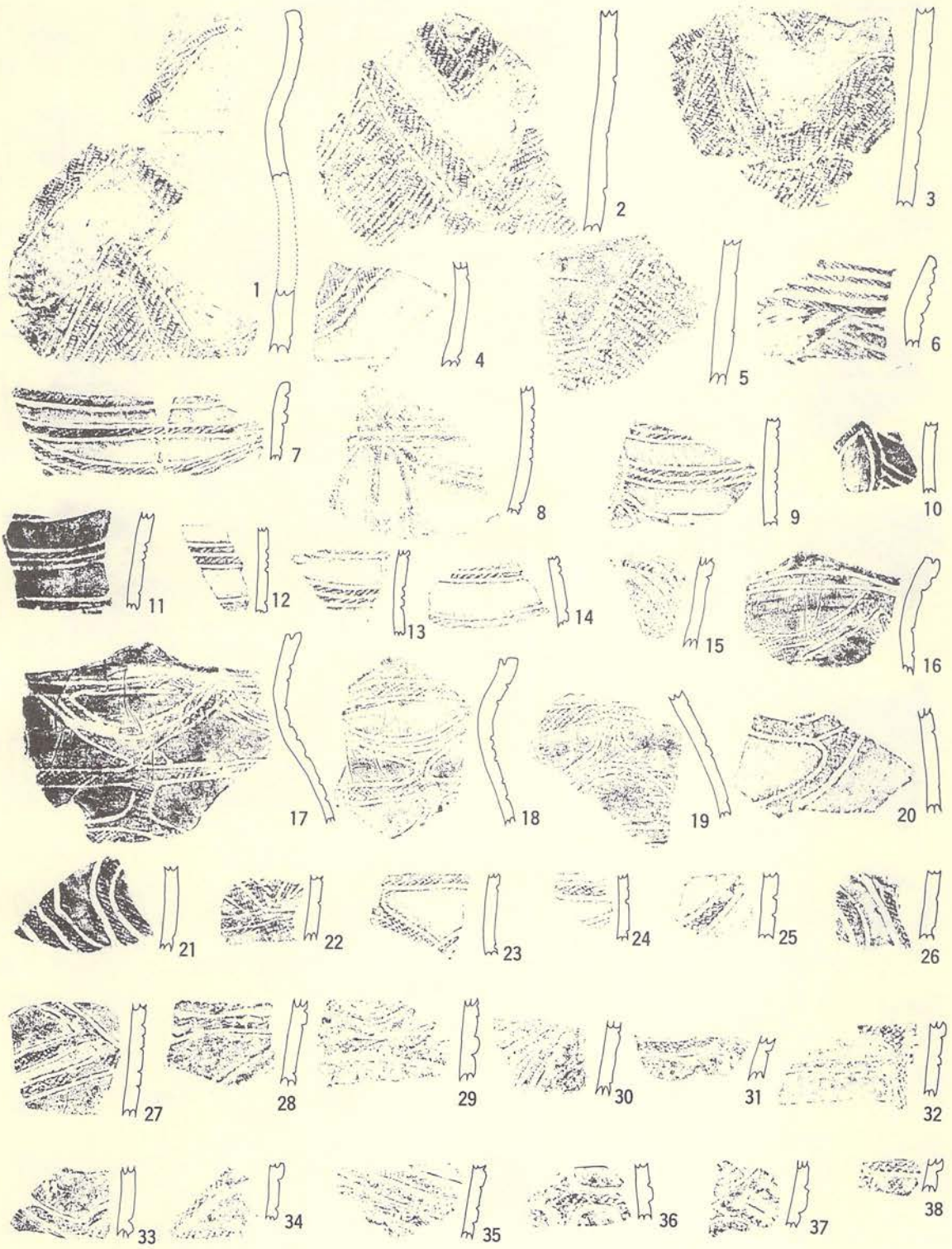


S = 1/2

第111图 土器拓影(8)

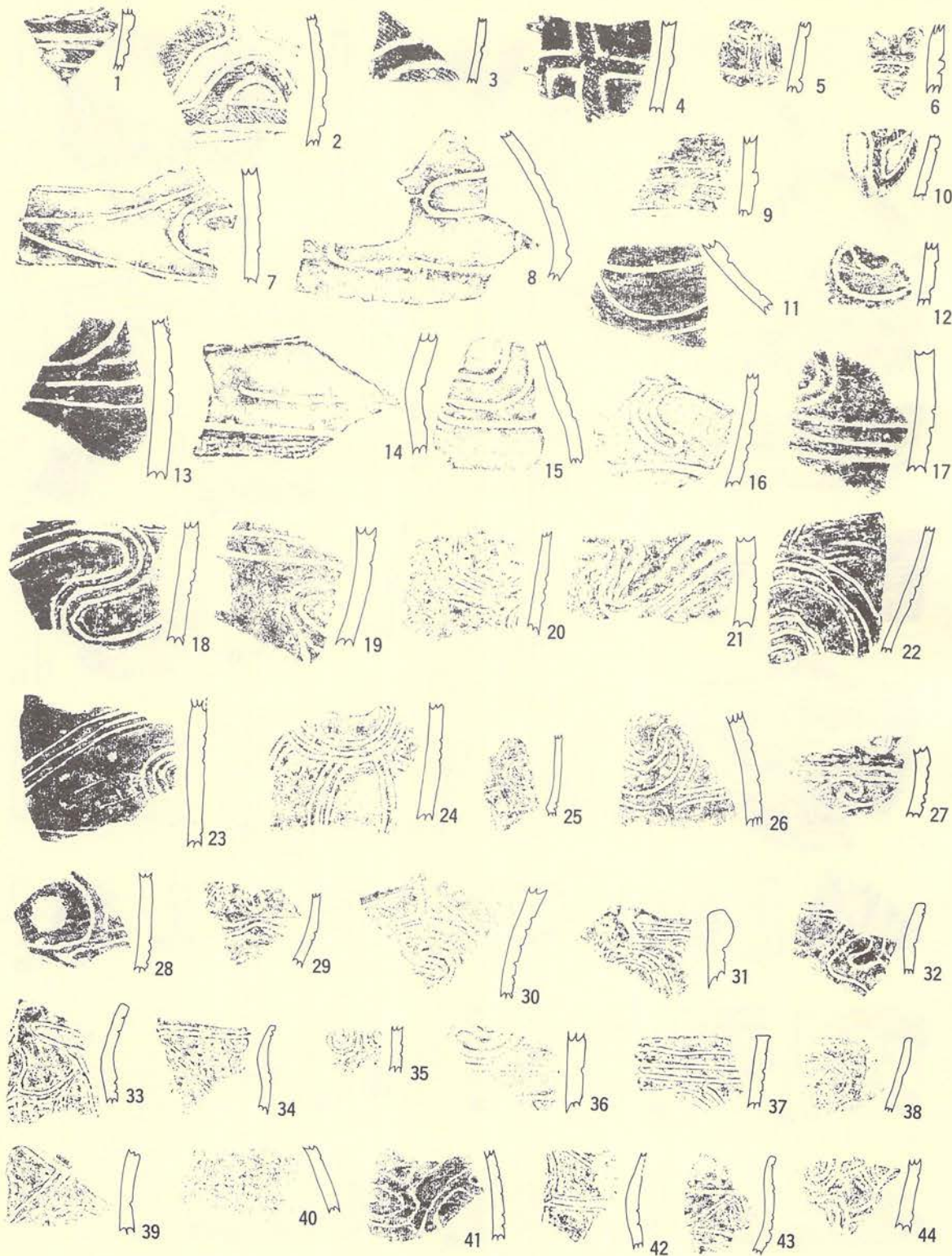


第112图 土器拓影(9)



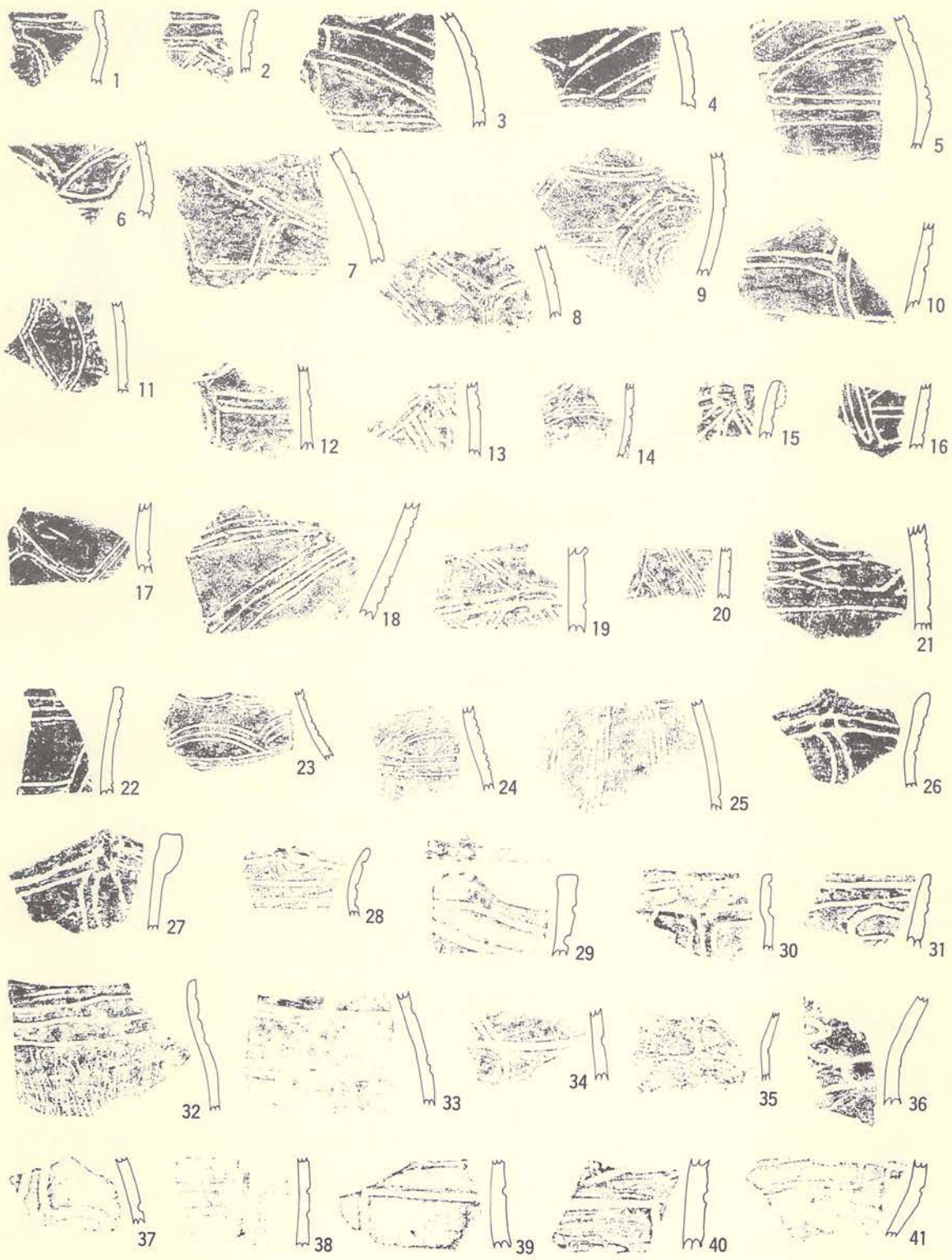
S = 1/2

第113图 土器拓影(10)



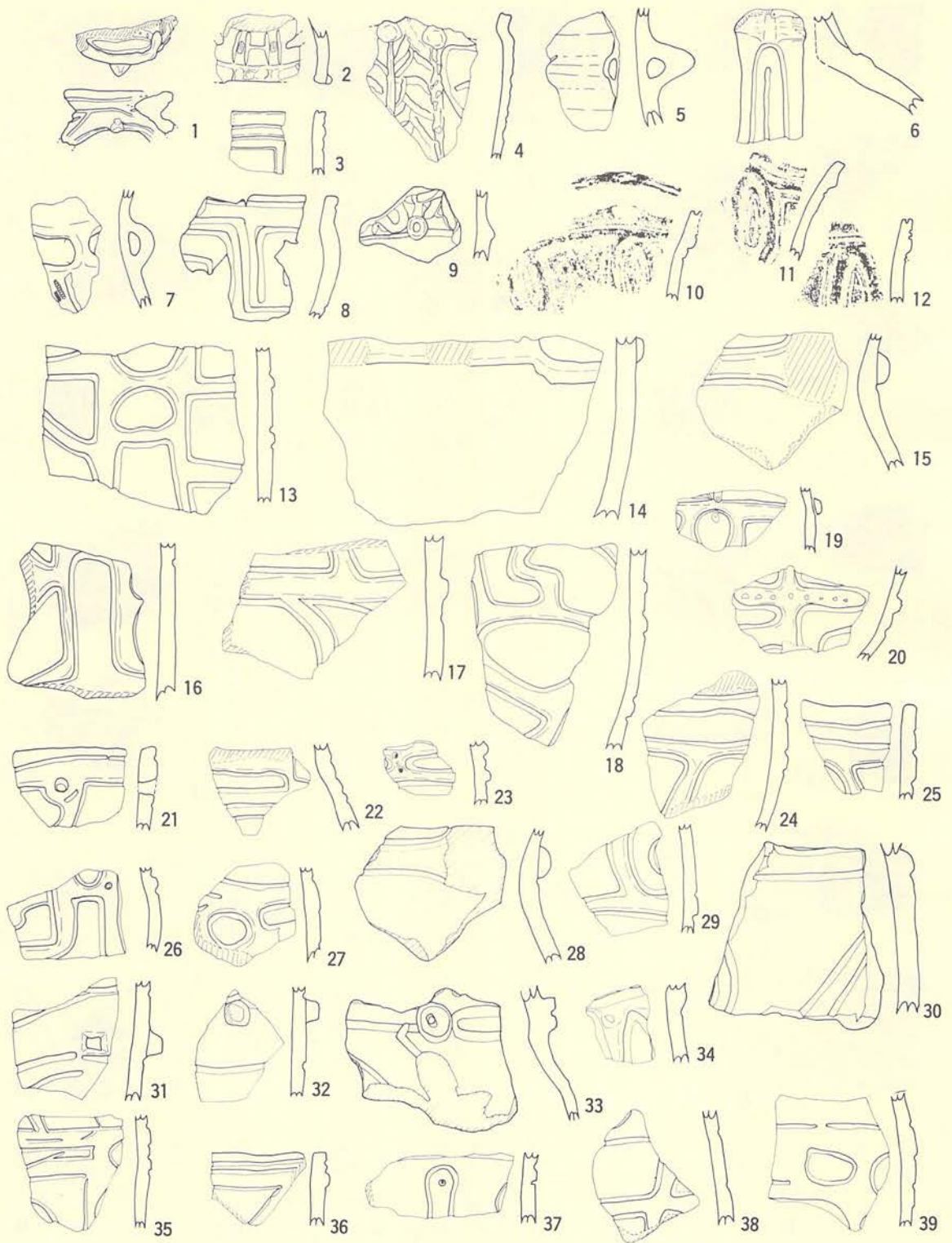
S = 1/2

第114图 土器拓影(11)



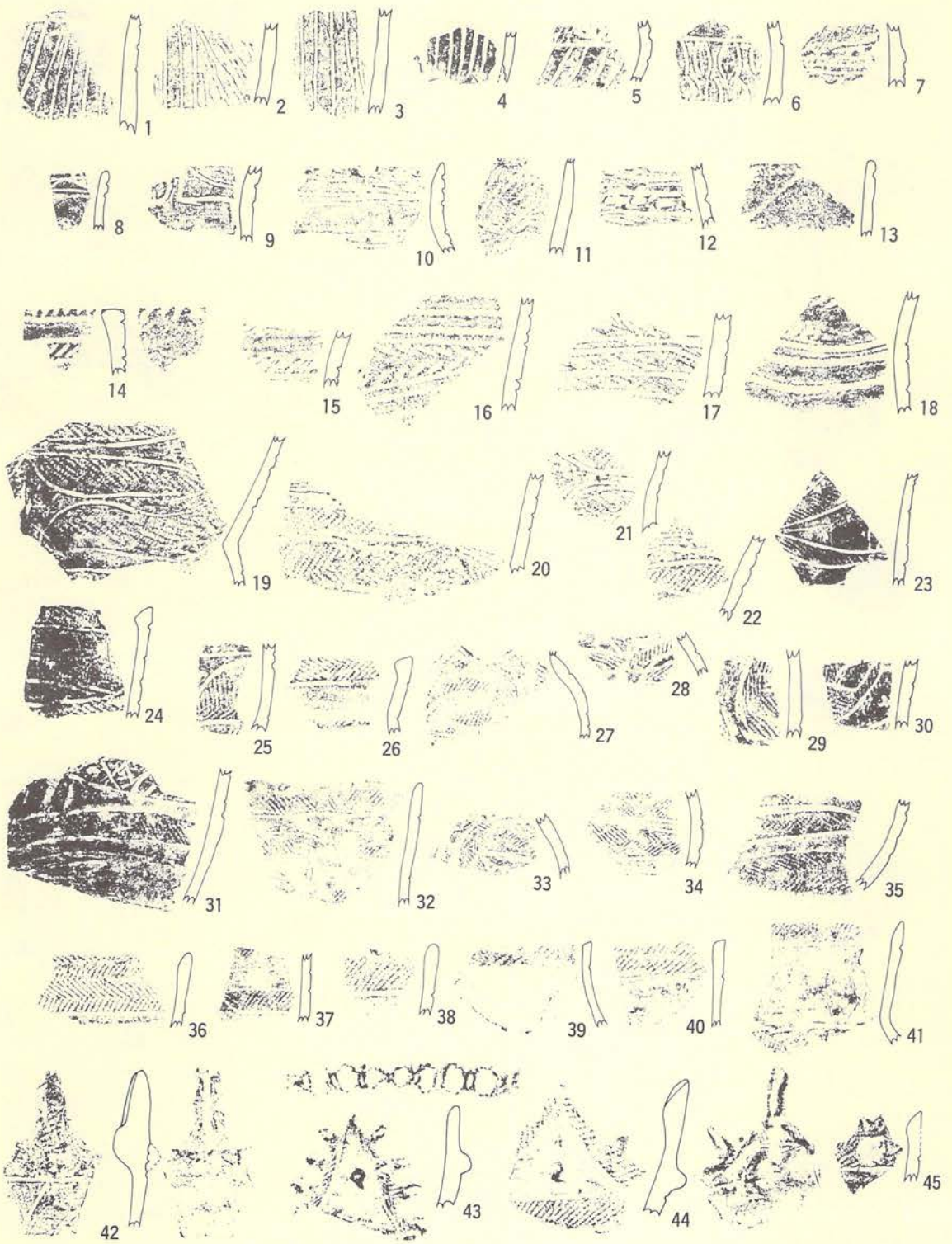
S = 1/3

第115图 土器拓影(12)



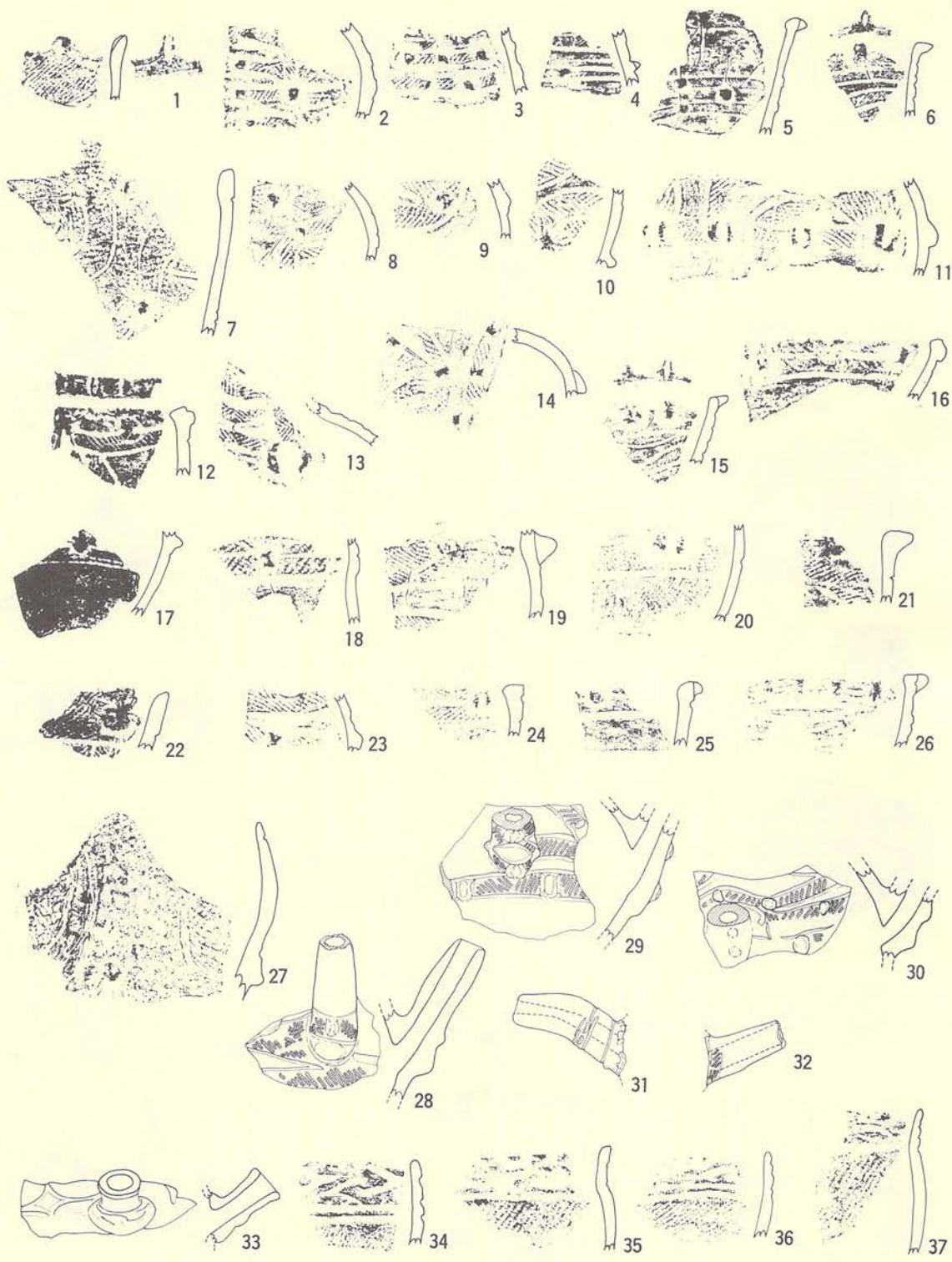
S = 1/2

第116図 土器拓影(13)および実測図



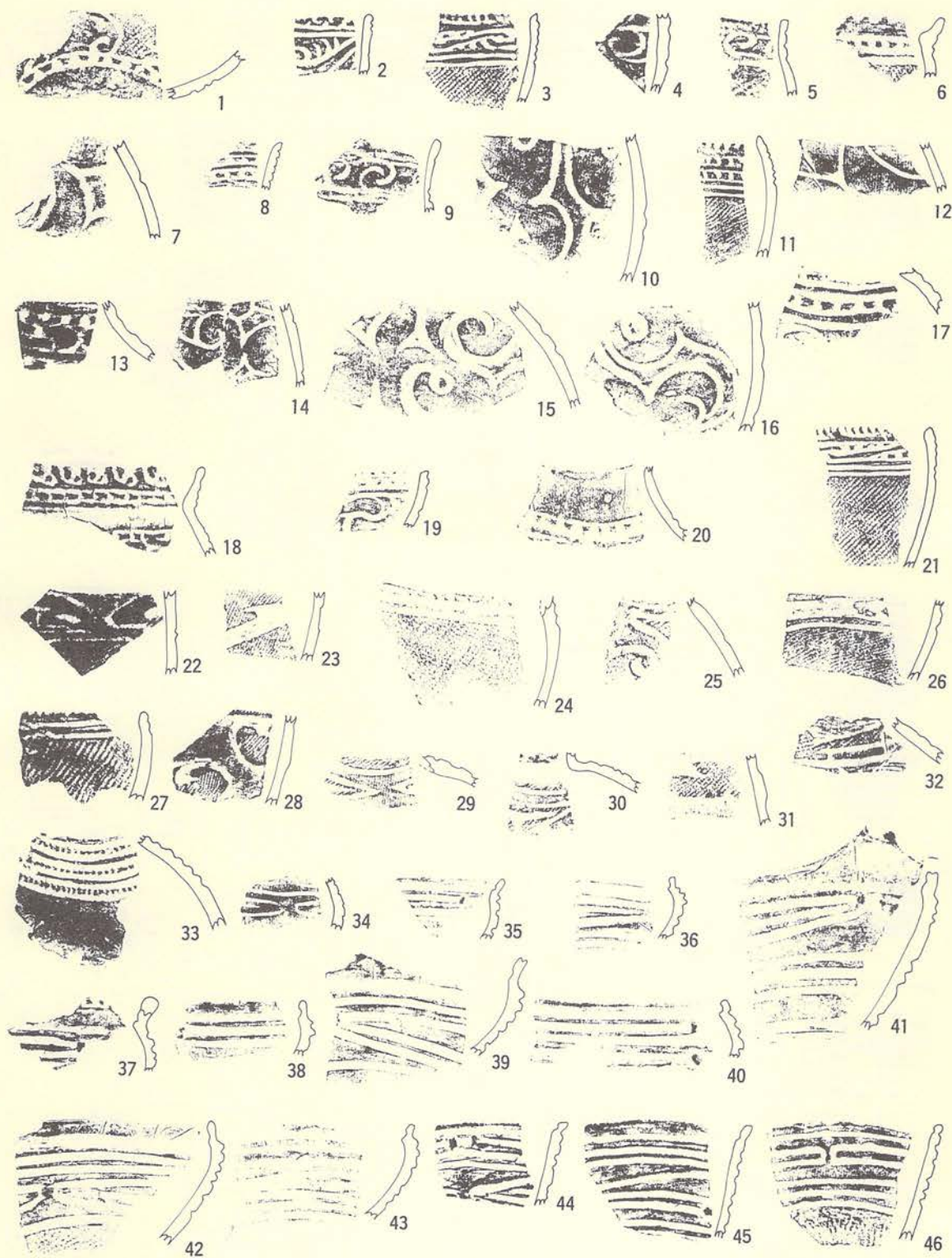
S = 1/2

第117图 土器拓影(14)



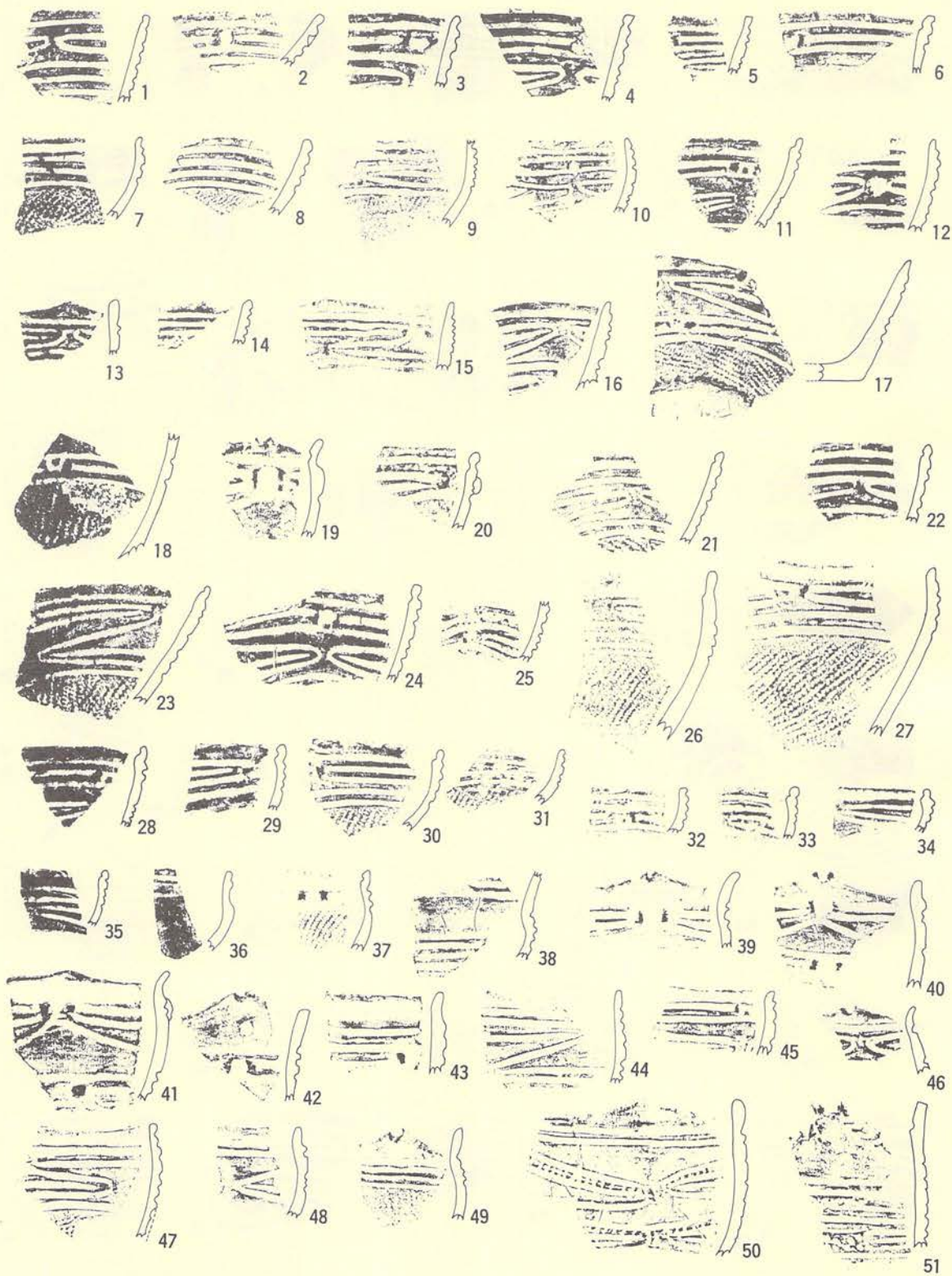
S=1/3

第118図 土器拓影(15)および実測図



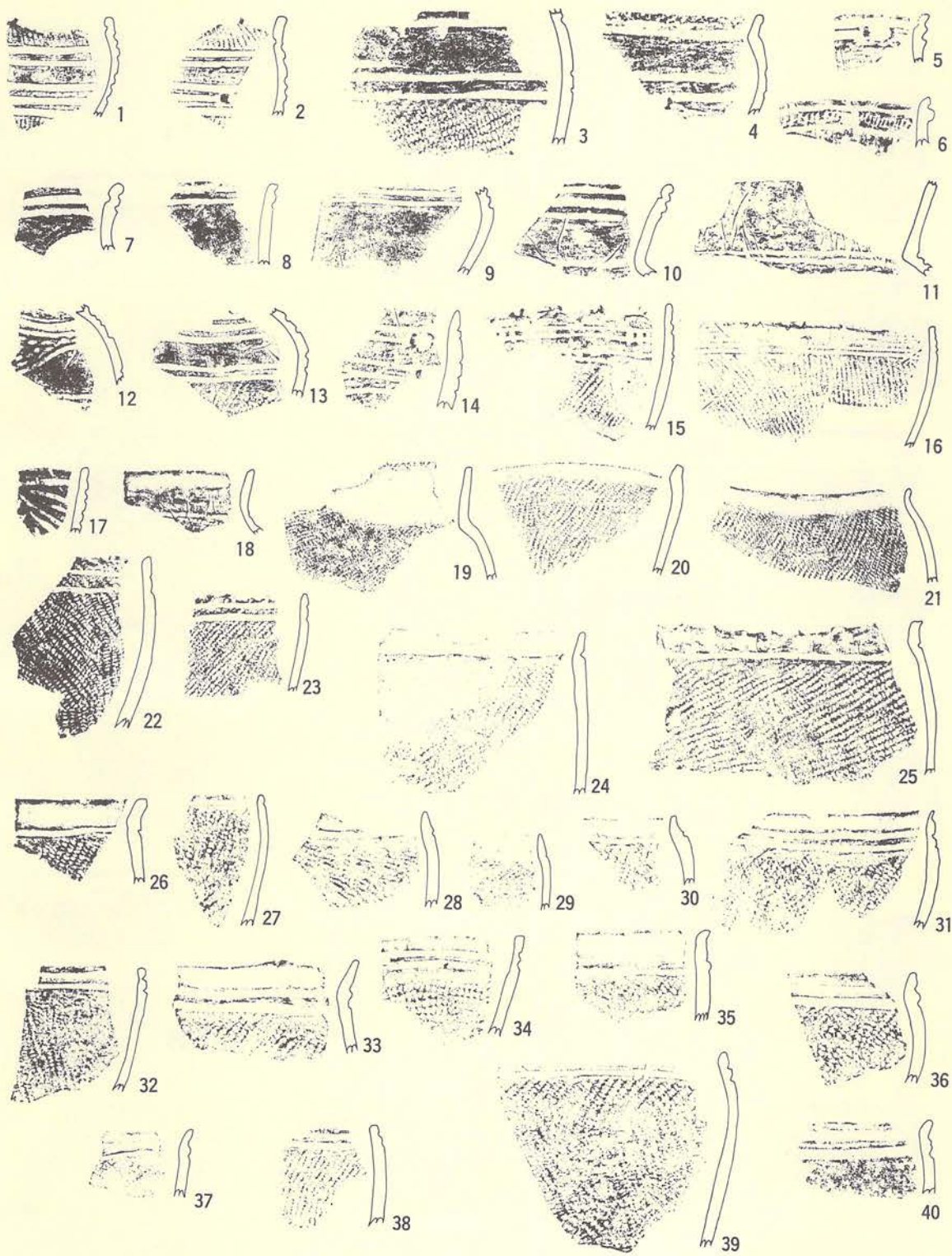
S = 1/2

第119图 土器拓影(16)



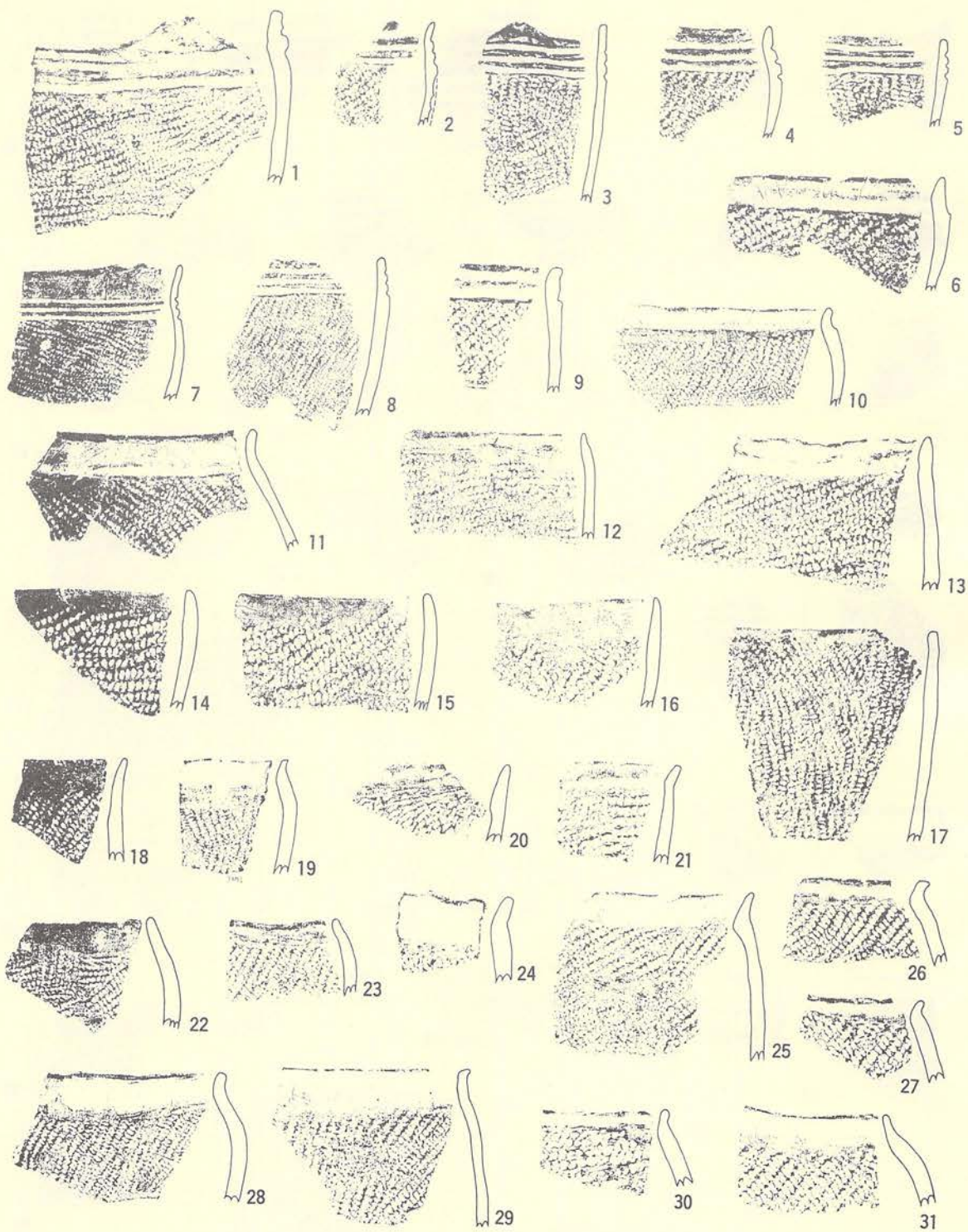
S = 1/3

第120图 土器拓影(17)



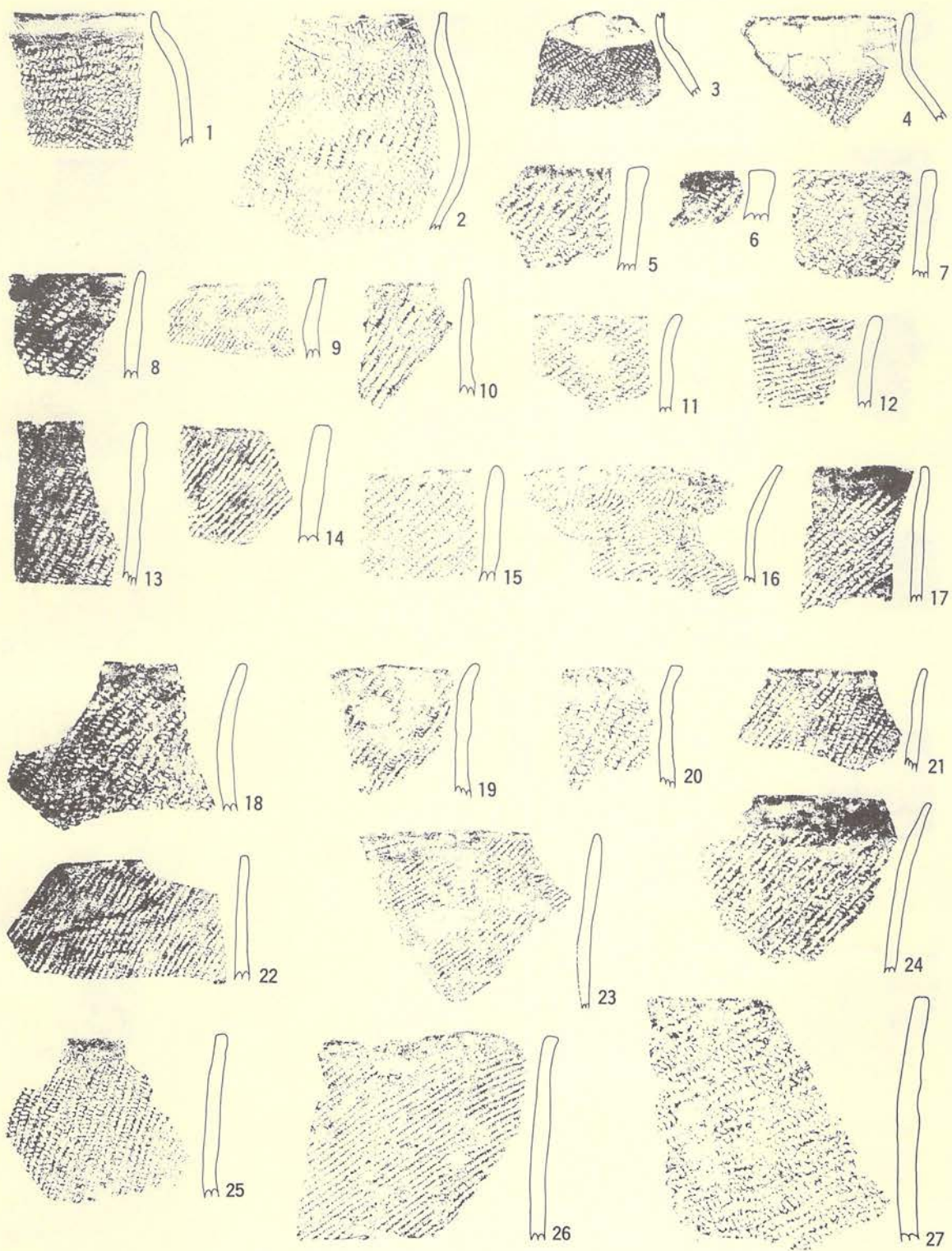
S = 1/2

第121图 土器拓影(18)



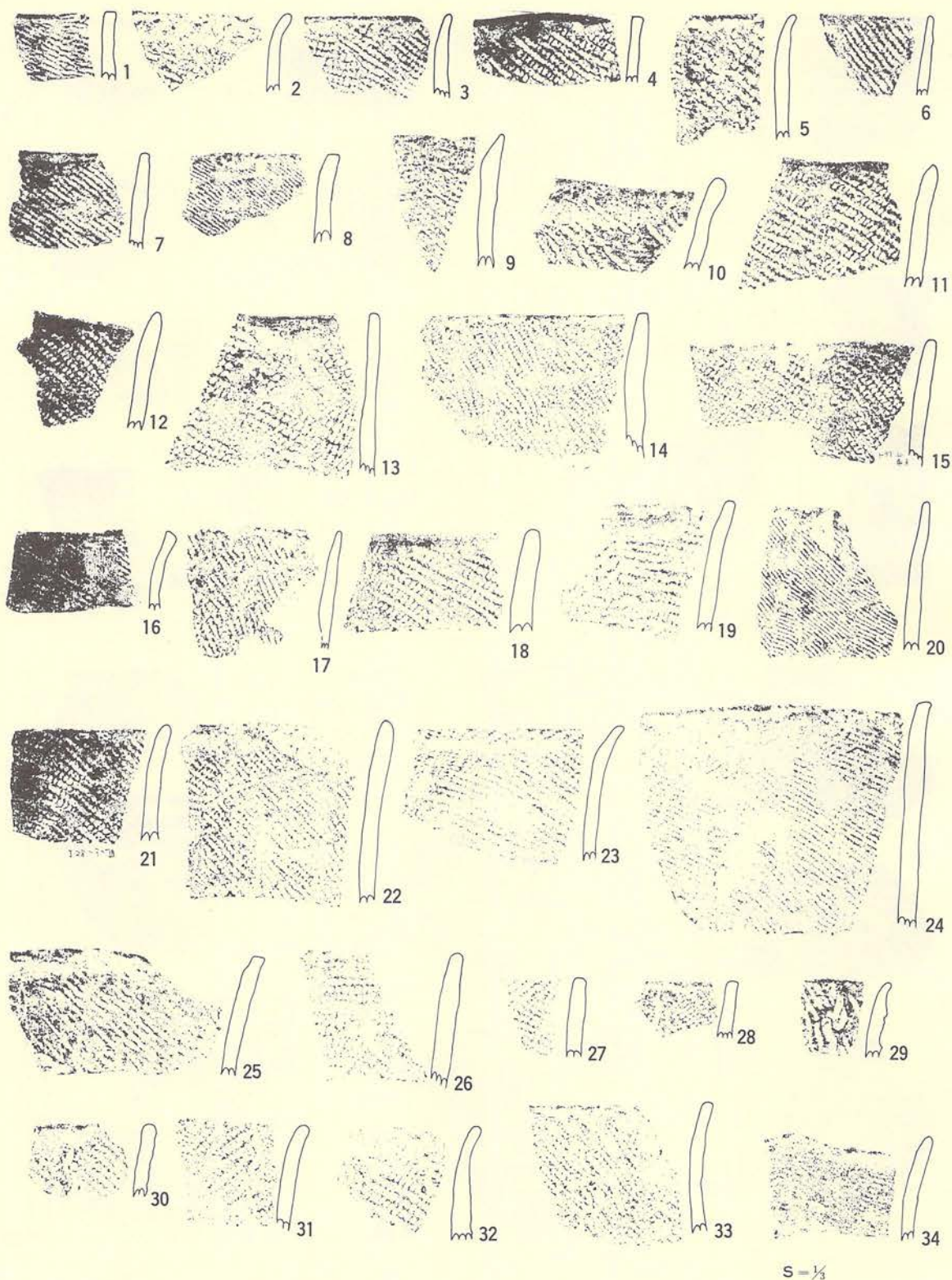
S = 1/3

第122图 土器拓影(19)

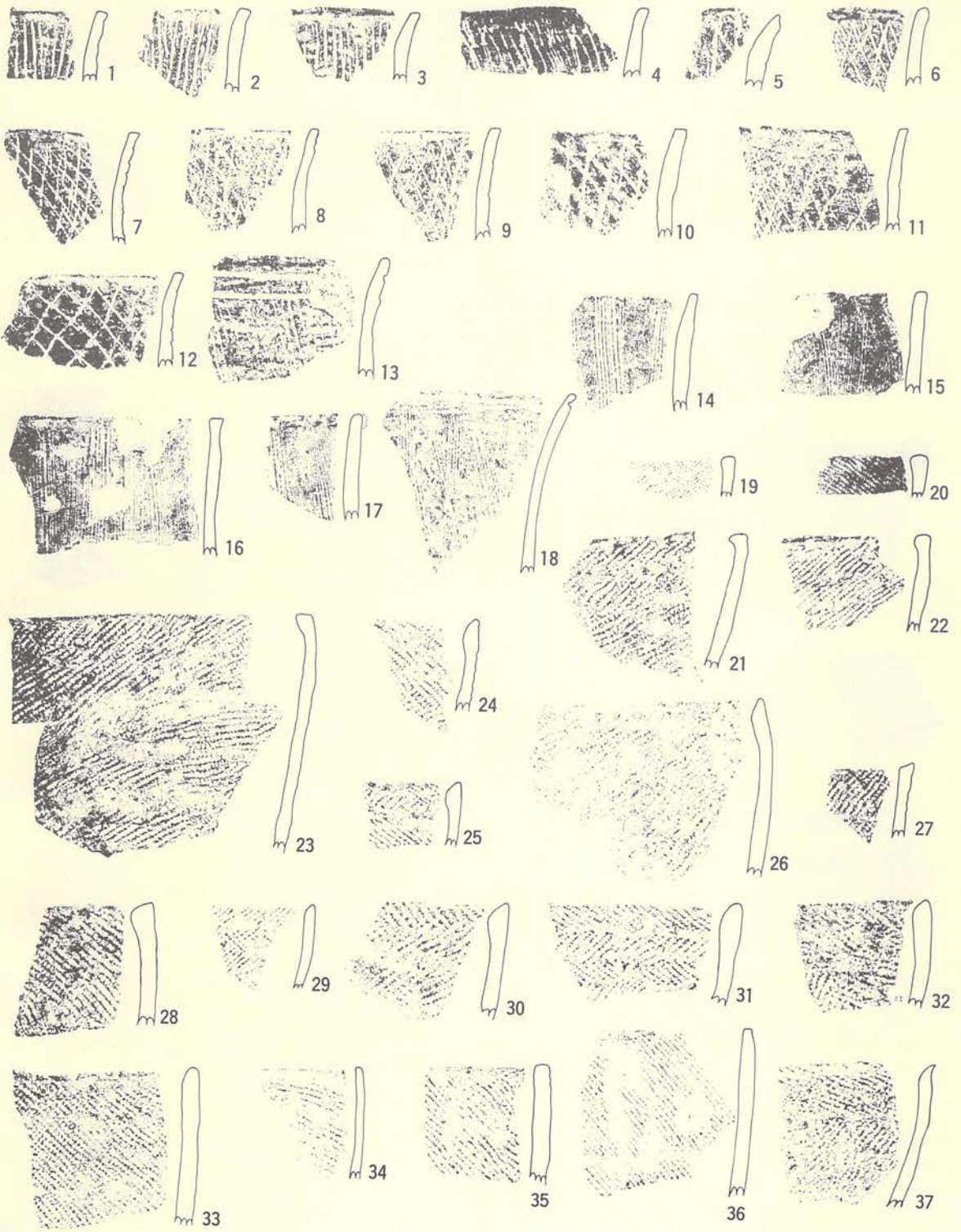


S-1/2

第123图 土器拓影(20)

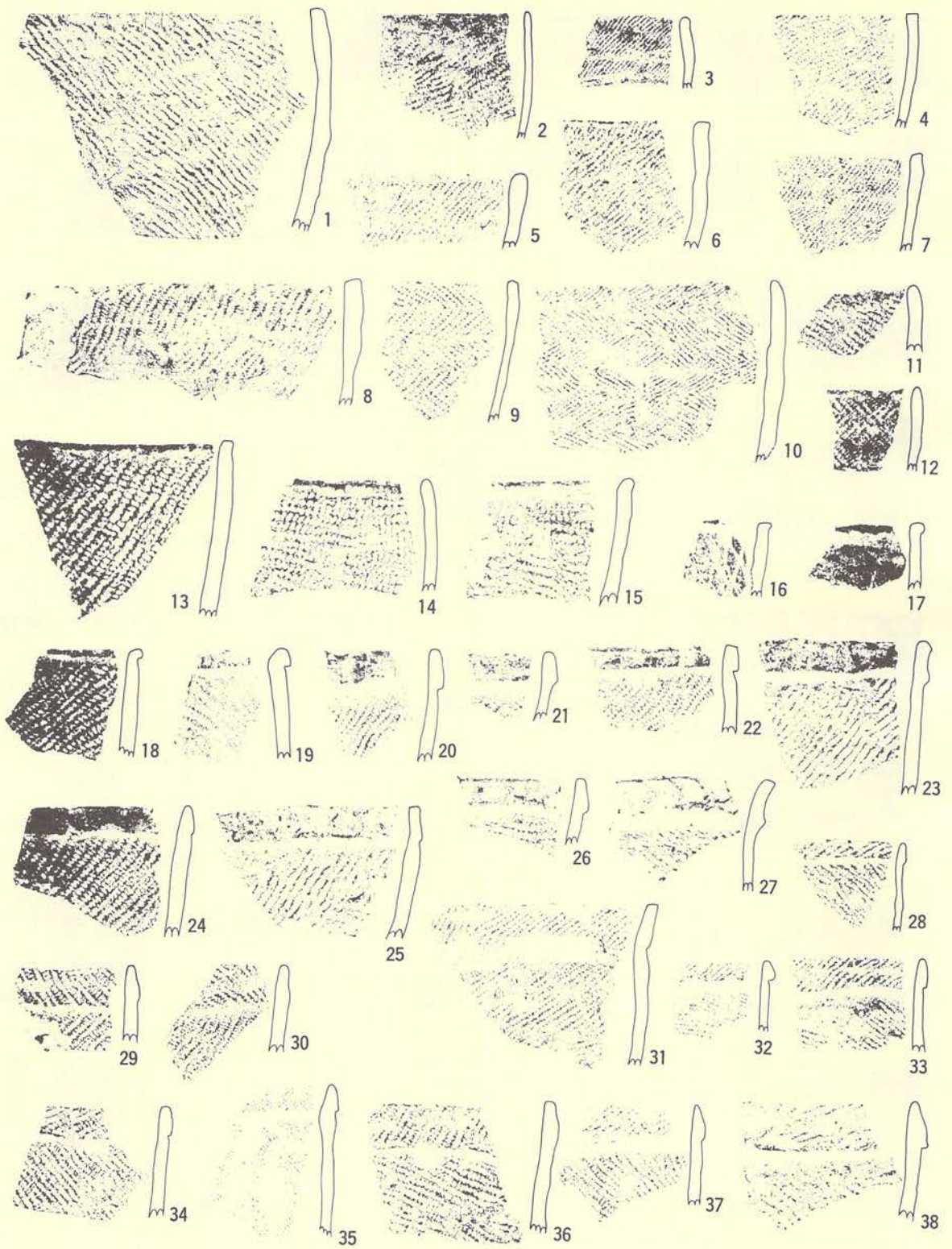


第124图 土器拓影(21)

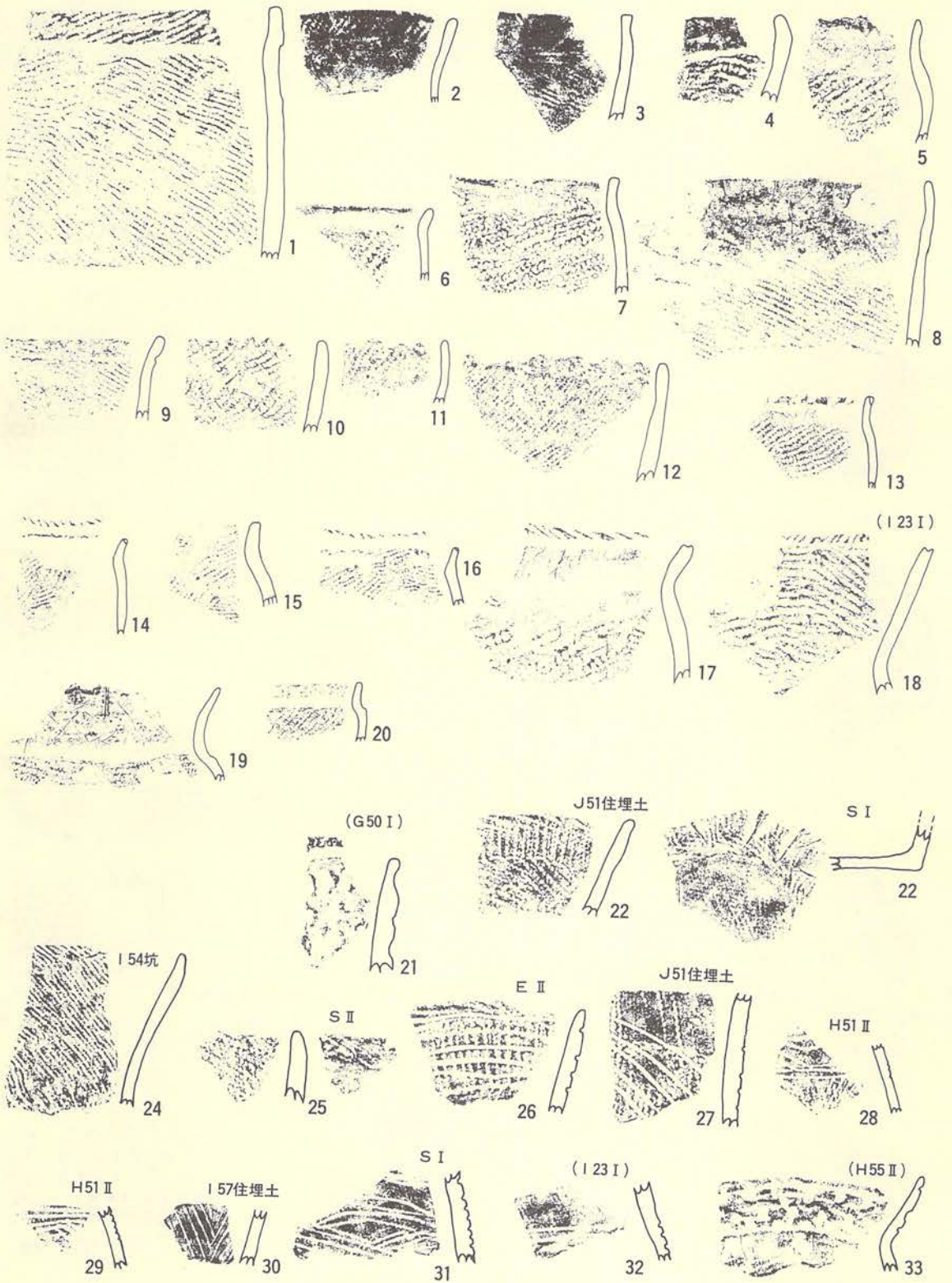


S = 1/3

第125図 土器拓影(22)



第126图 土器拓影(23)



第127图 土器拓影(24)

1~19 S=1/2
20~33 S=1/2



第128图 土器拓影(25)

V 分析と考察

1. 遺構

(1) 住居址及び炉址 (住居址一覧表参照)

①時期

すべての住居址で良好な同時代資料が得られたわけではないので、埋土出土遺物、遺構の形状の比較等によってかなり推測している。床面から年代決定資料が出土したのは、57棟中33棟である。時期別の棟数と同訳は次のようになる(下線あるものは炉址)。

縄文中期末	10 (H13、F15、J27、F33、E34、E35、D43、F51、E56—2、 <u>G57</u>)
縄文後期初頭	8 (F42、E45、G45、D47、D53、E56—1、F56、G56)
縄文後期前葉	19 (F39、G40、E41、G43、F47、I47、I48、F49、E50、I50、D51—2、D52、I52—1、H53、H54、G55、C56、D58、 <u>E58</u>)
縄文後期中葉	3 (D51—1、I52—2、I55—2)
縄文後期後葉	5 (D54、H56—1、D59、D60、C60)
縄文後期末	3 (I55—1、H56—2、C61)
縄文晩期前葉	4 (G35、H35、H36、D52の新炉)
縄文晩期末	1 (J55)
古代	2 (J51、I57)
不明	2 (I55—3……後期?、 <u>C57</u> ……後期?)

②重複・建て替え・拡張

重複は8例あり、すべて南斜面南半の遺構密度の高い地区に限られる。

- a. D51—2住居址(後期前葉) → D51—1住居址(後期中葉)。同一竪穴使用?。
- b. D52住居址(後期前葉) → D52住居址南東張出部石囲炉(晩期前葉)。南北に重複。
- c. I52—2住居址(後期初頭) → I52—1住居址(中期末)。北西・南東に重複。
- d. H54住居址(後期前葉) → H53住居址(後期前葉)。東西に重複。
- e. E56—2住居址(中期末) → E56—1住居址(後期初頭)。北西・南東に重複。
- f. I55—1住居址(後期?) → I55—2住居址(後期中葉) → I55—1住居址(後期末)。北西・南東、南北に重複。
- g. G57住居址(中期末) → G56住居址(後期初頭) → H56—1・2住居址(後期後葉~末)。南北、北西・南東に重複。
- h. C60住居址(後期後葉) → C61住居址(後期末)。北東・南西に重複。

表1 住居址一覧表(1)

() は推定規模

No.	住居址名	平面形	規模(m)	炉	柱穴	時期	備考
1	H13	楕円形(?)	3.7×3.2+ α	石囲炉	0	中期(末)	
2	F15	楕円形	5.1×4.8	地床炉	0	〃	小土坑1基
3	J27	卵形	4.1×3.85	石囲炉	0	〃	
4	F33	卵形	5.55×4.70+ α	なし	1	〃	立石
5	E34	円形	4.3×4.0	なし	1(?)	〃	
6	E35	円形	5.1×5.1	石囲炉	0	〃	
7	G35	円形か楕円形	(4.0×3.0)	土器埋設石囲炉	7+ α	晩期(前葉)	壁柱穴
8	H35	円形	2.7×2.7	石囲炉(?)	0	〃(〃)	
9	H36	円形	(4.0×4.0)	石囲炉	7+ α	〃(〃)	壁柱穴
10	F39	円形	3.8×3.6	地床炉+石1ヶ	0	後期(前葉)	
11	G40	栗の実形	3.3×3.0	地床炉+石1ヶ+土器	0	〃(〃)	
12	E41	楕円形	3.65×2.7	石囲炉(?)	0	〃(〃)	立石
13	F42	円形	3.0×3.0	石囲炉	0	〃(初頭)	
14	G43	楕円形	3.6×2.9	地床炉	0	〃(前葉)	旧G43土坑
15	E45	楕円形(?)	(5.9×5.3)	地床炉+石1ヶ・地床炉	9+ α	〃(初頭)	立石
16	G45	楕円形	5.35×4.4	地床炉	0	〃(〃)	
17	D47	方形(?)	(2.65×1.25+ α)	不明	0	〃(〃)	
18	F47	楕円形	4.9×4.1	石囲炉・地床炉	6	〃(前葉)	旧F47土坑
19	I47	円形	(3.7×3.1)	石囲炉	3+ α	〃(〃)	壁柱穴10+ α
20	D48	長円形	(2.8×2.5)	不明	0	中期(末)	
21	I48	楕円形	3.0×3.0	地床炉	0	後期(前葉?)	
22	F49	円形	6.9×6.7	地床炉2基	5	〃(前葉)	
23	E50	方形気味の円形	4.1×4.2	石囲炉	6	〃(〃)	
24	I50	不明	(3.0×3.0)	石囲炉	0	〃(〃)	
25	D51-1	不明	不明	石囲炉	0	〃(中葉)	
26	D51-2	円形(?)	(3.0×3.0)	地床炉	0	〃(前葉?)	
27	F51	楕円形	4.3×3.9	石囲炉	4	中期(末)	
28	D52	張り出しのある長方形	3.0×1.3+ α	石囲炉2基(?)	0	後期(前葉)	旧E52住、立石
29	I52-1	胴張り方形	4.0×4.0	石囲炉	4	〃(〃)	旧I52住
30	I52-2	不明	不明	石囲炉	0	〃(中葉)	旧I53住
31	D53	円形	3.45×3.35	石囲炉	0	〃(初頭)	
32	H53	不明	不明	石囲炉	0	〃(前葉)	
33	D54	円形	4.2×3.9	なし	0	〃(後葉)	旧D55住
34	H54	円形(?)	(4.0×4.0)	地床炉(?)	0	〃(前葉)	

表2 住居址一覧表(2)

()は推定規模

No.	住居址名	平面形	規模(m)	炉	柱穴	時期	備考
35	G55	卵形～楕円形	3.4×3.1	石囲炉	0	後期(前葉)	立石
36	I55-1	楕円形	5.6×4.6	不明	2+α	〃(末)	旧I55住
37	I55-2	円形～楕円形(?)	4.0×3.5	不明	0	〃(中葉)	立石
38	I55-3	不明	不明	不明	0	不明(後期?)	
39	J55	楕円形	6.5×5.0+α	土器埋設石囲炉	2+α	晩期(末)	大洞A'式、壁柱穴多数
40	C56	円形(?)	(3.1×1.9+α)	石囲炉	0	後期(前葉)	
41	E56-1	不整楕円形	(4.0×3.8)	土器埋設炉	0	〃(初頭)	旧E56住
42	E56-2	円形	3.1×3.0	地床炉(?)	0	中期(末)	旧E56住
43	F56	円形	3.1×2.9	石囲炉	0	後期(初頭)	
44	G56	円形	(5.8×6.0)	石囲炉	4	〃(〃)	
45	H56-1	楕円形	5.2×4.3	地床炉	4	〃(後葉?)	周溝
46	H56-2	楕円形	6.3×5.7	地床炉(?)	6	〃(末)	壁柱穴
47	G57	不明	不明	石囲炉	不明	中期(末)	
48	D58	楕円形	2.1×1.9	石囲炉	0	後期(前葉)	
49	D59	隅丸方形	(3.5×3.5)	石囲炉	0	〃(後葉)	
50	C60	不明	不明	不明	0	〃(〃)	
51	D60	楕円形	4.7×3.6	石囲炉	2	〃(〃)	
52	C61	不明	不明	不明	2+α	〃(末)	

No.	住居址名	平面形	規模(m)	カマド	柱穴	周溝	備考
53	J51	隅丸長方形	4.8×3.6	北西壁中央	なし	なし	十和田 ^a 降下火山灰の堆積あり、奈良時代
54	I57	隅丸方形	4.6×3.7	北西壁中央	なし	なし	〃

重複の仕方に、等高線に沿うとか、それに直交するとかの規則性は認められない。

建て替えや拡張は3例ある。

- a. E45住居址。棚状施設の柱穴の1つ(P₂)に、後で土器を埋めこんでいるので、建て替えの可能性はある。
- b. G56住居址。旧住居址の周溝の一部とみられる溝と地床炉とがある。拡張の可能性はある。
- c. H56-1・2住居址。旧住居址の周溝が一周する。さらに、新住居址の地床炉の下に柱穴が1ヶある。明らかに拡張されている。

この他に、床面の高さは異なるが同一竪穴を用いているD51-1・2住の場合にも、建て替えの可能性が考えられる。

③立地

住居址は、最高が標高 216 m 付近（H13住居址、F15住居址）、最低が 198 m 付近（C61住居址）に立地している。既述のように、遺跡の載る枝尾根は、傾斜の中だるみ地点（「中央平坦部」、標高 213 m 位）を境に、南北に二分され、南側の緩斜面に 57 棟中 49 棟が集まっている。時期毎の立地状況は、第 129・130 図に示してあるが、概況を記しておく。

中期末 尾根の南北両端に散在する。2 棟（H13住居址と F15住居址、E56—2 住居址と G57住居址）、3 棟（F33住居址と E34住居址と E35住居址）と隣接する例もあるが、一般的には散らばっている。10 棟中 6 棟が北半にある点が特徴的である。ちなみに、北端と南端の住居址は、220 m 離れている。

後期初頭 この時期以降は、晩期前葉を除き、すべて南半に立地する。この時期も、まだ散在する傾向があるものの、2 群位にまとまりそうである。すなわち、北群（F42住居址、E45住居址、G45住居址、D47住居址）と南群（D53住居址、E56—1 住居址、F56住居址、G56住居址）である。各群は、比較的大形のものと同小形のものによって構成されるようにも見える。南群の端と端は 25m、北群の端と端は 33m 位の隔りがある。

後期前葉 後期初頭の 2 倍近く数が増え、立地範囲も少し広がるものの、やはり南斜面に限定される。上部群（F39住居址、G40住居址、E41住居址、G43住居址）、中部のや、大形の住居址群（F47住居址、F49住居址、E50住居址、D51—2 住居址、D52住居址）、それに斜面の下部に、あたかも等高線に沿うかのように連なる（実際には、次第に高くなっている）群（C56住居址、D58住居址、E58 炉、G55住居址、H54住居址、H53住居址、I52—1 住居址、I50住居址、I48住居址、I47住居址）と分けられる。

後期中葉 この時期の 3 棟は、南斜面下半に散在している。

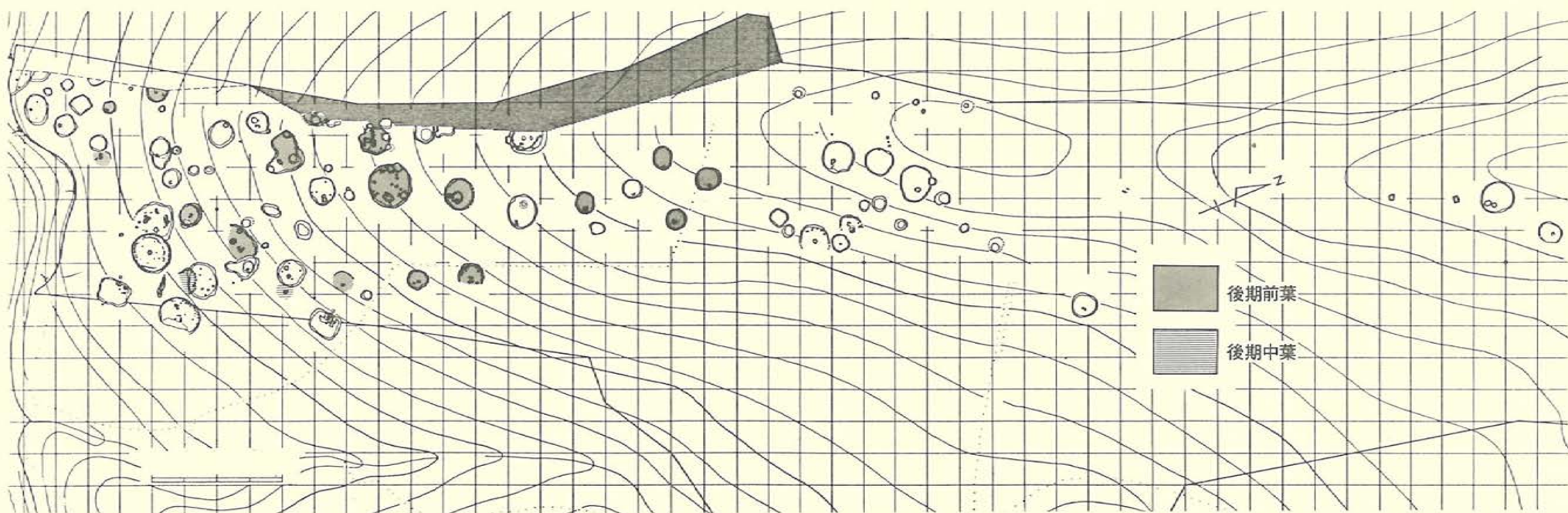
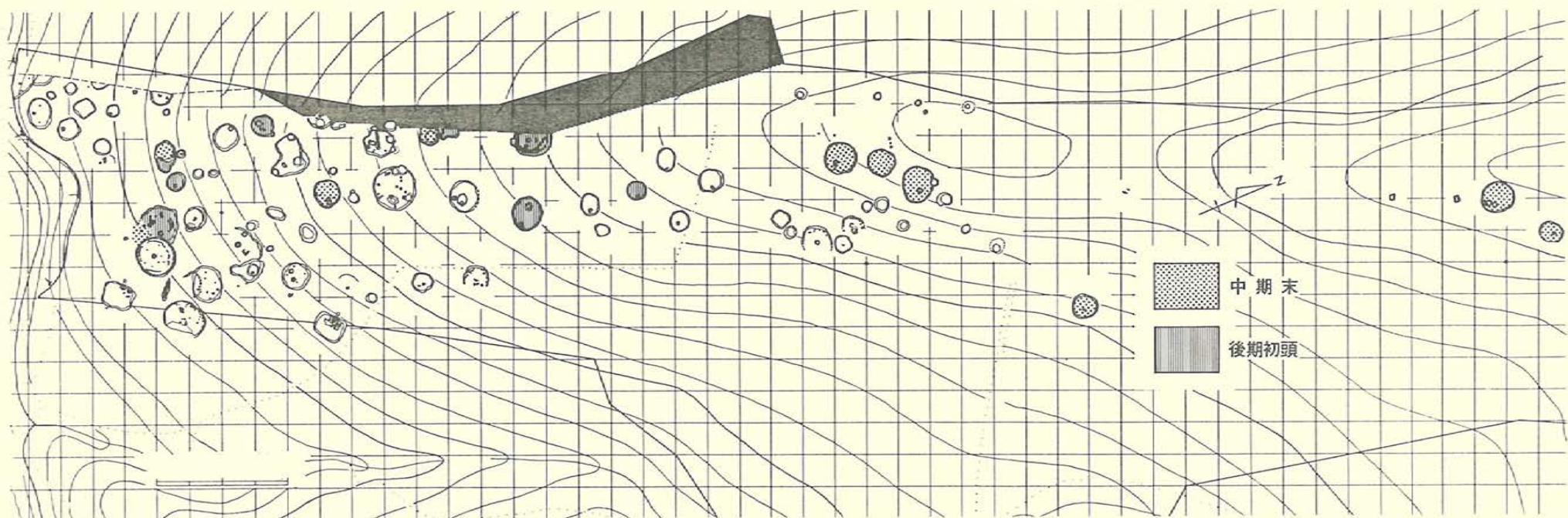
後期後葉 これまでの時期と比べ、さらに南端寄りにのみ立地する。ただし、1 棟（D54住居址）は、少し斜面を上った地点にある。最南端に 3 棟（D59住居址、C60住居址、D60住居址）が密集するものの、概して散在傾向にある。

晩期前葉 1 棟（D52住居址新炉）を除き、今までの斜面を南端に下る傾向に逆らって、調査区北半に 3 棟固まって立地する。

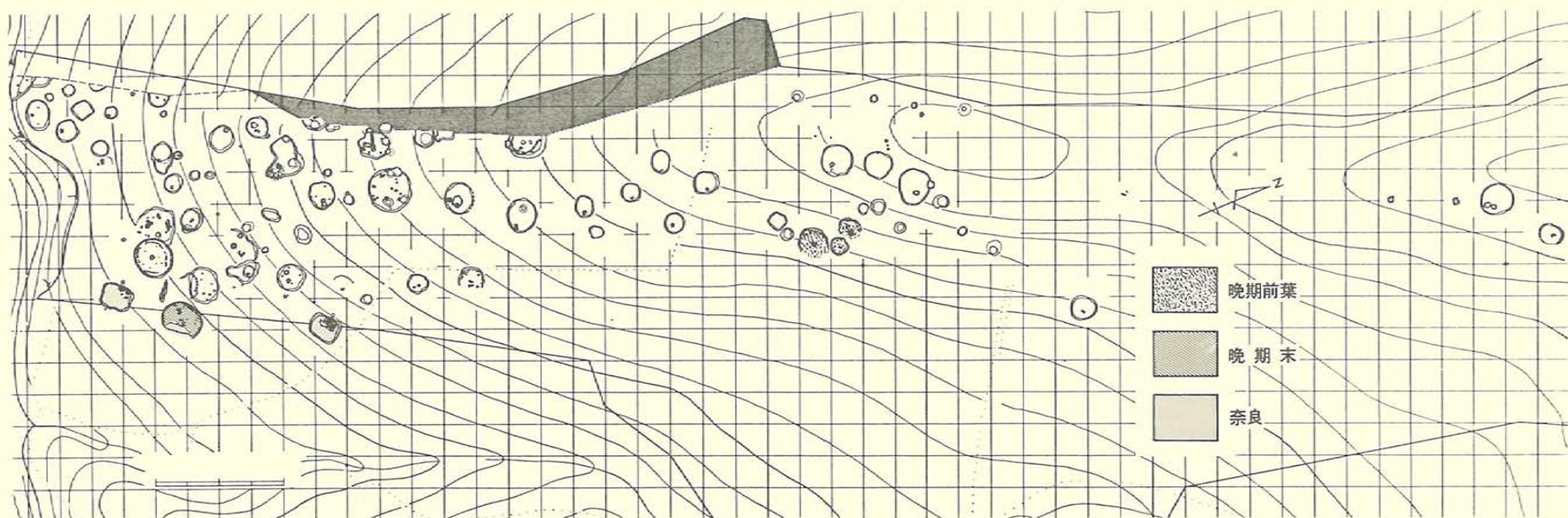
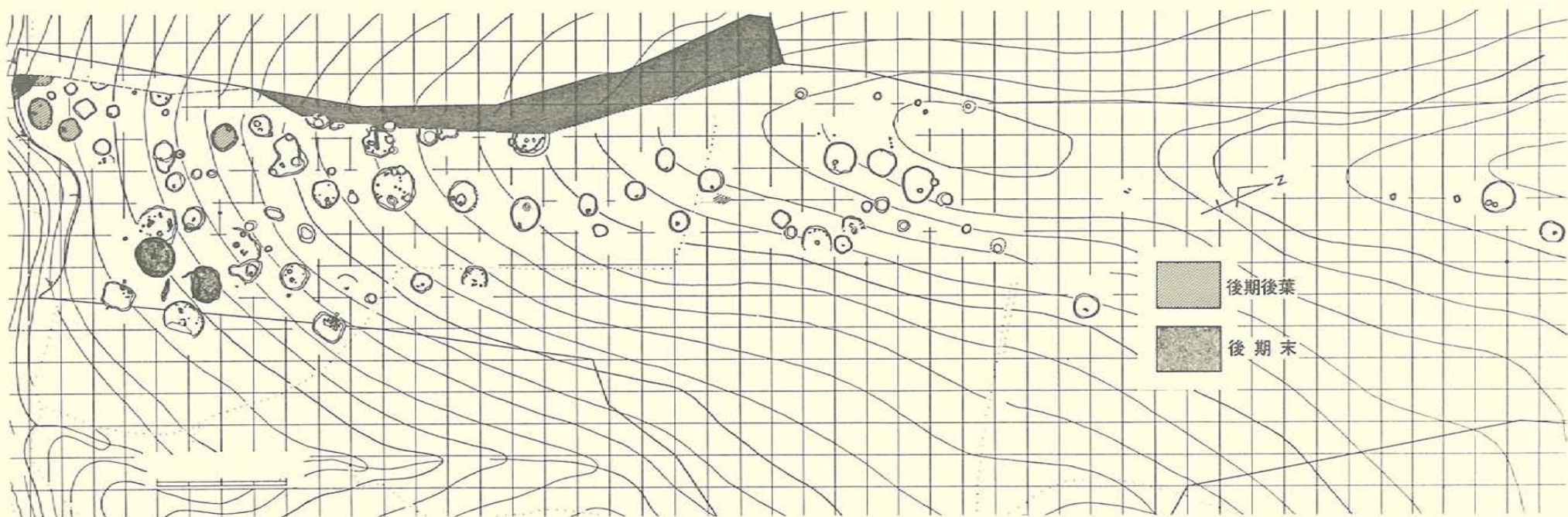
晩期末 南斜面の南東端に立地する。

奈良時代 南斜面の南東端近辺に偏在する。J55住居址の南東にも 1 棟存在することを確認しているおり、東の沢の方にさらに数棟の存在が予想される。

全体を通観すると、中期末に尾根筋全体に散在していた住居址が、後期前半に南斜面の方に集まり、後半には斜面の下部に下りてゆくという下降現象が見られる。この動きは、晩期前葉の例外的立地はあるものの、晩期末、そして長期の空白の後の奈良時代においても認められる。



第129圖 時期別住居址立地状況(1)



第130図 時期別住居址立地状況(2)

尾根西半の遺構は消滅し、南東部が未調査のため、早急な結論には問題があるが、大方の傾向は示しているものと思う。

④平面形・規模

奈良時代の住居址を除き、若干の歪みがあるものの、すべて円形を基本としている。方形気味の円形ないし張り出しのある長方形という5棟（D47住居址、E50住居址、D52住居址、I52-1住居址、D59住居址）にあっても、確実に方形を基本とするものということになると、該当するものはない。E50住居址とI52-1住居址を除く3棟は、壁の検出が困難なために結果的に方形気味になったものである。なお、D60住居址だけは、確実に楕円形である。

最大の住居址は、直径7m弱のF49住居址である。最小の住居址は、直径2m前後のD58住居址であるが、これは壁面が不確実な例であるから、直径2.7mのH35住居址が最小例である。各時期毎に見ても、大形のは直径6m前後で、小形のは直径3m前後という点ではあまり変化が見られない。後期中葉は不確実例が多いので省くと、晩期前葉では大形のものが直径4m前後と小さくなるのが目立つ位のものである。

⑤柱穴・周溝

柱穴が検出された縄文時代の住居址は、55棟中13棟のみである。各期を通じて4本柱が基本であるが、若干の例外と時期差がある。E45住居址（後期初頭）は壁際に、C61住居址（後期後葉）は壁から1m弱内側に、4本をはるかに上回る柱がめぐむようである。後期後葉には、2本柱の住居址が2例ある（I55-1住居址、D60住居址）。

周溝が検出されたものは後期の初頭と後葉の2棟（G56住居址、H56-1住居址）、壁柱穴の検出されたものは後期前葉が1棟（I47住居址）、後期末から晩期末が4棟（H56-2住居址、G35住居址、H36住居址、J55住居址）である。

⑥炉

本来、炉のあるもののみを住居址として分類すべきであるが、形状が普通の土坑と明らかに異なり一般の住居址に類似するものは、たとえ炉が検出されなくても、住居址として扱っている。従って、炉址がないか不明の縄文時代の住居址は、55棟中10棟ある。

形態と時期の関係は下表のとおりである。なお、「石囲炉」という用語は、少なくとも三方に石を置いて囲った場合には語感と矛盾することはないが、方形なら2辺、円形なら半円以下にのみ石が置かれた状態では、適切な表現とはいえない。特に地床炉に一ヶの石を置いたような場合には、実体と全く異なるものとならざるをえない。従ってこの表では、囲まない程度に石を置いている場合には「配石炉」という表現を用いた。なお、この用語は、「石囲炉」よりも広義の用語であるから、どのような形態の場合にも用いることができる。

時 期	地 床 炉	1石配石炉	C 配 字 状 炉	円形石囲炉	コ 配 字 状 炉	方形石囲炉	左記のうちの 複式炉的炉	左記のうちの 土器埋設炉
中 期 末	2		1			4	2	
後期初頭	2	1			3	2		1ヨコ
後期前葉	6	2	1		9	1	1	2ヨコ
後期中葉				1	1			
後期後葉	1		1	1				
後 期 末	1							
晩期前葉			2	1	(1)			1タテ
晩 期 末				1				1タテ

(注) 時期不明円形石囲炉(C57炉)は除いた。

傾向としてうかがえるのは、後期半ばを境にして方形炉から円形炉に切り換わることである。コ字状配石炉は方形炉の変形ないし略式のものであり、C字状配石炉は円形炉のそれと見なせる。コ字状配石炉の最終例は晩期前葉(D52住居址新炉)であるが、これはコ字というより3石配置の異例であり、これを除けば、方形炉系統は後期中葉で消滅することになる。円形炉の芽生えともいえるC字状配石炉の最古例は、中期末(J27住居址)にあり、完全な円形石囲炉は後期中葉(D51-1炉)となるが、D51-1炉は西半が消滅しているの、確実な例は後期後葉(D59住居址)にさがる。

方形炉が何を契機に円形炉に変るのかは不明である。ただ、複式炉類似炉の消長と関係あることが予想される。本遺跡では、中期末に2例、後期前葉に1例の複式炉系統と考えられる炉がある。中期末の2例をみると、E35住居址では炉から壁の間が若干低く(ただし踏みしめなし)、炉の中軸線上に2ケの石があり、炉に向って右側に細長い石が据えてある。F51住居址では、炉と壁の間が掘りこまれ、石は中に1ケあるだけであるが、底は極めて堅くしまっている。これらは明らかに複式炉の流れを汲むものである。後期前葉の1例になると、炉に接する掘りこむ部ないし落ちこみ部の退化が著しい。E50住居址では、炉自体がコ字形となつて一辺が開放され、掘りこみ部も不整形の痕跡的形態となる。ただし、堅くなつてはいる。

地床炉も後期半ばから衰えはじめ、晩期には完全に消滅する。

本遺跡に限定すると、中期末は方形石囲炉ないし複式炉、これに地床炉が造られ、後期に方形炉から円形炉に交替すると共に地床炉も衰えてゆき、晩期には円形石囲炉に統一される、と要約できる。

土器を伴う例は、後期に3例、晩期に2例あるが、埋設の状態は、後期は3例とも地床炉に

伴って横ないし少し斜め位置であるのに対し、晩期の2例は石囲炉中の縦位置と対照的である。極めて特殊な例として、F51住居址の土器片を炉底に敷き詰めた複式炉系統の炉を特記したい。

炉の位置は、若干の例外はあるものの、中期末から後期中葉までは壁寄り、しかも最大傾斜線に沿って谷側ないしは東の谷を意識した側に造られている。だが、後期末頃から、床面中央に設けられるようになる。この変化も、平面形の変化と共に、複式炉的生活様式と何らかの係わりがあるように思える。

⑦特殊構造

壁に沿って巡る柵状施設はE45住居址の1例のみである。床面に1ケの石が埋めこまれて立っている「立石」遺構は、6例ある（F33住居址、E41住居址、E45住居址、D52住居址、G55住居址、I55-2住居址）。時期は中期末より後期中葉まで、位置は南東ないし東壁寄り3例、南寄り1例、中央2例で、古いものほど壁寄りとなるように見える。高さは12~20cmと余り高くない。石は無加工の自然石で、火熱痕、打痕その他の痕跡は全く認められない。上記のほか、意図的に据えたと思われる石としては、F47住居址東壁の石群、F49住居址の東壁手前の長石、D53住居址南東壁際の散石の3例がある。すべて後期初頭から前葉にかけてのもので、配列状況は三者三様であるものの床面での位置には共通性があるように思える。前記の立石とも何か相通じるものがあるようにも考えられるが、性格等は一切分らない。

(2) 古代の住居址

検出された2棟の住居址（J51住とI57住）の規模は、長軸4.6~4.8m、短軸3.6~3.7mの間にあり、形状は隅丸の長方形である。いずれも柱穴と周溝等の施設はなく、カマドは北西壁のほぼ中央に設置されている。主軸（カマド設置方向）はJ51住がN-38°30'-W、I57住がN-39°-W偏し、ほぼ同一である。カマドは、板状の粘板岩（長さ50~70cm、厚さ10~15cm）を□字状に据え、その上をシルトで被覆している。石を□字状に据える形態は、岩手県北地域（二戸・軽米・九戸）においても多くの類例があり、住居址のカマド構築の一般的方法であろう。二戸では凝灰岩、九戸では凝灰岩とチャートの使用例が多く、各地域に産する水成岩を用いていることは共通性がある。煙道はくりぬき式で、燃烧部より水平ないしやや緩やかな上り勾配を呈す。

住居址の埋土には、十和田a降下火山の厚い堆積があり、J51住では30cm、I57住では36cm前後の層厚である。埋設状況は、床上約20cmにレンズ状に火山灰が存在することから、遺構が廃棄され、ある程度埋りかけた時期に火山灰が堆積したものである。

出土した遺物は、土師器の坏、甕、甑、土玉、刀子片等がある。土器は、いずれもロクロ不

使用のもので、出土量は僅少である。

坏は I 57 住の床から底部丸底のものが 3 ケ出土し、調整技法から大きく 2 類に分けられる。

1 類 ナデ調整にミガキ調整が加わり、内黒でないもの

2 類 内外面ミガキ調整、内黒処理を施したもの

1 類は全体に粗雑なつくりであるが、2 類は緻密なミガキ調整が施されている。内外面には、段と沈線は確認されない。

甕は法量で大・中・小に分類される。

1 類 小型 器高が 30cm 大のもの（口径 23cm 以下）

2 類 中型 器高が 50cm 大のもの（口径 30cm 大）

3 類 大型 器高が 75cm 大のもの（口径 50cm 大）

J 51 住出土の甕は、セットで遺構埋土の十和田 a 降下火山灰下位 10cm のところから、ほぼ同レベルで出土している。出土状況から遺構が廃棄されたのちに、投げ込みされたものである。

1 類と 2 類の調整技法は、外面ナデ調整の上をミガキ調整を加えている。3 類は外面ハケメ調整の上を、入念なミガキ調整が口縁部まで施されている。内面はナデ調整とハケメ調整がある。底部はナデとケズリ調整が施されているものが多い。頸部に明瞭に段を有するものは、1 類にみうけられるが、ないものが大部分を占める。

甗は無底式のもので、下端部内面はやや削がれ、内外面ともナデ調整である。

土器は上記のように大きく分けられるが、資料が不足のために器形分類と共伴土器の関連性は述べることができない。

土器は、床出土の坏の調整技法と形態等から、東北南半の国分寺下層式に比定される。時期としては、8 世紀中～後半（奈良時代）と考えられる。

当遺跡における奈良時代の住居址は、調査した 2 棟のほかに、調査区域外に 1 棟存在することからみて、丘陵南半部東斜面下位から沢沿いに集落が形成されていたと推定される。

遺跡周辺における奈良時代住居址の発掘例を上げれば、吠屋敷 I 遺跡（軽米町）、田代遺跡（九戸村）の各 1 棟だけである。今後この地域における奈良時代土師器の変遷と集落形態を知る上での、貴重な資料であろう。

（3）土坑

①時期

年代決定資料が出土したのは 66 基中 39 基である。その中で、底面から遺物が出土したのは、僅かに 3 基（G 35—2 土坑、G 45 土坑、I 54—1 土坑）のみである。誤差の大きい埋土出土遺

物を手掛りに推定した各土坑の時期は、別表の通りである。

住居址との関係を検討してみると、中期末から後期初頭にかけては、住居址同様、尾根の南北に散在する。住居址とは特に接近する傾向は見られない。

後期前葉から中葉にかけては、住居址が南斜面に移った後でも、土坑の幾つかは中央平坦部に造られているようである。また、南斜面中部では、住居址廃棄後、その壁に半分切り込む形で、いわゆる「フラスコ状土坑」の掘削が顕著である（F49住居址、E50住居址の北壁など）。

後期後葉から末にかけては、住居址同様、南斜面下端にのみ土坑が偏在するようである。

晩期には、住居址の比較的近くにその時期の土坑が存在している。

全体を通観すると、中期末は適当に造られていた土坑が、後期前半には一地区に集中するようになり、場合によっては住居址とは別の群として離れて存在している。そして、後期後半から晩期にかけては、住居の近辺に造られるようになるようである。

②形状・規模

平面形は円形が原則である。方形としたものの中で、確実なものはG16とG18の土坑のみで、他のものは、壁面の不確実なもののみである。断面形が台形の土坑（いわゆる「フラスコ状土坑」）は66基中21基あり、方形ないし逆台形の土坑（いわゆる「ピーカー状土坑」）は30基、他は掘りこみの浅い土坑である。時期によって形状が変化することはないようである。

直径2mを越える土坑は、住居址の可能性のある（G37土坑、C58土坑、E58土坑、D59土坑）。これらは検出面からの深さも40cm以下と浅い。

③陥し穴状遺構

2基だけ検出されている。2基の長軸方向は一致せず、等高線との関係も同じではない。時期については、D50陥し穴状遺構はE50住居址より古いから、後期初頭以前のものである。

（4）埋設土器

単独出土土器が幾つかあるものの、確実に埋設されたと考えられるのは4例だけである。この中で、E49埋設土器（図版33）の場合は、後期末の深鉢の下半部のみの埋設である。他の3例はすべて晩期末の大洞A'式土器が用いられており、状況もそれぞれ異なる。J51埋設土器では、壺と台付鉢の台部（壺の蓋?）、E54埋設土器では深鉢と浅鉢（蓋）が組み合う。J54埋設土器の場合は壺が1点のみであるが周囲に数ヶの石が置かれているような状況であった。

表3 土坑一覽表(1)

No.	土坑名	平面形	断面形	開口部径(m)	底部径(m)	深さ(m)	遺物	備考
1	G16 土坑	隅丸方形	皿状	1.05×0.9	1.0×0.7	0.15	なし	現代
2	G18	隅丸方形	皿状	0.9×0.7	0.55×0.78	0.13	なし	現代
3	H30	円形(?)	台形	不明	2.3×2.3	1.33	耳付鉢、耳飾り、土器片	中期末
4	D31	歪円形	台形	0.68×0.77	1.89×2.05	1.1	なし	旧H32土坑
5	G31	楕円形	方形	1.36×1.23	0.95×1.3	0.65	なし	F33住より新、後期前葉
6	F32	円形	方形	1.10×1.15	0.95×1.0	0.65	土器片	後期前葉
7	G32	歪円形	方形	1.6×1.6?	不明	0.40	土器片	後期中葉
8	C33	歪円形	台形	0.7×0.75	1.0×1.15	0.50	土器片	
9	D33	不定形	楕円状	0.5×0.5	0.25×0.38	0.5	なし	
10	E33	円形	逆台形	0.95×1.05	0.85×0.85	0.45	なし	
11	F33	歪円形	皿形	0.8×0.8	0.85×0.72	0.20	なし	F33住と重複(新旧不明)
12	G33	円形	上開き不整形	2.15×2.2	1.3×1.4	0.55	土器片	後期前葉
13	G34	歪円形	台形	0.7×0.75	1.0×1.15	0.50	土器片	後期前葉
14	G34	歪円形	上開き不整形	2.25×2.5	1.85×2.1	0.9	土器片	後期前葉
15	G35-1	歪円形	台形	1.5×1.6	1.45×1.55	0.60	浅鉢、削器	旧G35土坑、晩期前葉
16	G35-2	歪円形	台形	0.85×0.9	0.95×1.0	0.50	石皿?、小形壺	G35住より新、晩期中葉
17	C36	楕円形	台形	0.95×1.15	1.75×2.0	1.35	土器片	中期末
18	H37	方形(?)	逆台形	2.6×2.65	2.3×2.4	0.3	粗製土器2ヶ	中期末~後期前葉
19	H37	楕円形	逆台形	1.8×1.9	1.2×1.65	0.6	土器片	晩期前葉
20	H43	楕円形	台形	1.7×1.95	1.95×2.2	0.5	磨石、土器片	中期末
21	E45	長方形	逆台形	0.65×1.2	0.6×1.05	0.5	なし	E45住より古
22	G45	円形	台形	0.6×0.6	1.15×1.20	0.77	土器片	G45住より新か、後期前葉
23	D46	長方形	逆台形	0.6×0.23+α	0.45×0.15	0.55	なし	旧E46土坑
24	D48-1	歪円形	鍋底状	0.8×0.9	0.65×0.45+α	0.4	なし	D47住と重複(新旧不明)
25	D48-2	円形	台形	1.2×1.2	1.75×1.8	0.8	台付鉢、土器片	D48住より新、後期中葉
26	D49	円形	鍋底状	2.0×2.0	1.7×1.3+α	0.7	石皿片	
27	E49-1	円形	台形	1.0×1.0	1.4×1.5	1.28	なし	E50住より新
28	E49-2	円形	台形	0.7×0.7	1.15×1.25	0.9	なし	E50住より新
29	F49-1	円形	逆台形	1.25×1.3	1.2×1.2	1.0	なし	F49住とF49-2土坑より新
30	F49-2	円形	台形	1.05×1.23	1.25×1.30	0.45	土器片	F49住より新、後期中葉
31	F49-3	楕円形	台形	0.9×1.15	1.2×1.55	1.1	なし	F49住より新
32	F49-4	不整形	皿状	1.2×1.7	0.6×1.3	0.3	土器片	F49住より古、後期初頭
33	D50	楕円形	鍋底状	0.85×1.0	0.7×0.8	0.5	なし	旧D50-1土坑、E50住より新
34	F50-1	円形	方形	1.5×1.6	1.45×1.55	0.5	なし	旧G50土坑

表4 土坑一覽表(2)

No.	土坑名	平面形	断面形	開口部径(m)	底部径(m)	深さ(m)	遺物	備考
35	F50-2土坑	円形	台形	0.6×0.6	0.6×0.65	0.8	なし	F50-1土坑より古
36	J50	短卵形	逆台形	1.45×1.55	1.3×1.3	0.3	小玉	旧I50土坑
37	D51-1	円形	鍋底状	?	1.5×1.5?	0.7	なし	} 3基重複(新旧関係不明)
38	D51-2	歪円形	台形?	?	0.9×0.9?	0.5	なし	
39	D51-3	歪円形	逆台形	1.3×0.9+α	0.6×0.6?	0.4	なし	
40	D51-4	歪円形	逆台形	1.37×1.37	1.57×1.57	0.34	なし	D51-2住より新、D51-1住より古
41	F51	歪円形	逆台形	1.0×1.1	1.5×1.5	0.5	なし	D52住新炉と同時かより古
42	D52	歪円形	逆台形	0.8×0.95	1.0×1.0	0.34	なし	D52住より古、中期末
43	E52	歪円形	逆台形	1.05×1.0+α	1.5×1.5	0.7	土器片	晩期末
44	G52	楕円形	楕鉢状	3.2×2.5	2.0×1.2	0.75	土器片	I52-1住と同時
45	I52	円形	逆台形	0.6×0.6	0.5×0.5	0.25	なし	D53住より新
46	D53-1	歪円形	逆台形	1.2×1.2	0.75×0.85	0.6	なし	D53と重複(新旧不明)、後期後葉~晩期
47	D53-2	歪円形	逆台形	0.85×0.85	0.7×0.7	0.3	土器片	D52住より古
48	F53	歪円形	逆台形	1.0×1.0	0.8×0.8	0.3	なし	
49	G53	楕円形	逆台形	1.9×3.3	1.4×2.9	0.3	なし	
50	H53	楕円形	逆台形	0.85×1.05	0.7×0.9	0.2	なし	
51	D54	楕円形	逆台形	0.65×0.82	0.62×0.75	0.17	なし	
52	G54	円形	逆台形	1.3×1.35	1.45×1.9	0.7	なし	D54住と同時かより新
53	H54-1	卵形	逆台形	0.75×0.9	0.49×0.53	0.6	なし	旧H54土坑
54	H54-2	円形	鍋底状	0.8×0.87	0.55×0.6	0.73	なし	H54住と同時かより新
55	I54-1	不整形	鍋底状	長5.0、巾3.1	長4.6、巾2.7	0.3	土器片	旧H55土坑、H54住より古、後期前葉
56	I54-2	歪円形	逆台形	1.75×1.86	1.5×1.7	0.6	完形土器、土器片	旧I54土坑、晩期末
57	F55-1	楕円形	逆台形	1.28×1.43	0.9×1.0	0.6	クルミ	旧I55土坑、I54-1土坑と重複(新旧不明)
58	F55-2	円形	逆台形	1.6×1.7	1.25×1.25	0.9	土器片	後期前葉
59	G55	歪円形	台形	1.4×1.5	0.9×0.9	1.0	土器片	晩期中葉
60	D56	歪円形	台形	0.9×0.95	0.9×1.15	1.0	土器片	G55住より古
61	E56	卵形	台形	1.3×1.4	1.0×1.13	1.55	なし	後期後葉
62	C58	円形か卵形	方形	2.6×2.6?	?	0.26	なし	
63	E58	小判形~楕円形	逆台形	2.5×2.9	2.2×2.5	0.22~0.33	石皿、石斧	後期後葉
64	C59	円形	鍋底状	1.8×2.0	1.55×1.65	0.40	土器片	旧C59土坑
65	D59	方形	逆台形	2.7×2.9	2.5×2.6	0.40	なし	旧D60土坑、後期後葉
66	C60	円形	逆台形	1.22×1.34	0.92×1.10	0.24~0.40	土器片	E50住より古
67	D50縮し穴状遺構	狭長	V字形	0.4×3.15	0.2×3.25	1.8	なし	
68	I56	狭長	V字形	0.7×3.2	0.2×3.4	1.25	なし	

2. 遺物

(1) 土器

遺構内出土品と遺構外出土品を一括して扱うことにする。

本遺跡出土の土器は、次のように分けられる。

第1群 爪形文の施されるもの。

第2群 大柄な磨消文が施されるもの。

第3群 磨消文、沈線文が施されるもの。

第4群 三叉文、浮彫的磨消文、平行沈線文が施されるもの。

第5群 繊細な捺糸文、沈線文の施されるもの。

第6群 粗製ないし半精製のもの。

第1群 (第127図の21、図版66の1)

G50区近辺のI層から1片のみ出土した。上端に向って薄くなる。外面には、条痕文地に右方に盛り上がる爪形文が縦横に並ぶ。内面は研磨され、口唇に刻みがある。胎土に石英粒を僅少含み、焼成は堅緻で、外面や、暗褐色、内面黒褐色を呈する。

第2群 (第90図の1、第104図の1～106図の27、図版45の8・60)

胴部が張り、頸部がくびれ、口縁が外反する。口縁に突起がつく例もある。

体部上半に大柄な逆J字状、S字状等磨消縄文が施される。口縁内面と文様帯の幾つかの部分に、弧状の貼りつけ文が加えられる場合がある。円形刺突が施される例もある。

第3群 6類15種に分けられる。

第1類 複合口縁をもつもの (第106図の28～第108図、図版61の1～19)

口縁部に1～数本の帯状貼りつけがあり、その上に原則として縄文が施される。口縁は波状で外反するものと内湾するものがある。口縁の突起(波頂部)に環状、棒状の貼りつけをし、それに縄文、刺突文を加える例が多い。下方の文様が不明のものが多いが、渦文その他の磨消文、沈線文となるようである。後述する第3類が体部文様となるものと思われる。

第2類 縄文地に沈線文を施すもの。粗い磨消部のあるものもある。2種に分けられる。

第1種 押圧されて凸凹になった隆帯をもつもの (第109図の1～15、図版61の20～23)

口縁は外傾しつつ内湾するようである。文様帯に縦と横方向の、凹凸のある隆帯がつく。隆帯で区画された部分に、水平、斜め、S字状の沈線文が施される。

第2種 隆帯のないもの (第109図の16～第110図の15、図版62の1～3・6・7・9)

口縁は、外傾しつつ内湾するものと、外反するものがある。渦文と平行線文が施される。

第3類 磨消文の形状により4種に分けられる。

第1種 渦文、斜行文の施されるもの(第110図の16～第111図の25)

文様の単位が不明であるが、斜線と渦文の組み合う文様と思われる。

第2種 凸字状文、十字状文の施されるもの(第111図の35～38、図版62の11・12)

縦と横方形に直交する磨消文が施されている。

第3種 方形磨消文の施されるもの(第111図の39～第112図の18、図版62の21～23)

磨り消しが弱くあいまいになっているものが少なくない。

第4種 大形のW字状磨消文の施されるもの(第113図の1～4、図版62の17～19)

頸部がしまり、口縁が内湾する。W字状に磨り消しているが、縄文部に沈線文が付加される。

第4類 第2類と比べて、細い磨消縄文の施されるもの。2種に分けられる。

第1種 沈線が付加される磨消文が施されるもの(第113図の6～23、図版61の27・28)

胴部が大きく膨らみ頸部がしまり口縁が外反する。磨消文の縄文帯を沈線で2分している。

第2種 縄文帯が隆帯となっている磨消縄文(第113図の26～第114図の10、図版61の24～26・29)

第5類 無文地に沈線文を施したもの。文様により4種に分けられる。

第1種 単線の渦文の施されたもの(第114図の7～16、図版61の31)

第2種 複線の渦文等の施されたもの(第114図の17～第115図の27、図版63の3～6他)

第3種 隆帯を伴う沈線文(第116図の10～39、図版63の1・2他)

第4類第2種に類似し、沈線で挟まれた部分が土堤状に高まっている。

第4種 その他。反転文(第115図の33など)、平行線文(第117図の1～5など)、刺突を伴う沈線文(第117図の14～18)など、種々のものを一括した。

第6類 弧状磨消文の施されるもの。いわゆる貼瘤の有無で2種に分けられる。

第1種 貼瘤のつかない磨消文の施されるもの(第117図の19～41、図版63の18～20・25)

第2種 貼瘤のつく磨消文の施されたもの(第117図の42～第118図の30、図版63の21～24、26～31) 貼瘤は先端の分かれるものと分かれぬものがある。

第1種では、口縁上端の内側が削ぎ取られるものが、第2種では内側が肥厚するものが多い。

縄文の代りに、沈線を施したり(第117図の31)、微隆起線を用いるもの(第118図の26)などもある。

第4群 3類に分けられる。

第1類 いわゆる三叉状文、羊歯状文の施されるもの(第118図の33～第119図の21、図版64の

1～7など)

第2類 浮彫的磨消文の施されるもの(第119図の22～32、24・27除く、図版64の8～11・13)

第3類 いわゆる工字文、変形工字文の施されるもの(第119図の33～第121図の17、図版64の14～34)

第5群 4類に分けられる。

第1類 撚糸文のみ施されるもの(第127図の22～25、図版66の2・4)

撚糸文Lは斜めと垂直の2方向が組み合っている。口縁の内面、底部の外面にも施される例がある。口縁の断面形では、外側が撫で肩となる。

第2類 撚糸文に沈線文が加えられるもの(第127図の26～28、図版66の3・5・6)

27は、26とほぼ同じ撚糸文の上に平行沈線文を加えている。28は次の第3類の一部に縄文のあるものである。

第3類 沈線文のみ施されるもの(第127図の29～32、図版66の7・8)

3本以上の複数平行沈線で、菱形文などを表わしている。

第4類 平行沈線に刺突を加えたジグザグ文を施すもの(第127図の33、図版66の9)

第1～3類は、胎土中に雑物を含まず、第4類は小石(φ3～4mm)を若干含む。すべて焼成は良好で、色調は明色ないし少し暗色の褐色である。

第6群 5類に大別される。

第1類 口縁上端が研磨されて光沢のあるもの(第121図の18～第123図の4、図版64の35～46)

沈線付加の有無、口縁部の反り方で細分可能である。

第2類 口縁が外反するもの(第123図の5～第125図の18、図版65の11～13・15～19)

縄文、撚糸文(平行、網目状)、条痕文などの地文によって細分可能である。

第3類 口縁が内湾するもの(第125図の19～第126図の15)

口唇の断面形(内削ぎ、内面肥厚、外撫で肩状など)、地文によって細分可能である。

第4類 複合口縁のもの(第126図の20～第127図の1、図版65の1～10)

複合口縁には、縄文の有無の2種ある。

第5類 その他(第127図の2～20)

口縁部が無文のもの、刻みのあるもの、頸部に段のあるものなどを一括した。

各群の編年上の位置

第1群は、縄文早期の貝殻文土器群に入る。第2群は、縄文中期末の大木10式そのものである。

る。第3群は、縄文後期の土器であり、第1～3類は前葉に位置し、関東の称名寺式や堀之内式、東北南半の南境式、東北北半の大湯式や十腰内I式の古い部分に併行する。第4・5類は、後期中葉に位置し、関東の加曽利B₁式、東北北半の十腰内I式の新しい部分に併行する。第6類は、後期後葉に位置し、東北南半の新地式や金剛寺式、東北北半の十腰内V式に併行する。第4群は、縄文晩期の土器であり、第1類は大洞B式からBC式、第2類は大洞C₁～C₂式、第3類は大洞A～A'式、さらに弥生初頭の型式に併行する。第5群は弥生後半から末期にかけての常盤式から赤穴式に併行する。第6群第1類は晩期末、第2類は中期末から後期前葉、第3類は後期後葉から晩期前葉、第4類は後期前葉、第5類は晩期以降のものであろう。

各群の出土状況

第2群は、住居址同様広く散在している。第3群1～3類は、中央平坦部東斜面と南斜面中部の東寄りに多い。第3群の4・5類は、中央平坦部南東斜面と南斜面下半の2地区に集中する。第3群6類は、南斜面中部下半より下部上半にかけて集中すると共に、中央平坦部南東斜面でも僅かに出土した。第4群1・2類の大部分は尾根平坦部に、僅少が南斜面南東部に、3類はすべて南斜面H54区周辺に固まる。第5群も第4群3類にほぼ同じである。

(2) 石器 (No.は石器一覧表のもの)

石鏃12ケ、石匙5ケ、石錐1ケ、削器10ケ、貯蔵剝片2群、石斧23ケ、凹石21ケ、磨石13ケ、敲石15ケ、石皿14ケ、砥石15ケ、石棒4ケ、石刀2ケ、石球3ケ、石製円盤6ケ、勾玉2ケ、軽石1ケ、玉髓2ケ、水晶1ケが出土した。

①石鏃

形態によって6類に分けられる。

- 1類 刃部と基部がなめらかな曲線をなして接するもの(2・3)。
- 2類 全体に細長く、刃部は弱く膨らみ、基部とは鈍角をなして接するもの(7・8)。
- 3類 2類の短小形(9・10)。
- 4類 刃部が凹み、基部とは鈍角をなして接するもの(4・5・6)。
- 5類 刃部がかなり凹み、基部とは鋭角をなして接するもの(1)。
- 6類 刃部下端両側に小さな袢りこみ加えられ、下部が直線状の、いわゆる「アメリカ式石鏃」(11)。

1類は後期末住居址の床と埋土から、2類は晩期末の遺物に伴って、3類は晩期末の住居址の埋土から、4類は、2類と3類出土地区と同一地区から、5類は後期前葉住居址の埋土から、6類は晩期前葉住居址の隣の地区から出土している。

②石匙

形態により3類に分けられる。

1類 縦長の本体の上端に摘みのつく、縦形のもの(13)。

2類 本体の端近くに摘みのつく、縦横中間形態のもの(15・16)。

3類 横長の本体の上辺の中央に摘みのつく、横形のもの(14)。

1類は後期後葉住居址埋土から、2類は後期前葉と後期後葉住居址の埋土から、3類は後期後葉から末の住居址の柱穴から出土している。

③石錐・削器・調整剝片・貯蔵剝片

1点のみ出土した。刃先の断面は膨らみのある三角形に近い。

削器は、不定形が一つの特徴であるが、大形剝片は方形に近く、三辺が片面調整されたものが多く、小形剝片をいし狭長剝片は、一辺が片面調整されるものが多い。

削器に比べて粗大な調整または極く一部への調整のみを加えた、不定形石器を調整剝片とした。

時期については、特定の時期に集中するような傾向は認められない。

F49住居址出土貯蔵剝片は後期前葉であるが、I54区出土貯蔵剝片の時期は、遺構外のため不明である。近くの遺構は、後期前葉～中葉の住居址であるが、この地区のII～III層は晩期末の遺物包含層的状况が濃厚であるから、どちらに所属するものか断定できない。

④石斧

頭部の形、断面形、刃の形によってそれぞれ2類に分けられる。

時期 \ 形態	尖頭	平頭	断面形 断方形	断面形 断楕円形	直刃	曲刃
中期末～後期初		5	4	2	1	1
後期前葉～中葉	1	1	2	2		
後期後葉～末	2		2	1		1
晩期		1		2		1

埋土出土品も一括している上、遺物自体が少ないために、時期差らしきものは明確に表れてこないが、断面が楕円形で刃部のみ研磨された3点(169～171)は、後期末以降に属する。折損状況は、頭部直下4、上寄り3、中央5、下寄り5とばらつく。

⑤凹石・磨石・敲石

手頃な河原石を利用している点で共通し、一つで凹みと磨痕と打痕の三者をもつものも稀ではない。一連の作業の数場面に用いられる多能の石器があるようである。形状の特徴によって分類すると次のようになる。

A. 打痕が集中した結果くぼみができた石（凹石）

- a. 形 丸形…6、不整形…6、板状で角形…5、平板な丸形…3、角柱状…1。手に持って使用するには大きすぎるものもあり、使用状況を推測する際に参考となる。
- b. 使用面数、その他の使用痕等は一覧表備考欄に記した通り。表裏2面使用が一般的であるが、片面ないし4面使用例もある。その他、打痕が多いのは、この用具の本来の機能の微弱な痕跡と考えられるから、当然の現象であろう。なお、No.200には、巾1mm弱の、断面V字形の条痕がある。極めて異例である。

B. 打痕のある石（敲石）

○形 楕円形…5、洋梨形…2、小形…4、円柱状…2、板状…2。凹石との境界が不明確な用具である。小形ながら打痕が明確で（打面形成）、比重の大きい3例（210～212）は、正しく敲打具そのものというべき形状である。なお、石斧の項でも触れたように、石斧転用品が敲打具を補充している。

C. 研磨面のある石（磨石）

○形 丸い…4、平ら…2、細長い…7。細長い形のもは、両側面に磨面（というより打面）をもつものであり、敲きかつ磨り潰すという二つの作業に用いられた道具と思われる。凹石や敲石と比べると、磨石には打痕や凹みのある、多能用具というべきものが多い。

⑥石皿・砥石

共に研磨する道具であるため、研磨面のある自然石の場合は、どちらとも決め難い場合がある。研磨痕のある26ケの中で、形状から石皿としたものは14ケ、うち調整されたものは8ケある。加工品中脚のあるもの2。石皿の破片は、肌目粗い点を利用して、砥石と凹石に転用されている。

⑦その他

上記以外の出土石器中、や、変った状況で出土したものとして、F47住居址出土の石球と石製円盤がある。石球2ケ（うち1ケは割れて2ケとなる）と円盤1ケが固まって出土した。石球は、他の石球（182）より脆い石でつくられており、石弾という形での使用に堪えられない。円盤も、他の類品（185～188）より軟らかい粘板岩製でかつ全面研磨されている点が異なる。生産用具以外の特殊な用途を考えた方が適当と思われる。

表 5 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石質	産地	備考
1	22-11	54-2	石鏃	F 47住埋土	2.43	1.26	0.36	0.75	珪質輝緑凝灰岩	北上山地古生界	
2	57-16	54-3	石鏃	H 56住埋土	2.78	1.29	0.40	1.19	チャート	北上山地古生界	
3	57-17	54-9	石鏃	H 56住I区床	2.64	1.35	0.42	1.50	チャート	北上山地古生界	
4	96-1	54-5	石鏃	H 42区I層	2.42	1.18	0.50	0.99	チャート	北上山地古生界	
5	96-4	54-1	石鏃	I 57区II層	2.30	1.08	0.40	0.64	珪質輝緑凝灰岩	北上山地古生界	
6	44-1		石鏃	G 55住埋土	2.73	1.15	0.70	1.60			
7	88-5	54-8	石鏃	I 57住埋土	3.65	1.05	0.38	1.31	チャート	北上山地古生界	
8	96-2	54-6	石鏃	I 57区II層	3.48	0.98	0.37	1.00	チャート	北上山地古生界	
9	96-3	54-7	石鏃	G 55区II層	3.17	1.00	0.43	0.93	粘板岩	北上山地古生界	
10	48-13	54-4	石鏃	J 55住埋土	2.80	0.95	0.38	0.82	粘板岩	北上山地古生界	
11	96-5	54-11	石鏃	I 35 I層	3.90	1.20	0.50	1.85	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地中新統	アメリカ式
12	96-6	54-10	石鏃	H 55区III層	1.55	1.30	0.60	1.32	チャート	北上山地古生界	胸部片
13	62-26	54-17	石匙	C 60住埋土	7.23	4.00	0.95	19.62	チャート質粘板岩	北上山地古生界	片面調整
14	57-19	54-20	石匙	H 56住柱穴	4.42	4.53	0.85	8.87	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	片面調整
15	51-4	54-18	石匙	C 56住埋土	5.58	2.95	0.75	10.54	粘板岩	北上山地古生界	片面調整
16	41-8	54-19	石匙	D 54住埋土	4.25	2.23	0.75	6.50	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	片面調整
17	36-6	57-22	石匙	E 52住埋土	3.62	1.95	0.91	6.42	粘板岩	北上山地古生界	縦形下半片?、両面調整
18	96-7	54-21	石鏃	G 55辺I	4.10	3.17	0.95	10.05	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	径3.5~6.5mm、深さ7mm(最大)
19	96-9	54-33	削器	I	5.60	6.97	9.70	46.44	硬質凝灰質泥岩	奥羽山地中新統	片面調整、サイドとエンドスクレーパー
20	96-10	54-24	削器	G 51以西II層	4.40	4.00	0.80	12.68	珪質細粒凝灰岩	奥羽山地中新統	一部両面調整、サイドとエンドスクレーパー
21	37-21	54-27	削器	D 52住埋土	9.95	5.35	1.85	90.00	粘板岩	北上山地古生界	片面調整、サイドスクレーパー?
22	96-11	54-25	削器	D 53区III層	4.45	3.30	0.90	16.02	チャート質粘板岩	北上山地古生界	片面調整、サイドスクレーパー
23	96-12	54-38	削器	I 41辺I	3.60	2.94	0.77	8.06	珪質泥岩	奥羽山地中新統	片面調整、エンドスクレーパー
24	22-12	54-31	削器	F 47住埋土	3.68	2.90	0.70	6.87	チャート	北上山地古生界	両面調整、サイドスクレーパー
25	73-20	54-23	削器	G 35-1土坑埋土	3.50	2.70	0.90	9.40	粘板岩	北上山地古生界	両面調整、サイドスクレーパー
26	57-20	54-37	削器	H 56住埋土	4.14	3.05	1.10	12.85	珪質輝緑凝灰岩	北上山地古生界	片面調整、サイドスクレーパー
27	64-6	54-30	削器	D 60住埋土	4.10	3.60	0.70	5.55	粘板岩	北上山地古生界	片面調整、サイドスクレーパー
28	96-14	54-26	調整剝片	G 57区III層	4.35	3.22	1.08	15.85	チャート質粘板岩	北上山地古生界	粗大剝離、サイドスクレーパー?
29	41-9	54-29	調整剝片	D 54住埋土	2.06	1.90	0.82	3.10	珪質輝緑凝灰岩	北上山地古生界	両面調整
30	96-8	54-28	調整剝片	I	2.32	1.96	0.62	2.32	珪質輝緑凝灰岩	北上山地古生界	片面調整
31	39-21	54-12	調整剝片	I 52-2住埋土	3.10	1.46	0.61	2.20	粘板岩	北上山地古生界	石鏃未成品
32	48-14	54-34	調整剝片	J 55住埋土	6.32	3.17	1.30	19.40	チャート	北上山地古生界	ナイフとスクレーパー?

表6 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石	質	産地	備考
33	96-15	54-32	調整剥片	H56住埋土	4.17	2.21	0.80	7.60	チャート質粘板岩		北上山地古生界	粗大剝離、サイドスクレーパー？
34	96-13	54-35	調整剥片	G53~55区III層	4.12	3.48	0.77	9.42	硬質凝灰質泥岩		奥羽山地中新統	2辺に凹状刃部、片面調整
35	36-5	54-36	調整剥片	D52住埋土	2.50	1.78	0.71	3.04	珪質細粒凝灰岩		奥羽山地中新統	片面加工、スクレーパー？
36	62-25	54-13	異形石器	C60住埋土	3.15	1.65	0.50	1.80	チャート質粘板岩		北上山地古生界	独鈷形
37	56-18	54-14	異形石器	H56住2区3層	4.53	2.24	0.55	1.82	珪質輝緑凝灰岩		北上山地古生界	石鏃未成品？
38	97-1	55-1	貯蔵剥片	I54区V層	3.80	2.10	0.71	6.14	チャート		北上山地古生界	石鏃未成品？
39	97-2	55-2	貯蔵剥片	I54区V層	3.00	1.88	0.62	3.84	チャート		北上山地古生界	
40	97-3	55-3	貯蔵剥片	I54区V層	7.07	5.88	1.08	60.00	チャート		北上山地古生界	
41	97-4	55-4	貯蔵剥片	I54区V層	6.87	5.60	1.03	35.18	チャート		北上山地古生界	
42	97-5	55-5	貯蔵剥片	I54区V層	6.72	5.92	1.18	39.06	チャート		北上山地古生界	
43	97-6	55-6	貯蔵剥片	I54区V層	6.43	4.92	1.03	29.35	チャート		北上山地古生界	
44	97-8	55-7	貯蔵剥片	I54区V層	6.95	3.82	1.80	29.16	チャート		北上山地古生界	
45	97-9	55-8	貯蔵剥片	I54区V層	4.73	5.13	1.17	26.90	チャート		北上山地古生界	
46	97-10	55-9	貯蔵剥片	I54区V層	6.26	3.72	1.28	22.66	チャート		北上山地古生界	
47	97-7	55-10	貯蔵剥片	I54区V層	9.45	3.13	1.25	18.27	チャート		北上山地古生界	
48	97-11	55-11	貯蔵剥片	I54区V層	4.50	4.32	1.24	23.80	チャート		北上山地古生界	
49	97-12	55-12	貯蔵剥片	I54区V層	6.50	3.60	1.40	23.87	チャート		北上山地古生界	
50	98-1	55-13	貯蔵剥片	I54区V層	4.40	5.40	1.32	26.64	チャート		北上山地古生界	
51	98-2	55-14	貯蔵剥片	I54区V層	3.67	5.63	0.75	12.30	チャート		北上山地古生界	
52	98-3	55-15	貯蔵剥片	I54区V層	6.15	3.08	1.05	19.70	チャート		北上山地古生界	
53	98-4	55-16	貯蔵剥片	I54区V層	3.62	5.37	1.09	16.37	チャート		北上山地古生界	
54	98-5	55-17	貯蔵剥片	I54区V層	6.42	2.50	0.95	9.52	チャート		北上山地古生界	
55	98-6	55-18	貯蔵剥片	I54区V層	4.87	3.16	1.08	14.44	チャート		北上山地古生界	
56	98-7	55-19	貯蔵剥片	I54区V層	4.02	3.05	0.85	7.48	チャート		北上山地古生界	
57	98-8	55-20	貯蔵剥片	I54区V層	4.25	3.76	0.88	12.55	チャート		北上山地古生界	
58	98-9	55-21	貯蔵剥片	I54区V層	3.50	3.75	1.10	12.35	チャート		北上山地古生界	
59	98-10	55-22	貯蔵剥片	I54区V層	3.72	3.10	1.00	8.56	チャート		北上山地古生界	
60	98-11	55-23	貯蔵剥片	I54区V層	4.37	2.73	0.60	7.33	チャート		北上山地古生界	
61	98-12	55-24	貯蔵剥片	I54区V層	3.94	3.60	0.47	6.85	チャート		北上山地古生界	
62	98-14	55-25	貯蔵剥片	I54区V層	4.16	2.48	0.79	7.27	チャート		北上山地古生界	
63	98-15	55-26	貯蔵剥片	I54区V層	3.80	2.20	1.27	8.95	チャート		北上山地古生界	
64	98-13	55-27	貯蔵剥片	I54区V層	3.56	2.54	0.65	4.63	チャート		北上山地古生界	

表7 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石	質	産地	備考
65	98-16	55-28	貯蔵剥片	I 54区	4.50	4.20	0.60	11.76	チャート		北上山地古生界	
66	28-1	56-1	貯蔵剥片	F 49住居址	4.93	3.15	1.00	17.00	チャート		北上山地古生界	側辺片側下半に使用痕
67	28-2	56-2	貯蔵剥片	F 49住居址	5.28	4.18	1.58	36.23	チャート		北上山地古生界	スクレーパーバー
68	28-3	56-3	貯蔵剥片	F 49住居址	3.22	2.00	1.20	7.65	チャート		北上山地古生界	楔形
69	28-4	56-4	貯蔵剥片	F 49住居址	3.60	2.85	1.12	13.00	チャート		北上山地古生界	上辺に使用痕?、楔形
70	28-5	56-5	貯蔵剥片	F 49住居址	4.50	3.22	1.60	21.75	チャート		北上山地古生界	
71	28-6	56-6	貯蔵剥片	F 49住居址	6.35	2.40	1.50	18.88	チャート		北上山地古生界	楔形
72	28-7	56-7	貯蔵剥片	F 49住居址	4.60	3.33	1.45	24.27	チャート		北上山地古生界	
73	28-8	56-8	貯蔵剥片	F 49住居址	4.18	3.75	1.33	18.90	チャート		北上山地古生界	
74	28-9	56-9	貯蔵剥片	F 49住居址	5.15	3.00	1.50	16.79	チャート		北上山地古生界	
75	28-10	56-10	貯蔵剥片	F 49住居址	4.75	2.70	1.80	19.69	チャート		北上山地古生界	楔形
76	28-11	56-11	貯蔵剥片	F 49住居址	4.55	2.35	1.45	17.83	チャート		北上山地古生界	
77	28-13	56-13	貯蔵剥片	F 49住居址	3.70	3.10	1.40	15.93	チャート		北上山地古生界	
78	28-14	56-14	貯蔵剥片	F 49住居址	4.15	2.90	1.12	16.20	チャート		北上山地古生界	
79	28-15	56-15	貯蔵剥片	F 49住居址	3.37	3.10	1.00	13.70	チャート		北上山地古生界	一側辺に使用痕?、楔形
80	28-16	56-16	貯蔵剥片	F 49住居址	4.25	2.90	1.46	12.48	チャート		北上山地古生界	
81	29-17	56-17	貯蔵剥片	F 49住居址	4.02	2.85	1.02	12.05	チャート		北上山地古生界	
82	29-36	56-36	貯蔵剥片	F 49住居址	4.30	3.27	1.45	17.75	チャート		北上山地古生界	
83	29-18	56-18	貯蔵剥片	F 49住居址	4.28	2.46	1.23	11.17	チャート		北上山地古生界	
84	29-19	56-19	貯蔵剥片	F 49住居址	3.40	2.92	1.40	13.74	チャート		北上山地古生界	
85	29-20	56-20	貯蔵剥片	F 49住居址	4.40	3.53	0.90	17.67	チャート		北上山地古生界	端部損潰
86	29-21	56-21	貯蔵剥片	F 49住居址	3.44	2.92	1.18	14.15	チャート		北上山地古生界	下端に使用痕、端部損潰
87	29-22	56-22	貯蔵剥片	F 49住居址	4.00	1.94	1.13	8.28	チャート		北上山地古生界	
88	29-24	56-24	貯蔵剥片	F 49住居址	4.00	2.07	1.00	6.90	チャート		北上山地古生界	端部損潰
89	29-23	56-23	貯蔵剥片	F 49住居址	2.44	2.36	1.30	10.70	チャート		北上山地古生界	端部損潰
90	29-25	56-25	貯蔵剥片	F 49住居址	4.60	2.25	1.00	8.48	チャート		北上山地古生界	
91	29-26	56-26	貯蔵剥片	F 49住居址	3.95	2.18	1.10	5.72	チャート		北上山地古生界	
92	29-27	56-27	貯蔵剥片	F 49住居址	3.73	2.12	1.14	8.00	チャート		北上山地古生界	端部損潰
93	29-37	56-37	貯蔵剥片	F 49住居址	2.86	2.45	1.40	8.70	チャート		北上山地古生界	端部損潰
94	29-29	56-29	貯蔵剥片	F 49住居址	3.47	2.35	0.77	7.14	チャート		北上山地古生界	
95	29-30	56-30	貯蔵剥片	F 49住居址	3.82	2.85	0.85	8.17	チャート		北上山地古生界	
96	29-28	56-28	貯蔵剥片	F 49住居址	3.10	2.58	1.05	7.90	チャート		北上山地古生界	

表 8 石器一覽表

No.	美湖図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾 cm	厚さcm	重さg	石	質	産地	備考
97	29-31	56-31	貯蔵剥片	F 49住居址	3.64	1.46	0.60	2.72	チャート		北上山地古生界	
98	29-32	56-32	貯蔵剥片	F 49住居址	3.15	2.23	0.97	6.29	チャート		北上山地古生界	端部損潰
99	29-33	56-33	貯蔵剥片	F 49住居址	3.24	1.85	1.17	8.12	チャート		北上山地古生界	
100	29-34	56-34	貯蔵剥片	F 49住居址	3.55	1.72	1.13	6.40	チャート		北上山地古生界	
101	20-35	56-35	貯蔵剥片	F 49住居址	2.72	2.53	1.35	9.03	チャート		北上山地古生界	端部損潰
102	30-53	57-33	貯蔵剥片	F 49住居址	2.85	2.00	1.35	6.32	チャート		北上山地古生界	楔形?
103	29-38	56-38	貯蔵剥片	F 49住居址	3.75	2.02	0.80	4.44	チャート		北上山地古生界	
104	29-39	56-39	貯蔵剥片	F 49住居址	3.02	2.22	0.75	4.15	チャート		北上山地古生界	
105	31-72	57-72	貯蔵剥片	F 49住居址	3.65	1.55	0.95	5.14	チャート		北上山地古生界	
106	30-61	57-61	貯蔵剥片	F 49住居址	2.47	2.25	0.84	5.08	チャート		北上山地古生界	楔形
107	30-40	56-40	貯蔵剥片	F 49住居址	3.23	2.50	0.80	5.20	チャート		北上山地古生界	
108	30-41	57-41	貯蔵剥片	F 49住居址	2.85	1.95	1.00	6.55	チャート		北上山地古生界	楔形?
109	30-42	57-42	貯蔵剥片	F 49住居址	3.20	2.10	0.75	5.37	チャート		北上山地古生界	
110	30-43	57-43	貯蔵剥片	F 49住居址	3.22	2.20	1.15	6.07	チャート		北上山地古生界	
111	30-44	57-44	貯蔵剥片	F 49住居址	3.25	2.10	0.97	6.55	チャート		北上山地古生界	
112	30-45	57-45	貯蔵剥片	F 49住居址	3.20	1.75	1.00	6.06	チャート		北上山地古生界	
113	30-46	57-46	貯蔵剥片	F 49住居址	2.50	2.10	1.18	6.60	チャート		北上山地古生界	楔形
114	30-47	57-47	貯蔵剥片	F 49住居址	2.50	1.90	1.07	5.34	チャート		北上山地古生界	楔形
115	30-48	57-48	貯蔵剥片	F 49住居址	4.53	1.77	1.00	6.42	チャート		北上山地古生界	楔形
116	30-49	57-49	貯蔵剥片	F 49住居址	3.75	1.75	0.90	4.30	チャート		北上山地古生界	
117	30-50	57-50	貯蔵剥片	F 49住居址	2.70	1.68	0.62	3.70	チャート		北上山地古生界	楔形?
118	30-51	57-51	貯蔵剥片	F 49住居址	2.82	1.65	0.90	4.73	チャート		北上山地古生界	
119	30-52	57-52	貯蔵剥片	F 49住居址	2.85	1.95	0.85	3.36	チャート		北上山地古生界	楔形
120	30-59	57-59	貯蔵剥片	F 49住居址	2.70	1.45	0.86	3.66	チャート		北上山地古生界	楔形
121	30-54	57-54	貯蔵剥片	F 49住居址	2.67	1.30	0.95	3.50	チャート		北上山地古生界	楔形?
122	30-55	57-55	貯蔵剥片	F 49住居址	2.50	1.50	0.58	2.80	チャート		北上山地古生界	楔形?
123	30-56	57-56	貯蔵剥片	F 49住居址	2.24	1.68	1.13	3.65	チャート		北上山地古生界	
124	30-57	57-57	貯蔵剥片	F 49住居址	2.64	1.83	0.56	2.10	チャート		北上山地古生界	
125	30-58	57-58	貯蔵剥片	F 49住居址	2.67	2.18	0.98	4.55	チャート		北上山地古生界	
126	30-60	57-60	貯蔵剥片	F 49住居址	3.23	1.85	1.60	3.96	チャート		北上山地古生界	
127	30-62	57-62	貯蔵剥片	F 49住居址	2.85	2.22	0.70	3.55	チャート		北上山地古生界	
128	30-63	57-63	貯蔵剥片	F 49住居址	2.60	1.43	0.77	2.92	チャート		北上山地古生界	

表9 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石	質	産地	備考
129	30-64	57-64	貯蔵剝片	F 49住居址	3.20	1.45	0.80	3.05	チャート		北上山地古生界	
130	30-65	57-65	貯蔵剝片	F 49住居址	2.88	1.54	1.27	5.90	チャート		北上山地古生界	
131	30-66	57-66	貯蔵剝片	F 49住居址	2.65	1.90	0.90	3.95	チャート		北上山地古生界	楔形?
132	30-67	57-67	貯蔵剝片	F 49住居址	2.43	2.12	0.68	3.17	チャート		北上山地古生界	
133	30-68	57-68	貯蔵剝片	F 49住居址	2.70	1.58	0.75	3.85	チャート		北上山地古生界	楔形
134	30-69	57-69	貯蔵剝片	F 49住居址	2.20	1.60	0.75	3.56	チャート		北上山地古生界	
135	30-70	57-70	貯蔵剝片	F 49住居址	2.62	1.92	0.67	3.01	チャート		北上山地古生界	楔形?
136	30-71	57-71	貯蔵剝片	F 49住居址	3.54	1.50	0.78	3.25	チャート		北上山地古生界	
137	29-37	56-37	貯蔵剝片	F 49住居址	2.85	1.80	1.02	4.47	チャート		北上山地古生界	
138	31-73	57-73	貯蔵剝片	F 49住居址	2.85	1.40	0.70	3.23	チャート		北上山地古生界	楔形
139	31-74	57-74	貯蔵剝片	F 49住居址	2.85	1.50	0.95	3.85	チャート		北上山地古生界	
140	31-75	57-75	貯蔵剝片	F 49住居址	2.60	1.75	0.46	2.57	チャート		北上山地古生界	楔形?
141	31-76	57-76	貯蔵剝片	F 49住居址	2.50	1.33	0.62	2.85	チャート		北上山地古生界	楔形?
142	31-77	57-77	貯蔵剝片	F 49住居址	2.18	1.90	0.90	4.00	チャート		北上山地古生界	
143	31-78	57-78	貯蔵剝片	F 49住居址	2.38	1.25	0.43	1.25	チャート		北上山地古生界	
144	31-79	57-79	貯蔵剝片	F 49住居址	2.20	1.67	0.42	1.45	チャート		北上山地古生界	
145	31-80	57-80	貯蔵剝片	F 49住居址	2.23	1.90	0.75	4.06	チャート		北上山地古生界	
146	31-81	57-81	貯蔵剝片	F 49住居址	2.28	1.60	0.50	2.05	チャート		北上山地古生界	
147	31-82	57-82	貯蔵剝片	F 49住居址	2.10	1.55	0.43	2.00	チャート		北上山地古生界	
148	31-83	57-83	貯蔵剝片	F 49住居址	1.95	1.46	0.35	1.25	チャート		北上山地古生界	楔形?
149	} 欠番											
150												
151	99-1	47-16	石斧	I 31 I	12.98	4.48	2.57	220	スピライト質凝灰岩		北上山地古生界	刃部欠損、頭部に打痕
152	99-2	47-18	石斧	E I	7.15	4.00	2.88	220	安山岩 (輝石?)		北上山地中・古生界	頭部片
153	59-21	47-11	石斧	H 56住居址	8.00	4.67	2.62	170	スピライト質凝灰岩		北上山地古生界	上半片
154	59-19	47-15	石斧	H 56住居址	10.28	5.12	2.42	210	スピライト質凝灰岩		北上山地古生界	刃部欠損、上下両端に打痕密集
155	99-5	47-21	石斧	G 33辺 II	9.06	5.68	2.86	240	スピライト質凝灰岩		北上山地古生界	刃部磨耗、上面に打痕
156	99-18	47-14	石斧	H 56住居址	11.52	5.60	2.74	290	安山岩 (輝石?)		北上山地中・古生界	側面下端に打痕僅少
157	37-25	47-10	石斧	D 52住居址	9.40	3.69	2.29	140	スピライト質凝灰岩		北上山地古生界	刃部欠損磨耗、両側面下端に打痕
158	20-16	47-7	石斧	G 45住居址	11.94	3.80	2.62	190	スピライト質凝灰岩		北上山地古生界	完形
159	82-35	47-17	石斧	E 58土坑埋土	7.84	3.88	2.19	220	安山岩 (輝石?)		北上山地中・古生界	両側面下端に打痕
160	99-3	47-19	石斧	G 33辺 II	7.62	4.34	2.20	110	凝灰質粘板岩		北上山地中・古生界	片面に細打痕集中

表10 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石質	産地	備考
161	17-23	47-5	石斧	F 42住埋土	4.64	3.33	2.38	40	スピライト質凝灰岩	北上山地中・古生界	頭部片
162	8-13	47-2	石斧	J 27住床	18.60	5.98	2.52	560	スピライト質凝灰岩	北上山地中・古生界	半折品が接合
163	99-4	47-20	石斧	J 27区III層	6.80	4.64	2.66	130	スピライト質凝灰岩	北上山地中・古生界	上面と一側面に打痕
164	11-13	47-3	石斧	E 34住埋土	7.12	6.40	2.74	210	スピライト質凝灰岩	北上山地中・古生界	刃部と一角に打痕
165	17-8	47-23	石斧	E 41住埋土	8.96	3.94	2.66	270	スピライト質凝灰岩	北上山地中・古生界	刃部と上面に打痕密集
166	54-3	47-22	石斧	F 56住埋土	5.16	3.96	2.32	70	粘板岩	北上山地古生界	頭部に打痕
167	22-17	47-9	石斧	F 47住埋土	4.40	2.92	2.62	40	スピライト質凝灰岩	北上山地古生界	頭部片、円形断面
168	20-7	47-6	石斧	E 45住埋土	9.24	4.40	2.71	180	スピライト質凝灰岩	北上山地古生界	側面に打痕
169	48-24	47-12	石斧	J 55住埋土	13.80	5.44	4.08	530	安山岩(輝石?)	北上山地中・古生界	太形、粗面・上面に打痕
170	65-14	47-8	石斧	D 60住埋土	12.20	4.39	2.76	220	スピライト質凝灰岩	北上山地古生界	粗面、刃部のみ磨く、上部に打痕
171	48-23	47-13	石斧	J 55住床近	8.60	5.80	3.58	270	安山岩(輝石?)	北上山地中・古生界	刃部磨耗(再利用?)
172	102-3	50-23	敲石	G 59辺 I	14.66	6.67	2.22	280	粘板岩	北上山地古生界	表に凹み、両端に打痕
173	99-8	53-14	石棒	I 39 I	38.60	15.20	7.70	6,410	アルコース砂岩	北上山地中生界(?)	上面に複隆線の浮影
174	15-18	47-4	石棒	H 36住埋土	7.10	2.64	1.18	40	粘板岩ホルンフェルス	北上山地古生界	上端に3本の刻線
175	99-7	51-3	石棒	H 37区III層	10.08	1.72	1.77	40	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	断面円形、尖頭
176	25-13	51-4	敲石	I 47住埋土	8.00	3.40	2.10	90	粘板岩ホルンフェルス	北上山地古生界	石棒状、側面と下部に打痕
177	99-6	51-5	石棒	F 37~40区東III層	13.74	4.09	2.62	200	粘板岩	北上山地古生界	剝離後再研磨、石斧類似
178	99-9	51-2	石刀	F 39区III・IV層	28.30	3.64	1.31	200	粘板岩	北上山地古生界	両端尖る、反る
179	47-13	51-1	石刀	I 55住埋土	27.20	3.98	1.39	200	粘板岩	北上山地古生界	両端方形、反る
180	22-14	51-14	石球	F 47住床	5.40	5.14	4.69	70	白色細砂質凝灰岩	奥羽山地中新統	打製、二分
181	22-15-16	(51-13)	石球	F 47住床	5.50	5.30	3.14	60	白色細砂質凝灰岩	奥羽山地中新統	打製
182	96-19	55-32	石球	W I	5.22	5.34	5.34	190	輝石安山岩	北上山地?中生界	打製
183	22-18	51-10	石製円盤	F 47住埋土	3.44	4.17	0.49	20	粘板岩	北上山地古生界	磨製
184	22-19	51-11	石製円盤	F 47住床	4.82	4.70	1.18	20	白色細砂質凝灰岩	奥羽山地中新統	緻密、磨製
185	96-21	55-31	石製円盤	G H 35・36区III層	5.56	5.90	1.52	80	粘板岩	北上山地古生界	打製
186	39-29	51-16	石製円盤	H 53住埋土	5.20	5.20	1.40	40	粘板岩	北上山地古生界	周縁の一部に敲打による粗面
187	96-18	55-29	石製円盤	H 43辺 I	3.78	4.00	0.77	30	粘板岩	北上山地古生界	周縁研磨
188	96-20	55-30	石製円盤	F 37~40区東III層	4.98	4.72	1.00	40	粘板岩	北上山地古生界	打製
189	51-13	48-8	凹石	C 56住埋土	12.28	7.62	5.00	570	輝石安山岩	奥羽山地中新統	4面、打痕、磨痕
190	99-10	48-14	凹石	E I	10.40	7.26	5.20	450	輝石安山岩	奥羽山地中新統	1面、打痕
191	65-16	48-12	凹石	D 60住埋土	10.16	6.79	5.84	510	輝石安山岩	奥羽山地中新統	4面、打痕
192	100-4	49-2	凹石	F 48区II層	10.12	6.68	5.13	390	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	4面、打痕

表11 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石質	産地	備考
193	17-9	48-3	凹石	E41住埋土	11.00	5.56	4.80	440	輝石安山岩	奥羽山地中新統	1面、打痕
194	100-1	48-17	凹石	H43区I層	10.24	7.60	5.42	490	輝石安山岩	奥羽山地中新統	3面、打痕
195	22-13	48-5	凹石	F47住床	11.44	7.20	3.69	430	輝石安山岩	奥羽山地中新統	3面、打痕
196	99-11	48-13	凹石	G46辺II	7.54	5.54	4.00	220	輝石安山岩	奥羽山地中新統	2面
197	99-12	48-15	凹石	G41辺II	7.88	5.14	5.40	350	凝灰質硬砂岩	北上山地古生界	3面、打面
198	15-20	48-2	凹石	F39住埋土	13.64	5.98	2.48	340	硬砂岩	北上山地古生界	2面
199	100-9	49-7	凹石	J27辺II	14.44	7.38	2.62	410	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	2面、打痕
200	100-7	49-4	凹石	F39区III・IV層	14.54	7.40	4.54	610	硬砂岩	北上山地古生界	3面、巾1mm弱の研磨条痕
201	100-8	49-5	凹石	GH37・38区III層	15.40	6.30	2.64	350	硬砂岩	北上山地古生界	2面、打痕
202	100-1	49-6	凹石	E46区II層	14.29	6.86	3.14	380	粘板岩	北上山地古生界	2面、打痕
203	52-21	48-11	凹石	E56-2住埋土	13.06	8.70	3.90	590	輝石安山岩	奥羽山地中新統	2面
204	99-13	48-16	凹石	H51区II層	12.83	8.20	3.82	530	輝石安山岩	奥羽山地中新統	2面、打痕
205	100-3	48-20	凹石	H54区III層	14.66	6.74	5.00	830	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	1面、打面
206	8-12	48-1	凹石	J27住埋土	16.10	8.14	2.86	470	粘板岩	北上山地古生界	2面、打痕
207	100-6	49-1	凹石	210+20・40	22.80	7.51	4.22	1,180	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	1面
208	20-17	48-4	凹石	G45住埋土	17.40	4.46	3.14	340	粘板岩	北上山地古生界	2面
209	59-23	48-19	凹石	J58埋設土器近	12.46	5.38	2.82	190	凝灰質粘板岩	北上山地古生界	1面
210	59-22	51-18	敲石	H56住埋土	4.74	4.64	3.93	150	粘板岩ホルンフェルス	北上山地古生界	比重大、周りに打面
211	102-1	51-17	敲石	H56住埋土	5.56	5.46	4.40	250	粘板岩ホルンフェルス	北上山地古生界	比重大、周りに打面
212	37-23	51-9	敲石	D52住埋土	8.30	6.66	4.58	440	粘板岩ホルンフェルス	北上山地古生界	比重大、上下と側面に打面
213	67-22	51-15	敲石	E58炉近	5.12	5.18	4.11	170	チャート	北上山地古生界	上下に打面
214	100-5	50-18	敲石	I50区III・IV層	10.28	6.94	5.72	590	チャート	北上山地古生界	2面に凹み、周りに打痕
215	101-7	50-8	敲石	H54区III~V層	8.50	6.70	5.28	450	花崗閃緑岩	北上山地中生界	表裏に打痕、一端に打面
216	27-32	51-6	敲石	F49住床	5.60	3.93	2.70	90	輝石安山岩	奥羽山地中新統	両側面を除き打痕、石斧片転用
217	37-24	51-8	敲石	E52住埋土	7.04	4.26	1.18	90	凝灰質細粒砂岩	北上山地中生界(?)	周りに打面、下端と側面に打痕
218	31-13	51-7	敲石	E50住埋土	8.24	3.34	2.17	110	凝灰質細粒砂岩	北上山地中生界(?)	表裏に凹み
219	101-12	50-15	磨石	南端I・II層	13.42	5.90	5.28	760	花崗閃緑岩	北上山地中生界	周り粗面
220	101-10	50-13	磨石	J27辺II層	15.18	7.12	6.70	1,130	輝石安山岩	奥羽山地中新統	一端に打面
221	42-24	48-7	敲石	H54住床	12.94	7.62	4.02	430	チャート	北上山地古生界	両端に打痕
222	101-8	50-9	磨石	F47辺I	10.08	7.14	5.05	530	花崗閃緑岩	北上山地中生界	
223	73-18	50-21	磨石	G34土坑埋土	10.44	8.40	5.34	700	花崗閃緑岩	北上山地中生界	
224	101-2	48-14	磨石	G55区I層	9.17	7.48	6.24	650	花崗閃緑岩	北上山地中生界	周りに大打痕

表12 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石質	産地	備考
225	101-9	48-12	礫石	G 36辺I層	9.70	6.70	5.20	460	石英斑岩	北上山地中生界	周りに打痕 全面粗面、周りに打痕
226	102-2	50-17	礫石	G 35辺I	10.86	7.30	6.34	730	花崗閃緑岩	北上山地中生界	
227	101-4	50-6	磨石	E 50区III層	11.00	8.48	6.02	790	輝石安山岩	北上山地中・古生界	側面の一部粗
228	101-14	50-12	磨石	H 35区III層	6.54	6.50	4.90	320	花崗閃緑岩	北上山地中生界	両端欠損
229	101-12	50-22	磨石	I 35区II層	6.40	7.17	6.10	530	石英斑岩	北上山地中生界	全面粗面
230	101-6	50-10	礫石	I 35区I層	10.49	7.70	7.48	890	花崗閃緑岩	北上山地中生界	
231	42-25	50-2	磨石	H 54住床	10.54	6.74	4.72	520	花崗閃緑岩	北上山地中生界	風化
232	101-5	50-7	磨石	南西端	10.82	7.68	5.29	660	花崗閃緑岩	北上山地中生界	小片、全面粗面
233	101-13	50-11	礫石	G H 35・36区III層	1.67	4.94	1.80	60	花崗閃緑岩	北上山地中生界	側面一部粗
234	65-15	50-3	磨石	D 60住No. 7	7.98	6.82	4.54	370	花崗閃緑岩	北上山地中生界	表裏に凹み
235	100-2	50-4	磨石	J 39辺I層	9.20	7.52	4.62	510	花崗閃緑岩	北上山地中生界	表裏に凹み、側面粗面
236	100-10	49-3	磨石	E I	6.50	5.98	4.83	300	輝石安山岩	奥羽山地中新統	表裏に凹み、側面粗面
237	59-24	48-9	磨石	H 56住埋土	9.64	7.80	5.08	640	輝石安山岩	北上山地中・古生界	表裏に凹み、側面粗面
238	25-14	48-6	磨石	I 47住埋土	12.00	6.92	6.20	860	輝石安山岩	北上山地中・古生界	表裏に凹み、側面粗面
239	52-19	48-10	磨石	E 56住埋土	5.17	6.40	3.48	150	凝灰質硬砂岩	北上山地中生界	表裏に凹み
240	101-11	50-14	磨石	I 35辺I	10.86	6.40	5.24	550	凝灰質硬砂岩	北上山地中生界	両側粗面
241	78-4	50-19	磨石	H 43土坑埋土	6.00	8.20	5.43	330	凝灰質硬砂岩	北上山地中生界	表に凹み、両側粗面
242	101-15	50-16	磨石	G H 35・36区III層	10.40	7.60	5.89	810	花崗閃緑岩	北上山地中生界	周り粗面
243	101-16	50-20	磨石	I 35辺I	4.19	6.20	4.56	250	凝灰質硬砂岩	北上山地中生界	両側粗面
244	42-26	50-1	磨石	H 54住床	9.70	7.62	4.18	490	輝石安山岩	北上山地中・古生界	
245	101-3	50-5	磨石	I	9.86	8.42	4.38	600	輝石安山岩	北上山地中・古生界	縁あり
246	20-18	52-2	石皿	G 45住埋土	14.66	15.90	3.00	1,150	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	縁あり、凹石に転用
247	102-5	53-7	石皿	G 32区III層	13.20	18.20	2.90	880	凝灰質細角礫岩	奥羽山地中新統	脚・縁あり、凹石に転用
248	51-14	53-1	石皿	C 56住床	19.90	12.10	5.60	950	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	縁あり、凹石に転用
249	102-6	53-8	石皿	I 52区II層	17.70	10.20	4.24	700	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	縁あり、凹石に転用
250	102-4	53-9	石皿	F 57区III層	18.10	8.48	4.66	630	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	脚・縁あり、凹石に転用
251	20-19	52-1	石皿	G 45住埋土	14.84	9.50	3.50	650	凝灰質硬砂岩	北上山地中生界	縁あり、凹石に転用
252	102-9	53-3	石皿	E 34区III層	10.96	6.64	2.06	140	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	縁なし、凹石に転用
253	102-11	53-10	石皿	D 49区II層	16.02	12.18	2.00	240	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	縁あり、底面不明
254	47-12	52-10	石皿	I 55住床	29.80	14.90	1.80	1,400	輝石安山岩	奥羽山地中新統	板状自然石
255	39-15	52-8	石皿	I 55住床	27.90	17.60	6.10	3,360	凝灰質粘板岩	北上山地中生界	自然石利用、凹みあり(?)
256	31-15	52-5	砥石	E 50住埋土	34.40	21.70	10.18	10,270	硬砂岩	古生界	1面に研磨痕、石皿でも可

表13 石器一覽表

No.	実測図	写真図版	品名	出土地点	長さcm	巾cm	厚さcm	重さg	石質	産地	備考
257	82-34	53-5	砥石	E 58土坑埋土	28.50	16.90	5.92	3,360	輝石安山岩	奥羽山地中新統	1面に研磨痕、石皿でも可
258	102-14	53-13	石皿	F 42区II層	22.20	13.96	6.94	2,330	硬砂岩	北上山地古生界	4面使用、すりきね、砥石に転用
259	37-26	52-7	石皿	D 52住埋土	19.20	12.24	6.54	1,970	凝灰質砂岩	北上山地中(?)古生界	3面使用、砥石でも可
260	37-14	52-2-3	砥石	E 50住埋土	15.20	5.86	3.74	540	輝石安山岩	奥羽山地中新統	267と同じ個体
261	59-25	53-2	石皿	H 56住埋土	38.90	14.40	3.43	3,230	輝石安山岩	奥羽山地中新統	砥石?、板状自然石
262	37-22	52-6	砥石	D 52住床	27.00	10.06	3.70	1,400	凝灰質硬砂岩	北上山地古生界	1面に研磨痕、石皿でも可
263	42-19	49-10	砥石	D 54住床	30.20	12.04	3.10	1,690	粘板岩	北上山地古生界	1面にのみ軽い磨痕
264	102-13	53-6	砥石	G 54区III層	14.20	14.48	11.40	3,930	輝石安山岩	奥羽山地中新統	側面にのみ使用
265	39-22	52-9	砥石	I 52-2住炉	13.20	15.48	5.30	1,720	凝灰質硬砂岩	北上山地古生界	2面に研磨痕
266	37-27	52-4	砥石	E 52住2区埋土	9.10	6.98	5.80	640	凝灰質硬砂岩	北上山地古生界	2面に磨面
267	31-14	52-1-3	砥石	E 50住埋土	16.20	13.30	5.10	1,030	粘板岩	奥羽山地中新統	2面に磨面
268	25-16	49-8	砥石	D 48住埋土	13.29	6.26	3.41	520	粘板岩	北上山地古生界	1面使用
269	102-8	53-4	砥石	G 55辺I層	4.67	6.88	1.84	50	凝灰質硬砂岩	北上山地古生界	1面に磨面
270	102-7	53-11	砥石	F 34区III層	6.44	3.42	3.14	80	硬砂岩	北上山地古生界	小片、3面使用
271	39-16	49-9	台石	I 52住床	31.40	9.52	6.32	2,610	硬砂岩	北上山地古生界	2面に打痕
272	102-12	49-11	台石	B 60辺III~V層	28.10	8.84	7.18	3,270	スピライト質凝灰岩	北上山地古生界	2面に打痕
273	102-10	53-12	台石	G 34区III層	16.60	10.74	6.70	2,500	硬砂岩	北上山地古生界	1面に打痕
274	96-17	54-15	勾玉	I 50住埋土	2.25	1.48	0.76	3.55	スピライト質凝灰岩	北上山地古生界	両面穿孔、孔径2.5mm
275	78-6	54-16	小玉	J 50土坑	1.27	1.20	0.73	1.90	スピライト質凝灰岩	北上山地古生界	両面穿孔、孔径3mm
276	96-16	55-2-32	勾玉状石	H 53区III層	4.42	2.82	0.80	11.91	粘板岩	北上山地古生界	打製、内側に磨滅痕?
277	96-22		軽石製品	I	6.80	6.24	4.60	29.00	浮石	産地時代不詳	1面平坦
278	48-22	55-38	敲石	J 55住埋土	16.80	5.58	1.80	170	アルコース砂岩	北上山地古生界	敲打痕、研磨痕
279	13-4		石皿?	G 35土坑埋土	13.90	26.60	22.40	10,610	硬砂岩	北上山地古生界	砥石?
280	11-23	55-37	石斧片?	E 35住埋土	7.38	4.21	1.58	70	粘板岩	北上山地	折損後再研磨
281		55-35	小石	I	4.10	2.30	1.67	30	玉ずい	産地時代不詳	自然石
282		55-34	小石	I 57住埋土	2.90	2.30	0.86	10	玉ずい	産地時代不詳	自然石
283		55-33	水晶片	J 37辺I層	2.94	1.20	1.38	10	水晶	産地時代不詳	自然石

(3) 土偶

形態と施文によって3類に分けられる。

1類 平板な形態で、刺突文や沈線文の施されるもの。中期末～後期前半(?)。

2類 立体的形態で充実しており、刺突文や沈線文の施されるもの。後期後半(?)。

3類 2類に比べ、大形かつ中空で、刺突文や沈線文の施されるもの。晩期末。

1類(第27図の3・4、第41図の7、第45図の7、第54図の14・15、第57図の12、第95図の2～5、図版59の1～11)

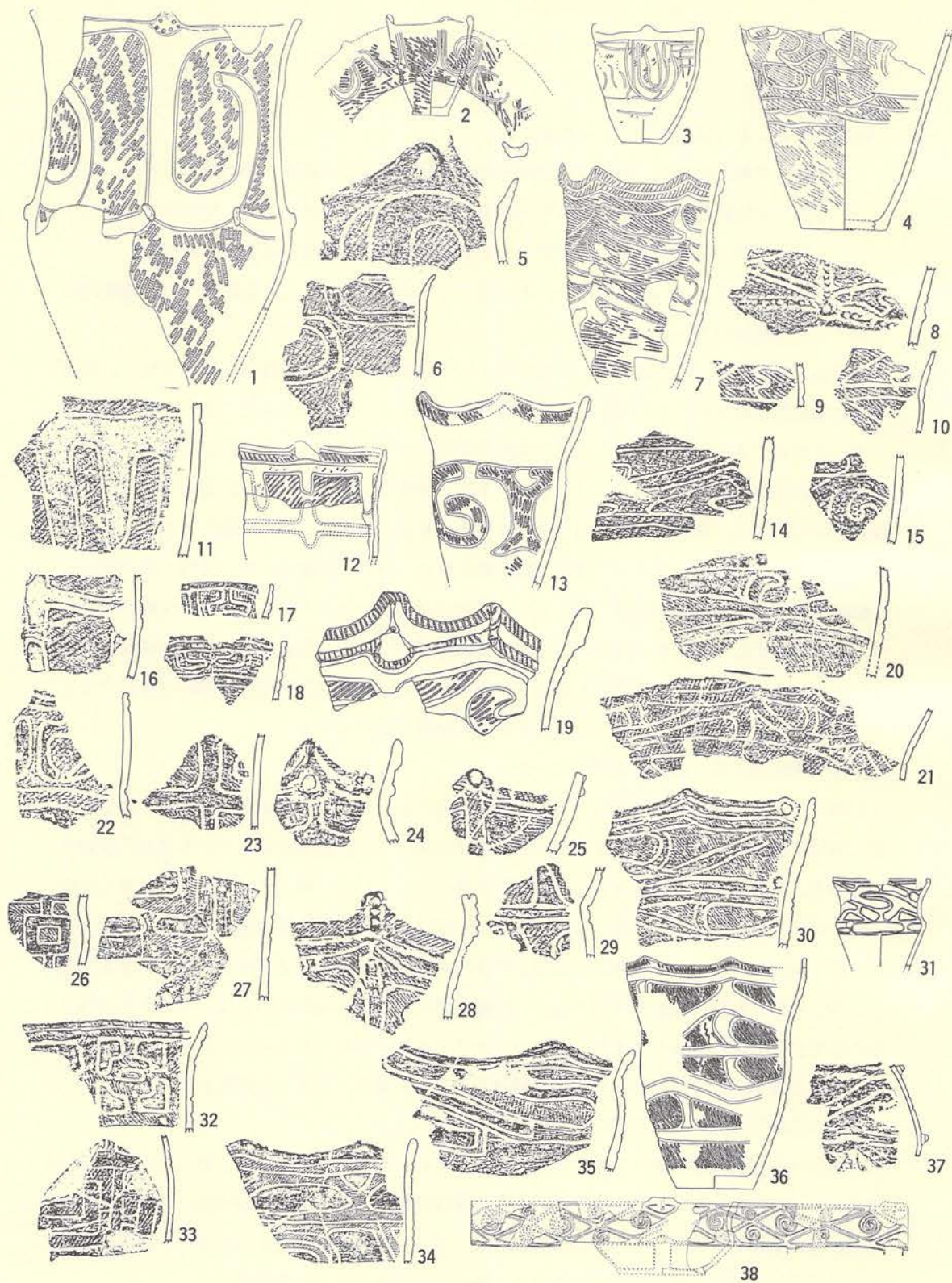
完形品が1点ある(第45図の7、図版59の1)。縦長の逆台形状胴体部に頭部が付く。乳房と臍は粘土粒を貼りつけて表現する。脚は胴部と一体となっており未分化である。最下部は少し太くなり立てることができる。手は三角形の突出として表わされる。顔面は平板で、頭部に2本の角状突起があり、顎もしゃくれ気味に下方に伸びる。眼と口は刺突によって表現される。後頭部は突出する。頸部には、左右方向の貫通孔がある。前面は、中心は顎の下から、右と左は乳房の下から、背面は肩から、縦の沈線が施される。さらに、前面には、乳房と臍の間および臍の下に、水平方向の刺突線が加えられ、背面には、肩のところに水平方向の沈線が施される。破片で出土したのも、基本的に上記の特徴を備えている。背面は沈線のみで前面に刺突を付加するものが多いが、背面にも刺突を施す例もある。また、肩の部分に斜めに穿孔するものが4例ある。2例に、アスファルト様黒色物の付着が認められる。

2類(第95図の6～9、図版59の12～15)

1類に比べるとはるかに写実的である。手足は分化し、顔面の表現も自然である。頭部は両側に角状突起があり、後頭部が少し膨らむ。環状の耳がつく。頭頂から下方に不貫通孔が穿たれている。顔面は平板であるが少ししゃくれた鼻がついている。脛と唇は、僅かな高まりに切れ目を入れて表わす。上下の唇には各3本の刻みがつく。鼻孔は2ケの刺突で表現している。胴に正中線を示すかのごとき隆起がある。脚は二又に分れ、足の底は広がって正立できる状態である。背面に極細の沈線文が施される(図版参照)。なお、第88図の6は、丸味のある作りからみて、この類に入るべきものと思う。ムササビの類を表現したものであろう。腹部全面と背面の中心線上、および後肢の先端に、刺突が施され、頭部と腹部に貫通孔がある。

3類(第88図の3・7、図版59の17・18)

1類よりは写実的であるが2類より様式化されている。手は抽象化され、肩(?)の部分に刺突が施される。胸部に水平方向に走る3本の平行破線、背面の肩に水平方向に走る2列の列点文、その下に2本の斜行する沈線が施される。7はこの類の肩部破片であろう。縄文が施されると共に、盛り上げる部分の付根は沈線で区画され、その少し上に刺突が並ぶ。



第131図 方形文と渦文の系統

(4) 縄文後期前葉～中葉の文様について (第131図参照)

十腰内I式の中心的文様の1つに「入組文」^{註1}がある。これはS字状の曲線文で、多くの場合は沈線で施される。その場合、周囲を充填するものとして、斜行する直線文が、必ず伴うのが原則のようである。このS字文(渦文の原形となる)と斜線の組み合わせは、関東地方の堀之内I式にも見られる。そこでは、同心円文と斜線の組み合わせ、逆J字文と斜線の組み合わせ、連続渦巻文と斜線の組み合わせ、懸垂文(S字の連続)と斜線の組み合わせ、^{註2} ^{註3} ^{註4} ^{註5} というような形で盛んに用いられている。さらに、称名寺2式においても、祖型の渦文と斜線の組み合わせ^{註6}を見出すことができる。君成田IV遺跡においても、「渦文と斜線」という組み合わせは盛んに用いられており、8のように極く一部の充填文のように用いられるものもあれば、7・9・10・14・15のように主文様として用いられるものもある。最も完成された姿の一つは38に見られる。文様帯を斜線で区切り、区画内に渦文を施す。渦文は巻きこまれても再び中心でS字状に方向転換して外に出てくるのが原則であり、この点は祖形と思われるC字文のあり方を忠実に守っているといえる。大きな器面を埋める場合には、沈線文単独よりも磨消技法を応用した方がより効果的であり、20・21を経て30・36に至るように考えられる。この場合、渦文の入るべき位置に、渦文の祖形のC字文が施されている。

十腰内I式のもう一つの文様である方形の磨消文は、山字状ないし、十字状の磨消文からの発展が考えられそうである。11・12・16ないし17・18のような形は、割合短期間で22・23を経て26・27・32のような磨消文に到達するように思える。

方形文は、大木10式に多く見られる逆J字状、S字状磨消文からの発展が考えられるが、斜線と渦文の組み合わせは、どこに起源があるのであろうか。中期末の文様の中に芽生えがあると予測してはいるが、ここではこれ以上追求しないことにする。

なお、24・25のような複合口縁や35のようなや、変った文様についても省略したい。

註1. 今井富士雄、磯崎正彦『十腰内遺跡』 「岩木山」 岩木山刊行会 1968年

註2. 野口義磨「縄文土器大系3後期」(講談社、1981年)の50頁図版126

註3. 同上書の51頁図版128

註4. 同上書の69頁図版167

註5. 同上書の74頁図版186

註6. 同上書の68頁図版165

V ま と め

1. 君成田Ⅳ遺跡は、縄文早期、中期末～晩期前葉、晩期末、弥生後期、奈良時代にわたる遺跡である。
2. 遺構は、縄文中期末～晩期前葉、晩期末、奈良時代の住居址・土坑が検出された。
3. 遺物は、縄文中期末～後期前葉のものが最も多く、縄文晩期末がこれに次ぎ、縄文後期後葉から晩期前葉が少量、奈良時代の遺物も少量あり、弥生時代のものは僅少、縄文早期のものは僅か1ヶの土器片のみである。
4. 今回の調査の結果、遺跡の立地についての新しい資料が追加されることになった。
5. 集落の立地は時期毎に変化している。大勢としては、次第に谷筋に下ってゆく。
6. 今回の調査では、君成田Ⅳ遺跡の大部分を発掘しているものの、南東の低い部分（縄文晩期末、奈良時代の遺構あり）、尾根北半の西斜面（縄文中期末の遺構の存在が予想される）、南斜面下部の西側（未削平地につき、縄文後期の遺構の存在が予想される）はまだ調査すべき地区である。

《主な参考文献》

- 佐原 真 「日本の原始美術2 縄文土器Ⅱ」 講談社 1979年
野口 義麿 「縄文土器大成3 後期」 講談社 1981年
芹沢 長介 「石器時代の日本」 築地書館 1963年
江坂 輝弥 『縄文文化の発現』 「世界考古学大系1」 平凡社 1968年
成田 滋彦 『青森県の土器』 「縄文文化の研究4」 雄山閣出版 1981年
今井富士雄・磯崎 正彦 『十腰内遺跡』 「岩木山」 岩木山刊行会 1968年
後藤 勝彦 『陸前宮戸島里浜台囲貝塚出土の土器について』 考古学雑誌48-1 1961年
伊東 信雄 『弥生文化』 「水沢市史1 原始-古代」 水沢市史刊行会 1974年



東より

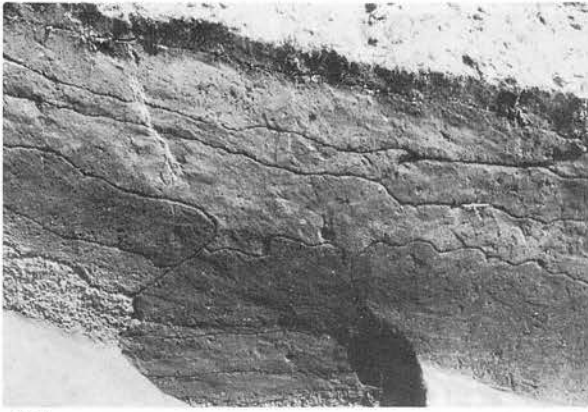


南より



北より

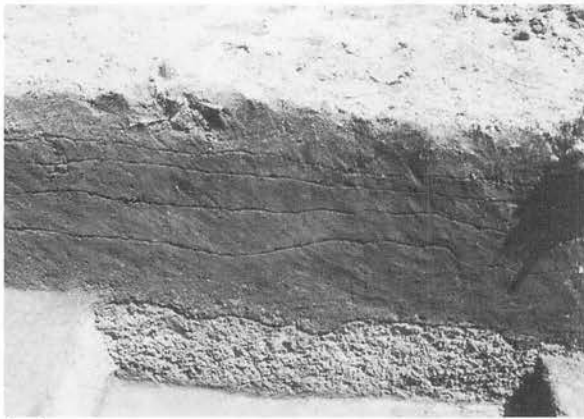
図版1 空中写真



(1)



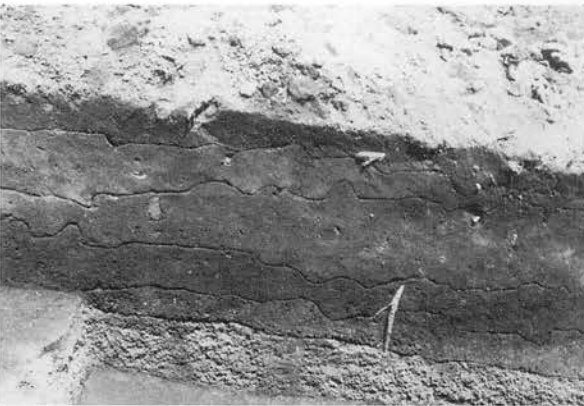
(4)



(2)



(5)



(3)

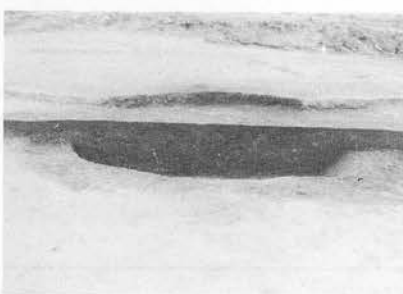
- (1)~(2) STA 210+20 東西トレンチ
- (3) STA 210+60 東西トレンチ
- (4)~(5) STA 240+40 東西トレンチ

図版2 調査区土層断面



完掘

H13住



断面

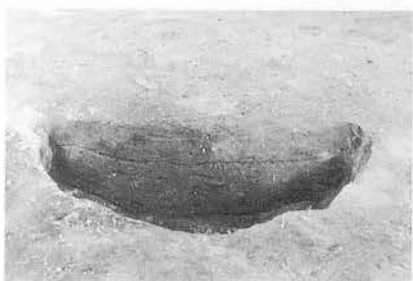


炉址

土器出土状況



地床炉断面



土坑断面

F15住

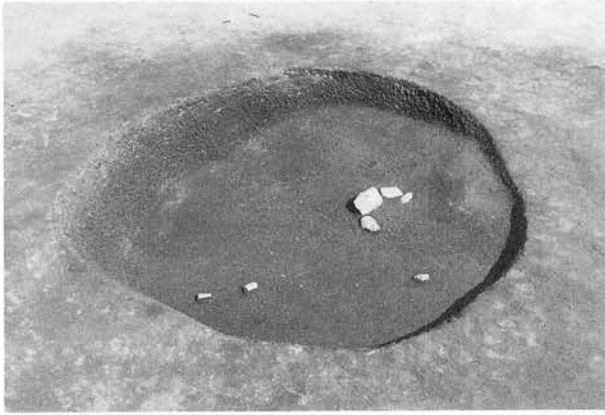


断面

完掘



図版3 H13・F15住居址

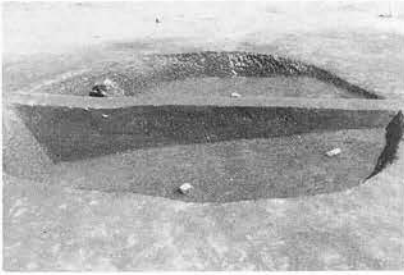


完掘



土器出土状況

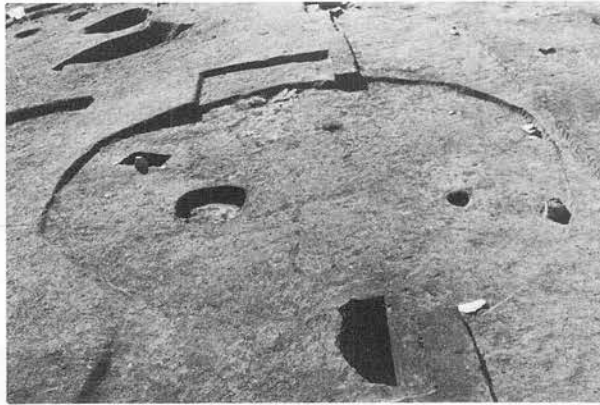
J27住



断面



炉址



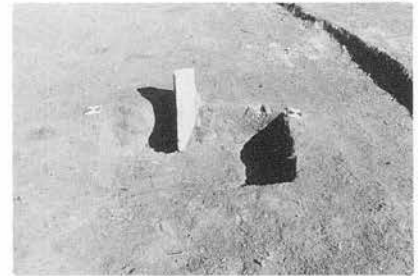
F33住

完掘

土器出土状況



立石



図版4 J27・F33住居址

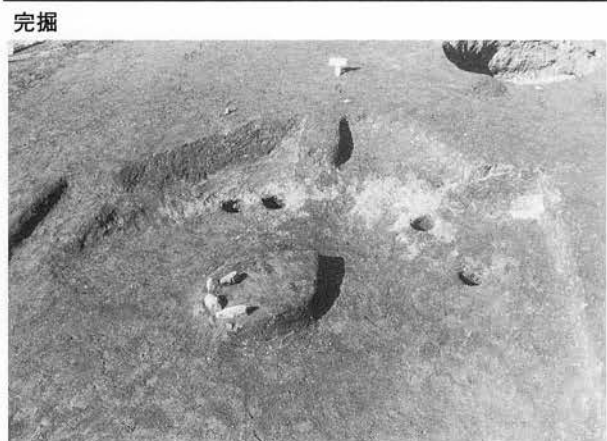


完掘



炉址

E 35住



完掘

G 35住



断面



断面



炉址

H 35住

遺物出土状況



炉址



図版 5 E 35・G 35・H 35住居址



H36住

完掘



断面



炉址



炉址断面

F 39住



完掘



断面



炉址

図版 6 H36・F39住居址



遺物出土状況

G40住



断面

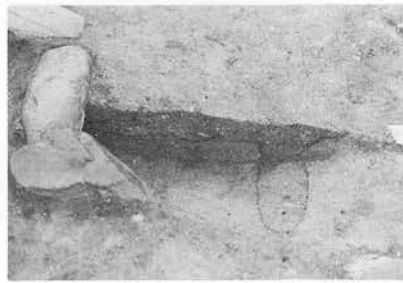


土器埋設炉



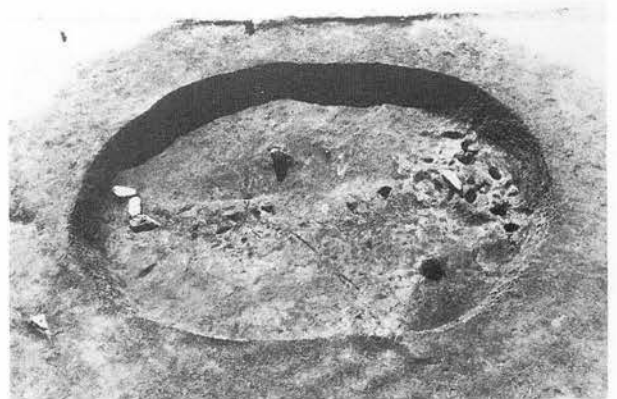
E41住

炉址



炉址断面

完掘



立石



断面

図版7 G40・E41住居址



F 42住

完掘



断面



炉址

炉址断面



G 43住

完掘



断面

炉址断面



土器出土状况



图版 8 F 42 · G 43住居址



E 45住

完掘



遺物出土状況



埋設土器



G 45住

完掘



立石



断面



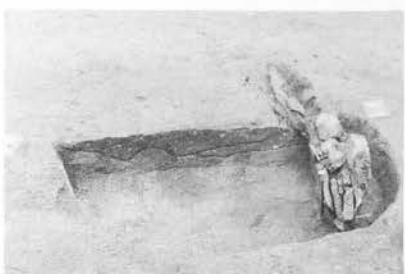
石皿出土状況



土坑断面



地床炉



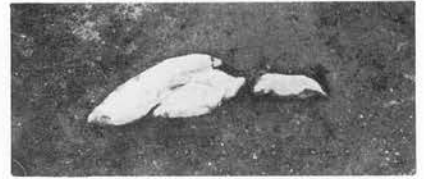
炉址断面

図版 9 E 45・G 45住居址



D47住

完掘



炉検出

東壁際石群



遺物出土状況



F47住

完掘



I47住

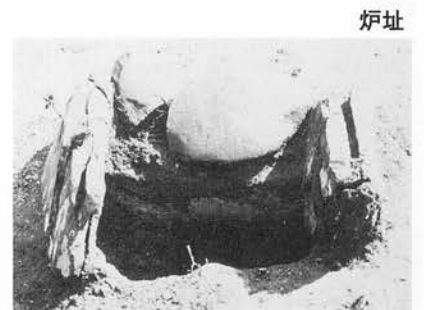
完掘



断面



遺物出土状況



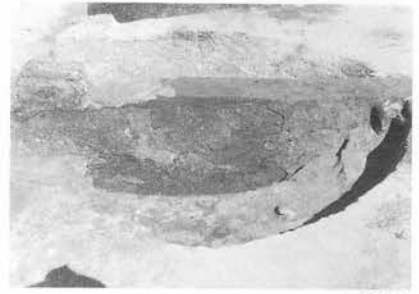
炉址

図版10 D47・F47・I47住居址



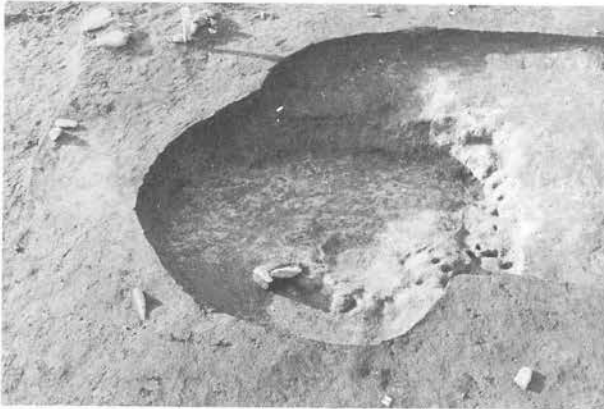
D48住

完掘



断面

I 48住



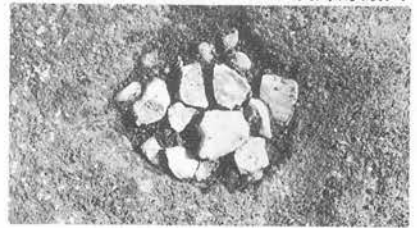
完掘



断面

F 49住

剥片貯蔵穴



土器埋設炉



完掘



図版11 D48・I 48・F 49住居址



E50住

完掘



炉址



I50住

炉址検出状況



断面



D51-1住
完掘



D51-1住断面

D51-1・2住

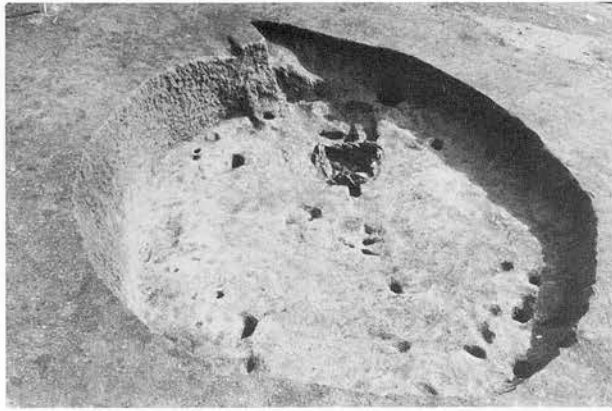


D51-2住完掘



D46土坑断面

図版12 E50・I50・D51-1・2住居址



完掘



断面



F51住

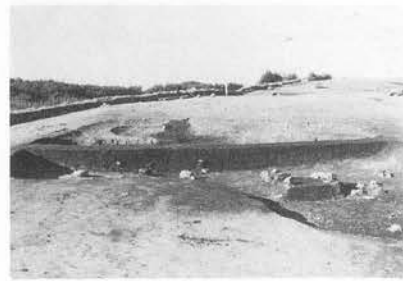
炉址断面



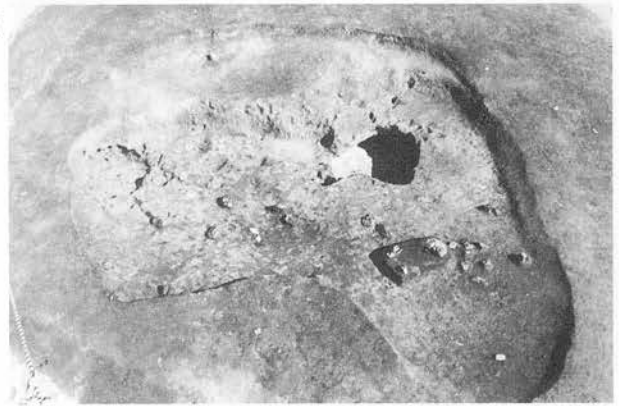
炉址

D52住

遺物出土状況



断面



立石

炉址



図版13 F51・D52住居址



I 52-1住

完掘



炉址断面



断面

炉址検出状況



D 53住

完掘



炉址



断面



炉址断面

图版14 I 52 -1 · D 53住居址



完掘

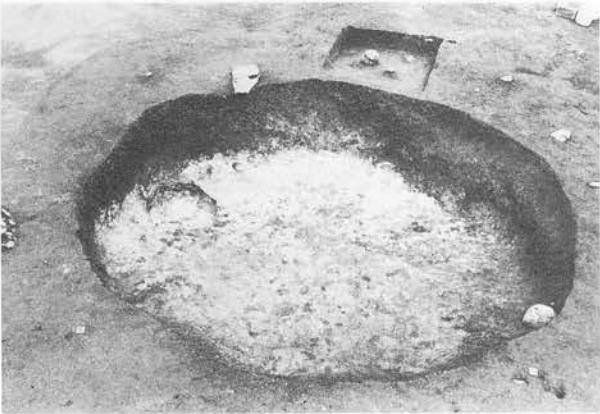


炉址

H53住



炉址断面



完掘

D54住



断面

土器出土状況



土器出土状況



図版15 H53・D54住居址



G55住

遺物出土状況



完掘

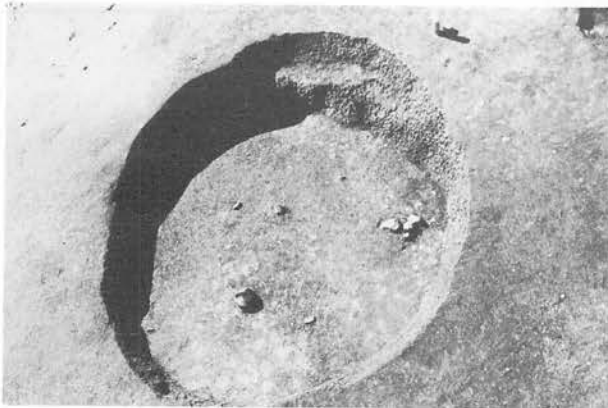


断面

炉址



I55-1住



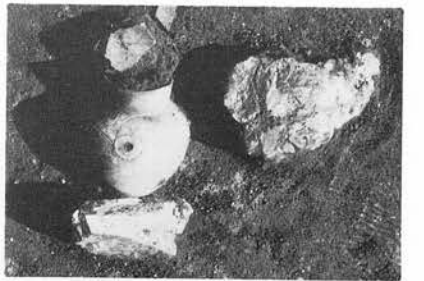
完掘



土器出土状況



断面



図版16 G55・I55-1住居址



完掘

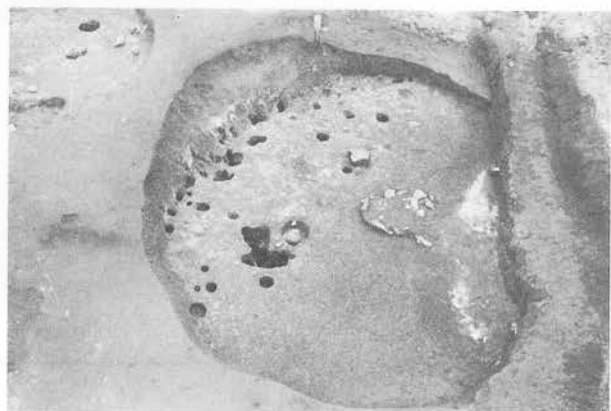
I 55-2・3住



断面



立石



完掘

J 55住



断面



炉址



C 56住

完掘



断面



炉址



土器出土状況

図版17 I 55-2・3・J 55・C 56住居址



E 56-1 住完掘



E 56-1 住土器埋設炉

E 56-1・2 住



E 56-2 住土坑断面



E 56-2 住完掘



E 56-2 住断面

F 56 住



土器出土状況

断面



炉址



図版18 E 56-1・2・F 56 住居址



完掘



断面



G57住炉址埋土



G56住炉址埋土



遺物出土状況



G56住地床炉



図版19 G56・G57住居址



完掘

H56-1・2住



土器出土状況

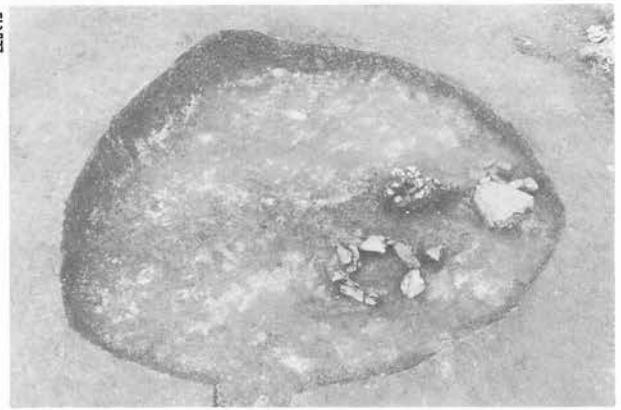


D58住



完掘

完掘



D59住

断面



断面



炉址埋土

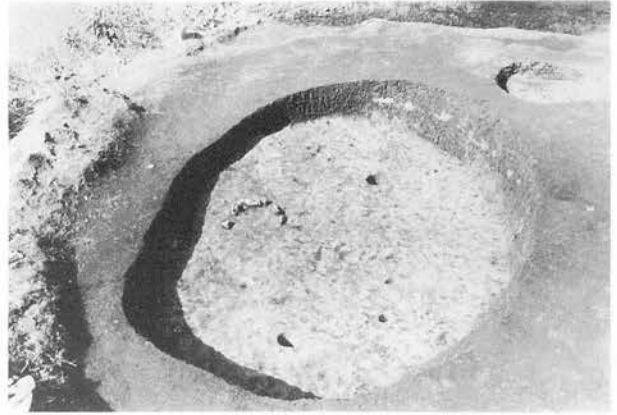
炉址



図版20 H56-1・2・D58・D59住居址



遺物出土
状況



完掘



断面

D60住



炉址



C60・61住

完掘



断面



遺物出土
状況



図版21 D60・C60・C61住居址



J51住

完掘



検出状況

カマド



断面



I57住

完掘



検出状況



断面



カマド完掘



遺物出土状況

図版22 J51・I57住居址



G16土坑



G18土坑



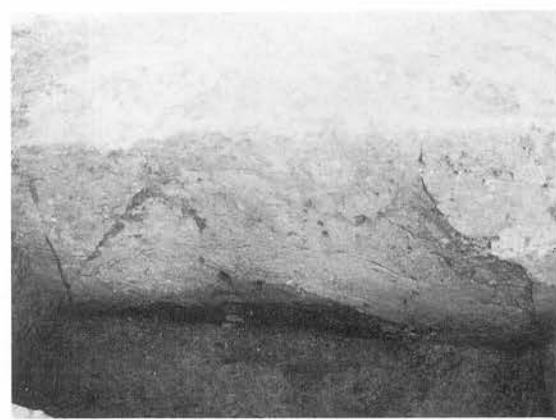
H30土坑



H30土坑断面

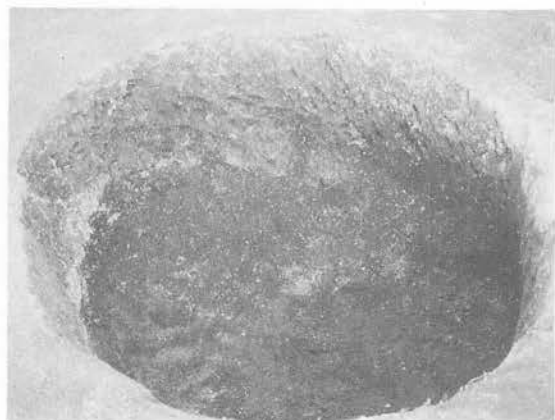


D31土坑



D31土坑断面

图版23 土坑(1)



G 31土坑



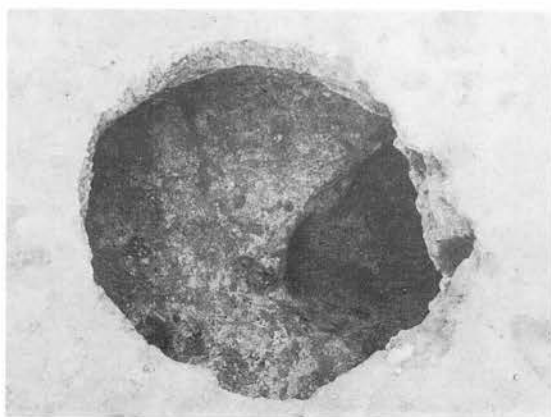
G 31土坑断面



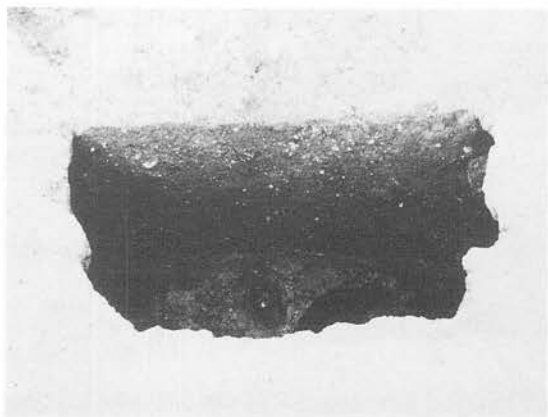
G 32土坑



G 32土坑断面



C 33土坑

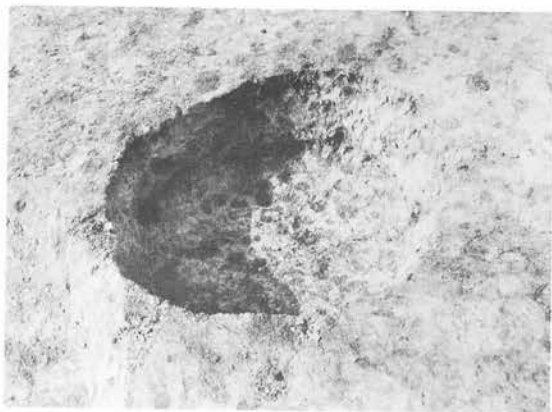


C 33土坑断面

图版24 土坑(2)



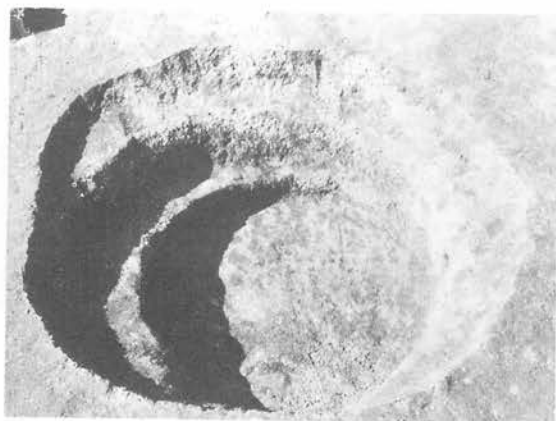
D33土坑



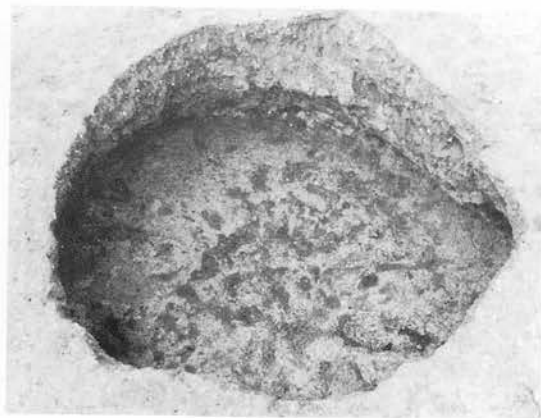
E33土坑



F33土坑



G33土坑



C34土坑



C34土坑断面

图版25 土坑(3)



G37土坑



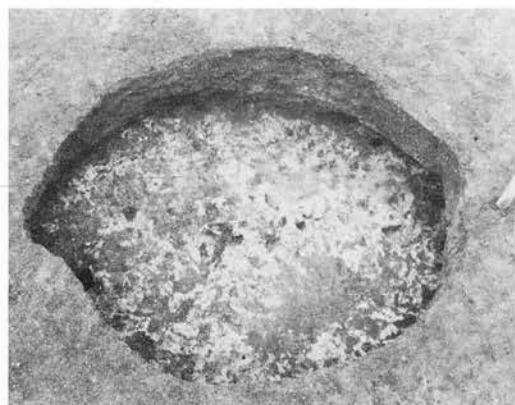
G37土坑断面



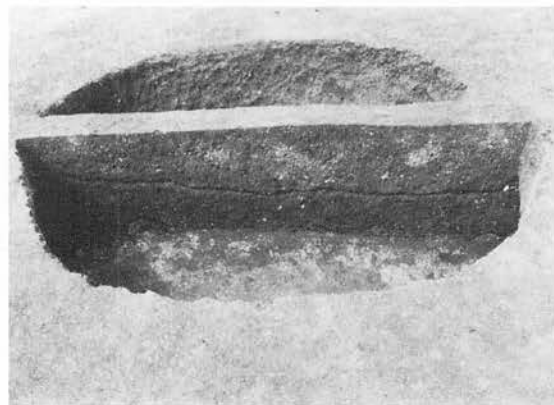
H37土坑



H37土坑断面

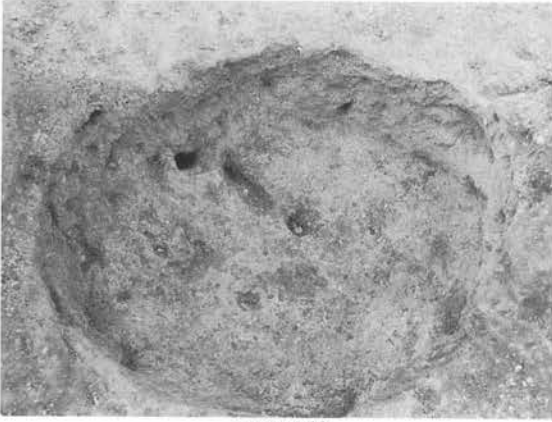


H43土坑



H43土坑断面

图版26 土坑(4)



D49土坑



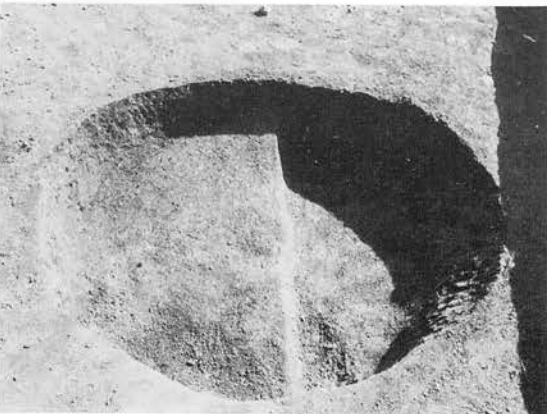
D49土坑断面



E49-1土坑



E49-2土坑



J50土坑

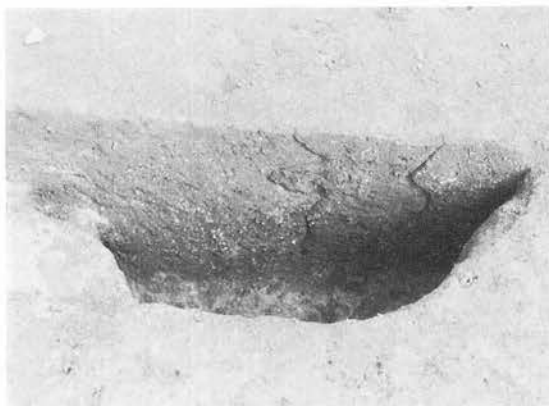


D51土坑

图版27 土坑(5)



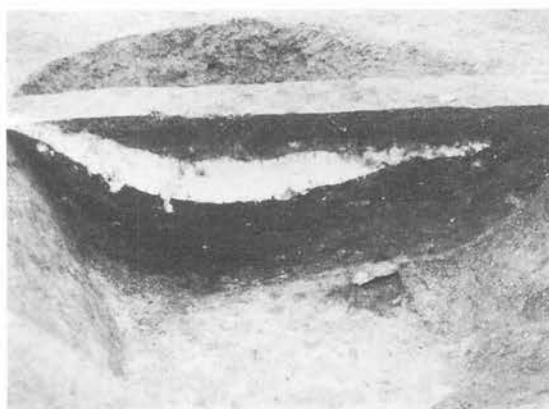
F 51土坑



F 51土坑断面



G 52土坑



G 52土坑断面



G 53土坑

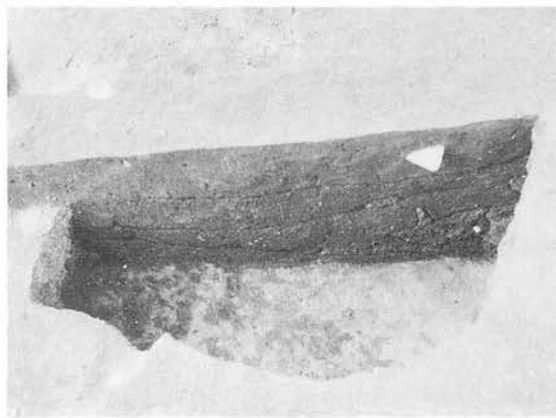


H 53土坑

图版28 土坑(6)



G54土坑



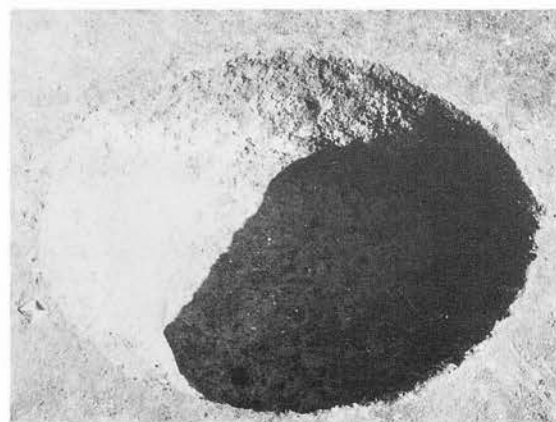
G54土坑断面



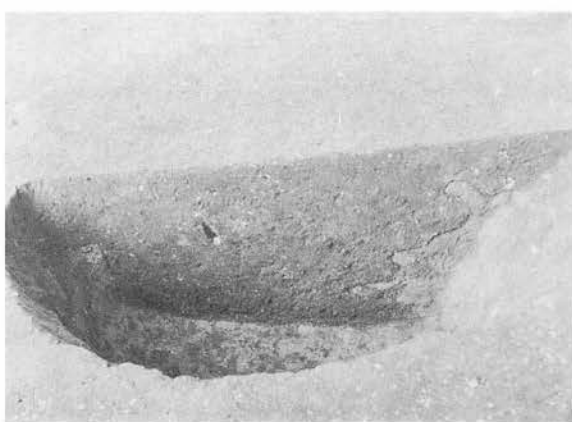
I54-1土坑



I54-2土坑

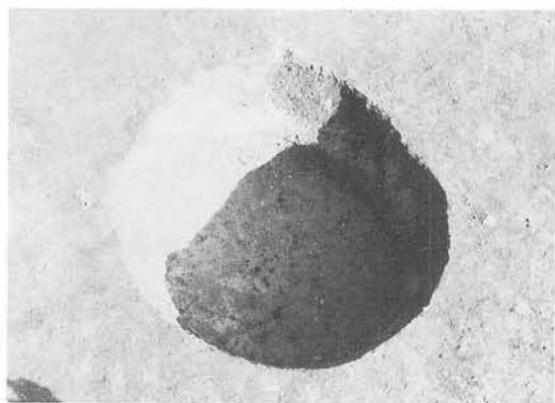


F55-1土坑



F55-1土坑断面

图版29 土坑(7)



F 55-2土坑



F 55-2土坑断面



G 55土坑



G 55土坑断面



D 56土坑

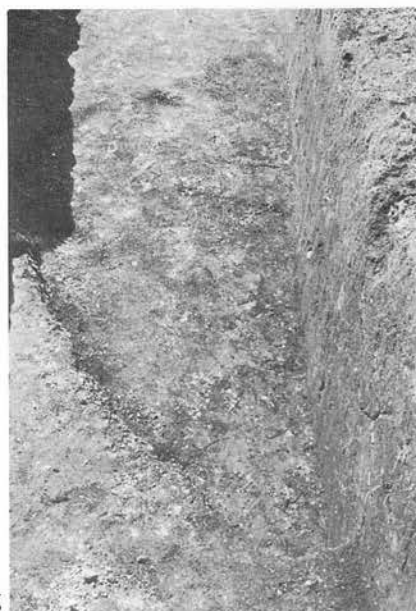


D 56土坑断面

图版30 土坑(8)



E 56 土坑



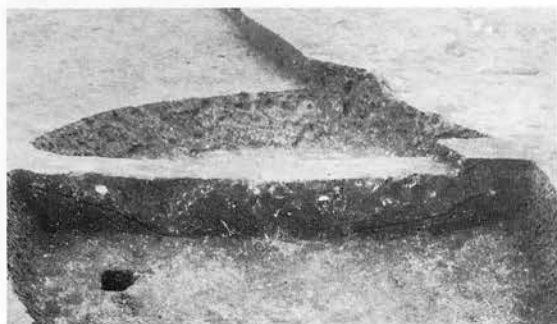
C 58 土坑



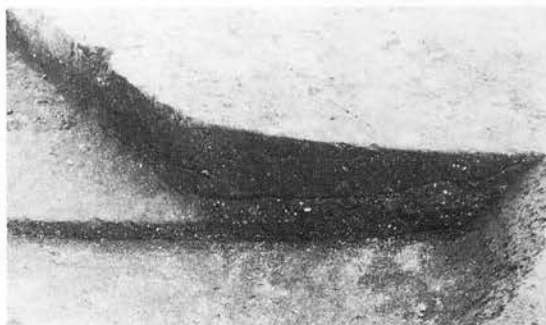
E 58 土坑



C 59 土坑

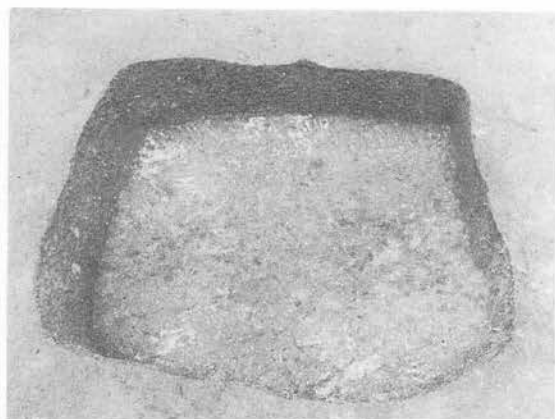


E 58 土坑断面



C 59 土坑断面

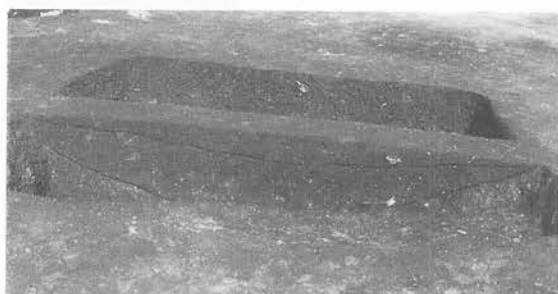
图版31 土坑(9)



D59土坑



C60土坑



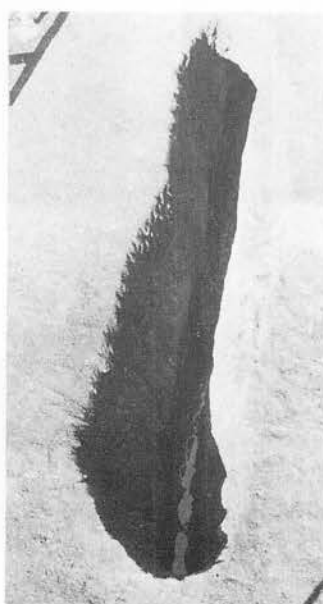
D59土坑断面



C60土坑断面



D50陥し穴状遺構



I56陥し穴状遺構



I56陥し穴状遺構断面

図版32 土坑(10)・陥し穴状遺構



D 35区土器出土状況



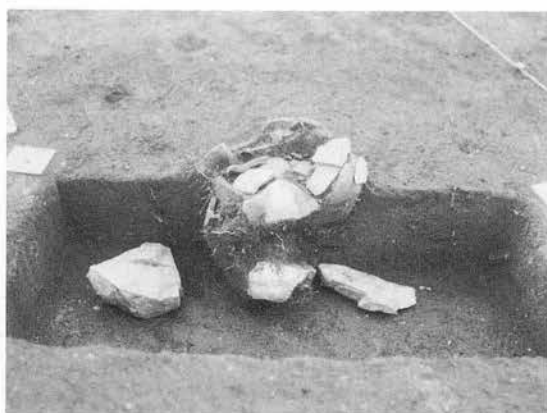
E 49区土器出土状況(埋設?)



E 45埋設土器



J 51埋設土器

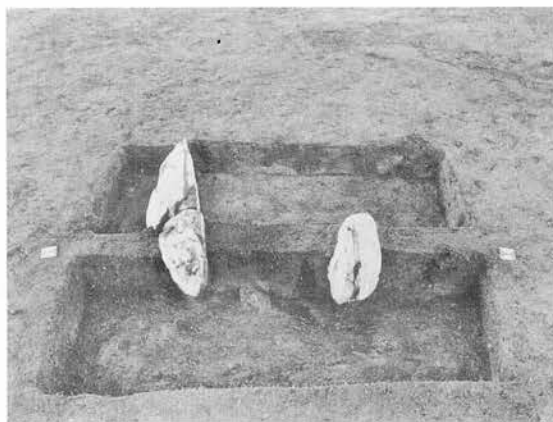


J 58埋設土器

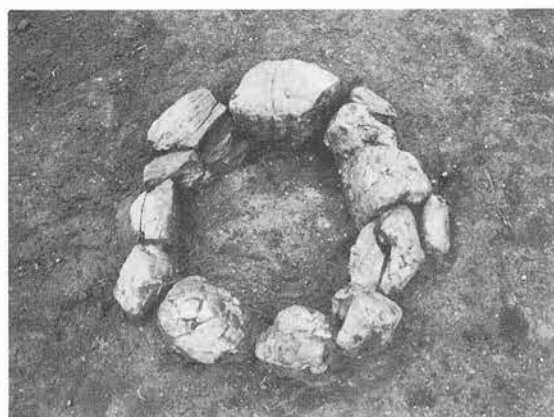
図版33 埋設土器など



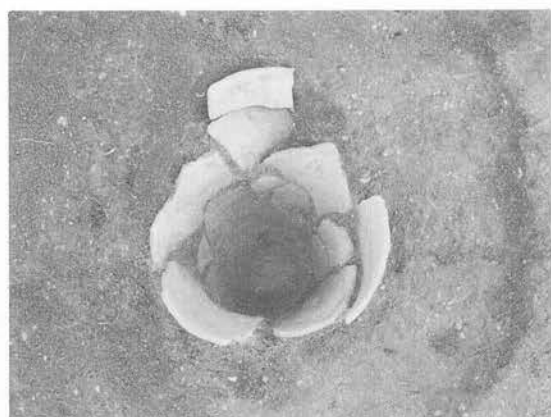
E 34 建物跡



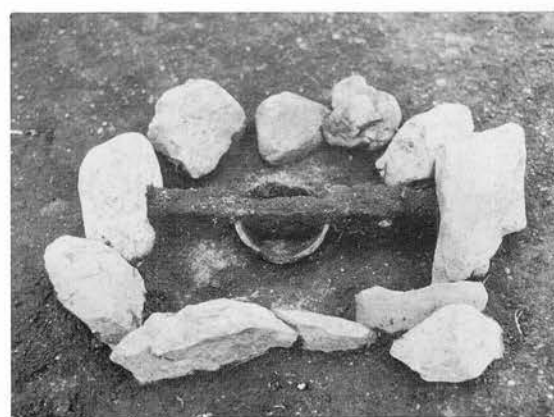
F 26 配石遺構



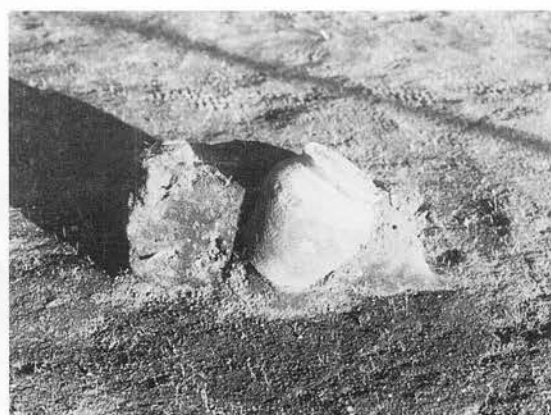
C 57 炉址



F 50区土器出土状況



H 57 炉址



I 51区土器出土状況

図版34 建物跡・配石・炉址など



遺跡南端部を東側より



中央平坦部東斜面



中央平坦部東斜面

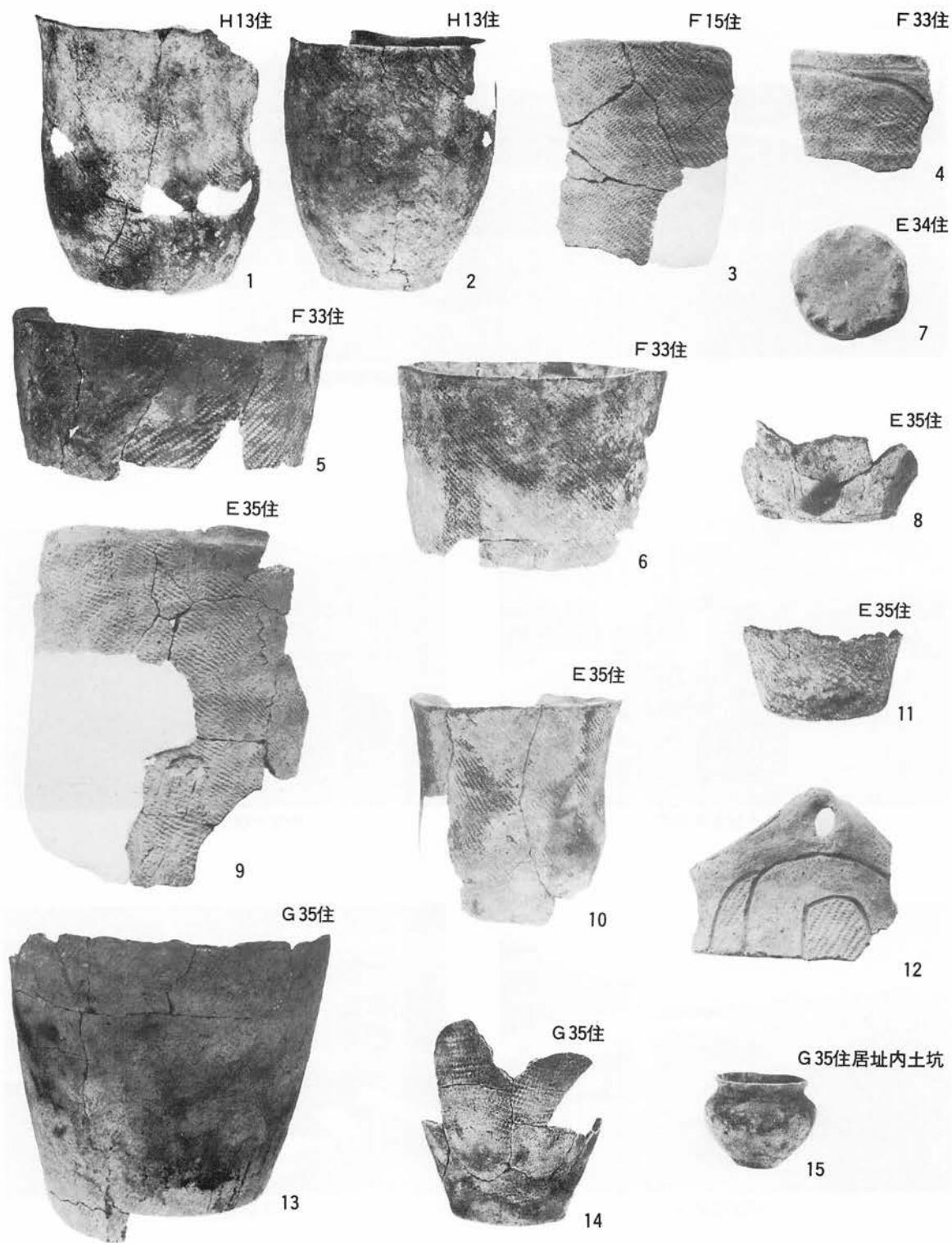


南斜面西半

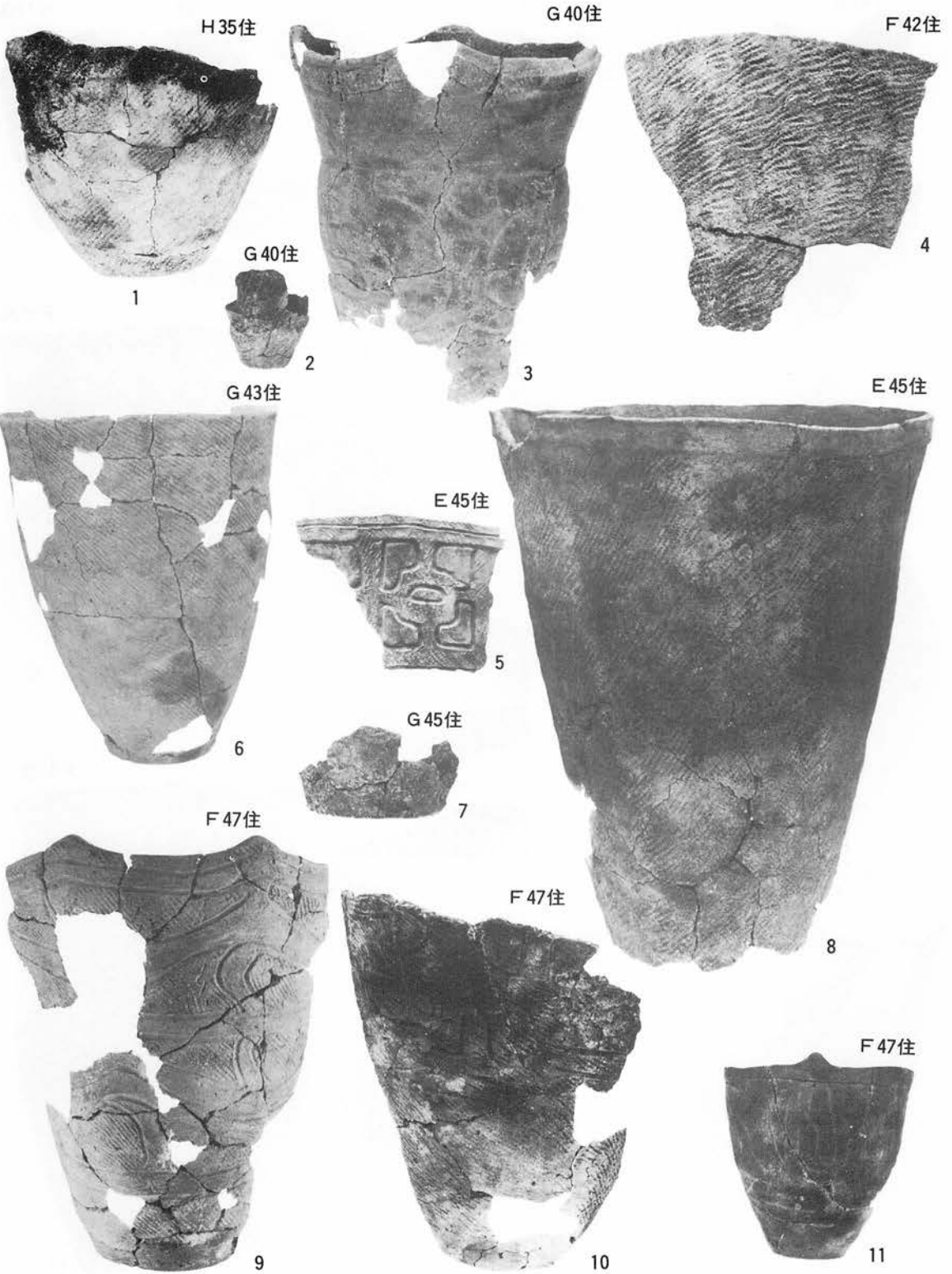


南斜面南東部

図版35 遺跡遠景・作業風景



图版36 住居址出土土器(1)



H35住

G40住

F42住

G40住

G43住

E45住

E45住

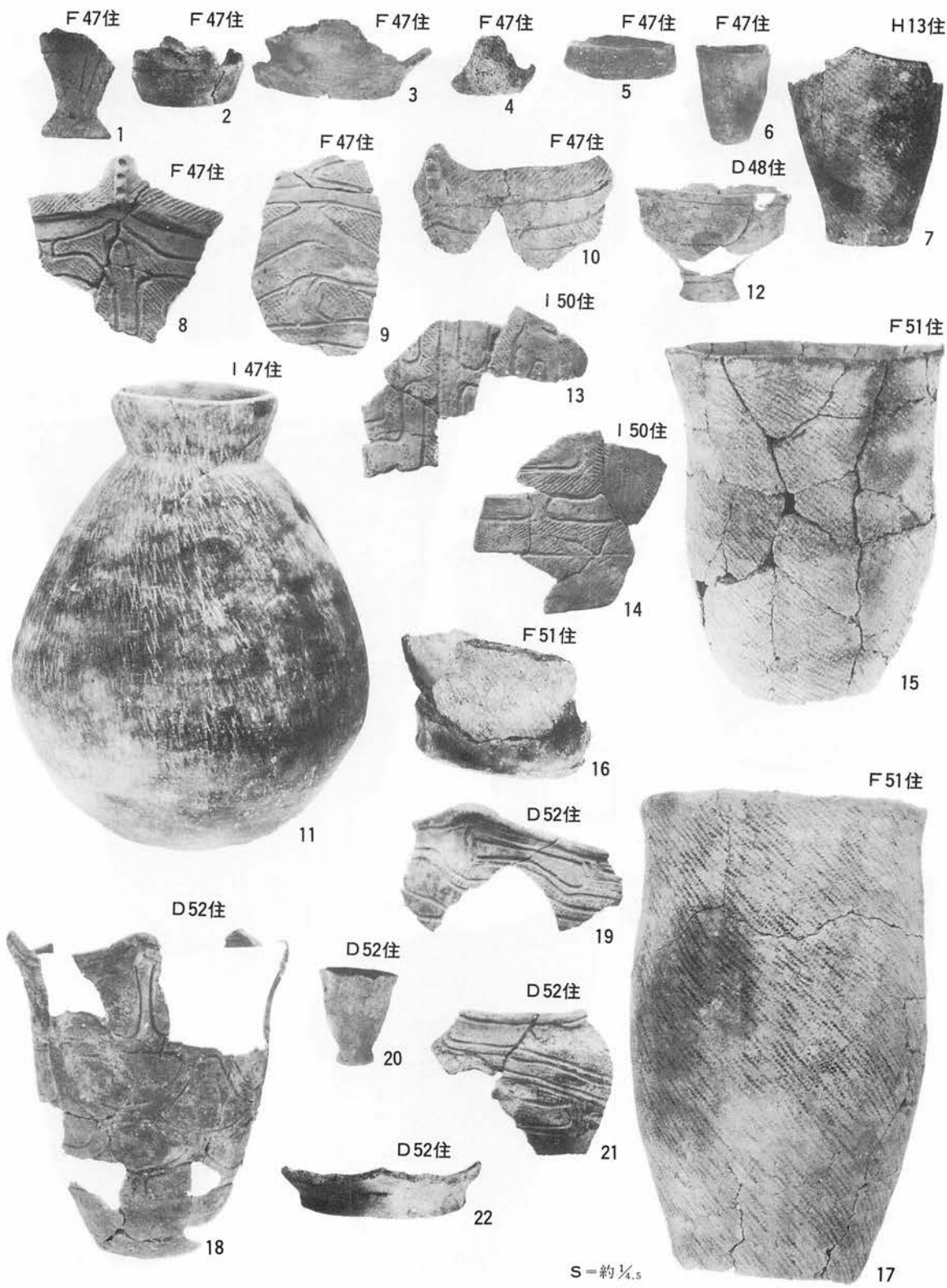
F47住

F47住

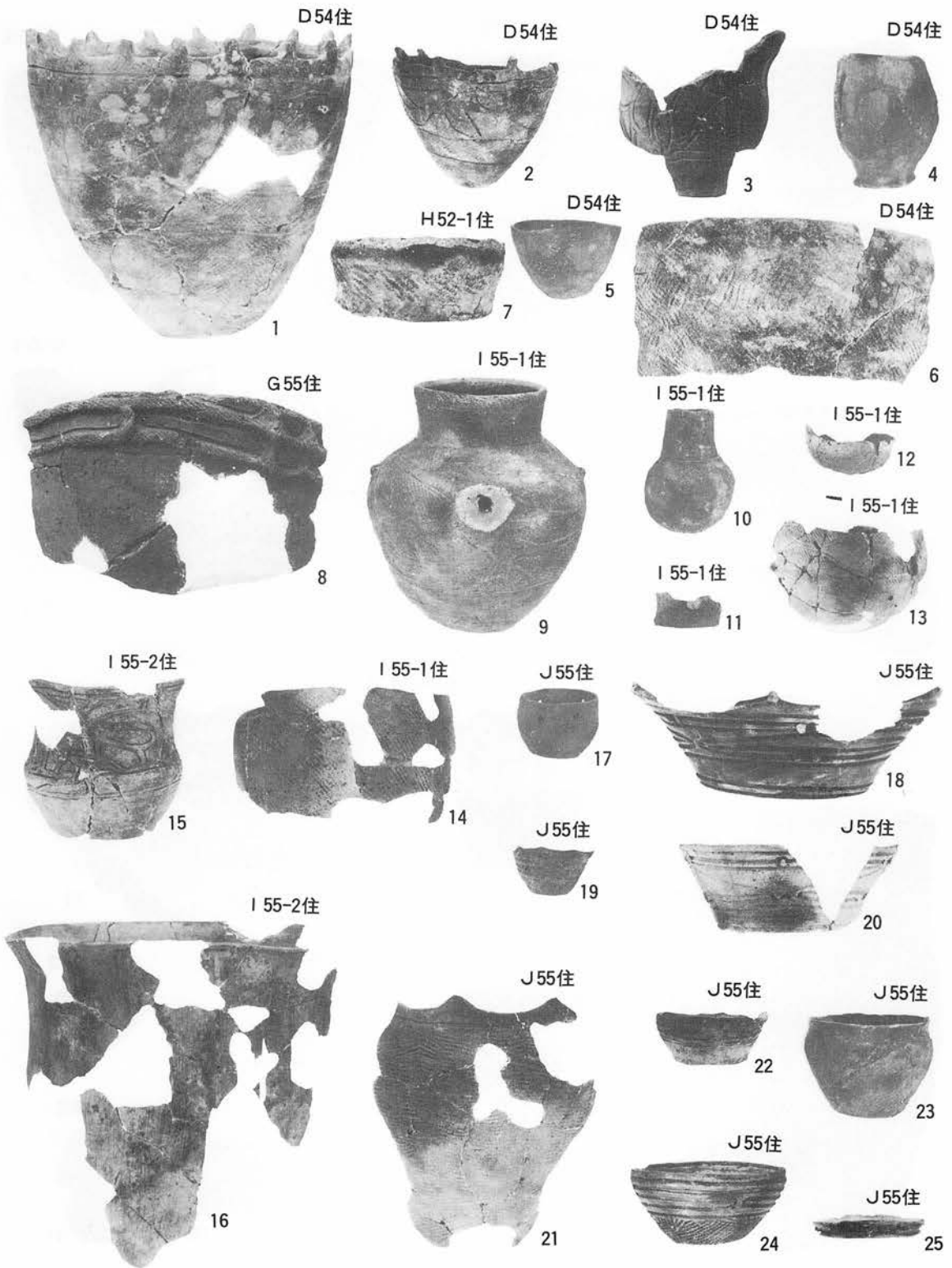
F47住

S=約 $\frac{1}{4}$.5

図版37 住居址出土土器(2)

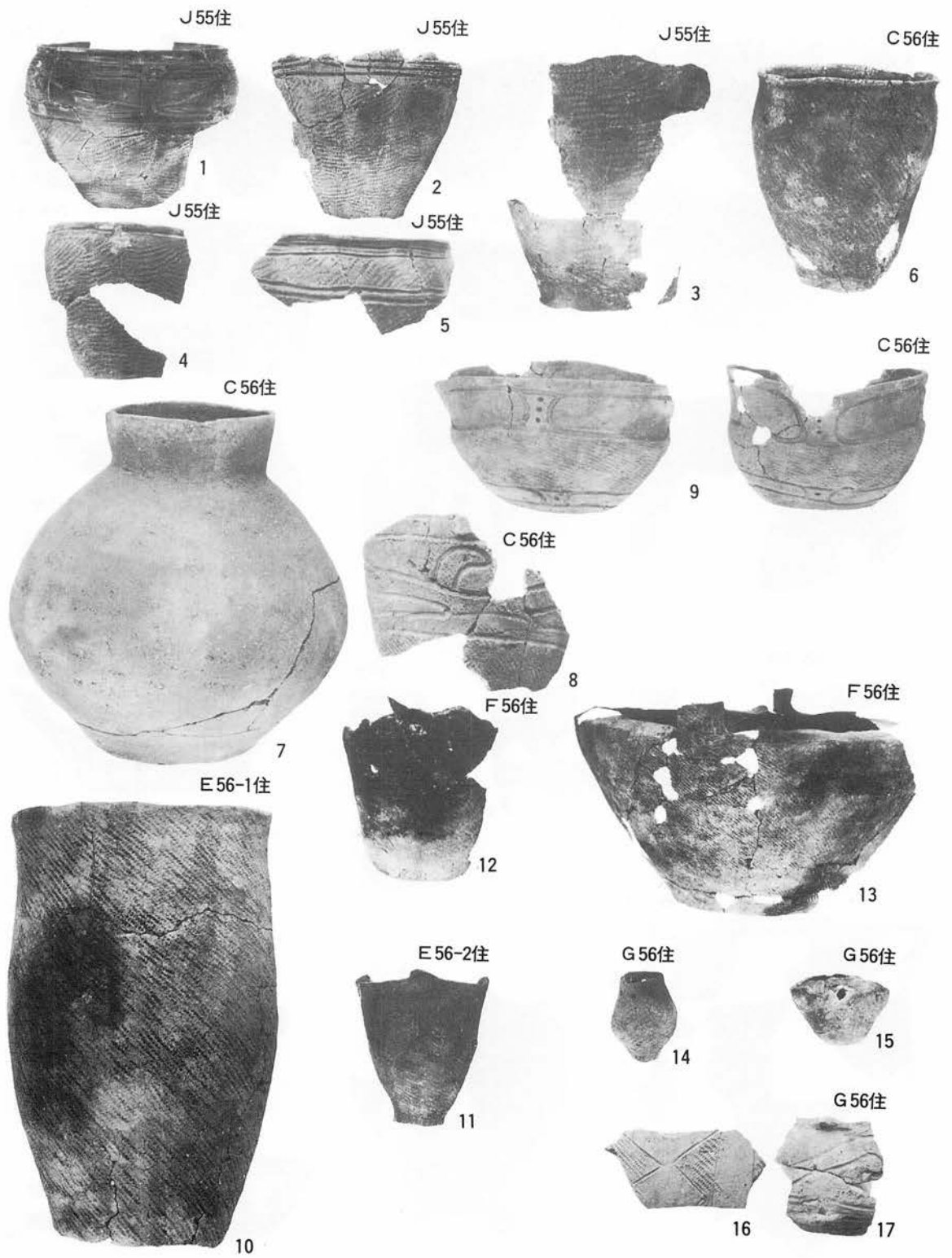


図版38 住居址出土土器(3)



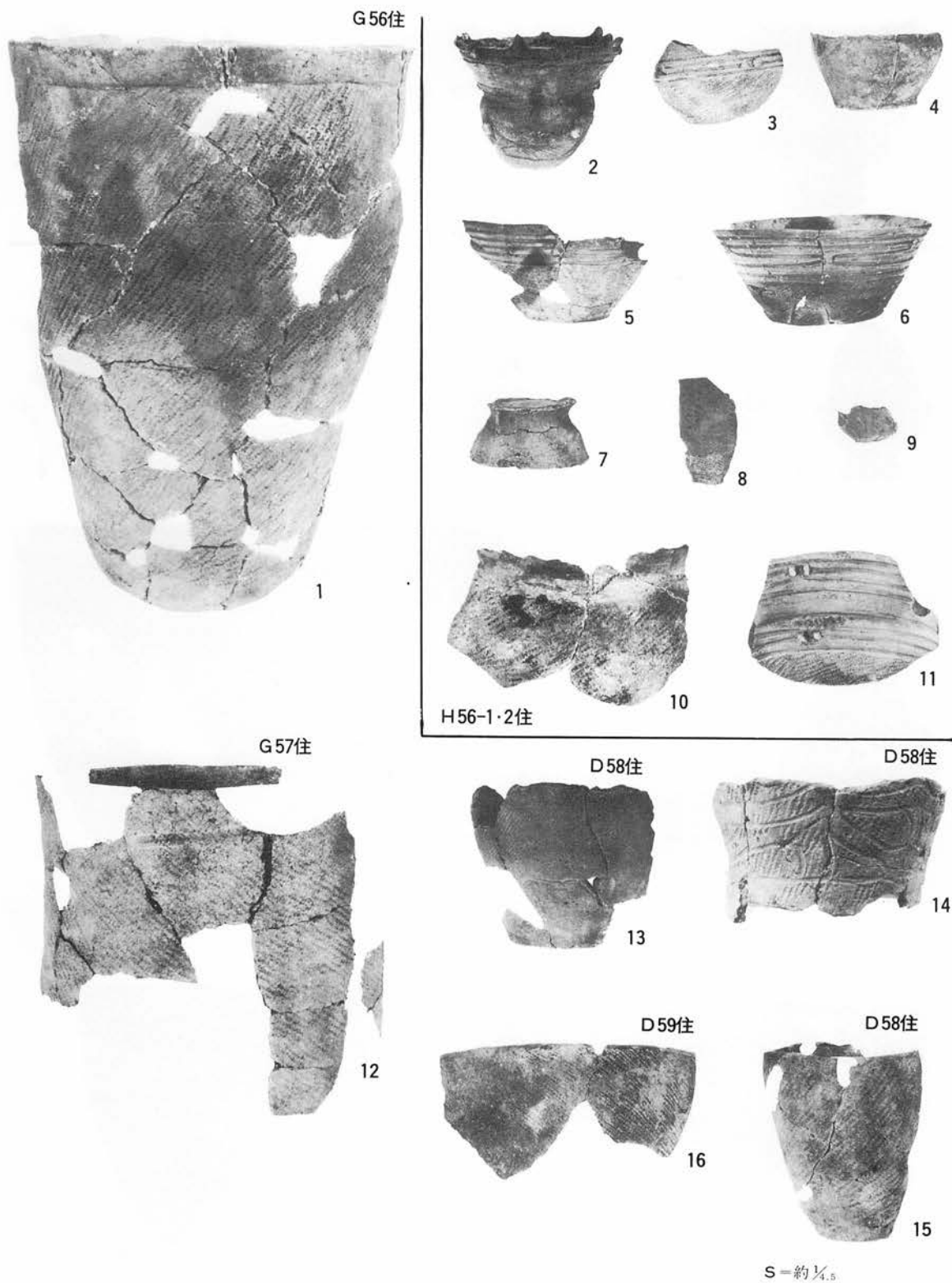
S=約1/5

図版39 住居址出土土器(4)

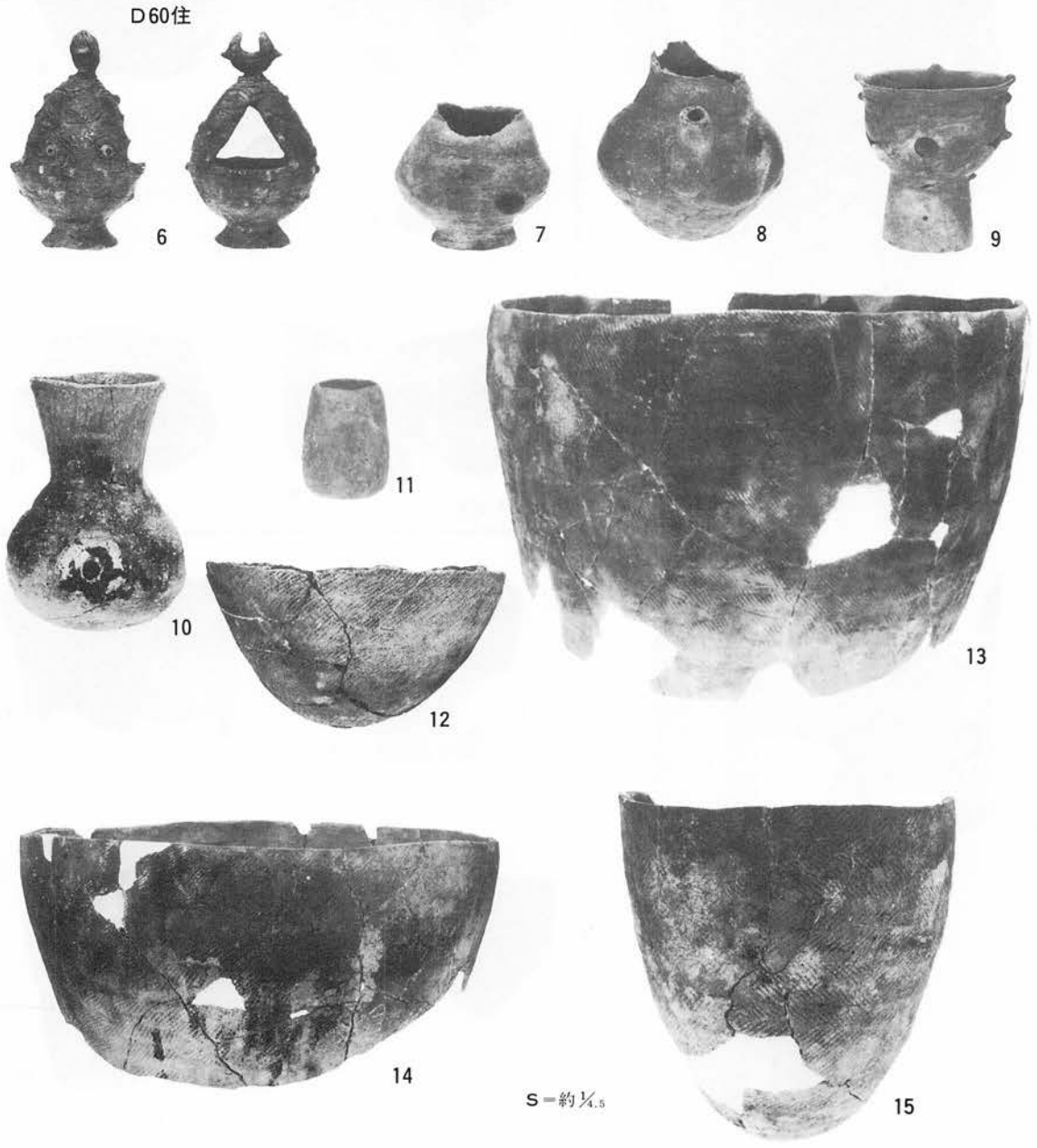
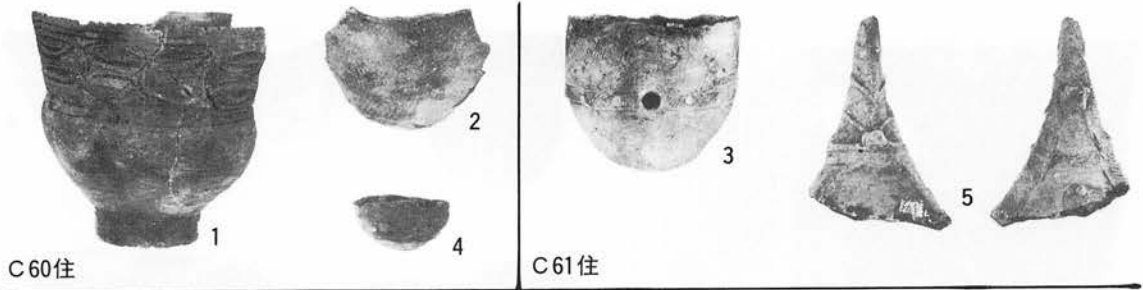


S = 約 1/5

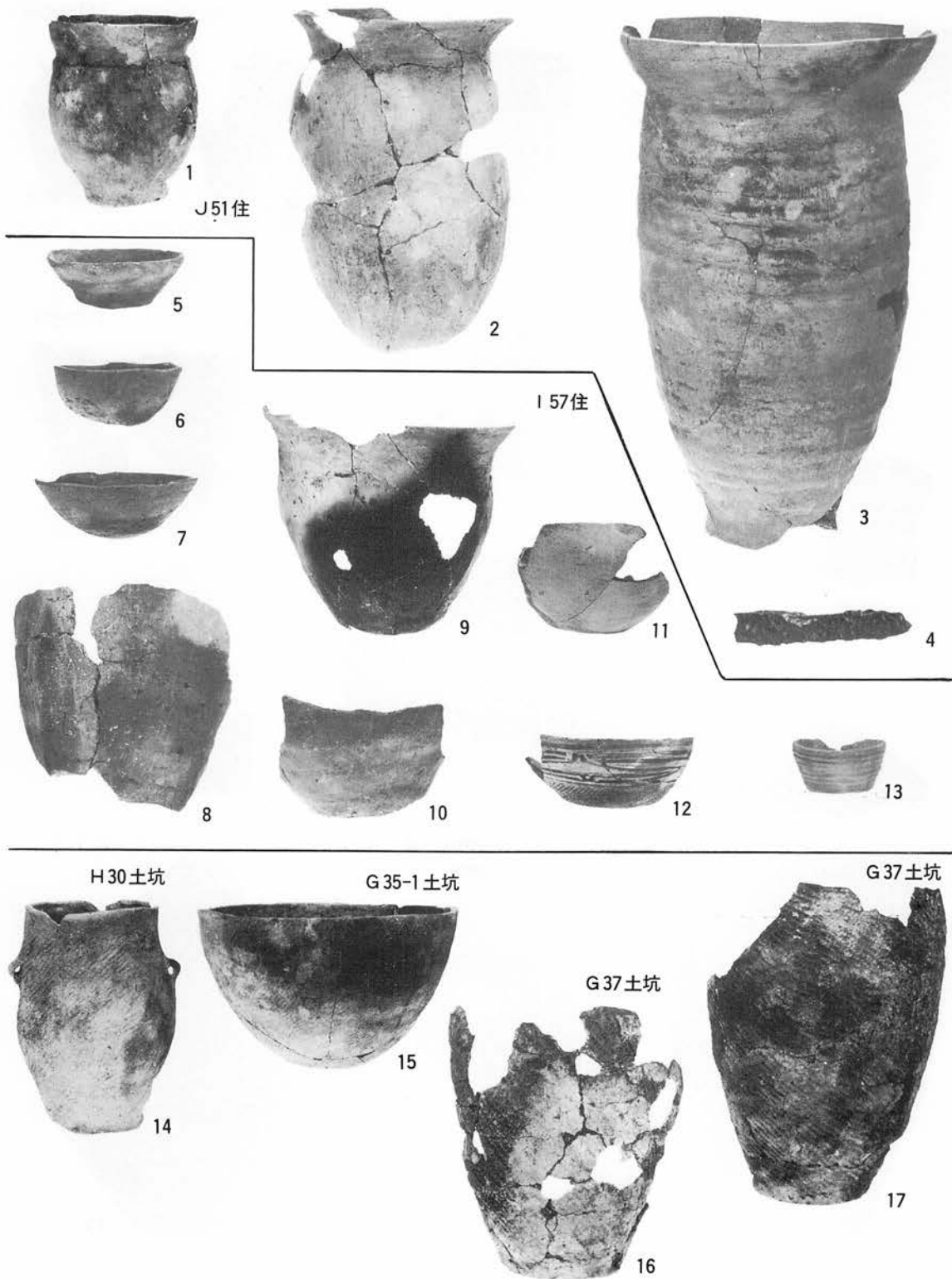
図版40 住居址出土土器(5)



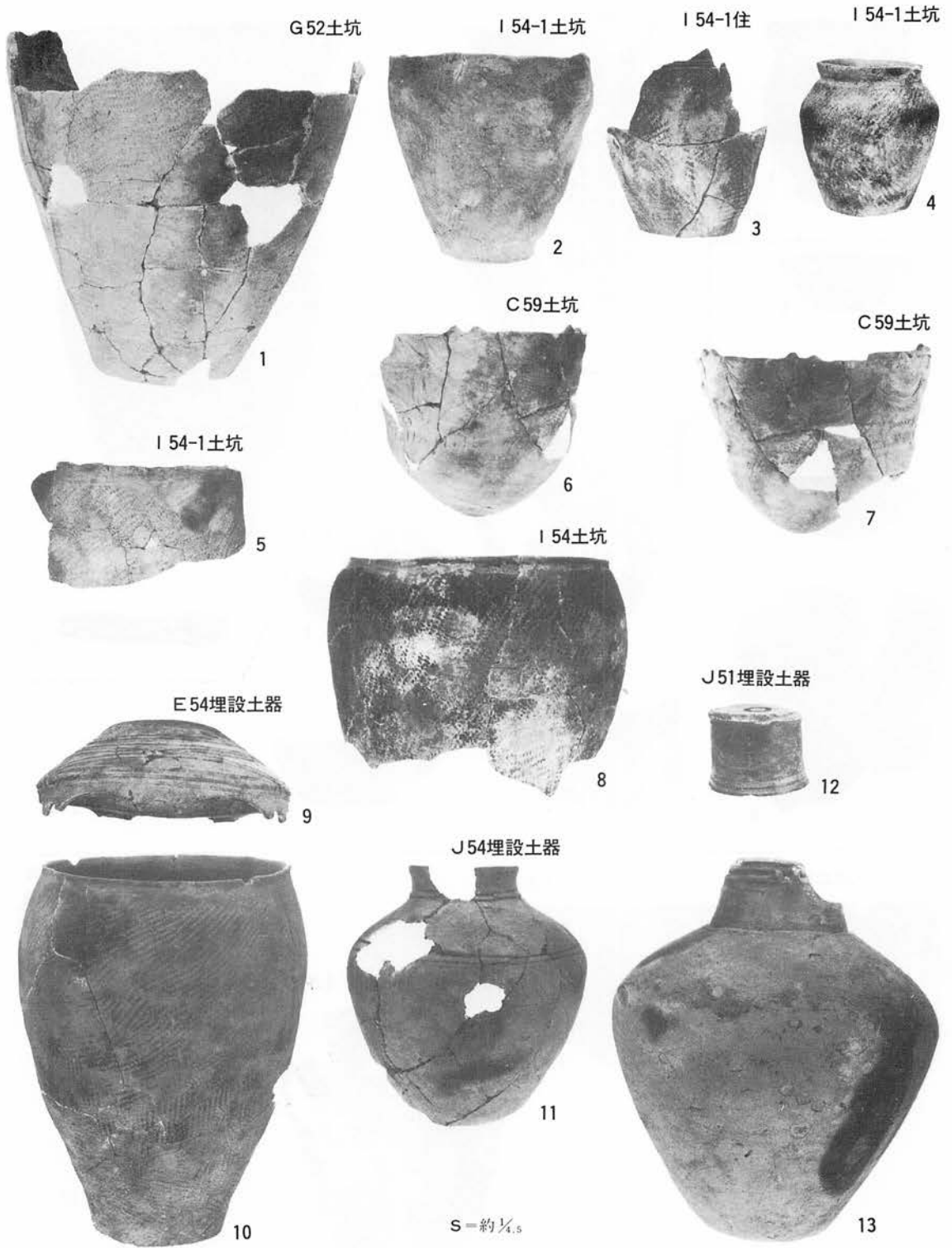
図版41 住居址出土土器(6)



图版42 住居址出土土器(7)



図版43 住居址出土土器(8)・土坑出土土器(1)



図版44 土坑出土土器(2)・埋設土器

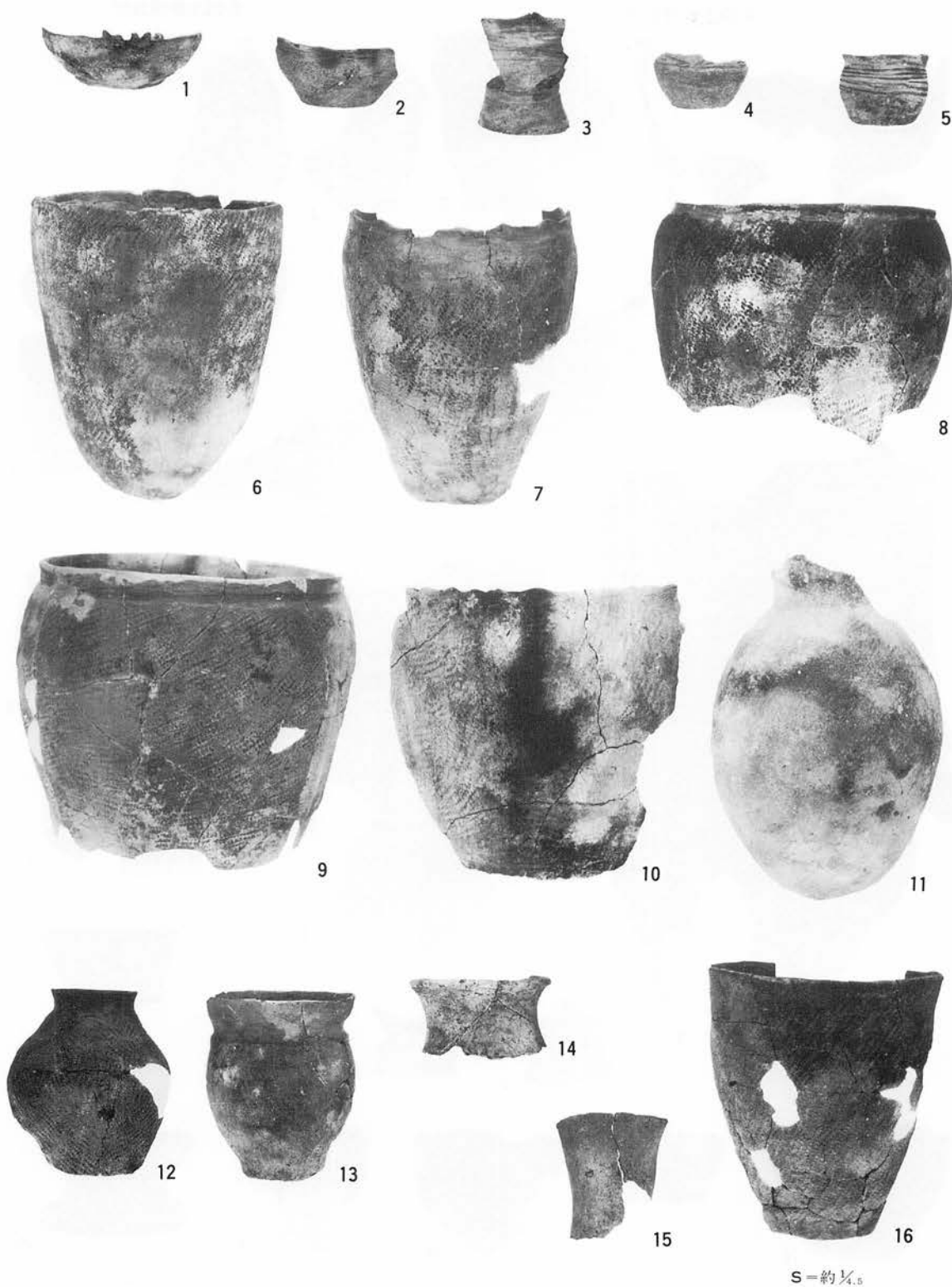
E 58土器埋設炉

E 58土器埋設炉

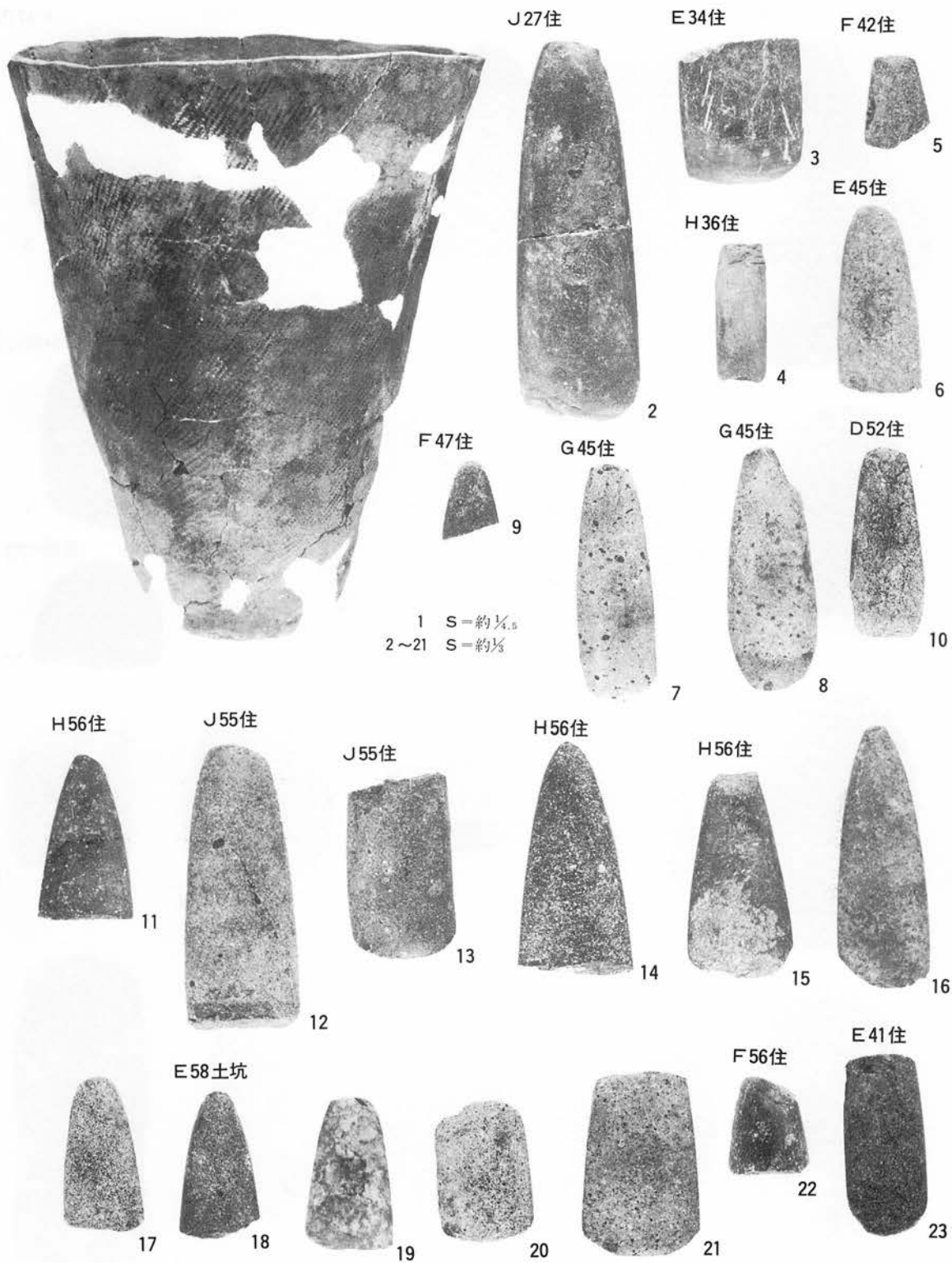


S=約 $\frac{1}{4}$.5

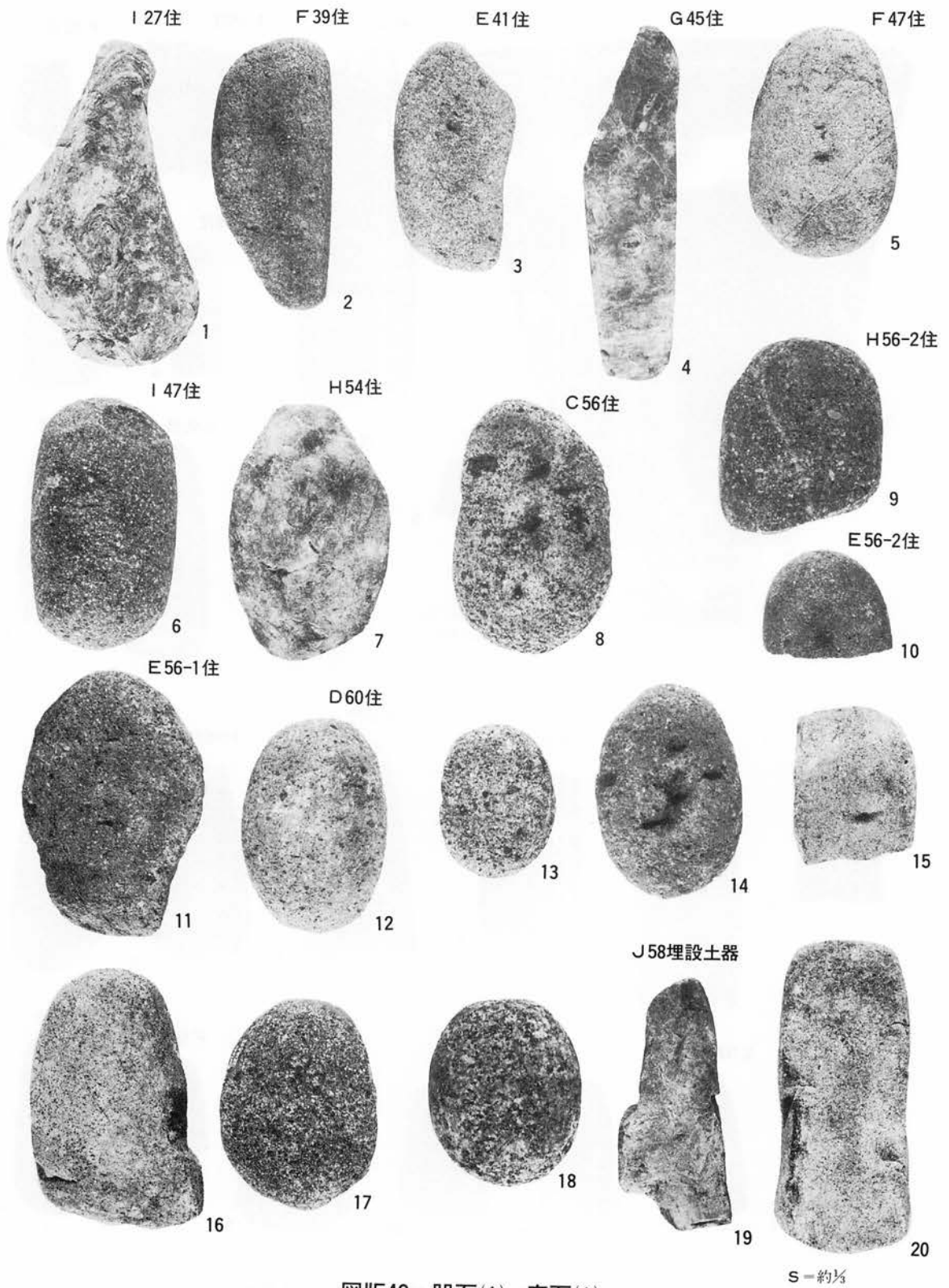
図版45 E 58埋設炉出土土器・遺構外出土土器(1)



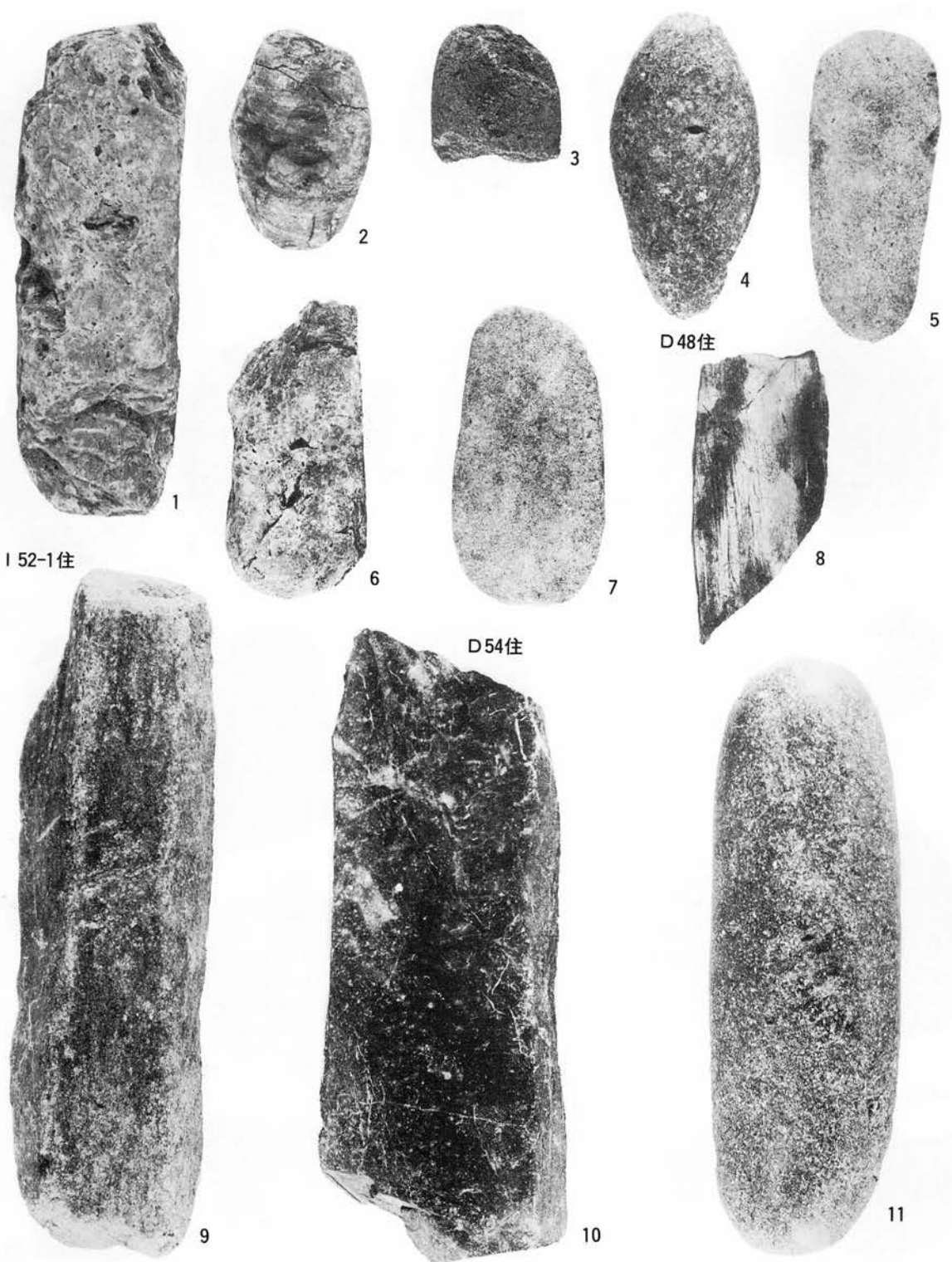
図版46 遺構外出土土器(2)



図版47 遺構外出土土器(3)・石斧

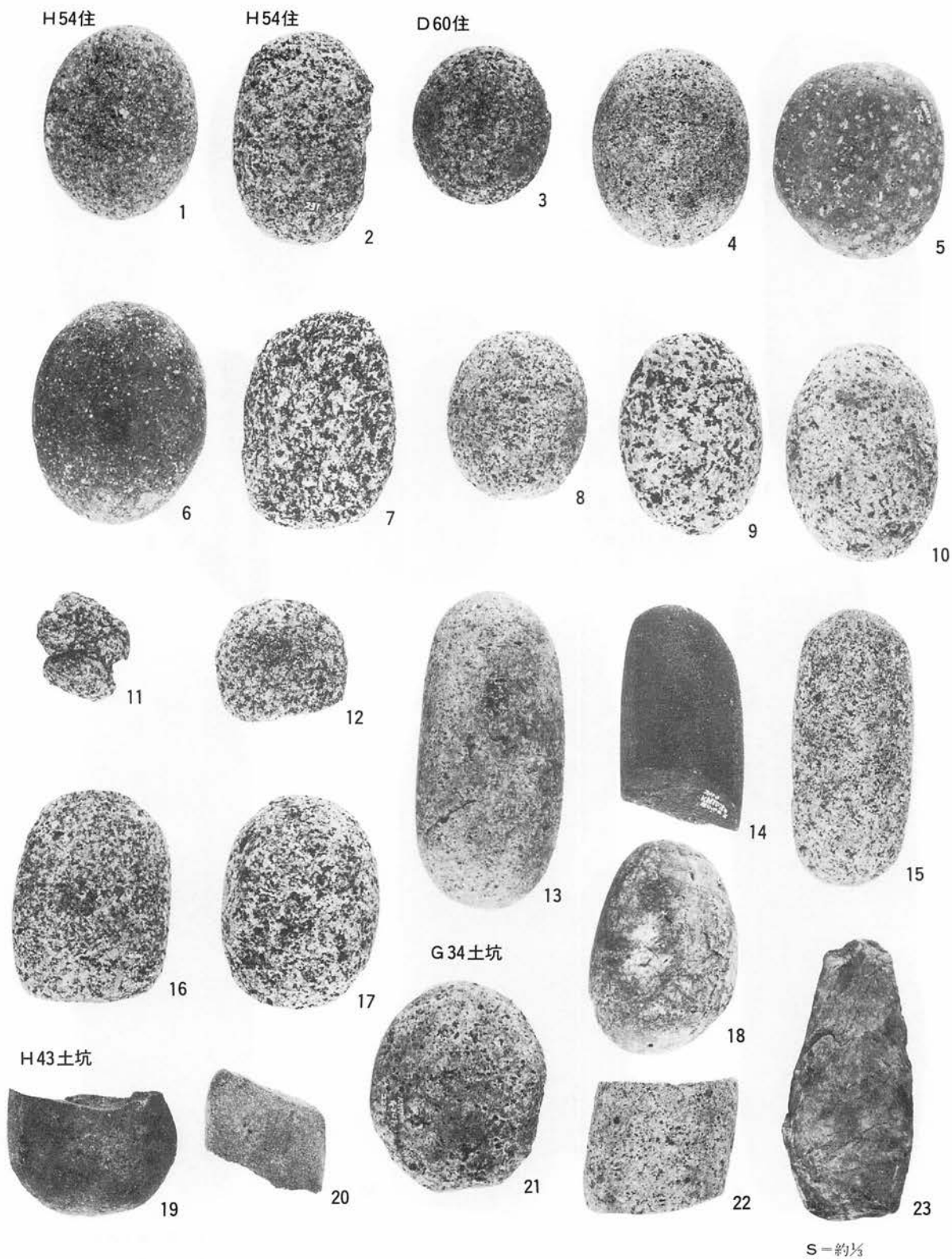


図版48 凹石(1)・磨石(1)

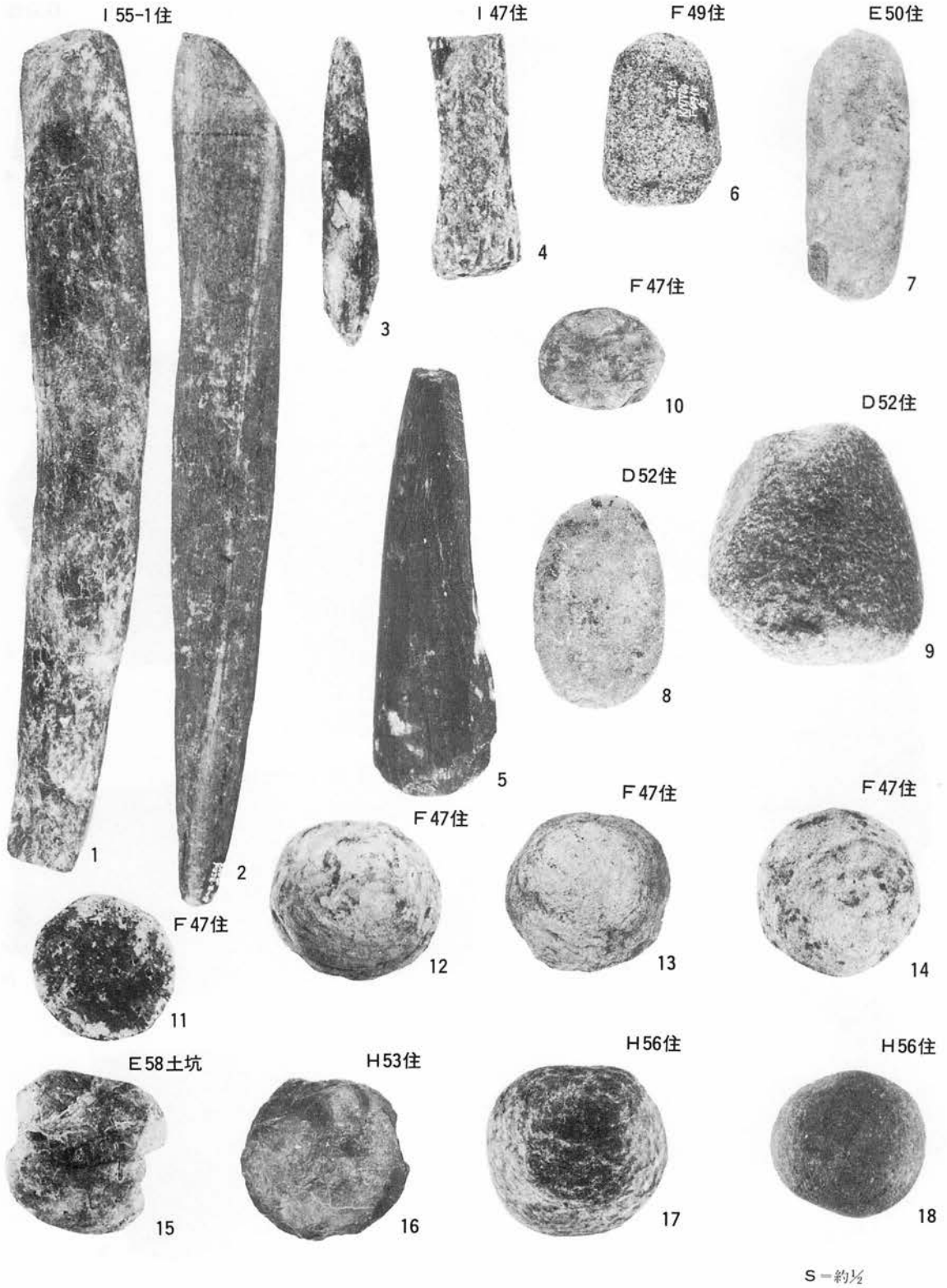


図版49 凹石(2)・砥石・台石

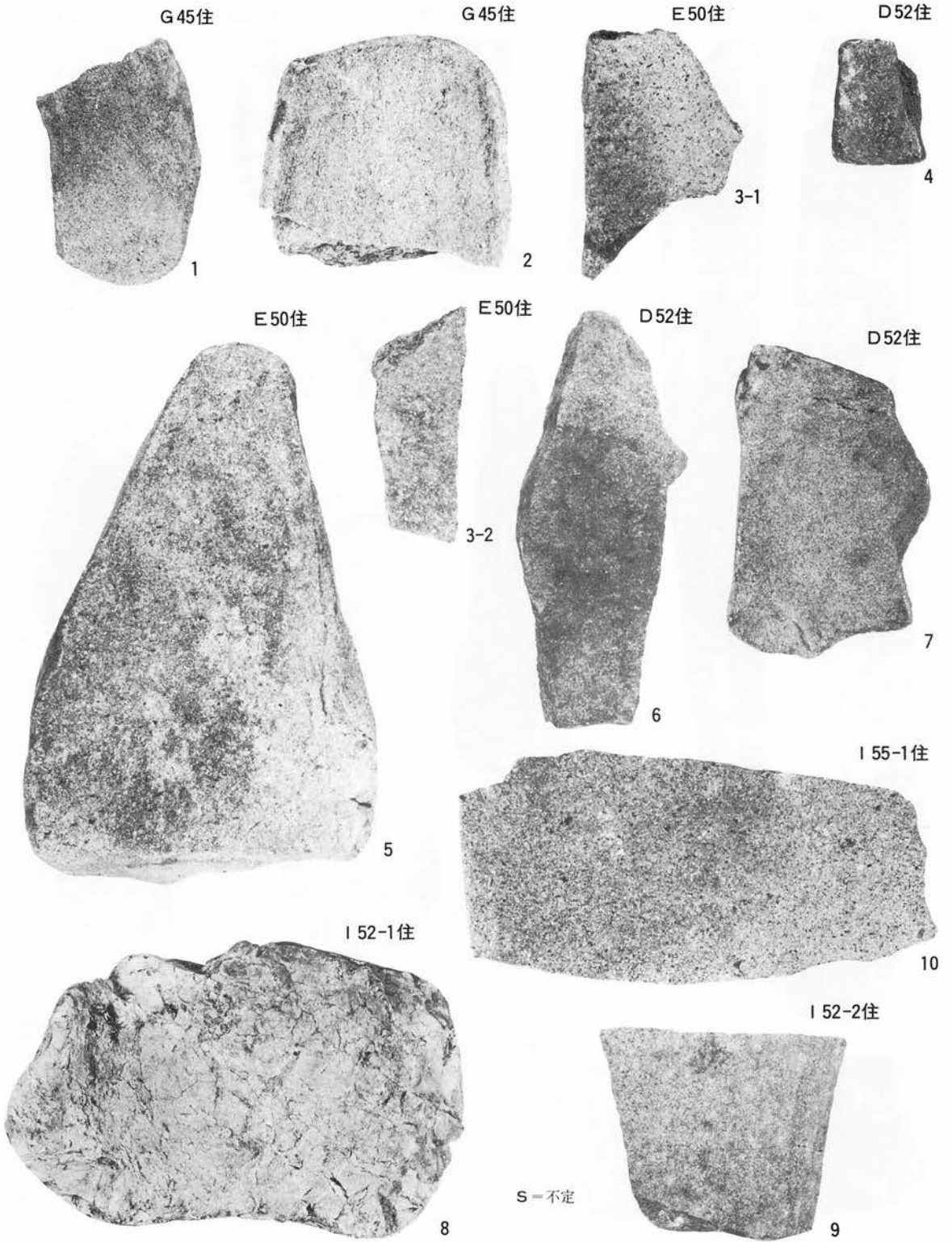
1~8 S=約号
 9~11 S=不定



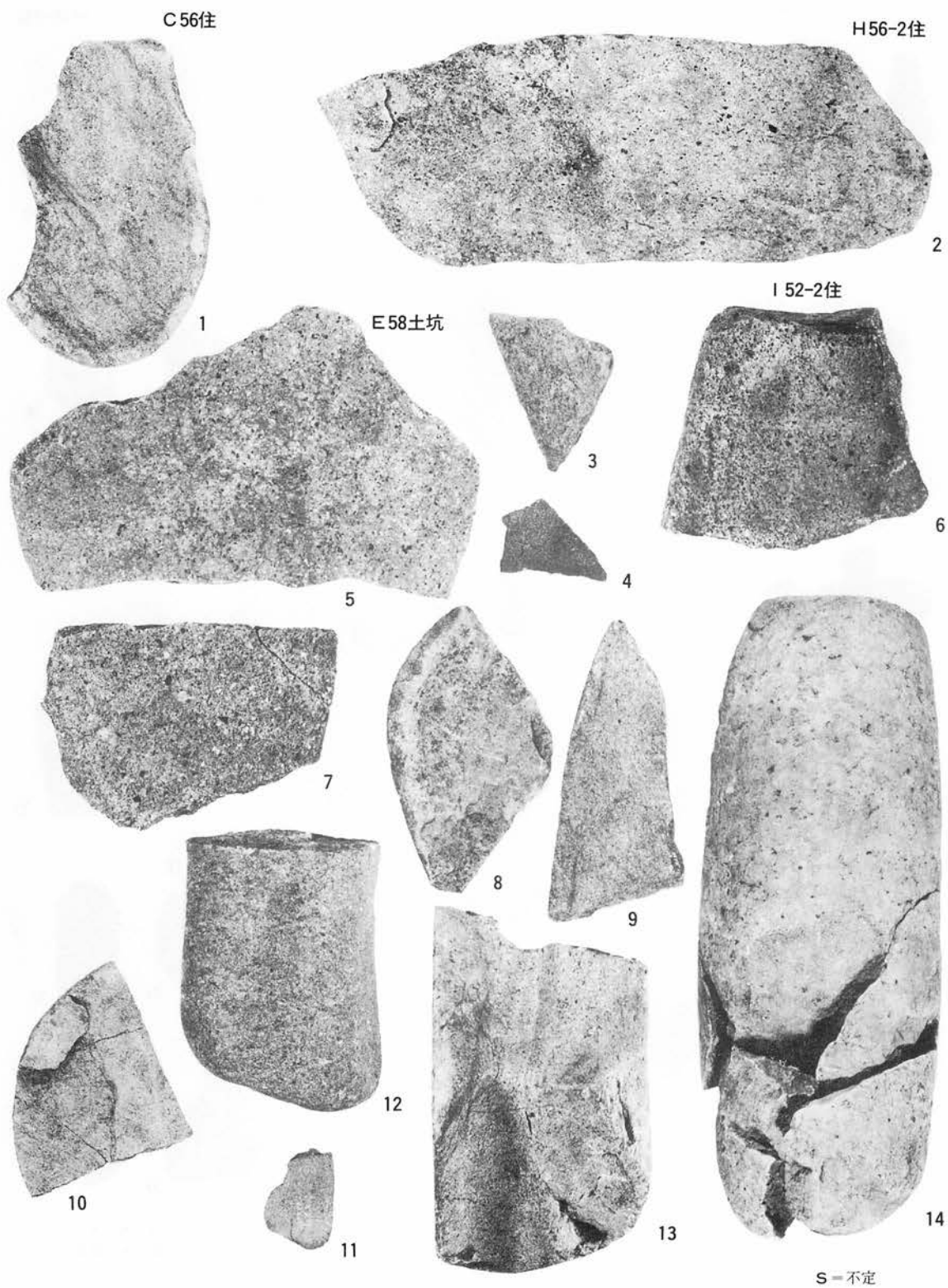
図版50 磨石(2)・敲き石(1)



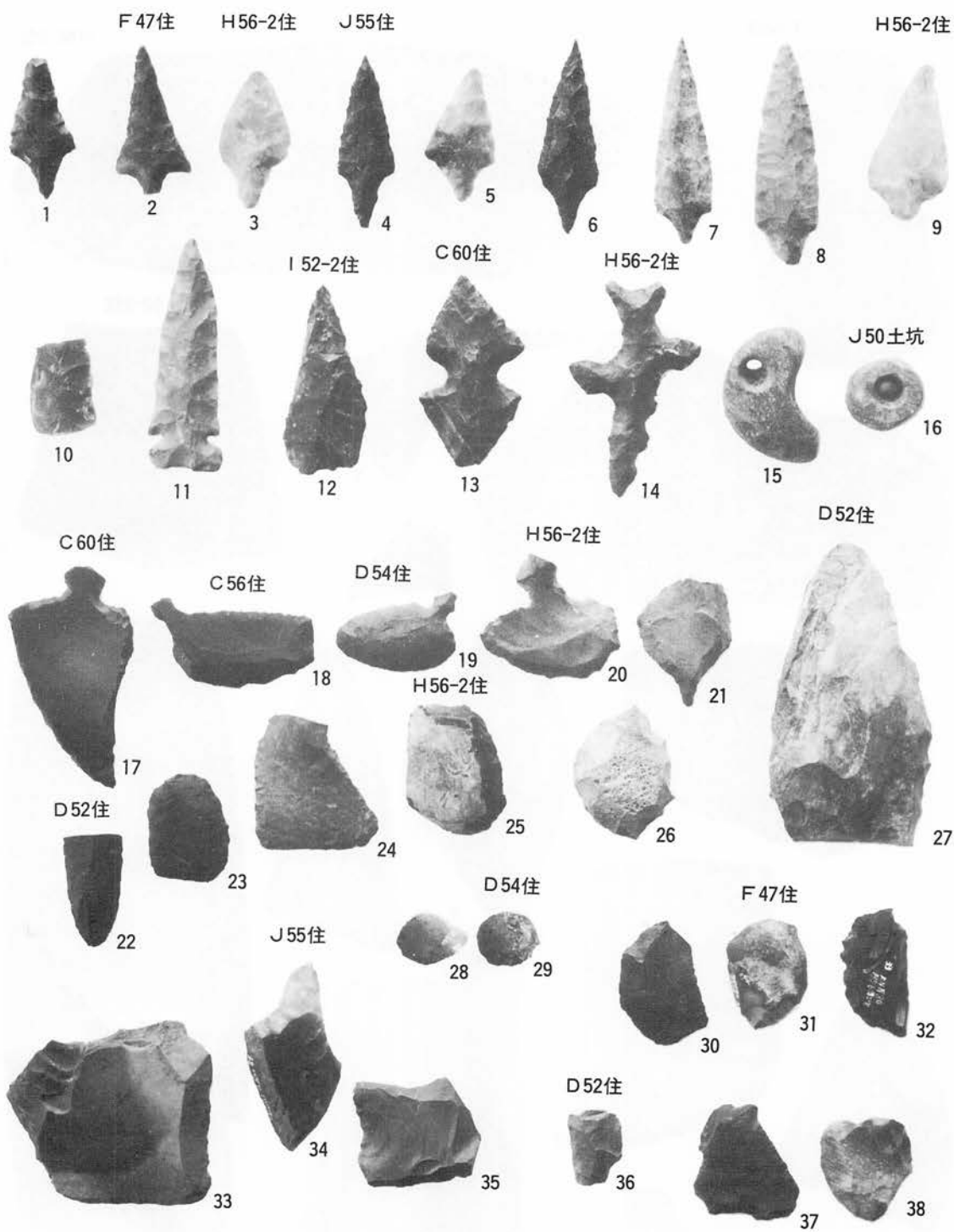
図版51 石刀・敲き石(2)・石製円盤・その他



图版52 石皿(1)

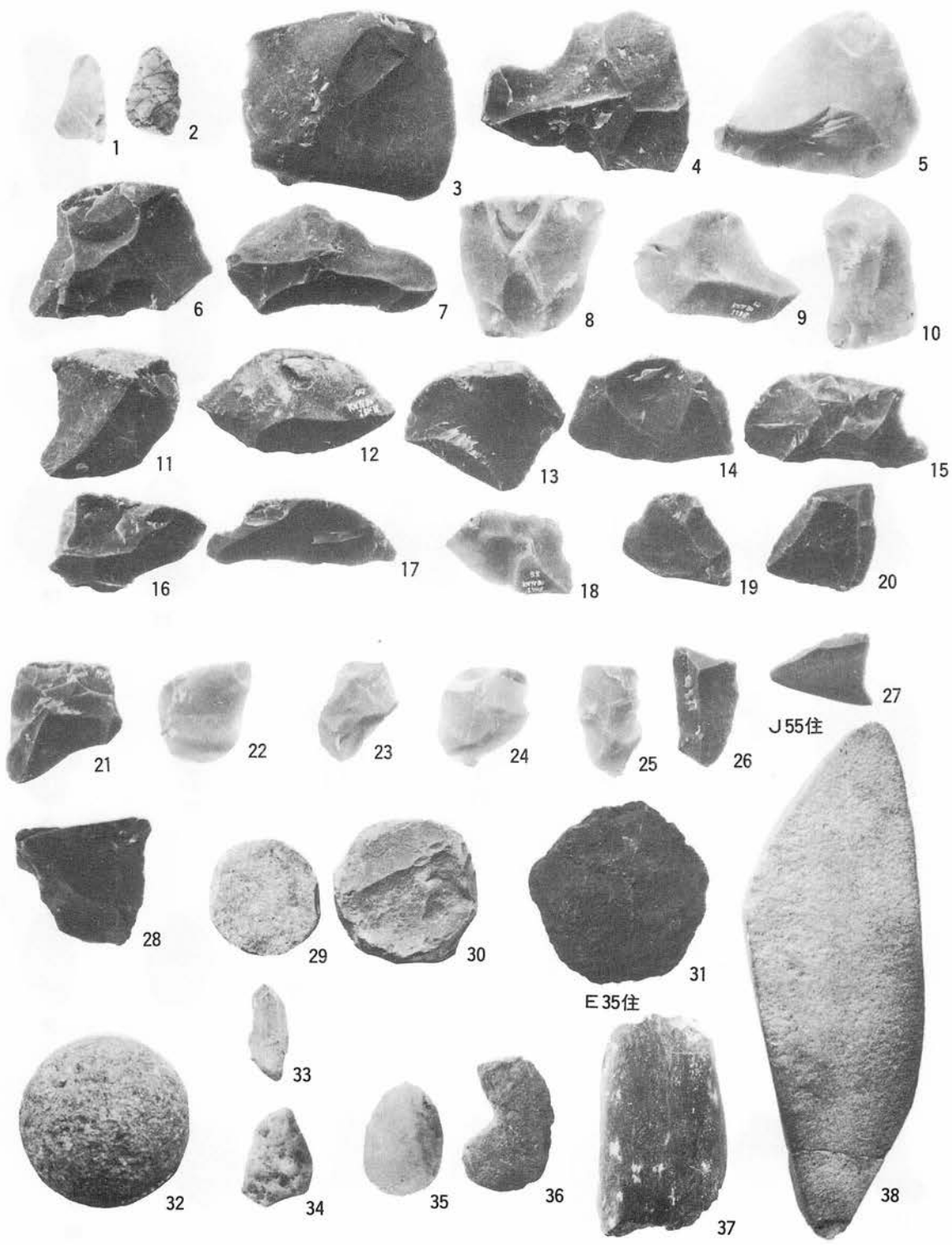


图版53 石皿(2)·砥石·石棒



1~16 S=原寸
17~38 S=約½

図版54 石器(1)

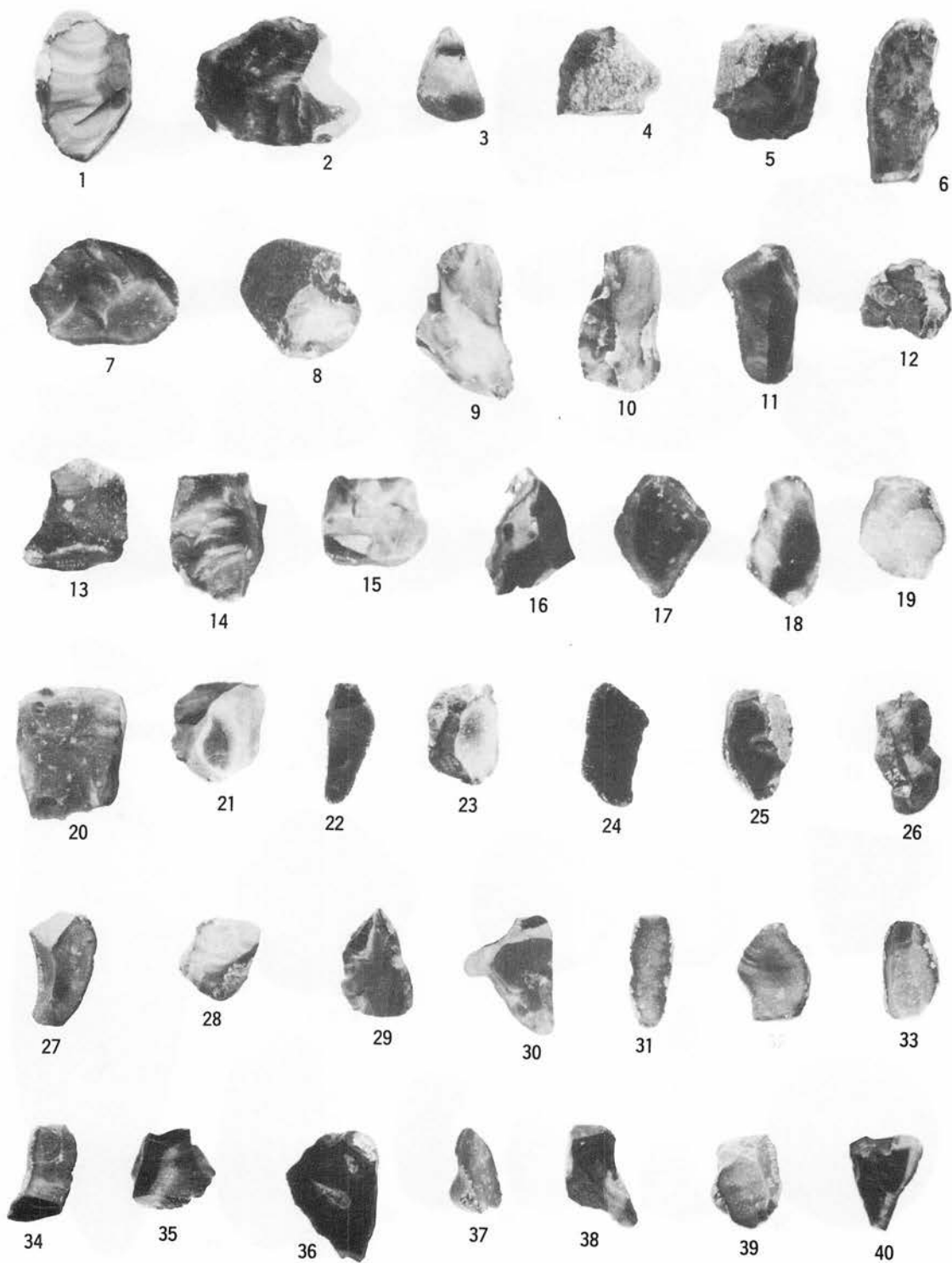


J55住

E 35住

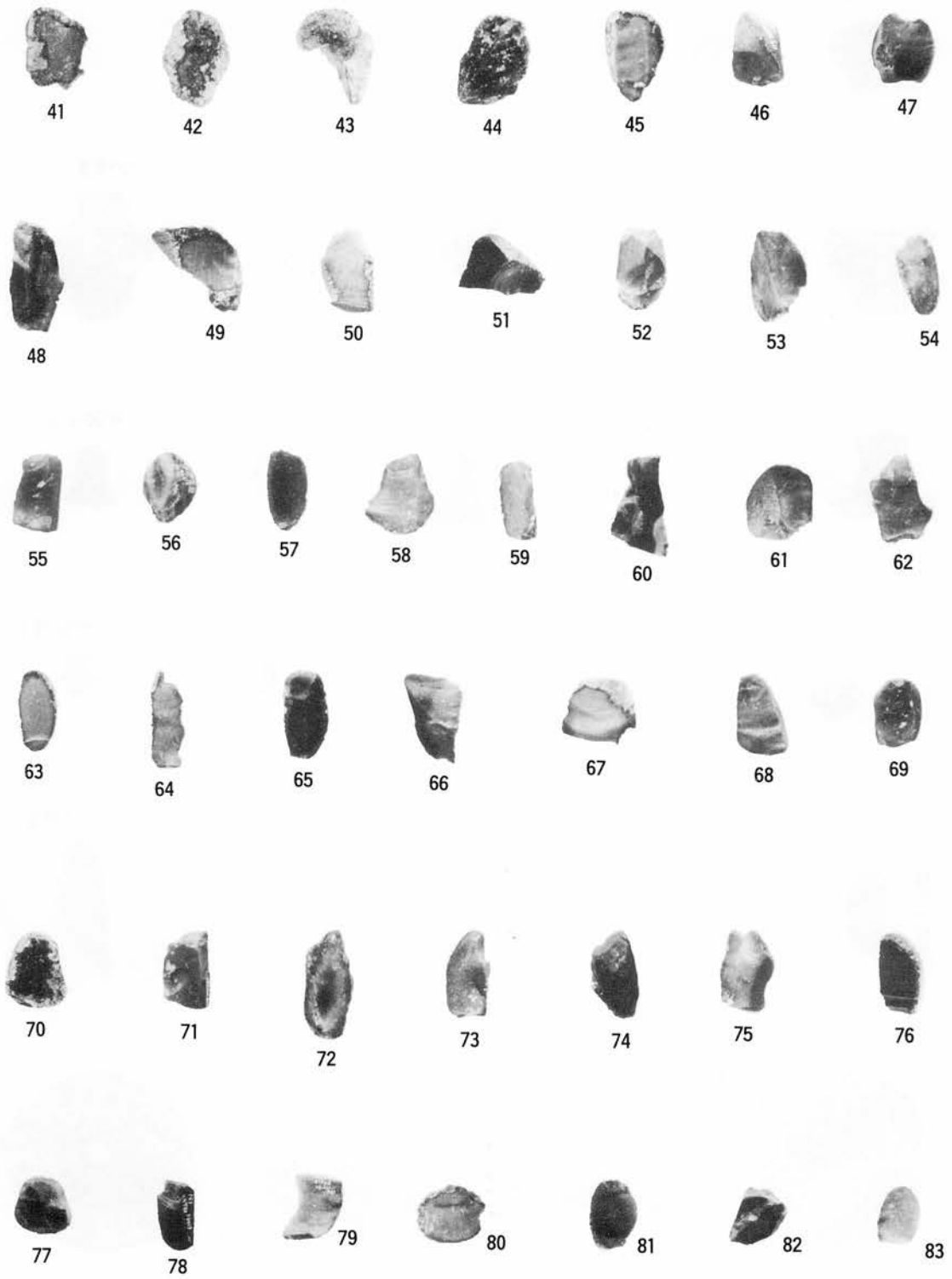
S = 約 $\frac{1}{2}$

図版55 石器(2)



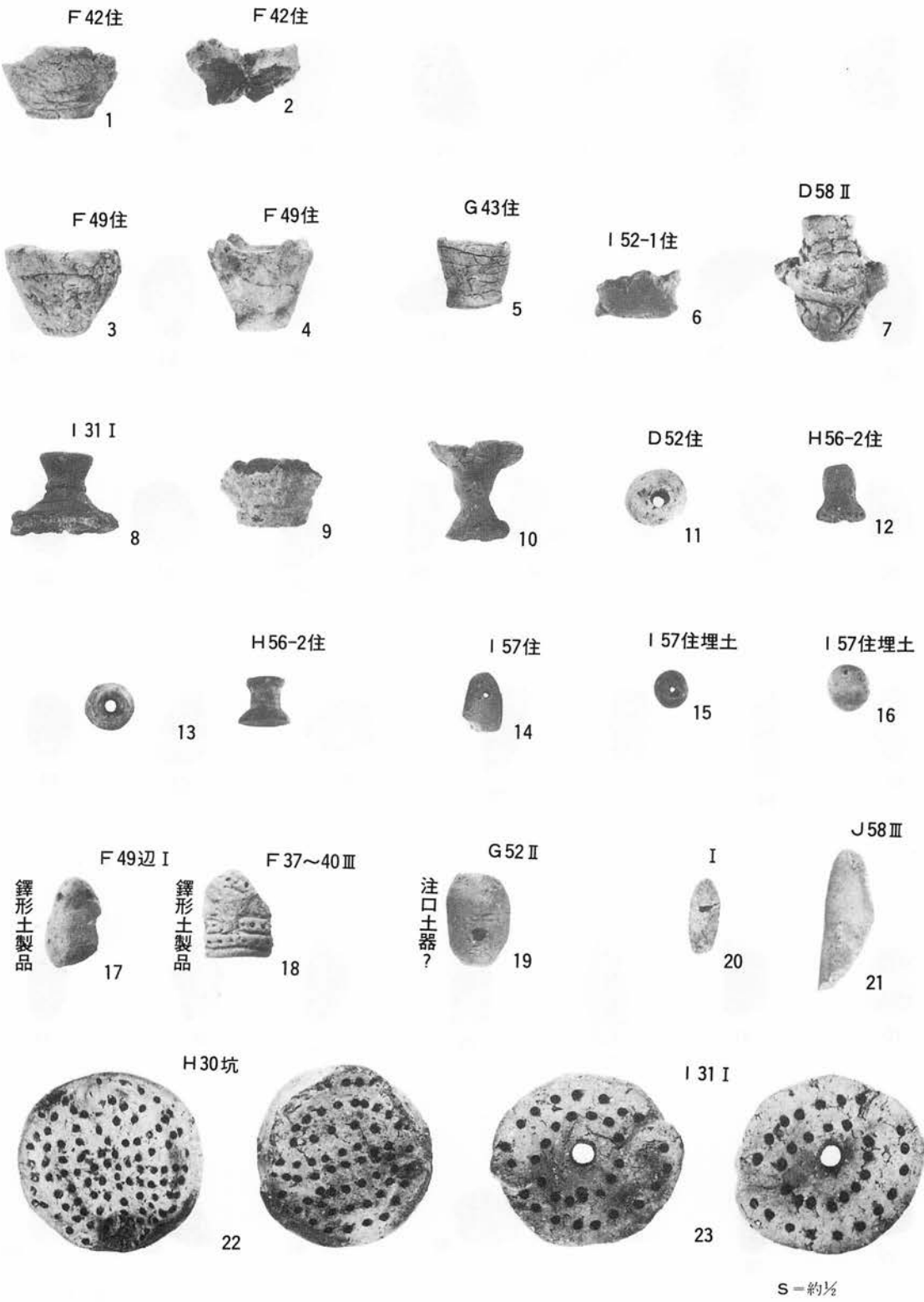
S—原寸

图版56 F 49住居址貯藏剥片石器(1)

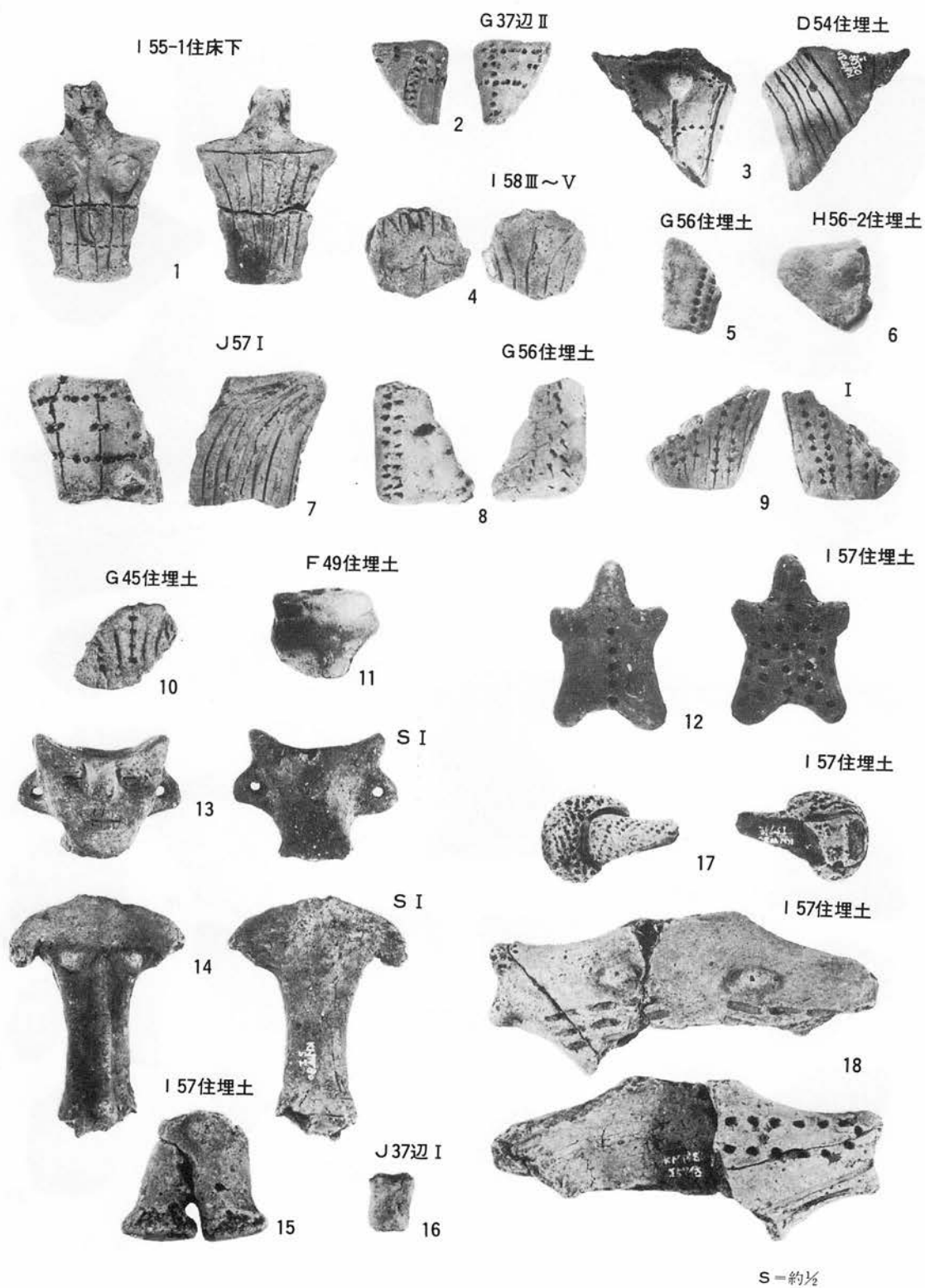


S=原寸

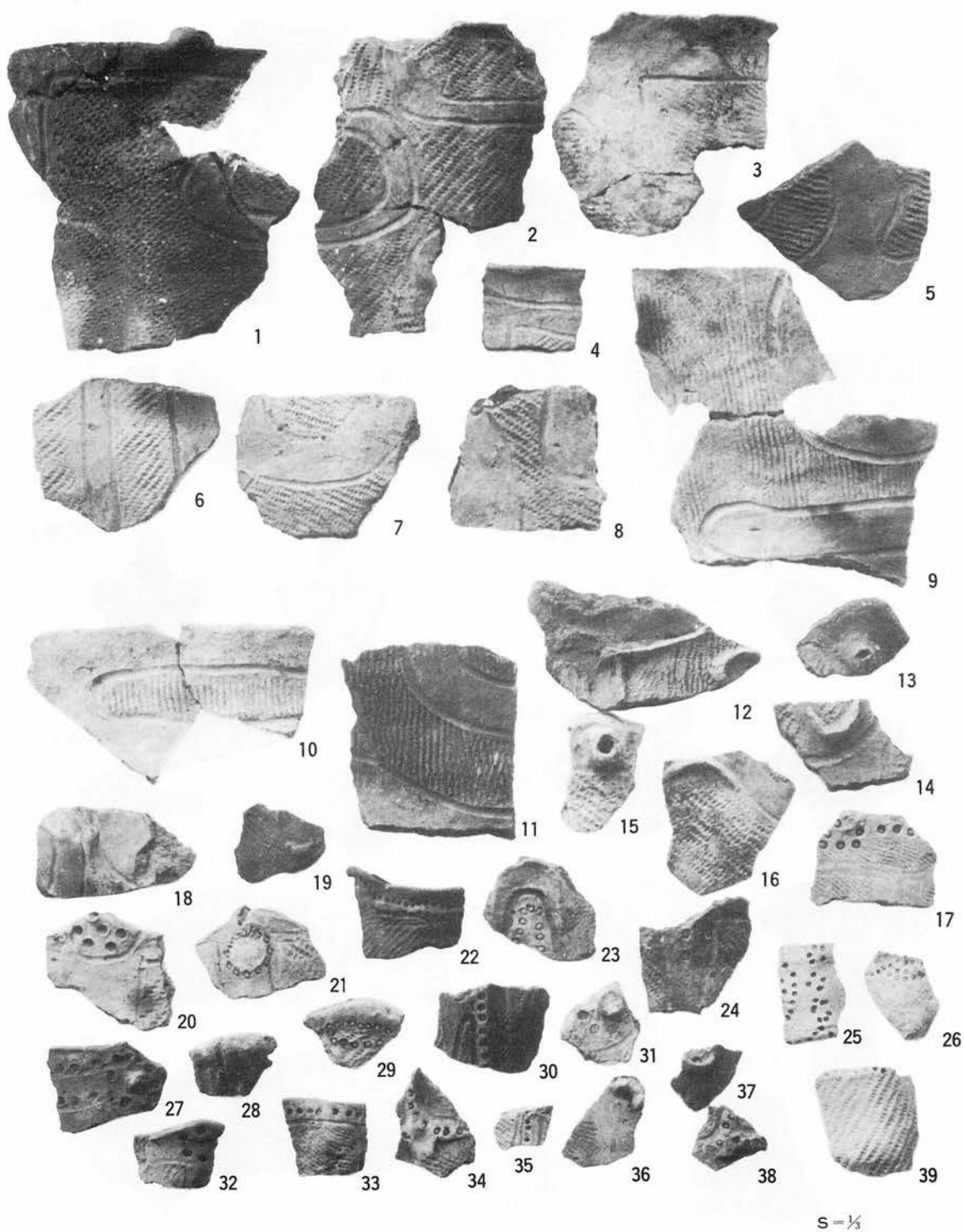
図版57 F49住居址貯蔵剥片石器(2)



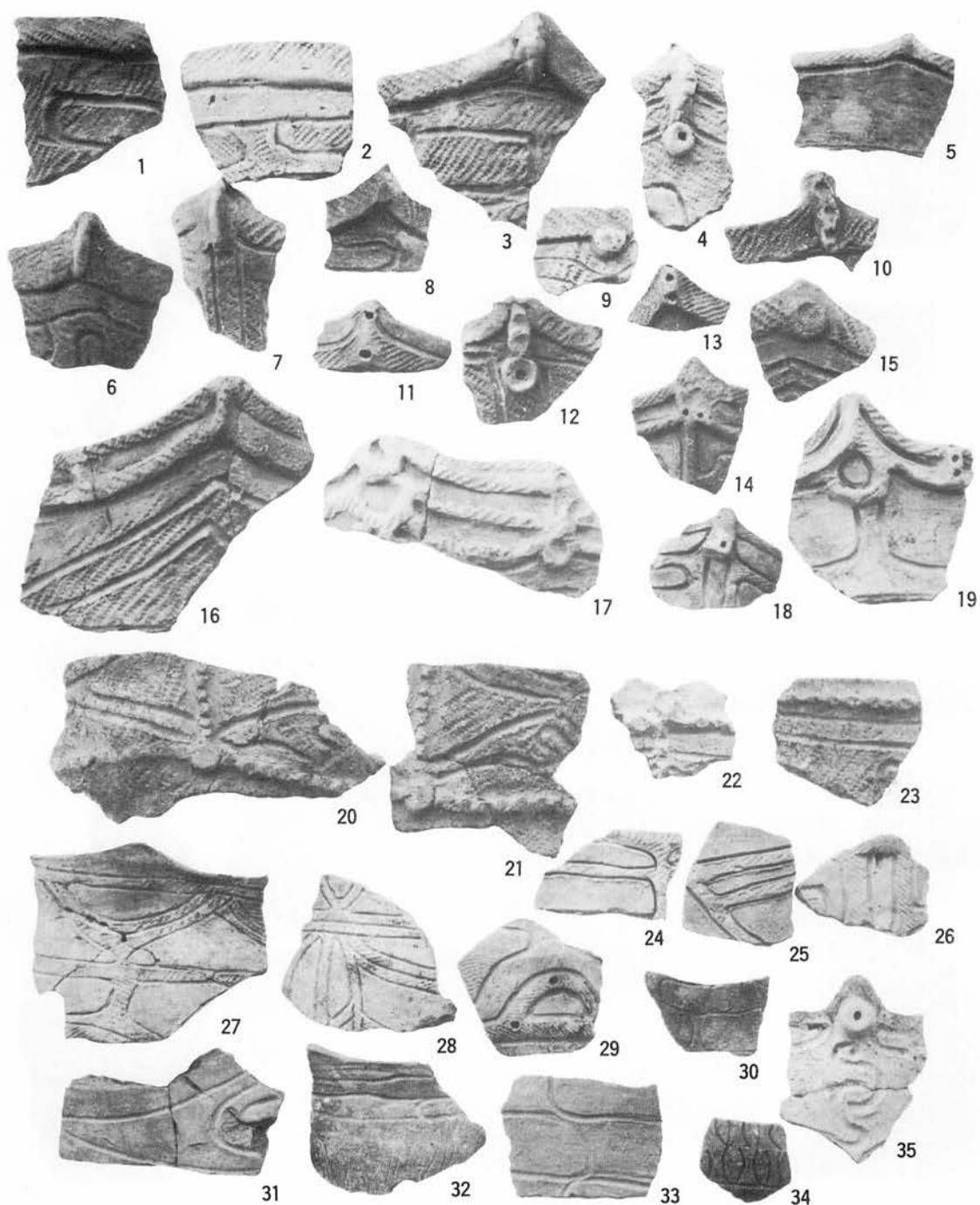
図版58 ミニチュア土器・土製品



図版59 土偶

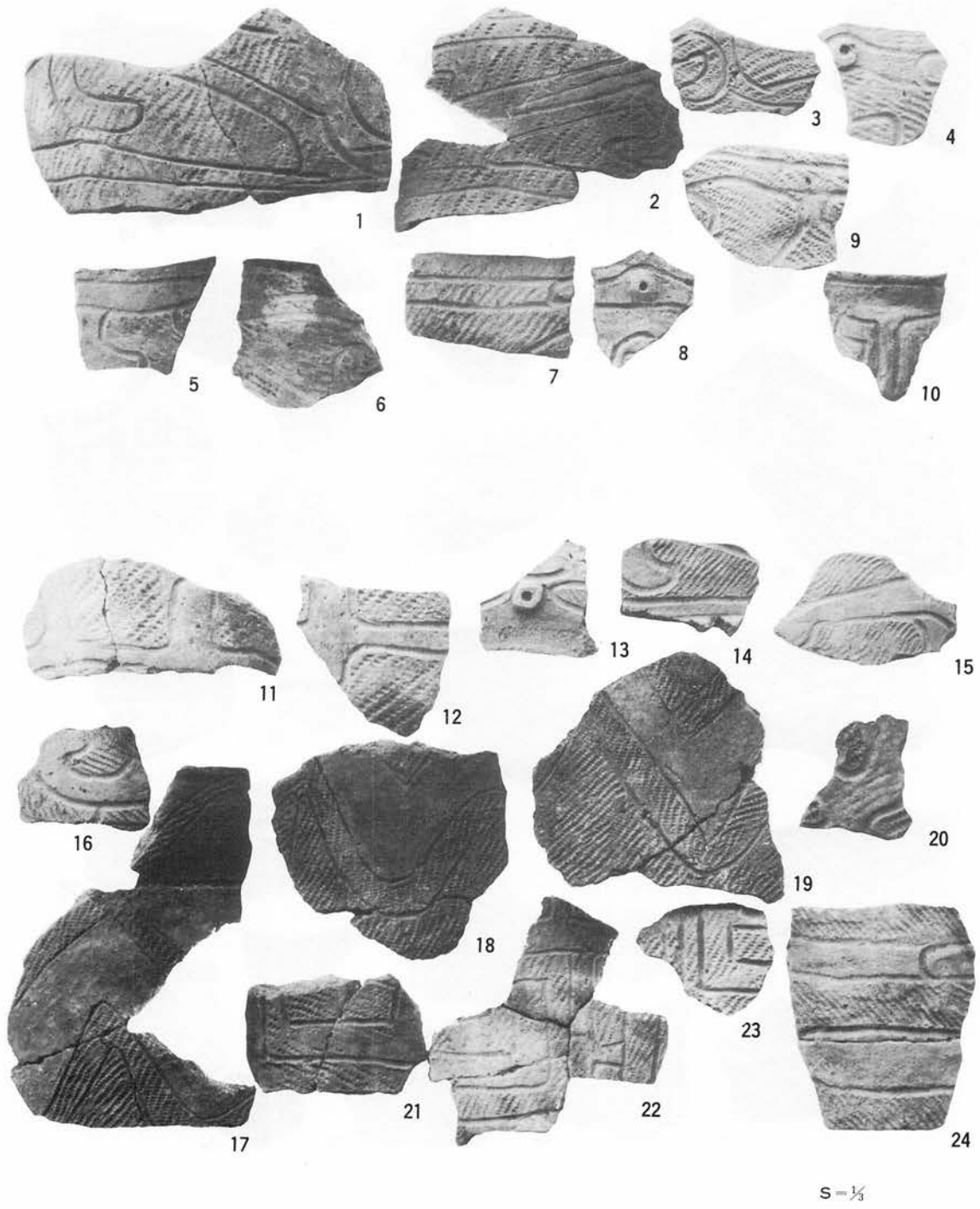


图版60 土器拓影(1)

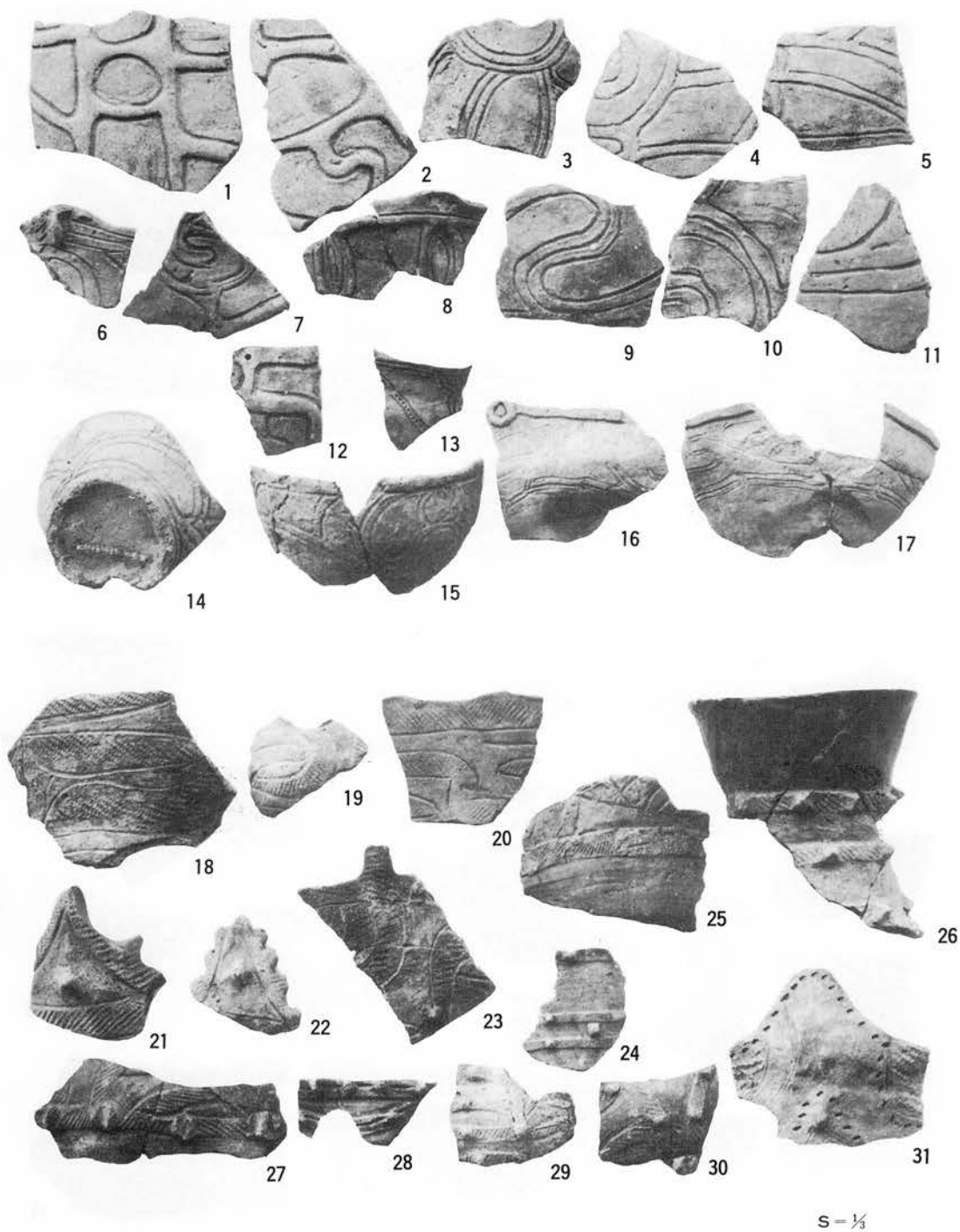


s = 1/4

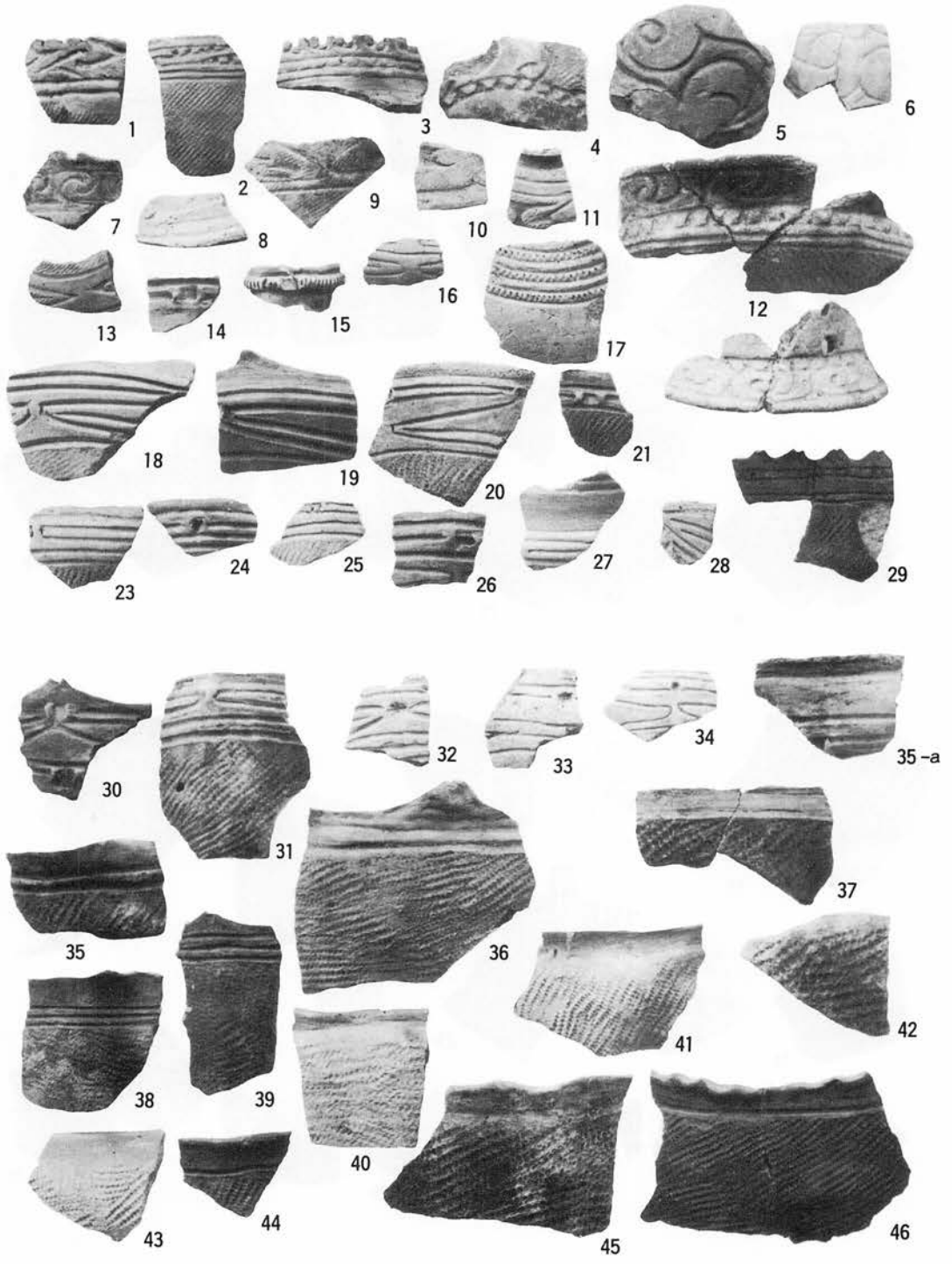
图版61 土器拓影(2)



图版62 土器拓影(3)

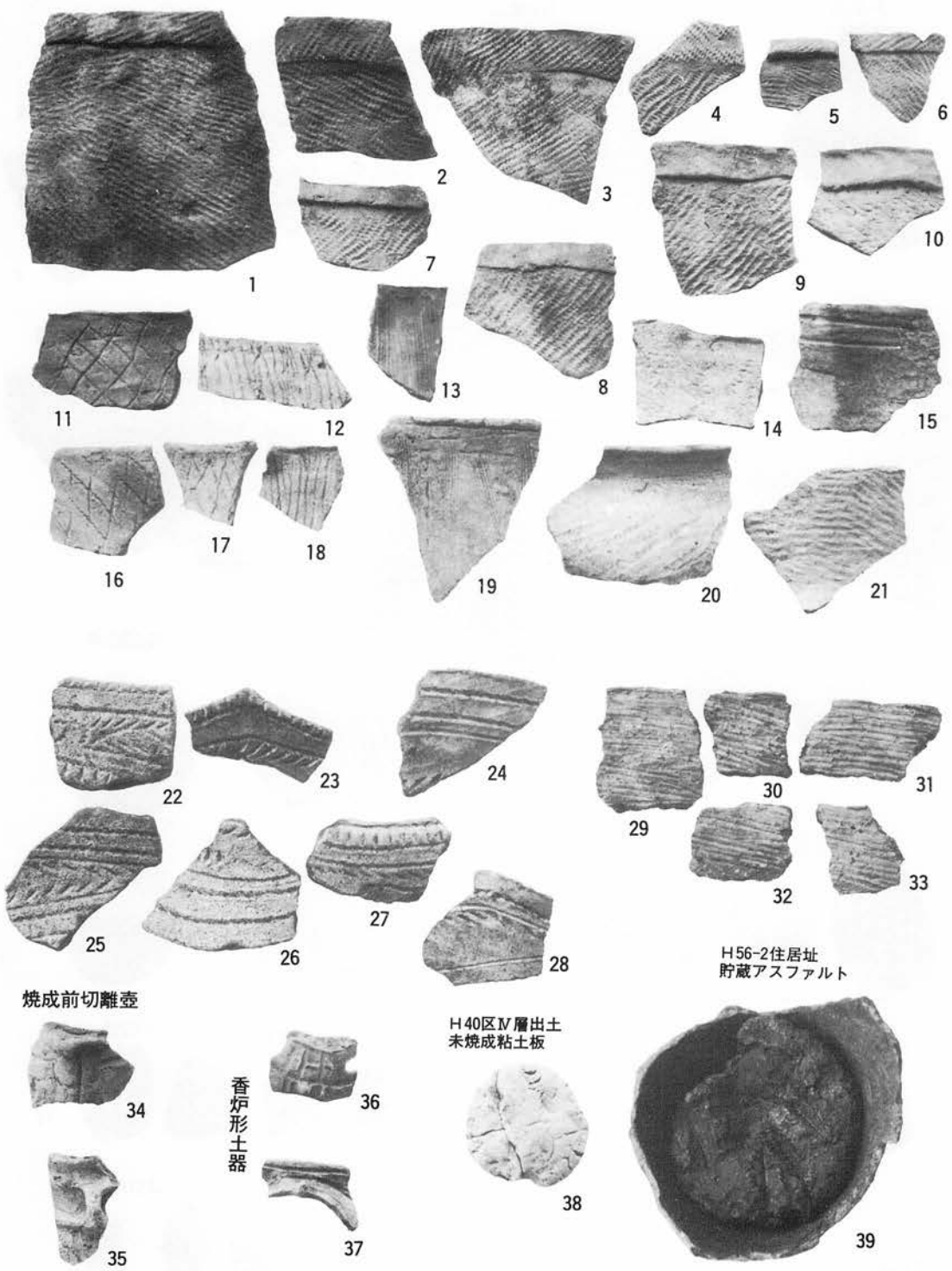


图版63 土器拓影(4)



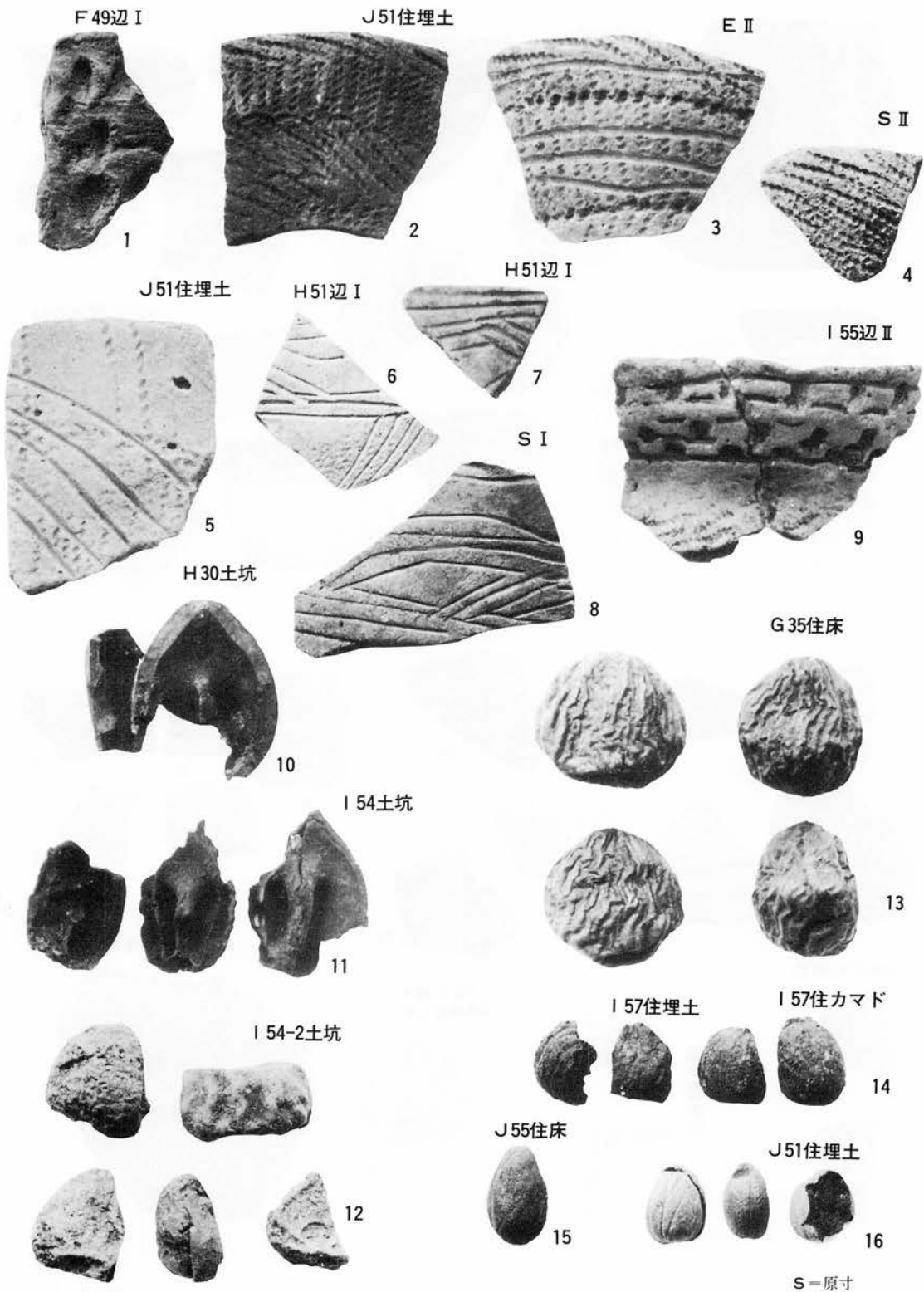
s = 1/3

图版64 土器拓影(5)



S = 1/2
他 S = 1/4

図版65 土器拓影(6)・その他



図版66 土器拓影(7)・炭化堅果類

岩手県埋文センター文化財調査報告書第62集

君成田Ⅳ遺跡発掘調査報告書

東北縦貫自動車道関連発掘調査

印刷 昭和58年3月19日

発行 昭和58年3月25日

発行 財団法人岩手県埋蔵文化財センター
〒020 岩手県紫波郡都南村大字下飯岡第11地割字高屋敷185
電話 0196 (38) 9001 (代)

印刷 河北印刷株式会社
〒020 岩手県盛岡市本町通2丁目8番7号
電話 0196 (23) 4256～8